

外伝マギアレコード
RTA ワルプルギス討伐
チャート情報提供者
ルート

最近ハマってしまった人

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

▶?レギュレーション

本編開始1年前スタート。難易度ハード。

ニューゲーム選択と同時に計測開始

ワルプルギスの夜撃破時に計測終了

先駆者兄貴達のRTAを見ていたらいつの間にか書き始めていた…。
ネタを出して満足してしまったので（完走する気は）無いです。

目次

Part 1	新たな走者	1
Part 2	それは紛れもなくガバさ	
27		
Part 3	見所さん!?!の消失	
54		
Part 4	汝は走者なりや?	78
Part 5	予期せぬガバ	109
Part 6	可能性のガバ	137
Part 7	走者の最後	161
Part 8	見所さん!?!の居場所	
191		
Part 9	アザレアのガバ	222
!		412
Part 10	そしてb i i mの花咲く	
Part 11	見所さん!?!の存在意義	247
Part 12	バイバイ、また再走	277
299		
Part 13	団地の走者	325
Part 14	走者に休みつてあるんで	
すか?		349
Part 15	ガバに祈りを	370
Part 16	走者愁章	391
Part 17	走者育成日記をつけよう	

Part 24	はじまりの走者	597	Part 31	気になる聖夜の見所さん	750
Part 23	走者の奇妙なガバ運	523	Part 29	ガバらずには、いられな	702
Part 22	Runners in	523	Part 28	あの日起きたガバの名前	678
Part 21	(ガバなんて) ないです	479	Part 27	b i i m の守り人	651
Part 20	Q. 走者がガバを起こさない確率を求めよ	479	Part 26	再走うわさファイル	626
Part 19	B I I M C O N N E C T I O N	457	Part 25	うわさの疾走ルール	433
Part 18	交差するガバ	433			
Part 17	魔法少女の手引き	572			
Part 16	第一話	572			

Part 36	預かり知らない所さん!!	921					
第二話	真向かいの空、未だ広く (後)	897					
第二話	真向かいの空、未だ広く (前)	874					
Part 35	人はそれをガバと呼ぶ	848					
Part 34	楽園行き再走前夜	825					
Part 33	耳を撫でてbimimの声	773					!?
Part 32	真実を語る記録	800					
Part 38	ガバと走者と再走もの	995					
Part 37	ガバやらに彩られ神浜	971					
							?

Part 1 新たな走者

はい、よいいスタート

主人公ズを影から見守るRTAはーじまーるよー。

今回走るのコレ！皆さんご存知の『マギアレコード』です。

その中でもソシヤゲマガレコから更に派生された方の作品ですね。

神浜市という広大なマップを駆け回り、魔法少女として生活を送っていくのが醍醐味のアクションゲームとなっております。

では、早速ニューゲームを押してタイムスタート。先駆者様同様、難易度は勿論ハードです。

最初はこのRTAを走ってもらおうキャラクターを作っていきます。

ただまともに作ろうとすると莫大なロスを生んでしまう時間泥棒なので、必要な項目だけ設定して後はお任せで設定してもらいましょう。

でも全ランダムは流石に正気じゃないです……。

なかなか…（種類が）多いねんな…

スタート時期は恒例の本編開始1年前です。当たり前だよなあ!?

性別は女を選択します。男を選んでも良いのですが、基本的に旨味はありません。それに女の子同士が絡むのはほら、良いよね…?

次に名前ですね。

伝統に則って「ほも」でも良いんですが、それだけだと確実に名前からしてヤバイやつになってしまうので、ここは「弓有ゆみあり 詩織しおり」にします。名字はゆみあり、つまり百合なので、愛称は「ユリ」ちゃんです。

ただ便宜上、詩織ちゃんと普通に呼んでいきます。

年齢は18歳ですね。

本編時には19歳になるので、やちよさんみふゆさんと同い年になります。

つまりTRNちゃんに「ギリ未成年」と言われるくらいの年齢です。

魔法少女歴は何年でもいいので設定しません。成り立てでも中堅でもベテランでもそれぞれうまあじがあるからです。

さてお次は…出身地ですね。

知つての通り、この神浜では東と西で因縁があります。そのせいで不用意に対立している地区へ赴くと、不和和タイムが発生してしまうので、初見兄貴はその辺りを考慮して選んで下さい。

今回は主人公達チームみかづき荘と接触しやすいところにしたかったので、無難に新西区辺りにしましょうか。

この辺りはどうやら他の区よりコンビニが多いらしいので、どこかのコンビニでアルバイトをしようと思います。一番引きたいバイトは新聞配達員とかの配達業ですね。届け物にメッセージを紛れ込ませる事が出来ますし、手紙を届けに来ても基本的に怪しまれません。

バイト！バイト！バイト！みたいな感じで。バイトじゃなくともお店には様々な品物があるので積極的に行って損は無いでしよう。

出身地の次は出身校ですが、新西区なので設定しない限り高確率で神浜大附属になり、本篇時にはやちよさんと同じ神浜市立大学になるでしょう。

でも詩織ちゃんには奔走してもらうので、正直言って何処でもいいです。なんなら通って無くても良いです。附属なのに大学に行かず、働いていても大丈夫です。どうせ不登校になったり留年になったりするのでランダムだあ。

年齢と出身から、おそらくやちよさんが交友関係にいますと思われる。あくまで今回のチャートでは後方から支援するだけなので、協力関係程度に留めておきましょう。いわゆる情報提供者の立ち位置ですね。

最後に願いの設定です。

先駆者様のように固有魔法をある程度限定させるため、自由入力で打ち込みます。なので願いは「支えてくれる存在が欲しい」にしましょう。

読み込みが終わりました。

望み通り「使役」が来ましたね。やったぜ。

これは他者を扱うタイプの固有魔法です。使い魔を召喚する補助系統の魔法ですが、この「使役」は従来の補助系統に加えて出来る事が増えています。

総じてこういう魔法少女の強さは味方の能力に依存しますから、仲間もある程度考慮した方がいいかもしれません。

稀に見る本人がめちやくちや強いタイプの魔法少女は、活動歴が大ベテランの方ぐらいいしか居ません。ソロで魔女狩り出来るくらいの実力を持つ人です。そういうステータスを引いた場合はさらにチャートが安定します。そういうステータスでここまで来たら後は要りません。ランダムじゃ！

ここでOPをバックにチャートを説明しましょう。

今回メインに据えるのは、主人公達チームみかづき荘の後ろから情報提供しようというチャートです。

詩織ちゃんには神浜の情報屋となって東奔西走してもらい、集めた情報で本来挟むはずの調査パートなどを短縮して、解決自体はいろはちゃん達に丸投げします。直接戦闘には加入したくないです。

何故ならRTA走者のくせに基本的なプレイスキルが私には無いからです。ノーマルでも終盤の戦闘がキツイのに、ハードモードの終盤なんてもっと無理です。

要するにバトル時のアドリブなんてする余裕ないよ！って事です。

何でRTA走ろうと思ったんですか？先駆者達の輝きに魅入ってしまったからです……。

先駆者兄貴のRTAはどれも面白いから見ても♡

話に戻ります。ハッキリ言ってステータス次第ですが、前述の通り詩織ちゃんを戦闘に出させる気は無いです。そのためワルプルギス戦では使い魔をさながら日本兵の如く特攻させるだけの魔法少女と化します。

では今回引いた固有魔法の話に移ります。

『使役』は使い魔を召喚したり従属させたりする補助系統のもですね。通常の魔法少女とはプレイスタイルが違ってきますが、ステータスが高ければ一家に一台欲しい性能の有能さを発揮しますので頑張って育成しましょう。ちなみに使い魔というのは、かず

み☆マギカのユウリ様が使役している「コル」のような感じだと思ってください。

私はこのチャートを別名引きこもりチャートと呼んでいます。戦闘以外の全ても使い魔をリモート操作すれば基本的にプレイキャラへ害が及ばないスタイルです。

本人のステータス及び使い魔の性能は完全に運頼りのため、どんなのが来るかはお祈りが必要なポイントになります。

魔法少女が扱う使い魔はラジコンのようなものでして、自爆特攻させても復活させる事が出来ません。姿形も様々で、感覚を共有する事だつて出来ません。一応使い魔自身にも意志？はあるらしいですが、誤差だよ誤差。

日常生活中もずつと召喚しっぱなしでも、ジワジワと魔力を削っていく程度で普段ならあまり気にしなくても問題ありません。なお非常事態などで大技を使う時は十分に注意しましょう（18敗）。

ただ、この使い魔の仕様がゲームだからなのか、本体の強さを使い魔の強さに分ける感じになるんですね。私は自分と使い魔で4：6のように比率で考えています。

つまり10：0の時は本体の全力が出せますが、5：5だと本体の半分の強さが二体いると思ってください。

それでも十分じゃね？と思うかもしれませんが、使い魔は使い魔でステータス設定があり、基本は本体より強い場合がほとんどです。

まあ本体の力が強ければ強い程、比例してパワーアップしますし分担作業が出来ますので、やっぱり時代は弱肉強食です。

引きこもりの名に相応しく、家の中から使い魔を動かして、自分は安全圏から戦闘を行なっていくのがこのスタイルの強みではないでしょうか。

今回は情け容赦なく本体も駆け回っていただきます。休む暇なんてないよ！

そして少し前にご説明した通り、使い魔以外にも『使役』には使い道がありまして、対象の乗っ取りとかも出来ます。魔女を操るのはソウルジェムがマツハで濁るので注意しましょう（5敗）。ウワサも同様です。

更紗帆奈？あれはあくまでも暗示しているだけなので……。違いは行動を完全に掌握するかそうするよう促すかですね。

一方でこれらの動物や魔女の手下は軽めに従わせることが出来ます。これにより野良猫ネットワークを築いたり、手下を肉盾に仕立て上げることも可能です。

そして人間はそこそこ消費が重いですが、操る事が出来ます。記憶ミュージアムやら受信ペンダントやらと同じ扱いらしく、干渉した相手を洗脳します。

「使役」で従わせた対象は一時的に魔法少女の使い魔と同じ扱いになります。感覚共有が出来るって事です。詩織ちゃんの情報源は主にこれを使用します。

…っと、キャラの生成が終わったようです。ようやくゲームに入れますね。

開始場所が映りました。

眼前には澄み渡る青空、眼下には神浜の街並が広がっています。どうやら何処かの屋上のようなですね。詩織ちゃんは気持ち良さそうに寝そべって、日向ぼっこしています。

メニュー画面で早速、序盤のリセポイント群を確認しましょう。

まずは魔法少女歴からですね。

さてさて……『5年』!?本編開始時には六年目に突入するじゃないですか!?

西の最古参の二人に次ぐ長さの大ベテランで、みゃーこ先輩よりも先輩になります。そんな強さしてさあ……誇らしくないの?

これほど長いと西のベテランとしても名が知られていることでしょう。西側のパワーバランスおかしい……おかしくない?

ということとはステータスに結構ベテランボーナスが入っていて、神浜の魔法少女の中でも強い部類になります。

こりや戦闘面は心配しなくても良さそうですねえ……。本当に補助型?

出身校は書かれてません。

高校にはそもそも行っていないか、退学したかのどつちかでしょうか……。アルバイトとかで食いつないでるみたいですね。

ステータスは現状、魔力を確認するのみで良いです。『使役』は結構チート魔法なので、他の魔法と同じ様に使うとあっさり魔文化します。詩織ちゃんの場合は魔力は多い方みたいなので、しばらくの間は心配しなくて大丈夫のようですね。

なんか精神値や魔力は申し分ないんですが、体力やスタミナなどの身体能力面がやや心許ないです。テクニカルタイプの魔法少女なんでしょう。

気にしても仕方がないのでこのまま行きます。

ちなみに調整屋は本体で行かないと（意味が）無いです。

性格は：『頑固』『寡黙』『博愛』ですか。

あまり喋らないようですね。対人関係のコミュニケーション能力が不安になります。周囲にはそういう性格なのも知られているかもしれない。いざとなったらテレパシーという魔法少女限定無料電話があります。

3つ目にある『博愛』はですね。これはプレイキャラが何かと人のために尽くすよう

な行動を取ります。『お人好し』『献身的』『善性』と同系統の性格特徴です。

外道プレイをしようとするればソウルジェムが超スピード!?で濁るのが欠点ではありませんが、このチャートでそういったプレイをする予定はありませんし、この性格欄で生成される経歴にはやましい事が起こる事はない（走者調べ）ので、気にしなくて大丈夫です。

一番の恐れは他魔法少女とのア○ジャツシユ状態ですね。まあ余程の事が無い限りはそんな事起こりませんので些細なガバですよ。ええ。

この性格欄で『冷徹』やら『狂気』やらを拾って来た時はリセットしましょう（1敗）。経歴で犯罪を犯していることが多いので、後々どんなガバになって走者を襲ってくるか分かりません。

∴次は数々の先駆者兄貴達を苦しめてきた難関、交友関係を見ましようか。

この交友関係、実はちよつと曲者でして∴プレイヤーとキャラが一度直接会って会話した、つまり顔見知りになっただけでも更新されます。しかし一度見かけただけだったり、本人同士がちゃんと会ったりしないようでは、魔法少女ファイルは更新されないうなんですなえ。

あと稀に先駆者兄貴がなったように交友関係及び経歴から消されている場合があります

ます。そんなん走者側からはどうしようもないので、その時はオリチャーを発動するという走者のアドリブ力が試されます。

話を戻すと一番引きたくないのは神浜の天才アーティスト、アリナ・グレイです。次点でアリナ以外のマジウスの二人ですね。

下手に知り合っているとリセットの危機が荒波のように押し寄せてきます。詩織ちゃんはアーティスト系ではないので、アリナは完全にアウトです。なんど作品の餌にされたことやら…（24敗）。

そして今現在の交友は……

七海やちよ、梓みふゆ、由比鶴乃、安名メル、十咎ももこ、和泉十七夜、その他のモブ魔法少女……

みかづき荘メンバー揃つとるやん！とお思いの皆さんもいるかもしれませんが。実際に見たプレイ中の私も予想外で固まりました。

開始早々これは運が良いかも知れません。みかづき荘メンバー搜索をしなくて良くなりました。

とかいうかワンチャンみかづき荘に入居している可能性がありますね。でもクオクオで入居者になっている場合はちよとまづ味です。イベントや戦闘の強制参加が詩織ちゃんを待ち構えています。断ったら好感度低下が入ります。

いや、通常プレイ時は良いんですけどね？みかづき荘チームプレイ。RTA的には自由時間が減ってしまうので…申し訳無いがやめて下さい…。

まあ素直にチームみかづき荘と知り合いなのは喜びましょう。

一体何処に爆弾が埋まっているか分かりません…：深追いはやめておきましょう。いずれガバは起きるもの。一族の運命です。

それ以外に気になるのはやけに多いモブ魔法少女達ですね。彼女達は個人の力が弱くとも群れをなすとネームドに匹敵する程強くなれます。名前も一応設定されてるみたいですが、ニューゲーム毎に変わる名前なんていちいち覚えてらんねえよなあ！ただし集団ということもあって簡単な情報収集に長けています。詩織ちゃん是人望もあるみたいですし、利用できる時は利用して有効活用しましょう。

最後に持ち物ですね。

所持金確認のついでにさつと見ていきます。

普段はシオルダーバッグに入れて物を持ち運んでるみたいです。

飴が好きなのか袋ごとありますね。ロリポップキャンディもいくつか入ってます。

所持金はそこそこかな。普通に生活していけるくらいには貧しくないようです。

あとは…数個ストックしてあるグリーンシード。

筆記用具にスマホとかですかね…。

…ん？お！手帳を持ってました！

開始時にキャラが手帳を持っている場合は結構運が良いです。

何故ならそのキャラの最近の経歴、直近の予定などが記してあるからです。

詩織ちゃんは昨日コンビニでアルバイトだったようです。今日はフリーで、明日は万々歳でシフトが入っています。鶴乃ちゃんとはここで知り合っただけですかね？

後は魔法少女限定のお仕事をやっているみたいです。主な財源はそっちで稼いでます。

魔女と戦えない、普通の生活を送りたい、といった弱小モブ魔法少女達のために、グリーフシードや他の物品を売買するお店を営んでいるようです。そのおかげか、モブ魔法少女達の間では詩織ちゃんの名が知られています。

性格の『博愛』のせいでしょうか。関わっているモブの子達の信頼度は総じて高く、お願いしたら結構聞いてくれる人が多そうです。

魔女と戦いたくない人のための詩織ちゃんといった感じになってるのかな。戦闘面以外だったなら何でも言うことを聞くでしょう。

いくつか貯めているグリーフシードはそういう子達のための取引用でもあるようです。商人としても常にストックは切らさないようにしましょう。

では調整屋を目指しながら魔女狩りにイクゾォー！（デッデッデデデデ カーン

着きました。記念すべき初魔女ですね。

詩織ちゃんのお手並み拝見と行きましょう。

では（結界内に）突っ込めー！

さてと詩織ちゃんの魔法少女衣装はー、全体的に真っ黒ですね。カラスがモチーフでしようか。

頭には前方に向かって嘴のように鋭くなっていくバイザー。

胴体は騎士つぼくいくつかの部分に鎧が付いていて、その上からやや大きめの黒い羽織をマントのように羽織っています。

武器は短槍のようです。左利きなのか左手に持っています。分かりにくいよ！って方は槍の持ち手が短くなったバージョンだと思ってください。

ソウルジェムは……鎖骨の間辺りですね。

壊されやすい場所じゃないので、ひとまず安心できます。

戦闘ですが、さすがベテラン魔法少女。チュートリアル結界なのも相まって、バツサと敵を薙ぎ倒していきます。

手下程度なら楽勝なくらい詩織ちゃんの能力はそこそこ強い事が分かったので、このまま単体でも魔女は狩れますが、折角ですし固有の使い魔を召喚しましょう！

早速、魔法を発動して呼び出します！

…何の光イ!?

落ち着きましよう。

…どうやら詩織ちゃんの右腕が光って、鳥型の使い魔になったようです。

姿形を変えられるタイプの使い魔なのは喜ばしく、使い魔の使用用途が更に増えます！これはとてもいい事なんですけど……。

えっ、詩織ちゃんの右腕は義手だったんですか!? ちよつと予想外です…使い魔の形を義手にして生活していたようです。

右腕の衣装ごと分離したのかごっそり無いですねえ…。

通常プレイならフレーザー要素とかで設定すれば出来ますが、身体的特徴のランダム生成で出るのは見かけた事ありません。これは要検証案件です。

えっと隻腕はシステム的に影響はありません。片腕だけでも魔法少女パワーで両手武器をぶん回したりする事は可能です。とりあえずこのままRTA走りましようか。

普段は義手だから普通の人間と変わりませんしね！愛情持って酷使しましょう。

それで、もう使い魔が……うーん魔法の手下の方とごっちゃになります。元は義手だったので義手くんとも呼びましょう。

義手くんがそこらの手下を葬りながら、結界の最深部に案内してくれています。これは有能。

攻撃してくる手下は義手くんがオートで迎撃してくれるので、詩織ちゃんはまつすぐ魔法の元へ行きましょう。

魔法はさっさと殲滅だ！義手くん渾身の自爆特攻で速攻フィニッシュです。義手くんは再度召喚出来るので、今度は義手になってもらいます。

じゃけんグリーンフシード貰って調整屋に行きましようねえ。

「ごらっしや〜。」

ここがレ○風俗と名高い調整屋です。

みたままさんによる利用チュートリアルはすかさずスキップしましょう。

ここでは通常プレイ、RTA、どちらにも欠かせないステータスポイント振り分けが行えます。

ただ活動歴が長い魔法少女程、最初から強い代わりに経験値の割り振りがしょっぱくなるので、初めてプレイする兄貴は無難に1、2年を選択してください。

詩織ちゃんも例に漏れず、普段は魔女を倒しても経験値が少ないです。

しかし初回遭遇時のチュートリアル担当魔女のみ例外で、魔法少女歴が何年だろうと必ず1レベル上がるようになっていきます。

今回は1レベル分のステータス振り分けと今の神浜のイベント発生状況の聞き込みです。

みたまさん最近の神浜どうすかね？

「そうねえ、魔女によるゴタゴタも終わって東西間も落ち着いた事だし、しばらくはのんびり生活できるんじゃないかしら〜？」

言及している騒動はおそらく鏡の魔女のことですね。もう「呼び水となりて綻び」は無事に終わっているとみて間違いはないようなので、本当に助かりました。

イベントクリアの経験値ボーナスは貰えませんが、このイベントは他のイベントに比べて下手に介入すると、仁義なき神浜が永久に続くので動かなくても支障はありません。

ん。

勿論のこと、この後のイベント群も関わらずにスキップして構いません。経験値が貰えなくなるくらいです。

しかし難易度ハードの神浜は地獄の有様です。プレイヤーが介入しないと神浜が壊滅状態へ進軍し続けます。

その結果、ワルプルギス戦の際に助けしてくれる魔法少女が激減。BADENDも少なくなありません。

安定策を取って最悪の事態にならないよう、少しでもイベントに介入しましょう。ついでにボーナスも貰えるのでうま味ではあります。

詩織ちゃんの後方から助言をして、本来の流れを維持。短縮出来そうなら短縮するよいうに心がけます。無理やり黒幕を引っ張ってきて、アザレア・散花愁章をカットする事もやり方次第では可能ですが、今回は混沌さん対策が無いねんな……。

最初のステータス振り分けは魔力に振り込みました。

あと少し気になった事なんです、私が始めた時に義手くんに気づけなかったように、他の人達に自分が隻腕である事を巧妙に隠している可能性があります。詩織ちゃんは周辺の精神値を考える生粋の走者だった……？

なので、人に会う時は義手くんをちゃんと装備しておきましょう。信頼してる知り合

いが実は片腕だったとか、年頃の魔法少女にはキツイからね、仕方ないね。ということ調整屋を後にします。

お次は詩織ちゃんの活動拠点の確認です。

初期開始地点がどつかの屋上だったので、改めて自宅を確認する必要があります。戦闘状態やイベント時の特殊状態じゃない限り、メニュー画面から自宅前ワープできるのでそれで帰りましょう。

ここがあの女のハウスね…。

はい、詩織ちゃんの拠点です。

まるでごく普通の一般的なマンションのようだあ…（直喩）。

6階建て最上階の角部屋に住んでるみたいです。ちよつと移動が手間ですなクオレハア……。

みかづき荘ではなかったのはひとまず安心できます。行動制限よりはマシの精神。

まあ移動はさして気にするほどでも無いです。とりあえず中の様子を確認しましよ

う。

おつ、開いてんじゃ〜ん。

中は1Kですね。一人暮らしの典型的なお部屋だと思います。

玄関を開けたら水回りの設備がある廊下があつて、手前の横のドアを開くと詩織ちゃんのお部屋に繋がります。奥には見晴らしの良いバルコニーもついています。

マトモな居住地で走者は満足！たまに拠点が廃墟だったりホームレスだったりしますから。

ただこの広さだと人を招くのに適していないので、誰かを住まわせるのはせいぜい後1人くらいしか出来ないですね。襲撃対策は使えそうにありませんので、敵から狙われないように注意しましょう。

拠点の確認も出来たので、今回はここまでにしようと思います。

ご視聴ありがとうございます。

最初にその存在を知ったのは、リビングで新西区で流行っているという噂を聞かされた時だった。

「やっちゃん、やっちゃん！聞いてください！最近気になる噂を聞いたんですよ！」
そうして言い出したのは、『郵便鴉の噂』。

「これを届けたい」「あれを届けたい」といつて届けたい手紙や小物を机に置き、その部屋の窓を開けとくと、人がいない時にいつの間にか誰かが運んでくれるらしい。

荷物を置いていた場所に鴉の羽が一枚落ちていた事から呼ばれるようになった名前前は『郵便鴉』。

その噂は私も小耳に挟んだことがあるから特に興味を引くような話題ではなかったが、こういうときに何か言い出すのがみふゆである。

「そう。それで？その噂がどうしたのよ。」

これから来る面倒事の気配を感じつつ、私は怪訝に思つて訊いた。

するとみふゆは『よくぞ聞いてくれました』と言わんばかりの顔で一言、

「真相を突き止めましょう！」と宣言した。

半ば無理やり決定された噂の真相探し。

気分転換だと言つて聞かないみふゆは、タイミング悪くやつて来たももこや調査に乗り気な鶴乃とメルを巻き込み、本格的に『郵便鴉探し』を開始した。

が、ほんの数日で聞き込みは早速暗礁に乗りあげた。聞く人それぞれ似たような事しか知らず、みふゆから聞いていた内容以上の事は分からずじまいだったからだ。

あれよこれよとしている間に日は過ぎていき、とうとう私達は最終手段：

実際に郵便鴉を使う事にした。

「作戦はこうよ。まずは荷物を送るチーム、荷物を受け取るチームに分かれる。

送る側は部屋に荷物を置いて外から監視、もし対象を見つけたらすかさず捕獲して。

受け取る方は荷物を持ってきた対象がどういふ姿か確認すること。」

二手に分かれて作戦を行う。場所はみかづき荘の空き部屋で行い、私とみふゆは送る側として張り込み。

鶴乃、メル、ももこの三人は近くの公園で待機する事にした。これは受け取り側は家にいなくても良いという学生の話からである。

待ちに待った作戦決行の時。

みふゆが送り主で待機側の三人宛に手紙を出すというシチュエーションで行う。

内容は大して重要なものではなく、直接会ってすれば良いのではないか?と思うような世間話だけ。

みふゆは噂と同じ手順を踏んで、空き部屋の窓を開け机の上に3通の手紙を置き、そうしてドアの隙間から部屋の中を覗き込んで『郵便鴉』を待った。

サンタのプレゼントを待つような我ながら子供心じみた期待を胸に、息を潜めてからしばらくして念願の対象が部屋に入ってくる。

現れたのは一羽のカラスだ。

普段見かけるような野生のカラスと比べ幾ばくか、いやかなり体躯が大きい気がする。

開けた窓から中に侵入すると、手紙を品定めするかの如く眺め始めた。

『今！』

すぐに飛び立たなかつた今がチャンスと思つた私達は、魔法少女特有の並外れた身体能力で部屋に飛び込み、目的のカラスを捕まえようとする。

だが、私達は驚異的な運動能力を持っていても、空を自由に飛ぶことは出来ない。

空中は私の槍を足場にすれば何とか行けるかも知れないが、魔法少女姿で飛び出せばネットで醜態を晒す事間違いなしだろう。

結果として、空高く飛んで行つたあのカラスの捕獲は失敗に終わった。

一方、この作戦のおかげで事態は進展したのも本当である。

気がついたら近くに手紙が届いていたという三人が帰つてきてから、私とみふゆは新たに発覚した事を伝え、チームみかづき荘第二回『郵便鴉探し』作戦会議を開始した。

やっとなんだ新事実。

それは『部屋に来たカラスから魔法少女の魔力を感じた』ということだ。
後は簡単。あの時感じた魔力と似たパターンを持つ魔法少女を探せば良い。
幸いにも、郵便鴉の噂は新西区だけのものではあったから、みかづき荘の面々は新西区
にいるであろう魔法少女を手当たり次第探した。

Part 2 それは紛れもなくガバさ

本格的に行動開始するかもしれないRTAはーじまーるよー。

前回は詩織ちゃんの拠点を確認した所で終わりました。

RTAとしては何にも始まってません！そういうトコやぞお前！

というわけでPart 1の続きからやっていきます。

時系列は鏡の魔女騒動後、しばらくの間はイベントは発生しません。なので次のイベントまでに主に交友関係の準備を行いたい所です。

目下の目標はどのRTA走者の中でも接触優先度が高いあのお方……

ずばり組長こと常盤ななかさんです。

今後のチャート上で重要視している二大イベント、『そしてアザレアの花咲く』『散花愁章』のどちらにも関わってきます。

組長が初期交友関係に居ない時は主な接触方法は2つ。

華心流生け花展覧会に行くか、チームメンバーの3人のうちの誰かから紹介してもらうこととなります。

詩織ちゃんは平日学校に行かなくても良いので、やろうと思えば待ち伏せ出来ませんが……

策略家相手にそんなことするのは無謀です。

大人しく諦めてください。

そして華心流の展覧会に行くにはチラシが必要となります。

チラシは魔法少女経由で渡ってくるのが大体なのですが、ごく稀に風に吹かれて顔面に降ってくることもあるそうです。

なんでですかねえ……？

チームメンバーから知り合う場合は先駆者兄貴のように、プロツサムでバイトしてかこちゃん経由で会うのがおそらく一番良い方法でしょう。

しかし、いくら詩織ちゃんがバイト戦士になるとしてもプロツサムでバイトする予定は（現状）ないです。

原作キャラと同じ所で働いていると、勝手にモリモリ信頼度と好感度が上がっていくので……（プロツサムは）キャンセルだあ……。

初期から入ってる万々歳は最早どうしようもないです。
信頼度イベントはうま味になる時もあるし、まず味になる時もある。用法用量を守って適度に発生させましょう。

というわけでえ……現状の走者には為す術がありません。

初期交友関係が現みかづき荘メンバーと東のトップと多めのモブしかいないため、本
当に接点が無いです。

なぎたんはどうやって知り合っただんですかね……。

そのため組長との接触は一旦諦め、詩織ちゃんが情報屋となるための下地を作つてい
きます。

ここからが『使役』の使い所さん!?!です。

見てろよ見てろよお?

前回固有魔法の説明をした時と同様、そこらの野良動物に向かって使役を発動させて
情報源を作るという方法を取ります。

まずは義手くんを神戸市の空へ解き放ちましょう。

詩織ちゃんは部屋に引きこもって、中を物色します。

義手くんは使い魔ではありませんが、魔力によつて詩織ちゃんの一部判定になつています。

本人の固有魔法には到底足元にも及びませんが、義手くんから間接的に魔法を行使させる事が出来るつて事ですね。

これは本当に微弱なもので、野良動物くらいにしか効きません。

なんか：：こう：：（語彙力消失）、小さな怪電波を流すくらいです。催眠かな？

手段として、義手くんは鳥型なのでカラスに紛れ込ませ、この神浜市一帯のカラスネットワークの頭領になつてもらいます。

ちなみに現実のカラスにも通ずる事ですが、カラスには群れが無く、強い個体に弱い個体が付いていくからそう見えるようです。はえく：：すつごい。

ただの野良が魔法少女の使い魔に勝てるわけねえだろ！

上手く行けば義手くんが周りのカラスに

「まずうちさあ、良いカモ：：いんだけど：：会つてかない？」

と呼びかけて、詩織ちゃんの元に誘導させる事が可能です。

その場合さらに本人がカラスへ魔法を掛けるので、神浜カラスネットワークがより強固になります。

オラッ！義手くん行け！行くんだよ！

後は使い魔と感覚を共有して、状態を確認しながら作業です。
倍速してますが結構時間が掛かりますので……

みなさまのために

……Part1のコメントで突っ込まれた隻腕魔法少女の扱いについて解説します。

これは隻腕や隻眼といった身体特徴を持つプレイキャラ全てに言える事です。

前回詩織ちゃんや義手だったことが発覚した場面で、「普通魔法少女の力でどんなに欠損してもSGあれば治るやん!!」と疑問に思った視聴者も多い事でしょう。

RTA後に撮った別の検証動画と併せながらご説明します。

まずこれらの身体特徴はフレイバー扱いというのは前回話しましたね？魔法少女パワーで両手武器を難なく振り回せます。

これらの特徴は実際の数値にあまり反映されません。あまりというのは検証の結果、微々たる差で修正入っているかもしれないからです。

んで、肝心の隻腕の修復判定なんですが……

どうやら出生時から、つまり生まれつき腕がなかった場合は魔法少女になっても治らないみたいなんですよね。

最初から無い物は治せないってことらしく……。

契約時の願いで「普通の身体が欲しい」とか「腕を生やしてほしい」とか願った場合は、特に問題なく健常者と何ら変わりなくなるんですけども。

ゲーム時点で魔法少女になっただけでも隻腕が治っていない詩織ちゃんは、生まれつき片腕が無い状態であり、しかも願いが治癒系統じゃない「支えてくれる存在が欲しい」。だからいくら凄腕の治癒魔法の使い手であっても、グリーンフシードを多く常備する魔法少女であっても、詩織ちゃんの隻腕は治らない判定みたいです。

もし治る時が来るのなら、その時は詩織ちゃんの片腕を願って別の子が契約した時のみです。

経歴ガバか？お前え……。

なお本走中の私は全然気にしてなかったようです。走者のクズが……この野郎……。

隻腕状態に心を傷ませる兄貴姉貴もいるかもしれませんが、何卒今後の詩織ちゃんの

暗躍にご期待下さい。

ようやく倍速が終わりました。

時刻はもう夕方なので、良い子は家に帰りましょう。

義手くんは無事に神浜カラスのドンとなりました。なんか情報出てきたら伝えてくと言っておき、お家に帰ってきてもらいます。

もう既に感覚共有は切っておいて大丈夫です。

待つ間に夕食にしましょう。

今は義手くんは離れているので、詩織ちゃんは料理をする事が出来ません。

だから置いてある冷凍食品を食べます。地味にこれも料理判定が入るようです。

電子レンジから出来上がったモノを取り出して、早速食べます。

おいしい〜！

今回はただの冷凍食品だったから何もありませんが、成功した料理は食べると一定のリジエネ効果を受けられます。

メシウマの人の料理はリジエネに加えて様々な恩恵を受けられます。

逆にメシマズはデバフマシマシの料理が出てきます。これまた厄介な物が多く、長期間に渡る速度低下や卒倒して1日分の行動権を使い果たすデバフを振りまいてきます。

ええ、みたまさんの料理には注意しましょう（2敗）。飲み物も同様です（3敗）。詩織ちゃん料理はステータスを確認する限り普通みたいです。

料理はメシマズ以外なら、他キャラにあげると信頼度と好感度を稼げます。

効果が顕著なのは佐倉杏子と深月フェリシアです。いっぱい食べる君が好き。

外食を食べに行くなら、ウォールナッツが一番良いですね。誰かと一緒に行くと、そのキャラからの心象が上がります。

小ネタですが、万々歳で働いてるプレイキャラは、ごく稀に料理が50点になる呪いを掛けられます。

ウォールナッツも同様で働いていればその味を再現する事が出来ますが、こちらは相当高いステータスが無いと再現出来ません。

料理を食べている間に義手くんの反応が近づいて来ました。

会いたかったよお〜義手くん〜（依存症）。

…つて、おや？

なんかお手紙加えてますね。共有切ってる間に何してきたんですか？

お手紙は詩織ちゃん宛てみたいです。

義手くんを装備して早速開けてみましょう。片腕だと開けるのに苦勞してタイムロスします。

ははーん？成る程ねえ…。

商人としてのお仕事の時間です。

これは魔法少女からのお手紙で、相手は詩織ちゃんからグリーンフシード1個を買いたいようです。折った手紙の間に五千円札1枚が挟まっています。

グリーンフシード1個で5千円なんですか。ゲーム的な換算も入ってそうなので、実際はもつとお高くなりそうです。

もしくは詩織ちゃんのお店ではグリーンフシードの価格はこれくらいなんですか。

それは置いといて、送り主の子は場所もきちんと書いてくれているようですね。

切羽詰まった状況かもしれませんので、さっさと現場に急行だ！

魔法少女の身体能力でサクッと到着致しました。

現在地はどっかの路地裏、自宅の比較的近場で良かった。

倒れている1人をもう1人の子が抱えています。姿からしてモブ魔法少女達ですね。多分強い魔女からギリギリ逃げてきたんでしょう。

「お願いです！○○ちゃんを助けて！」

買い取り主の子は大丈夫な方の魔法少女みたいです。事情を伺う前にグリーンフシードを使いましょう。

これでヨシ！（現場猫）

穢れが取れたおかげか倒れていた子はぐっすりしています。詩織ちゃんが着くまで耐えていたんですから（これは）勲章ものですよ…？

もう片方の子もしきりに「良かった！良かった…！」と泣いています。

クオレハ感動の名シーンですよ。この子達がモブじゃなければの話ですが。

私は紳士なのでモブの子が話せるようになるまで待ちます。この子が落ち着いたら話しかけましょう。

「あの…なんてお礼を申し上げたらいいか…。本当にありがとうございます…！」
大丈夫だぞい！例え相手がモブであつても誠実な態度を心がけましょう。

おっと確定選択肢が出ました。

ところで魔女はどこに行きましたかね？

「それならあつちの方に……。」

モブ魔法少女ちゃんが指差した方は……参京区方面だな！

情報を得ましたので顧客を増やしてしまつた魔女を追いかけましょう。

去り際に宣伝を忘れないようにします。

じゃあな！ありがとナス！

気をつけて帰れよ！

あつちだと言われたところへやって来ました。魔女を探しつつ他の魔女も狩りましよう。

倍速にした動画を背景に今やっていることについてお話しします。

実はこれ、モブ魔法少女関係の信頼度イベントみたいなモノだそうです。

詩織ちゃんがグリーンフィールド商人だからか、イベントの導入が不思議なことになって

いしましたが……。

さつきの子との会話で魔女の行方を追わないと若干や評判が下がります。助けた分と合わせるとプラスにはなるんですけどね。

そしてプレイ済みの視聴者ならお分かりかもしれませんが、さつきの行き先を聞くのは本来聞かないという選択肢があります。

じゃあ何故聞く選択肢しかなかったのか……。賢明な兄貴姉貴ならお分かりでしょう。

そう、詩織ちゃんの性格特徴『博愛』の影響です。

『頑固』も合わさって効果倍増！・ドン！

というわけで強制的にこのイベントに参加させられます。

人助けをしなきゃ詩織ちゃんの気は済まねえぜ！

やめて！やめろ！やめてくださいお願いします！走者のタイム壊れちゃう！
誰だよモブ魔法少女との信頼度イベントを設定したのは！頭おかしいですね！
知らなかったのか？信頼度イベントからは逃げられない。

気を取り直してイベントをやっていきましよう。

この魔女は他にも数体魔女がいるところへ逃げます。ここだけ何故か数が多いんですよね。

なので、この辺りの魔女を狩っていけばその内目的の魔女に着きます。

というか別の魔女を何体か狩らないと出て来ません。

そして詩織ちゃん性格から、イベントを達成するまで帰れまーOされます。

何でモブの信頼イベでこんな事しなくちゃいけないんでしょうねえ……。とんだ大ロスです。

しかし悪い事だけではありません。

モブ魔法少女との信頼度イベントは、あの助けた子達だけでなく、全体のモブ魔法少女達の信頼度と好感度が上がります。

つまりは後々のマギウスの翼の子達に好印象を持たれたままになります。

「あの人には助けてもらったから」といった理由で見逃してくれることがあります。

勧誘を断つても許してくれます。

この連戦イベントはプラスと捉えてやっていきましょう。ポジティブにならなきゃ走者やつてられないからね。

世の中にはあゝモブ魔法少女達だけで全く別のマギアレコードを築き上げた人もいるらしいですよ…？

背景と化していた動画の倍速が終了しました。

目的の魔女を突き止めたようですね。

さっきの顧客達は駄目でしたが、それはあの子達がモブだからなのであって、詩織ちゃんは一人も大丈夫な魔女です。

では最深部までの間に倍速中チラホラやっていた技についても紹介します。

『使役』の応用技ですね。戦闘でも大活躍します。これは有能。

先に例としてやちよさんを挙げましょう。

やちよさんは自分の槍を足場にして空中を移動出来ますし、大量発生させた槍を発射

することも出来ます。アブソリュート・レインもそうですね。

これにはベテランの技術とかが絡んできたりしますが、一応詩織ちゃんも似たような事は可能です。

今回の応用技はそれみたいなもので、いくつか発生させた短槍に『使役』を使います。するとどうでしょう。槍がまるで義手くんのように敵に突っ込んでいくではありませんか。

義手くんより使い勝手は悪く、簡単な動作しか出来ませんが、魔力の燃費が良いためのこのRTAでは重宝します。

はやく言えば白羽根の戦い方の上位互換です。この槍は燃えませんが…。
そうこうしてる間に最深部に着きましたね。

前回の魔女戦では義手くんが速攻終わらせてしまったため、今回は義手くんを使わない戦闘スタイルでいきましょう。

詩織ちゃんの戦い方にも慣れておこなくちやいけないですからね。
と言っても簡単です。

敵の攻撃を避けながら短槍を打ち込むだけ！以上！閉廷！
イベント魔女には本当に申し訳ないと思っています。

最後の一撃だけ詩織ちゃんに入れてもらって、グリーンフィールドまでの距離を縮めてお

きます。

今回は戦いたくないのに連戦を強いられてしまいました。結果的にグリーンフシードの個数はプラスになりましたので、とりあえず良かったです。

やっぱベテランなので（万能）。

でも走者のタイムは死にかけてです。

もうすっかり夜中なので家に帰りましょう。詩織ちゃんのご帰宅じゃ〜い！

…なんでイベント判定が消えないんですかね？

「そこの方。」

ひえ……。

ん？待って下さい。

この声はひよつとすると……？

もしかして……？

「急に声を掛ける無礼、どうぞお許してください。」

おうおうおうおう！

来ちゃった来ちゃった来ちゃったねえ！

こま？ちよつと走者に運が回って来ましたね…。

「初めてお目にかかります。私、常盤なかと申します。」

やったぜ。Part 2、完！

展開が気になるところで今回は終わります。

ご視聴ありがとうございました。

▷

『郵便鴉探し』の対象を魔法少女に絞ってから、これまた別の噂がその頭角を現し始めた。

魔法少女にとつての必需品、グリーンフシードを売買する商人がいるという。

しかし私達はその噂を聞いた事は一度もなかった。

私とみふゆに限っては、魔法少女として神浜で長く活動しているにも関わらず、だ。

その事について疑問に思っていると、鶴乃は何かを閃いたのか、その手をポン！と合わせた。

「もしかして……魔法少女として強くない子限定なのかも！」

一体その発想は何処から出てくるのか……。

しかし鶴乃の発言に合点がいったのも確かで、私達と関わりが無いのも頷ける。

見落としているだけであつて、今も神浜で誰かが魔法少女になる契約をしているかもしれない。

もしかしたらその子は魔女と戦えるだけの力と戦う運命に耐えられる心を持ってい

ないかもしれない。

そういう子達の為のグリーンフシード。

そういう子達の為の……商売。

未だ噂の段階でしかないが、その商人がお人好し過ぎて思わず呆れてしまった。

ともかく、商人と郵便鴉に関係があるかもしれない。

そう考えたみかづき荘メンバーは、その商売対象になるだろう魔法少女達に更に的を絞って聞き込みを続けた。

それから数日。

なかなか条件に合う子に出会えなかったが、やつとの事でグリーンフシード売買を利用した事があると言う子に会う事が出来た。

「カラスに手紙と対価を渡すんです。

でも、そのカラスは賢いみたいで……

楽しんでグリーンフシードを貰おうとした子の物は運びませんでした。」

そう話してくれた子は「本当にあの時は助かりました」と晴れやかな笑顔で応じてくれた。

商人に会ったら感謝していると伝えて貰えれば幸いです、とも。
噂の商人もカラスを利用するらしい。

ならば郵便鴉を使役しているのも、件の商人……私達が探している魔法少女なのだろう。

と一区切り付いたところで、私達の搜索はまた高い壁にぶつかってしまったのである。

聞き込みの進展は無し、商人を利用する予定だという子も居ない。

鴉は相当賢いから、おそらく私達が探し回っているのもバレている。

というか捕獲しようとした人物に自分から会いに来ないのは、至って普通の反応だと思う。

かくして、チームみかづき荘の『郵便鴉探し』は失敗に終わった。

……終わつたはずだった。

ある日のことだ。

新メニューがあるとかどうかで、みかづき荘の面々は万々歳に集合する事となる。正直言つて相変わらず味は50点だったが、その時ももこがふと口にしたのがトリガーだったのかもしれない。

「そういうえば結局、郵便鴉って何だったんだろぅなあ……。」

ハッ!とした顔のみふゆ、メル、鶴乃に、発言後しまった……という顔をしたもこ。この時ばかりは自分から余計な事に巻き込まれにいったと思つている。

「そうです! まだボク達は郵便鴉の正体を知らないままです!」

確かに私も少しは興味がある。

でも本当にほんの少しだけで、ももこが言うまでは記憶の彼方に葬られていたし、もうすっかり我に返っていた。

だから、もう一度探し始めるのは乗り気ではないのである。

前回集めた情報をあれよこれよと出して、情報を整理したみふゆ達からは「絶対に見つけ出してやる」という強い意志を感じた。

過半数がやる気だったため、なし崩し的に私とももこも参加することとなる。

そうして万々歳にそのまま居座った私達は、途中で皿を片付けるため抜けた鶴乃を除いて会議をしていた。

もう時刻は夕飯時を過ぎ、店に来る客もまばらになり、もうすぐ店仕舞いだし帰ろうとした時だ。

「ごめん！最近万々歳で働き始めた人がいてさ、とつても良い人だから皆に紹介したくてー！」

「だからもう少しだけ待ってくれないかな？」

とそういう鶴乃に、私達はあり得ないモノを見るような目をしてしまったと思う。

だって、この万々歳にアルバイトしに来る人がいるなんて思わなかったから。

だから…その物好きを見てみたいという気持ちで帰宅しようとする気持ちを上回った。

みかづき荘全員の心が一致した瞬間である。

「まあ良いけれど…ちゃんとその人に許可は取ったの？」

「もちろん取ったよ！あと少しで来るからもうちよつと待ってて！」

一体どういう人なのだろうか…、さつきまで話していた『郵便鴉探し』の内容も一瞬で吹き飛んでしまったような気がする。

「ここまでシヨックを受けてしまうのは、万々歳に対して流石に酷かったな」と反省しつつ、待つにはそんなに時間がかからなかった。

カラカラと店の出入り口の引き戸を開けたその人物こそが、多分この万々歳で働き始めた人。

その証拠に店の岡持ちを手を持っている。

「なんというか…普通ですわね…。」

「普通だな…つてやちよさんとみふゆさんは何でそんなに固まってるんだ？」

毛先に向かって色が薄くなっていく黒髪を小さくハーフアップで結び、

シャツにパーカーを着た簡素な私服の上に万々歳のエプロン。

思い浮かべていたのが余程変人だったというのもあり、入ってきた人物は実に普通だった。

しかし、それ以上に衝撃的なことが私とみふゆの間を突き抜けた。

「あ、あなたは……！郵便鴉の魔法少女……!!」

「……………」

一気に迫るその声に件の人物は眠そうな緑色の目をパチクリさせて、状況を読み込めていないのか、恐る恐る自分を指差した。

彼女の万々歳シフトが終わった後になる。

「ちよつと来てもらっても良いですか？」と鬼気迫る表情のみふゆに詰め寄られ、

弓有詩織という名前の魔法少女はみかづき荘に連行された。

『郵便鴉の噂』と『商人の噂』の真偽を確かめるべく、様々な質問を行なった私達（主にみふゆ）は謎が解けてスッキリした満足感を得ると同時に、質問責めから弓有さんを解放した。

終始止まることを知らないその勢いに快く答えてくれた弓有さんには感謝をすることができない。

ああなったみふゆは幼馴染の私でも止められなかったと思う。第一回の時、言い出した張本人だったから凄く無念に思っていたのだろう。

こうしてチームみかづき荘『郵便鴉探し』第二幕は、幕を開ける前に終わったのだ。後日。

みかづき荘宛てにとある荷物が届く。

箱の中には神浜市の中でも高級品と噂される和菓子の数々が入っていた。差出人は弓有詩織。

付属の手紙曰く、『郵便鴉』の正体を見事当てた報酬らしい。

……あれは偶然だったと思うのだけれど…。

とまあ、これが私達みかづき荘と弓有詩織の出会いである。

Part 3 見所さん!!?の消失

実はまだ開始から1日も経ってないRTAはーじまーるよー

前回のあらすじ。

モブとの信頼度イベントが終わったと思ったら、夜道に組長から声を掛けられる事案が発生。

以上！

今回はその続きからです。

「ななかさんはご丁寧に名乗ってくれましたので、詩織ちゃんもお返しに会釈して名乗りますよ。」

「……成る程、弓有詩織さん……ですか。いきなり不躰な事をお聞きしますが、魔法少女でいらつしやる？」

ええ、そうつすよ？ 組長が最初から魔法少女の事を聞いてくるのは珍しいですね。

そつちも魔法少女ですか？ 何か用件があるなら早めに言ってくれと助かるな！

「では、あなたですね。私も魔法少女として噂はかねがね聞いております。」

……噂？

いやてつきり普通に知名度高くて有名なのかと思つてました。見てくださいよ、この主張が激しい活動歴5年を。ベテランと聞いてきた訳ではないんですかね？

「真偽を見極める事が難しい奇妙な噂が多いですが、今回は本当の事だったようですね。」

えーちなみにどんな噂なんですか？ 私にも教えて下さいよ？

走者は噂について何も知りませんが、詩織ちゃんの反応を見るにどうやら心当たりがあるようです。え、また経歴ガバナのか？ お前え……。

「魔法少女達の為にグリーンフィードを売っている商人。しかも、何処にも所属していな

いのに1人で魔女を狩り続けている、と。」

あつ、それ（商売）か〜!

モブとの信頼度イベントすら巻き起こす詩織ちゃんの名声が早速効きましたね!

まあ話に嘘偽りはないので肯定しましょう。多分商人の話が曖昧なのは、商売対象の魔法少女が弱い部類の子達限定だからです。その子達から周りに漏れ出し、伝わる間に尾ひれが付いて、組長が会いに来てくれる程の噂話になったんでしょう。

ところでそろそろ本題に入ってくれませんか?

「単刀直入にお聞きします。私と組む気はありませんか?」

来ましたね……。

この一連のイベントは、組長がプレイヤーをチームのメンバーに勧誘するイベントです。ソシャゲ版でママさんが同じように声をかけられています。

発生条件として、キャラの能力値の合計が一定以上、神戸市の中でそれなりの規模で噂されている、といった事が挙げられます。更にそれらを達成した上に確率で発生します。

ここではななか組に入るかどうかを選択できますね。詩織ちゃんは後ろから情報提供するだけの人になりたいので、（どこかのチームに入る予定は）ないです。

でもだからといって、ここで組長との縁を切るのはとても勿体ないです。折角お会い

できたんだし、こちとら商人ぞ!? 簡単には請け負えねえぜ! といった感じにやんわりと伝えましょう。

残念ですけど、組長の力にはなれそうにありません。勿論断る時は理由も一緒に伝えて下さい。

「そうですねか…致し方ありません。それでは代わりと言つてはなんですが…。」

私と戦つていただけますでしょうか?」

ご覧の通りななかさんは勧誘を断ると、代わりに手合わせしましょうと提案してきます。

ママさんの時と同様、手合わせの前に条件を突きつけることも可能です。そうすれば平和的な解決が行えるのですが…。

見て下さいよくこの辺り一帯の暗さ。

もうすつかり真夜中ですよ?

これでは「これから一杯…どう?」と組長を誘うことが出来ません。

昼間に勧誘されたなら、ファミレスでドリンクバーを布教して、地道に好感度を稼ぎつつ話し合いが出来ます。アザレア前の組長は未だドリンクバーとの邂逅を果たしていないからこそ取れる手段です。

詩織ちゃんは18歳ですが、こんな時間に中学生を連れてファミレスへ行くことは出来ません。それが良いところのお嬢様なら尚更です。

とうかこのお嬢様はなんで夜中に出歩いてるんですか? ゲームだからと言えぱそれまでなんですけど。

さて、さっきの話で「今度お茶しましょうと誘えばいいじゃん!」と思う兄貴姉貴、いらつしやることでしよう。

率直に言えば、それは出来ません。

何故なら、ここで逃してしまえば詩織ちゃんに警戒されてしまい、今後の接触ができなくなると考えているからです。

イベント発生のタイミングが不味すぎるツピ!

ですのでえ……現在詩織ちゃんが取れる方法はただ一つ。

「では……いざ尋常に！」

答えはコレ！

『魔法少女 常盤ななか』戦です！

このチャート初の対人戦が組長とはたまげたなあ……。

ななかさんはノーマルでも尋常ならざる強さを誇ります。今の難易度はハードなので、通常よりももつと強いです。

幸いにもこのイベント戦は、勝っても負けても問題ない時間制限付きの模擬戦です。グリーンシードは詩織ちゃんが常備しているので魔力は気にせず戦いましょう。

しかし勧誘イベントの発生条件の通り、この戦闘は熟練プレイヤーを想定して作られています。そのため、組長の強さもそれを考えて設定されていて、そこそこ真面目にやらないと引き分けにすらなりません。

大抵のプレイヤーは勝つ前に時間制限が来て引き分けです。実質グリーンシードを1つも使わないようにする耐久戦だぞ！

だからか、組長の体勢を崩すだけで勝利判定が貰えます。それが凄く難しいんですけどね!

しかも、この勝負で負けてしまうと組長から

「はあ〜つつかえ…辞めたら?この仕事。」

という感じ(あくまでイメージ)に思われ、詩織ちゃんのイメージが下がってしまいます。手を抜かずに全力で行きましょう。

ただ鶴乃ちゃんとの修行と同じく、この戦闘で得られる経験値は非常に美味しいものです。

走者は運が良いなあ…(顔面蒼白)。

組長の戦い方はソシヤゲで本人が言及しているように、出方を伺ってから相手を見極め、こちらの攻め所を探して揺さぶってきます。

本人が言うには単純な戦い方ですが、これがまた強さを際立たせてきます。流石水のブラストゴリラの中に入るキャラですね…。

詩織ちゃんが接近して近接攻撃なんてするのは、最初の作戦がイマイチだった時の次の手段です。

義手くんは対人戦なので極力外したくありませんし、2体目を呼ぶのは微々たる差ですが消費が普段の倍になりますね、『使役』で洗脳しようにも精神値が高い組長相手では

失敗に終わります。

ここはお互いの間合いを考慮して、詩織ちゃんも攻撃する隙を与えない遠距離砲台になりましょう。近づかれたらなるべく別の所へ退避します。

どうしようもなくなったらプラン変更です。

ななかさんの武器は大小ある日本刀で基本近接しかしてきませんが、試走中たまに鞘をぶん投げて遠距離攻撃をしてくるタイプもいました。

今は双方動かずに睨み合ってますけど、こちらが動かないと見た場合、大体初手に居合で攻撃してきます。

おっわ！危ねえ！今のように近づいて切ってきます！

やめろオ！（建前）やめろオ！（本音）

すぐさま『使役』を掛けた槍で攻撃して後ろに引かせ、詩織ちゃんも組長から距離を取りましょう。

十分離れたら短槍を発射して遠距離から攻めます。

オラ！槍の雨だぞ！食らえ食らえ！当たんねえじゃねえかよ！オイ！

発射してる短槍をいくつか『使役』で再利用し、少しでも武器生成の魔力を抑えます。

中には後ろから戻ってくるモノも織り交ぜてますが、流石と言うべきか全然当たってくれません。

なんだお前!?!後ろにも目付いてんのか!?!

こっちは絶え間なく槍を発射して魔力を消費!あつちは絶え間なく回避して体力を消費!

ずっと膠着状態が続いてますね……。

いくらテクニカルタイプのステータスとはいえ、このままだとタイムリミットまでに詩織ちゃんもたない!

当たれ!当たってくれ!お願いします!

予定していた作戦Bを使いましょう!

前述したように接近戦は危険ですが、当たらなければどうということにはねえよなあ!?!『使役』してる短槍以外を消して、第2の義手くん(鳥形態)を召喚し、コンビネーションアタックで組長に突っ込みます。

攻撃!回避!回避回避!攻撃!

進展なさスギイ!このイベントでどんだけ強化されているんだ組長……。

うーん、攻撃の応酬が次の一手にまで届きません。2対1でも駄目すか!?!

……ええい！仕方ない！オリチャー発動です！

まだ試してなかったから運用したくなかった奥の手を使いましょう。

まどマギ全般に言えますが、魔法の使い道は解釈によつて出来ることが違うというのは皆さん知ってますよね!?

これは詩織ちゃんやんが義手で、それが使い魔だからこそ出来る技です。

前回の魔女数体との連戦中に思いついたので、一か八か出来るかどうかすら試してみませんが、ゲームシステムの仕様上問題は無いはず！

使い魔が魔力によつて出来ているなら、この右腕は魔力で構成された、謂わばびっくりどつきりなマジカルアームな訳です。

なーのーでー……

「……ッ!?!」

実験は成功！成功です！見ましたか今の！

いきなり腕からパイルバンカーの如く飛び出た短槍で、組長のバランスを崩す事に成功しました！

そこにすかさず槍を突きつけます。

後から見返すとコレ、詩織ちゃんはこの初見殺しで勝つしか手段残ってなかったんですね。。。手合わせ終了までの時間制限までが長すぎたんだ……。

勝利条件満たしたぞ常盤ななかア！これでもまだ続けるかア!?!オイ！

「…………見事ですね……。参りました。」

やった詩織ちゃん大勝利！

ななかさんに勝利した事によって経験値がものすごい勢いでもらえます。どういことだ…モブ信頼度イベントの魔女戦より稼げてるじゃないか……。

では友情の証兼イベント経験値のお礼として、グリーンシールドと飴ちゃんをプレゼントしましょう。受け取れえ！

「ありがとうございます。…………あなたはとてもお強い方ですね。」

そりや（活動歴5年の大ベテランなら）そう（イベント組長との手合わせも出来る）よ。
ところでもう既に真夜中ですよ？ななかさんも早く家に帰った方がいいんじゃない
すかね？

走者も集中して疲れたので、詩織ちゃんを帰宅させたいんですけども。

「貴重な経験を積める良い機会でした。それでは…。」

あつ、おい待てい。

組む気は無いけど避ける気も無いから、お互い協力するくらいなら大丈夫だぞう！
はいコレ詩織ちゃんの連絡先な。なんかあつたら連絡してくれよ。

それじゃあの！気をつけて帰れよ！

飴を頬張りながら家に帰ります。

今日はもう遅いので、おやすみなさ〜い。

おつはようございまーす。

うーん、今日もいい天気☆

本日は平日みたいです。詩織ちゃんは学校に通ってないので関係有りませんが。

午前中は万々歳でシフトが入っております。鶴乃ちゃんが学校に行っている間、代わりに勤務してるそうです。

では早速万々歳へ行きます……が、ミニゲームばつかで単調すぎるので……

シフトが終了するまで倍速します。(無慈悲)

おやっさーん、私はお先に失礼するね。

というわけで午後になってバイトが終わりました。この後は魔女狩りをしに行きます。日課です。なるべく人気が無い所を進むようにしましょう。

義手くんは鳥型にして情報を駆け集めてもらいます。その中で売買のお手紙が来たら営業しに行きます。詩織ちゃん自身も商売のチャンスがあれば稼ぎにいけます。

人に会う時に義手くんを装備することを忘れないようにしましょう。

はい、いつもの倍速です。

動画の見栄えが無いやん！どうしてくれんの？どうしようもないです……。

話す事がないので、現在の時系列を整理しつつ今後の予定を話題に出します。

基本はバイトしてモブ相手に商売しつつ魔女を狩ります。

序盤が色々濃すぎただけで、普通の日は特に何か起こらない限りは倍速するだけです。再三言いますが（見栄えは）ないです。

何故か初日だけ他の日に比べて、イベントの発生率が高いんですよ。

もうななかさんに会う事は出来ましたので、今後は神浜カラスネットワークを駆使しつつ、原作通りに話が進むよう調整します。

ネームドキャラがちゃんと魔法少女になっているかどうかとかね。きちんと監視の目を張りましょう。

そしておそらく次に遭遇するイベントは、安名メルの魔女化イベントだと思われるます。原作通りの流れを維持するためには割り切るしかないです。

タイミングについては万々歳が忙しくなる日が目安です。

ここで万々歳シフトが活きてくるぞお！

勿論人手の関係上、アルバイトの詩織ちゃんも店に勤務する事になります。

いくらグリーンフィードを常備する子でも、その場に居なけりや助けられないんだぜ……。

その際、やちよさん達から魔女化の事を伝えられるかどうかは分かりませんが、もし真実を聞いたとしても鶴乃ちゃんには伝えないようにしましょう。

伝えちゃったら第6章で記憶ミュージアム行けなくなっちゃうからね。仕方ないね。私が一番気になるのは、知人が亡くなったと知った時の詩織ちゃんのソウルジェムの濁り具合です。

自分の為にもグリーンフィードは切らさないようにしましょう（戒め）。

まあそんな事を言いつつも、今のところの小目標は次のように。

エミリーのお悩み相談室が出来ているかどうかを確認し、出来ていない場合は無事に開設させる事、です。

難易度ハードの神浜だと心配過ぎて……ね？

そのため時間があれば、毎日のように水徳商店街に寄っていきます。

商店街の一角に机と椅子が設置されていれば、相談室はもう既に出来ている証です。

行っても詩織ちゃんが相談することは特に無いですが、ここでは多くの魔法少女と知り合う事が可能になります。

エミリー先生のコミュニケーション力が凄いなコレが。

ちなみに放置してても、そのうち鶴乃ちゃんが「この先生は凄いなだよ！」と教えてくれます。

開始2日目の今日では、まだ相談室は出来ていないみたいですね。

もうすぐ夕方になります。良い子はお家へ帰りましょう。

この時間帯になったら迷わず帰宅して、義手くん（鳥形態）を空へ飛ばしておきます。商売チャンスがあつたら漏れなく営業を行なって、それ以外は神浜市内の情報収集に明け暮れましょう。

ここまでくれば残ったのは単純な作業だけなので、今回はここまでにしようと思います。

後ろの尺あまりは全て倍速された作業風景だけです。

それでは、ご視聴ありがとうございました。

「あ、
そうだ。
ななかは『商人の噂』
って聞いた事ある？」

▶
?

「いえ、聞いたことありませんね。どのような噂でしょうか？」

魔法少女の仲間を増やそうと色々策を巡らせている頃、最初にチームメンバーになったあきらさんからそんな話を聞いた。

『商人の噂』。

なんでも、魔法少女相手にグリーンフシードの売買をする人が居るといふ。

詳しく話を伺うも総じて名前は分からなかったらしい。

なんとなく気になった私は調査の結果、その商人の容姿を掴む事が出来た。

曰く、鴉のような魔法少女。

何処に所属する事も無く、1人で魔女を狩っては対価と引き換えにグリーンフシードをくれる存在。

ソロで活動しているのに、グリーンフシードを他人に分け与える事が出来る程、その魔法少女は強いのだろうか。

調べていく内にますます興味を持った私は、活動時間を夜に伸ばしてまで『商人』を探す事にした。

その日の夕方は、何故か一箇所に集まっている魔女が多かった。

あきらさんとは既に別れてしまったため、危険になったら深追いはしないようにしつつ、数体は狩っておこうとしていた。

最初に入ろうとした結界の中には、別の魔法少女が先に入っていて、あと少しで狩り終わるのだろう。

周辺は魔女が集まっているようだから別の結界を探そう、そう思ったところで丁度結界が消え、中から魔法少女が出てきた。

彼女はおそらく急いでいたのだろう。戦いが終わるとすぐさま別の結界へ行き、そして魔女を倒すという事を繰り返しているようだった。

しかし何より私の目に留まったのは、その衣装。

嘴のようなバイザー、鎧の上にある黒い羽織。もしかしたら彼女が噂の商人なのかもしれない。

成る程そう思うと、見れば見るほど黒い衣装で、鴉と揶揄されるのも理解出来る。

これだけ魔女と連戦をしても、疲れる事を知らないようなその実力。チームに勧誘するのにも申し分無いだろう。

彼女を眺めているうちに、辺りは次第に暗くなってきた。

いつまで狩り続けるのだろうか。そう疑問に思っていると、周囲の魔女より明らかに強い魔力を感じる。

どうやら彼女はその魔女が目的のようで、魔力を感知すると、結界へ一直線に向かい始めた。

槍をまるで銃弾のように軽々と降らし、最後は懐に潜り込み、手元の槍で巨体を薙ぎ払った。

その魔女を倒した頃、ようやく彼女は魔女探しを終えて、帰路に着こうとしていた。次にいつ出会えるのか分からない。

だから私は変身を解いた彼女に声を掛ける事にした。

私の声に振り向いた彼女は、眠そうながらも強い意志を感じさせる目でこちらを見やり、静かに話の続きを促した。

こちらが名乗りを上げると、お返しとばかりに会釈してその名前を言う。

「……………弓有、詩織。」

それ以上の事は何も言わなかった。でもこの反応は、おそらく自分が何故呼びかけられたかを薄々勘付いている。

前置きとして彼女の噂を聞きつけた話はしたが、結局直ぐに本題に入り始めた。

チームに誘う事。

半分くらいは興味本位でもあったが、概ねそれが目的で尾けてきている。

彼女は幾ばくか間を置いた後に、その首を横に振って勧誘を断った。

ここまでは想定通りだ。きつと今まで通り1人で活動しようとするのも。

実力のある人物と対戦する事は自分にとって良い経験になる。実際彼女がベテランなのかどうかすら私は知らないが、先程までの戦いぶりを見て、実力に値する人だとは分かっていった。

勧誘の代わりに手合わせを願うと、彼女は先程よりも長く考えて、最終的には縦に頷いた。

互いに変身してからは読み合いが始まった。

私は最初の一太刀こそ間合いに踏み込めたものの、宙に浮く槍に行く手を阻まれて距離を取らざるを得なくなる。

彼女は魔法少女独自の物理法則を無視した戦い方を扱うようで、逃げ道こそあるものの近付く事は出来ないよう、的確に得物の槍を降らせてきた。

中には回避しても後ろからまた戻ってくる槍があり、攻め込む隙を探しつつ全方位に

気を配らなければならぬ事を余儀なくされた。

これでは防戦一方で、そのうち疲弊して動きが鈍くなってしまふ。

相手を弱らせる事……それが目的なのだろうか。

しかしながら彼女も彼女で消費が激しいらしく、槍の操作に集中力を使うのか、やがては顔の眉間が険しくなっていく。

途中で降り注ぐ槍の雨が……そのうちの数本を残して忽然と姿を消す。

その代わりに大きいカラスのようなモノを呼び出して、こちらに接近戦を仕掛けてきた。

正直なところ、彼女自身の槍の技術は完全に我流のようで、軌道が読みやすい部類で助かったと感じている。

だがそれ以上に、宙を舞う別々の槍に使役するカラスとの連携が噛み合わさって、私とは互角以上の實力を持っているのが即座に分かる。

両者決め手に欠けたまま攻守を繰り返していると、不意に彼女はパターンを変え、おもむろに右手を突き出した。

思い返せばあの時何かを出してくるのは明白だった。

長時間に渡るその戦いで判断力と集中力を失いつつあった私は、掌から突き出てくる槍に意表を突かれて体勢を崩してしまふ。

そこから決着はすぐだ。

彼女は隙を逃さず手持ちの槍を突きつけた。

次に動こうとすれば串刺しにしてやる、と言わんばかりに配置された槍で包囲して。完全に玉手を指された。

つまりは、私の敗北。

素直に負けを認め降参すると、さつきまで周りにあつた槍はたちまち最初から無かつたように消え失せる。

無口で多くを語ろうとしない彼女は何の対価を要求する訳でもなく、常備しているグリーフシードを分け与えてくれた。

ついでに飴玉も1つ。

私は彼女の事をどうしようもないお人好しだと思う。こんな辻斬り紛いのような事をして、何でもないように私に笑いかけるのだから。

「……帰ろう?」

その言葉に頷く。

久々に全力で誰かに挑めて気持ちが悪くスッキリとした気がした。復讐の事ばかりを考へ過ぎて、いつのまにか眼が曇っていたのかもしれない。

もうすっかり夜だから帰らないと行けないな、と立ち上がって歩き出す。

去り際に呼び止められると、彼女は紙に何かを書いて渡し、手を振りながら去っていった。

手帳から乱雑に切り取られたそれに書かれていたのは、きつと詩織さんの連絡先なのだろう。下の方には小さく「気にしないでね」と私向けにメッセージがあった。

「良い人ですね……」

そうして私も帰路に着く。

電線に留まっていたはぐれ者のカラスが一羽飛んでいって、彼女から折角貰った飴玉を口に含んでみた。

リング味のそれには、仄かに優しさが染みているような気がする。

Part 4 汝は走者なりや？

作業ばかりで見栄えがないRTAはーじまーるよー

前は有り得ないくらい強いイベント組長と全力を尽くして戦い、後半は単調な作業を倍速で流して終わりました。

今回は倍速を止めたところからのスタートとなります。

いや〜組長は強敵でしたね……。

というかなんかあのイベント組長、戦闘を楽しんでいたような気配がしたんですけど……。

さて詩織ちゃんは夜中に商売の機会があったので外出し、そのまま魔女狩りを行なっています。

悪い魔女はいねえが〜魔女はいねえが〜

しかし、結界内に新しく他の魔法少女が来たみたいです。ネームドキャラなら嬉しいんですけどね。

でも神浜では特に用事が無い場合、魔女は基本的に先着順で良かったような気がする

んですが…？

あ、マジヨガニゲテル！敵前逃亡か？

いや多分、新しく結界に入った魔法少女の方が詩織ちゃんより弱いと判断したんでしよう。魔女のくせになかなかやるじゃねえか！オイ！

被害を出さない為にも追いかけてみましょう！

おつと見覚えのある3人の魔法少女が。

ギャル！騎士！自害さん！

げえ！木崎衣美里まほストー話じゃねえか！？

そもそもまだ出会ってなかったんですか、お三方。そりや相談所も出来ていなかった訳だ……。

というかここで魔女倒しちゃったら、2人がエミリーさんの驚異的なコミユ力に気付かなくなっちゃう！危ねえ！

このようにイベント発生元の魔女を倒してしまうかもしれない事があるので、走者は十分に注意しような！（6敗）

このイベントは竜城明日香と美凧ささらが、方針の違いで言い争いをし始めます。被

害を出さない為に早く魔女を倒すか、魔女の口づけで巻き込まれた人を救助するか、ですぬ。

そこをエミリーさんがガツンとこうすれば良いんじゃないやね？と提案をして解決する話です。

ん？待って？

契約したばっかの初魔女戦だとお!?

ちよつと（契約が）遅すぎんよ。

仕方ないので原作通りの流れに誘導しましょう。

ちなみに解決法は詩織ちゃんも提案しても大丈夫です。その時は、相談所を開設させるために手伝いをしていくことになります。

そっちのルートの際に注意すべきだと思うのは、こう…エミリーさんにいい感じ（語彙力消失）のモノがあるって強引に説得する事です。じやなきや気付かないです。（4敗）

「あー新しい人が来たっばい！」

エミリーさんが気付いてくれましたね。魔女の目の前ですけど、挨拶は忘れないよう

にしましょう。

ところで君達はなんで魔女がいるのに倒さないんですか？（現場猫並感）

「そうです！魔女の討伐を優先すべきです！」

「いや、ここは人質の救助が先！」

あーあーまた言い争いを始めてしまいました。軽率な言葉を投げかけた走者のせい
です。

その金髪ギャルの君はなんか良い方法思いつかない？

「んー、あーしは2人が協力すれば良いと思うんだわー。」

協力ですか、大したモノですね。

だそうですよその人達！役割分担すれば良いってよー！さすが先生頼りになるぜ！
という訳で討伐と救出で分けて行動します。

人質は助ける。魔女は倒す。

『両方』やらなくっちゃあならないってのが『魔法少女』のつらいところだな。

ではいつも通り短槍に『使役』を掛けてイクゾー！（デッデッデデデデ カーン

詩織ちゃん是人質の救出を手伝い、使役槍には魔女の討伐の補助してもらいます。
やつば後方支援はこうするんやなって……。

何事も無くフィニッシュだ！

いややっぱ仲間が居るととても楽出来ますね。補助型ビルドは間違っではないのだ。

じゃ私は家に帰りますね。グリーンフィードは別に良いんで、あげるっす。どうぞどうぞ。

え？連絡先を教えて欲しい？いいよ来いよ！

私は3人と連絡先を交換してターンエンドッ！

それじゃあな！

はい数日後オ！

あの時に魔女退治の場面で出くわしていると、連絡先を教える事が出来ます。

そして今日のようにウォールナッツで木崎衣美里まほスト2話に入れます。ついでに胡桃まなかとも知り合えるって寸法よ！

でも詩織ちゃんが出す場面は特に無いので、オムライスを食べるだけ食べるときましよう。

話を振られた時はとりあえず「そうだね」と頷いておきます。

それじゃあ、いただきまーす。

なんやこれ！めちやくちや酸っぱいやん！

これには流石の詩織ちゃんも涙目。

このイベントでオムライスを注文すると、まなかちゃんがお悩みのせいで、凄く偏った味付けになってます。

しかし気にせず全て平らげます（鉄の意志）

食ベ物を粗末にするんじゃねえ！

そして新メニュー考案の為に「まなかスペシャル（仮）」を頂く事になりました。うん
まい！

別にこれでも旨いし良いんじゃないっすかね？ほら、そのギャル先生もこう言ってることだし。ね？行っちゃえ行っちゃえ！

というわけでまなかちゃんは立ち直り、エミリー先生に天性の閃きがある事を確信して、まほスト2話は終了いたします。

もうこれで相談所は出来たも同然だあ……。詩織ちゃんはその場でご飯食ってるだけでもしてないねえ！

じゃあ私はこれで満足したんで、サヨナラ！

何かあるまで倍速は止まらない……！

「やあ、弓有詩織。相変わらずそんな慈善事業ばかりをしているんだね。」

うつわ出ました。例の白いヤツです。

こいつはプレイヤーが何かしらの行動を起こしていると、様子見に接触をしてきます。話すだけロスになるので、無視しましょう。

ん？ちよつと？

どうした詩織ちゃん、操作が効かねえぞ!?

「前にも言ったと思うけど、そんな事ばかりされてると僕達も困るんだよね。もう少し宇宙の為、ひいては未来の人類の為を考えてはどうかな?」

おいおい何か言ってるぜ白いヤツがよお!ケツ、今生きる事の方が大事ダルオ!?

ところでまくだ操作受け付けないっすかね……?」

「昔と比べると君は随分と変わった。もしかしてあの時のこ………」

特に理由の(分から)ない短槍が白タヌキを襲う!!

なんで?(なんで?)

ちよ、ちよつと詩織ちゃん?いくらコイツが許す事の出来ない真の巨悪だとしても、

いきなり串刺しにするのはどういう事なんですかね……。

「…まったく、会う度に攻撃してくるのはやめてくれないかい？ 君だってコレが無意味な事くらい理解しているだろう？」

あーあーあー聞こえませーん。

1 匹倒してスツキリしたのか、操作が出来るようになりました。ので、話を聞かずに次の魔女を探しに行きます。

オラツ！もう来るんじやねえぞ！

白タヌキでイラついたので、腹いせに魔女を狩ります。

詩織ちゃんクツキング〜！

今回はこの魔女！

すつごいですよ？見てくださいよこのグロテスクな見た目を！

まあ大人しく槍の錆にでもなつて下さい。お前なんか『使役』を使わずとも勝てらあ！

薙ぎ払え！的確に部位を削ぎ落とし、仕上げに短槍でデコレーションして差し上げましょう。

はい、一丁上がりです。

結果が解けてグリーンフシードも回収したんで、良い子の詩織ちゃんはお家に帰るぞー

！

あれれー？おかしいなー？誰かが来る気配を察知したぞ？

「その、魔法少女さん……っ！待つの！」

お、お前は!?御園かりん！御園かりんじゃないか!?どうしてここに!?

すつごい探し回つてたのかめちやくちや汗流してるし、息も切れてますよ…。

ていうか君、凄いソウルジエム濁ってるじゃん！やべえよやべえよ……。

グリーンフシードをサツサと使います！死なれたら困るなんてレベルじゃねえ！

「あつ…ありがとう、ございます、なの。」

常盤ななかという御園かりんといい、魔女狩り後に声を掛けるの流行ってるんですか？

そしてかりんちゃんが来たの何のガバだと思いましたが、アレですね。

多分グリーンフシード商売の件で身バレしたんでしょう。初日の組長も商人の噂を聞いてやって来ましたし。

御園かりんは世にも奇妙なポジションの割に、第一部の本編内でほぼ出番がないネームド魔法少女です。何処かのへっぽこさんに「あんまりハロウィン感無いよね」って言われる年中ハロウインの魔法少女ですね。

詩織ちゃんのように弱い魔法少女にグリーンフシードを分け与える事をしていきます。報酬は貰いませんけど。

ただグリーンフシードの入手源が、固有魔法の『窃盗』を使って強い魔法少女から盗むという手段なので、本人も罪悪感！はいドン！みたいに悪い事の自覚はあるようです。

こう考えれば考える程、かりんちゃんの思い描く計画の理想形に、詩織ちゃんの商売スタイルが似ているんですよね……。

とりあえずお話をしたいので、近くにあった公園のベンチに座らせて、自販機で飲み物も買ってあげます。

怯えさせないように優しく声を掛けましょう。初対面ではとても重要な事です。

私はこういう者なんだけど、君はどうして私に声を掛けてきたんだい？君の名前は？

「御園、かりん…なの。弓有さんに相談したい事があって、会いに来たの。」

相談ですか？

でも今の時期はかりんちゃんのみまほスト1話始まってないから、まだ落ち込む時期じゃなかったと思うんですけど（名推理）

…まさかやちよさんに言われる事もなく、自力でまほスト展開に持っていった？いやそんな馬鹿な。

「……その、実は噂になってる『怪盗かりん』の正体は私なの。」

知 っ て た 。

初日の組長と言い、妙なイベントを引き起こしまくってますね。詩織ちゃんの噂の規模がでかくなあいい？

普通、かりんちゃんは怪盗をやっている事を、自分から他の人に話しません。

なにがどうしてこうなっちゃったんですかねえ？（すつとぼけ）

で？ 続きをどうぞ。

「それである日、渡そうとした魔法少女に、弓有さんがグリーンシードをあげてるのを見たの。」

あーお客様被りですか……。バッテリーグしちやったようです。

実際、この人に売ろうとか決めてる訳ではなく、自然とモブに呼ばれて出張販売してますからね。仕方ないね。

大人しく話を伺います。こういう時、年下の子の相談事は微笑ましく見守りましょう。自分から言ってくれるのを待つような雰囲気を作つてあげるのがポイントです。

「それから私は…自分のやってる事は何なんだろうって悩み始めたの。」

これはまさかと思つていたパターンですね……。目撃した事によつて考えちやつたと…：詩織ちゃんとの与える影響力が強すぎて笑つちやうんすよね。

「だから、あなたに声を掛けたの。なにか、お話をしてくれるだけでもいいから、どんな人か知りたいと思つてたの。」

そして初めて会つたのに大分話してくれました。この様子だと信頼度はもう十分にあるようです。

いずれは本編でみかづき荘の仲間になってくれるよう、接触してウワサと対峙してもらう予定だったので、これは結構いい感じだな？

お前をみかdき……てあげんだよ！

お前をみかd、き荘にしたんだよ！

フザケン→ナ！

お前をみかづき荘にしてやんよ（小声）

まあこれは適当に雑談してあげるだけでも良いです。ただ過度なアドバイスなどは控えるようにしましょう。

某天才芸術家に目をつけられるかもしれないし、なによりかりんちゃんが後続のRTA走者と化してしまう可能性があります。

というか御園かりんはRTAへの適性が高すぎて、プレイキャラが色々な事を教えてしまうと、瞬時にワルプルギス討伐チャート正義の怪盗ルートを走り始めます。

かりんちゃんは生粋の走者だった……？

ええ。現時点で性格『頑固』『博愛』の詩織ちゃんが下手に手助けをしてしまうと、たちまち第二の走者に変貌するって事です。

その場合、知らない内に強化プラス覚醒イベントを発生させて、ちゃん付けが恐ろしい程の御園かりんさんになります。

フルガールが強すぎるんですケド。

なので、今回は自分（走者）のようにならないで欲しいという願いを込めて、かりん

ちゃんにやんわり警告しておきます。

b i i m 一族になるなよ、頼むよ。

「そうなの？でもきつと弓有さんは優しい人なの。今日はわざわざお話ししてくれてありがとうなの。」

良いってことよ！

帰る際に飴玉をあげるのを忘れないようにしましょう。地道な好感度稼ぎはここからくるんだぜ。

じゃあはい、コレ私の連絡先ね。なんかあったら呼べよな！

珍しいイベントを引きましたが、なんて事無かったのでそのまま家に帰ります。

ごっはんごっはんごっはんおっいしいごっはん

…ってうん？なんかお電話ですね。

「ごめん詩織！今度万々歳に団体客が来るから、その日にシフト入っても大丈夫かな!？」

あつ、良いっすよ。

寛大な詩織ちゃんは何も文句を言わずに許します許します。ま、多少はね？

このバイト特有の急なシフト変更で、メル魔女化イベントをバツクレる事が出来ません。

このまま後日まで倍速してやりましょう。

というわけで早いですが、今回はここまで。

ご視聴ありがとうございました。

▶?

本当は気付いていたの。

それが悪い事なんだって。

栄総合学園に通っている私は御園かりん！

漫画が好きで、将来は漫画家になりたいと思っているの。

所属してる漫画研究部は三年の先輩達が辞めてから、私一人になっちゃったの。今は、厳しいけど優しいアリナ先輩と一緒に教室を使ってるの。

私のイチゴ牛乳は飲んじやうけど、描いた漫画のアドバイスをしてくれるし、やっぱアリナ先輩は良い先輩なの！

家に帰ったら、大好きなおばあちゃん、大好きなきりんちゃんのお話をするの。「怪盗少女マジカルきりん」は私のお気に入り漫画なの！

でも、そんな私にはある秘密があったの…。

「トリックオアトリート！」

そう、ハロウィンが生んだ魔法少女こと『怪盗かりん』とは私の事だったのだ！

怪盗かりんの目的はただ一つ。

グリーンシードを分けること。

強い魔法少女から手に入れたグリーンシードを、一人で生きていくのに苦労している魔法少女達に渡していくの。

そうすればみんなグリーンシードを手に入れる事が出来て、幸せに生きていける。

今日もまた私は怪盗かりんとして、神浜の夜を駆けていくの。

こうして善良な魔法少女として一日が終わると思ってた。

でも、その日の夜は違ったの。

暗い路地裏。

目的のグリーンフシードを手に入れた私は、あらかじめ標的に決めていた魔法少女の元に向かったの。

けれど、標的以外にも誰かが居る事に気付いて、思わず物陰に隠れちゃったの。

そこに居たのは真つ黒な魔法少女。

微かに見えるその人の綺麗な緑色は、私と話している時のおばあちゃんの目と同じくらい、暖かくて優しい目をしていたの。

そして標的の子と何かを喋った後、まるで鳥みたいにその場から去っていったの。

気になった私は怪盗かりんになる事も忘れて、標的だった子にその人の事を聞いてみたの。

弱い魔法少女の為にグリーンフシードを売ってくれる商人さん、らしいの。

それから私は怪盗かりんとして活動する度、その人が弱い魔法少女にグリーンフシードをあげてるのを見たの。

一人で魔女を狩っているところも見かけたりして……
ふとしたらその商人さんの事をずっと考えるようになってたの。

そして、気付いたの。

いや、本当はずっと前から気付いていたの。

盗むのは悪い事なんだって。

グリーンシードが無いと困るのは、弱い魔法少女だけじゃなくて、強い魔法少女もそうなんだって事も。

ある日、私は仮病を使って学校を休んだの。

自室に引きこもって、カーテンも閉め切って、ベッドの中で自分のソウルジェムを見ながら考えてたの。

グリーンフィードが無くなると……魔法少女はどうなるの？

「……………死んじゃう……かも、しれないの。」

じゃあ怪盗かりんは……

私は、弱い子達を助ける為に、強い人達を殺そうとしていたの？

「……………違うの。」

自問自答の着地点は見つからないの。

ぐるぐると同じ事ばかり考え続けて、次第に濁っていく私のソウルジエムみたいに、
抜け出せない沼に沈んでくような気分だったの。

そんな時、一羽の鴉の鳴き声を聞いたの。

ハツと違ってカーテンから外を覗くと、なんだかすごく大きいカラスが見えたの。
そしてそのカラスを見て、何故かあの商人さんの事を思い出したの。

(急がなきゃ……!)

何に急いでたかは分からないの。

でもなんとなく急がなきゃいけないような気がして……。

いつのまにか私は一目散に外に駆け出して、あの優しい人を探していたの。

そしたらそのカラスは私の前に降りて来て、まるで付いて来いって言ってるみたいに、私でも分かりやすいように飛んでいくの。

探すあてなんて無かった私は、一か八かでカラスについて行く事にしたの。

走ってる最中に色んな事が思い浮かんでは消えていくの。

私の事。

アリナ先輩の事。

おばあちゃんの事。

家族の事。

きりんちゃんの事。

魔法少女の事。

…あと、あの人の事。

結果的にその人は見つかったの。

魔女を狩っている最中みたいで、私も変身して中に入ろうとしたの。

その人は強い人だったから、結界に一步踏み出したところで、直ぐに結界が解けちゃったの。

でも気にせず走り続けて、去ろうとしてたその人に声を掛けたの。

振り返ったその人は目を丸くさせて、慌ててグリーンシードを取り出して、私に使ってくれたの。

そこでやっと、ソウルジェムが濁ってたのに気付いたの。

私はなんとかお礼は言えたけど、何か言おうとしてた事は喉に引っかかって、口には出なかったの。

探してたその人の名前は、弓有詩織さんと言うらしいの。

弓有さんは走って息を切らせてた私を近くのベンチに座らせて、しかも自販機で飲み物も買ってくれたの。

グリーンフシードも使ってくれたのに。

申し訳無さでいっばいだったの。

「……落ち着いた？」

落ち着くまで待つてくれた弓有さんは、焦らないで良いよ、と私が話すのを待つてくれたの。

そして息を整えて、気持ちを整理して私は、弓有さんに悩みを相談し始めたの。

一通り話し終えた私は、弓有さんがどんな事を言ってくれるか待つてたの。

すると弓有さんはまだ新しい飴の袋を開けると、手で掴む動作をしながら、私に飴を掴むように袋の口を向けたの。

そのまま私は飴を手で掴んで、片手で支えきれない量を両手で持つたの。

弓有さんはその様子を見てこう言ったの。

「……それが、限界。」

最初、その意味が分からなかったの。

私の手で掴んだいくつかの飴。

弓有さんが持つてる袋の中にはまだ沢山の飴が残ってる。

だけど、その2つを見て気付いたの。

この飴は救える魔法少女の数だって。

弓有さんが言うには、見落としているだけでまだまだ助けられない魔法少女は多く、全てを救える訳じゃないから気負わなくて大丈夫、って事。

だから、自分の手が届く大切なモノを守り抜くのが大切だって教えてくれたの。自分も助けられない人が神浜市にもいっぱい居るから。

ふと、家に帰ろう、と弓有さんが言ったの。

一心不乱に駆けてきたから、もう夕方だつて事に今頃気付いたの。でも色々話せて、心に残っていた悩みが全部解決した気がするの。

帰ろうとしたら、弓有さんは連絡先と一緒に飴も渡してくれたの。

そして私の頭を一回撫でて、じゃあね、なんて言いながら静かに去っていったの。やっぱりすごく優しい人なの。

そのまま家に帰ってきて、部屋に戻って弓有さんから貰った飴玉を舐めたの。そしたらなんだか、泣きたい気持ちになってきちゃったの。

誰かの為の思いが詰め込まれたブドウ味。

話の途中で、弓有さんが悲しそうな目をしているのに気付いてしまったから。

私、決めたの。

確かに私は多くの魔法少女を困らせてきたの。

誰かに助けてもらって、一人で戦おうとしてもグリーンフィードを盗んで生き残ってしまおう、そんな魔法少女だったの。

自分に言い訳をして、大切なきりんちゃんまで汚してしまつて、誤魔化し続けてダメになつてたの。

けれど弓有さんとお話して、自分のやってきた事を思い返して……

困らせた分だけ、幸せを分ける方法を見つけたの。

それが『怪盗かりん』。

……大切な人達に幸せを配るただひとりの魔法少女。

Part 5 予期せぬガバ

今日は千年に一度のラツキーデー、だそうだ。

みかづき荘で出していた占い禁止令を破って、朝からメルは今日の運勢を占つていた。

メルの固有魔法は『未来誘導』。占いが良かった時は一日中ずっと良い事が続き、逆に悪かった時は一日中ずっと悪い事が続くようになる。

まだ不確定だった未来を占いの結果の通りにしてしまうその魔法を、私はもしもの時を考えて禁止としてきた。

でも、それがフラストレーションとなつて、ついに爆発したのが今朝の占いだろう。

そもそもオリジナルのメソッドを願つて契約するくらいに占い大好きっ子だ。遅かれ早かれどの道、メルは占いをするつもりだったのかもしれない。

今日は他の区から流れてきた魔女を狩る予定があつた。

鶴乃は珍しく万々歳に団体の予約が入つた為、今日のところは不参加。

力を借りようと思っていた弓有さんも、それでシフトが入って参加出来ないそうだ。この魔女は大東区から流れてきた魔女で、今までに工匠区、中央区、水名区を通ってきた。そして今、私達のいる新西区に。

だから新たな犠牲者を出さない為にも、私、みふゆ、メル、ももこの4人で食い止めなければいけない。

「気をつけて!」

流石ここまで流れ着いただけあって、この魔女は非常に手強い。

黒い蜘蛛のような手下やノミのような手下が境界内の森林を颯爽と駆け回り、ようやくたどり着いた深層では、巨大な腕の魔女が私達を待ち構えていた。

最初にメルが標的になってしまい、思わぬ所から受けた攻撃によって、深手を負ってしまう。

次から次へ湧き出てくる手下に段々と消耗していく私達は、このままでは不味いと思いい、私が殿を務めて撤退する事にした。

それがいけなかった。

後ろの3人を逃す為に1人になった私を好機と見たのか、魔女は手下を使って猛攻撃を開始した。

いくらベテランと言えども、ここまで一点集中されてしまつては長く保たない。

最終的に周りを包囲されてしまった私に向かって、魔女がトドメとばかりにノミを向ける。

「ダメですメルさん！」

みふゆの焦った声が聞こえた。

「メル!? 何を……！」

ももこの驚いた声が聞こえた。

不意に視界に飛び込んで来たのは見慣れた黄緑。

見ればメルが最後の大技を使って、魔女の攻撃を相殺していた。ここにいる誰よりもダメージを受けていて、そんな事をすればソウルジェムが濁りきってしまうのに。

…ダメだ……これではダメだ……！

あの時と……かなえの時と同じになってしまう！

「…ッ！メル！」

次第に魔女の攻撃は強くなっていき、衝撃を受け止めるメルの魔力も限界に近づいていく。そして攻撃を防いでいるカードは徐々にヒビが入る。

私はメルに近づこうとするが、相殺されている力の余波がそれを許さなかった。やがて辺りに光が満ちてくる。

「七海先輩！」

最早視界は白に塗り潰され、それでもまだメルの後ろ姿がわずかに認識出来る頃、私の事と呼んでメルは振り返った。

心の底から晴れやかな笑顔。

「尊敬するリーダー守れて、ボク！幸せです！」

伸ばした手は宙を切る。

懐かしい色が見えた気がした。

次に気が付いた時には元いた場所にいた。

辺りに魔女の反応は無く、結界に入った時は夕方だったのに、既に辺りは夜になっていた。

「……何がラッキーデイよ……。」

もしかしてメルは魔女を倒せたのだろうか。いや……攻撃を防ぐだけで精一杯だったからきつと逃してしまっただろう。

もしかしたらメルは魔女から逃げ延びて生き残っているかもしれない。それでも……グリーンシードを持っていないから、生存を望むのは無謀だ。

もしもの可能性を考えても、嫌に冷静な思考がその考えを一蹴してしまう。

メルを失った喪失感を胸に、私達は情けない事になす術が無く、現実から逃げるようにみかづき荘に帰るしかなかった。

リビングを静寂が包む。

狙ったようなタイミングに現れたキュウベエを前に、私は性懲りもなく、メルの生存の可能性を聞いた。

なかなか諦めが悪いなどと自嘲する。

聞いたのは2つ。

あのような場面から魔法少女が生き残る可能性。

そして……

ソウルジエムが濁りきった時、魔法少女はどうなってしまうのか、という事も。

もしも、なんて有るはずも無い希望が欲しかった私達を打ちのめしたのは、また別の新しい絶望だった。

「何だそれ……どういうことだ！」

「この国では成長途中の女性の事を『少女』って呼ぶんだろう？ だったら、やがて魔女になる君達の事は『魔法少女』と呼ぶべきだよね。」

「そんな……。」

魔法少女はやがて魔女になる。

それが魔法少女の真実。

「信じたくないなら君達も知っている弓有詩織に話を聞いてみるといい。僕の言った事は本当の事だと言うはずだよ。」

そう言い残してキュウベえはみかづき荘から去っていく。
再び部屋の中に静けさが戻ってくる。

この日のみかづき荘の中で会話は起こらなかった。

私は……

▶?

チーム解散を見届けるRTAはーじまーるよー

前は妙なイベントを引き起こし、メル魔女化イベントをアルバイトでバックレたところまで終わりました。

今回はバックレた後、やちよさんから連絡が来たところからです。

もしもし〜？やちよさん？どうしたんですかこんな夜中に。

『今から会う事は出来るかしら？話したい事があるの。』

あ、いつすよ、大丈夫つすよ。

というわけでやちよさんに呼び出されました。場所は新西区にある公園だそうです。公園はイベント場所として有能だねえ。

「……突然ごめんなさい。」

やちよさんがすごく真剣な表情で出迎えてくれました。心なしか眉間にシワが寄っている気がします。

ところで詩織ちゃんに話したい事ってなんですか？（すつとぼけ）

「メルが亡くなった、かもしれないの。…いいえ、死亡した可能性が高いわ。」

そうですか亡くなりましたか……ん？

んんん？聞き間違いかな？

亡くなったんですか？魔女化したの間違いではなく？え、本当に？

ちよちよちよつと待つてください。安名メルが魔女化してないってことは……。

旧チームみかづき荘が魔女化を知る機会を失った!?!?

待つて♡待つて♡返して!走者のチャートを返してよ!

本当に待つてください大ガバってレベルじゃないです。許してえ乱数の神様許してえ!

「難易度ハードの修羅の国神浜はやつぱり一味違いましたね……。この先の展開はどうなるんですか!?? 走者のタイムは!??」

「それで、キュウベえから聞いたのだけど…あなたが魔法少女の真実を知っているって本当なの？」

「アツ！セーフ!!? まだアウトじゃなかったようです！まだリセットに手をかけただけ、押してない危ねえ！」

「とうか詩織ちゃん知ってたんですか…。そりゃあ白狸に対するあの反応（串刺し）も納得できます。」

「まあ白タヌキが言ったならそうなのでしょう。アイツ真実は省いて説明するけど嘘は言わないからな……。」

「そう……魔法少女が魔女になるのは、本当の事なの？」

「そうですねえ、紛れもなく事実ですわね…。」

「ともかくやちよさんの話の内容として、みかづき荘の面々（鶴乃ちゃんを除く）は無事に（？）魔女化の事を知れたようです。」

「走者が息を吹き返したぞ！一命を取り留めたな。」

「……話を聞いてくれてありがとう。」

「いえいえ、ちよつとしたガバも知れただけ良しとしましょう。このまま進んでたら危

なかつたです。

やちよさんが会いに来てくれたおかげで、事の顛末を知れましたし。感謝感謝だぞ！
あ、折角会ったんだから飴だけでも貰ってつてな！そんじやまたな！

さて気になる詩織ちゃんのソウルジエムの濁り具合は……

……思ってたよりも濁ってませんね……？

性格の『博愛』からして、もつと大幅に濁ると思ってたんですけど……どうしてなんですかねえ……。

もしかして『頑固』も合わさった所為で、走者も真つ青の覚悟ガンギマリ状態になつてるんですか？

いやちよつとそれは困りますお客様困ります！覚悟ガンギマリ状態は非常に不味いです。

本来、この性格の組み合わせなら、せいぜいいろはちゃんくらいの意志の固さ（十分固い）なんですけど、稀にこうした決意状態があつてですね。

ステータスに大幅な強化が入ったり、ソウルジエムが濁りにくくなったり、様々なバフを貰う事が出来ます。

それだけなら圧倒的に良い事なんですけど……。

「デメリットとして性格が光の道一直線になる事が挙げられます。闇堕ちなんて絶対しませんし、寧ろ逆に周りを光堕ちさせる程の精神力を發揮させます。」

え？それは良い事なんじゃないかって？それは違います、RTAを走る中では結構致命的なガバです。

こうなったプレイキャラは何が何でも意志を捻じ曲げる事が出来ません。初志貫徹します。いえ、しまくります。

目的の為に自分という個を捨てられるくらいの覚悟を決めます。最終的に自分が死んでも精神力だけで、死後に影響を残していく程です。

ぶっちゃけまだ神化の際のまどかちゃんや、もう誰にも頼らない状態のクーほむ等と、同格の覚悟を決めます。やばい（やばい）。

しかし、まだ詩織ちゃんが覚悟ガンマリ状態とは決まっています。決めつけるのは早計です。

というかマスクデータなので、一発じやガンマリ状態とは分かりません。そして何を目的としているかすら分かりません。

ちなみにこの状態は他のネームドキャラもなる事があるんですが、それはもう途轍も

なかったです。

走者が見た事あるのは覚悟決め過ぎた鶴乃ちゃんなんですけど、弱い心を全て投げ捨てまさに最強の名を欲しいままにしました。

「この由比鶴乃には『夢』がある！」って感じで『幸運』もフルに使って、ガバ無しの走者になってましたね。

もうネームド魔法少女が走者になった方が早い説：あると思います。

まあそういう話は置いて、詩織ちゃんはみかづき荘メンバーじゃないので、これからみかづき荘は放置で良いです。

勝手に遊園地行って来て、勝手にチーム解散イベントをする事でしょう。そしてから、接触を行うようにしましょう。

結局知り合いなだけですからね：詩織ちゃんはぼっちではないです（確固たる意思）

やちよさんが他の人を拒絶するようになっても、詩織ちゃんには義手くんという万能使い魔があるので、本編開始しても手紙を送りつけるだけで十分です。

あとは神浜市内のイベント状況に注意していきましよう。知り合いもどんどん増やせていけたら良いですね。

お友達が増えるよ！やったね詩織ちゃん！

それでは何か起こるまで倍速します。

お？倍速が止まりました。

今は万々歳でアルバイト中のようにです。鶴乃ちゃんとのシフトが被った日みたいですね。

お客さんも殆ど来なくて、やる事が殆どありません。鶴乃ちゃんと2人つきりで雑談中のようにです。

といつても相手が愚痴を流してるだけで、詩織ちゃんは相槌を打つだけの簡単な作業です。

「それでさー、やちよがチーム解散つて言つてさー。何で？つて聞いても全然答えてくれないの！」

お、ちゃんとやちよさんはチーム解散宣言してくれましたね。もう既にみかづき荘は遊園地に行ったんでしょか。

メル魔女化イベントに引き続いて遊園地までちゃんとやってくれなかったら、キレーシヨランダで大ガバしてしまいますからね。

ちゃんとさく頼むよ？ただでさえ修羅の国なんだから。

「ねえ、どうしたらいいんだろ？詩織はなんか良い案ない？」

おっと話を振られました。

やっぱりやちよさんですからね、チームでもない私が考えたところで、何の効果も得られないと思います。

実際初期交友関係にいるってだけで、会ってみた感じただの知り合いって感じなんですよね。開始時点での信頼度もみかづき荘の人達より、十七夜さんの方が何故か高かったです。

ごめんなあ鶴乃ちゃん、詩織ちゃんは手助けできねえぜ…。

「ううん！良いの、私が愚痴言っただけだから！」

鶴乃ちゃんは良い子だなあ…。

良い子過ぎるのがRTA的にきついんですけどね…（第7章から目を逸らしつつ）

そうだ、頑張ってる良い子には、今日も飴さんをプレゼント致しましょう。

残念ながら、詩織ちゃんが心の拠り所になるには、いくつかの条件を満たしていません。

そのためこういった地道な好感度稼ぎで、鶴乃ちゃんから信頼を勝ち取っていきませ

現に、ちよつとした愚痴を零してくるようになってくれたので、そこそこの好感触を得られてる事でしょう。

あと地味に年齢が年上なのもいい感じに作用してます。鶴乃ちゃんと比べると、詩織ちゃんは160台に届いてないですけどね。思つてたよりも小さい!

鶴乃ちゃんも愚痴を言う事くらいあるんだよつて事を知つておくと、キレーションランドの時にいろはちゃん達にアドバイス出来るので、こうした好感度稼ぎに損はないです。

ただしあんまり心の拠り所になり過ぎると、本心を吐き出さないタイプなだけに依存しやすいから、これから走る兄貴姉貴達は十分注意しような!

「そうだ詩織! 万々歳の新メニュー考えたんだけどどうかな!?」

あかんこれじゃ胃が(油で)死ぬウ!

なお善意なだけに断りきれない詩織ちゃんは有無を言わず食べました。これは鶴乃ちゃんが話を逸らそうと理解しているからです。

これは……! この料理は……!

「点数は!? 点数はどうかな!?」

い つ も の

味は50点笑顔は満点、中華飯店万々歳! 本日も絶賛営業中です! (唐突なダイヤモンド)

ごめん鶴乃ちゃん……これは只のセットメニューだよ……。

「だあ〜！またしても50を超えられなかったかー！」

ごめんね、でもこれはきつと万々歳の運命なんだ。

誰かが万々歳の味が50点から変わる事を願って契約しない限り、二次創作でも万々歳は50点と言われ続ける運命にあるんだ。

だから50点だとしか言えないんだ。50点ではなくなった時、ここは万々歳ではなくなるかもしれないから。

詩織ちゃんもノータイムで首を振るレベル。

「そっかあー。あ、シフト終わるね。今日も愚痴聞いてくれてありがとう！」

大した事はしてないから気にすんなよ。

家に帰っても倍速は止まらない……加速する！

本日は絶好の魔女狩り日和！

詩織ちゃんも手当たり次第魔女狩りをしてますけど、なにやら珍しく魔法少女の反応を見つけた様子。

奥は既に4人いたつぽいですけど、今誰か新しい人が進んでいくのを見かけましたね。

「というかアレ？やちよさんでは？」

なんかのイベントなんでしょうかね？結界内でやちよさんを見るのは珍しい気がします。

「この魔女は先に来てた他の子達に譲ろうと思ったけど、気になるので付いて行きますよ。」

「あ！モブじゃない衣装！やりましたね全員ネームドつぽいです！何か会話してまね！」

「すみませーん、そこで何してるんですか？」

「今度は誰！」

「あの時のお客さん！」

「弓有さん……。」

「おや、阿見莉愛まほスト2話ですか？いつ行きます？私も同行しましょう。」

「詩織ちゃんが知らない面子が3人居ますね、RTA的に交友関係が増えて美味しいで

す。ええ。

初めて見るのは、阿見莉愛、春名このみ、夏目かこの3人です。

ここではレア様が目立ちたかったが、やちよさんに決められてしまうという結末になります。(二番手じゃ) ないです。

ニア様は「可愛い」：は分かりませんが「綺麗」などの褒め言葉を言うと、結構好感度は上がりやすいです。

例に倣って詩織ちゃんも、チア様の褒め言葉を言って好感度を稼ぎましょう。

「あなた、見る目がありますわね。そこにいる七海やちよより私を賞賛するなんて！」
「先輩…：多分その人は親戚の子を褒める感覚で言ってます…：。」

とりあえず自己紹介をしておきます。

通りすがりの魔法少女だ、覚えておけ！

折角こんなに魔法少女いるんだし、いっちょ一狩り行きませんか？

「そうね、そうしましょう。」

「わ、分かりました！」

「頑張ります！」

魔法少女6人に勝てるわけないだろ！

4人だったところを新たにベテラン2人が加入してきた魔女さん可哀想…。心底同

情します。

今までソロで戦ってきた詩織ちゃんがおかしいだけで、何回も言いますが従来の後方支援はこうするものです！

使役槍でちまちま後方から補助していきます。ここはコア様が依然変わらず目立とうとしていますが、別に無視して構いません。

さつさとやちよさんにトドメを刺してもらいます。

ここでの注意点は誤っても詩織ちゃんが最後の一撃を決めない事です。今後フェア様に会う度にライバル視される事になります。

ノラ様もまともに戦えば『隠蔽』で有能ステルス弓兵になるんですけどね……そこまでの道のりが長いんですよコレがまた。

はいフィニッシャー！ ツシュ！ 七海やちよ選手が魔女に引導を渡して試合終了です！

「くう〜！ 七海やちよ！ 覚えてなさい！」

まるで使い古されたような捨て台詞を吐いてキラ様は去っていきます。

すんませーん、あの人にこれ（飴）渡しといてくれますかね？ あ、君にもどうぞ。

「ありがとうございませう。せんぱーい！ 待って下さーい！」

そうして水名2人組は行きましたとき。

残ったやちよさん、このみちゃん、かこちゃんにも忘れずに飴玉を渡しておきましょう。千里の好感度も一歩からです。

「弓有さん、私は……！」

なにかやちよさんが喋ろうとしますが、おそらくみかづき荘関連なので、お口チャツクしてもらおうようにしましょう。

外で身内話ほしないでください！マナーを（？）マナーを守って！

新しく会った2人にはそれぞれ詩織ちゃんの連絡先を渡しておきます。何かあったら呼べよな！

んじやサヨナラア！

今回はここまでにしようと思います。

ご視聴ありがとうございました。

神戸市に存在するとある六階建てのマンション。

▶
?

その最上階にある端の部屋にソレはいた。

時刻はとうに次の日へ変わっており、多くの人々は既に眠りについていた。それはこの部屋の主も例外ではない。

ソレは正しく腕の形をしていた。

主の起きる様子が無いのを確認すると、その右腕はゆっくりと布団から抜け出し、そのまま宙に浮く。

そして主の机の引き出しにある真新しい便箋を取り出すと、机上に放つてあるペンを使つて何かを書き始める。

一通り書き終えたのか、ペンを丁寧に元の位置に戻すと、腕は片手で器用に紙を折つた。

部屋の窓を開けると、手紙を持つ腕は一羽の鴉に姿を変え、夜の闇へと飛び立っていった。

からすが語るは二人の少女のむかしばなし。

いずれ来る魔法少女達のきおくより、ずっと前にあつたすこしの前日譚。

彼女は運命にすくわれた。

彼女は結末をかえたいと思っている。

いつか来るしあわせな日々を見届けたいがために。

二重になった引き出しの底には誰かと誰かの手紙が乱雑だが、それでも形を失つたりしないよう丁重に仕舞われていた。

『ねえ、まひろはさ。どんな事をお願いするの?』

『んーそうだなあ。しおりちゃんとずっと一緒にいられますように!とかかな。』

『一緒にいられるといいね。』

『いられるよ!だって私はしおりちゃんの事が好きだもん!』

『ふふっそうだね、私とまひろだもん。きっと大人になっても一緒にいるよ。』

『じゃあ約束しようよ!』

『約束?』

『ずっと一緒にいようって約束！』

その手紙にここから先の記述は無い。

記録された会話には意図的に消してある部分が見受けられた。

『どうか憎むことのできない敵を殺さないでい、やうに早くこの世界がなりますやうに、そのためならば、わたくしのからだなどは、何べん引き裂かれてもかまひません。』

今も
は静かに見守っている。

意味深な事をばらまくだけばらまいて満足したので失踪します。

救うとは

力を貸して危険な状態から助けること。

巢食うとは

棲み着いていること。

これはちよつとした余談なんですけどね。

マガレコは総じて宮沢賢治がモチーフになっているそうですね。

このRTAの弓有詩織のモチーフは鴉なんですよ。

Part 6 可能性のガバ

神浜を見守るRTAはーじまーるよー

前回で大きく変化したのはやちよさん達がチームを解散したという所です。
でも詩織ちゃんは関係ないので続行します。

さて今回は神浜カラスネットワークから「今度、色々展示会やるらしいっすよ！」と連絡が来て、良い機会なので行こうと思います。

カラスの話題に出て来たので気になるのは二つ。

『西洋アンティーク展』と『刀剣特別展』です。

その内片方の刀剣特別展は、梢麻友がバイトをしている美術館で行われます。ここでは後々、神浜芸術賞を取る天才アーティストの美術展も行われます……。

この美術館では詩織ちゃんもアルバイトできますが、リスクが高すぎるツピ!

今の所でもバイトは十分ですが、誰かに贈り物をする時の為に、お金は貯めておきたいなと思っています。

それで……実は次なる高収入バイト先は既に見つけているんです。裏技のような事を使いますが……今回の後半になったらご紹介しますね。

刀剣特別展では、高確率で史乃沙優希に出会う事が出来ます。水波レナちゃんが推しているアイドルの「さゆさゆ」とは彼女の事です。

今までのネームド魔法少女と同様に、互いに魔法少女として知り合わなければ、アイドル対応をされて終わりになります。

今現在は時系列として丁度、梢麻友のまほストに入るくらいです。おそらく契約ももう少しでしょう。

今回は新しく上記の2人と交友関係になる事をひとまずの小目標とします。

詩織ちゃんもしばらくは働き詰めでしたし、たまには仕事を休んで英気を養わせてあ

げましょう！

さてまずは今週末のアンティーク展示会を目安にします。展示会自体には行かなくていいです。

この日は水名のとあるカフェにある1日20個限定のケーキ（お一人様一つまで）を頂きます。

正直言つてここでは、麻友ちゃんのまほストが本来の流れかどうかを確認するだけです。

カフェで麻友ちゃんと美術館の主任さん、あとついでに莉愛様とまなかちゃんが確認できれば、おおよそのストーリーは大丈夫です。

詩織ちゃんが接触するのは、まほストでの魔女狩りタイミングだけなので、これからは水名に通いつばなしになります。

前述の限定ケーキは誰かと来れば好感度稼ぎポイントになりますので、折角だから誰か誘いましょう。

でも誰を誘いましょうか…。

詩織ちゃんに対するパラメータが少し不安な人が良いですね。

まだ1回しか会っていない、初対面があまり良くない、もし好感度が上がりすぎてても走者が困らないような人……………

「本日はお誘い頂き、有難う御座います。」

居ました、初遭遇から死闘を繰り広げた我らが常盤ななか組長が。

よくよく考えたら、勧誘イベントとはいえ接触が足りなかったかもしれないと思いついてね。

しかもあの時落ち着く余裕がなかったたので、詩織ちゃんに連絡先渡すだけ帰ってて、肝心の組長の連絡先知らなかったんですよね。(ガバ)

今回は義手くんに頼んで、お手紙を届けてお誘いしました。ついでに手紙を入れた封筒には、ちよつとした好感度稼ぎ用の飴玉も入れておきました。

快いお返事の手紙も頂きましたので、今日はななかさんとお茶をします。

それにしてもお忙しいところ、すみませんねえ。まさか来てくれるとは思いませんで

したよ。

「いえ、お気遣いなく。私も詩織さんとお話ししたいと思っております。」

そうなんですか、それは（好感度の心配がなくなつて）良かったです。

お誘いした身なので、目的のカフェまでちゃんとエスコートします。

というかこっちは一応、あつちより4つ年上ですからね。

勘違いしやすいですが現時点で、ななかさんは中学2年生ですし、詩織ちゃんは18歳フリーターです。

ええ、動画では同じような身長の子が2人歩いているように見えますけど。

そして本編時には160cmになる組長に、身長伸びしろのない詩織ちゃんは近いうちに抜かされるでしょうけど。

着きました、カフェです。

いやあ、道案内は完璧でしたね……。年上の余裕というモノを見せつけてしまったかもしれません。（慢心）

早速ケーキと紅茶を頼みます。組長とのお話に花を咲かせましょう。

「本日は先を越されてしまいました、私もお誘いしたい事がありました……。」

そう言つてななかさんがスツと差し出して来たのは前売り券です。話題に出してい

た今度開かれる刀剣特別展ですね。

運が回ってきたかあ〜？ 勿論了承します。組長からのお誘いですしね。誘う所が刀剣の展示会とは、なかなか渋いご趣味ですが……。

「あなたをお誘いできて良かったです。」

ウツ！（笑顔が）眩しい……

おや、気になる人を見つけましたね。当初の目的である梢麻友ちゃんです。ちゃんとストーリーが進行しているようで、走者安心しました。

ついでに莉愛様とまなかちゃんも店内に居ますね。良かった良かった。

ケーキを食べて、組長との会話も楽しんだ事ですし、名残惜しいですがそろそろ別れのお時間です。

お会計は全て詩織ちゃん持ちですよ。当たり前だよなあ!!？

別れ際には忘れずに飴ちゃんを渡しましょう。

「次も楽しみにしていますね？ それでは。」

こちらこそありがとうございます。

一緒にお茶した事で、組長との心の距離が縮まったような気がします。では時間を進めていきましょう。

ここが例の美術館かあゝテンション上がるなあゝ。

実際、こういう展示されている物を見に来ると、修学旅行に来ていようで楽しくありません。

それは詩織ちゃんも例外ではなかった……。お前それでも18歳ダルオ!??

態度にはあまり出てませんが、仄かに上機嫌です……。ほら見てください、微妙に目が輝いています。

詩織ちゃんの心は中学生だった……?!

前から薄々思っていましたけど、割と詩織ちゃんの感性子供っぽいですね。飴をはじめとした甘いモノ全般好きそうです。

まさか万々歳の脂に負けて、舌が甘味を求めているんですか？

今の時期はまだいろはちゃんが来ないので、新メニューの試食は全てこちらに回ってくるんですよ……。

まあそれは置いといて、組長と美術館を回っております。誰かと一緒に来れて、組長もご満悦の様子。

しかしそれは長く続きません。

何故なら、我々は魔法少女だからです。

こんな楽しい雰囲気はぶち壊してくる魔女の気配を察知しました。

そりゃ（こんな人が大勢いる所に）そう（魔女は寄ってくるだろう）よ。

「……詩織さん。」

ななかさんも気づいて呼びかけてくれましたね。

お楽しみ時間を邪魔してくれた魔女はどこだオラァ！あくしろよ。組長の目が笑つてないやん！どうしてくれんのコレ。

…ん？いやホントに組長の目が笑つてない！表面上くっそニッコリしてるけど、ほんのり殺気が漏れ出てるんですが……コワイ！

そんなにななかさん魔女に対して当たり強かったですっけ……？（走者のRTAは）大丈夫ですか？

急いで結界に向かいますが、なんか神浜芸人養成学校の制服を着た3人組が居ますね。

辺りには何故かふにやんとした雰囲気は漂っています。

「あら？あなたはこの前の……」

はい、この前ぶりですね。

また魔女退治に同行しますよ。（組長の機嫌を直す為にも）早く魔女を倒しましょう

！

つて、待つて待つて組長！無言で結界入った途端に、いきなり魔女討伐RTA走者になるのやめて！協調性を持つて下さい！使役槍くん援護して援護して！

「!!？私も負けていられるもんですか！」

ああ！ドア様が組長に対して対抗意識を燃やしてしまった！義手くん2号（鳥型）！緊急出動ですが、あの人をサポートしてください！

そこの2人大丈夫ですか!!？さすがに無いと思えますけど、ケア様みたいに変に対抗心燃やしてないですよね!!？

「は、はわあ！麻友ちゃん！見てください、あの人！刀！刀を使っていますう〜！」
「うん！すごいね、これが魔法少女なんだ…。」

まったく心配ご無用でしたね、この感じ。

というかそうか、さゆさゆは刀剣大好きでしたね……。組長の刀も対象内なんですか
……。

詩織ちゃん本人はこっちの2人の護衛をしましょう。

多分ここの魔女は組長がすぐ狩ってきます。だってあの怒気は尋常じゃねえよ……。
やべえよやべえよ……。

あ、結界が解けた。

思ったよりも早かったです。いやまあ、あの組長を前にすれば妥当なんですかね。

案の定、ミディアム様が突つかかっていますが、あの様子だとのらりくらり受け流して
るみたいです。

流石組長！オレ達に出来ない事を平然とやってのける！そこに痺れる憧れる！

先に突っ込んでったお二人がこちらに戻ってきましたね。いやあまさかこんな事にな
るなんてなあ（しらばっくれ）

この後は成り行きで、水名3人と一緒に見る事になりました。あまり真っ直ぐな目を
向けるなよ……詩織ちゃんが断れなくなる……。

ついでに連絡先も交換できたので、一石二鳥ですね。帰りには忘れず、それぞれに飴
を渡しておきましょう。

じゃあな！ななかさん今日は誘ってくれてありがとナス！あばよ！

さて、今Part最初に説明していた高収入バイトについて、ご説明する時間がやつて参りました。

画面をご覧ください。

大人子供問わず大人気。

ここは年がら年中人で賑わってる。

楽しそうな声がそこかしこで聞こえてきます。

お気づきの兄貴姉貴もいらっしやるんじゃないでしょうか？

そう、ここは南風区に存在するアミューズメントパーク。

『ミナギーランド』です。

ええ、ここが詩織ちゃんの新たなバイト先ですとも。

同じくもう一つある施設、『ミナギーシー』とローテーションするような形で、バイトしていく事になります。

ここでのバイトは、短期間高収入のモノが多いです。しかも働くのは1日だけでも大丈夫な、超短期間単発バイトです。

ただし、このバイトを受けるには、余程の高ステータスが必要不可欠です。それもそのはず。

何故なら、着ぐるみの中の人になるからです。

ランドに遊びに来る子供達に、夢を与える大切なお仕事です。

着ぐるみ状態の時はとも大変ですが、その分休憩時間も多く設定されています。真夏にサウナスーツ着てるようなもんですからね。

あとは中の人に対して指摘されても、めげないような精神力が必要です。現実でも重要な事です（小声）

普通なら詩織ちゃんのスータースでも、バイトを無事に成し遂げられるかは確定ではありません。魔法少女の身体能力でもギリギリです。

しかしゲームの仕様上、魔法少女なら無事に完遂できる裏技のようなモノがありま

す。

それは固有魔法『使役』です。

RTAの最序盤で説明した通り、『使役』は物などに対して使うと操る事が出来ます。それらの物は、使い魔と同じ扱いになるという事も解説しましたね。

このバイトでは、着ぐるみに対して魔法を使い、消耗は一切無い安全な方法で働きます。

中の人なんていません（ガチ）

ゲームなので周囲に不信任は抱かれませんが、こちらはスタッフ対応になるので、下手に手出しは

魔法少女ならバレるかもですが、こちらはスタッフ対応になるので、下手に手出しはされません。

バイト中、操る着ぐるみとは別に、詩織ちゃんはよく横にいるスタッフのお姉さんの立ち位置にいます。

では、お客さんに夢のような思い出を与えましょう！

バイト始めて早数時間、休憩を交えつつ働いています。

着ぐるみバイトはウエーブ制のミニゲームですね。ここでのスコアが良いほど、給金も良くなりますので頑張りましょう。

今のところ、子供達や学生達に大好評のようです。それに詩織ちゃんの意外な特技も発覚しました。

簡単な手品が出来るようです。詩織ちゃんの手先すごい器用ですね……。

泣いている子供に気付いたら、直ぐに向かって手品で泣き止ませ、持っている飴をあげて見送るといふ……。

おかげでお客さん達の印象もいい感じみたいです。性格の『博愛』が上手く組み合っていますね。

「ほら見て！あれがミナギーランドのマスコットだよ！」

「かわいい……？と、思います……はい……。」

「おやこの声は……？」

「梨花れん！梨花れんじゃないか！」

初遭遇なので交友関係を持ちたいですが、生憎今はスタッフです。こんな子もいたなあ程度に思つときましましょう。

もしかしたら相談所に遊びに行った時に話がスムーズになるかもしれません。

着ぐるみに手を振らせて、お姉さんスタッフ詩織ちゃんは「お写真撮りますか？」と声をかけましょう。

お客さんなら誠心誠意おもてなししないなあ……？ミナギーランド流のもてなしを

よお！

「せっかくだから1枚撮ろう！ね？すみません、1枚お願いします！」
いい笑顔！これは最高の記念写真ですよ……。

スマホを返す時に、ついでに手品も披露して飴さんを渡しておきます。

夢の国でのひとときを楽しめよな！

慣れてる梨花ちゃんは笑顔で手を振り、やや戸惑いがちなれんちゃんは微笑みながら振り返してくれました。

うーん…最高やな！

時刻は夕方。

ひとまず詩織ちゃんの着ぐるみバイト1回目は終了となります。初回にしては良い出来ちやう？

給料もちゃんと貰って今日は帰りましょう。

なかなか充実感たっぷりの日だったぜ……！

というわけで、今回はここまでにしようと思います。

▶
?

ご視聴ありがとうございました。

『最近ななかの様子がおかしい。

あ、ななかつていうのは勿論ボク達のチームリーダーの常盤ななかの事だよ？ 一応ちゃんと言っておくね。

いや、奇行を始めたとかそういう訳じゃないんだ。

なんというか、そう！悩める乙女って言うのかな？

いつもは飄々としてしつかりしてるんだけど、ちよつと前からふとした時にぼーっとする事が多くなってる。

あとよくリングゴ味の飴を舐めるようになったんだ。気に入ったのかな？

ああ、話を戻すとね？ なにかあったんじゃないかって心配なんだよ。

でも、ボク一人だけだと解決出来そうにないからさ。ここはチームのみんなに相談しようと思って。』

……あきらさんから相談されたのは、以上の内容でした。

確かに、言われてから注意深く観察してみると、ボーっとしている時が多いように感じます。

あと何かを考えこんでいるような様子も見受けられます。何を悩んでいるんでしょうか？

そしてななかさんを除くチームメンバーで理由を考えようと思いました。

「ようとした」という事は出来なかったという事で、私達はこれまた大きな問題に頭を抱える事になります。

その件に関する原因となったのは、ある日の夏日書房での出来事でした。

店で留守番をしていた私は、一人で珍しく来たななかさんが言った言葉に目を見開きました。

一言でいうなら、相談、だそうです。

一番最初に聞いたのは、相談相手に私を選んだ理由でした。すると、「お恥ずかしいのですけれどね」と前置きをして、ななかさんは語り始めます。

とある人に会ってからというもの、その人の事を考える度に、変な気持ちになるそう

です。

今まで生きてきて様々な感情を体験してきたけども、その感情については全く経験した事が無いそうで……。

そこで本屋の娘である私ならば、この感情の名前も知れるのではないか、と考えたそうです。

話を聞いている中で、まさかと思う候補が徐々にその存在感を強くさせていききました。

気恥ずかしそうにしながらも自然と微笑みながら話す姿に、あきらさんが言った「悩める乙女」という表現はまさにピッタリです。

ななかさんはきつと『恋』をしているのでしょうか。

しかし、私はこの事を本人に伝えようか迷ってしまいました。

悩みごとの相談として伝えるのは、おそらく正解なのでしょう。その正解が、私達の気持ちを考えていない事を前提としたモノでしたから。

悩んだ挙句、私はそれをななかさんに伝えてしまいました。

感情の答えを知ったななかさんは、

「なるほど……これが、この気持ち……『恋』……い」

と繰り返して納得し、悩みが晴れた顔で感謝を告げて去って行きました。

私もしばらくはリーダーの悩みを解決した、と自惚れていましたが、それから少しした後にななかさんの悩みが重大な事に気付きました。

そして開かれたのが今日の緊急会議です。

ななかさんを除いたチームの間に、珍妙な空気が流れていました。

その空気を打ち破って発したのが、今回の議題です。

ななかさんの『恋』。

あのななかさんが想うような殿方。一体どのような人なのでしょう。

「……あり得ない、と言いたかったんだけどね。実は今日」

そう言って告げられたのは、また新たな問題でした。

今日あきらさんが学校で会ったななかさんは、人を間違えたのかと驚くほど上機嫌だったそうです。

気になつて聞いたあきらさんに返ってきた答えは、所謂デートのお誘いです。

あとついでにリング味の飴も、いつもより美味しそうに口に含んでいたようでした。

チームリーダーの『恋』の行方が気になってしまった私達は、休日のななかさんを尾行する事にしました。

目にも増して機嫌が最高潮のななかさんは、いつもなら分かるような私達のストーリー行為すら気付かず、お誘いに向かおうとします。

付いて行った先は水名区。

待ち合わせ場所と思われるそこには、一人の女の人が立っていました。

2人は親しげに会話した後、先に来ていた女の人がななかさんをエスコートしていきます。慣れているのか、とても綺麗な所作でした。

「もしかしてあの人が……?」

「ただの友人なんじゃないネ?」

でも私はあの女の人を知っていました。

連絡先も渡されていたはずです。あの時は飴も貰っていました。

名前は確か、弓有詩織さん。

口数は少ないけど、とても優しい人だったのを覚えています。

その事を話すと、あきらさんは何か思い浮かんだようでした。

「弓有詩織さん！確か前にななかさんが勧誘を試みたって話してたような……。」

話を聞いてみると、私が弓有さんに会うよりも前に、ななかさんはあの人を一度勧誘しに行ったそうです。

勧誘は断られたものの、非常に良い手合わせをする事が出来たと会話していたとの事で。

弓有さんがとても実力がある方というのは、一緒に魔女退治をした時から知っていました。

だから互角に戦ったというななかさんの事をすごいと思う一方で、私の脳裏でとある言葉が引つかりました。

『吊り橋効果』というワードです。

吊り橋効果とは、危険な場所や不安、恐怖を感じる場所で会った人に対し、恋愛感情を抱きやすいという心理効果の事です。

なにかの本で読んだ事があります。夏目書房で探せば、おそらく見つかるでしょう。もしかしたらななかさんは吊り橋効果によって弓有さんに『恋』してしまったのかもしれません。

話を聞く限りでは、とても激しい戦闘をしたそうです。その影響で、吊り橋効果と似たようなものが働いてしまったのではないのでしょうか。

『恋』と言いつ切るには早すぎたかも……………。

もしくは私が言い切ったから、本当に『恋』をしてしまった可能性が……………？

ともかくとして、ななかさんが弓有さんを想っている事は、今となっては確定事項でした。

ではそんなリーダーを見た私達がするべき事は何でしょうか？

「人の恋路を邪魔する奴は馬に蹴られてしまえ」という言葉を見た事がある気がします。少なくとも私達は、自分達のリーダーが好きです。それは恋愛的な意味ではありませんが。

ななかさんの『恋』を邪魔する気なんてとてもありませんでした。

かくして所属会員3名、『常盤ななかの恋を見守る会』は発足されたのです。

Part 7 走者の最後

イベントラッシュが近づいてくるRTAはーじまーるよー

今回は組長とお茶して、着ぐるみバイトをしました。

今回はその続きからなのですが、時期的にそろそろ色々な事が動き始めるでしょう。

今回は今話題のアレが出ました。

ついに発表された、あの『第3回神浜現代芸術賞』の事ですね。金賞を取ったのは、皆さんご存知の天才アーティストです。

RTAでは何をやっても作品の餌にされる為、非常にまず味な走者の天敵の方です。かりんちゃんが大分早期にまほスト展開を自分で持ったので、それがアリナ・グレイに対してどんな影響が出ているか分かりません。

少なくとも現時点で契約はまだという事が分かっています。でもアリナに関する事で詩織ちゃんが出来る事は無いです。

せいぜい接触しないようにするのが良いですね。ただちよつと心配なのが、先にかりんちゃんと会ってしまった事です。

お願いだから狙わないでくれよおろ頼むよ

アリナは契約させると詩織ちゃんに害が及ぶし、契約させないと本編に入れない。どちらにせよ、止める手立てはありません。

放置じゃ放置！いつも通りの日課に前回の着ぐるみバイトを混ぜつつ生活しましょう。

しばらくの間、展示会のある水名区と地雷原の栄区には寄りません。魔法少女商売があつた時は…まあ仕方ないので行きますけどね。

あとアリナ契約直後は新西区も少し危険度が上がります。飛び降り後の彼女が入院してくる里見メデイカルセンターが新西区にあるからです。

今思うところの病院、物語の主要人物が勢ぞろいする時期があるのめちやくちや怖いんだよなあ……………

普段から病院三人娘も居ますし……

いや普通に会うなら別に和やか（？）だから良いんですけど、その内本編の元凶が発生するところちの身がやばい……

何かあるまでいつも通り倍速します。

恐怖！突然夜中に聞こえるノックの音！

誰ですか……日付け変わってますよ……。しかもウチはチャイム付いてますけど。

あれおかしいね、音が聞こえる方向が玄関じゃなくてバルコニーからなんだが……。マギレコはホラーゲームだったのか、知らなかった…。

え?!?ここ地上6階建てマンションの最上階だぞ?!?

このマンションはすぐ隣に大きなビルがあつたりはしませんから、バルコニーに飛び移るのは無理です。

一般人は絶対にあり得ませんね。泥棒だとしてもここまで登つて来る意味がないです。

ちなみに害を持つ人物が自宅に来ようとすると、神浜カラスネットワークが総出で攻撃して来ます。ちゃんと設定したので間違いないです。

だから危害を加える人物じゃないってことですね。

とりあえず見てみますか。こんな時間に訪ねてくる人は誰なんでしょう。

「あ、本当に弓有さんなの……。夜遅くに申し訳ないの……。」

御園かりん?!?御園かりんじゃないか?!?

なんで? (なんで?)

こんなアリナパイセンの危険度上がる時期にどうして訪問してくるんだ?!?

そもそもなんで詩織ちゃんのお家に來れたんですか？（純粹な疑問）

「それはこの子が……つてあれ？また居なくなってるの……。」

まあ良いですけども……初対面だって不思議な事に会えましたからね……。

で、わざわざ家に來た理由ってなんでしようか？予想はついてるんですけど、もしかしたら違うかもしれませんし、違つてほしいんですが。

某芸術家じゃありませんように……！某芸術家じゃありませんように……！

「また相談したい事があるの。その、私の先輩の事なの……。」

うわあああああああああ!!!御園かりん!!どうして!どうして!!!

落ち着きました……

よくよく考えたらアリナ本人に会ってる訳ではないので、ヨシ！（現場猫並感）

詩織ちゃんのお悩み解決コーナー、走者の華麗な話術で見事解決させてご覧に入れましょう。

「先輩はすごい人なの！私の自慢の先輩なの！でも賞を取ってから元気がないの……好き

な絵も全然描かなくなったの……。」

(スランプに) 入っちゃったかー。

これは、典型的な契約前アリナですね。

審査員の手紙で「Hey you! 世界変える気ないなら作るのやめな!」って言われてスランプに入ったパイセンです。

実際狂気は伝染するっていうし、パイセンの作品が薬にも毒にもなるっていう言い分は言い得て妙ですけどね。

それでその落ち込んでるパイセン見て、かりんちゃんはどうしたいんすか? 人のスランプは下手に口出せないですよ。

一応成功した例外がありますが、その後の本編が崩壊しました。具体的に言うとながが団長と化します。

「すげえよミ(ソノ)カ(リン)は」ここは火星ではない

「私は……いつもの先輩に戻ってほしいの。今のアリナ先輩はなんだか苦しそうな……見えていられないの……。」

じゃあその気持ちを伝えればいいんじゃないっすかね? 天才芸術家って言われてても、まだ現時点で15歳っしょ? 余裕余裕(謎の自信)

ただちゃんとパイセンが飛び降りて入院しないと、マジウスの繋がりが無くなって

しまうので、これ結構お祈りポイントだな？

「弓有さんでも分からないの……？ そうなの……分かったの、私の気持ち伝えてくるの！」
明日平日でしょ？ 詩織ちゃんだから大丈夫だったけど、今から突撃訪問なんてことはやめて下さい……。

急なイベント発生は走者の敵。

それはそうと、さよなら代わりに餞をあげましょう。もう片方はバイセンにあげなよ。

じゃあな！ あばよ！ 今度来る時は昼間で玄関から来な！

かりんちゃんの鎌、宙に浮けるから乗り物として便利だな……。

今日はエミリー先生の相談所に遊びに行こうと思います。

不測の事態で遅くなりましたが、相談所メンバーと交友関係を築くのが今回の小目標です。

相談所のある水徳商店街は確か参京区でしたね。午前中は丁度万々歳のバイトも入ってます。

イクゾー（デッデッデデデデ カーン

ここがあの女のハウス（相談所）ね。

「おーしおりんじゃん！チッスー！」

しおりんとは詩織ちゃんのことかえ？いいでしょう、詩織ちゃんも満更でもないご様子。

ここがエミリー先生の相談所です。やってるだろう時間に来て正解でしたね。

やつぱコネは繋げておくもんですよ。

「こんにちは、弓有詩織さんですよね？ボクは志伸あきら。よろしくお願いします！」

詩織ちゃんの知名度上がってるう！これは交友がスムーズになりますね、間違いない。

あきらさんは組長のチームメンバー第一号です。頼まれると断れない性格から、参院のトラブルシューターとも呼ばれています。

ぶつちやけRTAではガバ製造要員でもあります。面倒事を持ち込む力がすごいんだコレが。

ところで、そこに居るなかさんはどうして固まつてるんですか？

相談所に居るの珍しいっていうレベルではないですよ？明日は天変地異でも起こるんですか？

「あーこりや完全にキャパオーバーしてるねえ……。」

「まあ……うん。それで、詩織さんは何のご用件で相談所に？」
(特に用は) ないです。

「なんかあ、ここらへんにい、相談所あるらしいつすよ？」と聞いてやって来ました。これ、挨拶の飴ね？あげますあげます。

「これが……噂の……。」

「やった！あーし、しおりんの飴好きなんだよねえ。」

「おおー、会う度欠かさず渡してる飴玉は好評だったようです。地道な好感度稼ぎは身を助けますね！」

「遊びに来ただけだから気にしないで大丈夫ですよ。」

「今相談所に居るのはこれで全員ですかね。今日はあきらさんと出会えただけ良しとしましょう。」

結局、なかなかさんが相談してた事って何ですか？走者、気になります！

「あー、うーん。相談っていうのは、あまり人には言えないような事が多いんだ。だから教えられないかな……。」

「そうですね、当たり前的事を言い返されました。」

「だがしかし、詩織ちゃんが聞けないという事は、信頼度がまだ足りないという事！組長との仲はまだまだだったようですね……。」

「いいでしょう！ならば組長の信頼度の為にも、いつでも頼ってきていい的な事を言っときます。」

「これでも結構仲良くなってたようだが、それは勘違いだったようだ…何か悩みがあったら詩織ちゃんにも遠慮なく頼ってくれよな！」

「これ追加の飴ちゃん！オプシオンで渾身の詩織ちゃんスマイルもあげときます。」

「知り合いが悩んでるのを知ると心配してしまうのは、性格『博愛』の性なのだ。人助

けが生きがいのようなモノです。

「……………あ…あり、がとう…ございます……………」

良いって事よ！でも組長は元気なさそうですね。

邪魔して悪かったです、部外者はサッサと他所へ行きましょう。

詩織ちゃんはクールに去るぜ…。

こんにちは！今日は清々しい休日ですね！

空には雲ひとつとしてなく、穏やかな日々を過ごせる事でしょう！

少なくともさつきまで、走者はそう思っていました！

誰だよ屋上でパルクールしながら移動しようぜって言った奴！実際効率は良いんだが！良いんだが！

「突然出てきてアリナに何の用？」

用とか別に無いんですけどねー！走者はまったくもって用なんて無いんですけどねー！

それもこれも『博愛』つてやつの仕事なんだ！

今にも飛び降りようとしている子がいたら、詩織ちゃんは止めに行っちゃうだろ！い

い加減にしろ！

まさか自分が重要なイベントを潰す羽目になるなんて思いませんでしたよ？ 詩織ちゃんのオート操作がヤバすぎますね……。

どうしてこんな不安定なキャラで走ろうと思ったんですか？

「アリナは今から最後の作品を作るんですケド。」

いやだつて見てくださいよ（見えない）！この走者の連打具合を！詩織ちゃんが全然操作権を返してくれません。

このままじゃアリナパイセンが入院してくれなくなっちゃうよ！やめてくれ！やめて下さいお願いします！

「はあ？知らない人にそう言われる筋合いはないヨネ。」

ほらパイセンも苛立つてますつて！正論言われてますよ！今すぐ踵を返して立ち去りましょうよ！ね？ね？

いやでもイベント成功しても、初対面がコレとか今後の標的になる確率が高いんだが……（死亡する可能性が）濃いですか？

「やあアリナ・グレイ。おや？弓有詩織まで、奇遇だね。」

うっわ出た。いつもなら無視したいんですが、生憎今はパイセンが契約してくれないと困るんですよね……。

白タヌキに頼る瞬間が来るとはなあ…。

しかも今回、詩織ちゃんは今人前だから串刺しにする事が出来ません。契約してる事バレたくねえな〜俺もな〜。

「契約を考え直してみないかい？」

詩織ちゃんが珍しく狼狽してますけど、契約前の子に魔法少女の真実言っても、その辛さを知らないから実感湧かずに契約しちゃうんですよ。

それでも叶えたい願いがあんだ！って言うんです。後悔先に立たずとは正にその事です。

特にこのアリナ・グレイに対してそんな事言ったら真っ先に契約するんだが!?!?

やめろお！（詩織ちゃんのソウルジェムが）濁っちゃうかもいけないダルオ！

「ふーん、じゃあ…『誰にも邪魔されないアトリエが欲しい』んですケド。」

パイセンのソウルジェムが出てきましたよ…あく魔法少女誕生の音〜。

って詩織ちゃんのソウルジェム、濁りがスゴイ事になってるぞ!?!? やばいやばいやばい、魔法になっちゃ〜う！

急いでグリーンフシード使わなければいけません。こういう時の為のシヨルダーバツクですよ、左手だけ突っ込んで入れてあるグリーンフシードをこっそり使います。

結構濁りヤバかったですね…さっきの……。

白タヌキ！お前コレが目的だな！魔法少女を増やせる、邪魔な商人を消せる。まんまと利用されましたねクオレハ……。

今度はアリナが身投げしようとしています。

詩織ちゃんはいいい加減手を離してあげてくださいよ！イベント進行不可になっちゃうでしょ！

「いい加減に……してヨネ！」

アツ！待ってそこでそんな事されると……！！

あゝゝ！自由落下！

このままアリナと無理心中ですか!!?

絶対に最後の作品邪魔したから、本編時のパイセン物凄いヘイト向けてきますよコレ

！

ある意味ラスボスのヘイト稼ぎなんて、後方支援型の子がやる事じゃねーぞ！

えつちよつと詩織ちゃん!!?

空中で体勢変えられるの流石ベテランだけど、何でアリナの下側行つたの!!? 何故自分がクツションになろうとしてるの!!? お人好しが過ぎません!!?

ここ大分高いから魔法少女と言えどただじゃすまないですよ！

クツソ！かりんちゃんだったら空飛べるのになあ！詩織ちゃんさつきソウルジエム濁ってたからなあ！

不味いそろそろぶつかる!!!

生きてる……生きてるぞ!!!

体力はミリ、視界は真っ赤、ソウルジエムは濁り、体を見ればグロ画像。

これは………瀕死じゃな？

アリナパイセンは氣を失つてるようです。近くにはパイセンの設置したビデオカメラがありますね。

あ、やつと操作出来るよ詩織ちゃん！お前スキップ出来ないムービーかなにかかよお！

とりあえずこんな状態で生きてる事バレたら、一般人の正気度ゴリゴリ削っちゃうから詩織ちゃんは撤退します！

命が風前の灯火だし、体の修復に魔力使ってる所為で義手くんがない！

でも動けてる辺り魔法少女マジでヤバイなとしか言いようがない。絶対内臓も骨もやられてますよ。

パイセンは多分、後のマジウスが助けしてくれるはず！衝撃による傷は詩織ちゃんが代

わりに受けたので、アリナは見た感じ外傷ありません。

では撤退！撤退です！一刻も早くこの場から離れます。近くに治癒系の魔法少女いないかなあ……。

今回はここまでにしようと思います。

ご視聴ありがとうございました。

▶ ?

水徳商店街の角にあるスペース。『エミリーのお悩み相談所』と書かれた看板を前に、ボク達は雑談に興じていた。

今日は相談しに来る人居ないね、なんて言つて誰か来ないか待つてたんだよ。

そこに念願の相談客が現れたんだよね。

すぐくよくく見知つた人、なんなら今日も学校で会つた人だったんだ。

常盤ななか、ボクのチームのリーダーをしている人。

ついこの前、とある人に恋してる事が発覚してから、ボクは『常盤ななかの恋を見守る会』に所属してる。

肝心のななかは恋を自覚してからというもの、日に日に恋を拗らせてきている。

拗らせ過ぎてチームにまで助けを求めてきた。ボク達の会は適度にちよつとしたサポーターくらいしていくつもりだよ。

いつもキリツとしてるから忘れがちだけど、この恋に関する時だけ年相応になるのが最近のななかの可愛い所だと思う。

そしてここに来るといふ事は……まあ、そういう事なんだろう。

「恋のぐ相談です。」

そういう風にななかは言い切ったけど、すぐに顔を赤くさせて、手をそわそわと動き始めた。

最早照れる姿は頼れるリーダーではなく、一端の恋する乙女である。

勿論の事、先生は恋バナに食いついた。

攻略法とかを色々話してたけど、「そういうえば相手は誰?？」という重要な事を聞き忘れていた。

ななかは良く出来た人間だと思う。普通に生活しても引く手数多だろう。

でもななかの恋の難易度が高いのは、恋してる人があの人だから。

弓有詩織さんっていう方。

その名前を聞くと、先生は「ええ！しおりんなの!!？」と驚いていた。しおりん？まあとにかく知り合いだったらしい。

詩織さんは魔法少女界限で有名な人だ。有名ではあるけど、どこで何してるかとかは全然分からない。

だから実在の人物だっと思ってる人が意外と少ない。神浜市魔法少女間の噂、都市伝説として語られる事が多い。

挨拶代わりに飴を渡してくれるらしいし、グリーンフシードも譲ってくれるらしいとか。なんとか。知ってる人に聞いた話も曖昧なのが多いけどね。

すごく優しい人だからこそ、人の好意には疎いみたいだった。

相手が詩織さんである事を知ると、先生は目にも分かりやすく唸った。

あの人の攻略は難しいって事。

それでもボク達はななかの恋を応援したい。

すると、また新しく相談所に人が来たんだ。

毛先にかけて色が薄くなってく黒髪に、眠そうな緑色の目。

まさにさっきまで話題の中心人物だったその人がここに現れた。噂をすれば……って

やつなのかな。

何回か話を聞いたり見かけたりする事はあっても、ボク自身彼女に会うのは初めてだ。実際に相対してみると、すごく良い人そうなおーラを放っている。

詩織さんは相談所の事を小耳に挟んだみたいで、どんなところか見に来ただけらしい。

いきなりの意中の訪問者に、ななかはピタリと体を停止してしまった。

心の用意をしてから会わないと、脳の処理速度が追いつかなくなるみたいだ。

表面上はいつものキリツとした表情を保っているけど、まだほんのり耳が赤い。慣れるとこから始めないといけないなあ……。

相談中に押しかけたお詫びに、と詩織さんはボク達に飴を一つずつくれた。よく話に聞く飴玉配りである。

うん、良いお姉さんって感じがする。

と思つてたら、ななかの悩みについて聞かれてしまった。鈍感というよりか天然なのかな、詩織さんって……。

他人の相談内容は言えない事を伝えると、「そう、だよね。」と言つて詩織さんはなにやら考え込んだ。

そしたら突然バツと顔をあげて、ななかの方に近づいたんだ。座ってるななかに合わせてしゃがむと、その手を取って飴を握らせる。

「私にも…頼っていい、からね。」

そしておまけとばかりに微笑んだ。

構図がさながら、お姫様に跪く騎士みたいな事になってる。狙ってやった訳じゃないなら、やっぱり詩織さんは余程の天然なんだろう。

問題は現在恋煩い進行中のななかに向かつてそれをしたって事なんだ。

ほら見てよ、今まで目を閉じて照れを誤魔化したのに、思わぬ出来事で目を開けちゃった。

あ、下を向いた。照れつつもきちんとお礼は言えたみたい。

立ち上がった後、詩織さんは「お邪魔しました」と言つて、去り際にななかの頭を撫でて帰ってった。

今日は一連の行動がクリーンヒットしてる。

まさか相談するためにやって来た相談所で、こんな事になるなんてななかは心底思わなかっただろう。

「再起不能だね。」

うん、今日はもう駄目なんじゃないかな。

悩みの解決する相談所なのに、余計に悩みを深刻にさせてしまったのは、なかなかとても申し訳ないと思う。

そのすぐ次の日。

ななかを除いたボク達、『常盤ななかの恋を見守る会』はファミレスで緊急会議を開いていた。

理由は勿論、昨日の相談所での出来事。

案の定、他のみんなもななかの事を気の毒に思ったみたい。

常盤ななかの恋路は長く険しい道のりだと、ボク達は改めて認識したのだ。

弓有詩織さん。

間違いなく強敵である。

『大丈夫なの……？』

◁

『へーきへーき！大した事無いつて！』

『よかった、元気そうだね。』

『そうだ！　　ちゃん、ちよつとこつち来てよ！』

『なに？見せたいものと……わっ！』

『捕まえた！』

『まったくもう……びつくりしたあ。』

『ね！こうしてるとき、あれみたいじゃない？』

『病める時も健やかなる時もってやつでしょ？』

『でもずっと一緒にいるんだもん、同じようなものだよ!』

『はいつも私の事ばっかだね。』

『願い事も関係ないよ!』

『まつすぐだなあ。』

扉の向こうから聞こえる笑い声。

私よりも年上の女の子が楽しそうに話してる。

ここでその人達の話聞くのが、最近の密かな楽しみになってきた。盗み聞きって悪い事なんだけど……。

その人達は休憩所とか病院近くの公園で時々見かける。話した事なんてないし、名前

も知らない赤の他人。

一人は綺麗な銀髪で黄色い目をしてて、もう一人は黒髪で宝石みたいな青い目が印象的だった。

いつも仲が良さそうで、私もそういった友達が欲しいなって微笑ましく思ってた。でも数年前から見かけない。

入院してた人の容態が良くなったのかな。良い事なんだけど、少し寂しくなっちゃった。

そういえばずっと前に銀髪のお姉さんから飴を貰ったんだ！

光にかざすとキラキラ光って、宝石みたいな淡いピンク色の飴玉。

『お気に入りの飴なんだよ。』

そう言っただけ私の頭を撫でたお姉さんは、暖かい笑顔を浮かべた。

甘くて舌の上で転がすと、あつという間に無くなった。

その事が今でも印象に残ってる。

私、お姉さんみたいな優しい人になりたいな。

Part 8 見所さん!?!の居場所

それは私にとって余命宣告に等しかった。

あのフルガールから渡された審査員の手紙には、私の輝きは15で尽きるような才能という事。

思えば一度もちゃんとした作品を作れていなかった。衝動的に描いては中身なんて一切無かった。

有り体に言うと、アリナはスランプに陥っている。

『生と死』、それが自分のテーマだったはずだ。しかしこうして文面に書き出されると、確固たる意志が揺らいできた様に感じる。

インスピレーションのために旅に出たりした。結局のところ、帰ってきてもままたらぬ虚無感を拭えなかった。

「アリナ先輩…どうしたの?最近元気がないの…。」

遂にフルルガールにまで最近の様子を指摘される。

数カ月前のやたらハイテンションなのは何処へ行ったのか。今はアリナの事を心配するあまり、漫画を描く気分じゃないらしい。

漫画とは外に向けて発信するもの。

つまり、このフルルガールの漫画にも、それなりのテーマがある。

何故漫画を描きたいのか。その答え。

『描いた漫画を読んで、元気になって欲しいから』

『元気になる漫画をみんなに届けたいから』

あのフルルガールでも持つてるものがアリナにはない。単純明快、事実だった。生まれながらの劇薬しか作れない。

それがアリナ・グレイという15歳で輝きを失う芸術家。それが私だ。

理由は分からないが、ゾクゾクとしたものを感じた。

芸術には酔いが必要だと、何処かで聞いたような気がする。ならばあの手紙は酔い覚ました。

自分が空っぽだと気付くと、必然的に今までの作品の輝きも褪せて見えた。

アーティストが死ぬ事は作品が死ぬ事と同義。

ならアリナは、アリナ・グレイは全てを壊そう。そして全てを終わらせよう。

自分も含めて。

「本当に君はそれでいいのかい？」

何者かに声をかけられて振り向く。

そこに人の姿はなく、居たのは白いイタチだけだった。とうとう自分の頭もおかしくなったか。

イタチが言う。契約して魔法少女になってほしい、と。なんでも一つ願いを叶える、と。

嫌味かと思った。願いなんて無い。アリナ・グレイの考えは獣程度には理解できない。

全てをブレイクして、全てをエンドする。

それがラストアートワーク。私の最期。

晴れた休日だ。

鼻歌交じりにハンマーとノコギリを持った。目指す場所はただ一つ。

作品のある場所。作品展が開かれる美術館。

輝きが尽きるなら、クリエイターとして死ぬのなら。

作品は壊す。その亡骸達は今の自分を表現してるみたいだ。まもなく自分もそれらと同じモノに成るだろう。

最後の作品は……

腕を掴まれる。

アトリエから屋上現実に引き戻された。

グラデーションがかかった黒髪、水彩のような緑色の目。おそらくフルガールより少しだけ高い程度の身長。

どこかの学生だろうか、見つかるなんて最悪だ。しかしもう作品を撮る準備は整っている。

「……何してる。」

「アリナは今から最後の作品を作るんですケド。」

腕は離されない。

どういう意味か最初から気づいていたのだろう。眉間には皺が寄るばかりだ。

どうせ見知らぬ人にとって、学生が一人飛び降りる程度、何か影響を与える様な大したものではない。

そんな事知っても私を止めようとするなんて、まるでフルガールと同じくらいの善人くらいだ。人間が出来すぎている。

どうやら目の前の女もそれらと同類らしい。

拮抗状態で睨み合うだけ。

アリナはラストアートワークを辞める気はないし、女もアリナの気がなくなるまで腕を離す気はない。

そこにこの前の白いイタチがやってきた。

それによると邪魔なコイツは弓有詩織という名前のようだ。

弓有詩織は白いイタチを見ると、一言「失せろ」とだけ言う。表情を見るに、アリナ

に契約をして欲しくなさそうだ。

(へえ……面白そうなんですケド。)

そうして私は契約した。

どうせならラストアートワークに契約も混ぜてやろうと思った。願い事にはコイツみたいな邪魔が入らないようなアトリエを。

単純に言えばコイツへの嫌がらせ。

「……………」

腕に力が入った。

契約をすれば弓有詩織はその目を見開く。そして微かに感じる後悔。

でもそれだけだ。

依然としてコイツは手を離さない。

もし神というヤツが居たら、神はアリナに作品を満足に作らせる気はないらしい。

……ラストアートワークですら? 巫山戯るなよ。

「いい加減に……してヨネー！」

強引に振り払ったつもりだ。

しかし予想以上に力の入った弓有詩織の手は離れなかった。

そして私は反動で、コイツは引つ張られて共に空に堕ちていく。

本当に最悪だ。

アリナ・グレイというアーティストは心ゆくまま死ぬ事すら許されない。

「……………ツ！」

腕を引かれる。

あろうことかコイツは自分をクツシヨンにして、アリナの事を助けるつもりだ。

この高さでは二人とも死ぬのにな？どこまでいっても馬鹿なんじゃないのかコイツは。

アリナには理解出来ない、したくもない。

上下が逆さになって、さつきと体勢が逆転する。弓有詩織を見下ろす形になった。

「ハハツ……」

腕を引つ張られる。

アリナよりも小さいコイツに抱きかかえられるような形で落ちていく。感じる違和

感。

自嘲気味に笑った声はやけによく聞こえた。

こっちは最悪な気分なのに、何故巻き込まれたお前の方が満足そうなんだ。
緑の視線が交差して輝く。

やがて衝撃を受けて暗転する。

気がつけば病院のベッドの上。

長い間夢を見ていたような気分だ。自問自答を繰り返していた。

結局アイツの思惑通り生き残ってしまったのか？目覚めたばかりの脳でそんな事を考える。

思わず溜息をついた。少なくともアリナはこうして生きている事が現実だった。

「アリナせんぱーい!!!」

聞き慣れた声の方に目を向けると、目を滲ませたフルガールが声をあげていた。いきなり聞こえた大声に耳が痛くなる。

後輩からのちよつとした説教。それはともかくとして、とても泣きつかれた。

「言いたい事があつたけど、長くなるから先輩が落ち着いた頃にするの!」

そう言つて見舞いから帰つていく。命の大切さを学んでほしいと、フルガールが気に入つてゐる漫画を渡された。

何かを忘れてゐる気がする。

次の訪問者は倒れてる私を見つけたらしい小学生達だった。

壊したはずの作品展は知らない内に人気になっていたらしい。自分が作品を壊してゐる時の写真も渡される。

「わたくしたちとね、お話ししよう!」

助けた見返りはその程度しか求められなかった。小学生らしいと言えらしいのだろうか。

あの時設置していたビデオカメラは回収したのか、と聞く。その引き出しに入れて

ある、と返された。

開ければビデオカメラが入っている。充電は半分ほど残っていた。

「そういえば周りには血が沢山あったのに、お姉さんは外傷一つ無かったんだ。不思議だよね。」

ちよつと待て?もう一人居なかったか。

アリナのラストアートワークを邪魔した憎たらしい奴の姿は何処へ消えたのだろうか。

小学生達に聞いても、あの場に居たのは私一人だけだったようだ。そこに死体があった訳でもなく。

一通り話し終えて、小学生達が去る。

タイミングを見計らって、アリナはビデオカメラを取り出した。

着地の瞬間を捉えたカメラには、どのように写っていただろうか。満足がいくような作品じゃない事は確かだろう。

一番新しい記録の再生ボタンを押した。

……その光景に目を奪われなかったと言えれば嘘になる。

弓有詩織はあの高さから落ちて生きていた。死にかけてではあったが。

気を失った私の容態を確認すると、周りの目を確認してそこから去っていく。

何処までも善人の皮を被った化け物だ。本当にこれが同じ人間なのか？

抱きかかえられた時の違和感にも気付く。

肉体のアンバランスさに比べて、あまりにも平均的な片腕。それは何処かへと消えて、あつたはずの位置には袖が揺れているだけだ。

そしてそのままレンズ越しの緑と目が合う。

それは死生きながら死んでいたにながら生きていた。

絶望してる訳じゃない。けど希望に満ちている訳でもない。
その緑目は正しく生と死が混ざり合った水彩画。

この状態の弓有詩織を作ったのは私だ。じゃあコレはアリナのアートなのだろうか。
今までのテーマを体现したラストアートワーク。予想外の乱入者は最高の画材だったらしい。

「アッハ……！」

今までに無い程ゾクゾクする。

最早アートなんて関係なしに心が弾む。

アリナの作品は自分すらも狂わせる猛毒だった。

▶ ?

先の不安を感じるRTAはーじまーるよー

前回は某天才アーティストと（無理矢理）一緒に飛び降りました。

なんとか生きてるけど、瀕死状態です。見てくださいよ！この真っ赤な画面！死んじやう死んじやう！

今回はその続きからなんですが……

一般人に見られないよう移動してるから、誰にも会えてない！もう夕方になっちゃったよ……。

自然治癒を待ちます……？いやでも、この損傷だと動けるまで数日かかりますかね……。

あつ待つて待つて詩織ちゃん！ここで気絶しないで！下手したら見た子が魔女化する！

あゝ出血多量なんじゃゝゝ
病院には……病院には運ばないでくれよ……。

「………目が覚めたかしら……？」

やちよさん！やちよさんじゃないか！

そして……は……みかづき荘！

あれ腕付いてますね…：てつきり無いままだと思っただけですけど。まあいいでしょう。
 「もう3日も目を覚まさなくて…」

そうですか3日…：3日あ!!??

おーう…：結構経つてますねえ…：。その間イベントやら大丈夫だったんでしようか
 …。

でも助かっただけヨシ！（現場猫）

「あのケガはどうしたのよ…：？」

え？なんであんな重傷になつていたか？

いやうちよつと飛び降り志願の子とお空にランデブーしちゃっただけです。ちよつと後のラスボス格の芸術家とね。

アレは操作効かないガバの所為でそれ一番言われてるから。

「はあ…：お人好しが過ぎるわ…：。」

走者もそう思います。

『頑固』『博愛』の組み合わせが強すぎるんだよなあ。でも、（再走する気は）ないです。

お邪魔して悪かったですね。詩織ちゃんはお家に帰ろうと思います。体力ゲージも回復してますから…：つてうおわ！

「まだ内臓の方は治ってないわよ…：しばらくはここで安静にしてください。」

わあ、遂に走者もみかづき荘で過ごす事になりました。思ったよりも内臓系がやばかったみたいですコレ。

見た目もう大丈夫なんですけどねえ、なんでですかねえ。まあお言葉に甘えましよう。

突如始まった同居生活！外に出る事を許されない走者のチャートはどうなるのか！！
？

次回「タイムは二度死ぬ」乞うご期待！

治ったのでは？やちよさんこれ治ったのでは？どうですかね、もう帰れますかね？

「…大丈夫そうね。」

お墨付き！やったぞバイト戦士詩織ちゃんここに復活だ！

というか完全に治るまで拘束されるとは思いませんでしたよ。

やちよさん何だかんだで面倒見良いから、ちゃんと治るまで許してくれませんでした。バイトしようとしたら全力で止めに来ましたし。

これキャラによってはヤンデレ化する可能性ありましたね。友達レベルでもあの重

傷なら監禁もあり得たでしょう。

つくづくやちよさんで良かったのでは…?

それじゃーなやちよさん! やつと日常に戻るぜ!

「二度とあんな人助けはやめなさい。」

アツハイ…でもアレは詩織ちゃんのせいなんだよなあ……

久しぶりのバイトだあ!

生きてるって感じします。でも一応やちよさんに脂っこいものとかドクターストップかけられてます。

だからごめん鶴乃ちゃん。バイト復帰早々新メニューは食えないよ。あらかじめ言っておく事はとても大事!

「ううん大丈夫だよ! さすがに試食してもらおう事は出来ないって思ってたから!」

鶴乃ちゃんはいいい子だなあ……。

何度かお見舞いにも来てくれましたし、お姉さんが頭を撫でて差し上げましょう。やちよさんは大部分はぼかして説明してくれたようです。さすやち。調整屋とかに根回しして伝えといってくれました。

その休んでる間、商人活動はどうしたかつて？

義手くんを酷使しましたよ。信用を落とすわけにはいきません。強さの比率を2：8にすれば弱い魔女には十分十分。

「……詩織はさ、優しいね。」

鶴乃ちゃんが珍しくセンチメンタルです。

どうしましたか？遂に詩織ちゃんに甘えてくれるようになったんですか？それだととても助かりますけど。

飴さんもあげますよ、今日はお客さん全然来ませんし、楽にしてて良いですよ？

魔法少女はストレス溜めすぎるとやばくなるからね、仕方ないね。

「ううん、何でもないよ。やっぱり優しいなって思ってる。」

何でもない、で抱え込むなお前よお！ほんまそういうトコだぞ！

誤魔化す言葉が出た時は追求してもはぐらかされます。鶴乃ちゃんの鋼メンタルが弱音を吐く事を許しません。

これがキレーションランドのガバに繋がるんだよなあ……。

良いところまで来てる気はするんですが、あと一步が繋がらない気がします。この件は忘れときましよう。

「今日は来てくれてありがとうだね。」

おうともさあ!バイトがある限り、このバイト戦士詩織ちゃんは倒れはせんぞ!

日課も出来るしな!しばらくは様子見で遠距離戦法でしようがね。

また倍速の日常に戻るのだ……。

おや?義手くん直々に情報くれるの珍しいですね。

なになに、見慣れない魔法少女が3人?

それってどんなのですかね?

へえ…おもしろー女（達）……

あゝ遂に来ましたねえ！

恐怖のマルチエンディングイベント『そしてアザレアの花咲く』が……

短いですがキリがいいので今日はここまでにしようと思います。

ご視聴ありがとうございます。

▶ ?

鴉の鳴き声を聞いた。

魔女を倒した帰りだ。もうソロで活動するにもすっかり慣れてきた頃で、今日の分はこれで終わりだと切り上げる。

そこに何やら慌てたように飛んできたのが、見覚えのあるカラス。弓有さんの使役している鳥だ。

「……う？どうしたのかしら。」

私が気付いたと分かると、カラスは一目散に低空を飛んでいく。

明らかに道案内をしてる。

急ぎの用事は無いから、そのまま私は後を追う事にした。

その決断は紛れもなく正解だった。

たどり着いた路地は、微かに血の匂いが漂う。薄々感じていた嫌な予感は的中したみたいだ。

「ツ！弓有さん!?」

そこにいたのは弓有詩織という知り合いの魔法少女。

恐る恐る脈を確かめると、瀕死の状態ではあったが息をしていた。急いで病院に電話を掛けようとしたが、彼女のカラスに携帯を弾かれる。

主人を助けたいんじゃないのか?……と思ったが、それは弓有さんの小さな声が否定した。

「……びよう、いん……は……だめ、だよ……」

そして気を失うと、先程まで居たカラスが消える。

出血が酷い……私の手に負える様な状態じゃない。魔力もほとんど残ってなさそうだ。

ソウルジェムも濁っていたが、幸いグリーンフシードは弓有さんがいくつか常備しているから一先ずもつだろう。

行く場所は…

八雲みたまは急な用件に対応してくれた。丁度予約が入ってなかったらしい。

「見てみたけど、魔女の仕業とかじゃないみたい。でも身体はしばらく安静にした方がいいわ。」

いつもの間延びした態度は消え失せて、そこにあるのは只々真剣な表情のみ。

弓有さんのケガはそのうち治るモノだそう。

しかし、一番ダメージを受けているのは内臓のようで、激しい運動をしてはいけないと忠告を受けた。

「……感謝するわ。お代は…」

「お代は大丈夫よ、彼女には恩があるもの。」

ここにも貸しを作っている。

前々から思っていたが、弓有さんは意外と行動範囲が広い。一体どのような時間の使い方をしているのだろうか。

彼女に対する疑問が増えるばかりだ。

弓有さんを抱えてみかづき荘に帰る。

同じ歳だと聞いていたが、実際に抱えると想像以上に軽く、スレンダーというよりは不健康そうな細さだった。

使っていない空き部屋に寝かせ、血を拭って私の古着に替えさせる。サイズの問題で今の私の服は合わなそう。

思わず連れ帰ってしまったが、さてどうしたものか。

まずは胃に優しいものを用意しとくべきだろう。

彼女の荷物を移した際に、小さなノートが落ちてしまった。使い込まれている事から愛用の手帳であるらしい。

気になって中を覗く。そこには1日毎にびっしりと書き込みが入っていた。

バイトの予定。会った人。魔女の討伐数。

とにかくその日の内に起きた事を書き留めている。中には『猫がいた。可愛い。』と言った取り留めのない事も。

なるほど、道理で不健康な体つきに眠そうな眼をしている訳だ。睡眠時間を無理矢理削つてまで、他の人達を助けているのがよく分かる。

これは起きたらすぐに動こうとするだろう。

それから3日経つ。

目覚めた弓有さんは最初、状況が掴めていなかった。そのため何度か質問をされたが、次第に納得して感謝を言われた。

ここまで大怪我をした理由は、またしても人助けのようだった。飛び降りようとした子を庇って一緒に屋上から落ちたらしい。しかも自分をクッション代わりにしてまでその子を助けたとか。

いつか身を滅ぼすのではないかと心配になる。

「大丈夫だよ」と言つて弓有さんは動こうとするが、まだ内臓の方は治っておらず、重い咳をした後に吐血してしまった。

しばらく安静にするように伝え、一時的にみかづき荘の同居人が増える事となる。

一緒に過ごした感じを言うと、本当にそこに居るのかすら不安になるくらい静かだった。

それでも今までの事を引き続きやろうとしていたから、思い切つて弓有さんの外出を禁じた。

最初の数日は学校に欠席の連絡を入れて監視していたが、そのうち私が曲がらない事

が分かると外出は諦めたようだ。

一応休日到时々、鶴乃に見張ってもらうように頼んでいる。胃にきついだろうから、万々歳のデリバリーは控えるようにも言つてある。

部屋の窓からカラスを飛ばしているのには、目を瞑る事にした。

彼女を観察するのが最近の私の趣味になりつつある。今までのみかづき荘の住人に比べると、どうも彼女は気まぐれな猫のように感じる。

私の事を師匠と押しかけてくる鶴乃と比べているからかもしれない。こつちが猫ならあつちは犬だ。

そしてまた何日か経つて奇妙な同居生活は終わりを告げる。

弓有さんのケガがほぼ完治したからだ。今後二度と今回の事を起こさないように忠告して見送る。

別れ際には相変わらず飴を貰つた。

みかづき荘は元の通りになつたけど、1人減つただけで慣れたはずの喪失感が戻つてきた。



「あ、これどこに置けばいい？」

「それは……ってあれ、その手紙誰から貰ったの？」

「え、分かんない！返事を書いたら返してくれた！」

「どうしたの？……ああ、それ私も貰った事あるわ。」

「あはは……実はアタシも貰った事あるんだよね。」

「2人は返してくれる人知ってるの？」

「そういえば知らないよね。」

「私もなのよね。結局誰なのかしら……」

運命に巻き込まれる魔法少女がここに3人。
差出人不明の手紙はさながら招待状のように。

は静かに見守っている。

Part 9 アザレアのガバ

遂に來ちやったRTAはーじまーるよー

前回のあらすじ。

詩織ちゃんの治療期間が終わりバイト現場に復歸したが、神浜市に新たな魔法少女が3人來た事を知る。

なんで義手くんが直々に情報を持ってきたかと言うと、魔力を感知出来るのはカラスネットワークの中で義手くんのみだったからみたいですね。

野生動物じゃなくて使い魔ですから。やっぱ頼りになるなあ。

今回はその続きからやっついていきます。

そしてこの3人の魔法少女。言わずもがな、アザレア組の3人です。

これは今回からやってくイベント、『そしてアザレアの花咲く』が開始される予兆です。恐怖のマルチエンディングが来ちゃうよぉ〜！

ここでは絶対にTRUEENDを迎えなければなりません。そうでもしなきゃアザレア組が退場するだろいい加減にしろ！

大半はあやめが、次点で葉月が亡くなりますが、ごく稀にこのはさんも亡くなります。走者が印象に残ってるBADENDは、このはさんが外の人達に絶望して、「死ぬしかないじゃない！」の錯乱マミさんのように心中しちゃうENDです。

殺されるならせめて家族の手で……と優しく殺していくハイライト無しこのはさんが見れるぞ！

しかし、見たい方は仁義なき神浜状態で魔法少女の真実（主にソウルジェム関係）を教えなければなりません。

特定層の方向けにアザレアBADEND集とかいうのもあるらしいですね…絶望感がすごい（小並感）

アザレアイベントの攻略ポイントは13歳の友情パワーをこのはさんにぶつける事

です。出来れば保護者達とも仲良くさせていたただきたいんですけども。

今はまだ大丈夫なんですが…魔法少女が次々昏倒していく事件の噂を聞いたらバリバリ行動しなくてははいけません。

予兆発生から予備期間はあるんですけど、ある時点から展開が加速するので、いやあ〜キツいです。

「あやめーっ！」からの『あち死』エンドを回避する為に頑張りましたよ！

ではまず始めにななか組に接触…と言いたいですが、まだアザレア組は神浜に來たばかりなので、その前に少しだけする事があります。

どの魔法少女よりも早く詩織ちゃんが3人に接触する事です。

アザレア組とななか組が鉢合わせる前にね。

へいへいへいそのお嬢さん達見ない顔だねえ！ちよつとお姉さんと少しお話ししな〜い？

「……………誰？」

うちはこういう者なんすけどお、ここら辺にい、新しい子達いるって聞いたんです
があ……………君達つすよね？

現時点で彼女らはまだ猜疑心を全開にしてないので、友好的に接すれば割と協力関係を
持てます。協力というか不可侵条約みたいなもんですけど。

詩織ちゃんが縄張りある系魔法少女じゃないから成せる技ですよクオレハ…………

飴ちゃんご連絡先渡しときますねえくなんかあつたら連絡していいですよ。こ
こで相手の連絡先を聞くのはやめましょう。信頼度とかが落ちてしまいます。

どうせ情報収集の時に必要になるダルオ！良いから貰ってけって！

魔法少女は基本的に善性が多いので、押し付けた連絡先を捨てようとしません。この
アザレア組も同様なので、それを利用します。

「まあ、貰つとくだけ貰つとくよ。」

「……………。」

なんかすごい保護者の青い方から訝しげに見られますが気にしない気にしない。
RTAのプレイキャラに不審者はありがちな行動です。

んじゃそれだけなんで…………

「待って、あなた何処かで…………。」

何ですかね、また何かガバ起きますかね。

というかここでそう言われるの普通無い…無くない？

アザレア組とは初期交友関係持ってなかったですよ？接点無いなら別にそのセリフは発生しないはずなんですけど……。

「ハ」のほう？」

「………いえ、人違いだったわ……。」

あゝ良かったんじゃ〜。

帰っていい？帰っていいですよ？良い？よし、帰りましょう！あばよ！

んー何ですかねえ、詩織ちゃんを見かけた事があるんでしょうか？

確かに交友関係にカウントされるのは直接会って話をした人だけなので、そうだとすれば辻褄があうんですけども……。

でも何処かで見たって言われるほど印象に残る事は無いですよ。ちよつとしたガバの気配が漂ってきた気がします。

しかし、某芸術家との心中未遂に比べれば、この程度のガバは大した事無いです。続行だ！

神浜で昏倒事件の噂が広まり始めました。カラスネットワークさまさままだな！

その影響で魔法少女退治行かない魔法少女が多いから、金稼ぎが良い感じですねえ。

必然的に詩織ちゃんが狙われる確率は上がりますが、ソロだと噂が広まらないと思ってるのか、地味に確率は下がります。

若干やプラスって感じだな！

「そういえば商人さんはこんな噂聞いた事ありませんか…？」

お？モブちゃんやるじゃねえかオイ！

これは特定の時期に噂が蔓延つてると、一般通過魔法少女からお話を聞かせてもらえるイベントです。

モブ魔法少女達からの信頼度が高ければ高いほど、詳細なお話を持ってきてくれます。

今回はドンピシャで魔法少女昏倒事件の噂です。核心はさすがに無理ですが、これで詩織ちゃんも魔法少女から話を聞けましたね。

この魔法少女昏倒事件は噂だけで、実際には誰一人として倒れてません。倒れたとしても数秒で目を覚まします。

本来の流れ通りなら、ももこがちよっかい出されるだけです。

ただ混沌さんに遊び感覚で目をつけられると、ネームド及びプレイキャラが数日間気を失ってしまいます。

さつき言った狙われる確率も大概これが原因です。呼び名も混沌だし、どつかの邪神みたいだなお前な！

使い魔型はやろうと思えば抜け道があるんですが、基本的にプレイヤーが標的になつたらリセです。(2敗)

それでは解決の為に奔走しましょう。

まずこの噂が出回ったという事は、アザレア組とななか組が接触したという事です。ですのでお電話して、お話を伺いに行きます。

問題はななかさんの信頼度とかなんですけどね。

相談してくれないという事はまだ足りないと思いますし、なにより組長の相談なんてそうそうありません。

……………出ませんね。

組長にしては珍しくなあい？ 魔女と戦闘中なんでしょうか、また後で連絡しましょう。

義手くん2号！この封筒ななかさんに届けといて！

じゃあ次はやちよさんに連絡しときましょう。イベント期間中、七海やちよと十咎もここが会うと強制的にももこがぶつ倒れます。

事をスムーズに進める為に、やちよさんには魔法少女昏倒事件の噂を教えときましょう。事前準備ってやつです。

あ、もしもしやちよさん？ちよつとお話があるんですけど……少しお時間よろしいですかね？ありがとうございます。

昏倒事件について説明します。巷でこんな噂が流行ってるらしいですよー。

ええ、はい……え？聞いた事ある？もう既にももこが倒れた？早くなあい？

これは思った以上に展開が早いですね……。本当ならももこさんが倒れるまであと数日はあるんですけど……。

念のために一回13歳組を確認しに行った方がいいですね……。

「ところで、最近神浜に来た魔法少女を知ってるかしら？」

アザレア組の事ですな。

とりあえず現時点でのアザレア組の疑いを晴らさせる為に、やちよさんは接触させと
きましよう。

なんなら今から会いに行きますか？案内しますよ？

こっちは相手の連絡先知らないけど、神浜カラスネットワークがある限り、何処にい
るかは詩織ちゃんに筒抜けなので…。

OK？じゃあみかづき荘まで迎え行くんで待つててください。

ここで接触させるとこののが神浜を出て行く決意をしますが、葉月が情報収集という
名目で時間稼ぎしてくれます。

その間に13歳組を確認します。

少なくともかこちゃんは「あやめちゃん友達になりたい」と決めてるので、説得の
場に夏目かこを欠かさないようにしましょう。

せっかくゲーム側が短縮してくれたんだから、利用しない手はねえよなあ!!？

義手くん2号！アザレア組どこいるか探しといて！

「それじゃあ行きましようか。」

アザレア組は……魔女狩り中ですね。結果が解けるのを待ち伏せしましょう。こつちですこつちこつち。

オラア！事情聴取の時間だア！交渉人、遊佐葉月を出すんだなア！こつちは西のドンが会いに来とるんやぞ！

「確か……弓有詩織さん、と誰ですか？」

西のドン、七海やちよさんです。

葉月から情報聞いているようで、納得されたようです。ところでやちよさんは何の用でアザレア組探してたんですか？（すつとぼけ）

「魔法少女が次々と倒れていく事件で話があったの。」

「あ、あちしたちじゃないよ！」

アザレア組じゃないのには同意します。

ここからはやちよさんがももこぶつ倒れ事情を説明してくれるので、詩織ちゃんは口を挟む必要はありません。

気を休める為に棒付きキャンディーでも舐めて、義手くん2号と戯れます。今日の飴はプリン味です。

今更ながら、キャラの好きな食べ物の効果について解説します。

メニユーで好きなものに設定されている物を食べていると、キャラの気分や調子が上

がり、結果的にステータスに微量のバフを貰えます。

一定時間ソウルジェムの濁りが僅かに抑制される事もあります。こちらは大好物に設定されている食べ物でしか発動しません。

しかしこのバフはキャラの気分で変わるような軽い物なので、直ぐにバフが取れやすいのが欠点です。

そのため、好物バフの恩恵は戦闘に向かず、あくまでフレーバー的なモノとして扱われる事が多いですね。

後は動物と触れ合う事の利点を説明します。

動物は可愛い。癒される。以上です。

ぶつちやけ先程言った好きな食べ物と効果は大差ありません。敢えて違う点を言うなら、こちらは消耗品ではない事です。

でも癒される動物とかじゃないと、稀にデバフを受けたりします。レナちゃんがかえでちゃんのペットをキモイと思ってるようにね。

使い魔は実質ペットなので、一応義手くんにも触れ合い判定があります。

でもメジャーな部類に比べたら…ねえ？

いい子は野生に触れたら、手洗いうがい予防をちゃんとしような！その点、魔法少女の使い魔は魔力で構成されてるので安心安全！

ほーれほれ義手くんここがええんじやろ？よーし、よしよしよし……ハツハツハ
愛い奴め！

「話は終わったわよ弓有さ……弓有さん？」

わあ、すつごい皆さんからジト目で見られてる。あやめちゃんだけは目キラキラさせてますけど。

そりや（真面目な場面で飴舐めながら動物と戯れ始めたら）そう（みんなから何やってんだコイツと思われる）よ。

それで話の結果はどうなんですか？やっぱリアザレア組は犯人じゃないっすかね？
「え、ええ。魔力パターンが違ったの、だから心配ないわ。」

良かったねえ、これ恒例の飴ちゃんです。

今回は棒付きキャンデーですよ！なんと今だけ無料で貰えちゃうんです！

地道に好感度稼ぎは身を救うから、出し惜しみなんてするものか！

それじゃ配った事だし、家に帰りますかねえ。やちよさんを家まで送り届けて、この場から退場です。

今回はここまでにしようと思います。
ご視聴ありがとうございました。

▶
?

とある昔の事を思い出した。

きつかけはあやめが持つてた差出人不明の手紙。聞けば葉月も同じような手紙を貰った事があるらしい。

手紙は私も貰った事がある。

貰ったのは相当前の事だったから、あまり覚えていなかった。多分探せば今も大切にしまつてあると思う。

少しだけ高そうな便箋に、誰かが書いた手書きの文字。

手紙の主は今も分からないまま。それはあやめだつて、葉月だつて同じみたい。

二人に手紙の内容は明かしてない。

差出人不明の手紙を貰った事は同じだったけど、内容がわざわざ教えるようなモノじゃないからだ。

葉月も中身を話そうとはしない。あやめの持つてる手紙を懐かしそうに見ているだ

け。

理由は分かつてる。

つつじの家に馴染めていない時、精神的に辛かった時期に送られてきた。

頼りになる親戚も居なかった私に、どういう人が送ってきたのだろう？と疑問に思ったのをよく覚えてる。

『なやみがあるならききましよう！』

確か、そういう感じの文言が一通目に書かれてたはず。

正直言つて信用してなかった。誰がこんな手紙に返事をするのか、と。

でも半信半疑で返事の手紙を、夜中にこつそり出してみた。誰でもいいから助けが欲しかったのかもしれない。

返事は翌日、私の枕元に。

『ともだちになるよ』

お近づきの印の飴が付いてきたその二通目にはそういう言葉。

飴玉の色が光に透けて、私の灰色の世界で唯一色付いて見えた気がした。

それから院長先生に心を開いて、つつじの家に馴染めるようになっていった。

それ以外に、手紙の主とも親交を深められたと思っ
てゐる。色々な事を知れたし、色々な事を話した。

例えば、手紙を書いているのは私と歳が近い子だ
つていう事。あともう一人一緒に書いてる子がいる事。

2人はすごい仲がいいみたいで、いつも微笑ましかつた。

時々文字が違くなる文章はもう片方の子が書いたもので、いつも書いてる子より落ちていた性格をしてる。

でも謎の文通相手とはある時期を境に手紙が途切れてしまつた。

その頃には葉月やあやめもいたし、送る頻度が少なくなつていたとはいへ、ここまで長い間送られてこないのに一抹の不安を覚えていた。

世間で言うなら、小学校の友達と中学校で離れてしまつた感じなのかしら。

それで、もうすっかり手紙の事を忘れてしまつた時に、見慣れない人を見た。

夜の見回りをしている中で、院長先生の部屋の扉から明かりが漏れてたのを不思議に思つたの。

気になつた私は僅かに開いていた扉の隙間を覗いて中を見た。

「……………？」

「……………」

院長先生と誰かが話している。でも内容までは分からなかった。

扉の隙間からは黒い髪と服装が少しだけ見えた。見た感じだどつつじの家の人ではない。

その内、知らない人が泣いているのに気づいた。泣きながら、院長先生に何かを言っている。

院長先生は悲しみながらも彼女を慰めている様子だった。

そして話が終わる。

急いで静かに扉から離れて見回りに戻った。

ふと外を見ると、先程話していた人が歩いて帰っていくのを見かける。

月明かりを受けて、青い目が微かに煌めく。

誰かも分からない知らない人だった。

神浜に戻って来て何度目かの魔女退治。

いつもと違ったのは終わった後に、何者かから声をかけられた事。変わった黒髪、眠気を感じる緑目。

警戒心が上がる。目をつけられるのが予想以上に早かった。

誰かと問うと、魔法少女の指輪を見せられる。ついでに彼女は争う気がない事を言った。

名前は弓有詩織というらしい。

用件は新しく来た魔法少女達を見にただけのようだ。口数の割には意外とフレンドリーで、彼女の連絡先と挨拶代わりにの飴を押し付けられてしまった。

でも、それよりも……

どうしようもなく何処かで見たような顔だと思った。

彼女の反応を見るに、お互いに会った事は無い。じゃあ私の気のせいなのだろうか。

少しモヤモヤとした気持ちを抱えて、弓有詩織に別れを告げた。いざ利用できれば利用する事にしよう。

次にその人と出会ったのは、数日経った魔女退治の後。

七海やちよという西の最古参を連れて、彼女は私達を訪ねて来た。この時期に来るといふ事はやはりあの事件の事だろうか。

弓有詩織は七海やちよの道案内をしただけのように、私達が話し始めるとあつという間に蚊帳の外になってしまった。

最古参という七海やちよは年齢を気にしているのか、何歳に見えるかをこちらに聞いてきた。

少なくとも私よりは年上な事を伝えると、不満そうに横にいる弓有詩織はどうだろうかを聞かれる。

身長は私とあやめの間くらい。雰囲気などを考慮しても、素直に言つて中学生なんだろうか。

「……弓有さんは私と同年よ……。」

私の一言に七海やちよは頭を抱えた。

「どうしてここまで違うのかしら……」と何やら小声で呟いている。

そんな茶番を入れて、私達は肝心の本題に入った。

魔法少女が次々と倒れてしまう事件。その犯人として私達が疑われている事。

わざわざ西の最古参が来たのは、彼女の仲間である十咎ももこという人が、つい先日

被害に遭ったからだそうだ。

そしてその友達の子が私達を犯人と決めつけて怒っているらしい。まったくもって面倒な事になってしまったと溜息をつく。

しかし呆気なく疑いは晴らされた。

感じた犯人と思われる人物の魔力パターンと、私達の魔力パターンが違ったと分かったから。

これで七海やちよの用件は終わり。

彼女は帰ろうとして、話に加わらなかつた弓有詩織に声をかける。

「……良い子だね。」

第2印象は自由な人だ。飴を舐めながら大型のカラスを撫でたり遊んだりしていた。

こちらの話が終わった事に気づくと、カラスは空へ飛んでいき、先日と同様に飴を渡してくる。この前と違うのは棒が付いてる事だ。

緊迫した空気は何処へやら、場が一気に解散ムードになった。

彼女は手を振って去っていく。

中学生ではなかつたのか……と考えてしまった。

ファミレスのとあるテーブル。
個性的な面子が今日もチームの会議を行っていた。

▶
?

議題は聞き始めた魔法少女昏倒事件と、先日会った3人組についてである。

最近の様子から考えて、大分キリツとしたチームリーダーが出した結論は、先日の3人組は誰かに陥れられようとしている。…らしい。

でもあちらとの協力を保留されている以上、自分達が手を出す事は出来ない。

今日もまた取り留めのない話をして解散するつもりであった。

電話の音がする。

「失礼。」

誰の電話かと思ったら、自分達のチームリーダーのモノだったそうだ。

そして彼女は表示された名前を見た途端、ピシツと効果音を立てるかのように固まってしまふ。

彼女以外の一同は、(あっ……)と何かを悟る。

リーダーはしばらくして、携帯を両手に持ったままテーブルに突っ伏してしまった。普段の彼女らしからぬ行動である。

相手には出ないと思われたのか、その内コール音が止む。

しかし依然として突っ伏したままだった。

「…緊急会議！」

そしてそんなリーダーを放置して、『常盤ななかの恋を見守る会』は急遽会議を開い

た。

理由は言わなくとも分かるだろう。

彼女達は乙女なリーダーの様子に慣れつつあった。

「今回は珍しく数日持ったネ。」

「やっぱり不意に来ると駄目なんですネ…。」

ますます乙女に磨きがかかったチームリーダーは、彼女達の言葉に反応を返さない。

最早頭の処理速度が遅くなるどころか、止まってしまいう領域まで行ってしまうのだ。

どうしてこうも普段はしつかり者の完璧超人なのに、恋愛の事になるとここまでポンコツになってしまうのか？

やはり恋は人を鈍らせるのだろう。

彼女らのリーダーは顔を伏せていても、真つ赤に染まった耳を誤魔化せていなかった。

「そろそろ一回会つとくべきだと思ふなあ。」

一同は頷く。

想いを募らせるあまりこうした挙動になるのだから、一度試しに会いに行つた方がいいという考えは、満場一致で賛成だった。

電話を掛けた相手には後で折り返しの電話を入れて詫びておこう。
頼んだお茶を一口飲んだ。

おそらく全員（リーダー以外）の思考は同じだ。これは前から思っていた事であるし、
魔女よりも手強いモノである。

『常盤ななかの恋を見守る会』として感じる事はただ一つのみ。

弓有詩織、間違いなく強敵である。

緊急会議が丁度終わった頃、不意打ちで再起不能になっていたリーダーが、顔を手で覆いながら起き上がった。

テーブルに眼鏡を置き去りにしていく。

「……………お願い、します…。」

今日もまた拗らせすぎた恋の相談が始まる。

Part 10　そしてb i i mの花咲く

TRUEENDを迎えたいRTAはーじまーるよー

前はアザレア組と接触したり、やちよさんを道案内したりして、『そしてアザレアの花咲く』も終盤に近づいてきました。

では、続きをやっつけていきましょう。

今回は午前中バイトした後、午後はななか組に会いに行きます。

実は昏倒事件の噂発生からアザレア組と七海やちよの邂逅が想像以上に早かったため、彼女達と会う意味が消失しております。

本来ならイベント進行度の確認の為に会うんですが……ちよつとももこさん倒れるの早過ぎんよお。

それでも会いに行くのは、前回組長が電話出なかつた後にアポイントメントの手紙を送ってしまったからです。

その後すぐにやちよさんに電話した事で、このななか組面会ガバが発覚しました。それで今から参京区のアミレスに集合です。

でも出かける前に、お手紙を出しておきます。

一通目は十咎ももこ宛に。内容は昏倒事件の話を聞きたいだけでOKです。

これは先に用件を話しておく事で、葉月の行動をスムーズにするためです。

カラスネットワーク使つて会いに行つても良いんですけど、アレは結構ストーキング行為なので信頼度が下がる可能性があります。

その点手紙ならストーキングされてるとは思われません。生身で行つて待ち伏せしてたら不審人物だからね、仕方ないね。

とうかかかもれトライアングルで居る時にそれやると、レナちゃんの警戒度がモリモリ上がるからやめようか！

実はまだ十咎ももこ以外のかもれと会ってないんですよ。アザレアイイベント終わる時に会えるので、そこで知り合う事にしましょう。

義手くん2号！ももこさんにこのお手紙届けてきて！

次に3体目の使い魔を呼び出して、葉月に手紙を送ります。

お手紙の内容は、悩み…あるんだよね？情報収集したい？したいよねえ？じゃあ…会おつか？という風にします。

注意すべきなのが、どちらの手紙にもちゃんと会う場所・時間を指定しておく事です。葉月に手紙を渡すタイミングは、彼女が1人でいる時を狙いましょう。主に夕飯の買い物帰りですね。

これは手紙の内容がバレてしまうと、このはさんの猜疑心がバリバリ働いて、最終的にB A D E N Dへ行き着くからです。

義手くん3号！葉月さんにこの手紙届けてきて！

それじゃあ詩織ちゃんも参京区へ赴きましょう。こつちが誘ったので、ファミレス代金は全額負担する心構えです。

みんな財布は持ったな？イクゾー（デッデッデデデデ カーン

あつと結構早めに来たつもりでしたが居ますねえくななか組の集合は早いなく

「あ…詩織さん、お早いですね。まだ集合時間じゃないですよ？」

そりゃあ誘った張本人ですもの、先に来ることは社会人でも大事な事です。

詩織ちゃんは美雨と面識が無かったので、軽い自己紹介をして、この場で連絡先を渡

しておきます。

今日は会議するのはいいけど、用件消え失せちゃったからね……せつかくだからなかなか組の信頼度と好感度を上げていきます。

ところで組長がさつきから一言も喋ってないし、ガツチガチに固まっていますけど大丈夫ですか？

「あー、なかなか緊張してるんだ。だからあまり気にしなくて良いよ。」

はえ〜組長も緊張するんすねえ〜。

そうっすか…前に相談所で会った時から不調なんですかね？うーん、そこはかとないがバの香り。

でも続行します（鋼の意思）

とりあえずなかなか組が魔法少女昏倒事件についてどれくらい知ってるか聞きましょう。かこちゃんの13歳攻略がどこまで進んでるのか気になります。

「昏倒事件ネ。けど知ってる事は少ないヨ。」

大丈夫っすよ！確認の為に聞いてるだけなんで！

ほうほう、巷で魔法少女が次々と倒れていく事件がある事。犯人は魔法少女と推定されている事。最近神浜に来た3人組が怪しいという事。

自分達は噂の3人組『静海このは』『遊佐葉月』『三栗あやめ』と会った事がある。

「その…あやめちゃん達が悪い人達だとは思いません。むしろ誰かが陥れようとしている…そんな風に感じます。」

ふむふむ、通常通りのななか組ですね（リーダーの様子から目を逸らす）
というかいつまで固まってるんだ組長は……。

んー、かこちゃんの呼び方から考えて、必要分の友情パワーはありそうですね。少なくとも友達になりたいとは思ってるはずです。

まあ聞くだけじゃアレなので、こちらも知ってる情報は話しておきましょう。

（アザレア組は犯人じゃ）ないです。ご存知西のドン、七海やちよが魔力パターンで判断してくれました。さすやち。

だから安心してくれて良いんですけども、万が一の事を考えて昏倒事件の噂を調べてくれるでしょうか？

葉月がもこの説得に失敗して、そのまま別の協力者が見つからなかったら、葉月が襲われてBADENDに入っちゃうので……。

「…ボク達も調べてる途中だったんだ。出来れば協力したいと考えてる。でも、やつぱりここはリーダーに決めてもらわないと。」

「……ななか、ななか出番ネ。」

「え……ああ、はい…その、お聞きしたい事が一つありまして……」

お？何ですかね？詩織ちゃんに答えられるものなら、ドンと質問してくれて構いませんよ！

「し、詩織さんの好きなモノ…は何、でしょうか？」

好きなモノ…好きなモノですか……。

こういう事を聞いてくれるという事は、ななかさんの好感度がちゃんと上がっている証ですね！

今までパラメータが不安でしたが、この様子だと問題無さそうです。通常組長よりも元気なさそうなのが気になるポイントですが。

好きなモノを答える時、いくつかに選択肢から選ぶ事が出来ます。

それは食べ物だったり、漫画だったりしますし、相手をからかったりする事も出来ます。プレイキャラの意外な所も分かります。

詩織ちゃんの好物は甘いものだと知っているので、今回は別の好きなものを選んでみましょう。

一体甘いもの他に何が好きなんですかねえ？

「な、なるほど……特撮……というと、日曜日の朝……の、番組ですね……あ、ありがとうございます……。」

特撮

男子小学生かな？

part 6の展示会では中学生かと思いましたが、これは更に子供っぽさに拍車をかけてきましたね……。

ちよつと詩織ちゃんの問題年齢低くない？君、一応18歳ですよ？いつまでも子供心を忘れないんやろなあ。

あーあ意外なところを突かれたのか、組長がブツブツ言いながら俯いちゃいましたよ。大丈夫？陰キャ街道爆走してない？

まあ置いておきましょう。気にしても仕方ないですし……不安ですけど……

「……意識すると、協力するという事らしいです。」

いつの間にか、ななかさんが遂に翻訳しないとイケないレベルになった。これからのコミュニケーションがより一層心配ですね。

協力を取り付ける事が出来たので、後は適当に雑談して地道な信頼度を稼ぎます。

さて会合も終わりました。

これからはおそらく葉月の情報収集ターンが来るので、その間水名のスーパー（特に弁当コーナー）に通い詰めましょう。

今日から詩織ちゃんへべんとうぐらし！です。

それと同時進行で葉月の情報収集をお手伝いします。ももことの顔合わせをさせて、説得に失敗した場合をななか組を斡旋します。

念のために義手くん2号を飛ばして、アザレア組の動向を観察します。あと神浜カラスネットワークで夏目かこ、深月フェリシアの場所も確認します。

これは水名神社で決闘が開始される時のガバを減らす対策です。状況確認は大事。稀に葉月がかこちゃんに連絡するのを忘れてしまう場合があります（1敗）

とりあえず次の日のももこと葉月の顔合わせです。

両者からすごい誰なんだコイツって訝しそうに見られてますが、この場に呼んだ理由を説明します。

詩織ちゃんが架け橋になってやる！俺はやるぞお前お前！

調査に協力して下さいお願いします！アザレアTRUE ENDを迎えたいんです！

おなしやすおなしやす！

「…分かった。良いよ、アタシも協力する。ただ自分の目で見極めるまで完全に信用した訳じゃない、それを分かってほしい。」

よっしゃ！勝ったな、ガハハ。

この状態のももこはまだ葉月を疑ってはいますが、一応噂の調査には協力してくれませう。打ち解けてないけどイベントクリアすれば仲良くなるので安心！

間には詩織ちゃんを緩衝材代わりに入れておきましょう。こんなほんわかムードブレイカーな奴がいれば大丈夫やろ。

これによって午後はバイト時間を除く時間を調査パートに使います。決闘が発生した時に呼びかけて事態を知らせる事も出来ます。

神浜カラスネットワーク万能スギイ！

やろうと思えば昏倒事件なんてそもそも起きてない事も知れるんですが、この調査パートを長引かせないと決闘が発生しないので注意しましょう。でも長引きすぎるとこのはさんに見つかってアザレア家庭崩壊です。

良い子のみんなは気をつけようね！

お、倍速が止まりました。

現在は情報収集の為に集まっているシーンですね。突如動きが止まったので、金髪2人から驚きの視線を感じます。

理由はこれですね。遂に水波レナが静海このには突っかかりました。みたいです。

張らせておいたネットワークから、水名神社の決闘が始まったのを目撃した情報が出ました。

急いで現場に向かいます。義手くん2号にソウルジエムに当たりそうな攻撃は全て妨害してもらおうよう指示します。

そしてメモに傭兵を雇いたい旨と今すぐ水名神社に来るよう書いて、財布から適当に一万円札を引っ張って、それらを義手くん3号に持って行かせます。これはフェリシア宛のものです。

面識無い状態ですが傭兵をやっている事を知っている相手なら魔法少女だと理解してもられます。お金ブーストでより従ってください。

ちなみにななかさんに頼むと後で組長式対話術を受けます。

3号を見送ったらかこちゃんに電話します。急いでるので通話しながら走っています。むしろ急ぎの用事っぽく思わせる事が出来るので、そうした方がいいです。

水名神社に来るように伝えます。面倒なので君の友達の危機だぞ！って言うときま

電話の向こうで困惑した声が聞こえますが、とりあえず宜しくお願いして切ります。

頼もー！ここが祭りの会場か!!？

「私達以外の魔法少女を全員叩き潰す！」

あつ！もう始まつてる！

丁度良くこのはさん発狂モード入っちゃったみたいです。

本来ならここで葉月が来るまで、『魔法少女 静海このは』戦が挟まりますが、今回は詩織ちゃんが連れてきたのでイベントが進行します。

感動の名シーンです。やる事無くなったので傍観を決め込みましょう。

Aザレア組が決断を決めるタイミングでは、確定であやめの選択を選ぶよう誘導します。保護者2人に選択させると、高確率でBADに入ります。

その為に呼んだ人達もそろそろ来るんじゃないかなと思うんですけど…（名推理）
「弓有さん一体何があつたんです、か……?」

あ、かこちゃんが来ましたね。

何故かななか組のメンバーも全員付いてきましたけど……。後の手間を省けたと考えれば短縮なのでオツケーです。

そしてあの孤独なSilhouetteは……?

「おい！オレを雇いたい奴は誰だ！」

フェリシア！フェリシアじゃないか！バイト戦士が稼いだ一万円を貴重に思っ
て、君達の友情パワーを見せつけてやりな！

13歳上乘せだぞ？これは効いたダルオ!?？なんとか言ったらどうだ？

判定は……………

成功！成功です！やっぱり13歳は最高だぜ！

『そしてアザレアの花咲く』TRUE END！

しかし未だ気を抜いてはいけません。アザレア組ともれトライアングルとやちよ

さんにグリーンフシードを配ります。

アフターケアをしつかりしないと、消費したこのはさんが魔女化する可能性があります。RTA的なBADになったら困るってレベルじゃねーぞ！

丁度ななか組が揃ってるので、このまま縄張り決めなど、今後のアザレア組について会議を始めます。

ひとまずファミレスに行つて夕飯にしよーぜ！詩織ちゃんのお財布がどんどん平べったくなつていきますけどね。

今回はここまでにしようと思います。

ご視聴ありがとうございました。

▶?
?

今はもういない文字上の友達。

旅行中に両親が亡くなって、親戚中をたらい回しにされてる中、名前が分からない誰かから手紙が届いた。

やや高級そうな便箋に、落ち着いた雰囲気のかっちりとした文章。時々はつちやけたような文も混ざっていた。

『なやみがあるならききましよう。』

書き出しはこう。

親を失つて頼る相手が居なかつたアタシは、よくその文通相手とやり取りをしていて。流石にその家の時だけだったけど。

なんで手紙をくれたのかも書いてくれた。

たまたま外に出てたアタシを見たらしい。その無理してニコニコしてたのは気になつたんだっていった。

手紙達は今でも大切に仕舞つてある。辛い時に見返すといつも温かい気持ちになれた。

しばらくしてつつじの家に引き取られる事になつた。

その頃にはもうニコニコしてやり過ぎそうとする嫌な癖が付いちやつて、その後誰もいない所で手紙を見返す事が習慣になつた。

だつて地獄に糸が垂らされたら、それに縋りたいと思わない？

それで辿り着いたつつじの家でも、その習慣は続いてたんだ。もう会えない人を頼つても仕方がないのに。

でも院長先生はそのアタシの危うさが一目で分かったみたい。心配して優しい言葉をかけてくれた。

それからつつじの家が大好きになった！優しい院長先生、信頼できる仲間達が！

けど二度目の幸せはずっと続かなかった。

つつじの家を守る為にアタシ達は魔法少女になった。そして各地を点々としてきた。

『これからは3人で生きていく』

そう誓った。現にこうして家族同然に過ごしているし、色んな事を分かち合って生きてきた。

でも、ふとした時に小さな疑問が浮かんでくる。

これはアタシがたらい回しにされてた頃と…前と変わらないんじゃないかって。

もしたらどうしようもなく不安になって、そのうち手紙を読み返す癖が戻ってきた。

貼り付けた笑顔には気づかれただけ、それでもなんとかしなきやという焦燥感は拭いきれないままだ。

あの頃と違って、今は自分がしなくちゃいけない。救ってくれる存在はもういない。蜘蛛の糸はもう降りない。

だからアタシはやるんだ。

大切な家族を守る為に。いつか見た光のように。

また神浜で暮らす事になった。

拠点を見つけて引越した時に、あやめが手紙を持っていた。懐かしいモノ、あの時の手紙と同じモノだった。

このはも同じのを昔貰った事があるらしい。文通相手の事を考えればきつと色んな人に手を差し伸ばすだろうと、容易に想像できる。でも2人が持ってた事に驚いた。

こんな近くに同じ手紙を貰った人がいる事に、不思議な事もあるんだなあと笑ってしまつた。

日々を送る為に魔女を倒す。

3人での連携は今日も完璧だったと自負している。いつも通りな事に少し安堵した。

そして神浜に来て最初の魔法少女に会った。

他に人の気配はしないから、ソロで活動しているのかもしれない。そうだったら舐めてかかってはいけない。

用件を聞くと、新しく来た魔法少女達がどういう人達か確認しに来ただけのようだ。

挨拶代わりに飴とその人の連絡先を渡される。彼女は弓有詩織という名前だそう。ここでコネを持てたのは大きいかもしれない。

帰ろうとする彼女をこののが呼び止めた。どこかで見た事あるらしいけど、思い当たらなかったのかそのまま帰す。

弓有詩織との出会いはこれが初めてだ。

渡されたメモの文字に、何故か既視感を覚えた。

最近聞こえ始めた魔法少女昏倒事件。

どうやら犯人としてアタシ達が疑われているらしい。あやめの友達からそういう話を聞かされた。

その日の内に事件の噂を聞きつけて会いに来た人達がいた。

弓有詩織と七海やちよ。

西の最古参が言うには、お仲間の人が倒れてしまったとの事。だから事件について調べまわっていたって。

でもその時感じた魔力パターンと、アタシ達の魔力パターンは違っていた。だから容疑はあつけなく晴らされる事となる。

問題はその後だった。

次の日の夜、このはから神浜を出ようという提案を出された。もう一度関係をリセットした方が良いのは、アタシも確かに一理ある。

だけどここであやめに新しく友達が出来た。それも2人。とても楽しそうだったと思う。

アタシが情報収集して事件の真相を探る事で、神浜から出て行くのを渋々延期してもらった。

あやめの為にも頑張らないといけない。

このには悪いけど、ここは他の魔法少女と手を組ませてもらう。出来れば被害に遭ったという十咎もそこ。

どうやって接触すればいいだろうか……そんな事を考えてながら、今日の夕飯を買って帰る。

そこに一羽のカラスが降りてきた。

記憶が正しければ、確か弓有詩織のカラス。他のカラスよりも体躯が大きいのが特徴的だった。

口には一通の手紙を加えている。多分アタシに受け取れと促しているのだろう。

読むのを後回しにして一旦帰宅した。家事をこなし、ひと段落ついてもう真夜中だ。

見つからないようにこっそりと手紙を開ける。少し値段が張りそうな便箋、昔貰った手紙と同じ紙だった。

一文目が目に留まる。一瞬、呼吸を忘れた。

『悩みが有るなら聞きましょう。』

いつかの手紙と同じ口上だったから。

(ぐ、偶然だよ……たまたま同じだけなんだ。)

手紙の内容はまさにこれからしようとしてる事だった。情報収集を手伝ってくれるらしい。ご丁寧の日時と場所が記入してあった。

事がうまく進んでる。怖いくらいに。

そして遂に気づいてしまった。

同じだったんだ。さっきの口上も、文字の雰囲気も。欠けていたピースがはまった気がした。

じゃあ前の手紙の差出人も弓有詩織なのか？

助けを望めば現れる手紙の主。

この状況なら……きつと……。

あらかじめ決められた場所に行くと、知らない人と会う事になった。

相手の名前は十咎ももこ。調査の相手として探していた存在だった。

ももこさんはまだアタシ達を信用していない。でもその間を詩織さんが取り持つて

くれるらしい。

そうして調査を始める事となったが、直ぐに行き詰まる。

なんとか情報を集める事は出来ていた。しかし噂の発生源にたどり着こうとすれば、道がパツタリと途絶えてしまう。

それを何度か繰り返し返して切羽詰まっていた時、急に詩織さんが動きを止めた。

何事かと思えば何処かへ急いで走っていく。アタシはももこさんと顔を見合わせる
と、急いで後を追っていく事にした。

着いた先は水名神社。

そこにいたのは見慣れない魔法少女と、大事な家族の姿だった。このはの様子がおか
しくて、他の魔法少女を全員叩き潰すとか言ってる。

……このタイミングかもしれない。

伝えるんだ、アタシが最近思っていた事を。

「このは……アタシらもつと外と向き合うべきだよ。」

「葉月……何を言ってるの……!」

確かに今まで周囲の状況に振り回されてきた。そうして辿り着いたのがつつじの家
で、このはの気持ちも理解してるつもりだ。

でも、信じられる人は自分達だけかと聞かれたら、それは違うんじゃないかって思えてきたんだ。

だって院長先生もつつじの家の仲間もいたんだ。アタシ達以外にも昔は心を許せる人が居たんだ！

だから…今も信じられる人がいるんじゃないかって思う。忘れかけてたけど、周りを見ればきつと。

「やめて…やめてよ…私はただ…葉月とあやめと……3人で！いつも3人で…3人だけで……」

アタシはこのの涙を拭きに行く事は出来なかった。ただ、次に出てくる言葉を待っていた。

こののはアタシとあやめの事をとても大事に思ってた。院長先生が亡くなってつつじの家から出て、残ったのがアタシらだけだったから。

外と繋がるのを怖がっていた。また失うんじゃないかって、壊されるんじゃないかって。

「だから…だから私は！」

神社に静寂が訪れる。

誰も何も言わない。まるでアタシ達の決断を待っているようだった。

「…あ、あちしも黙ってたことがあるの……。」

静かな空気を打ち破ったのはあやめの声だ。

このには言っていない隠し事。自分から決断して言おうとしてる。

断言できる訳じゃなかったけど、あやめに友達が出来た。いつもアタシ達の後ろを歩いてきたあやめが自分の意思で外の子と繋がった。

だからこそアタシ達にも信じられる人はまだ居るんだと、そう思う。

そしてその場にかこちゃんとかフェリシアちゃんが現れた。それに常盤ななか達も。

走ってくる間に詩織さんが連絡を回してくれたようだ。つくづく頭が上がりそうにない。

新しく来た2人に近寄ると小さく何かを呟くと、優しい笑みを浮かべて「…頑張つてね」と言った。

「わ、私は夏目かこです！ 図々しいですが…その、あやめちゃんと友達でいさせて下さい！」

「かこ、こういう時は胸張って言うんだぜ。オレはあやめの友達！ 深月フェリシア！」

「かこお…フェリシアあ……。」

あやめにはこんな素晴らしい友達が出来た。

その事を知ったこのはは息を整えると、感謝の言葉を口に出す。その微笑みは晴れやかなものだった。

「うお！あやめ泣いてるのか!?!？」

「な、泣いてないよ！ただ嬉しかっただけ！」

「そうだったらオレも嬉しいぞ！」

「うん！わ、私も！」

あやめ達は駆け寄って握手して喜び合う。今まで通り友達と一緒にいれる事が分かったから。

「……葉月。まだあなたの考えを心から受け入れた訳じゃない。でもその可能性は信じられると思った。」

「……じゃあこれからさ、ゆっくり考えていこうよ。ね?」

「……そうね。……友達、か……。」

「いるじゃん、ここに。遊佐葉月っていう友達がさ?」

「……ふふ……確かに近くにいたわね。私も友達が……！」

アタシらを取り巻く問題はひとまず一件落着した。

まだまだ真相は明らかになっていない。全ては未だ闇の中だけど、今までと違って変わった事もある。

神戸市には多くの魔女がいて、多くの魔法少女がいる。同じモノを背負った仲間達

……。

きつとアタシ達は3人にとっての新しい『つつじの家』を見つけたかもしれない。

そして、新しい光も。

『じゃじゃーん！これは一体なんでしょう！』

『何って…お手紙？何に使うの？』

『ふっふっふ…よくぞ聞いてくれました！』

『また何かしでかす気なんだ。』

『しでかすとはなんだ！悩んでいる子の味方になる計画なんだぞ！』

『まあ別に良いけどさ。』

『…… ちゃんは楽しいと思わない？』

『ん？んーん、 と一緒なら何でも楽しくなるよ。』

『おおう…… ちゃんそういう所あるよね……』

『それよりやるんでしょ？これ。』

『よし！ヒーローからのお便りを届けましょう！』

『おー！』

余談

没ルートがやばかった
ので失踪します

恋愛度 組長>ヴァア>黄色い人

依存度 黄色い人>組長>ヴァア

不純度 ヲヴァア>黄色い人>組長

何もない地獄より何か一つだけあつたら依存度上がりそう（小並感）

没ルートは水名神社で葉月の選択↓アザレア家庭崩壊↓ヤンデレルートでした。流石にそれはリセ案件だと思いました。

でもどちらかっていうと黄色い人は恋愛感情よりは崇拜の狂信者タイプに設定上なつてしまった。そういった所は表面にも今後の小説でも多分出てこないです。思いつきで書くもんじゃねーな……

顔の良い女と顔の良い女の腹の探り合いが見たかったです、方向性が恋愛になつてしまった上、組長は乙女になり、黄色い人は狂信者になつたので、おそらく攻略ルートの可能性があるのは組長です。

Part 11 見所さん!?!の存在意義

一つ目の山場を抜けたRTAはーじまーるよー

前回は無事に『そしてアザレアの花咲く』のTRUEENDを迎えられました。合言葉は13歳の友情パワー!

今回はその続きからです。

打ち上げにファミレス行って団体様の料金を払おうとした詩織ちゃん、やちよさんの制止によって割り勘させられました。

貴重な全体好感度上げのチャンスが……ただでさえアルバイト一人暮らしなのに金払いが良すぎて……な、涙出ますよ。

そんな詩織ちゃんですが、今回から新しくバイト先を増やします。これは次のイベントを近場で見守る為です。

それが：『バイバイ、また明日』神浜大東団地の記憶』です。なんとアザレアに続くマルチエンディングイベント！

しかしこちらはあまり手を加えなくて大丈夫です。何故ならイベントに関わるネームドキャラの数が少ないからです。

兄貴姉貴ご存知の通り、このゲームはお祭りゲーな都合上、どうしてもキャラのガバが発生しやすいんです。難易度ハードなら尚更で、プレイヤーが手を加えなくても崩壊していくのもそうだからです。

この『バイバイ、また明日』では、メインの団地三人組くらいしか出ません。他に関わってくるとしたら、組長か混沌か東のボスです。

だから私はチャート上の必須イベントに入れておりません。この団地でのイベントよりも、大人数が関わってくる『そしてアザレアの花咲く』『散花愁章』のガバの方が致命的すぎるからです。

混沌こと更紗帆奈という神浜が生み出したモンスターをイベントやらずに放置する方がチャートぶつ壊れます。

アザレアをTRUEにしないとそもそも散花愁章が発生せず、更紗帆奈の登場フラグ

すら発生しません。先駆者兄貴から分かると思いますが、彼女はガバの詰め合わせセツトです。

メインストーリーに入らないでくれよ……。

それで新しいバイト先は中央です。出来る限り東に近ければなお良いです。

東寄りの中央にする理由は、イベントで何か起こった時移動が不便だからです。魔法少女は基本的に学生で話が進むのは午後が多く、必然的にイベント発生も午後から夜にかけて出ます。時間帯としては、午後って一番活動しやすいですね。

緊急事態が起こった場合に義手くんを飛ばしやすいという利点があります。単純に距離的な問題が付き纏う……。

中央や東出身ならこういった問題は起きないんですが、このRTAの目的は主人公達の情報提供及び後方支援ですので、出身新西区は譲りません。

ついでに和泉十七夜と接触できたならラッキー程度に思っています。初期交友関係に入っていて、信頼度がそこそこ高かったので、地味に関係が気になってるんです。そこらへんどうなんすか？

それではしばらくの間バイト先に団地も加えて過ごしていきます。倍速のお時間だ

！

アザレア組が夕食に誘ってきました。なんで? (なんで?) そこまで好感度が上がってない…なくない?

突撃! アザレアの晩御飯! ですが、イベント進行の確認の為にべんとうぐらし! してたのを、このはさんとあやめちゃんに目撃されてたようです。

違うんだ…この18歳はちゃんと自炊出来るんだ…ただちよつと忙しくて料理の時間を省きたいだけで…

というかよくこのはさんが許しましたね? 憐れみなんですか? アザレア組自体、好感度全然上げてないですよ? どういうことだ…

気にしても仕方ないので有り難く頂く事にします。招いてもらった身なのでちゃんと手伝う事は手伝いましょう。

「今日は無理言つてすみません。この前の騒動のお礼もしたくてお誘いしたんです。」

いえいえ、解決しないと走者のチャートが死んでたんで気にしなくて良いです。

……ふむ、至つて普通だな! なんかあるかと思つたら何も無かつたです。ただただご飯食べただけでした。

試走の時よりもアザレア組が優しい……これが家庭の味なのか？とりあえず葉月さんの手料理で安心しました。とても美味。

今回はサービス精神豊富に、あやめちゃんに手品を披露して飴を出します。やっぱりな、子供はこういうのに惹かれるんです。実際、低年齢魔法少女とかに披露すると喜ばれます。

「あ、そうだ！詩織さん、これ貰ってください。」

何ですか何ですか？そう言っただけで冷蔵庫から取り出したのは……栄区繁華街の高級ケーキ？！

そんな高価なものの受け取れないんですが……えっ？詩織ちゃんに恩がある人達から渡してくれて頼まれてる？

流石の詩織ちゃんもそう言われると受け取るしなくなってしまうだろ！いい加減にしろ！というか葉月さんはその人達と知り合いなんすね……。

「まあちよつとしたコネっていうか……繋がりがあただけですよ。ちなみに詩織さんは好きな食べ物ありますか？」

はえーそうっすか。有り難く頂いておきます。アザレア組も順調に神浜市に馴染んできた証と思えますよ。

好きな食べ物は甘いものです。飴をいつも持ってますけど、どちらかというと洋菓子

より和菓子の方が好きなようです。走者も和菓子好きです。

「……………」

うわすつごいこのはさんがジト目でこつちを見てますよ。なんか初対面でも見られてた記憶あるな?何かあるんですかね…?

「…………わ、私は認めないわよ!」

なにを?

ですが魔法少女特有のギスギスではなく、どちらかというコミカルな感じで言われたので、多分心配する必要はないはずです。

ギスギス感を出されてたらマジモンのガバとして考慮する必要がありました。結局このセリフも何のガバか分からないですけど。

他人と触れ合って楽しんだので、そろそろ詩織ちゃんは帰ります。詳細不明なガバが多くて冷や汗が出てきますよ。

所変わって万々歳です。

おバイトしますわよ！鶴乃ちゃんも一緒ですが、本日はまったくお客さんが来ません。

なので鶴乃ちゃんの信頼度を地道に上げていきます。全てはキレイシヨンランド：もといRTAのガバを防ぐため。

良いぜ…本音を吐き出して良いんだぜ…甘えてこいよ！全力で！まだか、まだ信頼が足りないのか？？ガードが固すぎるツピ！

「あははー！詩織は頭撫でるの好きだよね〜」

おっと鶴乃ちゃんは撫でるの嫌でしたか？流石に会う度に頭触るのはナンセンスでしたかね？

しかし寡黙な性格デメリットを減らす為には、スキンシップで乗り越えないといけませんですが…：触つていいかどうかはちゃんと見て判断してるんですけどね…？

試しに手を離れたらシユン…：となってしまうました。心なしか耳と尻尾が垂れているように見えます。

お前もしかしてアイツ（頭撫で）のことが好きなのか？だったらもつと撫でてやるよお！

「……ねえ、抱きついてもいい?」

いいよ来いよ鶴乃ちゃん!でも抱きつくのはいいんですけど、この状態だと背中を撫でるくらいしか出来ないんですよ!あとお顔が見れないから例の顔か確認出来ないんですが!

いやでもこれはまだ例のハイライト無し状態じゃないですネ:脱力してのんびりしてませんし……。これだけやつても例の顔にならないなんてうっそだろお前!

今がお客さん居ない時で良かったですね。出来る事は少ないので、鶴乃ちゃんの好きにさせときます。おそらく離れようとしたら離してくれるんでしょうが、ここまで来たら勿体無いよなあ!?!?

「やつぱり詩織は優しいよ。」

鶴乃ちゃんも負けず劣らず優しいですけどね!優しすぎた結果が7章なんですけどね!楽園行き覚醒前夜っていうタイトル好き(隙自語)

うーん:本来の条件満たしてないからでしょうか?修行してあげる関係じゃないですしね……。

終盤になればなるほど後方支援でも出張しなければならぬから、あそこのガバを減らすだけでも短縮に繋がりますが:あわよくばって感じなので気にしても仕方ないですネ。

よーしよしよしよい良い子だお前は、よく頑張ってるぞ！詩織ちゃんが最大限に甘やかしてあげましょう！店の入り口からは見えない角度という絶妙な場所を選んだ鶴乃ちゃん偉いぞ！

おっともう良いんですか？

「…うん、もう大丈夫だよ。ありがとね！」

お顔の確認！まだダメみたいですすねクオレハ……。

これでも全然ふにやらないなんて流石の鋼メンタルだぜ！雰囲気だけなら大分静かになっただけどなあ！

この時間軸のネームド魔法少女、普段よりも静かになってる人多くないですか？ななさんもそうですし、鶴乃ちゃんもそうですし。

いつでも甘えていいんだぜ！という意思表示をときましよう。詩織ちゃん性格からして絶対に嫌がらないぞ！走者的にもウエルカム！

「そういえば新メニューを思いついたんだ！」

やちよさんストップが消えたとはいえ、これじゃ詩織ちゃんの胃が（脂で）死ぬウ！おおく療養前の量より半分以上減ってますね。それでもまだ多いですけど、気遣いを

感じます。 ありがとうエ…! ありがとうエ…!

この後バイト終わりまで結局お客さんは来なくて、ずっと鶴乃ちゃんとお話してただけでした。

「弓有詩織! やつと見つけたんですケド!」

お、お前は…: アリナ・グレイ! アリナ・グレイじゃないか! 何故ここに…: まさか自力で脱出を!!?

呑気に挨拶しないで詩織ちゃん! 確かにこつちからしたら飛び降りから助けただけなんです! その人実は神浜のヤベーやつなんですよ!

しかも初っ端から魔法少女衣装で声掛けてくるとかコレは作品の餌コースまっしぐらでは…？もしかしなくても絶体絶命です…？

「ちよつと創作意欲が沸いてなかったからアナタに会いたかったんだヨネ〜。」

……アレ？戦闘開始表示にならないです…？

普通ならここから『魔法少女　アリナ・グレイ』戦に入ります。イベント戦闘扱いではありますが、逃げ切る手段を持つてなければ詰みに近いです。

一応いつでも対応出来るようにボタンの準備だけしといて、会話を聞いてみましょう。

「そんなに身構えないでヨネ。用事が済んだらちゃんと解放してあげる。」

はあ…？かつてないほど落ち着いてますよ。あんな風に最後の作品邪魔したのにこの落ち着きよう…？妙だな？

とにかく用事終わって帰るならサッサと用事を終わらせて下さいよ。碌でもない結果になりそうだったら『使役』で洗脳してでも逃げてやりますからね。

「少し身体を自由にさせてもらっただけだから！」

あああああああ! 待て待て待て待て!

詩織ちゃんかベテランで強くても、身体能力系のステータスは普通の魔法少女より低めなんです!

例え相手が芸術家であっても押し倒されたら筋力対抗が成功する確率低いですよ! 人体の急所である喉を掴みながら馬乗りにならないで!

頼むから待ってアリナパイセン首絞めないで下さい! ちよつと! アーティストにあるまじき力してませんか!? ピクリともしないんですが!?

いやこれ息出来なくて詩織ちゃんが弱つてきているからですね! 上手く魔法も行使出来てないし、ステータスにデバフもかかっています!

「アハッ! アナタのその顔が見たかったんですケド!」

案の定碌でもない事だったじゃねーか!

パイセン、リヨの方面に目覚めちやったんすか!?! 待てコラビデオカメラで撮るなオイ! 人が苦しんでる顔見て興奮するとか、コイツアすっげえ変態だぜ?

確かに元からSつ気強かったです、ここまでじゃなかったはずですよね? もしかしてこの前の心中未遂で開いちゃいけない扉を開かせてしまったんですか? 一番開かせちゃダメなやつに? なんて事だ!

アツ！本当に不味いです！いくら魔法少女の本体がソウルジェムで、首絞められ続けて死ななくても、苦しいものは苦しいんですよ！

だって画面チラついてます！ステータスだってもう一般人より低いんです！いつまで首絞めてんだよアリナア！

「今日はこれくらいで満足だヨネ。」

やっとうつてった……。

詩織ちゃんはいセンのオモチャじゃないんだぞ！しかも律儀に首絞め後の様子までしっかり撮ってましたよあの天才芸術家……。

本格的にリヨの方面に目覚めてそうですねアレ……でも作品の餌にされたり殺されたりしてないからまだマシな可能性がありますね（感覚麻痺）

残念ですが詩織ちゃんにはアリナのオモチャになつてもらいましょう（掌クルー）……
悪いな、これもRTAの為だ。

というわけで今回はここまでです。

▶
?

ご視聴ありがとうございました。

弓有詩織という人は優しい。

それはもう人間が出来すぎてると言っても過言ではない。困ってる人を見ると助けられずにはいられない人。

笑顔で押し通そうとした時も、すぐにその変化に気づいて心配してくれる。「どうしたの？」っていつも聞いてくれる。

こうやって話に耳を傾けてくれるのも、彼女にとってもはや習慣で当たり前のことだ。きつと誰にだってこれは変わらないんだと思う。

だからその時は悲しみよりも、ああやっぱりかっという気持ちの方が強かった。

魔女から人を庇って大怪我をしたってやちよから聞いた。しばらくの間はみかづき荘に住む事になったらしい。

外傷はもう治ったけど内臓とかの中はまだまだ治ってなくて、下手に動こうとすると悪化しちゃうんだって。

それでも詩織はいつも通りにバイトに出て、いつも通りに魔女を狩ろうとして、無理にでも外に出て行こうとする。

やちよがモデルの仕事で居ない時に、安静にしているかどうか監視する事になった。胃も損傷を受けているから、脂っこいものは控えて病院食とかのものを食べられるように指示されてる。一応、やちよが作り置きしたって言った。

「お邪魔しまーす。」

特別に貸してもらった鍵でみかづき荘の扉を開ける。向かう所は詩織が居る部屋。

あの頃と比べるとすっかり人は居なくなってしまった。私は家からここに来てたら、今はもう家主であるやちよしか住んでない。

チームが解散してから、やちよはソロで活動するようになった。ももこは仲の良い友達と組んで、みふゆはあれから一度も姿を見てない。

私の守りたかったモノは既がない。

それでも性懲りもなく話しかけに行ってるのは、やちよが考えを改めればもう一度みかづき荘が元に戻るかもしれない。そう考えてるから。

メルだって…まだ死んだって決まった訳じゃない! 自分の目で確認できるまで私は生きてるって信じてる!

…信じてるなんて都合の良い言葉で、本当は事実を認めたくないだけなんだ。

私の知ってるみかづき荘はもう無い。ここに来たって、探しに行っただけで、もう何処にも存在しない。跡形も残ってないんだよ。

メルが居なくなつてから数日経つたある日、私はみかづき荘に自分のカバンを忘れちやつたんだ。

(あれ? 何話してるんだろう…)

立ち聞きなんて趣味じゃないし、目的のバックだつて見つかつたから、その場を去ろうと思つた。だけどそこから聞こえる声が深刻そうで、思わず足を止めて聴き入つちやつた。

「アタシらが倒してたのつて………つてことだろ!?」

「ももこさん! 言わないでください!」

全部が全部聞こえた訳じゃなかつた。

なんの話をしているのか私にはサツパリだつたけど、多分3人が何か隠してるんだらうなつてのは分かつた。

なんで私に言つてくれないのかな…私が弱いから? 何も解決出来ないから?

言いたくないなら私も詮索しない。何も知らずにニコニコ笑つてるのがここでの私の役割だから。

……でもやつぱり、寂しいよね。

結局なにも事情を聞かずにそのまま帰ってきた。私が居ない所で話すなら、きっと私に聞かれたくない話なんだろう。

メルはもう居ない。みかづき荘は今にも壊れてしまいそうだった。

(泣いちやダメだ…ニコニコ笑ってなきや…)

それでも涙は抑えられなくて、そうそうに泣き止む事はなかった。

あの時私か詩織が行けてれば、万々歳に団体客が来てなければ…そんな考えが頭の中で堂々巡りしてる。いくら泣いたってメルが戻ってくるはずがない。何が最強なんだろう、ただ強がつてるだけじゃないか。

隠し事の真実を聞いて何もかもがバラバラになるのが怖かった。必死に支えてないと壊れてしまいそうだったから。

今となってはもう全てが水の泡だった。

感傷に浸っても現状は変わらない。詩織が借りてる部屋の前に着くと、静かに扉をノックする。

「…入るよー、寝てる?」

返事はなかったから、ゆっくりと部屋に入る。やちよが無理矢理住まわせてるから、部屋の中に私物といったものは一切無い。

肝心の詩織はまだ寝ているようだった。荷物を床にそつと置いて、ベッドの隣に用意しといた椅子に座る。

来たはいいけどやる事が思いつかなかつたから、とりあえず詩織の様子でも観察する事にした。

まず詩織は寝る時、丸まって寝るタイプで事が分かる。内臓とか痛めてるのに大丈夫なのか？

髪は不思議な色をしてると思う。毛先にかけて薄くなるようグラデーションになっているから、どうなってるのか少し気になってる。

今は閉じられてるけど、綺麗な緑色の目も不思議なんだ。光の当たり具合で色の比率が変わるんだよ、まるで宝石みたいでキラキラしてる。

あ、そろそろ起きそう。ベットに乗り上げてた体を戻して、一度椅子に座りなおす。詩織は低血圧なのか起き上がってからすぐはブーツとしてる事が多い。でも日曜日の朝だけはとびきり早起きする。なんでなんだろう？分かんないや。

目が覚めたのを確認したら、朝ごはんを用意する事にしよう。

そういう少し変わった日々を過ごしていった。

勿論怪我の方はだんだんと治ってきていて、あれからそんなに時間はかからずに詩織

はみかづき荘を出た。

万々歳のシフトもすぐに入れてほしいって言われた。流石に心配だったから少し後の方になるよって伝える。病み上がり? の人に鞭打つような事はしたくない。無理しないか見守る為にもなるべく私がいる時間に入れてもらうようにする。

そしたら必然的に詩織と話す時間が増えてしまった。お客さんが全然来なくなった時は、詩織にいつも愚痴とかを聞いてもらってる。

辛い事も誰かに言うだけで多少は楽になれて頑張れるから、これは私の為の息抜きだった。

最近詩織は頭を撫でてくれる事が多くなった。わしゃわしゃって強い感じじゃなくて、そつと手を置いて軽く撫でるみたいな感じ。

私は嫌じゃなかったし、むしろ心地よかったからいっぱい撫でてほしかった。詩織もこういう事でストレス発散とかしてるのかな? って疑問に思う。

詩織は優しい。

頼みごとを基本的に断らず、露骨に話を逸らしても見逃してくれる。魔法少女としてだつて弱い子達にグリーンフィールドを届けてる。

こんな風に突然抱きついてもいいか聞いたつて、嫌な顔一つせずにあつて許可を出し

てくれた。

恐る恐る抱きつくと、詩織は何も言わずに抱きしめ返してくれる。私よりも小さい身体は療養期間中に感じたように、少しでも力を入れたら簡単に折れてしまいそうなくらいだ。

人のために無茶するのをやめてほしいって思った。結局のところ、彼女はそういう人助けをやめる気はなさそうである。みかづき荘みたいに大切な人が居なくなるのはとても辛くて悲しい事だから…実際は私の我儘なんだけれど。

申し訳なくなつて抱きつくのは終わらせた。

もういいの？つて言われて名残惜しくは思ったが、いつまでも優しさに甘えていては自分がダメになつてしまうから、区切りをつけていつもの私に戻す。

今日の新メニューを出して話を逸らした。

ここから先に踏み込まれてしまったら、いよいよ戻れなくなつてしまうのを感じていた。

由比鶴乃は由比鶴乃でなくてはならない。大好きなお爺ちゃんのために、大切な人達のために。私は今日も明日も明後日もこれからも頑張っていく。

それでも悲しい事はやっぱり悲しい。いつだってそうだ。頑張ってる事は全て空回りして終わっていた。

本心からの言葉は口に出ない。ただの私の悩みでこんなに頑張ってる人を邪魔する事は出来なかった。いつも通り我慢すれば良いだけなんだこんなの。

そう思えば思う程に泣きたくなってくるのはいつまで経っても変わらなかった。

ねえ詩織。私はどうすればいいのかな？

どうやったら詩織みたいに心の底から人を思う事が出来るのかな？ どうしたら全てを投げ出したい気持ちにも整理をつける事が出来るのかな？

教えてよ、私にはもう何も分からないや。

Part 12 バイバイ、また再走

神浜大東団地。

幼馴染の私達が住んでいる、思い出の詰まった大切な場所。

市内でも屈指の巨大集合住宅であるここは、神浜市の東…大東区に位置している。全60棟で、商業施設も併設してある団地。

公園で友達と楽しくおしゃべりして、夕方になればどこかの家庭で夕飯になるだろう。美味しい匂いがして、屋上からは辺り一帯を見渡せる心地よい景色。

今日もいつも通りの変わらない朝を迎えた。でも実際は違って、もう既にいつもの日常は壊れ始めていたんだ。

最近この団地では色々な事が起きていた。近所の大人達から「物騒な事が起きているから気をつけて」という心配の声を何度も聞いた。

一番多いのは不審者情報。ところどころ…というか張り紙も出されてるくらいで、その張り紙をよく見かける。

そのせいで団地に妙な雰囲気漂ってきていた。

…暗い話は置いとこ！

そういえばこの辺でクローバーを見つけたんだ！近所の人から教えてもらったけど、クローバーって三つ葉が普通なんだって！

四つ葉は変わり種で、珍しいから見つけた人には幸運が訪れる！

じゃあ幸運は来ない…？って思ったけど、幸せはそう簡単に見つかるものじゃないから、今が一番幸せだから私はまだ大丈夫！

そうこうしてたら見覚えのある背中が見えてきた！同じ団地に住んでる幼馴染のれいらとせいからだ。

2人はこつちに気づいてないみたいだったから、大きな声で驚かしてみる。案の定、とつても良いリアクションを取ってくれた。

せいかは立て続けに驚かされていたようだった。少し悪かったかもしれないなあ……。それで2人と話をしながら学校に登校する。今日もまた一日が始まった。

知らない事を知るの、楽しいと思うんだ。だから私は学校は好きだよ！勉強も！私は普通通りにしてるし、楽しい事を楽しんでる！

でも周りの子達は私の事を変な子だって言う。流石に私でも、これは馬鹿にされてるって分かる。

昔からいつもそうだった。どうしてかなんて理由は私には分からない。『天然』とか『不思議』とか言われて、いつも笑われるのは変わらなかった。

そういう風に見られるのは仕方ない事だと思う。でもやっぱり考えちゃうよ。そんなに変なのかな……。

ううん……変なのってそんなに笑われたり、からかわれたりするものなの？そんなに私って……ダメなのかな？

今日、2人と一緒にお弁当を食べるんだ。だから誘ってくれたのを断って、自分の教室から出て行く。

友達と約束があるって言ったら、『今度見せてよ』って言われてしまった。友達は見せるものじゃないのに。

どうにもならない気持ちを抱えて視聴覚室に向かう。ここは人があまり来なくて静かな場所なんだ！

せいかが教室に居ない時は大概この視聴覚室にやってくる。今日もクラスを覗いたら居なかったから、多分ここに居るんだろう。

ノックを言ってから入ると、やっぱりそこにはせいかがいた。れいらは他の子達と食べてるのを見たから、今日はせいかと2人でお昼ご飯！

一緒にいれるだけで明るい気持ちになれる。楽しい事だけ話していたかったんだけど、さつき教室で言われたばかりだったから、つい頭で考えていた疑問が口に出ちゃった。

しまったって思ったんだ。慌てて誤魔化して、自分が団地の不審者だー！とかなんとか。

せいかもそれには乗ってくれたけど、話が気になったのか、せいかなりの考えを私に話してくれた。

「変……っていうのは人と違うってことでしょうか？それって当たり前の事だと思うの。」

「……当たり前……？」

「自分は自分、同じ人なんていない。だって、みとはみとだもん。違って当然だよ。」

心に爽やかな風が吹き込んだ気がした。考えてみれば単純な事だったのかもしれない。

それ以上に、せいかが私の事を思ってくれているのに感動していた。良い友達を持つたなあ……なんて感傷的な事を感じている。

ふとした時、携帯に着信が入った。れいらから送られてきたモノで、誰かの掃除当番を変わったから帰るのをちよつと待つてほしいって。

れいらは優しいね！

そう言ったら、せいかが「人が良すぎる」と言う。しんみりとした空気は無くなって、普段の空間が広がっていった。

団地に帰ってきたら、3人いつもの公園でおしゃべりをする。学校での話とか、最近の不審者の話とか。

途中でせいかがハツとした様子で、頼まれていたらしい用事を思い出したから、今日はここで開きつて事になった。また明日と言って自分の家である25号棟の502号室に帰る。

お母さんがどら焼きを買ってきてくれたから、しっかりと手洗いうがいをして、それ

から食べる！うん、美味しー！

私のお母さんは心配性で、学校での様子とか不審者のお話とか、私の事をすごく大切に思ってくれている。小学生の頃、先生から私が学校に馴染めていない事を聞いてから、より一層気にかけてくれた。

お母さんは私の事で悩まないでほしいと思う。勿論大切に思ってるし、思われてるのも嬉しい。だからこれ以上の心配を掛けたくないのも事実だった。

居たたまれなくなつて、買い物に行く嘘をついて家から飛び出てきた。思わずノートを買うとは言つたけど、まだ要らないだろうし予備つてことにしよう。

辺りはすっかり夕方になっていて、とりあえずそのまま歩き出す。そうしたところで先程別れたばかりの姿が見えた。

「れいらー！」

「みとー！」

本当にさつきぶりだったから、別れの挨拶もした手前なんだか照れ臭くなってくる。

どうやられいらも買い物に行くらしい。カレーのルウと頼んでたという本。本の方はお菓子作りの本なんだつて！

せつかくだし、れいらと一緒に買い物に行く事にした。

それでその帰り道。

せいかつぱい人が歩いてるのを見かけたんだ。ここからじやよく見えないけど、用事があるって言つてたからそれなんじゃないかな？

「……団地の商店街に用事……？」

団地には『団地中央商店街』と呼ばれている商店街が併設されている。最近は近くに大型スーパーが出来てしまつて、店の大半はシャッターを下ろしていた。

昔ここにあつた駄菓子屋でよくみんなで遊んでただけどなあ……もう閉店しちゃつたんだよね。

でも確かに……れいらが言つた通り商店街から出てくるなんて、一体どんな用事なんだろう。

妙な胸騒ぎがやけに気になっていた。

それで結局のところ、妙な胸騒ぎは的中していた。

団地で話題になつていた不審者が、商店街で見つかつたらいいんだ。捕まつたという訳じゃなくて、自ら保護を求めてきて……。4号棟の人だったみたいだけど、今回の件

を何も覚えてないって！不思議だよね。

そんな感じで話していたら、れいらが昨日見かけたせいかわい人について聞いた。せいかは行ってない。そう言ってるけど、なんとなく誤魔化そうとしてるんだなと感じる。

その後急にせいかは家の用事を思い出したらしくて、すぐさま帰って行っちゃった。様子がおかしかつたねなんて言葉は喉に突っかかって、それ以上話は進まないように、この事を気にしない努力をする事にした。

それでもこの話は続いて、今度は学校でれいらに呼び出された。一人で抱え込んでいたら頭の中がごちゃごちゃしたんだって。

れいらは商店街に行ってみたらしい。そして、あの時見たのは本当にせいかなんじやなかって思ったって。

私は今までの仲を壊したくなくて、色々話を引き延ばしたけど、せいかともう少し話があったという気持ちに嘘偽りは無かった。

今、団地の公園で話をする。

れいらは単刀直入に、せいかは何をしていたのか聞いたんだ。本当にただ最近のせいかの様子が気になっただけなんだよ。

だから………

「やめてー！」

突然の大声に私はびっくりした。そんなに教えるのが嫌なの……？

せいかは商店街に居なかつたって一点張りで、怒らせてしまったのかと心配になって泣き続けてしまった。

2人は言葉を発さない。どのくらい時間が経っていたのかは分からなかつた。その後どうやって帰つたかとか、どうやって別れたかは一切覚えていない。

ただ私達の間には深い亀裂が出来たのはどうしようもない事実だつた。

私は家に帰つてからも泣いていて、事実をひしひしと感じているだけ。

本気で言い争う事なんて今まででなかつたのに、れいらとせいかが喧嘩してしまった。あんなに怖い顔をしたせいを見えるの、アレが初めてだつた。

どうしてこうなつてしまったんだろう。せいかに何があつたんだろう。そんなに言

いたくない事があるのかな……？

お母さんから声を掛けられる。余計な心配をさせたくないから、本当の事を隠して大丈夫だって事を伝えた。

だけど深刻そうな顔はそのままに、大事な話を切り出した。私にとってとても大事な話らしい。

夜中なのに夢中で外に駆け出した。

いつもの公園で一人、涙の量はさつきよりも増えて泣き続ける。どうしてという思いは止まらない。

こんなに大好きな団地から、こんなに大好きな友達から、離れて引越すだなんて。れいらもせいともあんな事になってしまった。私にはきつと…何もできないんだ。

「どこ…どこ…どこにあるの…？」

四つ葉のクローバーを見つけると幸運が訪れるんだよ…もう一度元に戻って欲しい。戻って欲しい。幸せな日々に戻って欲しい。

「……見つからないよお……」

スカートも指先も土で汚してしまっただけ、四つ葉のクローバーは見つからない。そ

れがなんだかもう私に幸せはやって来ないって言ってるみたいで、余計に悲しい気持ちになった。

地面に座り込んで泣く私の耳に聞こえたのは、鳥の羽ばたきだったんだ。小鳥のような音じゃなくて、もっと大きな音だったから、思わずその方向に顔を向ける。

見れば真つ黒なカラスが嘴にクローバーを啜えてた。

脚で地面を蹴って器用に私の前まで来ると、そのクローバーを差し出した。私にとって事なのかな…？

受け取ったそれは四つ葉の変わり種だ。私が探してた幸せの象徴。

「……………ありがとう……………」

感謝の言葉を伝えると、カラスはその大きな翼を広げて空高く舞っていった。

そしてカラスが去っていったのを確認すると、物陰から白い喋る動物が現れた。何を言ってるか全然分からない。内容は頭に入ってこなかった。

私…夢でも見てるのかな…………

四つ葉のクローバーをくれたカラスが飛んで行った方を見上げてみる。色々と起きすぎて疲れてしまっていた。

でもこの日はまだこれだけで終わらなかつた。

見上げた屋上に居るのは……れいらとせいとか？

「やめてー！」

次にその言葉を言ったのは私だ。その夜はもう何が何だか分からなかつた。

屋上に慌てて来てみれば、不思議な格好をして大声で喧嘩している2人。どうしちゃったんだろう、これからどうなっちゃうんだろう。

言葉の喋る動物の事を言ったら、れいらとせいかは既に知っているようだった。私だけ知らずに仲間外れだったの？ そうだったんだ……。

私はせめて2人が仲直りして、安心してから心残りなく引っ越したいと思う。
伝えたんだ、伝えなきやいけなかったんだ。いずれにせよ、この事は言わなきやいけ
なかつた事なんだ。

れいら……せいか……

……私……

「もうすぐ引っ越しちゃうんだよ」

▶
?

団地組の友情を見守るRTAはーじまーるよー

今回はアザレアイベントの後の静かな休息回でした。神浜のヤベーやつ？ 一体なんのことですかねえ？

今回は続きからです。前回ラストに首を絞められて、手の跡が残ってしまったので少しの間Yシャツが一番上まで閉めときます。

魔法少女だから少し経てば、この跡も綺麗さっぱり消えます。治癒系の固有魔法ならもっと早く消えますけどね。

さて次に来るイベント『バイバイ、また明日』の見守りですが、介入する気はないので傍観姿勢を決め込みます。

正直言つてアリナパイセンの契約シーン見るだけでソウルジェム濁るほどの為、詩織ちゃんと感覚を共有して遠隔カメラするのは時々でいいです。つまり放置します。

それじゃ倍速いきますよー

「その…よろしければ、映画…見にいきませんか？」

おつ組長じゃ〜ん。珍しく映画館にお誘いしてくれましたね。断ると今後が少し不安なので、ガバを潰すために誘いに乗りましょう。

ところで何の映画ですか？特撮？日曜日朝の戦隊モノオールスターズ？ええやん…！

というわけで行くのを約束して映画館にレッツゴーです。いつもの格好でも良いんですが、こういった交友イベントでオシャレすると好感度が上がりやすいです。

といつてもまとまと服がないので、シンプルな服装となったのがこちらです。いつもと変わらなくない？

待ち合わせよりも早い時間に着くようにしましょう。程よい感じの時間に来とくと、ゲームでも相手に好感触ですよ。

「お待ちせしました…！」

スゴイ！カワイイ！組長といえば魔法少女姿とか制服とか着物とかって感じなので、

可愛らしい私服に身を包む組長はカワイイですね。

これは…気合い入ってるな？ ネームドキャラの私服などは、制作者サイドの力の入れようがよく分かるのでとても好きです。

それでは映画を見にいきましょう。組長がわざわざ特撮の映画チケットを用意してくれたので、お言葉に甘えて思い切り楽しみます。好きなモノを聞いたのってこの為だったのか！ やるやん……。

今回のこのイベントは交友イベントの一種ですね。

殆どの場合はプレイヤーから発生させて、好感度を上げる事が出来ます。この組長のように、相手側から誘われる事も勿論あります。

こちらから起こす時は少々運が絡むところがありますが、誘われる場合には基本確率が絡みません。つまり失敗する事は滅多にないって事です。

その条件で失敗させるためには、余程の事をしないとけません。その行動に（うまあじは）ないです。

R T A 的に交友イベントはうまあじです。たった1日の行動権を消費するだけで、キャラの好感度を通常の接触よりも得ることが出来るからです。

あと単純に殺伐とした魔法少女界限の目の保養になります。ああ、みんなかわいい

いんじやあ〜。

注意点は映画を見にいきたくなる事です。作中劇も結構クオリティ高くて楽しめるんですけどね。BGMなどのアルバム詰め込みセットの中にこういったモノの劇中歌が収録されています。

たまにさゆさゆが歌ってます。いきなり水名ローカル熱血口ポットモノを歌い始めて困った時があります。しかもその試走時は水波レナちゃんが主人公属性に目覚め始めました。

それでこの映画イベントで見る物によって若干や精神に影響を与えます。今見てるのはヒーロー物なので、一部の性格カテゴリ（今回は善性関係）の特徴が一時的に引き継がれます。

しばらく経てば剥がれますが優秀なバフをくれる時があるため、通常プレイでは様々な面でかなり重宝します。クソほど強い子が出来る時が本当にヤバかったですね。しかしこれはRTAなので、映画館バフは役に立てません。

お！見終わりました。本日の判定：普通ですな間違いない。これで失敗とか取つたら色々と酷いことになってました。

組長も存分にお楽しみただけの様子です。やっぱりロマン……感じるんですよ

?

礼を言いつつ飴玉を渡しませう。もつと詩織ちゃんも仲良くしてくれよ。頼むよ。実際このイベントまで来たから結構上がつてるとは思うんですけど？

いやあ組長可愛らしかったです。

最高の休日になりました。ああいった作中の作品を見る時は、RTA中の貴重な気休めタイムです。

さてお次は相談所に通います。まだ会っていないネームド魔法少女たくさんいるからね仕方ないね。今後のイベントのためにも、もつと交友関係を伸ばしていきたいです。一度会っただけでも展開がスムーズになりますから、積極的に狙っていきましよう。

たのもー！ここに会ってない魔法少女はおらんかー！？え？今日は組長が相談しにきてる？なるべく邪魔にならないようにしますんで……。相談事を言ってくれないという事はまだ組長の信頼度は足りてないみたいです。一緒に映画見に行つたじゃないですか！どうして…！？！？

まあ気にしても仕方ありません。とりあえずななかさんは相談中なので、受付のあき

らさんとお話ししときます。神浜大東団地についてどのくらい知ってるか確認したいですからね。出来れば団地の魔法少女について知りたいんですけども……どうですかね？

「あくまで噂なんだけどね。あそこには魔女が住み着いてるらしいんだ。」

ビングゴですね、参京院のトラブルシューターは優秀だなあ。その事をチームには話したんですか？その話を受けてななかさんが接触した話をしないと、団地の魔法少女について分からないですよ。

「一応、団地にも魔法少女はいるらしいんだ。でも向こうの方は助けを拒否したって聞いたよ。」

はえくなるほどなあ。ちゃんとこの辺りの会話はしてくれたようです。これで団地に魔法少女がいるって事を知れます。

互いに干渉しない感じになってはいますが、別にクラス使って覗くくらいしても構わないのだろう？なので義手くん2号を飛ばしておきます。備えあれば憂なしですしね、非常事態の時に緊急で呼び出ししてくれるようにあらかじめ指示しておきましょう。

ところで組長固まっていますけど大丈夫ですか？なんかデジャヴを感じるんですけど……はて？何かあったんすかねえ？

「うーん、やっぱり話せないかな……。」

これはもう地道に組長の信頼度上げてくしかないです。そうときまったらとことんやっつてやりますよ！とりあえず飴ちゃんをあげて頭を撫でていきます。オラ！詩織ちゃんに頼るんだよ！

あ、やばいですね。更に固まってしまいました。これには詩織ちゃんも困り顔。ななかさんのこれからが不安になってきますね。映画館行った時は普通だったんだけどなあ。

それじゃあそろそろ帰ります。今日も知らない人に会えませんでした。走者の運が落ちてきましたかね？

今回は作中映画鑑賞でかなり時間を取ってしまったため、動画の尺の都合上今回はここまでになります。

ご視聴ありがとうございました。

▶
?

神戸市のとある廃墟一帯。

当然ここに人なんてもう住んでないし、行人人なんて来るはずがない。静かな廃墟で僅かに聞こえるのはカラスの鳴き声とかその程度。

だけど、『物好き』な人っているでしょ？

私もその一人なんだ。こちら辺で一番大きい廃墟に着くと、寂れてるけど立派に役目を果たしている入り口をノックする。

すると扉を改造して作られた小窓から、白い柔らかな手が伸びてくる。肌の感じからして少女の腕と呼ぶのが適切であろう。

初めて訪れる人からしたら何をしているのか分からないかもしれない。ここはある意味一見様お断りみたいな場所なんだ。何かあるのか知るためにもいくつかの手順を踏まなければならない。

私はポケットからとあるカードを取り出して、小窓から出てきた検問役の手に渡す。「……入ってよし。」

カードは識別みたいなので、落としたりしてもこの存在がバレないよう、巧妙にカモフラージュされている。それに検問役に渡す時は本人の魔力を微量ながら流して、誰が来たのかとか確認したりするんだ。

検問の子に挨拶をして中に入る。

ここではとある集まりがあつて、それに参加するために私も大分苦勞をしたんじやないかなつて思う。

廃墟に入つてすぐ中には大きなホールがある。そこら辺に各々の好きな物を持ち込んだり、椅子とかソファとかが中心を囲むように点々と配置されていた。

「おはよう、どうかした？」

「最近なにか気になる事ある？」

「んーいや…私は無い。強いて言うなら今度新人歓迎会みたいなのがあるくらい。」

「そつか…どこまで増えたの？」

「ちよつとだけかな、それでもここの人達は結構居るよ。」

丁度良く人が居たから近況を聞いてみた。特に新しい情報があつたわけじやないから、世間話を続ける。

来るのは全員、魔法少女の契約をした子だ。

その中でも強いつて名が知られてる人達は居ない。居るのは弱い部類が大半で、せいぜい中堅つて感じの子がちらほらと。

それもそのはず、ここはひとつの互助会みたいなものだ。

魔法少女同士で助け合う事を目的とした組合で、さつきのカードとかはこの会員証

である。いやまあ、名目上はそういう崇高なモノなんだけど、なんというか実際の目的はまた少し違っている。

一口で言っちゃえばファンクラブだ。うん。勿論たかがファン達がここまで大きくなったのには、とある理由が絡んでいる。

行き過ぎた信仰というのか……一種の宗教じみてるとは思うけどね。同じ志を持つ者しかいないから、ここでは気兼ねなく過ごせる人も多い。私もここに入ってる時点で同類なのかもしれないなあ……。

「そういうえば頼まれてたやつ渡しといたよ。ありがとうって言つてた。」

「本当か？良かった……皆で分け合つてお金を出した甲斐があつたね。」

私は情報収集と装つてやってきている。有益な情報を得られたりするし、あながちこの表現は間違つてないだろう。自分の意志で入つたから、出来れば周りには内緒にしたところ。

ここは互いに助け合う事を重んじていて、能力の優劣とかあるけど内部で圧政とかされてない。というのも、やはり同じ気持ちで集まつた者の集まりだからとしか言い様がない。

組織の魔法少女達は変わり者ばかりだ。でも皆、とある人を応援したいだけなんだよ。

……悪く思わないでね、詩織さん。

Part 13 団地の走者

経験値だけ貰いに行くRTAはーじまーるよー

いやあ、前はほのぼのの日常回でしたね。

裏ではちゃんとイベントが進行しているみたいです。これからの後半も本来の通りに進んでくれればいいんですけど。

さて今回は『バイバイ、また明日』のイベントに少しだけ絡みます。何故かっていうとイベント参加のうまうま経験値を貰いに行くからです。

しかしそこまで大きく介入する訳ではなく、団地の魔女を倒しに行くだけ！簡単！詩織ちゃんでもラクラクできます。魔力感知のためにも義手くん2号を飛ばそうねえ。

大東区に赴く時期は団地組が全員契約してからにしましょう。じゃないとイベント結果が壊滅的になる可能性があります。新しく走る人は気をつけようね！（2敗）

具体的には彼女達が屋上で心を繋げてからです。それから団地魔女捜索に入ります

ので、間違っても和解前は介入しないようにします。

そして待つてる間暇なので、かもれトライアングルに貢ぎます（断言）

実はアザレアイベントの最後で会ったきりで、まともな交友していないんですよね。なのでスイーツをプレゼントします。

プリンとかケーキとか適当に無難なモノを3人分用意して、かもれが揃つてるところ（主に魔女退治後）に偶然を装って会います。そして辻ブレします：うーん、完璧だな！『十咎ももこ』『水波レナ』『秋野かえで』のかもれトライアングルの3人は、チームみかづき荘程ではないですがメインストーリーに多く絡んできます。

本編の後半に入った後では、いろはちゃんとやちよさんだけになってしまったみかづき荘を支えてくれますし、これはもう感謝しかねえな？

なので積極的に信頼度を稼ぎに行つても問題ありません。むしろお釣りが返つてくる事でしょう。

しかしゲーム内で本編開始前に特殊なアイテムを手に入れると、ソシャゲ版ではなくアニメ版のオリジナルシナリオになってしまいます。

この場合のアニオリ本編で注意すべき点は、かもれの3人がマジウスの集会に赴いて

行ってしまう事ですね。難易度ハードの神浜ではそこからどんなガバが発生してしまうか見当もつきません。

アニオリ版は最近のアップデートで実装されたばかりですからね。まだまだ検証が足りていません。そのため、ソシヤゲ版を走るのが定石となっております。

あ！これは美味しそうなケーキですね。このプリンも甘くて良さそうです…これも買っちゃいましょう。場所確認、値段確認…ヨシ！（現場猫並感）

詩織ちゃんはこの前高級ケーキ買ったから買っちゃダメだよ！手持ちの飴で我慢して、貢ぎ用のお金を貯めていこうな！

それじゃあ早速買いに行つて贈り物を渡しに行きます。待つてろよかもれトライアングル！

「あんなに言われてたのに、何ですぐ使っちゃうんだ？」

ハイ…すみません……まったくもつてももこさんの言う通りです。でも仕方ないん

や！こうするのが一番効率のいい交友の仕方なんや！お友達料金…？何のことですか？

しかし！ここで挫けるような詩織ちゃんではありません。性格『頑固』なだけはありませんよ、走者のコマンドすらも受け付けなくなる時ありますからね。

つまりもう渡すと決めている詩織ちゃんの意味は曲げられないってことです。もう買っちゃったし、受け取れエ！

「まあ…せっかくだから貰つとくわよ。」

「あのー！ありがとうございます……。」

ほら！スイーツ達に罪は無いんです！だからももこさんも頂いてほしいな！どうですか？貰えませんか？残念だなーバイトで稼いだお金で買ったのになー。

この前のアザレアイイベントの調査パートのお礼ですよ！お前も素直に受け取るんだよオ！

「はあ…程々にな？」

よし、楽しく話せたな！やっぱゴリ押しは正統派ロールプレイなんだよなあ……。

後は軽く世間話をしてから飴ちゃんをあげて帰ります。それじゃあな！夜道に気をつけて帰ろよ！

魔女狩り後に抑え込まれちゃった♡…アホかな。

完全に手口が誘拐犯のような鮮やかさがありましたよ？本当に夜道に気をつけるべきは走者の方でしたね。

……って結界ですか!?？もしかして新しくやってきた魔女による犯行？そうだとしたら直前まで気づけなかったのやばいです！

…うん？なんかこの結界内部見たことありますね？嫌な予感がしますよ…思い当たる人物が1人居るんです……！

「見かけたらやりたくなるんですケド？」

アリナア！やつはお前かよ！ちよつと襲撃早くなあい？そんな頻繁にオモチャにされてたら詩織ちゃんもたないんですが!?？見かけたら…じゃねえんだよオ！

しかし前の襲撃前に言つてた事が今回も適用されるなら、オモチャにされてた方が安
全っぽいんですよ……走者の悩み所さん!??ですよこれは……。

首絞めるならさっさとやりな!まだうつつすらと跡残つてますけど!乙女の肌は大事
にしくちやいけないんだぞ!

「アリナ、今日は首絞めの気分じゃないワケ。」

いやそれ以外には何があるんですか!??分からないヤツの方が怖いんですよ!??具
体的に教えてくれませんか!??

うわ!押し倒すんじゃないやねえ!ちゃんと腕を固定して抵抗できなくしてるのに、このイ
カれたアーティストの本気具合が伺えますよ……こわいなあ。

ええ……シャツのボタン開けないでくださいよ……絞め跡で興奮するタイプですか?
最早パイセンの恍惚具合でどのくらいヤバイのか察してきますね……。

「大人しくしててヨネ。」

ガチ恋距離はマズイですよアリナさん!ていうか一体なにをするつもりなんですか
ねえ……パイセン何企んでるんですか?

アツ!痛い痛い痛い!待って?待って!体力削れてるんですが!??今度も碌で

もない結果になるんじゃないか！パイセン今思いつきり首筋噛みましたね!!？この体力の減り具合からして結構出血してます！吸血行為、好きなんですか？とんでもねえ女だ。随分いい音鳴らして飲みますねえ！余裕だ、馬力が違いますよ。

いや詩織ちゃんが出血し過ぎてヤバいです！主に体力がゴリゴリ削れていつてます！死ぬウ死んじやう！RTA打ち切りになっちゃう！

「…良いテイストしてるワケ！」

良い味してるかもしれないんですが、パイセンのせいでもた詩織ちゃんが死にかけてるんです。頻繁に死にかけるブレイキャラだなあ……（遠い目）

グツタリした詩織ちゃんとは対照的に、この若手芸術家は満足そうに輝いた顔をしてますよ。アーテイストはヤバくならなきゃやっていけない世界なんですかねえ…？

貧血のデバフが付いています。これは身体能力系のステータスを常時下げてるヤバい代物です。何がヤバいつてデバフが治るまでの期間が長いって事です。血の量、生産增量サービスクださい……。

まだまだ首元を隠す必要があります。これ他の人にバレるのが怖いなあ。

「じゃ、今日はここまでにしてアゲル。」

おう帰れ帰れ！本編までに会うんじゃないやねえぞ！詩織ちゃんの心労がマツハになるからな！

義手くん2号！団地の方はどういう様子ですか？3人の魔法少女が魔女を探してる？もう？場所は？12号棟の5階？え？今515号室の前で消えた？あつ（察し）ふん……。

こマ？何が何でも今日中に見つけてやろうという意味を感じる。とりあえず義手くん2号はそのまま追いつけて下さい！

本来なら明日から団地の魔女を探し始めるんですけど、思わぬところで短縮になりました。どういうことなのでしょう。

しかしこれはチャンスですね。ここで魔女を見つければ早々にTRUEを迎えられます。経験値も貰える事です！

ちよつと今の服装は血で汚れてるので、魔法少女衣装でサツサと移動します。善は急げです！間に合え！

団地組の魔女搜索は翌日の夕方から始まり、無いはずの516号室を探します。しかし彼女達の搜索は1日で終わる事もあれば、二週間以上かかって見つからないという事態もあります。

なんせ難易度ハードの神浜。試走中に一回だけ、魔女に団地組の3人が全員操られ、神浜大東団地幼馴染心中事件としてニュースになった時がありましたからね。いくら関わるキャラが少なくてガバが減るとはいえ、ここが修羅の国である事に変わりはありません。

ません。

団地の魔女搜索で、特にプレイヤーも気をつけなければいけないのは、皆さんご存知屋上の貯水塔です。

先駆者様も述べている通り、そこにあるバツ印を発見してしまうと失敗になってしまいます。なので忘れずに破壊しようね！（6敗）

ええ、先に行った団地組がソレを見つけてしまっても失敗になってしまいます。

だからここで詩織ちゃんも同行して正解のバツ印を見つけたら、魔女搜索は成功します。現場に急行しようね！

ここが神浜大東団地かあくまでテーマパークにきたみたいだなあ。

既に時刻は既に草木も眠るウシミツアワーです。良い子は寝る時間なのに魔女探しちゃうんですよ。詩織ちゃんは学校通ってないので時間関係ないです。

515号室前にダイナミックエントリー！でも住人達は寝てるので静かに入りましょう。

でー、確かこちら辺にバツ印が…ありましたありました。続く方向を辿っていくと境界を見つけます。早速飛び込め〜。

お次は商店街に飛ばされましたね。ここは団地組が屋上に行くかここに留まるか選択します。

尾行させてる義手くん2号によると正解の選択肢を選んでくれたみたいです。追いつくまでもうすぐかな？

まあここでは何故か正解のルートを知っているので迷わずに進みます。ここでは魔法の手下と交戦する事になります……現在進行形で誰か戦ってますね。十中八九、団地組です。義手くん2号がいますし、間違いないでしょう。

一応後から来た場合、手下が倒されてるのを見て、先に魔法少女が来ている事を知ることができません。

結界内にお邪魔して、一匹だけ違う場所にいる手下を短槍でスナイプします。援護援護！これが後方支援型なんだよなあ……。

団地組に話しかけるのは手下を殲滅してからにします。詩織ちゃんの交友関係のためには犠牲になってね♡

「…誰かいるの？」

詩織ちゃんは通りすがりの魔法少女だよ。じゃんじゃん頼ってくれて良いぜ？これ飴ちゃんと連絡先ね。ここに魔法が住んでるって聞いてさあ……ちよつと倒しに来ただけなんですよ！

大丈夫大丈夫利害は一致してるよ！信じて！ところで走者はもう知ってるけど、君達の名前教えてくれないかな？これから仲良くしません？ね？ね？

ちよつとせいか人が人見知りで固まっていますけど、他の2人が応対してくれるみたいですね。その君！深呼吸して落ち着かないかい？

ここではバリバリ不審者に見えるでしょうが、みとちゃんが固有魔法の『心を繋げる力』を使って警戒心を解いてくれます。なのでいきなり握手と言われても、断つたり疑つたりせず手を差し出そう！

OK？よし！やったぜ。

困惑されつつ許可を出されましたが、とにかく同行できる事になったので大丈夫です。信頼度？知らない子ですね……。

じゃあバツ印を辿っていきましょう。商店街のバツ印を調べると12号棟の屋上に飛ばされます。

はい！ここで誰かが行動するよりもはやく下の公園を見ます。そしたらバツ印を発見するので、団地組が貯水塔の事を考えないようにすぐさま呼びかけます。

おーい！こつちにバツあったぞー！

全員が確認し終わると、今度は12号棟の5階に飛ばされます。結界に入る前と同じように見えますが、存在しない筈の516号室が目の前に現れます。

正直言って516号室の存在を現時点で詩織ちゃんは知らないのです、イベントの中心である団地組が勝手に話を進めてくれます。

この516号室に入れば、やっと『団地の魔女』戦になります。

このイベント戦も団地組に丸投げします。詩織ちゃんも遠くから使役槍で援護しましょうねえ。こちらのベテラン活動歴と比べたら、団地組は圧倒的に契約してからのので、危ないところはしつかりとサポートしていきましょう。

まずは魔女だけに集中できるように手下を一掃します。槍の幅は短いですが足場にも応用できるので、それも駆使して戦場を駆け回っていきます。

そつちお願いしますね〜！ヨロシクウ！

「はあ……はあ……」

「……倒した？」

結界が解けた！『バイバイ、また明日』完！

戦闘が終わると12号棟の渡り廊下に戻ってきます。そして515号室の隣を確認しても516号室なんてありません！現実世界に無事戻ってくる事が出来ました。

実は団地組の3人はグリーンフシードを見るの初めてです。団地では魔女じゃなくて、その手下が蔓延っていたからです。

今回の魔女ただだと心配なので、あと2つほどグリーンフシードを渡しておきます。ソ

ウルジエムが魂って事は知ってるけど、魔女化の事は知らないから、1人でも魔女になつてしまうと連鎖して魔女になる可能性がありますしね。

ついでに神浜の魔法少女について教えます。

東で魔法少女をやつていくなら、長である和泉十七夜を頼つて下さい。なにかあつたらこの人を頼ると効果靦面でしょう。西なら七海やちよつて人に会うといいですよ。詩織ちゃんに連絡してきても大丈夫！

という訳で魔法少女キュートリアルを団地組に教えてから、詩織ちゃんは静かに去っていきます。君達は学生なんだから今日はもう寝な！サヨナラ！

今回はここまでにしようと思います。

ご視聴ありがとうございました。

▶?

れいらとせいかは昨日の夜、屋上で喧嘩をしていた。知らない話をして、変な格好をして、私だけが状況について行けなかった。

れいらから先に話を聞いたんだ。魔女、魔法少女、とか……まるでおとぎ話みたいな事ばかり。せいかの方の事情もその話で大体分かってきた。

せいかは魔法少女の世界に私達を巻き込みたくなくて、全部抱え込もうとしていた。怒っていたのも多分、そういう事なんだろう。

結局その日、会話は続かなくて家に帰って行ってしまった。引っ越しなんて本当は嫌

なのに、2人が喧嘩してるのを見るなんて嫌なのに。

カラスから貰ったクローバーが机の上で静かに置かれていた。

私は学校に来てからもずっと昨日の事について考えた。どうしたらいいかとせいかは仲直りしてくれるのかな?とにかくその方法を考えなくちゃいけないって必死だった。

元通りにならなきゃ、引越しも満足に出来ない。

まずは話をするところから始まるよね。あの時せいかは何も言わないで去って行っちゃったし……せいかから話を聞かなきゃ……。

今は丁度お昼だから会いに行こう。そう思って席を立ったんだ。覚悟を決めて教室から出ようとすると声を掛けられた。

「今日も変なお友達のとこに行くの?」

「今度見せてって言ったじゃん。」

大事な友達の事を……れいらとせいかの事を変なって言われて、私はカツとなつて言い返した。喧嘩してるのもあつてストレスが溜まっていたのかもしれない。

『変……っていうのは人と違うってことでしょうか?それって当たり前の事だと思うの。』

『自分は自分、同じ人なんていない。だって、みとはみとだもん。違つていて当然だよ。』

その時、せいかの言葉を思い出したんだよね。

「…変だからって何が悪いの!?？」

「はあ？」

「分らないからってどうして馬鹿にするの！」

「…な、何キレてんの？」

「私の大切な…大切な友達をそんな風に言わないで！」

クラスメイトからの視線を背中に浴びながら、教室から一心不乱に駆け出した。そのまま視聴覚室に向かったけど、そこにせいかはいなくて空振りになる。

連絡を入れても返事がなかったし、せめてれいらと一緒に帰ろうとしても、用事があるからって断られちゃった。

結局一人で帰ってきて、団地の公園で涙が出てきちゃったんだ。ちよつと前まで仲良しだったのに、私達はずっとこのままになるのかな？とか考えて、そしてあの喋る動物と話をする事にしたんだ。

2人の仲を解消したいって感じの事を言ったら、そのキュウベえは契約の話を持ちかけてきた。何でも願いが叶うっていう魔法少女の契約をしろって事らしい。

でもれいらはその願いでせいかと元通りになる事を望んだけど、実際には仲が悪くなつてしまった。おそらくこの契約は一度きりだから、叶えた願いがもたらす結果について、よく考えなくてはいけないんだろう。

何というか言葉にしづらいけど、魔法少女の契約はどこか怖い。簡単に乗つてはいけないつて私の直感が告げている。

でも1人じゃできないような事だつて実現できてしまう。れいらとせいかを仲直りさせる事だつてできる。

2人は私が魔法少女になる事を知ったら怒るかもしれない。

……私の覚悟はもう決まっている。

れいらとせいかを屋上に呼び出した。

直接会話したかったから、電話じゃなくてメッセージを送る。大事な話があるから屋上に来て欲しいつて。こっちの方が来てくれそうだなと思つたんだ。

結果として2人は来た。れいらはメッセージを見て、せいかはたまたま気分転換に。

そこで私は自分が契約した事を話した。

2人にはやっぱり怒られてしまったけど、私の気持ちを正直に言った。

これは誰かがどうにかしなきゃいけない事。だから私は2人を仲直りさせたくて契約した。自分の意思で。

2人の手を半ば強引に取ると願いの力を行使した。『心を繋げる力』：それが私の願いであり、私の魔法である。

2人の心の中は一緒に、どっちも団地の公園があつたんだ。

せいかはれいらに対して、れいらはせいかに対して。お互いがお互いの気持ちを知ることが出来た。本心から分かり合える事が出来た。

仲直り…できたんだ！

ひと段落して私は団地に住み着いている魔女の話を切り出した。

信用はできないけど、キュウウえが言うにはれいらがその場所を知っているらしい。他にも色々聞こうとしたらその場から去っちゃったんだよね。

れいらの心の中に入って、魔女の痕跡を探す事にした。その中のれいらは12号棟に向かつて、階段を上って5階を目指していた。

最後に浮かんだのは『516号室』。

この団地では15号室までしかなくて、絶対に存在しない事は分かつてる。でも魔女にはそういう常識が通用しないんだと思う。

魔女探しは翌日にしようって話してたけど、もしかしたら他に犠牲者が増えるかもしれないって思ったら、居ても立っても居られなくなつて、早速今から探し始める事にしたんだ。

12号棟の5階まで来て、とりあえず余計な音を立てないように515号室の前まで来てみたんだ。何か引つかかる事があつてここまで来たら、小さいバツ印を見つけた。

落書きと思つて引き返そうとした私達が発見したのは、だんだんと増えていくバツの先にある結界。

気がついたら団地の商店街の中に来ていた。さっきの結界に飛ばされてしまったのかな？

結界の中かどうか怪しいからさっきの所に戻るか提案したけど、魔法少女の先輩である2人は商店街の中の方が気になるみたいで、先にこの場所を調べる事にした。

せいかか前に不審者を見つけたっていう場所を辿っていくと、またあのバツ印を見つけた。今回はすぐに飛ばされるってわけじゃなくて、魔女の手下？が襲いかかつてきた。

初めて戦ったけど難なく勝利できて、ホッと胸をなでおろす。2人とのコンビネー

シヨンも上手くできて良かったと思っていた。

でもその時、私達以外の足音が聞こえたんだ。

さつきまでは無かった音に私達の警戒心が上がって、音がする暗がりの方を見て身構えていた。

そしてから少しすると、足音の主が姿を現す。

一言で言っちゃうならすぐ真っ黒。普通とは違う変わった格好を見るに多分私達と同じ魔法少女なんだと思う。

その人：弓有詩織さんは団地に魔女がいるって聞いてやってきた人らしい。どうやらこの前クローバーを渡してくれたカラスはこの人が飼っているペットなんだって！

けどいきなり出てきても信用できないって思った私達は、私の力を使って心の中を見てみようって判断して、握手で『心を繋げる力』を使ったんだ。

言ってた事は本当だったよ！団地に魔女がいるらしいって聞いて、やってきたのに間違いは無かった。そこで夜見回ってたら突然消えた私達を見て急いで来たみたい。途中で人に囁まれていたのはどういう事なのか全然分からないけど……。

そこまで見ていたら、突然ブレーカーを落とされたように目の前が一瞬真っ暗になって、気がついていたら元の場所に戻って来てた。

まだまだ分からない事ばかり、とりあえずこの人が悪い人じゃないって事は分かった

んだ。

戻った後に2人に結果を話したら、一緒に魔女を探そうという事になる。

せいかは：人見知りだからね。一回深呼吸してちよつと落ち着いたけど、まだまだ緊張はしてるみたい。

新しく詩織さんが参加して、私達はバツ印の跡を追っていく。

次に飛ばされた場所は団地の屋上。隣の棟の番号を見ると、今いるのは12号棟の屋上って分かった。

貯水塔とかが怪しそうだねって話していたら、団地の屋上が珍しかったのか詩織さんは柵から下の方を見る。多分そっちの方は公園が見えると思うんだ。

「……………ちー」

呼びかけられて公園を見ると、地面に大きなバツが書かれていたんだ。それを見たら急に地面に引き寄せられて：落ちていった。

思っていたよりも軽い衝撃を受けて恐る恐る目を開けると、団地の渡り廊下の前に飛ばされていた。

近くにある扉を見れば、514号室。

でも：なんか変だ。なんかおかしい気がする。れいらが部屋の番号を順に読み上げ

ていく。そして違和感の正体が分かった。

「……516号室……!」

せいかの言う通り、どうやら道順は合っていたようだった。多分この中に魔女がいるんだと思う。んーでも……あれじゃないかな。

「これって不法侵入にならない?」

「……」ここまで来てその心配する?」

「多分結界の中だから大丈夫だよ!」

そこまで来て程よく緊張が解けて、意を決して516号室の扉を開けたんだ。

中は私達が住んでいる部屋と同じで、まるで最近まで誰かが住んでいたんじゃないかって錯覚する。

だけど奥に進むたびに嫌な気配が強くなって、遂に団地に住む魔女と相対した。

私達に配慮してくれたのか、詩織さんは周囲の手下の相手を引き受けて、私達は魔女に集中できる状態になった。

れいらは剣で、せいかは鞭で、私は弓で。3人のコンビネーションは自惚れてもいいほど、しつかりと出来ていたと思っっている。

やがて全力を出し切った頃、魔女の巨体が地に伏した。そしてすぐに結界が解けて元いた団地に戻ってきた。扉の番号を確認しても、516号室は跡形もなく消えている。

……やった！魔女を倒したんだ！

喜びで声をあげそうになったけど、今が夜中だったのを思い出して声を抑える。

魔女から出てきたこの黒いやつはグリーンフィードというらしい。魔法少女にとって重要なもので、ソウルジェムの穢れを取ってくれるんだって。詩織さんは念のためにと、人数分になるように持っていたグリーンフィードも分けてくれた。

それと一緒に最近魔法少女になったばかりの私達に、神浜の魔法少女についても説明してくれた。東なら和泉十七夜さん、西なら七海やちよさん。いざとなったら詩織さんに連絡してもいいよって言っていた。

そこまで言うと言織さんは団地から去っていった。優しい人なのかな？会ったばかりはまだ分からないかも。

「……学校に……気をつけて、ね。」

去り際に言われた言葉で、明日も学校があるって事を思い出したんだ。もう日付けは明日になってるし急いで帰らないと！

その後はまあ、すごく大変だったんだ。

3人とも家族に心配をかけてしまって、団地の新たな噂になっちゃった！…恥ずかしい限りだなあ……。

翌日は寝不足のままです学校に行ったよ。眠気に耐えるのが本当に辛かった！昼休み、一緒にご飯を食べてた時に聞いてみたら、れいらもせいかも同じみたい。

前よりは少しだけ変わってしまったけど、でも明日も明日の明日も…そのまた明日も、私達は変わらずに一緒に！

なぜなら運命で結ばれた魔法少女で、心繋げた友達同士だから！
いつもの挨拶だって変わらない！

バイバイ…また明日！

Part 14 走者に休みつてあるんですか？

束の間の休息を存分に行うRTAはーじまーるよー

前回は無事に『バイバイ、また明日く神浜大東団地の記憶く』でTRUEを迎えました！いよ！やったぜ。

団地組3人とも契約してますし、これはタイムが短縮するに違いないな！（パイセンの吸血プレイから目を逸らす）

今回はその続きからですが、まだ油断してはなりません。それどころかもつと警戒を引き上げてください。理由は勿論、賢明な視聴者兄貴姉貴ならお分かりですよね？

そう本編1年前スタートの鬼門、『散花愁章』が『そしてアザレアの花咲く』TRUE到達によって、確定で発生するからです。

鬼門だから避けたい気持ちはあるでしょうが、発生させないとガバ増量キャンペーン

を常時開催されてしまいます。挙げ句の果てにはワルプルギスの夜が倒せなくなってしまうので気をつけようね！RTAを終える事が出来なくなつて再走する羽目になつてしまいます。

『散花愁章』の詳しい解説及び攻略についてはその時が来たら解説しましょう。

そして理由2つ目があります。

ええ、はい。驚異のランダムイベントですね。これらのものはハッキリ言つて走者の敵ですよ。

ここに来て欲しくないのが外伝コラボイベントの皆々様です。

それぞれ挙げると、すずね☆マギカの『CROSS CONNECTION』、かずみ☆マギカの『Another Daze』でしょうか。

かずみイベントは別に成功失敗関係なく、そもそもかずみを送り届けるだけでクリアできます。

問題は鈴音イベントの『CROSS CONNECTION』です。魔法少女退場からの大惨事大戦、ネームドがやられるだけでも結構リセット案件になつてしまいます。

しかも鈴音イベントに関しては発生すると、第2弾である『Rumors in Disguise』も確実に発生します。こっちもこっちで失敗すれば退場が相次ぐため、どちらのイベントも必ず成功させなければいけません。

ぶっちゃけ詩織ちゃんの固有魔法である『使役』を使って鈴音の対策は出来ず。洗脳して神浜の外に追い出して、その間に襲撃の準備期間を設ける事です。

ですがこれには欠点がいくつかございます。

外伝主人公とだけあつて消費がハンパない事、その場に居なければ発動できない事。

そして詩織ちゃんが危険だと感じて、奥の手を使わざるを得ないと判断しなければ、性格的に濁る可能性が高いという事です。

ただこれは『博愛』なので、その他大勢に被害が行くと考えてくれれば、小を切つて大を救うという感じで楽に解禁する事が出来るはずです。詩織ちゃんの考え方がどういふものなのかは置いときますがね。『善性』とかだと絶対に出来ない方法だあ……。

最後に重要なのがイベントの発生時期です。

『散花愁章』の後ならまあ問題は無いんですが…先に鈴音イベントが発生してしまうと、詩織ちゃんはあらゆる動きを制限されてしまいます。

そう、実は『散花愁章』こそが情報提供者ルート…今までもこれからお世話になり続けるクツソ有能な『使役』の最大最恐の難所なのです。

何故なら『使役』は思った通りに他者を動かす固有魔法。

黒幕の混沌さんが使う『暗示』と同系統の魔法ですからね。ちよつと仕様は異なりま

すが、様々なモノを操れるのに変わりはありません。しかもこっちは生物だけじゃなくて短槍や機械などにも『使役』を掛ける事が出来るクソつよ魔法です。実は詩織ちゃん黒幕張れるくらいのスベックしてるんだよなあ……性格が『博愛』で良かったかもしれないです……主に経歴面の心配で……。

そのためにも今まで固有魔法の詳細を人に教えていませんでした。

しかし初期交友関係において現在未接触の和泉十七夜か、調整屋の八雲みたまなどは固有魔法を知っている事でしょう。なぎたんが詳細を知らなければ、情報が漏れる可能性があるのは調整屋です。

みたまさんは調整を介してこちらの情報を副作用で知ってくれますので、まず犯人だと疑うような事はしませんし、むしろ疑いを晴らすように助言してくれます。犯人は『使役』じゃなくて『暗示』の魔法少女……良い感じに援護射撃をかましてくれるでしょう。

調整屋の立場は中立ですからね、例えこっちが悪役だったとしても、お願いすれば調整屋として出来る範囲の事で動いてくれます。

ここで鈴音イベントが先に入り、奥の手を誰かに見られてしまうと、情報の出所を調整屋一択に絞る事が出来なくなります。不特定多数の情報が出回り、予防線を張る準備すらないです。

だから固有魔法をバラさない必要があつたんですね（例の構文）

『使役』の存在がバレてしまった場合、周囲の信頼度と好感度がメガトンコインになります。特にアザレア組は全てを無に帰すかのような下がり具合です。

そんな冤罪を被せられる状況を打開できるのは、我らが組長である常盤ななかです。ななかさんの固有魔法『敵を見極める力』によって、詩織ちゃんは黒幕ではないという事を証明してもらいます。

そうでもしなきゃ詩織ちゃんが濡れ衣で犯人に仕立て上げられちゃうだろ！いい加減にしろ！そしてリセット案件不可避の状況に追い込まれてしまいます。

強すぎる有能魔法には穴があるってハッキリ分かんだけ。

なのでイベントが発生したら、具体的には昏倒事件の話を知ったら、組長を連れ歩か付き纏うかします。日中から動けて精神・行動操作系の能力持ちソロ活動中の魔法少女とかどこからどう見ても怪しいんだよね……。

それはそうとして折角のイベント後の休息だし、羽を伸ばしまくろうぜ！

というわけで甘いものを求めに行こうと思います。詩織ちゃんも疲れただろうから、しっかりと糖分を補給してこれからも頭をフル回転しようね。走者に休む暇なんて無

いんだよオ！

今日はこちらの新しくオープンしたらしい喫茶店に来ました。一体どんなメニューが待ち受けているんでしょうか。今からワクワクが止まりません、では早速乗り込め！

「お帰りなさいませ、ご主人様！」

扉を開けたらそこはメイド喫茶でした。

ええ……………（困惑）

見た目普通の喫茶店だったんですけど……すごく紛らわしかったです。多分間違えて来る人、詩織ちゃんのものにも居そうですよ。

まあ来店してしまったものは仕方ありませんので、メイド喫茶定番のオムライスと当初の目的の甘いものであるパフェを頼みます。

待ってる間に店内を見渡して暇を潰しましょう。結構繁盛しているみたいですね。お客さんいっぱい来てますよ。

ん？なんか視線を感じますね。どこか見覚えのある客がこつちを見てます。

……………御園かりんじやないか！なぜだ！どうしてここに！とりあえず軽く手を振って挨拶しときますか。お久しぶり〜！元気にしました？こつちは君の先輩のオモ

チャと化してますよ！

「待たせたなご主人、注文のオムライスとパフェだ。」

あつ（察し）ふーん……このクールな感じの駆け出しっぽいメイドさんは……！

東の魔法少女まとめ役、和泉十七夜さんですね……。メイド喫茶、御園かりんと来てもしやと思いました。が、どうやら予感的中していたようです。

これは固定イベント『駆けだしメイド十七夜 闊達自在！』ですね。発生時期は基本的に『バイバイ、また明日』終了後くらいです。

固定イベントだからなのかランダムと比べると、内容は魔法少女界にあるまじきほのぼのを醸し出しています。『読心』の力を持つなぎたんは人の心に寄り添っていけるのか!?？先生の次回作にご期待ください！

このイベントは対処とかしなくて大丈夫な安心安全イベントなので、食べ終わったら普通に会計してその後は放置で構いません。

オムライスには猫をお願いしました。うーん、かわいい。なぎたんが描いてくれた世にも珍しい手書き猫です。記念に写真を撮って保存しておきましょう。

ではいただきまーす！うん、美味しい！これには詩織ちゃんもたまらずニッコリですよ。

「いっふっ……いっふっ……なんてね、なんてね！」

「お願いだから戻ってきてー！」

おや？この声はもしかしてですよ？声のした方に顔を向けましょう。

あれは…江利あいみと空穂夏希です。まだ交友関係ではないので交友しに行きたいですが、生憎今のこの状況だと交友するのは無理です。面白い客がいるなって大人しくチラチラ眺めてようねえ。

多くのチャートで暁美ほむらの神浜来訪タイミングを知るために交友を持つ事でしょう。しかし詩織ちゃん神浜カラスネットワークにより市内の情報強者と化しています。市外から来る人なんて一発よ！そのため優先度はあまり高くないですね。

「なぎたんにお任せ、だぞー！」

出ました！なぎたんの決めポーズです！あれを尻目に詩織ちゃんはお会計してそそくさと出て行きますよう。

ちよつとお先に失礼しますよおく……。

『弓有、後で話がある。』

ヒエ……東のボスからの呼び出し怖いなく！なぎたんのシフト終わりまで、近くの公園で大人しく待ってましよう。お偉いさんだけに無視したら詩織ちゃんに明日はありません。

それで十七夜さんは一体何のようなんですか？後ろから付いてきたかりんちゃん物が凄く不思議そうな顔をしていますけど。

「最近を試していなかったからな。自分の固有魔法の検証だ。」

ほーん、うん？別に検証するような事なくなあ？『読心』は単純に相手の心を読む効果ですよ？

変身しないと使えない、相手の行動が読めるわけではない、といった事が欠点になるでしょうが、情報面や心理戦で大活躍間違いなしの固有魔法です。

応用パターンがものすごくあるようなモノではないので、検証とかする必要はない…なくない？

「これは定期検診のようなものだ。では行くぞ。」

まあ気にしても仕方ないので為すがままにされましょう。それにしても定期検診ですか…もしかして詩織ちゃんの経歴ガバとか起こってるんですかね？詳細が分からない以上、走者は迂闊に手を出せないんですけども……。

どうっすかね？何かありましたかね？異常があつたら走者にも教えて欲しいなあ…って思うんです。

「……………」

ちよつと？あの？十七夜さん？返事してくれないと虚しくなつてしまうので、何か反応を返して欲しいんですが……そんなに詩織ちゃんの心ヤバかったりしたんですか？もしそうだったら詳細が分からない以上、走者にはどうしようもないガバですよ？

「……………ああいや……大丈夫だ、問題はない。今回も進展は無さそうだな。」
ほんとお？

とうか今までの先駆者達も経歴でガバつてるんだから、私も何かしらのガバが起きている可能性が高いですね。やはり一族にはガバ量保存の法則が働いている……？血筋には勝てないつて事なのか？そんなバカな……。

それじゃあ十七夜さん帰つていいですか？いい？よし！かりんちゃんまつたく話に付いてこれてなかつたみたいですが、一体なにに來たんでしょねえ……。

まあ分からないガバは置いといて詩織ちゃんは次の活動に移りましょう……つてあれカラスネットワークから入電がありますね。すみません失礼します。

え？何？魔法少女が急に気絶した？はあ……？こマ？まだ団地組育ちきつてないんですけど？そんなレベルで大丈夫か？

義手くん2号！神浜カラスネットワークを統率して魔法少女昏倒事件の噂をかき集

めてください！お前がリーダーをやれ！義手くん3号はアザレア組とななか組と団地組の様子も確認してきて下さい！貴様を副長に任命する！分かったか？OK？それじゃあ散開してGOGOGO！

「……弓有さん、どうかしたの？」

そうですねえ……ここに十七夜さんとかりんちゃんが居ましたねえ……とりあえず概要を伝えましょう。ちよつとヤバい速報があるんですけど……手伝ってくれませんか？というか手伝ってもらわないと困ります。これは走者のタイムと神浜の魔法少女達に深く関わってきます。

動画面冒頭で説明したのはもしかしてフラグだったんですか……？ちよつと発生する時期が早すぎると思うんですけど（名推理）

ええはい……明らかに『散花愁章』です……。

うあああああああああ！更紗帆奈ア！お前エ！準備期間というものを！

落ち着いて対処しましょう……とりあえず交換してなかったっばい十七夜さんの連絡

先を貰います。ついでに2人に飴ちゃんを渡します。

あとやちよさんに電話して事件について伝えます。もしもしやちよさん？昏倒事件起きたらしいんですけど…今聞いたところ？分かりました情報交換しましょう。調整屋に集合して下さい。

それじゃあ2人も来てください！やってやろうじゃねえかこの野郎！せつかくだからイベント短縮してやりますよ！移動しながら組長に電話だあ！

…：…出ねえ！こんな時に？？？ななかさんが電話に出ない時は大体魔女退治してる時です！ななか組には連絡後回しです…うーん、組長の話を聞かないと次のステップに移るフラグが立たないんですよ。

今日はやちよさんの話を聞くだけ聞いておきましょう。それから後でななか組と緊急会合を開いて、そのあと十七夜さんと組長を会わせて団地組に協力してもらいます。大忙しになりますねクオレハ…。

今回はここまでにします。

ご視聴ありがとうございました。

▶ ?

神浜に辿り着いてから大分経った。

最初は事件の容疑者として疑われて大変だったけれど、今では落ち着いて平和に暮らす事が出来ている。

散々な目に遭ったあの事件はまだ解決しておらず、私は七海やちよと共にその正体を突き止めるべく調査を続けていた。

しかし依然としてそれは進まない。噂を辿ってもある地点から途絶えて、その先の情

報を手に入れる事が出来なかった。あの時葉月が言っていた事は本当だったと今更ながら実感している。

そのため情報が集まらなくなってからは七海やちよとの集まりは頻度が落ちてきていた。それでも一応情報を交換しているが、やはり七海やちよの方も新しい情報が出ておらず、調査は停滞せざるを得なかった。

お互いにまだ警戒は必要だと確認し、すっかり慣れた神浜での生活に戻っていく。

そんなある日の事だ。

『魔法少女が何者かに襲われた』という話をされた。

夜中に突然掛けられた七海やちよからの連絡によつて、私は急遽情報交換するために呼び出される。

何が起きたのか話を伺うと、七海やちよは少し言い淀んだ後、事件の詳細を語り始めた。

1日に3人もの魔法少女が昏倒し、更に彼女達は今もなお眠り続けている。まさしく前の魔法少女昏倒事件の噂通りの状況が起こっていた。

しかし前回と違うのは倒れた人達にある共通点があること。それは共通の人物と会っていたという事だった。それにより魔法少女間だとある話が広まりつつある、と。

遊佐葉月が犯人として疑われている。

そして私達が犯人だという噂も再燃しているという事。

こちらは前回の時にあやめが被害を受けたのに、しかし関係性を知らない人達からすれば今ある状況から推察するしかないようだった。

七海やちよはこの一連の事件には明確な犯人の意図を感じると言っていた。前回は今回も陥れられたのは私達、つまり犯人の狙いはあくまで私達なのかもしれない。

だがその意図が犯人に繋がる手がかりになる。悪意を持って行動している誰かの犯行を、七海やちよは今回の件で強く感じたらしい。

糸を手繰り寄せるのは危険だが、時にはリスクを取らないと勝てない時もある。とにかく私は葉月に事情を聞いて、3人で身を隠す事にする。七海やちよは私達が犯人ではないという事を周りの魔法少女に伝える。他にも弓有詩織や常盤ななが事件の解決に乗り出しているようだ。

私達が隠れたあと事態が鎮まれば、仕掛けてきた犯人は次の行動を取ってくるはず……。

引き続き連絡を取る事を約束して私は急いで家に帰った。まずは葉月に話を聞く事

から始めないと……！

しかし……そこで私は既に事態は混迷の度合いを増していたと知る事になる。この魔法少女昏倒事件の解決が一筋縄ではいかない事を改めて思い知らされたのだった。

▷

弓有について知りたいのか？

ひとまず先に自分の所感を述べさせてもらおうか。

そうだな、簡単に言えば今の弓有は雛鳥みたいなモノだ。それどころか未だ殻に包まれた状態なのかもしれない。

ああ自分との関係は：おそらくただの魔法少女仲間、もしくはバイトの先輩後輩だろう。これに関してハッキリとは言えないし、今後言うつもりも無い。

会ったなら知っていると思うが、弓有という人物は絵に描いたようなお人好しだ。

東に病人がいれば看病して、西に疲れた老婆がいれば重い荷物を代わりに持つ。南に死ぬ寸前の人がいれば最期を看取り、北に争いがあれば止めた方がいいと言う。

その全てを行おうとして結局手から零れ落ちるのを弓有はしっかりと理解していた。しかしながら多くを助ける事を諦めないのは彼女の意地なのだろうか。それとも変えようのない性質なのだろうか。

ただ弓有が優しいというのに間違いはない。

彼女は今まで表立って活動する事は無かった。商人をしてきた事は何回かあったが、最近の活動頻度は以前と比べると爆発的に上がっている。他の魔法少女と交友を持つ事などあの頃では考えられないな。

一体どういう心境の変化があったのか分からないが：正直言つて自分は今の状態を維持したい。

今のままの弓有が一番良いのだ。

ここから何か変わるような事があれば、後に待ち受けるのはきつと下り道だけ。もし上り道があるとしたら、弓有自身が自らを把握しなければならぬと思われる。

そして彼女を生涯支えられるようなパートナーなどが必要だろうが、残念ながら自分はその役を担うほどの覚悟はなく、彼女が真の意味で心を許せるような存在などこの先現れるはずがない。まず彼女にとって本心を打ち明けるといふのは一番許せざる行為だからだ。

自分が検証と偽つて定期的に行なっているのは、弓有の状態を確認するための処置である。といつても自分では表面くらいしか心を読む事が出来ないがな。

何故なら弓有の精神を覗く際、一定の区間に足を踏み入れるとこちら側の意識を強制的に落として、心の中から無理矢理弾き出すからだ。

久しぶりにそれを行なっても、異物を排除する働きは未だ健在のようだった。以前この事について弓有に聞いてみると、弓有は全く知らないと答えた。おそらく無自覚に侵入を拒絶して魔法を行使しているらしい。

まったくもって厄介な事になっていると言わざるを得ない。思わず頭を抱えそうになる。

彼女は心の奥底に入り込まれることを嫌うだけで、他の事に關しては心配しなくていい。その点をわきまえておけば、今まで通り弓有は他人の為に奔走するだろう。大丈夫だ自分が保証する。

だが覚えておくといい。

弓有の優しさは表裏一体のモノだ。

ある意味で彼女は狂っている。今のままで居続けてほしいと自分には願う事しか出来ない。

寿司が食べたいので失踪します

余談

没が何気に地獄で収拾がつかなかった事をここに記しておきます

鈴音イベントと散花愁章の同時発生なんて悪夢でしかないんだよなあ……

博愛とは

全ての人を平等に愛すること。

Part 15 ガバに祈りを

カラオケで歌いたかったので初投稿です

チャート最難関と思われる難所突入のRTAはーじまーるよー

前回のあらすじ。

団地のイベントが無事に終わり、喫茶店に來た詩織ちゃんは東のボスと泉と十七夜（メイドのすがた）と遭遇する。いきなり呼び出されたけど何事も無かったかと思いきや、魔法少女昏倒事件の情報が入電してきたのであった……。

果たして走者はRTAの鬼門を突破する事が出来るのか……!? 先生の次回作にご期待ください。

今回から『散花愁章』を攻略していきます。

とりあえずやちよさん、十七夜さん、かりんちゃん、みたまさんと情報は共有しておきました。協力も取り付けたので、何かあれば連絡してくれる事でしょう。持つべきものはやっぱり魔法少女仲間よなあ！

そしてモブからの信頼度が厚い詩織ちゃんは顧客達にアザレア組は犯人じゃない事を伝えていきます。少なくとも信用してくれているモブ魔法少女は気にしないで大丈夫

夫です。ネームドは：怪しいところですけど。

前回の冒頭で発生したら詳しい話をすると言いましたが、フラグを即回収したため早速解説していきます。

1年前スタートのプレイヤーは散々苦しめられるであろうアザレアイベント第2弾『散花愁章』です。これ絶対に実質0.5部ゾ。

RTA的にも最重要です。主に混沌こと更紗帆奈っていうやつがね……。このイベントを何とかしてクリアしないと、ストーリーを掻き乱しながら本編を乗っ取るうとできます。

本編通りの流れなら自殺（生きてる可能性あり）ですが、そんな不確定な事なんてRTA走者はキャンセル一択だ！

そのため捕獲か殺害か、確実に進行するにはどちらかを選ぶ必要があります。殺害ルートは外道プレイのキャラじゃないと、ソウルジェムが濁ってしまって駄目になるので、通常では捕獲一択になる事でしょう。

RTAにおいて更紗帆奈とはハイリスクハイリターンな魔法少女です。

放置すると被害は甚大になりますが、味方にすると『上書き』による固有魔法コピーが便利すぎて走者の切り札と化します。

しかし信頼度をバリバリ上げなければ、『暗示』を捨ててくれない事が最近のマギレコ

RTA学会で明らかになりました。魔法を捨てなくても強いから仲間になるだけでも十分だな！

ではイベント攻略しながらお話していきます。まずはじめに組長と十七夜さんを会わせませぬ。

組長がいつ電話に出てくれるか分からないため、勝手に調整屋を待ち合わせ場所に指定してお手紙を送りつけます。十七夜さんにも同じ内容の手紙を出します。用件は情報交換で日時も書いて義手くん2号3号にそれぞれ渡します。

ついでに団地組も呼び出します。事件発生までの準備期間が消し飛んでしまったため、シナリオボス戦で混沌と相対するにはちよつとどこるか大分レベルが心許ないねんな……。このイベント中は組長に付きまといまくりませんが、それに合わせて団地組もちよくちよく様子を見たいです。

詩織ちゃん魔法バレするまで疑いの目はありません。その間に団地組を少しでもレベリングしていきましよう。

「あつ、詩織さんだ！こんにはは！」

はい、こんにちは。元気に挨拶してくれる良い子なみとちゃんには、このキャラメルをあげましょう。たまには飴以外の物を渡そうね！れいらとせいかにもあげますよ！はい、どぞ。良いって良いって、ほらほらほらほら！

じゃあ親睦を深めたところで一緒に魔女狩り行きましょ！

お！義手くん2号3号！戻ってきたなあ、よーしよしよしよしよし。お返事オツケでしたか？…大丈夫みたいですね、ヨシ！（現場猫並感）

団地組、明日この時間に調整屋集合！こんだけやったなら多分そこそこ経験値溜まつてるやろ…1日神浜ローラー作戦（仮）したので少なくともド素人とは言えない、はず…せつかくだから調整していきましょうねえ。

「はあ…はあ…終わったあ…。」

「ふう、ありがとうございませした…！」

「…もう二度とやりたくないよ…。」

うーん、スパルタ過ぎたかな？

流石に走者である詩織ちゃんの日課は一般魔法少女に厳しかったようです。ここでもやっとなかないと後でキツくなってくるので、これも君達の為なんだ…すまない。RTA走者と一緒にレベリングしようとするのは、こうなる運命なんだよ。

いやでも修行でせいかさんと（熱血方向で）仲良くなれたのは結構良い感じじゃないですか？なんかちよつとづつ体育会系後輩に進化が進んで来てるけど、本当にBキャンセル効きませんか？効かない？そう……。

調整の時間だオラア！

こんにちはー！呼んだ人達揃ってる？イベント常連客ななか組、東のボス十七夜さん、調整が終わった団地組……全員揃ってますね。

それでは情報交換会といきましょうか。魔法少女昏倒事件の概要は皆知ってると思うので、サラッと説明したら本題に入っていきます。

倒れたのは本来と同じく、木崎衣美里、栗根こころ、毬子あやかの3人です。ヤベエ！走者の屑運のせいでエミリー先生しか会った事ねえ！これはイベントクリア後にお見舞いと称して交友しておくのが吉です。

それで現在疑われているのが3人と接触していた遊佐葉月。葉月を含めたアザレア組も犯人じゃないかという噂も再発してきていて、しばらくの間は彼女達はいきよぐ

らし！をするそうです。

しかし今回は犯人がめっちゃ陥れる気満々だぜ！みたいな感じなので、アザレア組のためにも真犯人見つけようっていう会合です。

ところで準備期間短かったけど、団地組はアザレア組に出会ってるんですか？走者、気になります！一回だけ会ってる？ならセーフ、面識があるって事が重要ですよ。

私はねえ、ななかさん！あなたの意見が聞きたいんです！考え…あるでしょ？あるよね？言つてください！オナシヤス！

「…今回の事件ですが、私はとある可能性を考えています。」

というわけで組長がななか組と『飛蝗』の因縁を語って推測を出した事で情報フラグが立ち、魔女を操る魔法少女の存在について、次の調査フェーズに移行する事が出来ま

す。
みたまさんと十七夜さんが『暗示』を使う魔法少女の存在を思い出してくれば、そこから順々に情報が繋がっていきます。今回は一気にここで調査パートを終わらせる予定のため、団地組（主にみとちゃん）の力を借ります。

おうさつきからチラチラ見てただろ？気にしないで言つて良いですよ、どうぞ？言わない方が良いというのは勿論ですが、詩織ちゃんが犯人じゃないっていうのは組長が証明してくれま

「そうねえ、『暗示』を使う魔法少女がいるって聞いた事あるわ。」

「八雲、そうなのか？」

「…う十七夜が話してくれたじゃない。」

なんかおかしいですねえ…認識がすれ違ってますよねえ……。十七夜さんがみたまさんからこの言葉を聞く事で、『暗示』の魔法の持ち主である瀬奈みことの事を思い出します。

しかし今から団地に向かう気はないし向かわせる気もないので、このまま調整屋での話を続行します。

団地組ー！念のために聞きたいんですけど、この瀬奈みことっていう人知ってる？知らない？オツケー分かりました。

「すまない…残念ながら記憶が曖昧で、詳しいことは分からない。」

あつおいちよつと待てい。諦めるにはまだ早いゾ。それってえ…『暗示』かかっているんちゃう？

記憶があやふやなのは魔法が掛けられるからじゃないか、という事を指摘すれば団地へ赴く時間を省く事が出来ます。本来なら一部の記憶を思い出してもらうために、団地の失踪事件の話などの証拠が必要になります。

しかし何故かは分かっていますませんが十七夜さんの信頼度が高いからか、証拠無しでも

一応信じてくれるみたいです。これはもしかしてガバの巧妙では…？

早速今ここで調べるんだよお！みとちゃんさん様！よろしくお願いシヤス！それじゃあ詩織ちゃんもご一緒に……え？こちらだけで良い？ちよつと十七夜さん？走者が確認できないんですけど……つてわあ、みたさんも同意見なんですか？仕方ないです、大人しく待っていきましょう。

「すまない、待たせたな。」

大丈夫つすよ！ちゃんと少し記憶取り戻せました？走者はそこだけが心配なんだよなあ〜！

途中で弾かれちゃったけど6文字だけ知ることが出来た？なにに、本来の『暗示』の持ち主である瀬奈みこと以外にもう1人居て、途中で魔法が反発して解けちゃったが進展あった？

その『サラサハンナ』っていうのが犯人じゃなあい？走者が入んなくてもこれとか、なかなかの腕前ですねえ！ふーん、やるやん？

という事でこれからは更紗帆奈搜索大作戦に入ります。アザレア組が隠居している

廃墟にイベント主要人物達が集まると、主に組長とやちよさんが気配を察知して発見してくれませす。

そのため、突撃！となりのアザレア組！をするまでの間、少しだけボス戦前の準備を行う事が出来ます。普通なら知り合いのネームド魔法少女を集めて作戦会議ですが、運が無いせいで交友関係はハッキリ言つて微妙な所です。

これはちよつとどころじゃなく、かなり厳しい事になるかもしれません。詩織ちゃんが相手に『使役』を掛けるという奥の手を出してくれるなら、これはもう勝つたなガハハ状態ですけど……その後の対処とかが不安定すぎて涙が出ますよ。

この間を利用してなんとか更紗帆奈を捕まえられるように、走者は脳みそをフル回転しましょう。逃げられたらどこでちよつかい出されるか分からないのが本当にガバの源になります。

とりあえず今日は一旦家に帰ります。詩織ちゃんの固有魔法がバレなかったのは幸運なのか信頼度なのか……初期時点で十七夜さんの信頼度は何で高かったんですかね、本当に謎なんですよ。

うーん、どうしましょうか。更紗帆奈包围網……せめて逃がさないようにできたら良いんですけど……。

ん？あつ居ますね！居ましたね！更紗帆奈を逃がさずに閉じ込められるやつ！ちよ
うど良い感じの魔法少女が！

普通なら絶対協力出来ませんが、割と取引してくれるくらい相手に思われてるよ
なので、使えるモノはどんな使っていけますよお〜！こんな良さそうな感じのオリ
チャー：誇らしくないの？思い立ったが吉日です。今夜会えるように用件を書いた手
紙を義手くん2号に渡して届けてもらいましょう。一体何処のアーティストなん
しょうかね……（すつとぼけ）

それでは夜になるまで自宅のアイテム類を整理しておきます。きちんと整頓して
かないと大事な時にアイテム選択を間違えてしまうガバが発生しやすいです。だから
：整理整頓をしておく必要があつたんですね（例の構文）

時々こういったアクセサリー品が出てくる事があります。拠点も定期的に調べれば、
いつのまにかアイテムがドロップしてきますからね。アイテム収集をしたい人がこの
装飾品手に入れてない！となった時は大概限定品か自宅未探索が多いような気がしま
す。

ちなみに装飾品類は基本的に見た目が変わるだけのアイテムです。稀にステータスが強化されるモノも見かけますが、RTAでは用がありません。

プレイヤーキャラを着飾ると更に愛着が湧いて、その後のストーリーも愉しく楽しくなってくる事でしょう。何より長い時間プレイするモチベーションの持続に繋がります。

あとファッションセンスが良い魔法少女は他の子と仲良くなりやすいです。実際やる気があるなら、主にギャルなどに効果抜群です。女の子の身だしなみは大切ってハッキリ分かんかね。

義手くん2号から連絡が来たところで、今回はここまでにします。

ご視聴ありがとうございます。

▶ ?

ある日、魔法少女昏倒事件の話を耳にした。

このはさん達が以前犯人として疑われていた事件が再発したのだという。今回も彼女達：特に葉月さんに疑いの目が向けられている。被害者である魔法少女が倒れた日に葉月さんは3人と接触していたようで、多数の目撃証言が出てきた。

しかし私は、やはり何者かの作為を感じている。それも以前よりハッキリとした意図が感じられるのだ。

そして自分の固有魔法『敵を見極める力』は、この事件に何かがあると告げていた。聞いたその日にすぐさまチームを招集して、今回の事件について緊急の会議を開く。

まだまだ謎が多く判断を下せるような状況ではないが、私は事件を追うべきだという

結論を出した。

何故ならこの背景に目的の魔女『飛蝗』の存在を感じたからだ。

そして考えをひとしきり纏めた後、とある人物からの手紙を元に、私達は調整屋へ向かう事にする。

呼び出された場所には私達を集めた詩織さん、そして他にも数人。知り合いの魔法少女と情報を交換するために、集合をかけたと言っていた。

簡単な自己紹介を済ませて早速本題に入っていく。前座として今までの情報を確認すると、私は纏め終わった自分の推測を伝える。

それは昏倒事件の裏に私達のチームの目的である『飛蝗』の存在、そしてそれを操る魔法少女がいる可能性だ。

そういった魔法少女について何か知っている事はないか何うと、みたまさんは『暗示』の魔法を持つ魔法少女の話聞いた事があるらしい。

しかし、話した本人の十七夜さんはその事を詳しく知らないようだった。直接話を聞いてから、『暗示』を持つのは『瀬奈みこと』という魔法少女だという事を思い出す。

瀬奈みことは現在行方不明になっているらしく、それならば住んでいたという神浜大東団地に情報を求めに行こうとしていた。

しかしそれを止めたのは、他の誰でもない詩織さんだ。

「……『暗示』、かも……。」

詩織さんの考えによれば、十七夜さんにその魔法が掛けられているかもしれないとの事だ。確かに一理ある。魔女すら操れるのなら、おそらく人を操る事も可能なのだろう。

そこでその記憶を思い出す為に連れて来られたというのが、大東団地の魔法少女のみとさん。

彼女の固有魔法『心を繋げる力』で、十七夜さんの心に入って記憶を覗けないか、試す価値は十分にある。詩織さんはそれらに混ざろうととしていたが、十七夜さんとみたまさんからストツプを出され、少し落ち込んだ雰囲気を出していた。

しばらくした後、調整屋の奥のスペースを使っていた十七夜さんとみとさんが戻ってきた。魔法は途中で反作用を起こし、強制的に解けてしまったようだ。しかしこの調査で重要な情報が新たに出てきたのは間違いない。

それは瀬奈みこと以外にももう1人魔法少女がいた事。姿などは不明のままだが、唯一判明した『サラサハンナ』という6文字は、おそらくその魔法少女の名前なのだろう。そしてその人物こそが私の復讐すべき相手なのだろうか。

ともかく私達が次にやる事は決まった。

『サラサハンナ』を探す。そして事件を起こした理由を…華心流を狂わせた理由を聞き出す。

私の願いを成就させるために。

「……何なんだろうね……。」

不意に出て来たそれに続きはあつたけれど、漏れた言葉から先は外まで届かなかった。言いかけたモノをぬるくなつたコーヒーごと喉奥に流し込む。

角砂糖もミルクも入れてない飲み物は何となくいつも飲んでる。特に理由なんて無かつたし、今はコーヒーを飲んだだけで、緑茶とか紅茶とか栄養ドリンクとか……とりあえず手に取つたモノを口に含んでいた。

こつそりと増設した隠し冷蔵庫には、そういつた飲み物や食べ物、秘蔵のお菓子やらを保存している。あの子に見つかつてしまうと、健康に悪いだなんだと取り上げられてしまうんだ。

あつちもあつちでこちらの真似してコーヒー飲もうとしたら、流石に苦すぎて飲めなかつたみたい。だからやめた方がいいって言つといたのになあ。

ごめん、話を逸らすすぎたかも……。楽しい話が多すぎてつい話したくなつちゃうんだよね。うん、気にしないで良いよ。

んで：ああそうそう、私が疑問に思った事だったか。何なんだろうって思ったのは、話に出したあの子の事。なんだかずっと彼女の話しかしてない気がするや、楽しい事はずっと覚えていたいからかな？

元々この家には彼女の家族しか住んでなかったんだけど、あの子と私が出会ってから運命とは奇妙なもので、トントン拍子に事が進んでいく。簡単に言うところこに養子として引き取られる事になった。

つまりあの子との関係は、家族で親友で：唯一無二の相棒！大切な人！とかそういう感じ？ふっふっふ、大好きだよ！って言ってみたり……いつかは言ってみたいよねえ。

机の向かい側に設置したビデオカメラに目を向ける。

静かに動くそのレンズ越しに映った自分の姿が酷く滑稽なように思えて仕方がなくて、口には出さずともまるで嘲笑うかのように見据えた。

そして手の中に収めていた琥珀色の宝石がはめ込まれた指輪を流し見て、未だ受け入れがたい現実を咀嚼しつつ言葉の口にした。

「これはとある人に宛てたお手紙……と言いたいんだけど、実際のところは私の気持ちの整理とかそんなところだよ。」

続きを話していく。

窓から吹き込むそよ風にカーテンが揺らいで、その隙間から差し込んだ月明かりがベッドに腰掛けた私を照らし出す。本日はお生憎様雲一つも無い快晴で、月と星の姿が藍を詰め込んだ夜の空に、存在感を放つほど爛々と煌めいていた。

風が頬を撫でて髪を揺らしている。私以外に誰も居ない邸宅は静か過ぎるくらいで、自分の声がやけにハッキリと耳に届いた。穏やかに拍を打つ心臓の音は、なんだか時間が止まってしまったように長く感じられる。本当はそんな事無くて、時は無情にも過ぎ去っていくんだだけさ。

「あのね、実は今日でもう最後なんだ。だからこんな感じで録画する事にしたの。」

今、君はどんな事を考えているんだろうか。

そしてこの映像を見たらどんな風を感じるのかな？怒ったり……悲しんだり……いつもコロコロと変わってばっかの表情がマイナスになってしまうのは、すごく申し訳ないと思うけど私にはこれくらいしか出来ないから……そうだね、ただの恩返しとも思っ

おいてよ。

「ねえ、聞こえてるかな？」

『星月夜に祈りを、敬具』

なんだかんだ15話目まで続いたので失踪します。

余談

なおこの時、常盤ななかさんは好きな人に会えた嬉しさでだんだん緩みそうになる表情筋を必死に抑え込んでいたらしく、翌日フアミレスでのチーム会議中ずっと口がスライムのように緩んでいたという情報がある。参京区出身のA・S氏より当局へ寄せられている。

どうして彼女はここまで恋愛に耐性がないのだろうか……。

我々はその謎を解き明かすべく、神戸市の奥地へと向かった。

おそらくガバは水面下で大きく膨れあがっていく事でしょう

Part 16 走者愁章

実質第0・5部のシナリオボスを攻略しに行くRTAはーじまーるよー

今回は団地組をスパルタ訓練した後、ななか組、団地組、みたまさんに十七夜さんを集めて調査パートの大規模カットに成功しました。

あとはサラサハンナを探し出すだけ！以上！閉廷！……とはならず、RTAにおいて重要である更紗帆奈の捕獲の準備をしなければなりません。おのれ混沌！

今回はその続きから、走者のオリチャーが火を吹くぜ！正直言つてこの周でしか使えない切り札ですけど、ここで失敗して更紗帆奈を取り逃がすよりはマシです。

という訳で人目に付かない路地裏にやってきました。ちよつと……ちよつと？イケナイ事されそうな相手なので、事情を知らない他の人に見られたらロスってレベルでは済まないでしょうし……。

「取引は成立ってワケ。」

うおわ！投げないで下さいよ、今回のキーアイテムなんですすよ！

それで神浜の某天才アーティストさんは何を望むんですかねえ……？詩織ちゃんがおモチャになるだけだったら良いんですが？ホラ、言ってみて下さい、大丈夫です今回は逃げようとしません。

「報酬は後の楽しみに取っておくんですケド？まあ、その時まで覚えといてヨネ。」

ええ……（困惑）

どういう事ですか？前の襲撃時に言っていた事を参照すると、見かければついやりたくなってしまうあのパイセンが？……：妙だな……？

出来ればガバに繋がったりするなよお頼むよお。もう既にガバってる気がしますが、内容を知ってるガバより不明なガバの方が怖いですからね……。

兎も角今回の『散花愁章』攻略のための重要アイテム、『アリナのキューブ』を入手致しました。これであの混沌さんを捕獲してやるぜ！

このキューブは皆さんご存知の通り、パイセンの武器兼結界でございます。

パイセンはこれでへによりビームを放ったり、魔女をコレクションして育てたりする訳ですね。マミさんのリボンには劣りますが、これはこれで十分万能キューブです。

キューブは他人に貸し与える事も出来て、今回詩織ちゃんに貰ったように、マジウスの翼にも貸して魔女を捕まえています。本人じゃなくても使えるのが万能さに磨きをかけていますね。

今回は別に後で返せとも言われていないので、イベントが終了しても使わせてもらいましよう。

それじゃあ早速知り合いの魔法少女、アザレア組とやちよさん以外全員に連絡を回します。あの人達も揃っちゃったら黒幕登場フラグが立つちゃうからね仕方ないね。

残念ながら詩織ちゃんはサラサハンの詳細について知らないため、どこまで対策を取れるかは十七夜さんの記憶次第です。少なくとも『暗示』を使う魔法少女という事は分かってます。

今日の放課後くらい！よろしく！調整屋に集合！え？なんだって？営業妨害……？さあ？知らない子ですね……。

「それであるの後『暗示』を解除した結果なのだが……。」

「まったくもう大変だったのよお？」

お代とグリーンフィードはかなり多めに出しておきました。結局他の人（主に十七夜さん）に割り勘させられてしまいましたけど。

それで収穫はあったんですか？主に本当の固有魔法とか『上書き』の能力とか知ってたら走者嬉しいな〜って思いますが、流星に本来通りの流れで出る情報しか出ませんか？

念のためのキューブくんは用意してますけど、使わずに済むに越した事はありませんからね。

「……『暗示』を使うサラサハンナは元々、他者の能力をコピーする魔法だったようだ。」
「それは……また面妖な……。」

やったぜ。これで『上書き』の魔法について知ることが出来たため、ある程度の対策を行う事ができます。主に美雨の固有魔法をコピーされないようにとかね！

この情報について知った時、察しのいい組長は美雨を搜索から除外してくれませう。本人から反対の意見を飛ばされますが、適度にそれっぽく口を挟んで、それとなく連れて行かない方針に修正していきます。

いやあくこれを知れただけでもだいぶ変わってきますよ。十分すぎる働きです。稀

にソウルジエムが濁り過ぎてしまう時があったからこのくらいヘーキヘーキ。

良い子のみんなはまだドツペル解禁してないから、濁って魔女化しないようソウルジエムの管理に気をつけようね！

作戦と呼べるようなモノも無いですが、イベント主要メンバーななか組（with美雨代わりのレナちゃん）、団地組、それと十七夜さんは、偶然を装ってやちよさん鶴乃ちゃんと一緒にアザレア組に会いに行きます。

そこで『サラサハンナ』戦を開始することによって、普段は認識できなかった更紗帆奈を可視化する事が出来ます。

攻略に於いて必要な魔法少女以外は神浜に散開して、各々目撃情報を連絡してもらいます。詩織ちゃんは神浜カラスネットワークや義手くん（鳥形態）、『使役』をフル稼働して、更紗帆奈を絶対に見失わないようにピタリストーカーしていきます。

モンスター（更紗帆奈）を捕獲するなら、まずは弱らせてからボール（キューブ）を投げる。当たり前だよなあ!!？

アレですアレ：ストックホルムだかなんだかですよ。閉じ込めてても一緒に居るのがソイツだけだったら、そのうち勝手に信頼度が上がってくるので気にしなくていいです。

いい感じに周囲から好意的な意見を貰えたら、放牧出来るようにしましょう。勿論自

殺出来ないようにソウルジエムは取り上げます。

みんなソウルジエムは持ったか!? 持ち場の配置に着いたか!??

それじゃあ『サラサハンナ』戦：イクゾー！（デッデッデデデデ カーン

へえ〜ここがアザレア組ちゃんの隠居先ですか…清々しいまでの廃墟ですねえ……。

あ〜鶴乃ちゃんが突っ込んでいくんじゃあ〜。

こんばんは〜お邪魔します。さあ入って入って！

「…これは一体？」

「まずは説明をさせて下さい！」

こここの説明は詩織ちゃんが居ても居なくても変わらないので、口を挟まずに時が来るまで放置しましょう。メンバーが揃って情報も揃ってれば特に何もしなくていいから安心ですね！

話を振られた時だけ一応、反応を返していきます。これが！短縮した調査パートの！成果なんだぞ喰らえエ！オルア！

「その魔法少女の名前は『サラサハンナ』…！」

対象！反応アリ！

「……………はっ？？」

「む？何だ…………？」

「これは…………？」

ここでキーワードである首謀者の名前を出す事で、黒幕が見つけてくださいと言わんばかりの気配を曝け出します。

今回察知したのは、ななかさんとやちよさんと十七夜さん、ついでに詩織ちゃんですね。場に3人もベテランが居ればそりやあ見つかると……。

ほらほら皆変身して！そのままだと駄目です！警戒心をMAXまで引き上げて下さい！いよいよシナリオボスのお出ましですよ！

「……かー！」

手応え……ヨシ！（現場猫並感）

輪になって囲もうぜ！お前はもう包囲されている！大人しく投降しなさい！どうだ？！どうかな？！いますいます？！

「あっははははあっははあっはは……あひははははあっはあっはあっはあは……！」

居るねえ！居るねえ！オラ姿出せ！こちとら黒幕を攻略するためだけに來てるんです！

「じゃじゃーん！どーもどーも、あたしがお目当ての更紗帆奈だよー！」

たった今明かされる衝撃の真実ウ！

はい、迫真のBGMと共に登場したこの魔法少女こそ『散花愁章』のシナリオボス、RTAに忍び寄る混沌こと更紗帆奈です。犯人当てて貰えて喜んでんねえ！

周りは十七夜さんに掛けられていた『暗示』について質問していきませんが、ここでも詩織ちゃんは口を挟む事が無いため、流れに身を任せておきます。

「んじゃこうして集まった事だし、あたしと鬼ごっこしよー！」

「お、鬼ごっこ!?？」

「百まで数えてから追いかけてきてね。」

これが『散花愁章』名物、あっちかこっちが倒れるまで続く鬼ごっこです。『暗示』で言われた通り、キチンと百までカウントしなければ追いかける事が出来ません。

この鬼ごっこ自体、難易度ハードで初見攻略なんてしたら、まず引つかかる箇所だと思えます。ノーマルならそれとなく周りが誘導してくれるんですがね……。

ともかくサツサと数えて追いかけるようにしましょう。カラスネットワークもスタンバイさせておきます。

「あでも、その前に……」

なんなんですかね……いきなりこっち見て……？その手に持つてるのは……万年筆ですかね？そんなモノがどうしたっていうんだ！

もしかして詩織ちゃんの大切な物を盗んで煽ろうとしているんですか？なんだか嫌な予感がして来ましたねえ……。

「誰が一番最初に追いつくかな？じゃねー！」

この混沌がよオ！とにかく百数えて追跡することにしましょう、神浜カラスネットワークを立ち上げて目撃情報をかき集めようね。

……ん？あれ？詩織ちゃん？詩織ちゃんさん？操作が効かないんですけど？煽り耐性／zeroだったたりするんですか？ちよつと？一切微動だにしないですね？せめてカウントくらいさせて欲しいんですが？

不味いですねえ……これは本当に不味いですねえ……なんだってこんな重大な局面で操作が効かなくなる事が多いんだ！これじゃRTAにならないよ。どうしましょうかねコレ……。

「……っ！弓有さん！！？」

えっ：詩織ちゃん、百まで数えろって『暗示』はどうしたんですか!? 待つて周りの人達置いていかないで! 味方に説明を! ついでに走者にも説明を! 今まで構築してた走者のチャートは!!?

うわあ、一目散に走り出していきましたね、お前もしかして場所が分かっているのか? もう走者にはお祈りしかできないんですけど。

「あつは! 意外に早かったじゃん?」

そら(キャラがプレイヤーの知らない事をやり始めたら) そう(誰もが予想出来ない明後日の方向に展開を吹っ飛ばします) よ。

いつ操作権を戻してくれるのか分からないので、一応操作を入力し続けましょう。なんでこんな操作不能になりやすいキャラでRTA走ろうと思っただけですかねえ?

とりあえず解説をしていきます。この『サラサハンナ』戦ですが、シナリオボスというだけあって、神浜の強者とも互角以上に渡り合える強さをしています。『暗示』が無くても強いので、完全にイベントが終了するまで油断しないでください。

更紗帆奈の何が厄介かって、『暗示』が黒幕に相応しい精神・行動干渉系の固有魔法つてところですね。相手に指示を聞かせなければいけないという条件はありますが、複数の魔女を操れたり、他人から認識できないようにしたり：便利で強力な事に変わりありません。

現在詩織ちゃんは何故か『暗示』を無視して交戦しているため、固有魔法無しのため、マン勝負になっていきます。なんでやちよさんと鶴乃ちゃん、チームアザレア組とやり合える実力の持ち主と、対等に戦えているんですか？

しかも走者の知らない技を連発しているんですけど……え、そんな技も出来たんですか？規格外すぎんよ〜！

詩織ちゃん、走者が操作しない方がバリくそ強いのでは……？（ボブは訝しんだ）

いやそれでも困るものは困ります。

一番不味いのは更紗帆奈の捕獲失敗による『散花愁章』イベント失敗です。野生の混沌が知らぬうちに蔓延つてたら、走者にタイムにどんな影響が出るのかたまったものじゃありません。

詩織ちゃん！せめて無力化はさせてくれ！キューブ使うだけでもいいから！まさかシナリオボスそつちのりで、自キャラとの戦いが始まるなんて思わなかったぞ！

あーあ、もうメチャクチャだよ……。せつかく追いついた味方も『暗示』でまた数を数えさせられています。更紗帆奈の方も逃げようとしてるのに、『暗示』が効かないヤバイ奴に絶えず戦いを強いられるせいで、体力がかなり消耗してきていますよ？もうコイツ1人でいいんじゃないかな。

「弓有！待て！」

おお！その声は十七夜さん！

…つて、んん！！？いきなり口にモノを突っ込まないでください！危ないでしょ！！？思わず飲み込んだじゃいましたけど一体何入れたんですか？待つて♡秘密兵器じゃないですよ！！？教えてくださいよ！ちよつと十七夜さん！！？

あれ、操作権が戻ってますね…？

…もしかしてさつき口に突っ込まれたモノを摂取する事によって、詩織ちゃんの正気が戻って暴走が止まる可能性が？成る程？果たして今回以外に必要なのか分からない新しい新たな発見ですね。

でも十七夜さんに無理矢理止められて、更紗帆奈から意識を逸らし、現状に気づく事が出来たという可能性が無きにも非ず。

しかしコレ利用するにしても、詩織ちゃん以外にもう1人居ないと止められないですよね？結局走者に為すすべは無いんですか…。

無事に操作権が返ってきたので、更紗帆奈捕獲大作戦を改めて決行します。

といつても暴走状態の詩織ちゃんがやり過ぎてしまつて、後は疲労困憊の混沌さんを捕まえるだけの段階ですね。

いやあ何というか……大部分に労力を掛けずに済んだ点では良いことなんですけど、今後もこういうガバ発生するのかもしれないと思うとブルツちやうよ……。

神浜カラスネットワーク！今、更紗帆奈つてどこに居ますか？……団地の屋上？おーけい分かりました！そのまま監視を続けていて下さい。

本来屋上では団地組が機を狙って待ち伏せしているんですが、詩織ちゃんが飛び出したせいでそれがチャラになりました。

つまり今あそこは手薄な場所という訳です。

絶好の休憩ポイントとして今なお使用されています。団地の屋上は更紗帆奈の鬼ごっこ逃走経路で、もつとも訪れる確率が多い場所です。

じゃあ攻略メンバーを呼んで袋で囲もうね！集合集合！最初は少数精鋭で交戦します。その後、『暗示』を封印して逮捕！自殺しようとしたら何が何でも阻止しますんでヨロシクウ！

まずは詩織ちゃんの先制攻撃！更紗帆奈が逃げられないように、『アリナのキューブ』を使って決戦のバトルフィールドを生成します。こうすれば魔女の乱入だって来ません。

オラア！東西トップのお通りだア！支援型つてのは本来こうするもんなんだよオ！分かったらさっさとくたばりやがって下さいませ！東のドンと西のボスが手を取り合つて一つの敵に立ち向かう：うーん、青春だな！3人に勝てるわけないだろ！

飛んでくるダガーを使役槍と義手くん2号で撃ち落として、2人が『暗示』で避けられないような攻撃は妨害し、接近戦に集中できる環境にしましょう。

何故か詩織ちゃんに『暗示』が効く時と効かない時があるのかよく分からないままですけど、魔法関係は干渉されないようなので全力で支援にあたりましょう。

『使役』の魔力消費は一発目がデカくて、その後は少しずつ減っていくタイプです。

つまり格上の相手には良く考えて使わないと、最初の一瞬で魔力が消し飛んで魔女化一直線します。

あと穢れ浄化システムが出来ても、ドツペルを出した後は少しだけ接続が途切れるらしく、もう一回『使役』をかけなければいけないんです。

もう一回魔法を使うという事は再度ソウルジェムが大幅に濁るといふ事なので、一発の消費が大きい魔女やウワサを対象にしてしまうとヤバくなります。

ドツペルがずっと出ているように見えて、短時間の間にドツペル使用分の濁りが溜まって、使用回数が爆発的に増えていくからです。

だから普通の魔法少女よりもすぐにドツペルの代償が来てしまうのが欠点です。

それと今まで試走を重ねてきて分かった結果なのですが、どうやら『使役』の固有魔法を持つキャラはマルチタスクな子が多いっぽいんですよ。

並列思考と言うんでしょうか？対象を使い魔扱いにしてオート操作しないと、あつという間に脳のキャパシティを容易くオーバーします。ワルプルギスなんか操った暁には詩織ちゃんの精神がぶつ壊れます。

そうこう言ってる内にそろそろ頃合いですかね？へい、キューブ！攻略メンバーを投入しろオ！ゴーゴー！行け行け行け頑張れ頑張れお前ならできる絶対出来る諦めんなよ！諦めたらそこで試合終了です。

「サラサハンナさん！あなたは固有魔法を使つてはいけません！」

やっぱ安定の竜城明日香なんだよなあ！

しかし油断してはいけません。何故なら混沌さんは最終手段として、自分のソウルジェムを砕いて自害しようとするからです。

勿論そんな事させるわけじゃないですよねえ！？

使役槍で自害しようとするのを阻止して、義手くん2号を突っ込ませてソウルジェムを奪り取ります。

ほらこれでもう抵抗できないだろう！勝つたなガハハ。

そして皆様お待ちかねの説得パートですが……特に言える事はありません。ここま

で来という最後は運ゲーとなります。

走者のガバ運が酷すぎて説得効果を上げられるキャラと知り合えていないんですよ。少しどころではなくかなり不味いです。

それにこの前十七夜さんに心を繋ぐのを拒否されてたのと、今回『暗示』が効いていなかった事から考えて、みとちゃんさんさまの『心を繋げる力』が詩織ちゃんに効かない可能性があるんですよ。

要は祈祷ポイントという訳です。

ここで説得出来たら短縮、説得出来なかったとしても長い時間をかけて懐柔していく予定なので、問題ないと言えば無いんですけども。

どうですか？どうですか？説得：成功しましたか？いやこの半分下回ってるから走者の運任せですねクオレハ……。

「んー、いきなり答えを教えちゃうのはなあ〜！」

説得は：待つて説得は？成功したんだか失敗したんだか分からない反応やめて下さいよちよつと！更紗帆奈ア！お前はよオ！

あ、なに？一応付いてくるつて？つまなくなつたら分かんないなあ〜つて事らしいです。ふーん……そんな事言つてられるのも今の内なんだよなあ……。

とりあえずこれは成功扱いでいいんですか?……良さそうですね? 詩織ちゃんを見事に釣り上げた万年筆も返してもらいました。いや操作不能にまで追い込むコレ本当になんなんだ一体…?!

それでは『散花愁章』無事に(?)クリアです! いよ! やったぜ! 第0・5部、完! ですがきちんと後始末はしていきましょう。ええ、主にこの更紗帆奈の今後の対処についてですね。

先駆者に倣って詩織ちゃんも帆奈ちゃんと同居…同居? します。疑問形になってしまったのは、帆奈ちゃんは基本的にキューブの中で飼育するからです。

更紗帆奈専用のお部屋が手乗りサイズで増設されたので、現在の住居の心配はしなくても大丈夫です。でもちゃんと生活用の家具は持ち運んであげましょう。

詩織ちゃんは学校に通っていないアルバイターのため、日中は帆奈ちゃんの事を気にせず活動出来る利点があります。

これを利用して普段からコミュニケーションを欠かさないようにして、地道に好感度を稼いでいきます。ちなみに一度でも餌やりを忘れると拗ねてしまうので、十分に注意しましょう。

今回はここまでにしようと思います。

ご視聴ありがとうございました。

▶
?

ソイツに会ったのは一度だけ。

今から…数年くらい前？あつは！いつだったかは全然覚えてないや！

あたしが家に帰る途中でね、ハンカチを知らないうちに落としちやつてたみたいなんだあ。

「ごめん待って！これ、君のでしょ？」

そういう風に突然後ろから話しかけてきたヤツ……じゃなくて、そのまた後ろに居たもう1人の方がソイツだった。

あたしのハンカチを拾った方はTシャツにパーカーといった簡単な服装で、もう1人の方は黒い服を着ていた。多分こっちは制服だったと思うから、あの時2人は中学生だったんじゃない？

「大丈夫だよ、この人は人を助けなきゃ死んじゃう人だからね。」

「ちよつとそこまでじゃないでしょー？」

そう言つてソイツは持つてたバックから飴を取り出すと、あたしに一つくれたんだ。落ち着きがない方にも慣れてるみたいに渡してたけど。

「あの…ありがとうございます……。」

「ふっふーん、どういたしまして！あ、そうだ！あれ出してあれ！」

「はいはいアレだね、まったくもう。」

ついでに渡されたのは少しだけ高級そうな便箋。こだわって選んでるのだろうという事が、幼い自分にもよく伝わっていたようだった。

「なにか困った事があつたらヒーローにお手紙を出してね。」

「…? ヒーロー…?」

「うん、そうだよ。自慢のヒーローが返事を書いてくれるんだ。」

半ば諦めの気持ちで呆然とオウム返しで聞き返したあたしに向かつて、ソイツは心の底から優しさに溢れた声で言う。それじゃあね!と言いながら夕日が指す方に去っていった2人を、あたしはその場に突っ立ったままで眺めていた。

受け取った飴玉を早速舐めてみると、口の中に少しずつ広がったオレンジ味が、その日を象徴しているかに思えて仕方がなかった。

小説パートが少ないので失踪します

Part 17 走者育成日記をつけよう!

久しぶりに会ったソイツは随分と様変わりしているようだった。

あまりよく覚えているわけではないけど、腰に届くくらい長かった髪は肩の辺りまでバツサリと無くなってたし、髪色だって前はこんな風に薄くなつてくのじゃなくて全体が綺麗な濡羽色だった。

目も2色が混ざった緑色ではなく、宝石のように透き通った青色だった気がする。でもソイツだって分かったのはそれ以外の外見の変化があまり無かったから。

なにより一番大きいのはあの時、あたしのハンカチを拾った銀髪のヤツが居ない事。コイツも魔法少女だったから、きつとあの銀髪も魔法少女だったのかもしれない。それでもここで姿を見かけないのは：死んだか魔法女になったかのどっちか。

魔法少女になった以上、これはもう覆せない運命なんだろうなっていうのが改めて感じられた。例えばそれはあの見知らぬ人の落とし物を拾った優しそうな2人組であっても。

なんだか面白そうな事になってるじゃん、困ってる人を救いたい『ヒーロー』さん？

舞台は整えた。演者も揃った。じゃあ後は幕を開けて『悪役』を探すだけ！

勿論それでコイツが食らいつかない時を考えて、大事な物を餌にして釣り上げる。あたし知ってるよ？あんなに嚴重に仕舞い込んであったこの万年筆が宝物だって事。

難易度をわざわざイーजीにまでしたんだからさ……見つけられるよね。

「いっかー！」

やつと来た、来てくれた！そりやそうだよねえ、こんな昏倒事件を引き起こしてあんなだけ悪い噂が蔓延っちゃえば、ヒーロー気取りのお前は絶対に犯人を見つけようとする。

でもその目はなんなの？他の奴らと違って明らかな憎悪がない、特に感情を抱いていない訳じゃない。ただ何も感じずに人を見ているような緑色。

単純に気にくわなかつたんだ。だから念のために用意していた万年筆を取り出した。

端の方に小さく『Mahiro』という文字が刻まれた、黒に金で拵えて高級感溢れる、おそらくオーダーメイドのモノを。

「……………それ……………」

「返してほしいでしょ?」

『暗示』で動けないアイツの目の前までわざわざ持つて、他のヤツには聞こえないように小声で言う。

するとさつきまでと違って、あたしに向けられていた視線が突き刺さるような視線に変わる。そうだよその目を待っていたんだ!そのまま万年筆を仕舞って、鬼ごっこを始める。神浜市一帯を使った生きるか死ぬかの鬼ごっこ!最高にワクワクしてきちゃうよねえ?

そうして一番最初にやって来たのは、このゲームが始まる前とは随分と雰囲気が変わったアイツ。

目の色を変えてまで余程必死なのか、あたしが何かを言う前に攻撃を仕掛けてきた。まだあの場を離れてから1分も過ぎてないのに追いかけてくるなんて、一体どんな手品を使ったのか、それとも数えるのが異常に早かったのかもしれない。

「『動くな!』……………!……………へえ、効かないんだ?」

「……………」

『暗示』を使って命令したにも関わらず、アイツは魔法が効いたそぶりも見せないで、次から次へと攻撃を仕掛けてくる。

理由は分からないけど、コイツに『暗示』は効かないみたいだ。能力を打ち消すタイプの固有魔法？今まで何回かコイツがソロで魔女と戦ってるのを見てきたけど、未だに能力の詳細を把握できていない。どちらにせよ、このままだとジリ貧な事になりはしないだろうね。

向かってくる短い槍があたしのダガーを打ち返して相殺する。絶え間なく発射されるアイツの槍は見た目に反して避けるのは簡単だけど、魔力のコントロールに長けてるのか後ろから戻ってくるのが厄介かなく？

ダガーと槍の応酬は互いが互いを弾き合い、勢いを失って飛ばされた武器が廃墟の至る所に突き刺さる。途中で捌き切れなかった槍を杖で払って、近づくアイツに対して距離を取っていく。

そしてあたしもアイツも膠着してきた頃、アイツの後ろから見たことある白色が見えたんだ。確か…和泉十七夜っていう名前のヤツで、東を率いている魔法少女。

良い機会だから隙をついて逃げようとする、建物の隙間から差し込む月明かりを受けて、視界の端で何か光つたのを見かけた。新しい攻撃？でも、さつきから槍の本数も減ってきて明らかに疲れてきてる。あたしよりも体力が無いみたいで、地面に片膝をついてまでこちらを見据える。

もうやめた方がいいんじゃないのか、そう言おうと口を開いて気づく。

何もない筈の空が光つたんだ。

今度は…見間違いなんかじゃない。

不意にアイツが右手を外側へおもむろに引き寄せる。すると辺り一帯の空が一斉に輝きだして、幾十も張り巡らされた銀色の線が見えるようになった。

「…つまさかッ？」

コイツの武器はあの短い槍じゃない！本当の武器は『糸』だ！

その事に気づいた時には、張った糸が刺さったままの無数のダガーを引つ張り上げ、宙に浮かんだのがこつちに降り注いでくる。

あんまりコレは使いたくなかったんだけど、そうも言っていられない。大技を使う事になつちやうが、右手に魔力で作った雷を集めて空中のダガーに向けて放出する。

耳を塞ぎたくなるような轟音を鳴らして、元はあたしのだったダガーが散らばっている。それらが落ちる前にアイツもう一度腕を引き寄せて同じことをしようとしていたけど……。

「弓有！待て！」

でも残念、迎えが来ちやつたみたいだね！それじゃこの隙にあたしは逃げさせてもらうから！

そうして逃げてきたのは団地の屋上。

瀬奈は夕暮れの景色が好きだって言ってたけど、あたしはやっぱり今みたいな夜の景色の方が好き。

ちよつとここで休憩してから、また鬼ごっこを再開させよう。一息ついてフェンスの近くから外を眺める。

誰もいない静かな空間はそう長くは続かなかった。

「追い詰めたわよー!」

「覚悟するといい、更紗君。」

突然周りが魔女の結界のような空間に包まれたかと思うと、魔法少女姿の七海やちよ、和泉十七夜、そしてまだ名前を知らないアイツが乗り込んできた。

どうやらアイツはあたしが知らないモノを隠し持ってたらしい。これも多分、逃げられないようにするための処置だろう。

もう逃げ場がないから後は全力を持って命の駆け引きをするだけ!これはどつちかが死ぬまで続く鬼ごっこ!躊躇ってたらあたしが勝つちやうよく?

でも流石に分が悪くなってきた。

ダガーはアイツが全部撃ち落としてくし、東西のベテラン達は今回の件を重く見たのか、珍しく協力して連携攻撃を入れてくる。

この場所だと魔女を乱入させる事も出来ない、やっとの事で『暗示』を使っても3人がそれぞれをカバーし合って攻撃が通らない。

あたしが疲れ切ったのを確認すると、アイツが手を上げて入り口らしき空間から続々と魔法少女達が入ってきた。

「サラサハンナさん!あなたは固有魔法を使っではいけません!」

薙刀を持ったヤツの固有魔法によって、あたしは『上書き』ごと能力を使用することが出来なくなってしまう。集まってる面子を見るにおそらくあたしを生きて捕獲する事が狙いなんだろう。

「……王手、だよ。」

飛んできた槍の柄で手を弾かれ、アイツのカラスにソウルジエムを奪われる。そのままあたしのソウルジエムはアイツの手中に収まった。

完全に打てる手が無くなってしまったみたいだ。王手どころかチエツクメイトと言わんばかりに各々の武器を向けられる。

悪を懲らしめるのがヒーローなのに笑っちゃうよね。大切な物を盗んだって事件を巻き起こしたって、お前はあたしにトドメを刺してこない。

「で、諦める気になった？」

「降参だよ降参、あたしの負け。」

こうして魔法少女昏倒事件は収束する事になった。

常盤ななかの件とか他にもまだ色々といざこざはあったりするものの、神浜の魔法少女達はそれぞれの日常に帰る。

ただ：あたしがある中に加わった事だけが以前の神浜と違っていた。

▶ ?

元悪役と仲を深めたいRTAはーじまーるよー

前回は『散花愁章』をなんとか無事に(?)成功する事が出来ました。拍手の使い所さん!!?ですよ。

しかし更紗帆奈を捕獲したばかりのため、仲間にするにはまだ足りないであろう信頼度および好感度を上げていく事を、ひとまずの目標にして今回はやっていきます。

とりあえずパイセンから譲り受けたキューブの空間内に帆奈ちゃんの居住空間を作ります。背景ちよつと気持ち悪いかもしれないけどそのうち慣れるっしょ(適当)

残念ながらキューブ内に水道や電気やガスは引っ張ってこれませんので、食事などは詩織ちゃんを持ち込むか制限付きで外に連れ出すかします。

勿論のこと、ソウルジェムは詩織ちゃんがいつも所持しているようにしましょう。気がついたら逃げてしまっているとか良くある事ですからね。ハンナガニゲテル!という状態になりませんように!

まだタイマンで外出は危険と判断されているため、一時的にみかづき荘で同居する事になりました。これはみかづき荘リターンズですな間違いない。

これから出入りするために合鍵も貰ってます。やちよさんの基準割とガバガバ過ぎない?大丈夫?このままだというはちゃんに速攻で攻略されちゃいますよ?

まあそれは置いておきましょう。とにかく帆奈ちゃんと2人きりで出かける事はまだ許されていません。

じゃけん買い物にも人誘って行きましようねえ。

やっぱ他の人と同居するにあたってどのような事に気をつければいいのか、助言をしてもらうために連れてきました。こちらみかづき荘経営者の七海やちよさんと、たまたま付いてくる事になった御園かりんちゃんです。

主にやちよさんと詩織ちゃんのお財布にご相談しながら、必要な物を購入していきま

す。
最初は連絡用にそここのスマホを購入します。流石にこれからもお金使うのに、最新の機種は高くて手が出せません。詩織ちゃんのとやちよさんの連絡先を一応入れておきましょう。緊急時用は大切ですからね。

帆奈ちゃん用のスマホはあとでGPS設定をしておきます。一応、一応ね。普段はキューブの結界内の質量無視謎空間で生活してもらうので、これから使う機会はほとんどありませんが、他の人に預けている時は何しでかすか分からないですから。

これが君のスマホだぞ帆奈ちゃん!つておや?かりんちゃんが話しかけてますね。

話が終わるまでコッチはやちよさんとお話ししてましよう。

やちよさん次は何が必要ですかね？出来ればその辺教えて欲しいんですけど……どうですか？

「そうね、優先すべきは寝る場所じゃないかしら？」

なるほど！寝る場所は一番大事ですからね。

ベットか布団か寝袋……どれがいいですか？ふむふむ、寝袋は選択肢から除外して、ベットか布団ですが、ここは万人受けするポピュラーなベットにしておきます。

毛布とか枕とかは帆奈ちゃんに自由に選ばせます。それでも高級なヤツは控えてほしいですけど、いずれおバイトさせるかもしれないので、前借り状態でも思っただけでいい。詩織ちゃんは多分普通に気にしないでしょうが。

「きりんちゃんやんは凄いの！帆奈ちゃんも一回読んでみると良いの！」

「……見てないで止めてくんない？」

早速こっちは打ち解けているようです。コミユカ上がつてる気がするんですが気のせいですかね。

そんなこんなで必要物資を買い終え、帆奈ちゃんルームが完成しました。詩織ちゃんの財布は……駄目みたいです、後で口座から引き落とししておきます。

やはり貯金はするべきですよ、休日も暇があるときはバイトしてるんで、結構お金も

貯まっていますしたまにはパーっと使いましょう。

ついでにかりんちゃんから『怪盗少女マジカルきりん』を貸してもらいました。帆奈ちゃんの暇潰しに活用してくれとの事です。

ポータブルDVDプレイヤーも持つておいて、詩織ちゃんが持つてた特撮セットを貸して布教しときます。オラ! お前も見るとだよ! 素晴らしさを分かせてやる!

ところでかりんちゃんは明日何か用事あったりしますか? よければ一緒に行動して信頼度を上げたいです。

「明日は先輩達と固有魔法の研究をするの!」

はえ、そうなんすねえ。なんかかりんちゃん走者化進んでない? おつ走者のタイムは大丈夫か?

それに詩織ちゃん付いてつてもいいですかね? 走者の知らない人だったらあわよくば交友関係を広げておきたいんですけど。

「分かったの! でも先に連絡をしておきたいの。」

あ、いいつすよ。許します許します。むしろコッチがいきなり押しかけた形なのに、わざわざ連絡してくれて申し訳ないくらいですよ。オツケー出たって? やったぜ。

これはもう、かりんちゃんと今回会う師匠さんに貢ぎ物を贈るしか無いな! 良いぜ! 金を下ろしてから良いよ来いよ!

「やつほー！こつちこつち！」

「ん？ああ、来たか。」

言われるがまま着いた場所は水徳商店街。そしてここはエミリーのお悩み相談所！居るのはエミリー先生と…みやーこ先輩！みやーこ先輩じゃないか！

思わぬ収穫ですねえ……！いやでも一応詩織ちゃんの方が先輩ではあるのか？まあいいでしょう。みやーこ先輩はみやーこ先輩です。

初対面なので自己紹介をして連絡先を渡しておきましょう。ちなみに帆奈ちゃんにはキューブの中で引きこもってもらってます。

「アタシは都ひなの、噂はかねがね聞いてるぞ。」

この方こそが神浜のギスギス東西に挟まれる中央のまとめ役、都ひなのさんです。身長はデリケートな問題なのであまり触れないようにしましょう。

みやーこ先輩は詩織ちゃんを除いて、やちよさんの次に活動歴が長いベテラン魔法少女です。そこそこ信頼度を上げておけば、何かと頼れる超有能先輩になります。さつすが先輩、頼りになるぜえ！

それで今回はかりんちゃんさんの固有魔法の研究って聞いたんですけど、今現在でどんな風にやってるんですか？

「グリーンフィードを用意しておいて出来る範囲で実験してるんだ。」

「もちろん他に人がいる時にやってるんだよ。」

ほーん……コレかりんちゃんすつごく強くなってる可能性ありません？少なくとも出会った頃と比べると絶対強くなってますよ。

固有魔法は結構本人の解釈次第で使い方が変わってくるところありますからね。そこに天性の閃きとベテランを加えたら、まあそりやあまず間違いないくらい強くなりますよね。

最近出来るようになった事とかありますか？教えられる範囲で構わないですよ。

「私の固有魔法は盗む物との距離を一気に無くす事だつて気づいたの！これは新たな第一歩なの！」

そこまで気づいてるとは、かなり強くなってますねクオレハ……………。

え、何？もしもの時を考えて怖いからやってないけど、もしかしたら姿とか時間とかも盗めるかもしれないって？

いやこわ……かりんちゃん強すぎ問題が発生しますよ？なんでそういう使い方に気づいたんですか？走者、気になります！

「全部きりんちゃんを読んで思いついたの！」

……愛読書の『怪盗少女マジカルきりん』を読んで思いついた？姿を借りられるっ

てことは盗む事も出来るんじゃないか、時間泥棒って言うくらいだから時間は盗める物なんじゃないのか：だつて？

それ全部出来たらパワーバランスで不味い事になってましたねえ！危ねえなオイ！「きりんちゃんがそう言つてたならそうなの！」って感じのきりんちゃん万能説がありますねえ！ありますあります。

結論から言っちゃうとそれらは頑張れば可能です。でもかりんちゃんが次元の狭間から戻つてこない場合もあるので、実行可能な事は言いません。そりゃあ危険だからね仕方ないね。

成功した時は簡単にいっちゃうと某怪盗3世になったり、某5部のボスになったりしちゃいます。そういう時に限つて味方じゃないと絶望感が溢れ出てきますよ、ええ。何処からともなくデデドンという効果音が聞こえてきますね。

実は走者のボツチャートに漫画家ルートというモノがありました（過去形）怪盗少女マジカルきりんの原作者になるルートですが、安定感に欠けていたため、あえなく没送りとなりました。

というのもまず連載のためメ切で忙しくて碌に魔法少女活動が出来ず、また精神状況の落差が激しくてソウルジェムが濁りやすいというデメリットと、かりんちゃんを超強化出来るってメリットぐらいしか無かったからです。

これは小ネタなんですけど、周回ごとに怪盗少女マジカルきりんの展開は微妙に異なっているようです。本当に微妙な変化なので、従来のかりんちゃんになるか超強化かりんちゃんになるかの違いしかありません。

ただこの場合の超強化かりんちゃんさんが凄くてですね……まずメンタルが折れません。「強すぎる力には代償が付く物なの!」と言って魔法少女の運命を受け入れます。そして次に悲惨な過去を持つキャラを光ゾーンへ引つ張り上げます。気がついたら帆奈ちゃんを懐柔していた狂人特攻持ちのかりんちゃんも中にはいます。

うーん、強い(確信)

それは置いておきましょう。

とりあえずかりんちゃんさんの固有魔法研究は瞬間移動の話の一步手前あたりみたいですね。なので詩織ちゃんが入れ知恵して、テレポート能力を仕込んでおきます。

射程が至近距離のみという制限がありますが、そもそもかりんちゃんが強くなればRTA的にも有利になるため、これからガンガン芸を仕込んでいきます。

ついでに後で団地組と一緒にレベリングしに行きます。レベルを上げて損という事はないですからね。

今回は談笑してここまでにしようと思います。

ご視聴ありがとうございました。

△

弓に矢を番えて、的を射る。

その恐ろしい程高い集中力は、途中から入ってきた私の存在すら気がつかせないよう

であった。

もうしばらく時間が掛かりそうだし、大人しく近くの椅子に座って待つ事にする。そして目的の人物の気が済むまで、矢の音をBGMに観察し始めてみた。

正直言って私には弓を射る事についての知識がない。そもそも縁が無かったから、知っても多分無駄な知識だったんだらうなと思って思う。

銀髪を一つに結んで集中している彼女は、また新たに矢を番え、的に向けてその一射を放つ。

引き絞る摩擦音がした後、綺麗になった弦の音。それから少し遅れて矢が的に届いた音が聞こえてくる。

大体的の真ん中辺り。けど彼女はそれほど当たった位置を気にしている訳ではないらしい。

以前聞いてみたら、これはただのストレス発散とのこと。だから体調が良い時はこうして、ただ射るためだけにここを訪れる。

『あ! ちゃん、来てたら呼んでいいのに。』

『だって は集中してる時、他の事が目に入らないし……。』

『いや……まあ……ごめんね?』

『別に気にしてないから大丈夫だよ。終わったなら家に帰ろう。』

『うん、じゃあ片付けが終わるまで待つてね!』

私に出来る事はないから、外の自販機で無難に水を買っておく。勿論、私の分じやなくて彼女の分。自分には温くなってる飲みかけのお茶があるし、これだけで十分だ。

玄関先から彼女が出てきたのを確認すると、あらかじめペットボトルの水を前に突き出しておく。

『 ちゃーん!アッ!冷たい!』

『こうでもないかと私が潰れるでしょ。』

『ええー、ちよつとくらいさ?減るもんじゃないし?』

『……………』

『アッ!マッ!テ!ツ!メ!タ!イ!』

泣く泣く抱きつくの諦めた彼女は、私の手から水を受け取ると早速飲み始める。側から見ててもよく分かる豪快な飲みっぷり。

見ていてとても清々しい程だ。

帰ろうと言って歩きだす。半ば強引に手を引かれたけど一緒に帰れる時は意外に無かったから、何も言わずにそのまま付いていく事にした。

これはちよつとした話。何気ない私達の昔の話。いつまでもこのまま置いてほし
いつていう私の細やかな祈りを込めた、ただの変哲もない話だよ。

すなわち眠気を感じるので失踪します

余談

怪盗少女マジカルきりん万能説をこころで提唱します。

個人的な願望が多いけど、かりんちゃんには多分狂人キャラ特攻入ってそう（偏見）

Part 18 交差するガバ

白タヌキを見かけなくなつて気分が爽快になつたRTAはーじまーるよー

今回は帆奈ちゃんルーム作成のためのお買い物とかりんちゃんの固有魔法研究会に参加いたしました。

その結果、現在詩織ちゃんはみかづき荘に同居中になっており、かりんちゃんは無事に至近距離ワープを習得しました。成長の伸びしろにブルっちやうよ……。

今回のパートに入つてようやく、あの邪悪の化身こと白タヌキが神浜から消え去りま

した。パイセン渾身の害獣駆除ネットが機能し始めた訳ですね。

これが始まったという事はマジウスが既に結成されたという事であり、それに伴ってマジウスの翼も誕生している事でしょう。

もちろん詩織ちゃんも入る気が無いので、モブやネームドキャラからの勧誘は丁重にお断りします。モブは信頼度イベントを初期の頃に行っているので、ちよつとやそつとで下がらない！安心！

まず初めに信頼度上げのために甘い物を食べるにきました。

ここら辺にいく美味しいって評判のたい焼き屋があるらしいつすよ？じゃけん信頼度稼いだかったー3歳組と行きましようねえ。

「すげえ！いろんな味があるぞ！」

「あちしコレがいい！かこはどうする？」

「それじゃあこの味にしようかな…？」

詩織ちゃんは4人分の料金を支払ってターンエンド！作りたてほかほかの美味しいたい焼きを3人に配って、自分の分のたい焼きを頬張ります。美味い！そして13歳組が可愛い！桃源郷はここにありました。

：あら？なんか詩織ちゃんがとある方向を見つめ始めましたね。気になる物でもあるんでしょうか？

視線の先には見慣れない制服の2人組がいまね。おそらく神戸市外から来た人達なんでしょう。ここは観光名所としてもいいんですよ！神戸市が賑やかになつたら：ええな！まあ今後否が応でもドンパチ騒ぐ事になるんですけど。

あれ待つてください？詩織ちゃんは見覚えありませんが、走者は見覚えありますよ？具体的にはまだマガキ外伝作品で見た事があります。

嫌な予感がしてきました……。

いやでも詩織ちゃんは困り事センサー搭載の走者殺しな性格してますが、今回に限つては発動してある意味助かった感じがしますね。

とりあえず気配を感じ取つた詩織ちゃんは人助けをしなきゃ気が済まねえぜ！13歳ズ！ここで待つてくださいね。

そこのお嬢さん達！ここらで見ない顔だけど何かお困り事でも？

「えつと……誰ですか？」

そら（いきなり知らない人に話しかけられたら）そう（いう反応になるだろう）よ。

詩織ちゃんは通りすがりの平凡な一般アルバイターです。ええ、ほんのちよつぴり優しく頑固なだけのお人好しです。プルプル……ぼく悪い走者じゃないよ。

神浜であまりよろし過ぎると、縄張りのあれやそれやら色々ないざこざに巻き込まれるかもしれないですよ？ここはひとつ詩織ちゃんに頼ってみませんか？こんなところで困ってるオーラを出すなんて、悩み事の解決は協力者無しだとキツくなるんじゃないですか？

信用：してくれれます？見てくださいよ、この顔を！悪いことするように見えますか？ただ善意でやってるだけなんですよ！オナシヤス！

：いい？ヨシ？大丈夫みたいですわね。

それで何があつたんですか？え？道案内をお願いしたい？『夏目書房』という古書店に行きたい？そう？

OK任せてください！詩織ちゃんは場所を知りませんが、丁度良くここにその一人娘さんが来てるんですよ！おーい、かこちゃーん！ちよつと用事あるから来てー！

ところでお二人の名前を伺っても？そういえば飴ちゃんと連絡先を渡すときです。自分から聞くのは名前くらいにしとこうね！

へえ！詩音千里さんと成見亜里紗さん？良いお名前ですわねえ。

はい、お察しの方は多いことでしょう。鈴音イベント来ちゃった♡帰ってくださいお願いします！オナシヤス！

これは第1弾の『CROSS CONNECTION』の表、絵本を探す安全なルートのようなです。なるほど『しおん』と『しおり』で被っちゃったのかな。

でも発生しちゃったら走者が介入したいのは裏ルートなんだよなあ！表イベントが発生したという事は、もう既に鈴音が誰かと交戦しています。

今のところ鈴音らしき人物の情報はカラスネットワークに上がってないんですけど……？

うーん、正直言つて初戦を防げなかった時点でかなり辛いですね……難易度ハードの神浜はやはり修羅の国としか言いようがないです。

せめて現場に居合わせていたら良かったんですが、とりあえず今の走者にはネームド魔法少女がやられていないように祈るしか出来ません。

連れてきた13歳組には悪いですが、夏目書房に向かいましょう。ごめんね……ごめんね……たい焼きもう一個買っていいから……許して……。

ついでにやちよさん帆奈ちゃんみたい焼きパーティーする分も買います。余るくらいに買つときます。残つたら明日の詩織ちゃんのご飯になるだけです。

それじゃあかこちゃんちにお邪魔しに行きます。詩織ちゃんは何もしてないじゃないか？いえ13歳組の保護者枠してますから！重要ですよクオレハ……。

しばらく絵本探しを手伝いますが、実はここに千里さんが探している父親の絵本はあ

りません。どこにあるかと言うと、近くのリサイクルショップの在庫の方にあります。

しかし皆さん頑張って探してくれているので、詩織ちゃんが提案するのは後にしましょう。具体的にはフェリシアとあやめが飽きてきた頃です。店は休憩がてら周辺を歩いていけばそのうち見つかります。

それにしても未だカラスネットワークで調べていますが、スズネⅡサンらしき情報はまだ一切出てきてないですね。

……もしかしたら魔女結界にすぐ入ってを繰り返していたり、結界内で獲物を待ち伏せしたりする行動を多発しているのかもしれませんが。

神浜カラスネットワークは便利ですけど、結界とかは義手くんじゃないと入れないですし……いやでも交戦は魔女を倒した後に行うので少しは情報が入るはずなんですよ……？

ん？待って下さい、それ言ったらやられた魔法少女の死体とかも発見されていないですね……これはもしかして来たんちゃう？来たんじゃないですかね？

どうやら記念すべき第一犠牲者は鈴音と交戦したに関わらず、無事に難を逃れることができたみたいです。お前それ本当に勲章もんだよ……。

けれども誰か分からないから、接触が出来ないのが難点ですね。これ結局振り出しに戻ってなあい？絶対戻ってるよね……？戻ってる（断言）

「あの！本当にありがとうございます！」

良いって事よ！気をつけて帰ってくださいね！13歳組もまた今度美味しいところに連れて行きますよ！じゃあ詩織ちゃんはやつと不審者撃退のおバイトに行ってくださいので！解散！

それではこれから鈴音の撃退および『CROSS CONNECTION』を成功させるため、早速行動に移しましょう。

このイベントはかなり時間とタイミングがシビアなスケジュールになりやすいです。もし本来通りに進むのなら、0:35の初戦が発生したその日のうちに終了します。

しかしマホウショウジョスレイヤーの鈴音は1人でも多くの魔法少女を暗殺する事を目的としています。

ですので単純な力量差で追い返しても、幻覚などで騙して罠に嵌めない限り、また襲撃してくる可能性が高いです。

しかも力量差が分かっているため、せっかく防いでも周りが悲惨な目になる事が多くあります。やろうとした人はもう既にこうなつた方が多いだろうと見当をつけておきます。

初戦を防いでからななか組（かこちゃん除く）と会議して作戦を練るのが良いんですけどね……。やっぱり最初に交戦していないと情報が分からないのが一番辛い所です。このイベントは大体20：00くらいに千里と亜里紗が神浜からホオズキ市に帰ってきます。順調に進んで追い返した場合の鈴音が帰る時間帯もこの辺りです。

今回はフェリシアとあやめのアシストに詩織ちゃんの提案が噛み合ったおかげで、表ルートが15時近くに終わるといふ大幅短縮が出来ました。

ここから組長にすぐ会えるようにアポを取りましょう。なんか電話で出てくれる時があまり無い気がするので、走り書きのメモを義手くん二号に届けさせます。

そのまま詩織ちゃんは組長と合流してから、目的地であるエミリーのお悩み相談所に着きたいですね。

お、組長から承諾が来ました。じゃあ早速向かいましょうか。

「少し妙な胸騒ぎがします……。」

組長のそれ、案外当たってるかもしれないですよ？

っておわっ…相談所に近づくに連れて組長のオーラがめっちゃくちや怖い雰囲気になってきていますよ…こわいなあとづまりしとこ。イメージとして例えるならさながら毛を逆立てた猫のようです。

まあそれもそのはず。現在時刻は大体15時半で、しかもCROSS CONNecTION中に相談所に来る人物と言えば…ねえ？

「あれ？ななかに詩織さん、2人だけでいるなんて珍しいね！」

「そうでしょうか…ところでそちらの方は？」

「……………」

丁度よくいたあきらさんからお話を聞きました。怪我してたから連れてきたらしいっすよ？ドーモ、スズネIIサン。シオリです。

神浜以外から来る子に出会うのは今日で2回目っすねえ！君はどこから来たんですか？へえ〜ホオズキ市！実は今日会った子達もそこから来たんすよ、もしかして神浜観光そつちで流行ってたりします？いや〜嬉しいなあ…君も帰ったら知り合いに神浜の良さでも布教しな！

まあそんな感じで飴ちゃん渡しながら結構話してますが、ななかさんが笑顔でバリバリ牽制しまくってて草生えますよ。はえ〜、鈴音もこの笑顔には気圧されるんすねえ…………でも実際コワイ！

「あの……もう大丈夫なんで、失礼します……。」

怪我してるなら気をつけて帰りなよ！と見送ったところで本題ですね。

ツカヅカと質問していったななさんにあきらさんは怒りますが、状況がややこしくならない内にサツサと説明します。

事情を知らない詩織ちゃんも何となく組長の雰囲気で察していたみたいです。これでやっとイベントの本題に入れるぜ！

プレイヤーが知ってる情報とキャラクターが知ってる情報は違うってそれ一番言われてるから！

そして見失わないように義手くん二号を飛ばして、相談所から離れていった鈴音の後を追いかけます。やつと浮上してきた獲物をみすみす見逃す訳無いよなあ!??

この後鈴音は懲りずに魔女結界に行くので、何かあった時の為に義手くんのパワー配分を多目におきます。

代わりに詩織ちゃんが一時的に貧弱になりますけど、今は戦闘じゃなくて会議するだけで済みます。

そうと決まったら頼れる神浜の仲間達に連絡ダア！

緊急連絡の集合場所をファミレスに指定して、今回はここまでにします。

ご視聴ありがとうございました。

▶
?

最近、自分達の監視の目が届かない場所がある。

そうインキュベーターに情報をリークされたのが、私をあそこに動かす事となった一番のきっかけだ。

その場所の名前は『神浜市』。

同時に各地の魔法少女達が続々と集まってきているらしい。私のやっている事を承知で流してくるという事は、あわよくば返り討ちにでも遭ってしまったと思っっているのだろう。

これ以上、魔法少女の負の連鎖を増やしてはいけない。だから…見つけ次第、仕留める。

しかし最初に交戦した相手のせいで、神浜の魔法少女は一筋縄ではいかないの思っている事となった。

神浜に着いてからすぐに魔法の結界を見つけ、私はその中でしばらく他の魔法少女が来るまで張り込んでいた。

時刻は既に次の日へ回っており、そろそろ別の結界を探して待っていた方がいいだろうか。そう思い始めた一瞬の事である。

視界で黒色が瞬いた。

さつきから見慣れた手下とは違う、私と同じ人型。間違いない、あれは魔法少女だ。いつも通り魔女狩りに参加して、友好的なように思わせる。そして不意打ちでソウルジェムを狙う。

どうやらやって来た魔法少女はソロで活動しているようだ。少なくとも魔女を一人で倒せる実力を持っているのだろう。

だが、他に誰もいないというのは好都合だ。これなら邪魔されずに獲物を仕留める事が出来る。

そう判断してあの魔法少女が進んだ最深部の方へ足を向けた時だった。

ふと第六感が何かを避けろと警笛を鳴らす。理由もない直感に反射的に従った私は、僅か一秒も経たない内に息を呑んだ。

頬を掠めた閃光が敵対者の存在を意味していたのだから。

「ツ！一体誰が……！」

閃光の軌道を目で追いかけると、何かが着弾したような痕跡が二つ残っている。しかし残されたのは痕跡のみで、何を使って撃たれたのかまでは分からない。

もしあのまま直感を信じずに立っていたら、私の両目は一寸変わらず撃ち抜かれていた。そう予感させる程、精度の高さを思わせる射撃に戦慄が走る。

確実に分かるのは攻撃してきたのが魔法少女だという事。それも知覚できない範囲から正確無比な狙撃ができるような手練れ。

さっきの攻撃だけでは終わらず、閃光は一定間隔で放たれ続ける。一度分かれば後は避ける事が出来るが、厄介にも相手の方向が分からずじまいだ。

同じ方向から撃たれている訳じゃない……私を囲むように円になっているから、相手は複数人いる可能性がある。

それに、最初では両目を狙っていた攻撃は、二射目から腕や足を狙う物が多い。ソウルジェムじゃないって事は、多分私の無力化が目的なのだろう。

正体不明の攻撃に警戒していると、不意に辺りを包んでいた結界が消え失せる。最深部の魔女が倒されたのだろう。

解けた場所の廃墟に自分以外の姿は見えず、あの黒い魔法少女と謎の敵対者を探したが、遂に見つける事は出来なかつた。

張り込んでから見かけたのは、黒い魔法少女ただ一人のみ。

彼女が私を狙った狙撃をしたのか？もしそうだとしたら他の魔法少女を牽制しつつ、魔女を一人で狩れるような実力者なのかもしれない。少なくとも私を近づけさせない程の腕を持っている。

ここは、一時的に撤退すべきだと思う。このまま正体不明の相手と戦闘を始めてしまったら、今の状況では絶対に不利となつて苦戦を強いられてしまう。黒とは対照的な銀色の光を目眩と感じて足早に離脱していく。

その場から離れた私の耳に届いたのは、夜の闇に溶け込むようなカラスの一鳴きだけ

だった。

翌日……と言っても同じ日の午後。魔法少女を見つげるために神浜市の結界を巡っていた私は、油断していたからか魔女の手下から不意打ちを食らい、普通なら受けなくともいい怪我をしてしまった。自身の油断を反省しつつ、腕の傷を魔力でさっさと治そうとする。

「ああ！大丈夫!?？」

そんな折に話しかけて来た女の子が一人。勢いよく喋る彼女に押されて、私は成す術なく連行される事になった。

連れて来られた場所はここかの商店街で、そこにあつた簡易的な露店のような所の椅子に座らせられる。自分は大丈夫だと言っても、相手がなまじ善意なだけにとても断り

にくい。とりあえず彼女の話には合わせておこうと判断する。

「案内してくれてありがとう！私は天乃スズネ、あなたは？」

「そういえば名前を言っただけでなかったね、ボクは志伸あきら！」

少女の名前は志伸あきら。案内された商店街の一角で相談窓口みたいな事をしていて、そのエミリー先生？という人の手伝いをしているようだ。

志伸さんから怪我の手当てを受けて、しばらくここで休んでもいいと言われる。そしてこれを機会と捉えた私は、休む間彼女から神浜の情報を聞き出すと話をすることに。

「志伸さんって…言われ慣れてないから何だか照れちゃうな……。」

「あ、じゃあ…あきらさん。」

「うん！そっちは慣れてる！」

「それなら私の事もスズネで……。」

ところが相手の勢いに乗せられて、話を聞き出すどころか、逆に話を聞き出されていくような状況になってしまった。

更にあきらさんは楽しそうに友達の話をする。こんな時間を持ったのはいつ以来だったか…もう思い出せない程、懐かしい時間だった。

調子を合わせるために適当に笑っていたが…もしかしたら私は少し楽しかったのか

もしれない。体感では結構、長い時間話をしていたと感じている。

けれども、終わりは唐突だった。

「失礼します。」

「…良い、天気…だね…?」

相談所に訪れてきた2人の少女。

名前はそれぞれ常盤ななか、弓有詩織と言うらしい。この人達を見た時、私は身構えてしまった。

それも同じ理由じゃない。2人とも別々の理由で警戒心を抱いたのだ。

まずは常盤ななかの方。単純に言えば、同族の気配を感じ取った。何故なら…私もこの人と似たような笑顔を作るから。

一見こちらの方が危険に思えるだろう。しかし、問題はその隣に居る大人しそうな弓

有詩織という人物の方。気のせいじゃなければ……おそらく姿を見かけた事がある。昨夜0時過ぎに結界で見た黒い魔法少女は彼女だ。

私の両目を潰しにかかるような人だから、大分強面を想像していたが、予想よりも大人しい少女だった。

「……制服……。」

「……？」

「……………」

「……………」

「……ホオズキ市……？」

「え？ああ……そこから来たんです。」

彼女にも色々と聞かれたが、あくまで世間話程度で済んだ。無口なのか口下手なのかあるいは両方ともなのか、弓有詩織との会話はそう長く続かない。こちらから質問しうにも、どう接触すれば良いのか分からないタイプの人だ。

……本当に昨晚牽制してきた魔法少女なのだろうか？そう考えてみると、あの場には複数人居た可能性が捨て切れない。彼女が他にも仲間を引き連れていたという事だつてあり得る。

「お二人はどういったご関係で？」

「スズネさん、この近くで怪我をしたんだ。ほら、腕のところ。」

「まあ、これは痛々しいですね…どうしてまた？」

「立ちくらみして壁に腕を擦っちゃって…だよね？」

「ええ……。」

だが常盤ななかのまるで尋問のような質問は、あからさまに私を疑っているという事を表している。

そろそろ頃合いかと判断した私は、訝しげに向けられる視線を背後から感じつつその場から去っていく。

▶ ?

『よしよし、君は良い子だ。』

月明かりに照らされた人影が一羽の鴉の頭を撫でる。鴉に拒む様子は見受けられず、むしろその手を心地良さそうに受け入れていた。

『こんな夜遅くに出歩く悪い子は、悪役の格好の的になっちゃうよ？』

高らかに笑う少女はビルの屋上で器用に腰掛けていた柵から降りて、静まり返った眼下の街を眺める。一息ついて星の海を見ながらぼーっとしていた。

やがて肩に乗った鴉が空に羽ばたく様子に目を細め、少女は何もない空中へゆっくりと一歩踏み出していく。

『……………なんてね。』

当然、上から下へ身体は自由落下する。自然に落ちていくまま身を任せて、天と地が逆さまになった光景を視界に収めた。

呟いた言葉は宙に消え去って、もう耳に余韻すら聞こえなくなった。

不意に辺りがチラついて一瞬光ったかと思うと、その頃にはもう少女の姿は何処にも見当たらず、ただただ一羽の鴉が夜闇に紛れるのみである。

今も
は静かに見守っている。

余談①

このゲーム（架空）には天文学的確率で、幻のモバゲー版のキャラ（主人公＋オリ4人組）が出るらしい……

主人公ちゃん：『他の固有魔法をカードにして使用できる』能力を持つ記憶喪失系魔法少

女。まどマギ版ディケイド。最初の時間軸でクーほむに頼まれてワルプルを倒すために時間を繰り返している。デフォルト名と容姿が設定されていないため、このゲーム（架空）ではモブと非常に紛らわしい。

オムライスを食べるので失踪します

余談②

オリジナル魔法少女ズ：

モバゲー版のシナリオ『虚ろな人魚姫』に登場する4人組のこと。いつかマギレコに実装してほしい（願望）。もしこのゲーム（架空）に登場すればRTAのガバのリカバリーが出来る能力を持っている。ただし代償が付いているので一度きりの切り札である。しかも信頼度を恐ろしい程に上げなければならぬので、ぶっちゃけ主人公ちゃんを懐柔した方が早いという噂が囁かれている。

Part 19 BIM CONNECTION

人口300万人を超える新興都市、神浜。

私の居た市の東にあるこの土地は、街に溢れかえる人々で賑わっていた。でも私がここに訪れたのはちよつとした事情があつたりする。

ここ数日追っている魔女の結界を追っていたら、いつのまにか神浜市内に移動してみたい。

確か神浜市は魔法少女同士の間張り意識が強いという事を聞いたような気がする。お邪魔しないように、魔女を倒した後は直ぐに帰ることにしようかな……。

とは言つても…一人で魔女を狩るなんて久しぶりかもしれない。そう思つたらなんだか上手く倒せるのか心配になつてきちゃつた。

「くっ…当たって！」

やつとのことであたり着いた最深部だけど、肝心の魔女は予想したよりも早くてなか

なか矢が当たらない。

刺さったと思っても、あまりダメージになっていないみたいだった。グリーンシードもそこまで多くある訳じゃないし、今日は撤退した方がいいかも。

けどここで逃がしてしまったら、他の人達に被害が出るかもしれない。

だから私はせめてこの魔女だけでもと考えて矢を放ち続けていた。思えばこの時が分かれ目だったんだろう。

リンという鈴の音が結界内に響く。

次に瞬きをした後には、崩れ去っていく魔女と一人の女の子の姿が目映った。

「…大丈夫だった?」

「あ、はい!ありがとうございます!」

この子、私が苦戦してた魔女を一撃で倒しちゃった……。長い髪を後ろで一つに縛った女の子は、振り返って私の無事を確認してくれた。

結果が解けると私達は夕方の路地裏に放り出される。随分と遠くに来ちゃったから、家までちゃんと帰れるかどうか不安になってきた。

「名前は?」

「へ？あ、私は環いろはです！あの本当に助かりました。」

そんな事を考えていたら女の子から声をかけられる。少しぼーつとしてたから間抜けな声が出てしまったけど、自己紹介と感謝の言葉を口に出す事は出来た。

その時何故か女の子は変身を解除していなかったから、釣られて私も解除をするのを忘れていたままだった。

「そう、環いろは…私はスズネ、よろしくね！それと……」

スズネさんは私の名前を何度か繰り返すと、不意に顔を上げてこつちを見据える。

なんだか理由は分からない。分からないけど、ふと脳裏に今朝のニュースで放送していた占いが思い浮かんだ。

獅子座は最下位、『外出先には気をつけた方が良いでしょう』と言うテレビのコメントーターの言葉。そして悪い運勢を変えるために必要なモノ。

「さようなら。」

ラッキーカラーは黒色。

それは正しく一瞬の出来事だった。

物凄いい音を立てて目の前に落ちてきたのは、装飾の隙間からかすかに光を放つ一本の槍。あまりの衝撃で目を見開いた時にはいつのまにかスズネさんが剣を向けていた。

槍はたちまち普通より大きな鴉に姿を変えると、私に背を向けてスズネさんに向き直る。多分この鴉が私を守ってくれたんだだろうなって思った。

スズネさんからのピリピリとした視線を痛いくらい首元を感じるから。

「……今のは……。」

間違いなく私は攻撃されそうになっていた。正真正銘、目の前のスズネさんの剣によつて。

あの魔女を斬り伏せた一撃が当たっていたらどうなっていたんだろう。ううん、それよりもそうなりそうだった今の状況が重要。

と言つても自分にはまだ信じられない。だってさつきまで温厚そうな笑顔を浮かべていたスズネさんが殺そうとしてきたんだ。

そんなのすぐに信じろつて方が無理だよ……。

「……っ！弓有詩織！」

スズネさんが視線を外して、私の後ろの方に目を向ける。そのまま前に躍り出たのは黒い魔法少女だった。

弓有詩織と呼ばれたその人は、私を庇うように短い槍を構える。立っている場所から顔は見えないけど、二人の間に一触即発の空気が流れていた。

一方情けない事に私はその光景を眺める事しかできなかった。しばらくの間睨み合いを続けた拮抗状態は唐突に崩れる。

おそらく分が悪いと判断したんだろう。スズネさんの姿が揺らめくと次第に見えなくなっていた。

緊迫した時間：けど完全に気配が無くなったのを感じたのか、黒い魔法少女は辺りを警戒しながら私を通りに連れ出す。

人混みに紛れて危機を免れると、詩織さんは名乗りつつ自販機で水を買ってくれた。私に気持ちを落ち着けるようになってことみたい。

ソウルジエムはかなり濁ってしまっていたようで、グリーンフィードも予備として多く頂いた。ここまでして頂いて申し訳ない気分になってくる。

「…追いつきましたよ詩織さん。おや、そちらの方は？」

多分詩織さんの知り合いなんだろうと思う。私が自分の事を話すと、常盤ななかさんという人は簡単な事情を説明する。

あのスズネさんはホオズキ市から来た魔法少女で、なんだか悪い予感を感じたから

こっそり尾行してたそう。

その予感ほ的中。私が狙われているのを察知して急いで駆けつけてきた、とのこと。「無理には言いません。しかしあなたが狙われたのもまた事実、どうか力を貸して頂けないでしょうか？」

この後、一部の魔法少女が集まって対策を練るために会議をするんだって詩織さん達は話していた。

でも明確な脅威が分かっていたいなかったから、注意喚起するだけになってしまおうところだったんだ。

もしかしたらこのままだと、また私が狙われる事になるかもしれない。それどころか命を落としてしまう危険だってある。

何より誰かが私と同じような目に合うかも、という可能性が1番耐えられなかった。だから神浜の魔法少女達の集まりに緊急参加する事にした。

詩織さんはその決断に渋った顔をしていて、せっかく助けてくれた恩を仇で返すみたいになっちゃうけど、それでも私は見過ごせないと思ったから。

最後には折れて諦めたようで、目的地であるファミレスに案内してくれた。

その集会には他にも魔法少女がいた。と言っても私を含めて全員で6人ほどだけけれども、やっぱり元居た宝崎と比べれば、魔法少女の数は神浜の方が多いんだと思う。

私以外の人はそれぞれ詩織さん、ななかさん、あきらさん、美雨さん、葉月さん。

まず始めに挨拶をして軽く神浜の魔法少女についてを教えられる。基本チームで活動してる事とか、東西中央でそれぞれまとめ役が居る事とか。

この場にその人達は居ないけど、もしもう一度神浜にやって来るなら覚えておいた方がいいんだって。

それにしても名前を小耳に挟んだ事があるような…無いような…七海やちよさんはモデルさんみたいだし、クラスメイトが話してたのを聞いたのかな。

とにかくこの場で話し合うのはスズネさんの対処のこと。

神浜市では噂や口伝えが伝わりやすいっていう性質があつて、今回はそれを利用して追いつく作戦を使う事になった。

そこで上がったのはななかさんのチームの一人、美雨さんの固有魔法を使つて時間稼ぎする話。

これは相手の認識を利用するから、囿役としてスズネさんと戦わなくちゃいけないっていう欠点があつたんだ。

幸いにも会議に来ているメンバーは神浜でも力がある方の魔法少女達だったようで、後は作戦実行の時を待つだけだそう。

辛かっただろうにわざわざ協力してくれてありがとうという意の言葉を伝えられ、私

は新西区の駅まで送られる予定だった。

.....

でもそれだけじゃ今抱えているモヤモヤとした気持ちは晴れない。いわゆる消化不良なんだと思う。

別れ際に俯いたまま動き出さない私を心配したのか声をかけられる。近づいてきた詩織さんの肩をガツシリと掴んで顔を上げた。

「私も…行かせてください！」

まず私達はスズネさんの居場所を把握するために動き出した。

会議の前に詩織さんが放った鴉が魔女の結界に偵察しに行っているようで、店を出てから少しして先導するように歩き始めた。

「……………つち。」

どうやらまだそう遠くへは行っていないみたい。ホツと胸を撫で下ろしたけど、まだまだ始まったばかりだと改めて気を引き締めなおす。

そのうちスズネさんがいるという結界がある廃墟まで辿り着いた。ここから先は私とあきらさん、ななかさんに葉月さんの4人で行く事になる。

相手から警戒されている詩織さんは、固有魔法を発動させる美雨さんと、一緒に近くで待機している。もしもの時には介入出来るように準備しておくって言った。

「見つけました!」

「…環いろは……それにあきらさん。」

まず先に接触したのは私とあきらさんの二人だ。何で私達なのかはスズネさんに関して共通した事を知りたかったからだ。

スズネさんは軽く目を見開いて振り返る。でもそれもほんの少しだけで、持っている剣を構えてこっちの出方を待っているみたい。

少なくとも私達を逃す気は無い。痛いくらいに注がれる視線が証明していた。

そしてあきらさんの方を見てから、一番最初に声を掛けた私に剣の切っ先を向ける。

そうだよね…一度命を狙われたのに、声を掛けるなんて何かあるとしか思えないよ。私だつてそう感じる。

「私、スズネさんに聞きたい事があるんです。どうして攻撃してきたんですか?」

「……話すことはないわ。」

今一番気になっている事はそれ。同じ魔法少女なのに何で殺そうとするのか?そこを直接聞きたくて仕方がなかったんだ。

確かに魔法少女同士で敵対するっていうのはあるんだと思う。例えば相手のテリト

リーで好き勝手しちやったとか、あくまで私は聞いた事があるだけだから予想しか言えない。

でもそうだとしても、だから殺そうとする事なんてないよ。何かしてしまつたなら謝りたいし、話し合つて解決する事が出来るかもしれない。

結局のところ、話す事なんて無いってあしらわれてしまつたけど。

「…言い残した事はない？それじゃあ、終わらせましょう。」

「終わらせる…？ボクが君のその行いを終わらせるよ！」

一斉に変身して戦いが始まつた。

あきさんの拳とスズネさんの剣が互いに行き交う。飛ばしてきた剣を全て捌いたりして、私には到底出来ない次元なんだろうなつて感じる。

でも私だつてただ立つて居るだけじゃない。二人に比べれば豆鉄砲みたいな攻撃かもしれないけど、少しでもあきさんの力になりたいから撃ち続けていく。

「…ま、まだまだあー！」

僅かに状況が傾く。それはこちらにとつて悪い方向に、という注釈が付くけれども。

あきさんはスズネさんを圧倒していたが、全力を出し尽くしてもう動きが鈍つてきている。私もそう長くは保たないくらいに消耗していた。

「…はっ！」

あらかじめ分かれて待機していたななかさんがスズネさんに斬りかかる。奇襲したって事は、多分きつとこのタイミングなんだろう。

「失礼するよ！」

「…っつちもか！」

次に葉月さんが攻撃を仕掛ける。不発になってしまったけど、なんとか状況を挟み撃ちの形に持ち込めた。

肩で息を切らしてるあきらさんに駆け寄って、ななかさんは刀から手を離さないまま大丈夫かどうか確認する。私もそうだけど、互いに消耗が激しい戦いだった。

ここは引いた方がいいと判断したのか、スズネさんは片足を半歩だけ後ろにずらす。またあの時の透明になる力を使って逃げようとしているのかも。

「…まだだよ…まだ、終わってないよ！」

でもあきらさんが力を振り絞ってスズネさんにまた拳を振りかぶる。

そして静かな路地の中で、私は宝石が砕けた音を耳にした。

段々と崩れていくあきらさんの身体が目映る。動かなくなった体はあきらさんが

殺されたという事を意味していた。

「つああああああああ！」

やけになって撃った矢はいとも容易く避けられて、すぐさま懐に潜り込まれる。首に向かつて振られる剣がゆっくり動いているように感じた。

「……さようなら。」

痛みなんて感じる前に視界は暗転した。

新西区の駅前。

もうすっかり日が暮れてしまい、良い子は家に帰らなくちゃいけない時間になってきた。

「今日はありがとうございました！」

「……気を、つけて……ね？」

無事に作戦が成功した私は元いた宝崎市に戻るため、詩織さんによつてこの駅まで案

内された。

別れ際にはまた飴玉と連絡先を貰ってしまった。もう一度神浜に来るような事があれば、是非自分に連絡してくれると嬉しい、という事を言いながら笑っていた。

今なら追い返したスズネさんは駅に来ていないから、見つからないうちに早く帰った方がいいみたい。

一応宝崎市にも対策用の噂は流しているけど、神浜市よりは効果が薄いだろうから何かあつたら言つてほしいって事も注意された。いつでも掛けてきていいよとまで念を押されてしまう。

「…ばいばい。」

改札で手を振つて見送られる。ふう、と一息ついて空いてる席に腰をかけて、発車までの間に外のホームを眺める事にした。

今日は本当に色々な事があつたなあ。ここ数日の魔女を追いかけていた間では想像も出来ない程、自分でもなかなか大変な事をしたんじゃないかなって思う。

「あれ?」

そうしてもうすぐ列車が出発する時、私は窓の外に気になるものを見つけたんだ。そ

れは見間違いじゃなければ、多分小さなキュウベえだったと思う。

よく確認しようとしたら建物の後ろに行ってしまったて、結局きちんと姿を見る事は出来なかった。

もしかしたらキュウベえにも小さいタイプの……子供のキュウベえがいるのかもしれない。そう考えて発車した電車に揺られ、私は元の日常に戻っていく。

この日からだ。

病室にいる女の子の夢を見始めたのは……。

▶ ?

マホウシヨウジヨスレイヤーを撃退したいRTAはーじまーるよー

前回は鈴音を追い返すための会議をするために知り合いの人達に声を掛けました。

結局空いてる人はかこちゃん除くななか組と葉月さんくらいしかいなかったんですけどね！みんなタイミング悪スギイ！

うん？何ですか義手くん2号、鈴音に新しい動向でもありましたか？

え、入っていった結界内にもう一人魔法少女がいる？待ってください、どういう感じの子ですか？特徴は？

白いフードを付けてる

主人公に見られるようなピンク髪

左腕に装着しているクロスボウ

あつ（察し）ふーん……。

待てやオルルアン？待って待って待って待って待って！落ち着け、落ち着けよ！どうしてここに？まさか自力で脱出を…!?

これらの特徴から導き出せる魔法少女はただ一人！

それ即ちマギレコ主人公こと『環いろは』ちゃんです！

いろはちゃん神浜来るのまだ先でしょー！なんでフライングしてるんですか！走者のチャートが崩れる音がどこからともなく聞こえますよクオレハ……。

ていうか待ってください、鈴音が入った結界の中いろはちゃんがいるんですよね？そうなるとタイマン状態で？

ウオワアアアアアアアアアア！2号！阻止！阻止しろ！絶対に何が何でも守り通せえ！

いろはちゃんだけは殺させるんじゃないやねえ！そんな事したらマギレコ本編が始まらなくなっちゃうダルオ!?

すみません組長！説明は後なんでちよつと失礼します！あ、美雨さんチーッス！呼んでいてアレですが、ちよつとやんなきやいけない事が出来たんで待ってて下さい！後で葉月さんも来るんで説明しといて！

義手くん2号今どうなってます？あれ義手くん2号!?!応答して下さいよ！場所だけ送ってくるなア！

仕方ないので送られた場所まで行きます。勿論全力で駆け抜けます。おうこんな所で大ガバが発生するなんてな！祈祷ポイントですね…間違いない。

現場に着いたらダイナミックエントリー！どうやら2号は無事にお役目を果たしてくれたようです。これは勲章モノだあ…！

オラ！来いよ！ビビってんじゃないやねーぞ！固有魔法なんて捨ててかかってこいやー！

……行きましたね？念のため義手くん編隊を大量召喚して周囲を警戒させます。行くぞいろはちゃん！まずはソウルジエムの浄化からじゃい！

落ち着く為のお水も買ってあげます。お礼はいいっていいって！水分たっぷり補給しな！あ、これグリーンフィードね。予備として貰つときな！

「…追いつきましたよ、詩織さん。」

つと組長ですね。いいって言いましたが言葉足らずだったようです。他の人達は集場所のファミレスへ先に行つてるとのことですよ？

じゃあいろはちゃん大丈夫ならお話聞かせてもらえますか？無理そうなら駅まで送りますけど……。わあ食い気味に参加表明しましたね。

さてファミレスでの会議ですが、ここでは元の撃退策の方向に持つていくだけです。ただし今回は何故かいろはちゃんがいるので、そこをどうするかが重要になりそうです。

しかし現時点でのいろはちゃんは市外在住のため、神浜市の外で鈴音に鉢合わせてしまうという欠点があります。

このまま帰らせてもいいんですけどね…ちよつとあの世間からの色々が厳しくなっ

てしまいます。というか存在を知っている以上、余程のことがない限り鈴音は探してきますし。

とりあえず帰らせる方針でいきましょう。

余計な負担をかけて魔女化させるよりははるかにマシです。主人公ロスしちやつたら話が進まないんじゃないか。

おそらくなんですが、いろはちゃんからモキュについて聞かれていないため、まだ本編入っていないみたいです。そうになると余計に何でいろはちゃん居るのか分かりませんねえ？

作戦はなんとか本来の通りに誘導する事ができましたね。

詩織ちゃんは鈴音の犯行を止めて警戒されてしまっているので、残念ながら囚班に入る事が出来ません。

だからいざとなつた時にリカバリーが出来るよう、大人しく美雨さんと待機することになります。

というか今のうちに連絡回して噂を流せるように手配オナシヤス！詩織ちゃんも後で顧客達にお願いして根回ししようね！

それでは会議が終了しました。

早速飛ばしておいた義手くん達に鈴音の場所をリークしてもらいます。待つてる間にいろはちゃんを新西区の駅に送ってあげましょう。

いろはちゃん行きますよ？え、俯いてどうしたんですか？精神的ショックでも受けましたか？何かあつたら走者が困ってしまうんですけど……。

「私も…行かせて下さい！」

ええ……。

ウオー！ソコダー！イケー！

はいここ！ここです、美雨さんやっておしまいなさい！固有魔法『偽装』の力見せつけちゃってー！

鈴音の動きが急に止まってスタスタと帰って行きました。

これはつまり…作戦成功じゃな？

鈴音が特に警戒していたのが詩織ちゃんという事と、時間が無くて調整屋に行つてなかつたいろはちゃんのクソザコさ。これら二つが組み合わさつて功を奏したような気がします。

ま、メインストーリー入つてないし、いろはちゃんのパワーアップイベント起こつてないから多少はね？

いえーい、皆に飴ちゃんをめちやくちやサービスします。疲れた脳には糖分補給！はいどーぞお、いろはちゃんもどーぞお！

さて後は蒼海幫の人達がなんとかしてくる事でしょう。総員、解散！お疲れ様でした！やっぱ繋がりが大切よなあ？

最初の頃は組長の信頼度が心配でしたが、今ではこんなに立派になつて……まだ詩織ちゃんに相談できない事はあるみたいですけどね。

というより組長は組長で信頼度はまだ心配ですが、葉月さんの信頼度も地味に通常より高くないですか？

アザレア交友のために度々呼び出してるからですか？なんか他の人達と違つて斜め後ろをちよこちよこ付いて来るの、見てると少し楽しいんですね……もしやそれが……？

それはそうとしているはちゃんを新西の駅へ送り届けます。鈴音と鉢合わせないように、神浜カラスネットワークをフル活用して、駅までのルートを構築します。

うーん、このナビゲート性能の高さ。ええんちやう？ 詩織ちゃんの後方支援キャラ、情報提供者としての本領を發揮しちやいましたかね？

いくら道に迷いやすかつたり、機械を操作するのが苦手だったりするいろはちゃんでも、流石に帰りの電車には乗れるので心配無用です。

詩織ちゃんは連絡先 with 飴ちゃんをプレゼントして、未来の主人公を見送ります。今度神浜に来たら是非連絡してくれよー！

いろはちゃんを乗せた電車が進んでいくのを眺めながら、今回はこの辺りで終わりにしようと思います。

ご視聴ありがとうございました。

Part 20 Q. 走者がガバを起こさない確率を求めよ

ペンのインクが切れたので初投稿です

家具を再配置して同居人のスペースを広げるRTAはーじまーるよー

前回のあらすじ。

クソでかい情報網を持つわりに走者にしては意外と交友関係が狭い詩織ちゃん！マホウショウジョスレイヤー、スズネIIサンの対策をしようとか会議のメンバーを募ったが、なんとかこちやん除くななか一派と葉月さんしか来なかった！

そんな折に発生したいろはちゃんのびっくりどつきり神浜初（）来訪！お？RTAチャート崩壊か、と思いきや間一髪間に合った走者は絆（総員6名）で鈴音を撃退する事に成功する。

そしてなんとか波乱の一日を終えることが出来たのだった……。

あらすじ長くなあい？でも実際いろはちゃん死亡で再走りセット案件とかいうとんでもない事が起ころうとしたのは確かです。

やっぱ難易度ハードの神浜ってロクなことにならねえよなあ!? 修羅の国はロクでもないってのはつきり分かんだね。

それはともかくとして今回でようやくみかづき荘での同居から、詩織ちゃんが住んでるマンションのお部屋へ移住するのが認められました。いよ！やったぜ。

家具を一旦キューブの中に入れてから掃除した後、帆奈ちゃんと相談しながら配置を

ウォールナッツのケーキは誰かと一緒に食べに来ると、そのキャラとの好感度を稼ぎやすい補正がかかっています。しかもイベントで貰えるような一回きりのものでなく、金さえ払えば何回でも食べる事が出来ます。

毎日食べに来ればたとえ一緒に来た相手が元々敵だったとしてもそこそこ稼げます。そもそもそういつた子は一緒に食べに来るまでが長いんですけどね、視聴者さん。

うんまあい！説明不要！

いやあ、一仕事終えた後のご飯は格別だなあ……これには詩織ちゃんも笑顔にならないですよ。

……何ですか帆奈ちゃん、こちらをジッと見つめて……もしかして走者また何かやっちゃいました？

「そういえばさ、『まひろ』って誰なの？」

いや、誰ですかその子？ネームドキャラにそういう名前の子いましたっけ？いや居ないですよ多分。

もしかして今週回のモブには居るんですかね？でも今までその『まひろ』っていう子は名前すら見かけた事がないんですけど……？

詩織ちゃんも特に思い当たる人は居ないみたいですから、別の人に聞いた方がいいんじゃないですか？

「本当に知らない？」

ええ本当に知りませんよ。その子のこと探してたりするんですか？残念ながら詩織ちゃんには力になれないみたいです。

知らないなら別にいいと言われてしまいました。これは：戦力外通告だな？難易度ハードなだけあつてモブの存在感も増してるんでしょか？

そうだとしたらますます神浜が修羅の国になっちゃうんだよなあ。試走でも割と地獄な光景が多々ありましたからね、油断は出来ませんよ。

まあ気にしなくても仕方がないので置いておきましょう。きつとこのRTAにおいては些細なことです。

大体の事はやり終えましたし、後は確定で起きる鈴音イベント第2弾を待つて本編に突入するだけです。いや〜長かった！ここまでくればもう大体折り返し地点ですよ？

では何か起きるまで日課を倍速で流しましょう。塵も積もればなんとやらです。

ん？お、倍速が止まりましたね。

現在は：魔女狩り中のようなです。相変わらずのソロ狩りでグリーンシード稼ぎをしています。もうちよつと人と群れたほうがええんちゃう？

帆奈ちゃんは十七夜さんに預けてきました。この前メイド喫茶に帆奈ちゃんとか

んちゃんと一緒に食べに行つた後に頼まれたんですよね。理由は分かりませんが。

いつも通り短槍に『使役』を掛けて攻撃します。手持ちの短槍と使役槍2本と数え切れない射出用の短槍…槍、槍、槍…槍ばっかで恥ずかしくねえのかよ!!

義手くんは雑魚散らしでサポートしてくれるので、詩織ちゃんは気楽に魔女へ短槍を打ち込めます。

というわけで調理完了です。今日もグリーンフィード配達あざまーす! モブちゃん達も大事に使つてくれてるぜ?

今日のところはこれくらいにしてそろそろ家に帰りますかね。十七夜さんに会いに行つて、帆奈ちゃんを回収するのを忘れないようにしましょう。

つてあれ?なんか急に眩暈が…ファツ、ウーン……………。

ハッ！何が起きたんだ！

おかしい：ステータスも変わりなく、デバフがあつた訳でもなかつたんですが……二次創作特有の魔女の最後っ屁だつたりするんでしょうか？

今いる場所は倒れた路地と違うようです。ココは：病院の前、でしょうか？あ、あそこに見えメデイカルセンタ―って書いてますね。画面全体には白く淡い感じのエフェクトがかかつてます。儂い：儂くない？

詩織ちゃんも心なしか小さく……

小さい！小さいぞ!?

え、マジで幼女なんですが？一体何をどうしてこうなつたんですかねえ……精神世界かなにか、よくある過去回想シーンとかなのかな。

こんなイベントが発生するなんてこれが初めてで知らなかつたです。試走中に一回もこれが起きた事は無いですね：後で調べてみましょう。

仕方ないのでRTAはこのまま続行します。流石に今回みたいに上手く行った記録を、もう一度走れる気はしません。

さてここでは何をすれば良いんですか？ さっさと現実世界に戻してくれよお、頼むよ。

ん、ひとまず荷物を漁ります。いつもの詩織ちゃんと同じく、こっちのチビ詩織ちゃんもシヨルダーバッグを持つてるようです。

普段との違いは義手くんが居ないから、デフォルトで右腕がないくらいです。どうか使つてゐるシヨルダーバッグはこの頃から現役なんですねえ……随分と物持ちが良い事だ。

お！手帳を見つけました。多分この状況なら開始時と同じように予定とかが書いてあるはずだ。

よしよし、ありますねえ！ありますあります。どうやらチビ詩織ちゃんは毎日お見舞いに行つていて、今日もまたお見舞いに行くとの事です。

……お相手の名前は何かノイズっぽいエフェクトが掛かつて見えないのが不穏な気配を漂わせていますけども、病室の番号も書かれていますのでそこまで向かいましょう。

『今日も』

『ちゃんの面会？』

ええ、そうみたいですよ？人が話している時でも迫真のノイズの音が名前に覆い被さって消しちやいますね、肝心のお相手さんの名前が全然分かりません。

面会の手続きは思いの外簡単に出来ました。受付や通りすがりの看護師にちよくちよく声をかけられるあたり、詩織ちゃんはお見舞い常連みたいです。

おつ開いてんじやーん！さてさてこのチビ詩織ちゃんがお見舞いに来るほどの人は一体誰なんですかね？

『やつほー！昨日ぶりだね、昨日言った事覚えてる？』

うお！まぶしっ！

謎の逆光が強すぎるせいでちゃんと見れねえ！かろうじて女の子って事が分かりますね。

すみません走者に読唇術は備わってないんで、そこで口パクされても何言ってるか分からないんですよ。

チビ詩織ちゃんもお返しに喋ってるぽいですが、女の子と同様に何言ってるか聞けません。ちよつとく走者がついていけないんですけど？

『ええ！そんな釣れない事言わないで、大切な親友の事を思つて頼むよー！』

うわ女の子が喋る度に視界のノイズが酷くなっていきます。ベッドの側面に腰掛けて物理的な距離が近づいたのに、まだ顔見えないのは謎の光現象が起きてるんですか

ね。

画面内がホントに眩しいですよ？ちよつと明るさの補正をかけて画面を暗くした方がいいかもしれない眩しきです。

『ね？良いじゃん、言うだけタダ！そうタダなんだよ　　ちゃん！』

もう見えねえ！最早顔だけじゃなくて全てが視認出来ませんよ！ちよつとノイズくんの自己主張が激しすぎるッピ！

いつこの回想は終わるんですか!?こんな所さん!?でRTAを終わらせたく無いんですけど！ゲームオーバーになんてならないですよね!?ちよつとマギレコさん!?

てかそもそもこの女の子は誰なんですか!このゲームの走者によくある自キャラの経歴ガバなんですか!?答えて下さい!でもこのイベントははよ終わってくれ!

『聞かせてよ、　　ちゃんの願い事。』

いやだから何言ってるか分からないんですけど……。

「む？起きたか。」

……知らない天井だ。

というのはいって、うんと…調整屋ですかね？そのようですね、近くにみたままさんが居ますし。

ついでになぎさんと預けておいた帆奈ちゃんもいますね。ところで詩織ちゃんは何で調整屋に運び込まれているんでしょうか。

「十七夜と帆奈ちゃんが倒れていたあなたを見つけて連れてきたのよお？」

なるなどね、2人に感謝しないといけませんねクオレハ……。特別にノーマル飴ちゃんに加えて棒付きキャンディーもプレゼント致します。

何で倒れたのか？いえ走者にも原因は分かりませんよ……解明出来たらこんなに苦労はしません。

みたまさんでも分かんないんですか？じゃあもう詩織ちゃんには無理そうですねえ。何か分かったら連絡下さい。

ええ、ええ本当に気をつけますとも。今のところは何か変わった事はありませんし、そんなに心配しなくても大丈夫ですよ多分。

はい、それでは。帆奈ちゃん預かってくれてて助かりました！君達も遅くならないう

ちに帰るんやで！

ほな、おやすみなさーい。

おはようございまーす！

本当に昨日のアレはなんだったんでしょね。ますます詩織ちゃんの謎が深まるばかりです。まあガバにならなきや万事オツケーだな！ヨシ！（現場猫並感）

そういえば今日はななか組に会議しようぜ！と呼ばれていたので参加しに行きましよう。えーと場所はいつものファミレスですね。勿論の事、会計は詩織ちゃんが受け持つようにします。誰にも邪魔なんかさせないぜ！

ダメでした。

それはもう来てからすぐに釘を刺されましたね。詩織ちゃんは絶対に割り勘しろって断言されました。

ま、まあ払えるだけ上等です。集まっているのはアザレア組にななか組みたいですね。話を聞く感じ、どうやらこの会議の主権は組長らしいです。

へい組長！今日の会議はどういう用件なんだい。

「最近、『キリサキさん』の噂が流行っているのをご存知でしょうか？」

アタシはここのとこ気になっている問題がある。

それは今日の前で美味しそうにオムライスを頬張っている同居人に関する事だ。しかもあの時の騒動の後から今まで。

まず前提として、アタシが引き起こした魔法少女昏倒事件が終わるまでコイツの名前を知らなかったんだ。

そこでコイツが大切そうに持ってた万年筆に刻まれていた名前から、事件の間ずっとコイツの名前が『まひろ』だと思っていた。

でも騒動が終わってあつちから自己紹介があつた時に、それは違うって分かる。だってコイツの名前は弓有詩織っていうんだから。

それじゃあ、この『まひろ』っていう奴は誰なのかってなるよねえ？

大体の予想はついてる。アタシが初めてこの弓有詩織に会った時に、隣にいた銀髪のヤツなんだと思う。

でも一度気になったモノは知りたいし、そもそもソイツが『まひろ』なのかどうかも分からない。

だからアタシは対面にいる詩織に質問したんだ。『まひろ』っていうヤツを知っているかどうかって。

「……？知らない。」

答えはそれだった。あんだだけ大切にしていってアタシから取り返す時の必死さは何だったのか、今初めてその名前を知ったかのように首をかしげる。

念押しして聞いてもコイツは本当に知らないようだった。挙句の果てには他の人に聞いた方がいいとまで言う。

この時感じたかすかな違和感がアタシを突き動かしたのは間違いなく事実だった。

とりあえず言われた通り、近くにいた胡桃まなかに名前の事を聞いてみる。まあ答えは予想通りで、知りませんと返された。

でも一応知り合いの人に聞いてみるらしい。学校の魔法少女をあたってみるとか言っていた。

いつも通り詩織が代金を払って店を後にする。道中で買い物をしに行ったりしたが、あの質問をしてからというものの別に変わった所は見受けられなかった。

それから数日経ったある日。

以前アタシに漫画を勧めてきた御園かりんと喫茶店に行くことになった。勿論保護者という名目の詩織も一緒だ。

いや、驚いたよね、普通のカフェだと思っていたらいきなりファンシーな空間が目の前に広がったんだもん。いわゆるメイド喫茶って言うやつだ。

ていうかこの前もアタシ達オムライスを食べた気がするんだけど？ いやまあ別にいいけどさ。

詩織は特に何を食べたかは気にしていないだろう。またしてもオムライスを注文する。なかなかの違いがあつてそれぞれの良さが分かるような気がした。

そんなところに来たのがあの白いヤツ、メイド服姿の和泉十七夜だ。どうやらここでバイトとして働いているらしい。

ああ、そうそう。一応知り合いに会ったら聞かなきゃだね？

「あー、『まひろ』っていうヤツ知ってる？」

「……………」

軽く目を見開いた反応は今までに聞いたヤツらの中で初めてだった。つまり和泉十七夜はこの『まひろ』に関して何か心当たりがあるって訳だ。

すぐさまテレパシーで確認が飛んできた。本当に知りたいのか？ っていう感じの、まあ知りたかつたし了承したよね。

そしたら次にアタシを預かるのは和泉十七夜って事になったんだ。落ち着いて話をしたいのにはアタシも同感。

話の場として設けられたのは調整屋。特に人が来るような気配は無く、こここの経営者である八雲みたまも関わりがあるかららしい。

「まず聞きたい。更紗君は一体どこでその名前を知ったんだ？」

「詩織の持ってた万年筆にあったんだよ、結局誰なのか分かんなかったし。」

「そうか…人違いだと良かったんだがな。」

ふうとため息をついて和泉十七夜は八雲みたまの方を見る。普段ののほほんとした雰囲気は何処へやら、珍しく黙ったままで場の様子を眺めていた。

アイコンタクトを取ってアタシに向き直って、知りたがっていた『まひろ』について言及する。

「おそらくその人物は『鴉弓真広』あゆみまひろ…そうだな、弓有の親友だった人物だ。」

詳しく覚えている訳ではないけどな、と付け加えて和泉十七夜は知っている限りの事を挙げていく。やっぱりここで一番大きかったのは銀髪に黄色の目の特徴だった。

つまりアタシの予想は当たっていたようで、『鴉弓真広』という人物こそがあの時の銀髪だったらしい。

何で八雲みたまがいるのかは和泉十七夜と同じく面識があつたからという単純な理由だった。

それだけだったらここまで珍妙な空気が流れる訳ないと思うけど、まあそこは置いて

おこう。機会があれば聞いてみる事にする。

んで、ここまで来てアタシは新しい疑問が浮かんだ。詩織に聞いた時よりもハッキリとした違和感を感じていた。

普通、親友とまで言われている人物を忘れるのか？

ここで思い浮かんだのがアタシもやった事がある手段。かつて和泉十七夜に掛けた事のある記憶の消去。

つまり魔法少女の固有魔法だった。

▶？

その日は特にお客さんが来ることが無く、不服ではありますが店に閑古鳥が鳴いている時でした。

ドアのベルが静かな店内に響いて、新たなお客さんが来た事を告げます。顔を出してみると何やら見覚えのある2人組。

よく飴玉をくれる弓有さんと名目上監視されているという更紗さんのようでした。

注文を受けつつお二人の話を聞いてみれば、ついさつき更紗さんの引越しが完了したとのことでした。

ついでオムライスを運んで少し後、手の空いたまなかは更紗さんにとある質問をされます。なんでも人を探している？ようで、『まひろ』という方について知っているかを聞かれました。

少なくともまなかの知り合いに『まひろ』という方がいた覚えはありません。

しかし一度聞かれてしまえば気になってしまうというもの。力になれるかどうかは分かりませんが、まなかもその人物について調べてみる事にしました。

「という訳で阿見先輩、梢先輩！その方について何か知っていたら教えて下さい。」

「いえ、私は知りませんわね。麻友さんは何かご存知で？」

「えっと……そうですね、もしかしたら知ってるかもしれない。」

どうやらいきなり当たりを掴んでしまったようで、梢先輩はその名前に心当たりがあるみたいでした。

ちよつと待つててと言つて先輩はスマホを取り出します。待つ間に聞きましたが、記憶が正しければ『まひろ』という人は一時期新聞に載っていた事があるそうです。

「多分この記事だと……。」

不安そうな顔で梢先輩が差し出したスマホを受け取り、阿見先輩と一緒に画面を覗き込みます。

画面に映っていたのは神浜のとある新聞会社のページに掲載されている、およそ5年程前にあったという紙面の内容でした。

とある一家の集団失踪事件。

現在でも行方不明者は見つかっておらず、未だ解決していないその事件に、探していた人物と思われる『鴉弓真広』という名前がありました。

今思えばこれは魔女の仕業だったのではないかと梢先輩は話します。確かにこう

いった事件が起きる原因が魔女だったというのは珍しくない話でしょう。3年前にもとある高校生が行方不明になる事件があったと聞いたことがあります。

『まひろ』という方が誰かは分かりましたが、まなかはいまいち消化不良でした。やっと見つけたのに行方が分からないままなんて。

「……あれ？」

そんな折、記事の中でとある文がまなかの目に留まります。

行方不明になった一家、現代になるにつれて衰えてしまいました。昔は弓で有名な家だそうで、この『鴉弓真広』さんは将来有望と言われるほどの天才だったようです。

そんな人を失って、世間の中では大層悲しまれていました。それは勿論の事、通っていた学校でも同様です。

まなかが気になったのはその学校です。

新西区にある神戸市立大附属学校。当時13歳であった『鴉弓真広』さんは中学1年生で、これからの活躍が注目されていた時期でした。

ええ、注目はそこです。当時13歳、つまり生きていれば現在18歳くらい。

神戸の人口からして少し厳しいかもしれませんが、同じ年でその学校に通っている人を1人だけ知っていました。

もしかしたらその人が何か知っているかも……とまなかは考えます。可能性は僅かだ
という事は十分承知していますが、賭けてみる価値はあるでしょう。

七海やちよさん。

何か知っていればいいんですが……。

カレンダーがズレてたので失踪します

余談

イベント云々の話

・『 』の名前を聞く

・進行度が一定以上

は彼女を見守っている。

Part 21 (ガバなんて) ないです

噂の蔓延る修羅の国 KAMIHAMAMA でウワサを調べる RTA はーじまーるよー

今回は元のマンションに戻ってきて、謎の回想イベントを見て、鈴音イベント第二弾の開催告知を組長から宣言されました。

今回はその続きからやっています。

視聴者兄貴姉貴のご存知の通り『Rumors in Disguise』ですね。
このイベントは第一弾が発生した後に確定で発生するもので、前回同様に厄介な内容となっておりません。

しかも失敗すれば多数のネームド魔法少女が犠牲となる上に、初期の方でイベント常連のななか組が巻き込まれるので、ななか組がロストしやすいというヤベイベントです。

いつもならななか組だけで調査するのですが、今回は詩織ちゃんが葉月さん呼び寄せたのでアザレア組も加わってます。本当ならもうちよつと人を選んでから、勢力的にメンバーが分かれていたハズなんですけどね…？

このイベントでの個人的な厄介ポイントは、無事に解決させるまでに必要なフラグ立てですね。

イベントを進めながらその都度ご説明をしましょう。

まず詩織ちゃんは『Rumor in Disguise』の発生を組長の招集によつて聞いたので、今はななか組の調査が始まっておらず、まだ4人がキリサキさんに取り込まれていない状態です。

しかしここでななか組について行くなり尾行するなりして、取り込まれるのを阻止すると言ったら少し違います。

確かに取り込まれないに越した事は無いですが、逆にフラグ立てが面倒な事になり、余計に被害が拡大してタイムをロスしてしまいます（3敗）

ですのでえ…詩織ちゃんはいつも通りソロ活動を貫き通します。

なんか最近カラスネットワークとか義手くんとかの調子が悪い気がするけどヘーキヘーキ！まさか自分の使い魔にもハブられるなんて無いから！無いよね……？

それでは何か進展があるまで倍速で送りましょう。

義手くうくん？最近なんか変化ないですか？主にキリサキさん関連で、ね？ほらなか組とアザレア組の動向とかさ、あるじゃん！

うーん、ダメみたいです。情報収集の要である義手くんと仲が最初期に比べて悪くなっている……！由々しき問題ですねクオレハ……………。

一応仕事する時はしているのでもいいでしょう。詩織ちゃんに情報を伝えてくれないだけで、手紙を出すとか雑魚敵排除とか近くで命令したのは受け取ってくれるみたいです。

いや何で詩織ちゃんの魔力で構成されている使い魔なのに仲が悪くなるんですか？やっぱリリモートラジコンみたいなモノだから接続が悪くなりやすいんでしょうか？……情報提供者のチャートが壊れそうですが、まあこの後にも無ければ無問題です。

とりあえず万々歳のバイト終わりなので、参京区の中で魔女狩りします。放課後くら

いの時間になったら、参京院教育学園の近くで適当に散策を行います。

キリサキさん搜索メンバーで参京院に通っているアザレア組とななかさんとあきらさんの様子を確認するためですね。部活があつた場合は置いて、学校から出てくる人が居なくなつたら相談所に向かいます。

この時にどちらかのチームメンバー一人に会えば、チーム全体の状況が確認できます。

調査がななか組のみだつた場合、中央学園の美雨さんか神浜大附属のかこちゃんを訪ねれば良いです。

しかしアザレア組は全員が参京院の生徒のため、どちらのチームも確認するには参京院が適していると考えました。

ぶつちやけ直接訪ねる以外に電話するとかあります。でも葉月さんは基本的にすぐに電話出るけど、組長は一向に出てくれないんですよ。

いつもの周回なら出てくれます……もしかして組長の電話出る部分が葉月さんに吸収されている可能性が……？通常よりも早く出てくれるのにはそういう訳があつたんですかね？

ああ、あとアザレア組に関しては家を訪ねるつてもあります。このはさんに謎の宣言をされた時に招待されていましたし、今日会えなかつたら寄つてみるのも手ですね。

それでは早速魔女を狩りに路地裏を徘徊しましょう。いやあ年をとるとねえ、この辺辛くなつてくるんすよお。

そういえば詩織ちゃんって暴走状態の時に使えたテクニクはプレイヤー再現可能なんですかね？

帆奈ちゃん戦の時とかダガーと短槍がぶつかった瞬間に、『使役』を掛ける事によつて魔力を節約してましたけど、あそこまで細かい指定をするのは余程器用な人じゃないと出来ない気がします。

あの…光つてた銀線？とかもありましたよね。『使役』をここに使ってますよ！的なガイドなんですか？走者がやつても出てこないようですが。

プレイヤーが試しても出てこないガイドとか意味あるのかオルルアン!? 帆奈ちゃんもそう思いませんか!? ねえ！

「……ちよつと、せめて何か喋つてよ。」

残念、走者の意思是伝わらなかつたみたいです。というか性格『寡黙』の性質上、具体的な用件の内容で強い意思を持ちながら話さないと相手に伝えてくれないんですよ。

このままだどちよつとアレなので唐突に頭でも撫でておきます。フハハハハ！詩織

ちゃんの恐るべき撫でテクニクに為されるがままになるといい!

どうだ、手も足も出まい! 拒否しないつてことは満更でもなさそうだねえ! よーしよしよし!

帆奈ちゃんは魔女結界に入ったらキューブにしまつちやおうねえ、という方針ですけど、そもそもなかなか(魔女の反応が)出ないねんな。

「お姉さんこんにはー!」

「こんにはー!」

うん? 誰ですかこの幼女達。詩織ちゃんが思わず撫でていた手を止めてしまったではないですか。ちよつと嫌な予感がしますねえ?」

見た感じ通りすがりの一般モブ幼女ズみたいです。いや一般人がこんな路地裏に来る方がおかしいですけども。

ちよつと君達く子供だけで奥の方の路地に来るなんて危ないぞ? 一体全体どうして君達だけでここに来たんだい? ほら、詩織ちゃんは優しいから飴ちゃん(賄賂)でも渡しませよう。

幼女の信用速度が恐ろしいほど早すぎるツピ! 学校で怪しい人を信用しちゃいけない。いつて習わなかつたんですか? まあまどマジ世界は一部を除いてどこも大概なんです。

「わたし達はキリサキさんを探してるの！」

へえー！そうなんですかへえー！でも幼女だけで来るなんて危ないから、せめて路地裏から出ようね！モノホンが出てきたら怖いからそうしようしよう！

ほら！飴ちゃんも更に追加してあげるから！ね？ね！それじゃあお姉さん達と一緒に行くのか！今すぐ！お願いしやす！おなじやす！

いいかい？ヨシ！（一般走者並感）帆奈ちゃんは不審行動を訝しんでないでちゃんと付いてきて下さいね？合わせてよく分かってない視聴者兄貴姉貴もいると思うのでご説明しましょう。

実はコレ、『Rumors in Disguise』発生期間中にしか起こらないちよつとしたイベントでございます。でも普通に厄介なんだなこれがまた。

キリサキさんの噂が流れてからキャラが路地にいる時に一定の確率で発生し、特徴としては幼い子供達がキリサキさん探しに来る事です。

ですが先ほど走者がかなり慌てていたのには理由があります。ええ、聞こえますでしょうか。とてつもなくいや々な空気が辺りに漂ってきましたねえ……。

へい！義手くん2号！その子達を連れて行って下さい！幼女ズはその鳥に付いてけば通りに出られるからよろしくウ！

「……………鈴の音？」

その理由は帆奈ちゃんも反応したコレです。

そうこのリンとなった鈴の音こそ今回のイベントボスであるキリサキさんとの遭遇の合図だったんですねえくはえくこんなイベントもあるんだなあ。

一応詩織ちゃん達も路地から抜けるように移動していますが、遭遇イベントが発生してしまつたので少なからず2人の内のどちらかがターゲットにされています。遭遇イベントが発生してしまつたら強制的にご対面してしまうとは…なんて素敵なイベントなんでしょう（白目）

キリサキさんは基本的に路地の奥の方から出現しやすいため帆奈ちゃんを先頭に歩いていますが、たまーに退路を塞ぐように出現するのが遭遇時の辛いところさん!?!です。

そしてプレイキャラならまだしも、ネームド魔法少女がターゲットにされると最悪リセット案件になつたりします。

今の段階はまだウワサの口上すら知らない状態で、詩織ちゃんは走者のメタ的な視点

から回避する事が出来ませんが、それだと記憶を切られるか取り込まれるかの二択を他の人に伝えることが出来ません。

ですからキリサキさんの問いかけには各ネームドキャラの性格によつて返答が左右されます。素直に自分の名前を言う子もいれば、警戒して名前を明かさないタイプもあります。

中には「もしかして○○ちゃん？」という天然ぶりを発揮して取り込まれた人を救出する子もいます。主な例を挙げるならいろはちゃんですね。

このイベントの時期は本編前が大体ですが、偶に第1部中に発生する事があります。その場合いろはちゃんやんの神浜での知り合いが取り込まれてたら主人公補正で当ててしまふ事が多いです。

まあ今回はアリナキューブがあるのでそこに帆奈ちゃんを仕舞っちゃって、あとは詩織ちゃんがライフで受けることにします。

自キャラの記憶が切られるくらいどうって事ないって！大概経歴が隠蔽されてる子が多いから実際問題ないです。だって走者が見たって分からないのが多いからね！

「名前を…教えて……。」

腕力つつつつよ！何だこの馬鹿力！そんなに強く掴んだら詩織ちゃんの腕にアザが

出来ちゃうじゃないですか！やめてください！何処かの天才アーティストが喜んじやうでしょ！

キリサキさんはクソほど力が強く、並大抵の魔法少女では掴まれると逃げる事が叶いません。ましてや普通よりも筋力値が足りてない詩織ちゃんなら尚更です。

お、そんな最中に連絡です。無事に義手くん2号は幼女達を送り届けてくれたみたいですね。戻らないでそのまま誰か知り合いの魔法少女に声かけてください！ここで詩織ちゃんが気絶したら帆奈ちゃんの監視が居なくなっちゃうため、あらかじめキューブに放り込んでおくという策です。気を失った詩織ちゃんを運んでくれるような人をお願いしますよ！

「名前…教えて……………」

はいはい、詩織ちゃんは詩織ちゃんですよ。キリサキさんはどうやらモブ状態なのでまだ誰も取り込まれていないようですね。

いやこの難易度ハードの修羅の国でモブ魔法少女が取り込まれてたらどうしようもないですね…その場合はその子を助けるのは諦めましょう。南無。

ちなみにここで詩織ちゃんもキューブに入ってやり過ぎす事も出来ませんが、その場合

出た瞬間に捕まるって事もあるので安定を取ってライフで受ける事になっています。どうせ切られて困るような記憶も無いでしょう(慢心)

「……………違う…チガウ…チガウ…チガウ…チガウ…違うっ！」

ウツ……………ああ、意識がだんだんと落ちてくるんじやあ、ほら詩織ちゃんもスヤアつて感じですよ、これはもう寝るしかねえな！良い夢見ろよ！

といったところで今回は終わります。

ご視聴ありがとうございました。



魔法少女昏倒事件から時が経ち、監視として一時的に入居していた2人は弓有さんの住んでいるマンションへ引越していった。

監視という名目がありチームではないからまだ私の決意は揺らいでいない：気はするが、実際のところ彼女によって早々に絆されてしまった感じはしなくもないというのが私の現状である。

弓有さんはこれで見かづき荘への一時的入居が2回目となった。1回目は怪我の療養、2回目は更紗さんの監視。どちらも大事な用件だったとはいえ、誰かと共に過ごすのに少し浮かれてしまった私がいいたのは間違いない。

せっかくだから動ける弓有さんに私が居ない間の家事を頼んでみた事がある。流石一人暮らしをしているというだけあり、一通りはそつなくこなせていた。

ただ彼女は生活面にいくつかの問題を抱えていたのだ。そこさえなければ完璧であつたがまあ無いモノを願つても致し方ない。少なくともみふゆよりはだいぶマシだと思ふ。

なんというか：まず弓有さんは人から言われない限り食事を抜かしてしまふ癖がある。前は看病していたから気づかなかつたのだが、やはり彼女がいつも持ち歩いている飴といった間食が原因なのだろうか？

そもそもこの問題は更紗さんからの質問によつて初めて知つた事だ。いや、きちんと更紗さんにご飯を用意しておいたりとすべき事はするらしい。食べている所をずっと眺めてくるので食べづらいという至極まともな訴えだつた。

そして最大の問題点は帰つてくる時間がとてつもなく遅いという事。

彼女にはグリーンフシードを売る商売があるから仕方がないと言えど仕方がない事だが、側から見たら心配になる生活リズムをしている。

果たして私はいつもの眠そうな目以外を見た事があつただろうか？心配だからその生活をこれから正してもらいたいと思ふ。

というよりも正すような人が居なければもう治らないのかもしれない。この辺りは今後同居する更紗さんに全てが委ねられているだろう。

私に出来る事は忠告をしつつ弓有さんの生活習慣が改善される事を願うのみだ。

大怪我をした時でも無理に動こうとしたから、どうせ懲りずにまたやりそうな予感がしている。

まあ過ぎた事は置いておく事にしよう。いちいち気にしても仕方ない。

弓有さんから無事に引越しが完了したとメッセージが来てから数日。珍しく私に用事がある人がみかづき荘を訪ねてきた。

「いきなりで申し訳ありません。七海さんは『鴉弓真広』という人について何かご存知でしょうか？」

そう言つて来たのは水名女学園の制服を着た胡桃まなかさんだった。

なんでも人探しを手伝っていたら、自分もその人が気になってしまったかららしい。その『鴉弓真広』さんを探していて、知つていそうな人として私に白羽の矢が立った訳だ。

5年前に起こった行方不明事件の記事を調べるほどに胡桃さんは真剣に調査している。聞き込みの対象に私を選んだ根拠として、通っている学校が同じで年齢も一緒だから可能性はあると考えたそうだ。

……『鴉弓真広』とは本当にあの真広さんの事なのだろう。

正直に言ってしまうえば同じクラスの友人でありそこそこ仲の良い子だった。身体が弱く病院へ行く事も多かったが、持ち前の才能と誰とでも仲良くなれる性格でクラスの人気者となっていたような記憶がある。

しかし何しろ5年ほど前のこと。今頃彼女の話を聞くとは思ってもみなかったのは紛れもなく事実だ。人探しとは言っても一体どのような経緯で知る事になったのか。

胡桃さんに聞いてみれば更紗さんがその人を探しているらしい。でもそれ以上の詳しい事は分からず、理由も分からずじまいのようだ。これは…後で聞きに行った方が良いだらう。

私も私で5年前の友人を覚えているのもなんだか不思議だが、思い返してみれば彼女は妙な存在感を持っていたような気がする。神浜でもそこそこの名の知れた行方不明事件だったというのも覚えている原因かもしれない。

ああ、そういうえば…私より真広さんを知っている人物がいた。

名前はそう…なんだっただろうか？私の仲が良い友人としてみふゆについての話をした時、対する彼女は親友がいると自慢げに喋っていた覚えがある。

実際に会ったことはないが、一応話に聞いていた事なら教えられる。肝心な名前の部分は綺麗さっぱり忘れてしまったけれども。

「確か…『有鷲』^{あさぎ}さんと言ったかしら？」

うろ覚えではあるが東に住んでいたようだし、知っているかは分からないが十七夜あたりにも聞いても良いだろう。

△

照りつける日差しが木漏れ日となって降り注ぐ。

チラついた光によって目を開け、重く感じる体に入力してゆっくりと起き上がった。奇妙で長い夢を見続けていた気がする。残念ながらその内容はいまいち覚えていなかった。

さてはて自分は何をしていたのだったか。それすらも夢の内容と共に忘れてしまったのだと思われる。

こういう時は普段から記入している手帳を見るに限る。余程の事が無ければ欠かさずに書いているのだから、今日は何をするのかもキッチンと書かれているに違いない。

ペラペラと紙の音がして今日の日付けのページにたどり着いた。でもさっきの私の予想と違い、手帳の中は一面真っ白。きつと書いておくのを忘れたんだ。

今日は、今日は……アレを飛ばそうと……いや、違う……違かった。ふと目に映ったモノが気になったからそれを探しに行くんだった。

うん、何もおかしい事は無い。痛みで怠い体は少し動きづらいが特に問題なく動いた。キヤップを目深に被って何となく歩き始める。

たまたま家から持ってきた使いづらいシオルダーバックの中には、ペンと手帳とチョコレート。そしていつもどおりリビングの机の上に無造作に置かれていた千円札。

飛んで行ったモノを追いかけていけなやいけなのに、何で私はベンチで寝ていたのだろう。理由はいくら可能性を考えても思い出せないままだったけど、どうせ大したことな

いものだろうからそのまま忘れよう。

程なくして目的のモノを見つける事が出来た。ちよつと分厚い鳥を模した形をして
いる黒い紙飛行機のようなのだ。

フェンスに綺麗に刺さったソレは一体どこからやつて来たモノなのか。風が強い日
であつたから大分遠くから来たのかな。

そう考えて思いを巡らせてから、ふと紙の内側に何か別の紙が挟んである事に気がつ
いた。私には想像も付かないけど高そうな便箋に達筆な文字が書いてある。

『いつかこの手紙が届いた誰かへ』

その出だしから始まったソレはいわゆる愚痴？みたいなモノをただただ書き連ねた
モノだった。

一応手紙の体裁を意識して書かれたモノではあつたが、見た感じ誰かに届いたら良い
なあという思いで書いたのである。この紙飛行機の主にとってはポトルメールとか
と同じ扱いらしい。

読んでいたらますます知りたくなつてきた。書いた人は一体どのような人なのだろ
うか？私の退屈しのぎにはなるのだろうか？

これなら家に帰ってはいけないと言いつけられていた暇な時間も潰せるし、そこら辺

を歩き回るだけだった日々も楽しくなってきた。

そうだ、せっかくだから呼びやすいように名前でも付けておこう。

黒くて空を飛んで、まるでカラスみたい。それに手紙を運んだから：郵便屋さん？

よし分かった！『郵便鴉』はどうか？名前があつたら私にとつても親しみやすくなるし、うんうん良さそうじゃない？

でも何だか、変な感じがする。

違和感に気づいたら途端に頭痛がしてきた。処置が甘かったせいか、いや処置って何だろう。とにかく頭が痛くて仕方がない、いつもの事なのだから気にしても意味はない。

心臓の鼓動がやけにハッキリと聞こえてくる。一拍ごとに痛みは増していつて、ついには立つ事が出来なくなり、その場に倒れ伏してしまった。

どこかで同じ経験をした事がある気がするんだ。記憶に埋もれていつだったか何があつたかは全然分からないけど、確実に経験したというのを覚えている。警鐘を鳴らし

続ける脳が叫んでいる。

煩わしく感じる脳内を無視し、抵抗する意識に反して目を閉じた。呼吸が浅くなるのを一切動けない伏した体で認識する。

言いようのない猛烈な息苦しさにデジャヴを感じて、やがて自らの命が絶えたかのよう to 思えた。

だって私は……私は……？

あれ、おかしいな。いつからこんなに記憶が無いんだろう。

友人がゲーミングヘアカラーの写真を送ってきたので失踪します

Part 22 Runners in Disguis
e

巻き込まれて終わっただけのRTAはーじまーるよー

前回は参京区で魔女捜索中にモブ幼女ズイベントに遭遇した疲れからか、不幸にも黒塗りのキリサキさんに追突してしまう。

帆奈ちゃんを庇い全ての責任を負った詩織ちゃんに対し、噂の怪異、キリサキさんが言い渡した示談の条件とは……。

という事は置いておき、また前回の終わりに変なイベントが入りました。

回想みたいなヤツでしたがプレイヤーの操作に関係なく進んでいたもので、おそらくは詩織ちゃんの魔法少女ストーリーの一部だとは思いますが。もしくは精神世界の中で暴

走状態になったか、ですかね？

考えても仕方ないです。とりあえず勝手に進んで勝手に終わったから無関係だな！
ヨシ！

それで精神世界から現実世界に戻ってきた詩織ちゃんですけど……他の人が運んでくれたみたいです。

見た感じ相談所の椅子に寝かされてるようです。時間を確認してみたら夕方くらいなので学校終わりにおそらく見つけたんでしょう。義手くん2号やればできるじゃないか！褒めてつかわす。

ところで、ななかさんは何しようとしてたんですか？

「い、いえ……何でもありません……。」

もうちよい腹から声出そうぜえ？ななかさんよお？

流石にこんな眼前に顔の良い女がドアップで映ってたら詩織ちゃんだって気にもします。こんだけ近付いておいて何でもないわけ無いだろ！

しかもそんなに真顔だと走者がまた何かやらかしたんじゃないか？という気になって大分冷や汗がダラダラです。あらやだ未だ好感度不足なんです？そう……。

うーん、大丈夫ですかね。組長の好感度関係はよく分かりませんが、少なくとも詩織ちゃんに害を及ぼすようなモノじゃなさそうなので放置しようと思います。

肝心のななかさんは何時までその姿勢でいるんですか？正直言ってさつきまで気絶していた人を押し倒すような形になってる事についてはどう言明するおつもりで？

「……すみません……。」

いやまあ良いですけども。あ、そうだ。好感度不足ぎみな組長の好感度稼ぎのために、せつかくだからスキンシップを計ってみましょう。

鶴乃ちゃんですら大人しくなる伝家の宝刀だけ？オラ！詩織ちゃんの包容力（ ）の前にひれ伏せ！ななか組長！お許しください！

たとえ組長の方が身長大きくろうと横になった姿勢では下手に抵抗もできないだろう？今組長の顔がどうなっているかは分からないが、抵抗しないので好感度稼ぎには使えそうですね。

ん？あれ組長？ななかさん？ちよつと？……どうしましょう動かなくなっちゃいました。

しかも詩織ちゃんは寝たままやっていたから、上に組長がいて起き上がる事が出来ません。どうして今の体勢でやったんですか？

まあ組長の好感度の為ですし、しばらくはこうしていきましょう。

それにしても組長だけで運んでこれたんですか？せめてあと一人くらい居ても良かった気……が……

「あつ……。」

どうしてあきらさんはそこに隠れてるんですかねえ……？

これこれこういう訳があつて路地裏に倒れていた訳なんすよ！分かったか？

あとついでに組長の様子がある意味おかしかった件について説明してくれると嬉しいですけど？このままじゃ走者が置いてけぼりだぜ！

ダメですつてよ奥さん！これじゃななかさん使い物になんないよ。

まあ組長の事は置いておき、どうやらななか組ではまだメンバー脱落はしていないそうです。

珍しくななか組が取り込まれてないぞ！？と思っていたら、後日アザレア組と連絡がつかない事を知らされました。おそらく詩織ちゃんに記憶を切られた後に襲われたようです。

つまり今回はななか組の代わりにアザレア組が取り込まれたっぽいですねクオレハ

……。報連相が足りてませんけど、まあ誤差だよ誤差！最終的に名前が分かればええねん！

……おつと失礼、詩織ちゃんにお電話が掛かってきましたわ？こんな時に掛けるとは一体誰からなんでしょうか……？

『もしもし、弓有さんですか？』

あつ（察し）……ふーん。何時ぞやに連絡先渡しておいたのが効きましたねえ！

という訳で週末にホオズキ市の4人組が神浜に来訪して来ました。無理やりナンパ方式で電話番号を押し付けたのが功を奏したようです。

そら（神浜の知り合いの連絡先一つしかなかったら）そう（その人を頼るしかないだろう）よ。

詩織ちゃん流対人交渉術！はじめに自己紹介から入ります。ハイガールズ！ウエルカムトウーK A M I H A M A！ここでは色んなガバを体験できるぜ！君達は何をしに此処へ訪れたのかな？

第一弾の時の信頼度も積み重なってはいドン！さながらチュートリアルNPCのような詩織ちゃんは協力関係に持ち込む事に成功しました。やったぜ。

4人がパーティに入ったらまずはななか組と面会させます。圧迫面接ではないので

ご安心ください。

本当に詩織ちゃんは情報提供者になるだけ（断言）なので、そこまで出しやばる必要はありません。今回だつて（身を呈して）キリサキさんの視察をしましたし、なかなか有能なんじゃないですかね？

この後二組の会合で情報を渡すだけ渡して、調査の前線からは離脱しておきます。後方支援役は情報収集で活躍した分まつたりしていきましょう。

というのも視聴者兄貴姉貴は帆奈ちゃん戦を覚えていますか？走者も理由は分かりませんが、詩織ちゃんは何故か『暗示』を無効化できるっぽいんですよ。

つまりそれがこの『Rumor in Disguise』においてどういう意味を表すか分かりますか？

ズバリ、ホオズキ市の駄々つ子に目を付けられてしまふんですね。

リアルタイム記憶操作が出来る黒幕とか…なかなか厄介ねんな……。RTA的にも余計な戦闘が増えてしまうのは避けたいところさん!?!です。

調査に関しては途中途中で口出しする程度にして、甘いものとか買ってあげたりして

適当に好感度稼ぎでも行います。

最初は会合でのフアミレス奢り爆撃だな！

おまえ……ちよつと活動しすぎちゃう？と言われて実質一回休みな詩織ちゃんです。まあキリサキさんの影響あつたかどうかは走者にも分からないんで不安つすよね……。

おそらくきつと残りの人達が頑張つて解決してくれる事でしょう。各チームごとに第2第3の義手くんを付けてきたので、変な方向にいきそうになつたら修正してくれる筈です。

せつかくなんで倍速で魔女でも倒してから帰りますかね。

完全に一方その頃といった感じで、特にこれといってする事はありません。する事がないので、帆奈ちゃんを積極的に絆しに掛かります。

何をすれば良いのかも大まかなやつが無いから、詩織ちゃんお得意のスキンシップでコミュニケーションを計ってみます。

少なくともこの前のは好感触だったみたいですし、意外と有効手段かもしれません。

やっぱ帆奈ちゃんも人肌恋しいんすねえ。

うん？じつと見てきて何ですか帆奈ちゃん。流石にもうスキんシップには飽きてしまいましたか？

じゃあ暇つぶしに詩織ちゃんのオススメ特撮シリーズでも見ます？今ならネットの動画サイトで公式が映画公開してるから、理解を深めるためにシーズン一気見しません？

「いや…なんか…？」

分かりました、そういう気分では無いんですね。

他に暇を潰すモノありましたっけ…少なくともイベントのクリア通知が来るまで出歩きたくないんですよ。

下手に介入してガバを起こさないのが一番です。義手くん達からの連絡でも問題ないらしいんで、今のところ大丈夫そうです。

おおう…：顔近くなあ？詩織ちゃんの顔に変なものでも付いてますかね。ソッチがまじまじと見つめてくるならコッチもやり返しますよ。

ん？待って帆奈ちゃんちよつとずつ身を乗り出してませんか？流石の詩織ちゃんも戸惑って困り顔。

「一回変身してみてもよ。」

ええ……いきなり？まあ良いですけど。帰りの魔女狩りの時に帆奈ちゃんを結界に入れてなかつたんで、その時に何かあつたんですかね？

ほらお望みの魔法少女バージョンです！ガバがあつたら困るので、お早めに走者に報告して下さい！一体何があつたつて言うんだ!!?

うわ！許可なしに人の顔を撮つちやいけないつて習わなかつたんですか？詩織ちゃんなら許しますが人によつては許されませんよ。

ちなみにもう変身解除してもいいですか？あ、良い？自宅で変身するのは余程の事が無い限り気分的にしたくないです。仮にも戦闘用ですからね。

そして帆奈ちゃんがコツチの顔を見て、写真を見返して……を繰り返してます。そこまでなるつて普通ない……なくない？いや無いです（断言）

「あんたさ、前からそうだったっけ？……自分で見ないと分かんないか、ほら。」

帆奈ちゃんに意味深な事を言われてきつきのスマホを渡されました。画面には不意打ちで撮られた詩織ちゃん（魔法少女のすがた）が映ってますね。

さて、何が変わっているんです……か……。

あれれ〜？おかしいぞ〜？

詩織ちゃん目の色って緑でしたよね……。ならどうして写真の方は変わってるんですかねえ……。不思議な事も起きるもんだ……。

これは…ガバじゃな？お願い許してくださいおなじやす！本当にどうしてこうなってるんですか!?

通常時でもこれなんですか!?!急いで鏡の前に急行します…が、別に普段の生活ではない普通のようです。魔法少女時のみ限定でなるっぽいです。

しかし色変わってたのよく気づきましたね？めっちゃ微妙な色合いですよこれ、上の方は緑目だけど、下の部分は変わってるみたいです。シベリアンハスキーとかペルシャ猫とかを彷彿とさせる色だなあ……。

ええ、ええ、分かっています。なんとなく予想がついております。

前回キリサキさんの記憶を裂かれた事がフラグだったんでしよう。それで謎の回想イベントが入って今の状態になった、と。

ま、まあそれくらいしか影響は無いんで大丈夫なんじゃないっすかね……。

とりあえずこの件については保留としておきます。丁度『Rumors in Disguise』もクリア表記が通知されたみたいですし！問題は無いな！

今回はここまでにしようと思います。

ご視聴ありがとうございます。

▶ ?

最近ななかはポーカーフェイスを極めていた。

唐突に何を？と思うだろうが、これは『常盤ななかの恋を見守る会』としてもななかの恋路としても大事な事なんだ。

今までのななかは肝心の恋愛対象である詩織さんを目の前にしてしまった時、どうしても脳内処理が追いつかなくなっていたのが欠点だった。

でも見守る会と相談所での特訓の甲斐あって、普通に喋る分には問題無いレベルにまで行つた事は喜ばざるを得なかったよ！

ここで問題が一つ出てきたんだ。

さつき話に出した通り最近ななかはポーカーフェイスを極めていた。

そこまでは良かったんだけど、極めすぎて頭の処理が追いつかなくなると真顔で止まってしまうようになってしまった。

うん…まさに今の状況。

まず最初に説明しておこうか。

学校が終わったボクとななかはパトロールも兼ねて路地裏を回っていた。もちろん本命は噂のキリサキさんの調査だけだね。

そしたら倒れている詩織さんを見かけたんだ。取り乱すかと思つたななかは意外にも冷静だった……という訳ではなく、不意に会つて処理が追いついていないだけだった。

先にななかを現実に戻してから、ボク達は倒れている詩織さんを近くにあつた相談所に運んで寝かせておいた。

ここだけの話、ちよつと好奇心が勝つた。

悪気があつたんじゃなくて、ただ単にこのまま2人きりにしたらどうなるかと思つただけなんだよ。

詩織さんが起きた時のために飲み物を買つて帰つてくるついでに、ボクは物陰から少し様子を見てみた。

……まさかあの恋愛面だけとてつもなく弱いななかがあそこまで行くななんて思わなかつたよね。

恋煩いの様子を知ってる人からしたらとても驚くような行動だっただろう。知らな

い人からだと特に気にかけない事も衝撃的なんだ。

きつと訓練の成果で耐性が付いてきている。詩織さんが寝ているという状況もあつて、本人に見られなければ、いつもの感じが出せるのかもしれない。

これなら後は処理問題さえどうにかしたら、持ち前の大胆さでどうにかしてくれるんじゃないかな？道のりは長そうだけど少し解決策が見えた気がする。

けれどもまだ問題は残ってた。

「……………？」

今まで寝ていた詩織さんが起きてしまったんだ。

多分浮かれていたななかはその気配に気付かず、起きた詩織さんとバツチリ目が合った。慌てて誤魔化そうとしてるけど、まずは離れた方が良いと思うな……。

それとこんな時に真顔で迫られてたら詩織さんも混乱しちやいそうだ。そもそも倒れていた理由すら知らないから、こつちとしてはどうこうできる訳じゃないけど。

いまいち状況に追いつけていないのか寝ぼけていただけなのか、詩織さんはそのまま

ななかを撫で始めた。いつも妙なところで大胆だなあ。

「あつ……。」

「えつと……。」

本当に隠れていたのは申し訳ないと思ってる。1番は詩織さんだけど、現在進行形で固まってるななかにも。

ボクが戻ってきたのが分かるとななかは飛び起きる。流石に人に見られるのは恥ずかしいらしいようで、空いた椅子に座って俯いてしまう。

一方の詩織さんはボクが差し出した水を受け取ると、事のあらましを説明してくれた。

近くの路地裏で女の子達を保護した後、キリサキさんに遭遇したみたいだ。攻撃をされたらしいけど見たところ外傷はない。

とりあえず様子見といった感じで、今回の件に関してお開きにしようとした頃、詩織さんに電話が掛かってきた。

市外の知り合いの方で、今度キリサキさんを調べるために神浜へ訪れるようだ。

ここで協力関係を結べば今後の調査が進展するだろうと考えて、ななかは向こうの

リーダーらしき人物と話し合い、訪れる予定の日に会議を開く事に決めた。

詩織さんが仲介役となつて会議は行われ、結果としてお互いの目的が一致したため、無事に協力する約束を取り付ける事に成功する。

基本的にそれぞれのチームで活動して、何か情報を得られれば共有する方針だ。

1人で活動している詩織さんはどうするのかというと、この前の件もあつて待機してもらふ事になった。

既にこのはさん達との連絡が取れないし、キリサキさんからの攻撃の影響があるかもしれないからつてという判断。

代わりに詩織さんの使い魔をそれぞれに付けて支援すると言つていた。それぐらいなら別に大丈夫だろう。

だけど全員分奢ろうとするのは見過ごせないかな。

▶ ?

神浜市の魔法少女が和気藹々と平和な日常を過ごす中、市内のとある所に彼女達はい

た。
彼女達もまた魔法少女であり、一般と違うのは魔法少女の救済を目的とした組織『マ
ギウスの翼』に所属する者達だった。

ここのとこ作戦が失敗続きなのを危惧し、一部が集結して開いたのがこの集会だ。
上司に失態がバレないようこつそりと開いているのがミソである。

さつそくこの場を主催した天音姉妹が今回の概要を説明し始めた。

『弓有詩織の勧誘』

それが彼女達が最近目的としている事だ。

弓有詩織はベテランの魔法少女であり、一部の魔法少女からとても慕われている人物。

普段からソロ活動で実力も申し分なく、弱い魔法少女のためにグリーンフィードを交換する商売を営んでいるという。

慢性的な人材不足を解消できる。組織の戦闘力も増える。上司との中間管理職を担っている梓みふゆの負担も減る。

そして少し監視するだけに留めていた筈が、なんか規模が無視できない程になってた魔法少女互助組合も勧誘しやすくなる。

まさに一石二鳥：いや一石四鳥である。

しかしそんな人材が簡単に手に入るかと言われればやはり難しかった。否、とても難し過ぎたのだった。

これが最近の彼女達の失敗した原因、ひいてはこの開かれた集會に繋がるわけだ。

それぞれが体験談を言つて情報を共有し、出てきた結果を纏めてみよう。おそらく原因として考えられるのは以下の三つである。

・謎の狙撃

・カラスに襲われる

・他魔法少女との対立

そう、全て外部からの妨害があつたのだ。

ただこれを解決すれば作戦は成功して目的が達成されるかといったらこれまた違う。

何故ならこれら外部の妨害を乗り越えた先にあるのが、対象の魔法少女である弓有詩織との交渉だからだ。

交渉で失敗するのは一大責任である。

度重なる来訪と勧誘に弓有詩織が機嫌を損ねてしまつたら、マジウスの翼はこの先ずっと彼女をスカウトする権利を失つてしまう。

つまるところ自分達に『魔法少女の救済を謳っている変な弱小組織』というレッテルが貼られるのと同義なのだ。

では先に挙げた項目を順に見ていこう。

はじめは『謎の狙撃』に関してだ。

なんでも勧誘しに行く魔法少女を威嚇するように、何者かが攻撃を仕掛けてくるとい
う報告が多数あがっていた。

しかもその何者かは探知できない距離から見えない射撃をしてくるという。

姿を見ることは出来ない。そして普通に弓有詩織を偵察しているときにも現れるた
め、確実にこちらの事を知っていて妨害しているのだ。探知できないのではどうしよ
うもない。

幸いにも人が多い場所で仕掛けてくる事は無かったので、この『謎の狙撃』について
は人がいる場所で勧誘を行おうという解決策を採用した。

次に『カラスに襲われる』という報告。

きつとそれは報告を出した魔法少女が神浜のカラス達に何かしてしまったのだろう。

カラスはとても賢く、誰がこういつた事をしてきたぞというのを仲間達に知らせるほ

ど知能を持っているらしい。

もしかしたら我々はカラスにすら舐められているのかもしれない。

そう考えた魔法少女はこの中に少なからずいたが、変に刺激したら危険なのでそっと考えを心の中にしまい込んだ。

最後にして最大の問題が『他魔法少女との対立』である。

救済という目的を掲げている以上、他の魔法少女に手を上げてしまったら、周囲の魔法少女から不信感を抱かれてしまう。

自らを『自警団』と名乗る魔法少女達は連携が凄まじく、寄せ集め集団の黒羽根では歯が立たなかった記録がある。

その戦い方も力任せに魔法を行使せず、各々の出来ることを判断して作戦を練っているのだ。

白羽根である天音姉妹には力が及ばなかったようだが、捕まった状況から1人残らず逃げ出せる団結力には舌を巻いたものだった。

正体不明の集団『自警団』について片方の班が引き付けているうちに、他の班達が行動した方が良さだろうという結論に至った。

人数も実力も底知れないため、なるべく接触しないようにしようという意見ももつと

ものである。

そんなこんなで話し合っていた会議だったが、結局今まで通りという結論を得る。程なくして場は一気に解散のムードとなっていた。

そう、もう既に真夜中なのである。魔法少女の行動時間は基本夜中ではあるのだが、生憎明日は普通に平日。つまり学生にとっては学校があるのだ。

たとえ魔法少女であつても学校へ行く者はちゃんと言わねばならない。家族がいる者は変に詮索されると事態はややこしくなり、やがては色々大変な事になってしまうだろう。

こうして一部マギウスの翼による集会は以前と変わらないまま終わった。

「ええ、今はまだ問題無いようです。……了解、偵察班このまま潜入します。」

彼女達は知らない。

神浜中のカラスが襲ってくるのは弓有詩織の防犯システムに引っかけたからだという事を。

『自警団』と名乗る者達が魔法少女互助組合の内部組織の一つである事を。

巷で噂の魔法少女互助組合がただの弓有詩織のファンクラブである事を。

そして地味に自分達の組織内にその組織と内通する者が複数人いる事を。

彼女達はまだ知る由も無かったのである。

アイスが美味しかったので失踪します

余談

> モブ魔法少女との信頼度イベントは、あの助けた子達だけでなく、全体のモブ魔法少女達の信頼度と好感度が上がります。

> 世の中にはあゝモブ魔法少女達だけで全く別のマジアレコードを築き上げた人もいるらしいですよ…？

> 難易度ハードなだけあってモブの存在感も増してるんでしょうかね？

Part 23 走者の奇妙なガバ運

先日お会いした詩音千里さんと成見亜里紗さん、そしてお二人のチームメイトである日向茉莉さんと奏遥香さんが神浜に來られた日の事です。

ホオズキ市の方にまでキリサキさんの噂が広まっていたそうで、それを調べるために神浜市を訪れたと話されていました。

案内人を選ばれた弓有さんが仲介として間に入り、ななかさんをリーダーとする私達との話し合いが行われます。

この前の人助けの甲斐あって相手から好印象を得ていたため、お互いの協力関係を結ぶのにさほど苦労しませんでした。

ああいった行動が自然に取れる弓有さんには僅かながら憧れてしまうところがあります。

団体の料金を一人で払おうとしたり、ななかさんの恋の相手であったり…少し、個性

的な点がありますが……良い人だという事は確かです。

それは置いておきましょう。

とにかく既にあやめちゃん達との連絡が付いていなかったもので、私達は事態の解決を急いでいました。

そのため協力関係の相手が増えた事は素直に喜ばしい事です。

キリサキさんに遭遇したらしい弓有さんは悪影響がないかどうかの確認、残った私達はそれぞれチームで分けて別行動していく形で今日の調査が始まりました。

キリサキさんの調査はそれはもう今まで成果が無かったのは何だったのか、と思うほど順調に進んでいきます。

弓有さんから調査の役に立つように渡されたカラスは、言葉を交わせませんが意思疎通が可能であり、情報収集するにあたって十分な働きをしました。

以前弓有さんが呼び出したモノより幾分か小さくなっていました、それでも周りのカラスと比べれば大きく、なんとも頼りになる雰囲気醸し出しています。

調査の結果分かったこととして、どうやら私達以外にキリサキさんの噂を広めている人？がいるようなんです。

人の形はしていましたが僅かに魔力を持っていて、けれど魔女の使い魔のような感じはしない。

言ってみれば：そう、弓有さんから貸して頂いたカラスと同じく感じました。

ただその使い魔について調べようとしてもなかなか情報を得られず、ここで調査は一度停滞してしまいました。

弓有さんのカラスに聞いてみても首を横に振るばかり、目標はまるで霞のように私達から逃げ去っていきまます。

このままではいけないとなかなかさんは判断して、一先ずホオズキ市の皆さんと情報共有しようとして電話を掛けました。

あちら側はキリサキさんを探している子供達から、キリサキさんについて詳しい情報を聞いたようです。

初対面の話し合いの時にホオズキ市の噂と神戸市で流れている噂が異なっている事は知っていました。

記憶のキリサキさんとコートのキリサキさん。便宜上、それぞれの特徴からそう名付けた二つの噂は一見すると同じモノだと思いかもしれません。

「……同じでは無いんですか？」

実際に私がその内の一人でした。

色々について行けていないところはありましたが、聞く話によればななかさん達が流した噂はコートのキリサキさんの方です。

しかし人の噂は倍になるとはよく言ったもので、ななかさん達の想定以上に噂は大きく膨れ上がってしまいました。

これも噂蔓延る神浜という土地ならではのなのでしょう。現状からするとあまり喜ばしい事ではありませんけれども。

ともかく記憶のキリサキさんが最近新しく現れた噂話という事でした。

コートのキリサキさんの噂を下地にして作ったのか、それとも他の噂が混ざり合ってしまったのか……まだまだ不明な部分は多いです。

少なくともこの噂の影響によって、流した噂が再び浮上してきた事は、私の目から見ても明らかでした。

そして弓有さんが襲われたのも記憶のキリサキさんの方と思われるます。

そうなるに記憶を切り裂かれてしまったという話ですが、一体どういう記憶が無く

なってしまったのでしょうか？お会いした時は特にお変わりなかったように感じましたし……。

やはり本人は大丈夫だと言っているにも、改めてこうした影響がある事を知ると、どうしても心配してしまいます。

とりあえず一度まとめた情報を元に、私達はキリサキさんの噂について考えてみる事にしました。

まずキリサキさんの噂同士の共通点として、鈴の音がしてから現れて名前を聞かれるという事が挙げられます。

そしてコートの方は人の身体を切り裂き、記憶の方は人の記憶を切り裂くという相違点があります。

弓有さんが遭遇したとき、黒いモヤがかかった少女の姿をしていて、とてつもない怪力の持ち主だったらしいです。

コートを着ていたと言っただけだったので、間違いなくこちらが記憶のキリサキさんでしょう。

しかし弓有さんは名前を聞かれて答えたのにも関わらず、「違う」と言われ記憶を切り

裂かれてしまいました。

話からして確かに弓有さんは名前を答えました。

弓有詩織という名前が偽名であるという可能性も一応ありますが、以前交友が長いという和泉十七夜さんが弓有と呼んでいたのを覚えています。

そうとあれば聞かれた名前として、弓有詩織と答えたのは正しかったはずで。

それなのにキリサキさんは「違う」と叫んだ、つまりは答えはその名前ではないという事です。

考えが頭の中で堂々巡りしていました。

聞かれた名前が正答でないならば、問いかけに答える以外に何かすべき事があるのでしようか。

例えば口裂け女に対して「ポマード」と唱えるような退散のおまじないであるとか：あちらも人に質問をするという事が共通しています。

しかしそのようなモノが通用するのか分からないまま、実際に被害が出ている時点であるかどうかも怪しいところです。

……もしかしたら問いかけの時点で間違っているのかもしれない。
シェイクスピアの言葉が人によって違う解釈になるのと同様に、私達が問いかけの内
容を誤解しているのかも。

『名前を教えて』

記憶のキリサキさんはそう言っていました。

果たしてこの『名前』は一体何でしょう。いえ、一体「誰の」名前なのでしょう。か。
路地裏には2人だけ：問われた弓有さんの名前が違うのならば、残ったもう1人の名
前が答えです。

残ったもう1人とはすなわちキリサキさん。

『私の名前を教えて』

おそらく本当の問いかけはこれでしよう。

そうなるキリサキさんの名前が答えになりそうですが、わざわざ質問をするくらいですから、そのままキリサキさんと答えるのは罫のような気がします。

ではキリサキさんの本当の名前と考えられるモノを探さなければなりません。生憎、私達はまだそのヒントすら見つけていませんでした。

しかし事態は容易に進まないのが世の常です。

合流しようとしていたホオズキ市の方々からいかにも緊急といった電話が掛かってきました。

千里さんが亜里紗さんを庇ってキリサキさんに消えてしまった？ ようなんです。それで一度合流したいという旨でした。

集場所の公園では遥香さんに茉莉さん、様子のおかしい亜里紗さん、現地協力者という立ち位置の夏希さんがそこにいました。

一度情報共有のために電話した時は図書館から丁度出たところだったようで、それか

らの間に様々なアクシデントが起こったらしく、亜里紗さんが今のようになっているのもその影響だとか。

集まった私達は互いの情報を交換しながら、キリサキさんの噂について改めて自分の所感を伝え合います。

そこで別行動していた私達はあいみさんからのメモに書かれている記憶のキリサキさんの噂の詳細を知ったのでした。

急いで取ったのか一部破けてしまっていて、欠落している部分がありましたが、この情報こそ私達が求めていたヒントでしょう。

キリサキさんの本当の名前……それは……？

とそれぞれが考えて頭をひねっていた時、弓有さんからお借りしていたカラスが何かを伝えるかのように、バサバサと羽ばたきをしながら鳴いている事に気がつきました。

「ね、ねえ！そういうえば亜里紗ちゃんは？」

「1人で頭冷やしたいってそのベンチに……ってあれ？」

「……いない!?!」

夏希さんの呼びかけによって亜里紗さんがいつのまにか居なくなっていたのを知り

ます。

よく見ればもう一羽居たはずのカラスも何処かへ消えていました。辺りをザツと見回つても姿は見当たりません。

少し遅れて遥香さんの携帯がピロンツという音と共にメッセージの着信を知らせます。

『いめん』

亜里紗さんから送られた言葉はその3文字のみでしたが、居なくなつたと考えられる理由は否が応でも想像つきます。

場所はきつとキリサキさんに襲われたという路地裏です。一刻も早く千里さんを取り返したくない思いなのでしょう。

先導するように飛ぶカラスに頷いて、私達は現場へと急ぎ足で駆け出しました。

「いたー！」

たどり着いた路地裏で亜里紗さんはキリサキさんと対峙していました。もしあと少し遅れていたら…と思うとゾツとします。

しかし何故かキリサキさんはその場から動かないまま。そこに居る亜里紗さんに何かしたようには見えません。

何故そのようになっていくかはすぐに分かりました。

「千里を返してよ！」

「亜里紗！名前を教えてあげて！」

それは亜里紗さんが千里さんの名前を叫んでいたから。

やはりキリサキさんの問いかけは自分の名前を教えるという内容が正しかったのだと思われまます。

「貴方の名前は…詩音千里！」

「…そう、私は…詩音千里…！」

回答はどうやら正解だったようで、次々に姿を変えていくキリサキさんから本物の千里さんが倒れて出てきました。

見てみると外傷は見当たらず気を失っているだけみたいです。キリサキさんから離れた位置に寝かせ、私達は再び噂の怪異と対峙します。

キリサキさんが呟いた言葉を最後に声を張り上げると、魔女の結界と似て非なる結界へと辺りが変貌しました。

……が、しかし現在私の前に立つ彼女達が、その程度で諦めるほど柔ではない魔法少女達だという事を知っています。

このまま名前を答えていけば勝機は見えてくるはず……この場にいる全員の考えが確かに一致した瞬間です。

キリサキさんに取り込まれた人達を解放するために、私達は力を合わせて名前を呼んでいきます。

静海このはさん、遊佐葉月さん、三栗あやめちゃん、江利あいみさん、矢宵かのこさ

ん。そして最後に天乃鈴音さん。

出てきた人達は千里さんと同じく気を失っているだけのようで、ホッと一息つき胸を撫で下ろしました。

キリサキさんから1人取り返す度に、変わる姿は目に見えて減っていきます。

やがて最後の1人である鈴音さんの名前を呼んだ頃には、キリサキさんは黒い靄のしかつた少女から姿を変えません。

おそらくこの姿こそキリサキさんの本当の姿なのでしょう。

しかし『キリサキさん』と言葉を発した時、その名前で呼ばれたのに怒った様子で攻撃をこちらに飛ばしてきます。

「本当の……名前を……！」

相手の様子からやはり『キリサキさん』と答えるのは間違っていたとすぐに分かりました。

ではこの怪異の本当の名前とは何か？必死になって頭の中で考えを巡らせます。

リンツとあたりから聞こえた鈴の音色。

次第にそれは一つ二つと音を増やしていき、やがて境界内に物凄い数の音が鳴り響い

ています。

「……噂の内容ならまだ覚えてる。」

いつのまにか倒れていた鈴音さんが目を覚ましていました。重そうに身体を起き上がらせると、あいみさんとの約束を果たせると言って語り始めます。

それはまさしく私達の求めていた情報。

噂の怪異の名前に近づいたためのヒントでした。

そんな時遥香さんが怪異の鳴らす鈴を聞いて、何か閃いたように顔を上げます。少しの沈黙のあと、意を決して彼女は口を開きました。

「貴方の名前は……『スズノネ』……そうよね？」

遥香さんから告げられた正解に怪異……いえ、スズノネさんは満足そうに感謝の意を伝えます。

スズノネさんの黒い靄は晴れてもう姿はそこにありませんでした。この結界も主を

失ったのかももうすぐ解けようとしています。

なんとか一件落着きといったところ、無事に終わったようで何よりです。

そういえば弓有さんのカラス達は何処へ行ったのでしょうか……？

▶
？

プレイキャラは特に何もしてないRTAはーじまーるよー

今回は組長を撫でまくって説明してホオズキ市組とななか組の仲介をただけで終わりました。

それ以外は詩織ちゃん変身時の目の色が変わるようになっただけです。正体不明のガバが1番怖いつてそれ1番言われてるから。

いや本当に怖いんですよね…だつてまだメインストーリーに入っていないですよ？主人公のいろはちゃんには会ってますけど。

まあさつきイベントクリアの通知は来てたし、義手くん2号と3号からも終わったよつていう報告来てますしね。

よつしや帆奈ちゃんたい焼き買いに行こうぜ！ついでに団地組の好感度上げのためにも3人を誘つときましよう。

ん？何を言ったのか分からないなあ、隙あらばお金を支払おうとしないでください？ハツハツハ、いいやツ！限界だツ！！出すねツ！！

「ああ……止められなかった……。」

走者は気づいてしまったんです。ゴリ押しでいけば辻ブレする事が出来る、とね。

だから団地組に財布を取り出す時間なぞ微塵も与えません。与える訳がありません。バイト暮らしの詩織ちゃんに奢られる安心感に震えるがいい！

まあ同居中の帆奈ちゃんはどうぞ足掻こうが、詩織ちゃんの奢ってしまうという魔の手からは逃れられませんけど。

いや、魔法少女に奢ったあとのたい焼きはウメエなく！しかもさつき作りたてでめちゃくちゃホクホクしていますよ、こんなの見てたら食べたくなってきました。

あ、そうだ。最近めつきり出番の少なくなっていた飴ちゃんも渡しておきましょう。

何味がいいですかね？詩織ちゃんのシオルダーバックの中には飴の種類がいっぱいありますあります。

うーん、それじゃあこのハチミツ味の飴ちゃんを君達に進呈しよう！のど飴でもあるから喉の乾燥予防とかにも効果的だぞ！

そんじゃあ詩織ちゃん達は神浜市の中をぶらり散歩しますんで、失礼します！味

わって食べるよな!

ん? おやあそこに座っているのかりんちゃんでは? せつかくですからたい焼きを分けに声をかける事にしましょうか。信頼度上げは大事です。

おーい! かりんちゃん! たい焼きと飴ちゃんいらなーい?

……ありや? 聞こえてなかったぼいですね。ああ、詩織ちゃんが『寡黙』だから大声を張れなかったようです。

仕方ないので近づいて驚かしてみましよう。なんか見た感じイヤホンして動画かなんか見てるので、普段なら気づかれるような隠密もバレてません。

背中がガラ空きよなあ!?! 何を聞いているんだい!?!

「うわあーびつくりしたの!」

かりんちゃんのお口にたい焼きをシューーツ! 超エキサイティンツ! 美味しいだらう? 美味しいよなあ?

守りたい、この笑顔。さすが修羅の国神浜において手懐けやすい魔法少女ランキング上位に居座る実力がありません。そこ！チヨロインなんて言わない！

それでかりんちゃんは何を聞いていたんですか？なんか漫画以外にも趣味できたりしましたかね？

「弓有さんも聞いてみるといいのー！」

それじゃ片方のイヤホンをお借りして聞いてみましょう。

おお…良いですねコレ、歌ってる方の声が良い声してます。曲名も『No t h o u g h t』とシンプルで走者は好きです。

たまにゲーム内での動画サイトを漁るところいう良い曲が紛れ込んでるんですよ…一度聞いた曲はアーカイブに保存されますが、やっぱりクオリティ高いのが多くてブルっちゃうよ……。

かりんちゃんは何処でこの曲っていうかこの投稿者を知ったんですか？走者、気になるます！

「この前ひなのさんの手伝いをしていた時に会った人が教えてくれたのー！」

はえ〜そんな事もあるんですね……。ちなみにどういふ感じの人だったんですか？

ほうほう…青い短髪で、黄色いヘアピンつけて、同じ魔法少女の子だったんですか？あつ（察し）…ふーん。

その人のお、名前つてえ……スウーリー分かります、かねえ？あ、分かる？いや詩織ちゃんも機会があつたら会つてみたいんすよねえ〜こんな曲知つてゐるつてスゴイですよ。

そんじやあ教えてもろて……話からもしかしてと思つていましたが、案の定想像していた人と同じでした。

原作勢の『美樹さやか』ですネクオレハ……。

どうして詩織ちゃんが居ない時に接触しているんだ！地味にこのRTA中、見滝原勢の名前がゲーム内では出るの初めてののような気がします。

美樹さやか以外の見滝原勢は大体メインストーリーの前半で出てくるんですけどね……彼女だけは第6章に入るまで出てこないという公式不憫枠です。

つまりこういう神浜来訪の時に会っておかなければ、交友関係を築く機会が少ない魔法少女なんですよ。

それでたまたまみやーこ先輩と一緒に居たからかりんちゃんも遭遇出来たつて訳です。詩織ちゃんがいなかった事が悔やまれますね。

さやかちゃんは音楽の趣味が幼馴染の上条恭介に左右されます。それこそ魔女化した際の結界が変わってしまう程に。

基本的に恭介はヴァイオリンを弾いているので、クラシック音楽を聴く事が多いです。

しかし偶に彼がギターを嗜んでいる時間軸がありまして、その場合さやかちゃんは音楽もギターを使ったモノを選びます。

この本走の時間軸ではギターをやってるみたいです。これは……ガバ、なのか？ いやはやまさかコツチを引くなんて珍しい事もあるもんですね。

いやでもよく調べてみたら、ギター時間軸のさやかちゃんは僅かながら恋愛に挫けて魔女化する割合が低いようです。

マギレコRTA学会での報告によれば、習うのは限られるヴァイオリンより結構手ごろなギターをやり始めて、いつのまにか恋愛よりもギターが面白いとなってしまうたさやかちゃんもいるそうですね。

ギター時間軸とは少し離れてしまいましたが、さやかちゃんが魔法少女だという事を恭介に明かす時間軸もあると聞きます。

さやかちゃんには無限の可能性が込められているんだなあ……。

教えてくれたいい子のかりんちゃんには、団地組にもあげたこのハチミツ味のど飴を

差し上げましょう。

そして撫でる！甘やかす！スキンシップ！これが魔法少女達から好感度を稼ぐテクニクです。多分コレが一番早いと思います。

さらに物欲しそうにこちらを見ていた帆奈ちゃんを撫でてやります。さつきからチラチラと見てただろ？これがお望みなんだろう！

にしてもほのぼのしてますねえ…やっぱ魔法少女に必要なのはこういう平和な日常なんやなって……。

もうそろそろいろはちゃんが再び神浜に来訪する時期ですから、まだちよつと騒がしいのが残ってますし。

「そういえばなぎたんから伝言があるの。」

お？あつちから呼び出しているのはなかなか…いや割と呼び出しはありましたわ。

ちなみにどういう内容です？それによつては詩織ちゃんがどうするか決めなきやいけないんですけど。

つてあら、定期検診のようなモノをやると言つてたんすか。思い返してみれば本走中の初対面時でもその話してました。

強さで忘れがちですが一応詩織ちゃんはベテラン魔法少女でしたね。年齢的に力が

下がっていくのを実感してたんでしようか？

まあ本編開始まで特に大きな用事も無いから大人しく受けに行きます。

日時はコツチがある程度決めていいそうなので、早速明日やるように伝えましょう。この前と同じくらいの時間だったら結構すぐに終わります。

義手くん4号！この紙を十七夜さんに渡してきてください！頼みましたぞ〜！

それじゃあ後はたい焼きを食べてるかりんちゃんとか帆奈ちゃんを背景に流して、今回は終わりにしようと思います。

ご視聴ありがとうございました。

まどポのIFルートが面白い事を伝えたいので失踪します。

余談

ギター云々の報告は2次創作ですが、さやかちゃんや魔法少女である事を自分から明かすのは実は公式がもう既にやっています。

故意的にソウルジェムを濁らせる事で魔女化ルートも回収できるぞー！仁美とさやかちゃんが決闘するルートだってある。

個人的に杏子魔女化ルート時のセリフが好き

実はこのまどポの時点で既にマミさんがアイドルになっていた

第一話 魔法少女の手引き

一度きりの奇跡を起こす代わりに戦い続けなければならない。

それが魔法少女の契約。

いつ落ちるか分からない下り坂を自ら選んでしまったのだから。つまり自ら仄暗い人生を確定させてしまうような悪魔の契約だった。

でもこれは今さら何を言っても仕方がないことで、これから先をいつも考えては見えないフリしか出来なかった。

ソウルジエムはこの身から抽出された魂で、魔法少女はやがて災厄を振り撒く魔女となる。後の魔女はまた別の魔法少女に倒され生きる糧になる。

いつから始まったなんて知らない命の循環に巻き込まれていた……いや、自ら巻き込まれていったのは間違いないだろう。

きっとそれが運命ってやつかもしれないね。魔法少女の生涯、そして私の人生さ。

(手帳の初めに記載されたメッセージは誰かの映像からの抜粋のようだ)

▶?

一般の人々とは確かに異なるが、弓有詩織は自分の日常が至って平凡なモノだという事を自負していた。

日々を過ごす為に金銭を稼ぐアルバイト。

生きていく為に行う魔法少女の仕事。

助ける為にグリーンフシードを与える商売。

今後これらが増える可能性はあり得るが、これら三つによって弓有詩織の毎日は成り立っている。魔法少女も日常生活も両立して生きていけるような生活サイクルが確立されていた。

(そこに果たして生きる実感があるのかと言われたら少し疑問が浮かぶところではあるが、少なくとも彼女はそういった日常を送っていた)

「また朝食べないの?」

そうして昏倒事件以降から増やした同居人、更紗帆奈に食事の有無を呆れ顔で質問される。

頷きだけで返された返答はもう既に分かりきっていた事だった。それでもほぼ毎回のように言ってしまうのは、無言の観察が食べづらくて話を逸らそうとしたからである。

言ってしまうばそれは失敗に終わっていた。弓有詩織の口数が少ないために会話が続かないのが原因だ。結局発言する機会が無いのか口下手なだけなのか人が苦手なのかは誰にも分からない。

朝を食べ終えると早速バイトに向かつていく。

もし知り合いに会った時に渡す飴は様々な味を用意していた。色鮮やかな包装紙に包まれたそれらはまるで宝石のように輝いている。

手帳に書かれた今日は午前中だけ万々歳でシフトがあり、午後からはフリーという日程となっている。

未だ書かれていないページの下部には、『診察』の文字が空白に二文字だけ書いてあった。

万々歳の店長：由比鶴乃の父親には許可を得ているから、更紗帆奈は弓有詩織が居る時のみバイトをする事になっている。

基本的に弓有詩織の家に同居という形で養われながら監視されているが、その都合上水名女学院を中退するという事を勧めたのだ。

更紗帆奈としては別にそこまで思い入れがあつた訳でもないのです、別に名残惜しいとかいう気持ちは微塵もない。退屈な授業を大人しく受けるよりは外を出歩いた方がいくらかマシだった。

しかし、それはそれとして。

特に働かなくても十分なくせに休日の隙間ですらバイトを挟んでいるから金銭的にかなり余裕があるとはいえ、人一人分増えても特に気にしない弓有詩織とそんなヤツに養われている自分が何処と無く癩に触つたのだ。

まあ由比鶴乃とシフトが被る時は彼女への配慮からか、和泉十七夜か七海やちよに預けられる事が多いけれども。

正直言つてこの店には客が全然来ない。

店の売り上げ的には結構な問題だが、更紗帆奈は客の来ない静かな空間の方が居心地が良かった。

偶に店長の気遣いによつて、そのまま昼に料理を食べさせて貰える時が時々あった。なんとというかいつ食べても微妙な味だと2人は思う。

弓有詩織の方は特に何も考えずに食べていたような気がするが、更紗帆奈の方は口に出さずとも心の内で50点だと感じていたに違いない。

それよりも昼は食事を取ってくれた事に更紗帆奈は少なからず安堵を覚えていた。

コイツは他人に積極的に食べさせようとするのに自分からはあまり食べないのが少し癩に触っていたからだ。

(誰かから言われない限り本当に食べようとしなのがまた、更に更紗帆奈の苛立ちを

募らせているのだろうか）

そんなこんなで直ぐに半日は消え去る。

店長に挨拶をして終わつた後は、約束の時間まで魔女を探して市内を練り歩く。

路地裏を中心にパトロールをして、ビルの屋上から屋上へ飛び移つて、見つけた魔女は手当たり次第に殲滅してそのグリーンフシードを回収する。

使い魔のカラス達、空中を自在に動き回る短槍。肝心の本人は更紗帆奈の周りの手下を倒して身の回りの安全を確保するくらいだ。

やはりベテランなだけあって慣れていると感じる手際の良さ。

他の人よりも劣る身体能力の低さを有り余る経験と技術でカバーするのが弓有詩織という魔法少女の戦い方であった。

そうしてその作業と同時進行でグリーンフシードの商売を行う。

1人、2人：今日はそれくらいだろう。

たった2人だけと思うかもしれないが、これの元がただの慈善事業という事を顧みれば、2人の魔法少女の買い取り金額は下手なバイト一つの時給を優に上回る額だ。

流石に弓有詩織にも顧客を判断して受け渡しをする精神はある。しかし利用条件は事項一つのみで金額の指定なし、最低料金0円からという破格の値段を貫いていた。

それでもこうした売り上げが出るのは弓有詩織の人望か商人の実績か、はたまたグリーフシードが魔法少女の生命維持装置だからかは……まあ、彼女にとって知る由もない事だ。

魔法少女とあらば欠かせないモノは、やはり他人とのコミュニケーションであろう。特にこの神浜という土地においては、他魔法少女と知り合う方がいくつかの障害を回避することができる。

ここまで魔法少女が多いというのも神浜の闇を仄かに感じさせるが、その数の多さと市の魔法の強さ故に大抵の魔法少女はチームを組んでいる。

勿論ソロで活動している者も中にはいるが、新しく契約した少女にはそもそも他を知らない子も多いのだ。

そうした事が積み重なって起こるのは大抵は不和ばかりである。というよりこれは神浜だけでなく他の地域でも言えることだ。

魔法少女としての運命を背負いきれず、心が折れてしまう者も中に存在している。そういうった少女達を助けようとしているのが他ならぬ弓有詩織である。

なにせ魔法少女は変身したり魔法を使ったりせずとも身体の維持だけで魔力を消費してしまう。

つまり定期的にグリーンフシードで浄化しなければ、契約以前と同じ日常生活を送っていてもソウルジエムは濁る一方なのだ。

だからこそ弓有詩織のような存在は重宝される。

心が折れた少女達にとっての生命線なのだから。彼女が居なければ既に魔女になっていた魔法少女は多い事だろう。

……同時に本来なら魔女にならずに済む魔法少女も居た筈だ。

例えば机上の空論であっても確かにそこに居た。弱い魔法少女達が生き延びる代わりにグリーンフシードを得て生きる筈の強い魔法少女が。

それでも見捨てられないのは彼女の性なのかもしれない。少なからず弓有詩織はもの可能性を理解していた。

何はともあれ、今日の商人稼業はひとまず終了した。

時間もそろそろ丁度いい頃合いだから、和泉十七夜との待ち合わせ場所である調整屋へ向かう事にする。

なにやら助っ人として団地の3人も呼んでいるらしく、いつも会う度に和泉十七夜は診察と言っていたが、弓有詩織自身はその行動の意味を理解していない。

まあ特に最近体調が悪いという訳でもないし、断る理由がある訳でもないので好きにさせている。

せっかく誰かに会う用事を取っていたから、美味しいと評判のチーズケーキを買ってきていた。

「こちらから呼び出していたのに申し訳ない。」

「……いや……気に、しないで。」

「なんかこの前も食べ物貰った気がする……。」

「みんなくけチャップっているかしら?」

チーズケーキの上にくけチャップを追加投入して食べるとかいう、八雲みたまのある意味猟奇的な問いかけに弓有詩織は首を縦に振る。

その様子を見て和泉十七夜以外の全員は目を見開き、チーズケーキと弓有詩織を交互に何度も見返した。

(合うかどうかは知らないけど、少なくとも私は絶対に試したくないかな)

……よくよく見ればくけチャップを手渡された右手が震えているような気がしなくもない。

彼女は基本的に優しいと揶揄される人物である。

それだけに純粹な眼差しで見つめられると断りにくくなる性格だった。流石に駄目なモノはハッキリと駄目だと言える人間であるという事は伝えておこう。

料理もちゃんとマトモに作れる類なので心配はしないでほしい。いくら彼女であろうとも料理の中に絵の具を入れようとする八雲みたまを看過する事は出来ない。

他愛ない雑談と互いの最近の状況を話しながら、しばらくの間お茶にしていた。

何故か追加でテーブルに置かれた梅干しには満場一致で見つめ振りだが、程なくして元の用事を始める事にする。

診察と言っても方法自体は複雑ではない。これに慣れた和泉十七夜が言うことには複雑よりもむしろ簡単な部類で、何事も無ければものの数分で大した時間は掛からずに終わる。

(これはほんの少しの豆知識なのだが、こういう時の『何事も無ければ』という言葉は信用に値しない。所謂お約束だとかフラグだとか呼ばれるモノであるからね)

しかし和泉十七夜の『読心』と相野みとの『心を繋ぐ力』があつたからか、今日だけはいつもと違っていたようだ。

△

「ここ、何処なんだろう。」

「病院のようだけど……。」

珍しく複数人が干渉した診察は予想外の結果となった。

おそらくは弓有詩織の経験した過去なのだろう。似た系統の固有魔法が組み合わせ

さつて効果が増していたのだと考えられる。

いつのまにか彼女達は何処かの病院の休憩所に立っていた。窓から見える景色で判断するとかかなり高い階に居るようだ。

廊下の方に歩いてみれば端から端まで病室の扉が並んでいる。残念ながらそれらの表札達は不思議なノイズが掛かっていて読めない。

病院の内部は人気が感じられず、何処を見渡しても患者どころか看護婦さえ見当たらない不気味さだ。

ひとまず何か考察をしてみようかと話し合おうとした所、ここに来てからずっと口を開かなかつた弓有詩織が突然歩き始めた。

周りの驚きと制止すら無視して進んだ彼女は、長く続いた廊下の端……この階の角部屋にあたる部屋でやつと立ち止まる。

そのまま引き寄せられるようにして彼女は扉を開いた。すぐ後から追ってきた少女達が遅れて病室に入ろうとしたが……。

「わあ?！」

「れいら! せい! せい!」

「……更紗君も弾かれたか。」

扉に触れた途端、まるでブレーカーが落ちるような音と共に、伊吹れいら、桑水せい
か、更紗帆奈の姿がブレたかと思うと姿が掻き消える。

散々やられた事のある和泉十七夜はこの現象を理解する事ができた。おそらくは弓
有詩織の固有魔法『使役』によって強制的に空間内から追い出されたのだろう。

しかし未だ和泉十七夜と相野みとが弾かれずに残っているのは、直接魔法を行使して
いる者だからなのかもしれない。

「仕方ない、ひとまず進んでみよう。」

スライド式のドアに手をかけると、それは和泉十七夜が思っていたよりも簡単に開
く。

出入り口からは中の広い室内を見ることは出来ないが、壁に阻まれて見えない部分に
先程入っていった弓有詩織の後ろ姿が見えた。

2人が立ったままの彼女の近くに行っても反応はなく、その顔は呆然として眼前の光
景しか見えないようだ。

続いて彼女の視線を辿った先の光景に2人は目が行った。窓から街並みを一望でき
るこの部屋の中にあるモノに。

『ねえ　　ちゃん、人が救われる条件って何だと思う?』

『え?なに急に…変な物でも食べた?それとも変な本でも読んだ?』

何処からともなく聞こえる雑音が言葉を遮る。だがそこには幼い少女が2人ほど座って会話をしていた。

綺麗に輝く銀髪に黄色い目の子供、長い黒髪と青い目の子供。片方はおそらく入院中ののだろう。学校帰りと思われる制服を着た少女が病衣の子の傍らに座っている。

楽しそうに歓談する彼女達に和泉十七夜は見覚えがあった。

ああ、まさしく己がかつて抱いた『東西の完全な和解』という理想の原型となった2人の少女達である。今はもう夢に見るはずも無かった懐かしき記憶だ。

「十七夜さん、あの子達は…?」

「端的に言えば過去の弓有とその友人だ。」

「でも、髪の毛とか目の色とかは……。」

「……それに関しては自分にも分からない。」

ふと先に来ていた弓有詩織に注目してみれば静かに、けれども不規則に何度も呼吸をしているのが分かる。この光景に何を感じたのかまでは知ることが出来ないが、軽くパ

ニツク状態で過呼吸気味に息を吸ったり吐いたりしていた。

過去の状況故に干渉する事の出来ない2人の少女達は、その場に立ち尽くす弓有詩織達には目もくれずにいつしかの会話を流すだけだ。

『うーん、大切な人に出会うとか…ああ、努力を続けたらとかかな。』

『おー！良いね！それもまた一つの答えだよ！』

何かを考えながら話した制服の少女に病衣の少女が嬉しそうに詰め寄る。

制服の彼女は更にまた深く考え込んだ様子で目を瞑る。その答えを楽しそうに待つもう片方の少女は、彼女の髪を弄りながら笑顔で頷いていた。

それらしき回答をいくつか候補に挙げているのだろう。一つ言うたびに病衣の少女が首を横に振るのを見て、最終的に肩を竦めて彼女の方を見返した。

「…ツ！何だ!？」

「なにになになになに!？」

脈絡も無く唐突に景色がブレて、モノクロに映る何処かと淡い色彩の病室が交互に入れ替わる。

まるで目眩にも似た感覚だ。強制的に視界を変えられる感覚は気持ち悪く、やがては立っていられずに床に膝を付けてしまう。

ただそれでも隣に立っていた弓有詩織がゆっくりとベッドの近くの少女達に近づいて行くのが見えただろう。

『で、結局答えは何なの?早く正解を教えてよ。』

『あの子は言いました:「 でいたらヒーローは助けられないんだって!」と。』
『学校の友達から聞いた話だったんだ:…じゃあ にならない為に必要なものってあるの?』

それでも少女達は何かを話している。

最初から最後までノイズだらけで一つも聞き取る事は出来なかったが、その中でも唯一聞き取れる言葉が一つだけあった。

奇しくもそれは銀髪の病衣の少女と弓有詩織の口を開くタイミングが合った時だ。もしかしたら彼女達はまったく同じ事を喋っていたのかもしれない。しかし後ろからはフラつく彼女の表情を見ることは出来なかった。

『……………それは…優しさ、だよ。』

二重に重なったノイズが混じり合った声とも言える音を聞いたあと、視界の気持ち悪さと共に先程まで居た病室も何処かへ消え去るだろう。

恐る恐る開いた目に映ったのは、色の無い何処か…よく見れば自分達が倒している魔女の結界のような場所。

しかもおそらく最深部、中央に鎮座する魔女から逃げる小さな人影が二つ。

ここから下に降りるにはいくら魔法少女と言えども危険だ。それが例え精神世界の中心であってもここから飛び降りたくないと感じる高さである。

あいも変わらず弓有詩織は言葉を発さずに映る光景を眺めるだけだ。

いつのまにか元の現実にも帰れなくなっている事に気づいたが、張本人に釣られるように下を覗き込む。

遠くからでは分かりづらいが、もう1人の子を先導している少女が魔法少女らしき衣装に変身しているようだった。

先程見た病室の場面で見えた髪色から、それは病衣の子であると自然に推測する事が出来る。

それでも制服の少女はそのまま、彼女だけが変身しながら逃げているところを見ると、偶然にも結界に巻き込まれたのだろう。

しかしながら魔女は迷い込んだ餌を逃さんと退路を断ち、ついに2人の少女は逃げ場を失って追い込まれてしまった。

▶?

意識を強制的に落とされた和泉十七夜と相野みとは目を覚ます。

長いことあっちの空間に居たような気がしたが、診察と言うものを始めた時よりさほど時間は経っていなかったようである。

さっきのは何だったのだろうか、疑問を抱えても今すぐ解決できない事に不満を覚えつつ、先に起きていた皆の居る場所へと戻った。

どうやら肝心の弓有詩織は2人よりも早く来ていたらしい。調整屋に置いてあった菓子をいくつか既に頬張っている。

何という緊張感の無さ：果たして先程の光景は自覚していないのか、はたまた記憶から抜け落ちているのか。

ともかくとして弓有詩織の診察は謎の出来事を起こして終了した。

いつも通り帰り際に飴を渡そうとした彼女は、シヨルダーバックの中を見ながら手を入れると少し思案するように首を傾げる。

彼女が左手に取ろうしていたのがそれぞれバラバラの味だったのを更紗帆奈は珍しく感じていた。彼女にはなにかと味を統一しようとする癖があるからだ。

しかしすぐ取るのを辞めるとそのまま袋の口を向け、好きな味を取って良いよという旨を伝えた。たまには相手に取ってもらおうという粋な計らいなのだろう。

さてそろそろ家に帰ろうかという所で、スーパーに寄ろうと弓有詩織が話す。

せめてケーキを買う前に買つとけば良かったのでは無いかという疑問はあつたが、コイツは押し付けられた料理を断れないと散々見てきた事によつて学習していた。

いい加減飯を食わせないと気が済まない更紗帆奈は愚痴を言いつつ、密かに自宅の冷蔵庫の中身を把握していたのだった。

(中略)

ああ、そうだ。

魔法少女ならば覚えておいて欲しい事がある。もちろん経験した少女達なら十分に理解している事だろうけどね。大事な事だし書いといて損は無いんじゃないかな？

世の中は理不尽な事に溢れている。自分の為に生きるのも他人の為に生きるのも、どちらも正解だし間違いなんてない。

でも決して望みを絶つてはいけない。

そうなってしまったらあの白い悪魔の言う通りなんだ。まあアイツらが言う事に嘘偽りは無いんだけどね……すごい癪だけど。

ともかく私から言える事は特にある訳では無いけど、君を必要としてる人も何処かに居るはずなんだ。

ただ願わくば、君が平和に暮らせるような世界を望んでいるよ。

(手帳の初めに記載されたメッセージは誰かの手紙からの抜粋のようだ)

▶ ?

「なあ八雲、弓有について隠し事があるだろうか？」

「あら？どうしてそう思うのかしら？」

「調整屋の仕事はソウルジェムに干渉して行うからな。対象に何かあるのかも間接的に知ることが出来る。」

少女達が去ったあと、特に来客の予定は入っていない調整屋はのんびりと過ごしていた。

そんな中ただ一人だけ帰らなかった和泉十七夜は他に人が居ないのを確認し、生温い紅茶を飲む八雲みたまに問いかける。

それは彼女が常々抱いていた小さな疑問であった。

「うーん……いくら十七夜でも言えない事ね。」

「…ならない。言いたくないならば、それは詮索すべきでない事だ。」

「心配しなくても来るべき時が来たら話すわよ。」

その声音から彼女はいつもの調整屋としてではなく、八雲みたまとして真剣に話しているのだろう。

それを感じ取った和泉十七夜は横目で八雲みたまを見やると、踵を返して調整屋から立ち去る。

背中を見送り紅茶をまた一口飲んで、彼女は静かに息を吐いた。

「……だって、詩織からのお願いだもの。」

余談①

第1話「魔法少女の手引き」

・特定のイベントに遭遇

・キーアイテムを他キャラが発見

以上の2つを満たした上で本編開始前に発生する
なお片方のみ達成であったり、どちらも達成出来なかつたりした場合はルートが分岐する模様。

フラグ管理が面倒くさいタイプの魔法少女。それもこれも難易度ハードのせいなんだ
！走者は悪くねえ！

まだ第1部に入っていないなかったので失踪します。

余談②

プレイキャラの経歴が隠されるのと同様に、その他のステータスも隠されている事があ
るらしい。

その場合にはマスクデータとして新たなモノが入っていたり、表記名と中身が違ったり
している。

通常プレイならワクワクするかもしれないが、RTA走者からしたらプレイヤーが確認
できないガバ要素なんて恐怖以外の何者でも無い。

Part 24 はじまりの走者

やっとメインストーリーに入れるRTAはーじまーるよー

前はたい焼きを奢るだけ奢って終了したんですけども、なーんか途中に変なの入ったぽいですねクオレハ……。

お？走者のチャートは大丈夫か？（明らかに大丈夫じゃ）ないです。

ストーリー自体、謎が謎を呼び過ぎていてもう取り返しが付いていない気がします
が、きつと気のせいでしょう。

初見の魔法少女ストーリーはスキップ不可イベントなのが辛いねんな……。

しかもなんかしらの影響があったのか、前回のプレイ時より画面が見づらいんですよ。
ね。なんで？（なんで？）

残念ですがプレイヤーに害を与えるような設定はNG。

ともかく今回からようやくRTAも第1部に入れそうです。

開始時期的にも申し分ない頃ですし、そろそろいろはちゃんも来ます（断言）

なぜ断言出来るのかご説明しますと、事前に神浜来訪の電話を貰っていたからです。やっぱ持つべきものはコネやな！

今は新西区の駅にていろはちゃんを待っているところです。

帆奈ちゃんは十七夜さんに預けてきました。こういう時にいつもなぎたんを頼るか
らか、かなり信頼度が高いんですね。

というか神浜にまた来訪するってことは、もう既にモキュに会ってみたいですね。
？いつ出会ったんですか？

鈴音襲撃の時に詩織ちゃんつきつきりでしたけど、こっちはモキュの姿なんて一切見
てませんよ？

そういえばRTA収録時にはまだ、いろはちゃんに断られ続ける可哀想な生物でした
ね（過去形）

今はアプデが入ってプレイキャラに選択したら、超攻撃的なモキユに進化しました。こんな立派なモキユになつちやつて：斜めプラスチックとか君さあ……。

ところでいろはちゃん遅くないですか？

約束の時間に来る電車もう行ききましたけど、改札口から出てくるの見てません。

これはもしかして迷ってしまっている可能性がありますねえ！ありますあります。

どうしましょうか、下手に動くと入れ違いになつてしまいそうで怖いんですよ。そもそもどこに居るのかすら分かりませんし。

「…あ、詩織さん！遅れてしまつてすみません！」

おお！噂をすればやつてきた彼女こそ、我らが主人公の環いろはちゃんです！

そして詩織ちゃんが本編で全面的にサポートしていくのも彼女です。ただしあくまで道を舗装する程度ですが。

そういうえびいろはちゃん、改札口じゃない方から来ましたけど…一体何を使ってやつて来たんですか？

「いえその、知り合いに送ってきて貰いました……。」

そうだったんですか、今度その人にあつたらもう一度感謝しておくようにな！

まあ恒例の餞ちゃんでも渡しておきましょう。とりあえずコレでも舐めて本題に移

ろうと思います。

今回、詩織ちゃんは第1章『はじまりのいろは』のパートナー枠を務めます。

といっても調整屋に送り届けて、かもれに会って、モキユをいろはちゃんに引き渡すだけです。簡単だな！

かもれ宛の手紙を書いて、このまま調整屋で合流できるように時間を調整します。

せつかくの機会なので上げる必要がないとはいえ、いろはちゃんと一緒に神浜観光と洒落込んどきます。

それでは調整屋まで倍速じゃあ！

ここがああ女のハウスね……。

ちわーす！おつ、開いてんじやーん！

「いらっしやくい、あらまた人助け？」

「本当に詩織さんも懲りないよなあ。」

「いつもの事でしょ、それよりソツチは一体誰よ？」

「レナちゃん、口の利き方がなってないよ……。」

まさかのかもれトライアングル勢揃い……だど……？

やるんだつたらー1人だけでも来てくれれば良かったんですけど、まあココで3人ともいろはちゃんと面識ができるから問題ないな！ヨシ！（現場猫並感）

「えつと環いろはです！もし良かったらこれ……詩織さんと選んだので頂いて下さいー！」
行け！いろはちゃん！感謝と善意のプレゼントだ！

走者はね、気づいてしまったんです。

事情を知らないいろはちゃんを利用して割り勘すれば、彼女達に止められる事なく奢る事が出来る……と。

保存用としてケーキをワンホール買つといて正解でしたね。余ったら調整屋の冷蔵庫で保管しておきます。

「……それつてもしかして、詩織さんもお金払つてない？」

「ちよつと！今露骨に目を逸らしたわね!？」

それじゃあいろはちゃんを調整に突っ込みましょう。

お代のグリーンフシードは詩織ちゃんが出すので、心配しなくても大丈夫です。なんなら有り余つてるからな！

待つてる間、かもれにいろはちゃんの事を教えて、ついでに小さい白タヌキの存在も聞いておきます。

あ、そうだ。忘れないうちに義手くんに搜索命令を出しましょう。

義手くん2号3号！モキユを見つけたら捕まえて持ってきて！

もし詩織ちゃんが受け取れない状況だったら、いろはちゃん目掛けて投げてくださいね！遠慮しないで！

なんかかもれに聞いた話によると、モキユは割と神浜で有名なようです。そら（白タヌキのいない神浜にいたら）そう（一体何だろうと噂になる）よ。

「どうか知らなかったの多分詩織さんくらいだぞ。」

……詩織ちゃんってソロ活動だからなのか知らないですけど、なんか他の子達にハブられてる事多くなあひ？

それで肝心のいろはちゃんはどうかね。

へい！なんかあったりしませんでしたか？主に願い事とか、あと願い事とか……ないですか？

「やっぱり小さいキュウベえが……！」

あーあ、いろはちゃんが飛び出していつてしまいました。調整屋でイベントを起こさせた走者のせいです。

いろはちゃんを案内していたのは詩織ちゃんです。監督責任があるので彼女が迷子にならないうちに合流しに行きましょう。

みたまさん診てくれてありがとうございました！かもれも今度はちゃんと詩織ちゃんが奢るからな！覚えておけよ！

それで飛び出していったいろはちゃんですが、調整屋でイベントを起こした事によって、強制的に次のイベントが発生しております。

おつ、早速ドンパチが始まっていますね。そんな事するの詩織ちゃんが見逃すわけ無いよなあ!?

じゃけん、すかさず間に短槍を降らせましょうね。

「……ッ！この槍は!？」

「詩織さん!？」

という訳で、今介入したこのイベント。

いろはちゃんが調整を受ける事によってフラグが立つ強制イベントです。

内容は…見れば分かりますし、本編を知っているであろう兄貴姉貴達ならすぐに察しがつくと思われます。

よく初邂逅イベと呼ばれるモノですね。

このイベントでは、新しく街に来たいろはちゃんをやちよさんが追い返そうとします。

え？修羅の国の歩き方を知らないなら神浜に居るべきではない？それを教えるためにチュートリアル詩織ちゃんが居るんだろうが！（ドン！）

ちよつと…やり方が強引過ぎとちやう？もう少し穏便にいこうぜやちよさんよお！

「…私より先に魔女を倒して証明しなさい。そうすれば見逃してあげるわ。」

「分かりました…受けて立ちます！」

「さつき見つけた結界があるの、そこで勝負しましょう。」

だつてよ、いろはちゃん！

という訳でどちらが先に魔女を狩るか、やちよさんと競争する事になります。

正直言つてこの時点のいろはちゃんは調整を受けたとはいえ、普通の魔女ですら苦戦する程の弱者です（感覚麻痺）

少なくとも使い魔とまともに戦えるレベルにはなっているので恐れる事はありません。

というかそもそも詩織ちゃんって後方支援型ビルドなので、誰かと一緒に戦うのが本来の力を発揮出来ず。

ただその…いろはちゃんって武器がクロスボウなんですよね。

一応近接用のナイフを持ってはいますけど、余程の事がない限り使つてるのを見た事はありません。

かたや後方支援型が2人、かたや水のブラストゴリラ…ああ、大分攻撃力に差がありすぎるんじゃない。

仕方ないのでまともな近接武器を持っている詩織ちゃんが前衛を務めましょう。本編のももこの役割を奪った結果がこれなんだよなあ……。

「お先に失礼するわよ。」

そんな事言ったらやちよさんに先を越されましたね。抜かされるのは予定通りです。

というのも先にやちよさんが魔女と交戦してないと、この後単騎で戦ういろはちゃんが倒すのに時間がかかってしまいます。

しかしあまりにも遅すぎたら今度はやちよさんが魔女を倒してしまい、いろはちゃんの今後の神浜来訪が無くなります。

この後モギユが出てくるので、ソイツについて行けば丁度いい時間になります。

そういうええ命令といった義手くん達は一体何してるんですかね？ だいぶ時間経つてると思うんですけ

「モギユ………ッ！」

… ドツ!?

「えっ…詩織さん!?わ!待ってください!探してたの多分その子です!」

大丈夫!大丈夫だって!モキユが顔面に降ってきただけです。義手くんさあ…もう少しちゃんと落とそうや。

なんかちよつと詩織ちゃんが殺気を放つてたような気がしますが気のせいです。ええ。

最近白タヌキ見てないから忘れてたけど、そういや走者の操作を振り切つてまで白タヌキを必ず一回殺してましたね……。

いろはちゃんの制止でなんとかすぐに操作権が戻ったので、さっさといろはちゃんに渡してしましましょう。

渡せば後は勝手にイベントが進み、モキユが魔女のいる最深部に案内してくれます。おまえなかなか…やるやん?

やちよさんが最後の提案でいろはちゃんが単騎で魔女を倒したら、その強さを証明する事が出来たという事です。

ご存知の通りこの時点のいろはちゃんは弱いです。

ですが安心してください…実はこのイベントは難易度ハードの修羅の国であっても、大体のいろはちゃんが驚異の主人公補正で突破してしまいます。

さすがマギレコの主人公やってるだけありますよ！先にやちよさんが交戦してないと削れてない体力の分、結構なロスが発生してしまいますけどね……。

今回のいろはちゃんは少しタイミングが悪いところがありますが、なんとか普通の方っぽいので走者的に安心感があります。

まあ一部のいろはちゃんは色々とスゴい事になってるんですよ（14敗）

契約してなくてマギレコが始まってなかったり、何故かマギレポ時空の方だったり、なんか変なトラウマついてて戦えなかったり、主人公なのに元マギウス（翼ではない）だったり……。

「届いてっ…!!」

ひとまずそれは置いておきましょう。

なんだかんだ言ってる間にいろはちゃんがマギアで魔女を倒してくれました。

これで今後、いろはちゃんが神浜を訪れるにあたって、やちよさんから何か言われる事は無くなります。

いやまあやちよさんがモキユを殺そうとするのは止めますけど。

確かに詩織ちゃんって白タヌキ絶対殺すウーマンですが、流石にいろはちゃんが必死になって止めようとしてますからね。

RTA的にも本編的にもここでモキユを殺されてしまうと非常にまず味です。

というか第1部が崩壊してしまうのでやめて下さい。

「あ……れ……？」

「危険かどうか……今、判明したわね。ソイツは危険よ、早くこちらに渡して。」

しばらく話してるといゝろはちゃんが気絶するので、それで余計に疑われたモキユを庇います。

最初の方に電話で彼女から頼まれた以上、チュートリアル詩織ちゃんは必ず神浜市での活動をサポートしなくちゃいけません。

「どうしてそこまでソイツを庇うの？その子が気絶したっていう実害も出ているのに。」
それはまあ詩織ちゃんが優しいからとか、モキユはメインストーリーで重要だからとか、答え方は様々ですけど……。

たまにはロールプレイも兼ねてそれっぽい回答を試みるのもいいかもしれません。
そうですね、こう言っちゃ悪いけど今のいろはちゃんって神浜側からすれば本当に弱いです。

ぶつちやけモブとネームドの間に存在する☆1ですね。

そして詩織ちゃんは弱い魔法少女達の為にグリーンシードを売っています。こつち

からしたらまだ狭間に立ついろはちゃんは守るべき対象です。

やちよさん知ってますか？

商人って、信用で成り立つ商売なんですよ。

「……あなたに免じて、今日のところは退いてあげるわ。ただソイツが未知の存在だという事を忘れないで。」

詩織ちゃんの信頼度のおかげで見逃してもらえました。やったぜ。

基本このモキユを庇うのは大抵やちよさんに対抗心のあるもこなので、本来ならプレイヤーは何もしなくても大丈夫なんですけどね。

もし信頼度が足りなかったら、先にやったロールプレイで成功かどうか決まります。

何はともあれ今章のイベントは乗り越えました。つまりは実質メインストーリー第1章クリアです。

後は流れに沿っているいろはちゃんを調整屋で寝かせて、起きたら新西駅から元の宝崎市に送り返してあげればミッションクリアですね。

といったところで今回はここまで。

ご視聴ありがとうございました。

「病室にいる一人の女の子。
その子はいつも何かを私に話していて、
楽しそうに笑っている。」

▶
?

でもその声は私に届かない。

聞こえない言葉を話すあの子を見る度に、どこか心を縛られるように胸が苦しくなる。

あなたは誰なの？何を話しているの？……どうしてこの夢を見る度、こんなに愛しくて悲しい気持ちになるんだろう。

私はあなたのこと、知らないはずなのに……。

そうして目を覚ます。

綺麗に半分家具が置かれた部屋に日の光が差し込んでいる。起きた私を迎えたのはやっぱりいつも通りの朝だ。

ここ最近、私は同じ夢を繰り返し見ていた。

病室の中の知らない女の子の夢。

それを見始めた理由はハッキリとは分からない。でも多分、これじゃないかなって思うモノがあったんだ。

だから私は神浜市へと向かう事にした。

急だったけど電話に対応してくれた詩織さんには感謝してもしきれない。

学校が終わったらすぐ駅に向かって電車に乗る……はずだった。

「環さん優しい！マジ天使！ありがと〜！」

「ううん、気にしないで？」

放課後の掃除、担当の子は大切な用事があったのを忘れてたみたいで、ついうつかり掃除を代わっちゃった。

頑張っても電車の時間までに間に合うかどうか微妙なところ……詩織さんに遅れるって電話をした方がいいかも。

なんとか間に合わないか駅まで走ってみたけど、惜しくも神浜行きの電車は私の目の前で出発してしまった。

諦めて次の電車まで待つてようかな……でも結構な時間があるから、一度荷物を整理してからでも大丈夫そう。一旦家に戻っても良さそうかな？

えっと、まずは連絡しよう、詩織さんの電話番号は……。

「あれ、いろはちゃんじゃないですか！」

「……へ？」

そう考えてスマホから詩織さんの電話番号を探していたところにキキーツと止まるバイク。

それについていたサイドカーからヘルメットを外し、こちらに話しかけて来たその人は私と同じクラスの子。共通の事があるからか、普段友達の出来ない私でもそこそこ仲間が良い。

話を聞いてみれば、彼女は駅近くのコンビニでバイトをしているみたいで、私も知っている共通の知り合いに送ってきてもらったって。

駅の前で途方にくれて困ってそうな様子の私を見つけて、よかったら何か手助けにならないか心配してくれた。

「じゃあその……よろしくお願いします。」

「……ん、分かった。しつかり掴まってる。」

バイクに乗る機会、それもサイドカーに乗る機会なんて滅多にない気がする。きつと私の人生において貴重な経験になる……のかなあ？

新西駅の近くで下ろしてもらって、私は待っているであろう詩織さんを探し始める。幸いにも電車がついて少しした後のようで、待ち合わせ場所の改札前から詩織さんは動き始めていなかった。

詩織さん自身はあまり気にしていなくて、少し落ち着けるためにまた飴玉を渡してくれる。

光に翳すとキラキラと輝いてまるで宝石みたいな桃味の飴。初めて舐めた筈なのに、なんだか懐かしさを感じる甘さだ。

それよりもこれから神浜に何回か来るなら、行っておいた方がいい所があるらしい。

この先もお世話になるだろうから何かお礼を持っていこうという話で、近くのケーキ屋さんで買うことにした。

たどり着いたのは『調整屋』という場所。

ここで神浜の魔法少女達はソウルジェムを弄ってもらい、魔力を強化して強くなれるんだって。

中の部屋に居たのは4人の女の子。

八雲みたまさんがお目当ての調整屋さんで、十咎ももこさん、水波レナちゃん、秋野かえでちゃんの3人はチームを組んでる魔法少女みたい。

持ってきたケーキを差し出したら何故か詩織さんがジト目で見られていたけど……。

先に事情を説明しておくから調整を受けておいで、と言われて私はみたまさんの調整を受けることになった。

また見えたのは夢で見た病室。

ベッドの上にいるのはやっぱりあの女の子だった。前より鮮明に見えるけど、相変わらず声は聞こえない。

「ごめんね、もう一度言ってもらっていいかな？」

声の聞こえない女の子にそう言うと、女の子は途端に悲しそうな顔になって俯いてしまふ。

違う、そんな顔をさせたかった訳じゃないんだ。ただあなたが何を言ってるのか、知りたくて聞き返したただけなんだよ。

ねえ、あなたは一体…私の何なの…？

女の子は姿はすぐに掻き消えてしまつて、私は徐に目を覚ました。

なんだかさつきよりも身体の調子がいい気がする。これが調整屋さんの調整の効果なのかな？

みたまさんは私が大丈夫なのを確認すると、前置きをしてから真剣な顔つきで一つの質問をする。

それは私の願い事について。

魔法少女なら誰でも覚えている筈の最初の願い。当然のように答えられるから、言おうとして私は口を開く。

でも言葉の続きは不思議と喉につつかえて言えなかった。

いや、そもそも覚えていると思いついていた願い事は、記憶がポツカリと空いたように消えていたんだ。

ふと脳裏にチラついたのはあの小さなキュウベエのこと。

会ってどうなるかなんて分からないけど、きつとあの子が何か手がかりになるかもしれない！

そう思つて調整屋を飛び出した私を路地裏で待ち受けていたのは、青い髪を槍を持った魔法少女。

何を言っても門前払いのようで、同じ魔法少女なのに戦闘が始まってしまふ。もしかしたら彼女のテリトリーに入ってたのかもしれない。

相手も戦闘を仕掛けただけあって、それなりの威力を込めた私の矢を、軽く槍を振り払うだけで弾いてる。

このままじゃこの人に負けてしまふ…まだ神浜でやらなきゃいけない事があるのに！

「……………そこ、まで…。」

迫ってくる魔法少女と私の間に降ってきたのは短い槍。前に見た事があるそれは間違いなく詩織さんのモノだ。

また詩織さんに助けられちゃったのかな……。

そして襲ってきたこの人は詩織さんの説明によれば、あの西のベテランである七海やちよさんだったようだ。

「外から来た魔法少女が簡単に生き残れる程、この神浜という土地は甘くない…弓有さんもよく分かっているはずよ。」

「……………。」

「退くつもりは無いようね…分かったわ、こうしましょう。」

始まった勝負は結界内の魔女を、やちよさんが先に倒すか私と詩織さんが先に倒すか。

やちよさんは強いけど2人ならまだ対抗できる…でもやっぱり経験が違いすぎるのだろう。行く手を阻む使い魔を倒している内にあつという間に抜かされてしまった。

「モギューーーーーーッ！」

「……………え…ウッ…」

それで囲んでいた使い魔を倒して一息ついた時、私の目にははつきりと白い物体が空から落ちるのが見えた。

詩織さんの顔面に飛んできたのは探していた小さいキュウベえ。ゆっくりと首を掴まれて剥がされたその子は、どうやら詩織さんのカラスが見つけて持ってきたみたい。

詩織さんから渡された小さなキュウベえはすぐに手から降りると、まるで何処かに案内するかのようにつちを見てくる。

もしかしたら魔法のいる最深部へ行ってくれるかも……!

「……………いた。」

「あら遅かったわね、残念だけど勝敗は既に決まったようなものよ。」

最深部には倒れ伏した魔法と余裕そうなやちよさんが立っていた。

確かに今から私と詩織さんが入ったところで、あの魔法をすぐに倒せるほどの力をこの人は持っている。

ここで終わってしまうのかな、そう思った時詩織さんがやちよさんの言葉を否定するように首を振った。

「……………まだ……。」

「……あくまでも諦めるつもりは無いって事ね。良いわ、最後のチャンスあげる。」

やちよさんが最後に提案したもの……それは私一人であの魔法を倒す事。

少しの不安は確かにあったけど、ここで退いていたら何も得られない。

だから私はその提案に乗る事にした。

魔法は砂嵐を飛ばして私の矢を弾いてく。

魔女自身もまるで砂で出来ているかのように、まったく矢でダメージを与えられない気がしない。

急所に狙おうとしても砂嵐で威力を減らされて、当たってもあまり効いていないように思える。

神浜の魔女は一筋縄じゃいかないって、改めてその事を思い知った。

でもこの機会を無駄にしないで、やちよさんに私の強さを証明するんだ。

そうしなければ夢を見てから燻り続けるこの気持ちを調べることも出来なくなってしまう。

そして、私の事を信頼してくれた詩織さんに報いる事も。

だから………!

「届いてっ……!! ストラダー・フトウーロ!」

魔女の結界が解けてから辺りを見渡して、安堵したように微笑んだ詩織さんと静かに目を閉じていたやちよさんの姿が見えた。

「……………いろは…ちゃん。」

「詩織さん！私、魔女を倒せました！」

「……………うん…見てた、よ…………。」

私のそばまで近づくと左手を上げて、優しい手つきで私の頭を撫でる。こういうのは慣れてないからなんだか少し気恥ずかしい。

カバンから出てきた小さなキュウベえを受け取ってやちよさんの方を見た。ゆっくりと目を開けたやちよさんは真っ直ぐ私の事を見据える。

「それよりも私の用があるのはそっちの方なの。」

そして私の腕の中にいる小さいキュウベえに視線を移した。その冷たい視線は前に似たようなモノを感じた事がある。

いや、正確にはあの時のスズネさんより大分違うけど…多分この感じはそれと似たモノだと思う。

攻撃を仕掛けるタイミングを狙っている視線。

そういうばももごさん達から聞いた話では、神戸市で最近キュウベえを見かける事がなくなっただけらしい。

その中でこの子だけ活動していたら、確かに私も不思議だと感じる。

小さいキュウベえが危険かどうかも分からないから、やちよさんは何かが起こる前に始末しようとしているみたいだ。

まだこの子に何か手がかりがあるかもしれないんだ。元気の無さそうなキュウベえを抱える手に力を入れる。

けれど、すぐに力が抜けて視界が突然傾く。

やちよさんを止めないといけないのに……意思に反して私はそのまま気を失ってしまった。

「お姉ちゃん！ 今日も来てくれたんだね！」

……お姉ちゃん？

またこの病室、そして一人ベッドにいる女の子。今までの夢と違っていたのはあの子の声が聞こえた事。

多分きつと、私はこの子の事を知っている。

嬉しそうな顔に楽しそうな顔、そして時折苦しそうに呻く声、全部見た事も聞いた事

もあるんだ。

愛おしくて懐かしいあの子の名前、何だっけ…かけがえのない存在だったあの子の名前。

「私、このまま治らないのかな…？」

「そんな事ない！きつと治るよ、うい！」

うい…そうだ、うい！

私の大切な、かけがえのない妹。

契約した時の願い事とか半分だけぼっかり空いた部屋とか、今まで疑問だったけどようやく分かった。

そこにはうい、あなたがいたんだ。

『お願い、ういの病気を治して！』

私はあなたの為に魔法少女になったんだね。

「詩織さん！いろはちゃんが目を！」

「……………起きた…？」

目を覚ましたら心配そうな顔で詩織さんとみたまさんが私を見ていた。

あの後倒れてしまった私を詩織さんは調整屋まで運んでくれたらしい。何から何までお世話になって申し訳ないなあ……。

「私、思い出したんです。自分の願い事と、私の…妹の事を。」

魔法少女になった理由は病気のういを治すためだった。

でも今まで、私はずっと一人っ子だと思っていたんだ。私だけじゃなくてお母さんもお父さんもそう思ってた。

本当はそこにういがいたのに、まるで最初からあの子がいなかったみたいが消え去っていた。

きつとこの小さいキュウベえがういのことを思い出させてくれたんだと思う。

何でういが居なくなっていたのかとか分からない事だつて沢山ある。それもまだ忘れていた記憶があるのかもしれない。

「だからこれからも神浜市に、今度はういを探しに来ます！」

だって『環ういつて妹がいる環いろは』を『私』は信じてみたいから。

Part 25 うわさの疾走ルール

本編唯一の癒しポイントと言っても過言ではないRTAはーじまーるよー

前回はがつつりいろはちゃん的神浜来訪に関わり、詩織ちゃんのチュートリアル性能の高さを見せつけてやりました。

第1章をクリアしたので、今回はその続きからです。

実は次に始まる第2章『うわさの絶交ルール』は特に走者が介入せずとも、いろはちゃんとかやちよさんとかもれが何とかしてくれませう。

それでも時々ヤバイ事になりますますが、難易度ハードで高い安定性…誇らしくない

の？

なーのーでー、今回は平凡な休憩回です。

……と行きたかつたんですけどねえ！

現在詩織ちゃんがいるのは栄区、目の前にあるのは廃墟の博物館、いつのまにか消えていたみふゆさん。そして詩織ちゃんは知らないだろうけど、走者には見覚えのある少女、改めおガキ様。あつ……（察し）

ええ、まあ……みふゆさんに呼び出されたんですよ。

そうなるともう思いつく用事は一つです。

「あなたが噂の商人さんだね。今日は聞きたい事があってわたくしがみふゆにお願いしたの。」

「お久しぶりです。ね、詩織さん。招待に応じて頂き、ありがとうございます。」

だってもうあからさまに狙ってますよこれ！走者には分かりますよ！詩織ちゃんをマジウスの翼に勧誘するつもりでしょう!?

と分かっているにしても、今詩織ちゃんには断る術がありません。そのための理由もないですし、そもそも性格からして断れません。

謀ったなア！梓みふゆウ……！今まで何処で何してたんすかねえ？（すつとぼけ）

「私は今、『魔法少女の救済』を目的とする組織に所属しています。そうですね…まずはそこからお話ししましょう。」

というわけでみふゆさんの過去語りを背景に現状を解説いたします。

実は現在の詩織ちゃん、非常にマズイ状況です。

栄区、廃墟の博物館：と聞いたら、視聴者兄貴姉貴達はピンと来るんじゃないでしょうか？

そう、第6章の舞台の『記憶ミュージアム』です。

マジウスルート走者達の間では過労死枠のウワサですね。君ちよつと…便利すぎちやう？出来る事の応用がスゴい（小並感）

この記憶ミュージアムでは他人の記憶を人に見せて洗脳する事ができます。

しかも記憶の本を見たら記憶を抜き取られない限り、外に出られないという罠も完備しています。

詩織ちゃんも一応『使役』で似たような事は出来るんですけどね…肉体・精神操作系の魔法でかなり上の性能なので。

というか同じカテゴリーの固有魔法の中でも珍しく、『使役』は物理的な操作が強いんですよ。使役槍とかがいい例です。

高度な技術とシビアなタイミングを要しますが、剣戟の最中に相手の持つ武器の操作権を奪う事だって出来ます。

相手からしたらさつきまで自分が持っていた武器が勝手に止まって、しかも自分に向かって攻撃してくるんですから凶悪極まりないです。

考えてみれば詩織ちゃん、どつかの不倫騎士みたいな技使えんのかな……？

ただその戦法の欠点はビームだったり弓矢だったり、遠距離武器には効かない事です。発射する弓とかを乗っ取ればいけそうですが。

ともかく本題に戻りましょう。

今回詩織ちゃんが幸運だったのは、みかづき荘の事情をある程度知っていた事ですね。

そのおかげで魔法少女の講義に参加しなくて済むので、記憶ミュージアムを利用しなくて良くなります。

「単刀直入に聞くよ、弓有詩織。わたくし達の組織に入らない？」

勿論のこと答えはNOです。当たり前だよなあ!?

詩織ちゃんが出した選択肢によれば、『人に優しくできないから』だそうです。そりや
マジウスの活動は一般人にも被害は及びますからね。

「商人さんも魔法少女を助けようとしてるんでしょ? だったら目的は同じだと思うけど。」

確かに魔法少女相手のグリーンフシード売買はしてますけど、流石の詩織ちゃんでも一般人を巻き込んだりするのはNGです。

一応マジウスってアレな目的以外はちゃんと魔法少女救済してるんですよ…ドツペルシステムとか世界中に広まれば、今後の魔法少女問題も解決できますし…。

それでも用事が勧誘だけだったら詩織ちゃんは帰りますよ? こんな所にいられるか! 走者は部屋に戻るぞ!

…ウオワーーーーッ!! 右腕がーーーーッ!!

里見灯花ッ! 貴様もしかしくとも『変換』の固有魔法を使ったな!? 義手の構成魔力

を『変換』しましたねコンチキショウ！

……って、あれ？待ってください。

右腕の魔力を『変換』できる事を知っててやったなら、このおガキ様は最初から詩織ちゃんが隻腕な事を知ってた事になりますよね？

詩織ちゃん、里見灯花と知り合い説が？

いやでも初期交友関係に名前は載ってませんでしたし：一方的におガキ様が知ってた方は可能性がありますね。

だけどどんなに呼びかけたところで、(マギウスの翼に入る気は)ないです。

「……それじゃあ言い方を変えるよ。有鷲詩織、本当に魔法少女の救済に興味がない？」
有鷲って誰だよ……。

んー、詩織ちゃんの前の名前とかですかね？偶に親が再婚したとか経歴にあると苗字が変わるんですね。

それでも有鷲の方と今の詩織ちゃんが同一人物だったら、おガキ様が交友関係に載ってないのはおかしいと思うんですけど(名推理)

「……っ灯花ー！」

ん？おや？詩織ちゃん？また操作効かないんですけど!?ちよつと!?頼むからマジウス相手に喧嘩売るとかしないで下さいよ！

いやもうそれっぽい事してますね…：よりによつて暴走詩織ちゃんはおガキ様に『使役』を掛けたようです。

なんかさつき出てきた『有鷲詩織』という名前に執着してるっぽいですね。お！また経歴ガバか？

おガキ様はどうやら単純に、同じ名前で隻腕のヤツはそうそう居らへんやろ…：名字変えてるつて事は多分餌に使えるな！といった感じで引つ掛けただけですつてよ！

正直言つて走者にも詳しく分かりませんが、もしかしたら詩織ちゃんの地雷ブチ抜いてる可能性ありますねクオレハ…：。

とりあえず大した情報は得られなかったのか、流れるように証拠隠滅しましたね詩織ちゃんね。

不意さえ突ければマジウスだつて洗脳出来ちゃうの強いなあ…：やっぱラスボス張れるスペックしてるんだよなあ…：。

今さつき暴走詩織ちゃんがおガキ様を気絶させたように、相手の意識を落とすのにも便利な『使役』くん流石。

ついでに目撃者のみふゆさんの記憶も消して、ようやく操作権が返ってきたのできつさと帰りますか。

ついでに置き土産としてメモを残しておきましょう。サヨナラ！

さて胡散臭い宗教組織の勧誘も断ってきた事なので、もう第2章が始まってるかどうかを確認したいですね。

というわけでちゃんと義手くんを装備して、ついでに義手くん2号達にかもれの様子を見に行ってもらいます。

詩織ちゃんはこのままお家に帰りますか…今回でマギウスの翼の情報を色々知れたので、4章あたりからやつと情報提供する事ができます。

今の時点で知らせてもいいんじゃないか？と思う視聴者兄貴姉貴もいるでしょうが、现阶段で知らせてしまうと様々なフラグが折れます。

段階追わないと展開について行けないし……ま、多少はね？

来たな義手くん2号！かもれの様子はどうでしたか？

え？なんか結界らしき謎の場所から出てきた？相手は魔女ではなかったっぽいって？
かもれの他にいろはちゃんとやちよさんがいた？

それつてもしかして絶交階段のウワサ撃破されてませんか？

……だいたい早くない？いやまあ別にいい……いいのか？いや良いから大丈夫ですけ
ど。間接的に走者のタイムも縮まりますし。

ん？その時に自分も援護してたって？何やってくれてんの、義手くんさあ……。

まあ、いいでしょう。過ぎたことです。

これにて第2章『うわさの絶交ルール』クリアだな！早々に終わってしまつて暇になつてしまいました。

という訳でね、暇になつたらやつぱらここですね。ええ、ここですよここ！分かりますよねえ！？水徳商店街の相談所ですよ！

さて今の時間は誰がいますかね？誰か居てくれると嬉しいんですけど。

「了解したネ、またあれば連絡してほしいネ。」

「誰からの電話だったの？蒼海幫の人？」

「あながち間違いでもないヨ、でも私の個人的な部下の方が正しいネ。」

「へえ…あつ詩織さん！こんにちは！」

こんにちは。まあ詩織ちゃんは用事という用事もなく、ただ顔出しに来ただけですね。

奥で相談してるのは…ななかさんですか。もうすっかりこの常連客ですよね組長。そろそろ詩織ちゃんにも相談事明かしてくれないでしょうか。

ところで今日は美雨さんも相談所に来てるんですね。さつき何か電話していたみたいです。はえ…美雨さんに個人的な部下っているんすねえ。

「詩織も興味あるの力？…けど例の件の時、狙われた子の市で噂を流していた人ヨ。」

「そっか、いろはちゃん隣の市だもんね。」

これ多分『CROSS CONNECTION』の時の話ですよ。

確かいろはちゃんがスズネさんにロックオンされてたから、一応宝崎市にも噂を流してたんでしたっけか。

ああ、なるほど？噂だけだと不安だから、念のためにそのまま滞在しているんですね。

アフターケアもバツチリな蒼海幣をみんなヨロシクウ！

「音楽が趣味だから何処かで聞くかもしれないネ。」

音楽やってるんすかあ…もしギターやってたらさやかちゃんにギター教えたりできるんですかね？マギレコ時空のさやかちゃんは殆ど心配無いとはいえ、ギター時間軸なら楽器やつとした方が損は無いです。

「あの…詩織さん、ちよつといいですか？」

おつ、組長ですか。何か用ですかね？

走者側からすると組長に頼るチャートが多いので、組長から呼びかけられるの体感では少ない気がします。

それで用事って何ですか…いやちよつと待つてください！それってもしかして家の宝刀、壁ドンってやつじゃないですか！

「……………」

うーん、やはり顔が良い。でもこの光景、側から見たらシユールすぎでは？

どうすればいいか戸惑いっぱなしの詩織ちゃんと、ずっと真顔のままの組長がただ向き合っているだけですよ？

他の人達に助けとか求められないですかね…あつ！そこ！そこ目を合わせてください！おつと…完全に目を逸らされています。

うん？あれ、ななかさんコレ余裕そうな表情でドヤ顔してますけど、目を閉じたまま固まってませんか？

とりあえず何かされるわけでもないなら、未だ相談事を明かしてくれない信頼度のために、組長の頭を撫でておきましょう。

ところで組長、それ以上傾くと地面に倒れてしまいますが。組長、組長…？え、待ってななかさん本当に危ないですよ！

「まだ早いようネ…。」

「うん…詩織さん、その椅子に寝かせてあげて…。」

じゃあ遠慮なくお借りして寝かせます。

一応働いてくれてましたけど、この調子だといつダメになるのか心配なので、貴重な詩織ちゃん枕でも提供しておきますか。

結局ななかさんの相談事は謎のまま終わってしまいましたね。

これまで色々信頼度のために画策してきましたが、いつか本当にその謎が明かされる時は訪れるんですかねえ…。

キリがいいので今回はここまでにします。
ご視聴ありがとうございました。

▶ ?

『魔法少女の救済』。

それが現在私が所属している組織、マジウスの翼の目的です。

活動は数多く存在し、時にウワサを広めて守ったり、はたまたある時は敵だったはずの魔女を飼って保管したりします。

その影響で関係ない人々を巻き込んでいますが、ドツペルという魔法少女の魔女化を回避するシステムをもたらしただのも事実です。

残酷な真実から逃れようとした者達が集まってできたのが、このマジウスの翼という組織でした。

かくいう私：梓みふゆはマジウスの翼と、彼女達の幹部であるマジウスを繋ぐ役割を担っています。

神浜市で数多くの魔法少女を勧誘し、マジウスの翼の目的を広め規模を拡大してきました。

私を慕って集まってくれた子達のためにも、かつての親友のやつちゃんのためにも、ここで挫ける訳にはいかないんです。

「だから、私は戻るつもりはありません。」

「……………そう。」

私の宣言に返された言葉はたったそれだけでした。

そう聞くと目の前にいる彼女が冷淡な性格で、他人に対して非常に無関心な人物のよう
うに思えるでしょう。

しかし弓有詩織という人物は自分にまったく利益が無いのにも関わらず、弱い魔法少女
たちにグリーンフシードを与えたり、郵便鴉として手紙を送り届けたりしています。

特に商人の活動は利用している魔法少女達にとって、生命線と言っても過言ではない
程に重要なものです。

そういった意味では詩織さんの目的と、我々マギウスの翼の目的。目指している『魔
法少女の救済』は一緒なのではないでしょうか。

だからこそ賛同してもらえないか、この記憶ミュージアムに招待してまで勧誘を行
いました。

灯花も噂の商人について知りたかったのかもしれませんが。弓有詩織を勧誘しようと
言い出したのは彼女でした。

「単刀直入に聞くよ、弓有詩織。わたくし達の組織に入らない？」

灯花の誘いに対し、詩織さんは首を横に振ります。つまるところコチラの勧誘は失敗したのです。

最初からダメ元でやっていたところはあるので、そこまで衝撃を受けた訳ではありません。マグウスの翼をいざれ理解することにはなるでしょうから。

「……人、に……優しく……でき、ない……から……。」

確かにマグウスの翼のしていることが、素直に肯定出来るような事ではないのは分かっています。

しかし『人に危害が加わるから』などではなく、詩織さんは『人に優しく出来ないから』と断りました。

ニュアンスの違いなのでしょう？その詩織さんの返答に、少なからず違和感を抱いたのは確かです。

用件はそれだけで済んだと思ったのか、それともただ単に顔の通り眠かっただけなのか、詩織さんは踵を返してこの場から去ろうとします。

「……………！」

その右手を掴んだのはわずかに不機嫌そうな灯花でした。

驚くべきなのはそのすぐ後の出来事です。アレを驚かすしてどうしろと言うのでしょうか。

詩織さんの右腕が突如として姿を消したのですから。

話を聞くにどうやら元々、詩織さんの右腕は魔力で構成された義手だったようで、魔法によつてその魔力を霧散させたそうです。

分かる人には詩織さんに触ったときから、なんとなく右腕に違和感を感じるそうで、私には全然分かりませんでした。

まあ今は置いておきましょう。

ともかく今の私は先ほどのように、場違いの感想しか頭に浮かんできませんでした。驚いて言葉を失うほかなかったんです。

呆然として立ったままの私、一通り話し終えた灯花、次の言葉を待つ詩織さん。静けさに包まれた場を破つたのは、またしても灯花の声です。

「……それじゃあ言い方を変えるよ。有鷺詩織、本当に魔法少女の救済に興味がない？」その言葉を聞いて詩織さんは目を見開きます。

有鷺詩織……状況と詩織さんの反応から考えて、前の名前だったりもしくは本名だったりするのでしょいか。

結局のところ、私には真相を推測するぐらいしか出来ません。

「……………君。」

「…っ灯花!」

詩織さんが灯花の腕を掴みかえし、魔法少女の姿に変身しました。

当然、私達に戦慄が走ります。一歩間違えると、敵対関係になるのは明白でしょう。辺りの空気を謎のプレッシャーが包んでいました。

灯花を助けに行こうとしましたが、突如何かに腕を引つ張られます。

それは光に照らされて銀色に輝く糸でした。

腕に巻きついて離れない糸は果たしていつからあったのか…いや、微かに感じるこの魔力は間違いなく詩織さんのモノです。

背筋を伝う冷や汗がこの空間の異常を語っています。言わずとも原因は弓有詩織その人でした。

「……………知ってるの?」

「教えてあげてもいいけど」ツ!

「……ねえ、答えてよ。知ってるかどうか全部。」

前よりも語気が強まった言葉は、普段の詩織さんから考えて異質に感じます。

ひとまず灯花から詩織さんを引き離そうと武器を投げましたが、宙に浮く槍に行く手を阻まれ弾き飛ばされてしまいました。

いえ、それどころか私がこれ以上妨害出来ないように、地に伏せられ槍で磔にまでしてきます。攻撃はまるで他にも目が付いているのかと思わせる程に的確です。

「だから、何で勝手に……！」

「いいから続けて、君の知っている事を話してほしい。」

焦りを感じつつやけに詳しく語る灯花は、どこか表情と行動が一致していません。そもそも最初からこんな説明する子ではなかった筈です。

となれば何かしらの魔法、状況から見て詩織さんの固有魔法しか考えられません。

思い返してみれば詩織さんが固有魔法らしきモノを使っているところや、誰かに詳細を話していた記憶なんてありませんでした。

彼女は徹底的に固有魔法を隠していたのです。それも今まで誰にも悟られる事なく。私達には勿論、他の魔法少女達にも。

大した腕ですよ、本当に。能ある鷹は爪を隠すとは、まさにこの事を言うのでしょうか。それよりむしろ、私達が眠れる獅子を叩き起こしてしまった……という方が正しいのかも

しません。

「それだけ？それだけかあ…ハ、ハハ… ここでの事を忘れて。」

「…何を！」

「じゃあね、おやすみ。」

おそらく気絶させられたのでしよう。崩れ落ちた灯花の体を床に寝かせると、地面に這ったまま動けない私に向かってきます。

うつ伏せで顔は見えません。しかし小さく…耳を澄ませないと聞こえない程でしたが、詩織さんから掠れるような笑い声が聞こえます。

私の気持ちを例えるのなら、蛇に睨まれた蛙でした。知っていた存在が未知に変わった時、そこに恐怖を感じるのは至って正常だと思います。

「……君もここで起きた事は忘れてよ。」

目の前に立ち止まった詩織さんが屈んで、伏せていた私はようやくやくその顔を見る事が出来ました。

目を細めてニツコリと笑う顔は、いつか見た詩織さんの優しい笑みとは似て非なるナニカです。

私を見る眼差しだけは依然として変わりない事が一番の恐怖でした。

「あなたは、誰なんですか…？」

率直にただただ直感で生まれた疑問は思わず口から零れ落ちます。

今の彼女が隠されていた本当の弓有詩織なのかもしれない、そういう可能性は何よりも大きかったでしょう。

しかしながら私が信じたのは、この人物は既知の弓有詩織と別人であるという勘でした。

質問を聞いてから笑っていた表情は、一転して目を閉じ何かを考え込む顔になります。

しばらくして薄く目を開けた彼女は自嘲気味に笑いかけてきます。その時だけ弓有詩織と知らない誰かが重なっているように感じました。

「……………私、にも…分かん、ない…かなあ。」

緑から分けられた色がこちらを見るのを最後に、私の意識は暗転します。

「ちよつとみふゆ〜？何であなたまで一緒に寝てるの〜!？」

「…ん、んん？あれ、ここは……。」

灯花に体を揺すられて、私は深い眠りから目を覚まします。どうやらいつのまにか眠ってしまったようです。

何かやっていたような気がしますが…はて、一体何をしていたんでしょうか。唸つても唸つてもその内容は詳しく思い出せません。

「今日は商人さんの勧誘がある日でしょ？まさか呼び出した方が遅刻するなんて……。」

「あ、いえ確か勧誘は失敗して終わった筈ですよ？何言つても無駄だったですよね。」

そういえばそうでした。自分から言っておいて先に自分が納得してしまいます。

確か私達は詩織さんをマギウスの翼に勧誘するために、この記憶ミュージアムに呼ん

で交渉をしていました。

結果はコチラ側の惨敗、詩織さんはサツサと帰って行ったのだと思われます。

一回伸びをするために立ち上がると、懐から一枚の紙の切れ端が落ちてきました。当然ですが私にはこうした紙を持つていた記憶などありません。

拾った紙には詩織さんからのメッセージが書かれています。

二人とも疲れていたようだったから家に帰ってしっかりとした休養を取ってほしい。そんな感じの内容がそこにありました。

灯花の方にも書き置きがあったようで、僭越ながら中身を見させてもらったら、そこにはただ簡素に『交渉決裂』の文字が書かれています。

私に対しては友人としてのメッセージ、灯花に対しては商人としてのメッセージなのかもしれません。メモを読んだ灯花は更にムスツとした顔になってしまいました。詩織さんの気遣いには悪いですが、これは帰ってから負担が続きそうです。

けれど、一つ心残りがありました。
書き残したメモの優しさを感じて、少し背中に冷や汗が伝ったのは気のせいだったの
でしょうか？

Part 26 再走うわさファイル

噂の神社にお邪魔するRTAはーじまーるよー

前回のあらすじ。

マジウスの翼に勧誘された詩織ちゃん、持ち前の暴走状態で難なく断る事に成功する。しかも有益な情報は得たまま証拠隠滅済み。勝ったなガハハ！

でもチャート上1番の癒しポイントで勧誘イベント起きるのはちよつと…といった感じです。

本来なら今後の対マジウス抗争に向けて準備していくはずだったんですけどねえ。まあ情報が手に入ったのでいいでしょう。

それで今回は第3章『神浜うわさファイル』に干渉していきます。

タイトルはやちよさんが持っている神浜市に蔓延る噂をまとめたアイテムです。プレイヤーのメニュー画面にも同名の項目がありますね。

これは噂を聞いた時に情報が自動的に追記される便利なシステムです。中断しても見直す事が出来るので安心！

大抵は人に聞き込んだり、SNS上で発見したりすると、項目に新しく名称と詳細が記入されます。聞いただけのやつとかは未確認と出ます。

しかし、今回はものすごいですよ！

見てくださいよ！この項目件数の多さ！余裕の表情ですね、馬力が違いますよ。

ただまあ詳細を確認していないモノが大半なので、普通の噂なのか目的のウワサなのかは判明していません。

それでもやちよさんのファイルに引けを取らない程に集まっています。

この沢山の情報こそが情報提供者ルートの特徴です。

使い魔の義手くんや『使役』に掛かった動物達を通して構築された神浜カラスネットワーク。神浜市の隅から隅まで行き渡る地獄耳ですよ。

これらの情報を上手くみかづき荘に提供しながら、第1部を攻略していくのがメインのチャートです。

でも基本的にストーリー通りの噂を教えないと、別のサブクエが発生してロスが生まれてしまいます。

なので、このチャートで走りたい人はちゃんと渡す情報を確認してから渡してください（1敗）

さて今回出てくる口寄せ神社の噂ですが、SNS上で話題になっているのですが、情報は発見できません。調査のきっかけみたいなものですね。

コイツは夜に水名神社へ行くことで発生します。時間帯がキーワードで、10倍ポイントデーとかにならないと主人公ズが気づいてくれません。

そのため時間帯に関するヒントを出さないと、調査に時間をかけてしまい更なるロスが重なります。

「この最強魔法少女、由比鶴乃にお任せだよー！」

というわけでコチラ、万々歳の看板娘の鶴乃ちゃんでございます。

普通のRTAであればこっちからヒントを伝えるだけで、彼女が時間帯と噂を結びつけてくれるので、（主人公ズと一緒に行動する必要は）ないです。

鶴乃ちゃん色々ハイスペックなんですけどね：固有魔法も『幸運』とかいうRTA走者が欲しそうなモノですし。

これから走ろうと思ってる人は、固有魔法被りで『幸運』チャート作ってみてもいいですね。乱数調整出来るだけかなり楽になると思います。

ただ彼女、持ち前の運が悪すぎて不遇な目に遭うことが大半です。願いとかみかづき荘とか…不幸が積み重なってるんだよなあ……。

「ところで詩織…もう夜だけど、ホントに入ってもいいの？」

大丈夫ですよ！さあ入ってどうぞ。

詩織ちゃんと鶴乃ちゃんは現在、夜の水名神社にいます。絶賛不法侵入中ってわけです。

理由は言わずもがな、口寄せ神社の噂を確かめに来ました。パーティーメンバーは2人だけです。

残念なことと一緒に行動できる魔法少女が彼女しかいなくてですね…他の人達はみんな何かしらの用事だったり都合が悪いらしいです。

だからといって帆奈ちゃんはフラグを満たしていないので使えません。そして一人で行くのも何かあつたら困ります。

そのため誰かを呼んだら鶴乃ちゃんが来ました。先に万々歳で頭撫でたりハグしたりしたので大丈夫です、バツチエ甘やかしてますよ。

「……これに会いたい人の名前を書くのかな。」

ウワサの手下によって絵馬が運ばれてきました。これに書き込んでお参りするとウワサの結界内に入ることができません。

でも万が一で二人とも出られなかった場合に備えて、噂に関して分かったことをメモして義手くん2号に送ってきてもらいます。

やちよさん宛てもいいですが、フラグの都合上めんどくさくなる事があるので、詩織ちゃんの自室に置いておきましょう。

さて肝心の詩織ちゃんの会いたい人ですが、これは選択肢と自由入力の一つが存在します。

今回は選択肢の中から選んでいこうと思ったのですが……

・(文字化け)

・(文字化け)

・有鷺詩織

…何だこの選択肢!? まともに名前が表示されているのが『有鷺詩織』しか無いじゃないか!?

っていうか唯一ちゃんと表示されてる『有鷺詩織』も大概おかしいですよ？

前回は過去の名前なのかと思いましたが、もし自分だったらここに表示されるって詩織ちゃんの精神ヤバいのでは……？

でもまあ名前が同じだけの別人の可能性もありますね。もしかしたら本当に昔の自分が出てくるのかもしれませんが。

実際このウワサは記憶の中を参照して出してくるので、本物ではなくガッツリ偽物です。

まあ仕方ないです、今回は『有鷺詩織』を選択して書き込みます。

鶴乃ちゃんの方はーっと、おお『安名メル』ですね。そういえば本当に行方不明になったままでしたよ彼女…今まで音沙汰一つないってことは既に故人になってそうですが。

とりあえずお参りにイクゾー！ デツデツデデデデ！ (カーン) デデデデ！

へえ〜ここがウワサの結界内ですか。

それでは早速名前を書き込んだ『有鷺詩織』ちゃんを探しましょう。

「……………ねえ。」

まあ探さなくてもすぐに見つかるとは思いますがね。

この子が有鷲ちゃんですか…まだ幼い子供、だいたい小学生くらいですかね？ボサつとした黒髪に青目です。

ん？毛先の色と目の色が今と違いますけど、片腕が無いというのは共通しています。同一人物疑惑が高まってきました。

「本当の事に気づきながらまだ目を逸らすの？」

何？経歴ガバからは逃れられないことですか？それはそうなんですけども、対する詩織ちゃんがビックリするほど無表情ですね……。

いや普段から操作しているのは走者ですが、詩織ちゃんって性格『寡黙』であまり喋らない代わりに表情が変わるんですよ。割と微々たる差ではありますけど。

だからこそそんな詩織ちゃんが完全な無表情になるって相当ヤバイ経歴ガバがあるのでは???

「今やってる事が罪滅ぼしになるとでも思ったのかな？私は知ってるよ、結局誰よりも許せないのは自分自身でしょ。」

ウワサによって記憶からの刺客が襲ってきてます！経歴を！経歴を確認していないから全然話が分からねえ！

その有鷲ちゃんさあ…もう少し走者にも理解できるように話をしてくれませんか？……多分しないでしょうねクオレハ……………。

「無邪気なまま力を振るって、願いによつてあつたかもしれない人生を奪って、昔から君は欲張りさんだね。」

これ経歴知つてたらアレかもしれないけど、話を聞く限り詩織ちゃんってかなりの悪だったのでは？

真面目に考察してみますが、まず『頑固』『寡黙』『博愛』が今の詩織ちゃんの性格です。

実は時々なにか大きな事があつたりした場合、キャラの性格が変化する事がシステムの仕事で存在します。今までの経歴の中でどっかが起点となつて、今の性格に変わったつていう可能性も考えられるんですよ。

もしかしなくても変わる以前の過去ガバが詩織ちゃんに刺さる？それってえ…不味くないっすか？

「だけど君は悪くない。だつて全て過去のことなんだから！ほらそんなに背負わないでいいよ…ここですつと休んでいこうよ。」

嫌です（断言）

なんかウワサが作り出した偽物に色々言われてましたが、実はソウルジェムは別に言

うほど濁っていません。うせやる？

でも濁ってはいないだけでブチギレてはいると思います。

「……断るんだ。まあ、そうだよね……いつまで経つても……っ！」

ちよちよちよ詩織ちゃん?!いくらムービー中じゃないからといって、いきなり短槍で突き刺すとか非常識すぎませんか!?

そのくらいブチギレていたんですか……?こわいなあ……とづまりしところ。これが本走のプレイヤーカーラってマ?

「ふふっ、話してくれないのは相変わらずだ……なあ……。」

それで刺された有鷲ちゃんですけど、まあ散々言ってきた通り偽物です。

断つても本編時のみふゆさんと違って魔法少女になるとかはしなかったですね。と
いうことは有鷲ちゃん、別に魔法少女ではないようです。

「あ!詩織!大丈夫だった!」

鶴乃ちゃんの方も終わったみたいですね。もう少しかかるのかなと思いましたが、なんか早い……早くない?

ふむふむ何?先に来てたらしい魔法少女の子が助けてくれた?偽物のメルちゃんは

その銀髪の子が倒したって？

いや誰ですかその魔法少女……今あたりを見渡してもそんな人どこにもいませんよ??せいぜい居るのは詩織ちゃんの義手くんくらいですがね。

しかし謎の魔法少女の話をする前に、早速お出ましのようです。

アレが件の第3章ボス『口寄せ神社の噂』もと『マチビト馬のウワサ』ですね。(マチビトドラゴンでは) ないです。

コイツは『願い』に関するウワサなので、願いに対する耐性を持っています。つまり魔法少女の攻撃の大半を無力化する反則級の防御です。

倒すためには呪いをかけられるような魔法を使うか、ドツペルを出してそれでやっつけるかの二択があるでしょう。

今回は最初から倒す目的じゃないので撤退だア！義手くん編隊、使役槍！時間稼ぎをよろしく頼むぜ！行くぞ鶴乃ちゃん！

「待ってさっきの子が！」

何イ!?!さっきの子って謎の魔法少女ですか!?!後ろの方に居るなら言ってお下さい!!!

……ってあれ？後ろは詩織ちゃんの置いていった時間稼ぎとマチビト馬のウワサし

かいませんよ……？幻覚かなにか？

んー気にしなくていいでしょう。出てこない方が悪いんだよオ！というか使い魔ズがもたなくなるからさっさと脱出します！

なんとかなりましたね（経歴ガバ未遂）

こんなウワサのどこになんかいられるか！走者は家に帰るぞ！義手くん2号！やちよさんにウワサの情報を伝えといて下さい！義手くん3号は水名神社で監視しといて！

ついでに誰か死にそうになってたりしてたら助けてあげて下さい！お前らが1番の頼りだぞ！

本格的にガバ対策をした方が良いと思いつつ、今回はここまでにしようと思います。
ご視聴ありがとうございます。

▶
?

今の神戸市にやって来るのは今日で4回目。

最初は宝崎から魔女を追ってきて、次は小さいキュウベえと会うため、そして3回目

からは消えてしまった妹……ういを探しに来た。

改めて思い返してみれば、神浜に来る度に何かしらの出来事に巻き込まれてる気がする。

同じ魔法少女のスズネさんに命を狙われたり、西側のベテランであるやちよさんと勝負をしたり、ももこさんと一緒にかえでちゃんとレナちゃんの仲直りを手伝ったり。

でもその過程で色々な事も知ることができた。神浜の魔法少女事情、魔女じゃない謎の怪物、ういと同室だった灯花ちゃんとねむちやんが既に退院していること。

結果として色んな人に頼りっぱなしだったけど、なんとか次の目標が定まってきたと思う。

灯花ちゃんとねむちやんに会つてういの事を聞こう。もしかしたら妹が消えてしまったことについて何か知ってるのかも。

そしてちよつとした勘ではあるけれども、噂に關係する謎の怪物が手がかかりになりそうなんだ。

それで噂の調査をやるという事をももこさんに伝えたら、水名区にある神社がどうと
かつて話を聞いた事があるみたい。

だから今日はこうして水名区に向かおうとしたんだけど……。

「……、何処だろう……？」

道行く人に噂を聞き込みしながら歩いてきた筈なのに、いつのまにか辿り着いたのは暗い路地裏。

人ひとり居ない薄暗い道には、道に迷った私の足音と、数羽のカラスの鳴き声が響くだけ。

来た道に戻っていけば元の通りに出られると思っても、歩いても歩いてもさつきから同じような道ばかり。

本当に大丈夫かな？と不安になってきた時、突然どこから声をかけられたんだ。

「その君！もしかして何かお困りかな!？」

「えっ!?だ、誰……?」

「フッフッフ！とおーうー!」

目の前に降りてきたというより、降ってきたのは1人の女の子。膝に悪そうな着地の仕方だった気がするけど大丈夫なのかな。

頭にある2つの大きな癪つ毛を揺らしながら、してやったりという顔で立ち上がった、自信に満ちた緑色の目で私を見る。

「えつと……あなたは?」

「よくぞ聞いてくれました!」

その一言と同時にずいっと距離が縮まって、思わず後ろに一步下がってしまった。

自分で詰め寄りすぎたことに気づくと、「おっと失礼」と言いつつ距離を取って、コホンと改めて話を始める。

「私の名前は『マヒロ』！困っている子を見つけたら救いの手を差し伸べたい…ただのヒーローだよ！」

「どこに行っても同じような道にしか出なくて……。」

「うんうん分かるよ、路地とか廃墟とかホント多くて困るんだよねー！」

マヒロちゃんは普段から配達業のアルバイトをしているらしく、そのおかげで神浜市の土地について大分詳しいみたい。

年齢…は分からない。見た感じでは私よりも年下っぽいから中学1年生あたり？

道端に落ちてる石ころを蹴ったり、身振り手振りで言葉を表現したり、そんな大きい動作をするたびに長い髪が一緒に揺れる。

インナーカラーっていうのかな、後ろの髪の内側が黒く染まつてる。いや、元々黒髪

でそこから外の銀髪を染めたのかも。

とにかく普通に生活してたらなかなか見かけないから、詩織さんと同じくらい不思議な髪色だなあつて思った。

「つと！着いた着いた、ここはいつも通つてる店なんだけどね。」

「マヒロちゃんは中華料理が好きなの？」

「ん？普通くらいかな。でももうすぐお昼だし、いろはもお腹空くんじやないかなつて！食べていってから行った方がいいと思うよ！」

マヒロちゃんに連れてこられた先は中華料理店だった。促されて『万々歳』という名前の店に入ると、店内は閑散としているようだった。

しばらく辺りを漂っていた静けさをかき消して、慌てたように聞こえてくる足音と一緒に、エプロンをつけた女の子が奥から飛び出してくる。

「いらつしやい！中華飯店『万々歳』にようこそ！一名様でござ来店？」

「いえ、もう一人そこに……つてあれ？」

店員さんの言葉に付け加えようとして後ろを振り向いたら、気がつかない間にマヒロちゃんが忽然と姿を消していた。

外に顔を出して辺りを見渡しても、結局マヒロちゃんの姿を見つけないことは出来なかった。

さつきまでいた場所は足元にカラスの羽が落ちていただけで、一体マヒロちゃんはどこに行ってしまったんだろう？

そう考えてから、ふとポケットに切り取られたメモ用紙が入っているのに気がつく。ポケットの中にメモ用紙を入れた記憶なんてなかったから不審に思っていたけれど、入っていたそれはマヒロちゃんからのメッセージだった。

『ごめんね！急用が入って道案内できなくなっちゃったや。一応地図も書いたけど、多分人に聞いた方が早いかも！』

丁寧に折りたたまれた紙には手書きの文字と簡単な地図がある。

正直に言ってまた迷わないか心配ではあるけど、ここまで親切に助けてくれたマヒロちゃんに感謝するしかない。

とりあえず言われた通り、お昼を食べることにしようかな。

▶?

自分では認めたくないけれど、万々歳はあまり大繁盛しているわけじゃない。もちろん近所に住む常連の人とかは度々来てくれる。

でもやっぱり昔より客足は減っているんだろなって思う。まあ仕方のないことではあるのだろう。前からずっと言われていたように味が50点というのが、料理店としての致命的な欠点なのかもしれない。

どうすれば味を改善できるかな？ 詩織はいつも食べてくれるけど、具体的な感想や点数は言ってくれないんだよね。

どこかに弟子入りして料理の腕を磨く…とか？ でもどこかかってどこなんだろう、詩織に聞いてみても分かる事じゃない気がする。

そういった事をあれこれ考えていたら、万々歳の入り口の扉が開く音が耳に届く。

店の奥の方に居たからあまり見れなかったけど、チラツと見えるアレは紛れもなく人影だ。つまりはお客さん。

勢いよく迎えにいこうとして驚かせてしまった。お客さんは一名様で、いいのかな？

やってきたお客さん：いろはちゃんはどうかやら妹を探しに神浜を訪れて、その途中に手がかりとして噂について調べてるんだとか。

今調べているのが水名区で神社がどうこうって話をしてたから、多分それは口寄せ神社の噂じゃないかなと教えたんだ。

ちようどいいタイミングだったのかも、ついこの間の出来事を思い返す。

口寄せ神社の噂。

会いたい人に会えるって話題になつているソレを私と詩織は調査していた。

私は師匠の助けになりたかつたから調べてたけど、一緒にいた詩織は一体何のために調べてたんだろう。

結局のところ答えは聞けてない。でも多分、怪しいからとか一般人を危ない目に遭わせたくないからとか言われそう。

実際に私たちは危ない目に遭つた。

あの神社で会ったメルは偽物で、他の魔法少女の子が強引に話に割り込んで、流れに押されていた私を無理矢理助けてくれた。

その女の子は今でも姿一つ見ていない。たしかに会ったはずなのに、霞のごとくどこかへ消え去ってしまった。

名前も聞けずじまいだったから、もし今度会うことができたら何かお礼をしたいな。そして噂と違って結果から帰ろうとした私と詩織に向かって、魔女みたいで魔女じゃない別のものが襲ってきたんだ。

姿はそっくりで似ているのに、禍々しい魔力を持つていなかった。例えるなら…詩織が飼っているカラスに似ている魔力。

……………。

……魔法少女の、魔力？

「どうかしましたか？」

「あ、いや何でもないよ！それでね、その噂を調べるなら気をつけた方がいいと思う。」
得体の知れない化け物が出るから…そう言って引いてくれたらいいなって思ってたんだけど、むしろ噂に関係する化け物の方を聞いてきた。

いろはちゃんも市外から来た魔法少女だったようで、以前来たときも同じような化け物に遭遇したみたい。

この噂に関する化け物達が気になって、妹探しの鍵になるかもしれないと調べているそう。

今にでも行動しそうで心配だったから、いろはちゃんと一緒に噂の元に向かうことにしたんだ。

でもまさか詩織がこの事を見越して、師匠を呼んでたなんて思わなかった。肝心の本人は休んでていないのに。

夜を待つて神社の中に入ってから、例の化け物が出てくるまでそう時間は掛からなかった。

やちよといろはちゃんが事前に知っていたから対処が早かったというのと、一度噂に反した私が戻ってきたからだと思う。

あの時は詩織に止められて対峙しなかったけど、今度こそはコレを倒して被害を食い止めるようにするんだ。

「っ!?!効いてない……!」

そこでやっとあの時何で詩織が逃げようとしたのかが分かった。私の炎もやちよ師

匠の槍もいろはちゃんの矢も、全部の攻撃が通っていない様子だった。

似た出来事に遭った師匠の話によれば、あのウワサという化け物は噂に関する耐性や弱点を持っているらしい。

口寄せ神社の噂は会いたい人に会わせてくれる話、ある一定の手順を踏んでからお参りする事によって、私達はこの噂の結界の中に入る事が出来た。

会いたい人の名前を絵馬に書く事、神社にお参りをする事。

神さまに頼む願ひ事。

もし対峙しているウワサが『願ひ』に関する耐性を持っているのだとしたら、私達の攻撃が効かないのにも納得がいく。

だって魔法少女は『願ひ』によって力を得たのだから。その魔法少女の攻撃は『願ひ』と言つてもいい。

じゃあ魔法少女の反対になるモノは何かと言つたら、やっぱり魔女しか思い浮かばない。

絶望を振りまくような『呪い』の力がウワサの弱点？

でもそんなのどうやって確保すればいいんだろう。私達はそういう力を持ってたりしないから、魔女を連れてきてウワサにぶつけるとか？

いや…それをしたらこの結界内にいる取り込まれた人達が危なくなる危険性がある。

そもそも安全に連れてこれる保証もない。

魔法を利用するなんて発想は普通出てこないと思う。こんな時に帆奈みたいな固有魔法が必要になるのかなあ。

「考えてる場合じゃ……ない！」

今の私達に打つ手はないみたい。

もう既にいろはちゃんが倒れてしまったし、私も大技を使ってしまった。

ウワサに攻撃は通らないけど、せめて師匠といういろはちゃんが結界を出るまでの時間稼ぎをしないと！

だけど、その必要は無かった。

いろはちゃんや魔法女みたいなナニカを使ってウワサを倒したんだ。

しかもさつきまでのソウルジェムの穢れも無くなってる。今までそういう攻撃は聞いたことも見たこともない。

「すごいよいろはちゃん！新しい技を生み出したんだね！」

「え……え？　そうなのかな……。」

グリーンフシードも要らずに浄化するとは画期的な新技だと思う。アレが広まれば詩織もあんなに働かなくて済むのかな。

とりあえず一件落着!

いろはちゃんの妹さんが見つからなかったのは残念だったけど、ウワサをやっつけたからそのうち被害も無くなるだろう。

そして、終わったと一息ついて帰ろうとした私達を引き止める声があった。

「行かせないわ。」

声のした方に目を向ければ、そこには黄色い魔法少女がいた。

彼女は見滝原市から来た巴マミという魔法少女らしい。最近自分の市の魔女が少なくなっているのを不思議に思つて神浜に來たみたい。最近自分の市の魔女が少な

それでさっきのいろはちゃんの技を見て、いろはちゃんが魔法少女に紛れた魔女じゃないかと疑つてる。

剣呑な空気が流れる。多分、彼女と戦わなければならないだろう。

相手は3人相手に余裕そうな表情。対する私達は2人が既にガス切れ、ともに戦闘できるのはいろはちゃんしかない。

いろはちゃんもそれを理解していて自分から名乗り出たけれど、正直に言つてさっき

のあの技も何かしら副作用があるかもしれない。

「後悔しても遅いわよ！」

そう言つて巴マミがマスケツト銃を撃とうとした時の事だった。

「ッ!？」

「けほっけほっ、何が起こつたの？」

「……また新手……？」

突然、互いの間に何かが撃ち込まれた音が鳴り響き、間髪入れずに衝撃によつて砂埃が私達の周りを覆う。

それぞれが武器を振るつてそれを払うと、そこに見えたのは一本の槍。いかつい見た目をしたソレは見るからにやちよのモノじゃない。

「その君！黄色い魔法少女よ！今すぐに引くがいい！」

「あー！あの時の！」

「えっ！マヒロちゃん!？」

続けて降つてきたのは夜闇に輝く銀髪の魔法少女。見たことある……あの時神社で助けてくれた子だ！

狩衣みたいな服装の袖をたなびかせ、先ほどの槍を引き抜くと、バマミに向かってそれを構える。

「あなたも見てたでしょう。いきなりやって来て魔女を庇うなんて…正気かしら?」

「正気かどうか判断は任せるけど、正しい事をしているっていう自信ならあるよ。」

「……………ここは引かせてもらおうわ。」

いろはちゃんの名前を呼んだマヒロを見て、バマミは分が悪いと判断したのか私達に忠告して、渋々とその場を去っていく。

残ったのは持っていた武器を弓の形に変形させて、バマミの去った方向をジッと見つめる彼女と私達。なんとか伝えた感謝は届いたのだろう、私達に小さくピースしたマヒロは電柱伝いに飛んで帰ろうとする。

「待ちなさい!」

それを止めたのはやちよ師匠だった。

てつきり何も用事はないかと思っていたけれど、よくよく考えてみれば師匠にとっては初対面なのかもしれない。

だから事情を聞くために引き止めたのだと思っていた。

「一つ質問するわ…あなた、昔身体が弱かったりしないかしら？」

「いや〜？実は生まれてこのかた、病院の世話になった事無いんだよね！」

「……本当に？」

「ほんとほんと！だからきつと君が想像しているのとは人違いなんじゃない？」

それだけ言い残すとマヒロはどこかへと飛んで去っていく。

その後、ちようど遅れてやってきたももこにウワサはやつつけた事を教えて、私達はそれぞれ解散することになった。

ただその時チラツと見えた師匠の表情は、普段見慣れぬ珍しいものだったのを覚えて
いる。

Part 27 biimの守り人

「鴉弓真広さんについてですか？」

「はい、何か知っていたら教えてくださるとありがたいです。」

やちよさんに『鴉弓真広』と『有鷲』という人物の話聞いてから、私はその二人について更に多くの人に聞き込みをしました。

結果はあまりよろしくなく…もう既に何年も前の事件でしたから、記憶に残っている人がほとんどいない有様です。

しかもネット上で検索をしてみても一切画像が出てきません。出場大会の記録映像すらも現在では残っていないようでした。

「鴉弓真広…：鴉弓…：つかぬ事をお聞きしますが、もしかして弓の名家と呼ばれていた鴉弓家の事でしょうか？」

「そうです。言い忘れていましたね、すみません。鴉弓家を知っているんですか？」
「昔、話を聞いた事があります。あまり良い話とは言えませんが……。」

そうしてついに知っている人に出会うことができました。

それが彼女……竜城明日香さんです。実はなかなか予定が合わず、一部の水名女学園の方に話を聞いていなかったのです。

明日香さんの話では、鴉弓家は武術の名家の中で特に有名だった所だったらしいです。

ただし……悪い意味で。

元とはいえ弓の名手を数々生み出したという鴉弓家は、現代になるに連れてドンドン没落していききました。

やがて残ったのは初代が成し遂げた偉業によって賜った、かつての名誉の証である『鴉弓』という名だけ。

弓の腕にも個人の才能にも恵まれずに、普通の凡人と化してしまった子孫達は、なんとか家を再興させようと奮闘していました。

それだけならば未だ夢のあるような良い話で済んだのですが……どうも想定以上にその人達は『鴉弓』に執着していたようです。

それこそ「栄光狂い」だのなんだのと噂される程に、特に武術の名家からは異様に見えるような。

神浜という土地の歪んだ環境と歴史が、彼らを狂わせた原因の一端でもあるのでしよう。

そんな中、鴉弓家にとある出来事が起こります。

『鴉弓真伝』さんが生まれたんです。

才能を持つ者を望んでいた栄光狂いの鴉弓家にとって、彼女はまさしく救世主のような存在でした。

幼いながらにして多くの才能を持つ彼女は、体が弱い事のみが欠点ではありましたが、肝心の弓の腕に関しては天才的です。

まなかも図書館で調べていた時に、チラッと読んだ新聞に載っていた事なんですけど、初代の生まれ変わりだとか先祖返りとか……とにかくそう言った言葉で持て囃されています。

さて世間からは期待の目で見られていた彼女ですが……。

果たして栄光狂いとまで言われた鴉弓家が、そうそう彼女のような天才を自由にさせておくでしょうか？

まあ、話を聞いていくうちに薄々勘付いてはいましたけどね。正直言つて嫌な予感しかしません。

答えは当然のごとく「NO」でした。

詳しくは当家の人間にしか分からない事で、今ではもう詳細を知る人は一人も残っていません。

しかしなんとなく想像はつきます。

知られざる彼らの所業は名家の間でも噂されていたそうで、明日香さんもその一環で耳にしたとのこと。

しかしそれから数年経つたある日、鴉弓家はパタツと行いの数々を止めました。彼らに何があつたのかは誰にも分かりません。

ただ分かっているのは『過去の栄光に目が眩んだ狂人達』が『極々普通の善良な一般

市民達』へと突然変わった事だけです。

聞いているだけでも凶悪に感じる人達がそうそうに変わるものなのでしょうか？
きっと変わらないでしょうね。ええ、私達のような魔法少女の願いでもなければ、不可能に限りなく近いはずです。

では誰が契約したのでしょうか。そりゃあ、答えは決まっていますよ。

今、話題となっている『鴉弓真広』さん。

状況からして間違いなく彼女だとしか思えませんでした。

じゃああの行方不明事件が魔女の仕業だとすると、真広さんは魔女に負けてしまったのだと思います。

つまるところ、真広さんを含めた失踪者は全員亡くなっているということ。

そして遺体は残らずに魔女の結界の中のまま。例え誰かに倒されていたとしても、結界とともに消えてしまったのか、時既に遅く魔女の餌となったのか。

どちらにせよ、報われない最期だったのには変わりありません。現に失踪者として、死んだ事すらも認知されていないのですから。

それはとても…悲しい事だと、まなかはそう思いました。

▶?

本格的にストーリーが危なくなってくるRTAはーじまーるよー

前回は口寄せ神社で経歴ガバの一端を中途半端に聞かされました。ぶつちやけそれだけでほとんど何もしてなくなあい？

それで今回はその続きからなのですが、実は今までの第1部はチュートリアルです。というのも今回やっていく第4章『ウワサの守り人』から突然ストーリーの危険度が増すからなんです。

具体的に言うのであれば、難易度ハードによるランダムな確率が走者のチャートに牙を向けてきます。未恐ろしい世の中ダア……。

まずはじめに第4章の開始条件が『いろはちゃんがウワサの水を飲むこと』です。

現在の彼女がまずフクロウ印の給水屋に会うタイミングがランダムです。何故か桶屋理論で確定させる事は出来ませぬ。

このRTAでも桶屋理論を使って第4章を開始させます。だって1番この方法が確実なんですもん。

それで桶屋理論の条件ですが、先駆者兄貴姉貴も述べている通り、深月フェリシアと佐倉杏子を一回会わせるだけで済みます。

来訪タイミングが少し面倒くさいだけで、基本的にこの桶屋理論を採用しているチャートは多いと思います(当社比)

ただ詩織ちゃんやんは神浜カラスネットワークによって来たかどうかを感知できるので、感知した時にフェリシアを雇って連れ回して会うだけで達成できます。

「少なくとも悪いヤツじゃなさそうさ。アタシは佐倉杏子。さつきのお返しだよ、食うかい？」

「ロッキー！食っていいの!?よっしゃー！オレは深月フェリシア、よろしくな！」
出来ました。

ついでに信頼度を稼ぎたかったので、2人にご飯を奢りました。この2人は特に食べ物による補正が大きいんですね。

というわけで交友関係を得て信頼度稼ぎして、無事に桶屋理論を達成しました。

つまりいろはちゃんが一週間以内に幸運水を飲みます。

それじゃあ倍速モードになりますよ。

おっと…倍速が戻りましたね。

今現在は万々歳で午前バイト中、帆奈ちゃんと同じシフトです。まあ監視つてある以上当然のことなんですけど。

それで止まった原因ですが、会計終わりの帰り際にお客様からなんか手渡されました。これは…封筒じゃな？

「後で開けて読んでください。私達からの日頃のお礼です。」

待つてくさい？ 渡された時とかにチラッと見えましたけど、さっきの団体様全員、魔法少女の指輪してましたね。

日頃の感謝つてことは詩織ちゃんの顧客ですかね。モブ魔法少女達の信頼度も稼いどくものだなあ……。

だがしかし！ ヒヤア！ 我慢できねえ！ 開封するゼエ！

『参京区にて幸運呼ぶ水の噂アリ。フクロウ印の給水屋に注意。参京院地下に本体。不幸を操る。』

『担当リーダー格、マジウスの翼白羽根2名。天音月夜と天音月咲。それぞれ水名女学園と工匠学舎に在籍。武器は笛。』

『マジウスの翼黒羽根である部下は十数名。寄せ集めの集団のため戦力も連携も足りていない。』

ええ……（ドン引き）

何？ これは……情報セキュリティガバガバじゃねえーかよお前んちイ！ 一般モブ魔法少女にここまで情報抜かれてさ、恥ずかしくないの？

いやてか本当に抜かれすぎですよ？ピーヒョロ姉妹はもうちよつと幹部の役目を果たして。どうぞ。

そして何でこんなマジウスルートでしか得られないような情報が詩織ちゃんのところに回ってきたんすかねえ…？

モブからの信頼度がめちやくちや高いとか？ハハハ！いや…まさかね？

「……何見てんの？」

いや、詩織ちゃんモテモテだなんて思っただけです。正直なところ信頼度は稼いでもいいですけど、好感度高すぎるのは困りものなんですよね。

ん、そのまま流すとめんどくさい事になりそうなので、省くやつは省いて都合よく要約して主人公ズに横流ししましょう。

といってもストーリー的に教えられる情報は噂の話だけです。

場所とかマジウスの翼とかは、いろはちゃんが巻き込まれてからじゃないとフラグが折れます。くれぐれも注意してください（1敗）

そして書いたらそのままみかづき荘にシユートします。義手くん2号！これ届けてきて！

あくバイトが終わったんじゃあ〜。

さて今日は何をしますかね、休日なんですよね…とりあえずいろはちゃんが水飲んだかどうかを確認でもしましょうか。

って、おや？あそこにいるのは御園かりん！御園かりんじやないか！なんか帆奈ちゃんがゲとでも言いたそうな顔してますが、走者は構わず話しかけます。

「あつ！詩織さんに帆奈ちゃん、こんにちはなの！」

「……アンタ何持つてんの？チョコ？」

「さっきなぎたんに会った時に貰ったの！一人で食べるには多いと思うし、せつかくだから3人で食べるの！」

「まあ甘いのだったらコイツが食うか…アタシも1つ貰つとこ。」

まさかのいつもと逆パターンで、詩織ちゃんがチョコを貰う事になりました。

かりんちゃんもまだ食べていなかったそうなので、帆奈ちゃんとも一緒に食べようと思えます。

十七夜さんはこのチョコのこと秘密兵器って言ってたらしいですよ？なんかどっかで聞いたことあるな？

では早速食べてみましょう。詩織ちゃんが好む美味しさだったら、直接聞きに行つて

買うことを検討します。

何これニツツツツガ!!!!

え…? 待って♡ 待って!?! とんでもない程苦いんですが!?! ほら詩織ちゃんの機嫌パラメータがどんどん下に下がって……………。

……うん? 機嫌が下がって?

ウオワアアアアアアアアアアアアアアアア! 詩織ちゃんの機嫌が急降下してますよ!?

さてはオメー、嫌いor苦手な食べ物に『苦いもの』が入ってるな? ああああ! 眉間にシワが寄ってる寄ってる! すごい硬直してますよ!

「にっが! 何これホントにチヨコ?」

「に、苦いの…ちよつとなぎたんに聞いてみるの……。」

プレイヤーの好きな食べ物を食べる事は結構ありますが、苦手な食べ物を食べる事はあんまり無いんですね。

食べるとキャラの機嫌が下がる上に、好感度や信頼度も若干下がります。後者の方はプレイヤーキャラなので関係ありません。

機嫌が下がるとどうなるかは見て分かる通り、ちよつとしたデバフが付くようになります。ソウルジェムが少し濁りやすくなったりとかロクでもないやつです。

今回はめちやくちや機嫌が悪い以外に変化は見当たらないから、多分良い乱数を引いたのかもしれない。

「あ、返信来たの……カカオが90%入ってるチョコレートらしいの、詩織さんが好きなものって書いてあるの。」

「はあ？こんなのが？っていうかコイツの顔見る限り、好物とは到底思えないんだけど……にが、あく苦い。」

「貰った時になぎたんは平然と食べてたの……まだ口の中に苦いのが残ってるの……。」

十七夜さんは一度詩織ちゃんの好物を見直した方がいいと思います。

これは甘いもので口直しするしかない……ん？あれ？何ですかこの紙？唐突に空から降ってきましたね。

……『20』？

「さつきから同じような紙が降ってくるの。だんだん数字が減っていつてなんだか不気味なの……。」

いやてかコレもしかなくても今回の標的のヤツでは？

ちよつとその御園かりんさん？今日怪しいものや変わった事ありませんでした？

特にない？そう……え？でも給水屋つてところがあつたから、そこで無料の水を飲んでたつて？

ばっかやるうー！ソイツが4章のウワサの実行犯だ！フクロウ印の給水屋とはソイツの事だア！

かりんちゃんが既に水を飲んでしまったということは、いろはちゃんが水を飲んだかどうかに関わらず、少なくとも24時間以内にはウワサを倒さなければならなくなりました。

前回の口寄せ神社だったら対処が遅れても大丈夫だったんですが、今回のウワサは幸運が切れると立て続けに不幸が訪れて、最悪の場合ネームド魔法少女がロストします。

ただでさえネームドキャラが欠けるのは防ぎたいところさん!?なのに、よりにもよつて御園かりんが巻き込まれるとかウツソだろお前！

非常に不味いのでいろはちゃんに急遽電話します。彼女に連絡がいったらやちよさんと鶴乃ちゃんはほぼ確定で来ます。電話が終わつたらフェリシアを雇う事にしましょう。

『詩織さん！ちようど良かったです！その…マギウスの翼について何か知りませんか！?』

タイミングよくない？

「どうやら既に水を飲んでいたみたいですねクオレハ……昨日飲んでいたようです。こういう時に何かあつたら連絡して欲しいですよ、ええ。」

「いろはちゃん達はもうマギウスの翼に出会っているので、モブからのメモを元にウワサの本体の場所に直行しましょう。」

「今回のパーティーメンバーをご紹介します。弓有詩織、御園かりん、環いろは、由比鶴乃、七海やちよ、深月フェリシア！以上の魔法少女でお送りします。」

「帆奈ちゃんはまだ借りてるキューブの中に押し込みました。いくらモブ相手とはいえ変身防止を徹底しないと怒られます。」

「ちなみあとで佐倉杏子が合流します。いろはちゃんが水を飲んだら、彼女は大体マギウスの翼の方に潜入してますからね。」

「ウワサを守れば魔法少女は救済される。」

「救済されるって、被害が出るのになんで……。」

「なにチンタラしてんだ！時間は少ないんだぞ！」

ここでキョーコサンのエントリーだ！

チームみかづき荘（未完成）が黒羽根から話を聞き出そうとするのを、このまま流れに乗って止めます。

ぶつちやけこんだけ魔法少女がいるため、詩織ちゃんは完全に後方支援に徹することが出来ます。というかこれが本来のロールなんで……。

「これ以上先には行かせないよー」

「目的の邪魔はさせないでございませうー」

奥に進むと開けた場所で魔法少女『天音姉妹』戦になります。

今回のプレイでは何故か超強化されてるかりんちゃんを天音姉妹戦に残して、代わりに鶴乃ちゃんを本体叩く組に入れます。

皆さんご存知の通り、今回のウワサは鶴乃ちゃんの固有魔法『幸運』がぶつ刺さる相手なので、この方法がタイムを縮める定石となっております。

詩織ちゃんは先行情報で天音姉妹の武器は笛から出す音だと知っているんでね。作戦を大まかに出して、本体組に義手くん2号と3号を付けます。

相手は奥へと向かう本体叩く組に意識が一瞬向くので、その隙を突いて眼前ギリギリに使役槍を撃ち込みます。

これによって視覚的な情報を遮り、詩織ちゃんだけに視線を集めます。一瞬でも全て

の意識を走者に割いたのが貴様らの敗因だア!

今です!

「邪魔をさせない、はコツチのセリフなのだ!」

「ああ! 私達の笛を返すでございます!」

「そんなのいきなりにも程があるよ!」

工事…完了です……。

いくら中指に紐で結びつけていても、超強化かりんちゃんの固有魔法『窃盗』の前では無力です。普通のノーマルかりんちゃんとは違って魔法の精度が上がってるのがハッキリ分かんだね。

実は天音姉妹は笛が無いとタダの雑魚です。必殺技の『笛花共鳴』も笛が無ければ発動出来ないのです、もう素手で攻撃するしか戦闘手段が無くなります。

ドツペルくんも魔力を消費してソウルジエムを濁らせないと発動できません。フン！ザコガ！

つまり…天音姉妹は完全に無力化されました。

そのため彼女達が動けないように羽交い締めにしておいて、本体叩く組がウワサを倒すのを待っています。

あ、ウワサが倒れましたね。水を飲んだかりんちゃんの前にも『おめでとう』の紙が降ってきたので間違いありません。

ウワサが倒れたあとは現在中間管理職浪人生のみふゆさんが現れますが、まあ別に詩織ちゃんは彼女がマグウスの翼だって事を知ってるので何ともないです。

それどころか記憶操作して情報抜き取ってますからね詩織ちゃんね。

そして他の人には伝えてないし、被害者も覚えてないから訴えられる事は無いです。本当にお前ラスボスみたいな性能してんな。

無事に第4章が終わったので、今回はここまでにします。
ご視聴ありがとうございました。

▶?

『そういえば不思議なお話ですが、鴉弓の屋敷はまだ取り壊されていないそうです。』
『それはまた：どうしてかご存知でしょうか？』

『私も小耳に挟んだ程度でして、理由までは分らないですね。しかし、大まかな場所ならお教えできますよ。』

最後に話した会話を元に、私と阿見先輩は件のお屋敷へと向かうことにしました。

住所自体は新西区にあると表記されていますが、実際には新西区と水名区の間くらいに位置しているようです。

だから鴉弓家は水名の旧家のように、昔からの慣習を重んじる家系だったのかもしれない。

「こんなに人がいないなんて薄気味悪いわね。」

「仕方ないですよ先輩。だって住人は失踪したのにもう5、6年も放置されているんですよ。」

厳かな門に扉で囲まれて中が見えないお屋敷。

先輩のおっしゃった通り、さつきから人一人見かけていません。この辺り一帯が既に1つの廃墟群となっているのでしょうか。

表札が掛けられたままの門をグツと力を入れて押すと、重い音を出しつつ少しずつ中

の様相が見えてきます。

そこそここの広さのお屋敷は今まで放置されていたのにも関わらず、長年の埃が積もった様子は見受けられませんでした。

それどころか石畳の道も内側の庭も綺麗に整えられており、軽く見渡しただけでも雑草なんて見えませんでした。

まるで誰かが手入れしているかのようです。

屋敷の様子を不気味と感じていた時、まなかの横に立っていた阿見先輩が、突然屋敷の一方方向を向きます。

釣られてその方向を見ます……が、そちらに何か気になるものがあつたというわけではなく、先輩の行動にただただ首を傾げるのみでした。

「そこあなた……そこそ隠れていないで、姿を現しなさい！」

阿見先輩が声を張り上げます。

当然こんな廃屋に人がいるわけがないと思っていたまなかは、先輩の奇怪な行動をいつもの事だと流そうとしていました。

しかしながらその思い込みは呆気なく打ち砕かれる事になります。

「……………フツフツフ…よくぞ私に気がついた!」

廊下の曲がり角からゆつたりと歩いてくる姿、腕を組みながらさぞ威厳があるように現れたのは一人の少女。その得意げな顔はまるで、何処かの誰かさんが自分の容姿に自惚れている時の表情を彷彿とさせます。

「いや…誰ですか?」

「私は道行くご老人の荷物を持つたり!喧嘩した子供達を仲裁したり!迷子になってしまった人を案内したりする!真のヒーローだ!」

「随分と庶民派なヒーローが居るもんですね…………。」

そもそもこんなへんぴな所にいる時点で、この自称ヒーローさんは怪しいったらありやしません。まあ私達もどっこいどっこいなのでしようけど。

正直言つて怪しいどころの騒ぎでは無いのですが、このヒーローさんは自分を管理人だと自称していたため、ひとまずお話しを伺ってみる事にしました。

自称ヒーロー兼管理人さんが言うに、自分は行方不明になった鴉弓家の親族で、失踪事件からずっと屋敷の管理をしていたそうです。

一応ちゃんとした遺産相続人ではあるようで、案内された部屋で複雑な内容の証明書を見せてもらいました。まあここまでされてしまつては信じるしかありません。

しかしながら彼女はあまり鴉弓家の方の事情には詳しくありませんでした。あくまでただの親族だったからなのでしょう。

見た目だけで判断するのも悪いことなのですが、この自称ヒーローさんはまなかと同じく中学生くらいに見えます。

思い切って伺ってみると、なんと年齢はまなかの一つ下。つまりは現在13歳の中学一年生らしいそうです。鴉弓家の親族と言えども家はあまり厳しくないため、時々こうして定期的に掃除しに訪れるとのこと。

ここは人が居ない場所だから突如やってきた私達にはたいそう驚き隠れたようで、彼女には悪いことをしてしまったと反省しています。

結局のところ、鴉弓真広さんについての調査はここで壁に当たりました。

親族の方に話を聞いて屋敷の中を見させてもらったのは大きいですが、まなかが予想している結末の可能性が高い以上、もう彼女について知ることはないのだと思います。

そういえば最初から最後まで自称ヒーロー兼管理人さんの名前を聞いてませんでした……。

Part 28 あの日起きたガバの名前を

神浜でうわさを調べていくRTAはーじまーるよー

前回はマジウスの翼がガバって情報ポロポロ回でしたね。モブ魔法少女にすら抜かれてしまう天音姉妹エ……。

あとかりんちゃん物が物凄く強くなりました。これその内かりんちゃん様とお呼びする日が来るな？

「それで電波少女っていうのが中央区で流行ってるらしいんですよ。ほらあの電波塔のこと。」

今回はその続きからです。

いろはちゃんの引越しはもう済んでいると聞いているので、これからは第5章『ひとりぼっちの最果て』の攻略していきます。

ちなみにさつきから喋っているのは遊佐葉月です。

「聞いたのは電波少女がひとりぼっちの最果てにいるんじゃないかって話ですね。そういえば詩織さんはコレ好きですか？そっかく。」

第5章も前回の第4章と同様に、これまたランダム要素が増えていきます。

主なりセポイントはやはり、他の走者も頭を悩ませる通り、みかづき荘と原作主人公達の邂逅です。

見滝原勢も割とガバな事が多いですからね。この情報提供者チャート本走でも、さやかちゃんがギター趣味になったりしてますし。

特に特筆すべきなのはほむほむのループ回数でしょう。

その場合、本走のラスボスであるワルプルギスの夜が回数に応じて、比例するように強化されていきます。

「あとマジウスの翼とかがどうたらこうたら…はよく聞きます。でもあそこ秘密組織？なのに情報漏洩がすごいって噂ですよ。」

ただ、鹿目まどかと暁美ほむらと交友関係ではないので、（現在詩織ちゃんは出せる手が）ないです。

一応ラジコン義手くんに命令を出して、原作勢の来訪と動向を常に確認できるようにしています。

しかしコレは神浜限定で出せる命令です。詩織ちゃんの使い魔の行動範囲が市内のみなんですよね。それでも十分広いですけど。

「本当は詩織さんも誘いたいんですが…お忙しそうだからまた今度にしますね。」

お、そろそろ葉月とのお買い物終了するようですね。家に遊びに行くのはこのはさんの視線が解決してからにします。

実は自宅の食料を買いに来てたら丁度買い物中の葉月とスーパーでバッタリ出逢いまして…ついでに羊羹を買ってもらったりしましたよ。

それでそのまま一緒に行動していたんですが、中央区の『電波少女』の噂とネットの『ひとりぼっちの最果て』が関係あるんじゃないかって話をしていました。

なんかやけに情報詳しくない？

いや教えてくれるのは走者として大変ありがたいんですけどね。

そういやこの葉月の様子を見て、まさかアザレア組がマグウスの翼に加入してるんじゃないか…と初見の視聴者兄貴姉貴は思うかもしれません。

しかしそれは信頼度がある程度稼いだ状態での葉月との会話で判断することができません。ご安心ください。

ハイ！葉月さん？マギウスの翼がどーたらこーたらだけど、アザレア組は今後どうするおつもりで？

「んー、このはとあやめの事もあるし…アタシはこの件に首を突っ込むのはやめときます。知り合いにも家族は大事にしろって言われていますから。」

とまあ、こんな感じに言われます。

葉月がちゃんとアザレア組の窓口として機能している場合、彼女達が第1部に自主的に関わることは滅多にありません。

一応ウワサとかいうヤツ倒すの手伝ってほしいと頼めば、一時的に力を貸してくれるっっちゃくれます。

ただあくまでも一時的な協力者のため、ストーリーに進んで参加するような行動はしないと言っても過言ではないです。

葉月はちゃんと情報を吟味してから行動方針を決定してくれるので、走者的にはホント助かる助かる。

しかしアザレア組の信頼度が低かったり、このの方が先にマギウスの翼を知ったり

した場合、イベント終了後にも関わらず、実質BADENDに入る事が多々あります(4敗)

世にも珍しいフェリシアの「あやめーっーっー!」からの『あち死』が発生した事だつてあります。

その他にもこのはと葉月の意見の対立によるアザレア家庭崩壊があつたりしました。特にこのはさんは2人を巻き込んでしまったという罪悪感が凄いからね仕方ないね。

「……でも、何かあればいつでも言つてくださいね。詩織さんが困つてたら何でも聞きますから!」

ん?今何でもつて……。

というのは置いておき、何故かは分かりませんが、たつた今走者の背中に冷や汗が走りました。

なんというか、試走の時と違うというか…葉月さんの態度に違和感を感じるような……。

ともかく今回のアザレア組はマグウスの翼にあまり関わらない方針を取るようです。うん、いつも通りだな!

それじゃあ買い物が終わったので、みかづき荘に預けてた帆奈ちゃんを回収してから

帰る事にしましょう。

もちろん別れ際に葉月に飴ちゃんをあげるのを忘れないようにします。マジウスの翼に気をつけて帰れよ！

まだ話していませんでしたが、聞き込みなどによって他人から得られる情報は、周回ごとに設定されるものが違う程に種類が豊富です。

うわさファイルを見ても『郵便鴉の噂』やら『商人の噂』やら…前者は何故か説明文が未確認じゃなくて???だったり、後者は紛れもなく詩織ちゃんのことだったり、そういう後々ガバリそうなものも入ってたりします。

プレイヤーキャラが噂の対象になっていると、色々なイベントのフラグが立ち始めます。噂の規模が大きければ、その分イベントの発生率が高いです。

今となってはもう懐かしいですが、凛々しい組長が初対面で勧誘してきたのも噂の影響によるものです。ステータスの強さともありますけど。

しかし第1部および修羅の国神浜において、噂が引き起こすイベントは良いことばかりではありません。

全部マジウスってヤツが悪いんだよ。主に噂関連では柘ねむっていうウワサ製造

ガールがね……。

お察しの視聴者兄貴姉貴もいらっしやると思いますが、噂がそれなりの規模に達すると稀にそれを元にしたウワサが生まれます。

実はソシヤゲ版に追加して、オリジナルのウワサも増やされており、更にその中でもデータ固定とランダム生成が存在しています。

つまり自分の噂は広まりすぎたら、今度はその噂を元にしたウワサが誕生します。他のウワサと混ざったタイプとかも出現しますね。

そしておそらくこのゲームの仕様っぽいんですが、噂の元となった人物とウワサは遭遇しやすいです。

例えばキリサキさんとスズネIIサンです。

プレイヤーが先にキリサキさんを倒したりしなければ、大抵の鈴音はキリサキさんと出会います。

だから詩織ちゃんも気をつけないといけません。かなり商人の噂が神浜中の魔法少女達に広まっていますからね。

余談ですが鈴音だけキリサキさんに取り込まれた場合、プレイヤーは助けに行かず放っておいても大丈夫です。

なんかあつちの方のラスボスが勝手に迎えに来て、ホオズキ市に回収していつてくれるんですよ。

ぶっちゃけまあ契約の動機とか内容が内容なんで……多分あれで終わったら彼女の物足りないでしょう。

そんなこんなで着きました。

それじゃあ早速ピンポン鳴らしてドアを開けてもらいましょう。

「あ？なんだ詩織じゃん。帆奈ー！詩織が来たぞー！」

「いやそんなに大声で呼ばなくても分かるって。」

おっす（気さくな挨拶）

みかづき荘は住人が2人増えて前より大分賑やかになりましたね。これからもう1人透明座敷わらしが増えはしますが。

そしてなんだかんだで気がついたら、詩織ちゃんも鶴乃ちゃんに次いでみかづき荘常連ですよ。しかも一時期は普通に泊まつたりしてます。

でもやつぱ……賑やかさが違うんやなって。

「そういえばさつき銀髪のヤツ見なかった？フェリシアと同じくらいの年で、頭に黒髪混じってるヤツ。」

いえ、見てませんね……というかそんな感じの人、ネームドキャラに存在してましたっけ？ただのモブでしょうか。

けど本当にみかづき荘来るとき、一度も見かけてないですよ。多分その子とは絶妙な入れ違いになったのだと思われます。

名前とかつて……分らないですか？

「……名前、名前……」

「さっきのヤツは『マヒロ』だぞ！もしかして帆奈は記憶力が悪いのか？」

「流石に私でもフェリシアに煽られるのは心外なだけど？」

へえ『マヒロ』なんですえ……その子。

あれ？前に帆奈ちゃん探してたりしませんでしたっけ？なんかウオールナツツに食べに行つた時に聞いたような聞いてないような……。

確かまなちゃんに聞いても分からなかった名前ですよ。結局見つかって解決したのでしょうか？

「……ってか、そうだ。アイツも同じ名前じゃん。そんなに気づかな……いや待って、アイツ魔法掛けてった！」

ええ……。

そのマヒロちゃんとやらは元シナリオボスの帆奈ちゃん相手に、名前の同一性を気づかせないようにできる魔法を持ってたって事ですよね？

それってえ……結構不味くない？

あーほら見てくださいよ帆奈ちゃんの様子を。完全に手玉に取られてご機嫌斜めジエツトコースターです。

そら（自分と同じような魔法で強制的に忘れてたなら）そう（気づかなかった事も含めて腹が立つてくる）よ。

結構帆奈ちゃんは負けず嫌いなところとかありますしね。

で、そのマヒロちゃん？はどんな人物だったんですか？話し振りから推測するにさつきまでみかづき荘に来てみたいですが。

「どう……って言われても、優しい子だと思います。迷ったときに道案内だつてしてくれました。」

はえ〜そんな子がいたんすねえ〜。

特に害を及ぼした訳じゃないなら、RTA的な優先度は低いですね。もしかしたら魔法も照れ隠しの一つだったのかもしれない。

不信感は積もりに積もってますが、まあこれ以上の有益な情報は無さそうです。

「弓有さんは何かウワサについて進展はあったかしら？」

そこまで多くはないですがありますねえ！ありますあります。

中央区の電波塔の所で流行ってるやつあるらしいっすよ？走者視点で言えるのはそれだけですけどね。

というのも原作主人公と出会ってくれないとフラグの関係上、今後の展開が複雑で厄介なことになってしまいます。

だからフラグを建ててから出直してね♡

「そう……弓有さんは、『鴉弓真広』という人について何か知って……！」

「バツカ詩織にそれ言ったら……！」

うん？なんかまたガバですか。

鴉弓真広オ？知らない子ですね。いやマジで知らない子ですね……さっきから言っていた『マヒロ』って人の正式なフルネームかなにか？

前から思ってたんですけど、この本走で知らない人出てくるの多すぎイ！『有鷲詩織』然り『鴉弓真広』然り、こんなんでRTAが務まる訳ないだろ！いい加減にしろ！

「……探していた子がいたから聞いてみたただけなのだけれど……？」

「そうだった、コイツは知らないんだった！ああもう！ホントにサイアク……。」

そして帆奈ちゃんの反応を見るに、どうやら詩織ちゃんに知られたくなかったようです。

順当に考えて過去ガバ関連でしょう、謎が謎を呼びすぎて何が何だか分からなくなってきました。

せめて走者に経歴ガバの詳細を説明してくれませんか？それだけでいくらでもオリチャーによる対策のしようがあるんですけどね？

うーん、色々と考えすぎてめまいがしてきましたよ。詩織ちゃんが。

あーあ、処理しきれなくなつて頭を抱えてしまいました。経歴を把握していない走者のせいです。あーあ。

そもそも大体のプレイキャラに起きうる経歴ガバなんて、最初の信憑性がなさ過ぎて事前に防げる可能性がほぼゼロなんだよなあ……。

「ししよー！来たよー！……つてわあ！詩織！？大丈夫？！」

大丈夫かどうかで言えば大丈夫じゃないですけど、まあ多分大丈夫なんじゃないつつかね？（すつとぼけ）

まるで正気度チェックに失敗して一時的発狂を引いてしまった人みたいになつてますよ。

これ口寄せ神社の時よりも詩織ちゃんの地雷をぶち抜いてませんか？気づいてはいけない事に気付いてしまった系かな？

ていうか本当に有鷲詩織も鴉弓真広も一体誰なんだ……。

とりあえず詩織ちゃんが体調不良を起こしたみたいなんで、このままみかづき荘にお邪魔してましようか。買ったやつは…大した量じゃないので冷蔵庫に失礼させてもらいます。

そういうわけで今回はここまでです。

ご視聴ありがとうございます。

▶ ?

その日は別にいつもと変わらない朝だった。

午前中は詩織と同じところでのバイトだったし、昼は家に帰って詩織とご飯を食べた。レンジで温めた普通のコンビニ弁当。

珍しくアイツもご飯と一緒に食べていたけれど、冷蔵庫の中身を見てその理由はすぐに分かった。

何で全部すつからかんになるまで次を買いにいかないのか、あたしにはさっぱり一切分からない。

あらかじめ買っておいた方がいざという時に困らないのに、詩織の習慣になってしまっているのかもしれない。

ともかくとして、その買い出しにあたしも付いていくのかと思つたら、七海やちよのみかづき荘に預けられる事になった。

出かける前にあたしに食べたいものがないか聞いてきたから、アイツの性格からして絶対に買つてくれると思う。

そんなこと言つても現在進行形でこのみかづき荘にお邪魔しているのは変わらない。

コイツらのウワサの調査に巻き込まれているのは少し不機嫌になる。有り体に言つてしまえばやる事がなくて退屈だつたからだ。

「アンタらいつもこんな事してんの？」

「ウワサっていうのは人に害を及ぼす危険性があるの。前に志伸さんから聞いたけど、弓有さんだつて襲われたことあるそうじゃない？だからよ。」

「ふーん。」

みかん味の飴を一口頬張る。オレンジとみかんは一見似てるけど、みかんはオレンジに比べて味が薄い…と思う。

コイツらが探っているウワサっていうのは、前にあたしらが調べた『キリサキさん』とかと同じ部類だつて。

話を聞くに何個か種類があるっぽい。この前押し込まれた時に話してたのもウワサ関係のやつだつたらしい。

いくらあたしが監視中で変身禁止とはいえ、そんならいなら詩織も別に話したって
良くない？

まあいつか、どうせアイツの話し方だと全部知るのに時間かかりそうだし。

結局コイツらの収穫はなかった。あつたとしてもほぼゼロに等しい。

詩織みたいにかラスでも使ったり、あたしみたいに魔法でも使ったりすれば、こんな
のチャチャつと終わんのになえ？

それで昔自分で噂を流してたあたしが言うのもなんだけど、このウワサってヤツが何
のためにあるのかいまいち理解してない。

あたしの時は昏倒事件の黒幕を当ててもらうため。

でもこっちはどうなんだろ。意味があるかどうかはまあ、興味ないし関係ないから別
にいいか。

……………前から弓有詩織だとか御園かりんだとかによく特撮や漫画を勧められてい

たが、とうとうこの日その3人目が現れた。

「帆奈も読むと良いぞーデカゴンボール!」

いつのまにかみかづき荘に住み着いていた、傭兵とやらをやっているらしい深月フェリシア。どうやら今度の作品はデカゴンボールという少年漫画?らしい。

いや別に家の暇つぶし娯楽が少なかつたし、本を読むか読まないかだつたらとりあえず一巻くらいは試しに読んでみるけどさ。

そりゃあ勧めてきた人が人だから、こうした低年齢の子供向けが多いけれど、あたしとしてはもう少しダークな感じのを見たい。

その点で言えば詩織の持つてたヤツの中にあつた、深夜帯の放送だつた特撮が面白かつたと思う。

まさか眞黒^{マッロ}の体が腐敗していつて、その正体がオリジナルから作られたクローンだつたなんてねえ?その上スライザー^{サイモン}とスライザー^{マッロ}眞黒が敵対関係になるとは思わなかつた。

日曜日の朝に放送しなくて正解なんじゃない?あれは絶対に深夜枠でしょ。

と、話が逸れた。

簡単に言うときみかづき荘で勧められた漫画をあたしは読んでいたわけだ。

そんな時に玄関先のチャイムを鳴らす音。

環いろはが訪問客の対応に出た：けど、少しもしないうちにソツチの方から聞こえる驚きの声が耳に届いた。

どうやら来客は荷物の配達員で、その配達員と環いろはが知り合いだったらしい。

そう言うことは偶によくある？って言うし、実際その銀髪の本人も気にするような事じゃないと言っていた。

「気にしなくて大丈夫ですよ！それじゃ！仕事なので失礼します。」

なんとなく引つかかったのは配達員の言葉。

ソイツがみかづき荘から出ていって、そのすぐ後に詩織が買い物から帰ってきた。そこまで多くない荷物はコンビニ帰りとなんら変わらない。

そこであたしは詩織に聞いてみる事にしたんだ。さっきのヤツを見なかったか、知ってはいなかったか。

「……名前、は……？」

その質問に答えようとして、喉の奥まで出かかっていた言葉は唐突に霧散した。気持ちの悪い違和感が靄のように、絶えず頭の中で漂っている。さつきからずつこのままだった。

そして詩織がした二つ目の質問で、ようやく違和感の正体に気づく。

マヒロとかいう配達員は会話中、何でもない返答に見せかけてさり気なくあたしに魔法を掛けていった。

他人に命令を下すように対象の意識を操作できる……言わば『暗示』と似た系統にあると思しき固有魔法。

そんなのに猫騙しされたのが無性に腹立たしい。

けど、同時におそらくアツチの目論見も外れた。

同系統にある魔法は互いに反発しあい、うまく本来の効果が発揮できないと聞いたことがある。

だから『暗示』によって阻害されて気持ちの悪い違和感だけがあたしに残ったんだ。

つまりは人に指摘されてすぐにバレてしまう程度の魔法なら、あたしの『暗示』の敵なんて務まらない。

「……………ダメ、だよ。」

そこに変身禁止、現在進行形で絶賛監視中というハンデがなければの話だけど。何もできないのはやっぱりむかつく。せめて一発仕返ししたい。

腹いせに詩織が買ってきたチョコ菓子を一つ取って、やけ気味に口の中に放り込む。この前食べたチョコよりもはるかに甘い。

腹立たいアイツを忘れるには物足りないが、それでも斜めになっていた機嫌は多少良くなってきた。

だけどもまあそんな程度の話で終わるならまだよかった。

端的に説明するなら、七海やちよが『鴉弓真広』についての話題を弓有詩織に話した。正確には問いかけだったけど、名前を出るとは思ってたなくてあたしも油断していた。

もちろん七海やちよは2人の関係を知らないんだろうし、そもそも行方不明事件の敵

生自体が数年前だし、コレは油断してても悪くないでしょ。

『出来れば弓有には話さないでやってほしい。いくら年月が経ったとて飲み込めない事もあるのだから。』

それがいつだったか鴉弓真広について聞いた時、最後に話していた和泉十七夜の頼み。

あたしだって何も知らないヤツに瀬奈の話を言われたくない。夢は所詮夢でしかないんだから、今頃夢想しても仕方ないじゃん。

まあ知らなかったのは当然の事だと思う。話そうとしてた七海やちよを止めて、とりあえず事情を少しだけ説明した。

驚いた顔をしながらも流石と言ったところか、少しの情報でも名前を出すべきではないと理解したようだ。

さて肝心の詩織はと言うと、頭に手をやり下を向いて考え込んでいる。

いや……何か喋ってる。

よほど近くじゃないと声が分からない上に、一番近いあたしでもようやく聞き取れるくらいに独り言だった。

「だって、あの時…でも、何で…誰が、どこに……庇って、なのに…知らない、知らないよ……消え、てしまった…?…」

「ねえ、聞いてんの?まだちよつとここにいる?」

「……うん。」

見た感じの具合は悪そうだった。いかにも顔面蒼白、ちよつと誇張しすぎたかもしれないけど、まあ総括するに気分は良くなさそう。

詩織の様子を見てる間にあのやかましい由比鶴乃もやってきていた。あつちから見ても体調が悪そうに見えるらしい。

それでも時間が経つにつれ、あたしには意味の分からない独り言を発していた詩織も、だんだんいつもの調子に戻っていった。

さつきまでの体調不良をめまいて事で貫き通そうとしてるけど、あたしから見てもそれは大分無理があるように感じる。

結局のところ夕食は厚意に甘えてみかづき荘で済ませたが、詩織の体調不良とかに関しては何も分からないままだった。

ただ、一言。

途中耳にした一言だけが何故だか無性に気になった。

「……………いつまで……………」

言葉の意味は今も分かっていない。

Part 29 ガバラずには、いられない

ここのところずっと手紙を書き続けていた。

黒い折り紙に便箋を挟んで、紙飛行機にして空へと飛ばす。

遠くまで飛んでいってほしい……とか、いつか誰かに届いてほしいとか、そんな感じの思いを込めて送り出す。

自分が人より少し優れているのに何となく察しがついていた。

感覚的に矢を射れば必ず思った所に当たってしまう。少し勉強すればすぐに頭に知識が入ってしまう。

だからこそ周りや家族は私の才能を騒々しく讃えている。

他から栄光狂いとかいう、名誉などカケラもない名前で呼ばれているのを家族は知らないんだろう。でもそういった人達の血を継いでるのは私だって同じか。

私はその中に入れて欲しくないけど、そういった異常な環境で育ってきたのは重々承知していた。

「さすが鴉弓の血を継ぐ者。」

「お前は鴉弓家の誇りだ。」

その誇りがこれからの人生で役に立つ事が果たして何回あるのだろうか？

いや、ない。絶対に無い。例え強制されたとしても私は使いたくなかった。

そもそもこの人達は自ら鴉弓家の子孫を名乗っているくせに、賜った『鴉弓』の名にどのような意味が込められているのかも知らないんだ。

あくまでも世間から知られている話しか知らない、形骸化した栄光だけを追い求めて彼らは何を求めているんだろう。

飛ばした黒い紙飛行機は風に乗り、神浜の空を滑るように駆けていく。

市内にはここみたいな廃墟がいたるところに残されていたから、時々こうして屋上を勝手に拝借している。

ここは周りの所と違ってあまり老朽化しているわけじゃない。比較的新しめで、多分完成はしたけど需要がなかったんだろうなと思う。

手すり大丈夫なのが気に入ったポイントだった。別に下に落ちたって良いのだけ

ども。

学校も、稽古も、全部を無視してサボっている時は、なんだか不思議な気持ちを感じる。

スツキリはしていたけど空虚さも同時に訪れていた。こういう事をずっと考えるのを哲学とか言うのかも知れない。

まあ知らないから、私には分からない。

「……………眩し…。」

唐突に背後から聞こえた軋むドアの音と共に、だいたい同年代？くらいの少女の声を聞いた。

こんな辺鄙な屋上に来るなんてよほどの変人しかいないだろう。

ましてや私と同じ年頃の子が今の時間帯に来るのは可笑しいって思わないかな？私

は十分にそう思う。

手すりから手を離して、扉を開けた人物を一目見てみようと振り返った。

けれど、次の瞬間には心を奪われていたんだ。

心の蔵をまるごと射抜き貫くような輝き、閃光、快晴の晴天よりも眩しい少女の青い
双眼。

あるいは、運命とでも呼ぶべきモノ。

驚くべきことに、その一瞬にして私は捕らえられてしまったのだ。本やテレビとかでしかチラツと見たことがないけど、これが俗に言う一目惚れというヤツなのだろう。

「あなたでしょ、コレ全部。」

そう言って彼女は持っていたシオルダーバッグを逆さにして中身を全て出す。

積み上がった白と黒の山。折り目のついた黒い折り紙と、白い少しかだけ高級そうな便箋で構成されている。

「……あ、あとコレも。」

いつのまにかさつき飛ばしたはずの紙飛行機が、その白黒の紙の山にゆるやかに着地する。

合計数は数え切れないが、それらが私の飛ばした手紙の全てである事を直感でもって感じ取っていた。全部が広げてあるのを見るに、女の子は律儀にもこの手紙を読んだのだろう。

まさかこんな一介の少女の自分語りを集めて、送り主を探して返しにくる人物がいるなんて！

「はは、ハツハツハツハ！」

「…なにかおかしい？」

「いやあ、とんだ物好きがいるんだなあって！」

『前に思ったんだけどさ、
って人と話す時だいぶ失礼だよね。』

『なにを〜!? これでも言葉選びは善処してるんだぞ!』

『私相手には、でしょ？クラスの子とかとちゃんと話せてる？』

『心配せずとも話せるんだなあ！そういう　　ちゃんは今見知り治したの？』

『人見知りじゃないよ、あれは間合いを測ってるんだ。うん、そういうこと。』

『はぐらかすのはダメだよ！弱点は克服するものなんだし、頑張らないと！』

『いいじゃん、　　が居れば他にいらぬよ。』

『でもそれじゃ　　ちゃんの為にならないよ……！』

それが、一番最初のお話。

▶
?

透明少女をひとりぼっちから救いに行くRTAはーじまーるよー

前回は葉月さんと買い物して、詩織ちゃんを経歴ガバの一部が牙を剥いて終わりました。何も進んでないじゃないか…たまげたなあ。

今回はその続きからです。

前回体調不良になってみかづき荘から帰還した後、倍速中に義手くんから見滝原勢と思しき魔法少女の連絡が来しました。

カメラを代わってもらい、映し出されたのは鹿目まどかと暁美ほむらの姿です。しかもメガネ掛けてますよ！やりました、ついに歴史が動いたんですね！

そしたらみかづき荘宛にこちらの持つてる情報の一部を流しましょう。前回の時点で進行状況は確認済みです。

それですが詩織ちゃんこれから2人に接触します。

大体の魔法少女は悪意というものをご存知ない!?ので、良い人っぽく話しかければすぐに信用します。

更に倍プッシュユだ！同じ魔法少女だという事を伝えると効果的でしょう。詳しい事情も話すことができますしね。

ここ←悪人チャートで出てくるからキチンとメモしといて下さい。

その君達！この辺じや見かけない制服ですね？しかもよく見てみたら何かお困りの様子で！

良かったらこの詩織ちゃんに話してみませんか？ああ、心配ご無用！実はあなた達と同じなんです！

ほらこの指輪を見てください！大丈夫！ちゃんとb i i m印の走者ですよ？

「気を使わせてしまいすみません、バمامミという人を知りませんか？」

「その…私たちの先輩で、神浜に行つてから帰つて来ないんです。」

これからمامミさんを探しに神浜を案内していきます。

ぶつちやけ彼女らがバمامミに会うのはめちやくちや後になります。いつかつて？そりやあ＋ホーリーママミ＋になつてからです。クリスマスになったら乱数関係でまた話は変わりますがね。

なのでもしかしたらウワサ関係かもと言つておいて、そのまま流れで中央区のウワサを調べていきます。

そこでいろはちゃんとやちよさんにバツタリ会わせて、詩織ちゃんはクールに去るつて寸法よ！

ちなみに目を離れた隙にほむほむは姿を消しています。第5章中、絶対にはぐれる才能を持つているので阻止はほぼ無理です。

念のためにほむほむ付きの義手くんを飛ばして、とうか会う前から1人づつ付けてもらつてます。言わずもがな、どこぞのJDを参考にさせていただきました。

「なんか…あの人ちよつと様子がおかしくないですか…?」

ホントつすねえ!まるでこのまま電波塔から飛び降りちやいそうな雰囲気だあ……
(直喩)

コレはまずくなあい?という事で電波塔の展望室らへんにいる魔女を倒しに行きます。その人を止めても大元が生きているので、(意味は)ないです。

というわけで現場に急行しますが、階段を登るには走者の手間が掛かるため、『使役』で無理矢理エレベーターを動かします。

動かすにあたって物凄い音がしますけど、後でちゃんと動かせる範囲なので心配無用です。随分生きのいいエレベーターじゃねえか……。

もちろんのこと負荷は掛かりますが、こちとら魔法少女やぞ!あつという間に展望室に到着です。

それじゃ原作主人公に人助けを任せて、魔女結界にダイナミックエントリー!

支援型と支援型しかこの場に居ないので、せめてベテランで近距離としても一応前衛張れる詩織ちゃんが倒しに行きましょう。

いやだつて実際いくら義手くんでハイト稼ぎできても、肝心の鹿目まどかに攻撃行っちゃつたら意味ないですし。

「すごい……もう魔女を倒しちゃった……。」

「え？詩織さんだったんですか!?顔が見えなくてビックリしました……。」

「……そのバイザー、飾りじゃなくてちゃんと使えるのね。それで……今回は飛び降りてなくてよかったわ。」

つていふか言われて気づきましたけど、ホントにバイザー下げましたね？

今まで本走走ってプレイしてきて、おしやれバイザー使ってるの初めて見ました。何気に、デフォルトですよコレ。

……そして、やちよさんの言葉は大変耳がいたいものでございます。過去に別件で飛び降り心中未遂してましたし。

そういえば第5章だから会いますね……あの某芸術家……。結局なんだかんだで長い間会ってませんよ？キューブも借りパクしたままです。

まあ、会ったとしても詩織ちゃんが玩具になるだけだからいつか!

さて何でここにいろはちゃんとやちよさんがいるのか、疑問に思った方もいる事でしょう。

実はけっこう仕掛け単純でして、調査ポイント的なものが一定まで貯まると次の段階に入るんですよ。

今回の冒頭部分で義手くんに情報を送ってもらったことにより、みかづき荘の調査段階を一個引き上げたんです。

だからこうしてピンク髪主人公同士をバツタリ会わせる事が出来ました。

作戦通り、後は2人にまどかを案内してもらって、詩織ちゃんはこの場からスタコラサツサします。サヨナラ！

お次にやってきましたは水名区です。

さてさて居ますかね？居ますかね？おくいるいる。ほむほむく!!遅くなりましたがお迎えに来ましたよ〜！

「弓有さん……よかった……鹿目さんは……？」

まどかちゃんは知り合いに預けてきましたよ。その人たちに話を聞いてる間に探してたって訳よオ……。

神浜は慣れてないと迷いやすいので、ほむほむも今度から気をつけてください……え？魔法がいて無視できなかつた？

それじゃあ仕方ないですねえ！魔法少女として魔法を倒すのは当たり前だよなあ!!？良い子のほむほむには餡ちゃんを追加でプレゼントしましょう。

おや？なんか向こうから走ってくる見覚えのある人影が……。

「おーい！食い逃げだぞー！捕まえろ！」

「とんだ冤罪……つてこつちには弓有詩織でございますか!？」

「えつと……事情は分かりませんが……どんな理由でも食い逃げは駄目だと思ひます……！」

「だから誤解でございます！」

あつ、ここかあ……（納得）

例の天音月夜食い逃げ○事件ですなクオレハ……。逃がしたらちよびつと信頼度が下がるので捕まえましょう。いぞフェリシア、挟み討ちだ！

暴れんなよ……暴れんなよ……4人に勝てるわけないだろ！

「くつ、お稽古の時間が迫っていますのに……！」

「大丈夫！情報を出してくれたらちゃんと解放するよ！」

捕まえたらレッツ尋問タイムです。

ここでは好きな質問を天音月夜に対してする事ができます。ええ、何でも質問していいです。

普通のプレイなら電波少女やひとりぼっちの最果てについて質問しますが、やろうと思えばプライベートな質問もできます。

まあそんな事しなくても神浜魔法少女ファイル（完全版）で走者には筒抜けなんですけど。

今回は無難に電波少女の正体を聞きます。その他のさまざまな選択肢は君の目で確かめよう！

「……電波少女は『二葉さな』という水名の生徒でございます。」

はい。これで電波少女Ⅱ二葉さなが成り立つので、この情報をやちよさん達に共有しましょう。

尋問タイムは基本的に時間が許す限り質問できるのですが、例外として天音姉妹の片割れを質問するとそれ一つで強制終了します。愛がすごい（小並感）

もうすっかり夕方になっちまったぜ。

中央区のとこのカフェに全員集合して、それぞれ得た情報を交換してお互いに共有しましょう。

詩織ちゃんは……正直言って会話することがありません。

チームみかづき荘（未完）と見滝原2人が話している間に糖分補給でもしています。『使役』って魔力と頭をそれなりに使うので糖分は大切です。

「私、この人に返事をしようと思います。」

あ、いろはちゃんが迷惑メールに返信し始めました。

メッセージの相手、名無しの人工知能のウワサに聞くことによつて、ようやく今章の決戦のバトルフィールドに行く方法が判明します。

まあ電波塔から飛び降りるんですけどね、初見さん。

攻略の手順が分かつたら、ひとりぼっちの最果てについて書かれているサイトとかいうのを教えられます。

さつきの話がウワサの罠の可能性があるので、アイさんが信用できるかを確かめるために必要です。証拠出せやオラア！

さつさと二葉さんなどの記録を流せばいいんじゃないかと思うかもしれませんが、彼女はRTA走者じゃないので勘弁してや……。

これに関しては第5章限定で噂になつているホームページに入るための情報です。十咎ももこや深月フェリシアからその存在を聞けます。

しかしサイトに入るためにはパスワードが必要になります。これこそが資格とかいうやつです。

オラ！パスワードの在り処を教えるんだよ！

『中央区の電波塔の塔脚に書かれてるってさ！』

と珍しくグッドタイミングなももこさんが電話でパスワードの場所を教えてください。やっただぜ。

ちなみにフェリシアが学校でホームページの話を書かなかつた場合の救済策として、この時にホームページも教えてくれます。

これはもうシスターですね、間違いない。

じゃあ電波塔の元にイクゾー！ デッデッデデデ！（カーン）

「あー！天音の双子がなんかやってるぞ！」

「あれは…パスワードを消すつもりね！」

このように、尋問タイムを発生させるとその日の夜に、ピーヒョロ姉妹がパスワードを消しに来ます。

そりやあ今度も自分達が失態を犯したら、もしかしたらマギウスの翼クビになっちゃうかもしれないね。仕方ないね。

鶴乃ちゃんとフェリシアが真っ先に駆け出して行きました。実際、手がかりを簡単に消されたらたまったもんじゃありません。

「こうなったら全部かけてしまえば……！」

「……これなら！さっさと逃げよう！月夜ちゃん！」

「月咲ちゃん……今回は成功したでございます！」

なんてことをしてくれたのでしよう

ピーヒョロ姉妹が珍しくちゃんと仕事をこなした……だと？これじゃパスワードが分からないじゃないか！おのれ天音姉妹！

あーもう無茶苦茶だよ……完全に読めなくなっちゃいましたね。どうしてくれてんの？これが白羽根の実力か……！

「こうなったらダメ元で入力してみる？」

「いつまで時間を掛けるつもりなのよ……。」

「あはは、だよね。」

なんてことを鶴乃ちゃんとやちよさんが話していますが、実はこのパスワード問題をすぐに解決する方法があります。

一つが、たった今やちよさんにやんわり止められた鶴乃ちゃんです。

実はここ第4章でも活躍した『幸運』の使い所さん!?!です。RTAでも救済手段として大変重宝されます。

それなりに時間が掛かるとは言っていますが、固有魔法のおかげで鶴乃ちゃんがランダムに文字を打てば、統計上10回以内に必ず成功します。

これは普通にパスワードを消されてしまった場合に使うことが多いですが、しかし今回使うのは鶴乃ちゃんの『幸運』ではありません。

まあ見てなつて！じゃあいろはちゃんの持つてるスマホに手を翳しますね。

「詩織さん：うゝえ、今何をしたんですか!?!」

いやあ？別に少しホームページを弄っただけですよ？ええ。

ただホームページくんにおどs：協力させて、パスワードを入れた場合の先のページを表示してもらっただけです。

つと、時間がおしてきたので今回はここまでです。

ご視聴ありがとうございました。

▶
?

バママが行方不明になっているらしい。
彼女を探して神浜へとやって来た鹿目まどかという魔法少女からその話を聞いた。

見滝原にいる後輩達に忠告して、最近の異変を調査していたバママミは、ここ数日の間音信不通で彼女の住んでいる自宅にも帰ってきていないようだった。

それで彼女の後輩である鹿目まどかさんと暁美ほむらさんは、彼女のことを心配して探しにきたという。

弓有さんは困っている彼女達を見かねて声をかけ、今まで行動を共にしていたのだと経緯を説明する。

「怪我はしてないでしょうね？」

「……何も……えと、なに……かな……。」

「してないなら別にいいのよ、無茶しないようにしなさい。」

前からずっと気になっていたのだけれど、どうして環さんといい弓有さんといい、人を助けないと気が済まないのかしら？

いえ……自殺しようとしていた人を助けるために、一緒に飛び降りたりしないだけ、弓有さんよりも環さんの方が大分マシでしょうね。

私達は中央区の噂を調べているという彼女達と協力して、電波塔に関する調査を合同で行うことにした。

水名で調査をしていた鶴乃達とカフェで合流し、一通り集めた情報を整理していた

時、突然環さんのスマホにメッセージが届く。

この前からずっと送られていた不審なメッセージ。

ただの迷惑メールと思いついていたソレは、驚くべきことに環さんが魔法少女であるという事を既に知っていた。

『監禁している子を助けてほしい』

奇妙な要求をする相手に対し、環さんは意を決して返信を試みる。

そこから出てきた新たな情報は、私達の調査を進展させるのに十分なほど有意義なものだった。

メールの送り主がウワサであるということ。

監禁されているのは二葉さなだということ。

ひとりぼっちの最果てに入る方法、など。

罠かもしれない可能性は大ににあったが、それでも試さないよりは、このウワサの言うことを信じてみた方が良いだろう。

ウワサもウワサで最初から信用されるのは難しいと心得ていたらしく、とあるサイトを見てほしい旨を伝えてきた。

度々耳にしていた噂のホームページ。

フェリシアのスマホの履歴を遡り、見つけたページの先に進むには、何かしらのパスワードを入力しなければならぬ。

「あれ、ももさんからだ。」

『もしもしいろはちゃん？良い情報が手に入ってさ！』

「本当ですか!？」

環さん宛てにももこから掛かってきた電話。

普段ならバッドタイミングに遭遇していただろうが、今回ばかりは運良くグッドタイミングだった。

都市伝説のきまりをかなぐり捨て調べた話では、電波塔の塔脚にパスワードが書かれていたらしい。

丁度近くのカフェに集まっていた私達はそこに向かうことにした。

既に辺りは暗く、すっかり夜になっていたが、目的の塔脚の近くでこそそこそ動く影が二つ。

「もも、もう見つかったでございませうか!？」

「早く消さないと……！」

確か、いつぞやのマジウスの翼の天音姉妹……その慌てようを見るに、あのホームペー
ジのパスワードを消そうとしているのは火を見るより明らかだ。

鶴乃とフェリシアがいち早く飛び出し、天音姉妹を止めようとする。

「今回は汚名返上させてもらおうよ！」

「私達だつてやる時はやるでございませう！」

けれども、今回は先手を取られてしまい、パスワードに溶剤をかけられてこの場から
逃げられてしまった。

逃げ足だけは無駄に早いのね、あの姉妹……今日は完全にしてやられたわ。

「ぐちゃぐちゃで、読めなくなっちゃったね……。」

「そうだね……これ、どうしましょう？」

綺麗に全てが消えたわけでは無いけど、文字は歪んだり混ざったりしていて、ここか
ら元の文字を読み取るのにはや不可能だろう。

環さんがスマホを取り出してあれこれ唸りつつ試しているが、当然のごとくパスワー
ドが違うと表示され、最初の入力画面に戻ってくる。

「えつと……詩織さん？」

「……………」

そんな中、弓有さんが動いた。

おもむろに手を環さんのスマホに添えると、画面には指一本触れていなかったはずなのに、突然ホームページの画面が切り替わる。

「一体何をしたらそうなるのかしら……？」

「……………？協力、して……………もらった……………」

「協力って……まあ、気にしても仕方ないわね。」

この現象こそ、弓有さんの固有魔法によって引き起こしたことなのかかもしれないでしょうし。

そういえば彼女の固有魔法がどういうものなのか詳しく聞いたことが無いような……………。

ともかくその話は置いておきましょう。

パスワードの先にあつたのは『神浜都市伝説辞典』という検証もされていないただの噂を集めたサイトだった。

私の持っている神浜うわさファイルに似ていると言われたのには少し心外だが、私達の求める情報は確かにそこに記載されていた。

電波少女の噂に、ひとりぼっちの最果て。

そしてあの『アラもう聞いた？』から始まるウワサの噂。

あのウワサが言っていた事は間違いなさそうだ。なら、電波塔から飛び降りれば、ひとりぼっちの最果てに入れるのだろう。

次にするべき事は、決まった。

Part 30 ひとりぼっちの再走

神浜で一番ヤベーやつに遭遇しそうなRTAはーじまーるよー

今回は第5章『ひとりぼっちの最果て』のいわゆる調査パートを進めていきました。大体概ね予定通りでしょう。

今回はその続きからです。

サイトを『使役』で無理やりこじ開けて、中に存在する信用の証拠を確認しました。

これにより名無しの人工知能のウワサの情報の詳細と、二葉さんがひとりぼっちの最果てに入ってから映像（編集済）が手に入ります。

約一ヶ月間の記録なんて編集でもしないと長くなっちゃうからね、仕方ないね。

それじゃあ電波塔を登ったので、いろはちゃん達！お願いします！あ、その前にちよつと待って！コイツを抱えて持って行きな！

OK?ヨシ! (現場猫並感) それじゃあお空にダイブしてこーい!
今いろはちゃんに渡したのは義手くん(大)です。

正直言ってこっちにはやちよさんと鶴乃ちゃんとフェリシアの他に詩織ちゃんがい
て、境界内に飛び込む人達とパワーバランスがすごいです。

そのため、こっちの詩織ちゃんは普段より弱くなりますが、代わりにあちらの戦力を
走者の半分くらい増やす事ができます。

あと義手くんは自動的に飛んでしまうので、飛び降りという選択肢が取れません。

その結果、いろはちゃんがモキユと義手くんを抱えていく羽目になりましたけど。

ちなみに詩織ちゃんはひとりぼっちの最果てに行きませんから悪しからず。

いやだってどのみち某芸術家に会うのに、最初からは会ってられないですよ。ええ。
もしもの時のガバ対策である義手くんもいます。

というかアツチ側に詩織ちゃんが居ると、いろはちゃん達がウワサと戦っている間、
ずっとタイムマン戦やらなきやならないので……。

ていうかあっち側は遠距離タイプしかいないのに、こっち側はこっち側で前衛多すぎ
なあい? バランス崩壊ってレベルじゃねえぞ!

「あ、いろはちゃん! 無事みたいだね!」

なんだかんだ言ってる間に終わったようです。

義手くんはちゃんと援護してあげたみたいですね。おーよしよしよし、偉い偉いぞ！さすが義手くんだあ！

それで二葉さなの救出とウワサの撃破に成功した訳ですが、当然ここで終わりという訳ではなく……。

「気分はナーバスだったケド、一つ取り引きすれば許してあげなくもないワケ。」

「それって……どういう……。」

「……理解してるヨネ、弓有詩織？」

うるせえ！知らねえ！*magia record*……。

やっぱりこうなる定めなんですかね……いやまあアリナのオモチャになるのを承知したのは詩織ちゃんではあるんですが。

「ふうん、じゃあ無理矢理持つて行っても文句ないヨネ……！」

まあ、そうなるな。

アツ！待つて待て待て待て！ちよつと！アリナ・グレイお前ええええええ！それは

ダメでしょ！反則ですよ反則！

「ここから先は通さないよ！」

「大人しく倒されてくださいまし！」

あーあー天音姉妹 with 黒羽根が道を塞いでしまいましたね。

現状がいまいち分かってない視聴者兄貴姉貴がいると思うので、簡単にご説明してしましますと……。

詩織ちゃんとチームみかづき荘& amp ;見滝原勢が分断されました。

ええ、はい。これが意味するのはですね。おわつと、これまた簡単に言ってしまうですと。

『マギウス アリナ・グレイ』戦、ソロプレイです。

なんもん出来るわけねえだろオルルアン!?

しかもアリナア！の攻撃はへによりレーザーのため、近接武器による物理的なガードがしづらいです。

一応出来ない事もないんですが、対物理みたいな明確な当たり判定が微妙なんですよね。対魔法耐性が欲しい…欲しくない？

ちなみに初心者の方は防御か回避のタンク型ビルドをオススメします。チャキチャキしてればジャストガードが出来たりします。

遠距離タイプとの戦いは何が辛いかって、単純なリーチの差とパリイによる怯みがないのが辛いねな……。

あと前に説明しましたが、遠距離型の魔力の塊みたいな攻撃は『使役』が効きません。ほむほむの実弾は例外ですけどね。

右腕なら当たっても問題ありませんけど、アリナはドツベルもレーザーもバカスカ撃ってくるので基本回避の方が重要です。

あれ、もしかして詩織ちゃんってアリナとの相性が最悪の可能性が……？

そして1人だけだと流石の詩織ちゃんもキツいため、誰か1人でもコッチに来れるよう援護してあげましょう。

向こう側は結構混戦状態になってます。使役槍と義手くん編隊をめちやくちや飛ばしてサポートじゃい！

走者の手と詩織ちゃんの脳が大忙しですなえクオレハ……。

「うおっ！詩織！ありがとな！もう少しだけ待ってる！」

戦闘でちよいちよい危ない攻撃は妨害して防ぎます。うまくいけば信頼度を微々た

る差ですが上げられます。

今はフェリシアが魔女を倒すついでにこっちに向かってきてくれます。来い！来いよこっちに！さあ！

にしてもなんか静かですなぁ……（詠唱開始）

いや多分これ翼の戦力がいつもより少ないんですね、試走の時より半分近く居なくなってますよ。もしや詩織ちゃんの圧倒的なモブ信頼度のために来なかった子が居るのでは……？

これならチームみかづき荘と見滝原勢の方はすぐにも決着は付きそうですが……

！

「余所見、しないでヨネー！」

イッターーイー！腕がー！

うわ、これあと半身くらいずれてたらソウルジェムでしたね……咄嗟に出た左腕ごと肩を撃ち抜かれただけで済みましたけど。

いやそれも不味いですよ！詩織ちゃんの利き腕が使えなくなっちゃったじゃないですか！メデイック！メデイー……ッ！治療班はよ！

「ソレ、さっさと外してほしいんですケド。」

外せって言うておきながら自分で外しにくるのか…（困惑）

いやでもコレ抵抗しない方が安全なんですよね。少なくともオモチャにされるだけで済みますし。

まあ今回珍しく走者と詩織ちゃんは反抗する気なんですけどねエ！

だってこんな大勢のヤツらに見られたら、周りの正気度がどう考えても持っていかれるに決まってるんだよなあ…：芸術家さんはTPOを弁えて下さい。

ほら痛くないようにできないから動かないでくださいよ、アリナア！避けるんじやねえ！『使役』を掛ける事ができないだろオ！？

「魔女魔女魔女魔女！魔女を出せ！」

「邪魔するな！アリナのアートの餌にでもなってるよ！」

「うおわー！」

ええ：詩織ちゃんの救助に駆けつけたフェリシアが、およそ2コマで結界内に取り込まれていききましたよ…。

やったねフェリシアちゃん！魔女と会えるよ！一応この魔女はフェリシア一人でも（何とか）勝てるくらいです。

なんかさつきフェリシアに対する当たりが強かったような…：まだ飼育魔女倒されてないはずなんですけどね？

まあそんなことより目の前のアリナ・グレイです。

第2ラウンド開始と行きたい所さん!?!ではありますが、正直言つて詩織ちゃんの勝算はかなり薄いです。

利き腕である左腕を撃ち抜かれたので、短槍を振るうのは右腕になってしまいます。ただでさえクソザコな近接が更にクソザコになりました。

選べるのはワンチャン『使役』によつて気絶させるか、回避によつて時間を稼いで他の人達を待つかです。

しかしこのままだと身体能力クソザコというか、体力がクソザコな詩織ちゃんは確実に心臓が保ちません。

なーのーでー、今まで使つて来てなかったアレを使います。

そう、『ドツペル』です。

詩織ちゃんは普段からグリーンフィードをストックしているため、そもそも穢れが満タになる事ありませんでした。

しかも固有魔法の『使役』とドツペルの相性が悪く、試走ではドツペルを一回発動するたびに使役が全て切れてしまうという有様です。

あとベテランだと一体型になって本体ダメージも入るから、使う予定は無かったんですけど、まあこんな状況じゃね？

「アハッ！もつと！もつとだ弓有詩織イ！」

アツ待つて！このドツペルくんめちやくちや音デツカい！鼓膜無いなったぞ!!?ゲームの音量設定息してらう〜？

出したのは…『閉口のドツペル』ですな。

コイツはどこどころ骨が剥き出しになってたり、体が謎の黒い靄になっていたりする黒い鳥です。

今まで通りのカラスではなく、本当にただ全身が黒いだけの鳥っぽいナニカです。

いやだつて翼の先が手みたいになってますし…ぶつちやけ自身を鳥と勘違いしてるワイバーンくんです。

攻撃方法は、T H E ☆物量とかT H E ☆暴力とかみたいな圧倒的な手数です。

いえ正確に言うのであれば、発射される羽に斬撃属性が加わってるようですね。高速で向かってくるナイフみたいなものです。

そして最後にチャージされた特大謎光線で下から上に薙ぎ払って終わります。

「まだコレでエンドじゃないよネエー！」

バトルジャンキーかオメエはよオ!

やってやろうじゃねえかよ! オイ! アリナア!

でもドツペルの時間が切れて初回使用の詩織ちゃんの疲労がマジパナイです。ソウルジエムも一定時間濁りやすくなってます。

本来ならこの後に調整屋でドツペルの説明会が入りますが、おガキ様の講座で既に知っているのと魔法少女歴がベテランという事でまだぶっ倒れません。

しかしこれは1回のみであり、2回目を使うと即座に疲労困憊で気絶します。初回限定の仕様ですから諦めてください。

というか一回だけならいいんですけど、連続で発動しちゃうと周りの魔法少女達の精神的負担がね? パナイんですよ、本当に。

そのためここからはアリナのレーザーをひたすら回避してパライしてを繰り返す作業になります。

走者の集中力が今! 試される!

「詩織さん！大丈夫ですか!？」

「ぜえ…ぜえ…魔女は倒してやったぞ！」

「フェリシアさん…！無事だったんですね！」

おつと時間稼ぎが功を奏したようですね。

無事に魔女を倒したフェリシアと、翼の間を駆け抜けてきたまどかとほむほむが合流しました。

これで4対1だぞアリナア！お前の魔女もうねえから！ヴァアアアアアアアアアア！

(共鳴)

作品を壊しているのはアーティストだけってそれ一番言われてるから。なお最期の作品をぶち壊した人がここにいるらしいっすよ？

「ここは一旦手を引いて下さい、アリナ。」

魔女を倒された芸術家の叫びを聞いたなら、一応マジウスの保護者枠である梓みふゆの登場です。

彼女は浪人生でありながらも宗教団体の中間管理職で賃金もないため、今はまだ魔法少女救済の沼に浸かっています。

この神浜のヤベーやつをさっさと回収していつてもらいましょう。某芸術家はパーフェクトボディさんにタゲ移してもろて。

「……弓有詩織、まだソレは持っていていいワケ。それじゃシューアゲイン？」

おう帰れ帰れ、出来れば走者的にはもう顔を見たくないんですけど。

キューブを返済しなくてもいいそうですが、それってつまり借りの返済は延期してやるよって言う……。

これなんてガバ？流石にこの嗜好が過激になったアーティスト相手に、左腕を撃ち抜かれただけでは足りなかったようです。

まあ有り難く頂戴しておきますが、実際のところ更紗帆奈捕獲のオリチャーだったので、もう活躍の機会は無いんですよね。

「待っててください、今治療します！」

ああ、いろいろはちゃんの固有魔法が傷口に染みるんじや〜。

妹ういちゃんの病気の回復を願った我らがマギレコ主人公は、ソウルジェムのヒビすら治す程の治癒が使えます。補正働キスギイ！

そんないろはちゃんに回復を任せればご覧の通り、さっきのアリナソロで怪我した腕

も元に戻ります。

「ところで、あのアリナ・グレイと知り合いだったようだけれど？」

いやあ：知り合いといふかなんというか、向こうが詩織ちゃんのことを勝手にオモチャにしているだけです。

いざという時に詩織ちゃんが身を呈せば、少なくともアリナからの脅威は減らせると思いますよ？ 代わりの詩織ちゃんのカラダはボドボドダア！ になります。

もう既に疲労でヤベエイ！ から帰らせてください！ オナシヤス！

あとは自宅に戻ってしっかり休息を取るのです、今回はここまでにしようと思います。ご視聴ありがとうございます。



「それじゃあ、行きます！」

小さなキュウベえと詩織のクラスを抱えて、いろはちゃんは風が吹いているこの電波塔から飛び降りる。

それに続いてまどかちゃんとはむらちゃんも宙に向かって飛んでいく。

途中で彼女達の身体が消えたのを見て、無事にウワサの結界にたどり着いたんだってホッと息をついた。

それでもまだ不安と緊張感が全て無くなってない。

ここにマジウスの翼が向かってきているという話を聞いて、結界に出向く戦力は少数

精銳にしたまではないんだ。

でも、戦力を分けたいろはちゃん達がウワサに負けてしまうっていう可能性はある。少なくとも今の私には信じるより他にない。

しばらくしていろはちゃん達が結界から帰ってきた。

その中には噂の二葉さなちゃんも一緒にいて、いつもなら一件落着と喜ぶところ。でも今までは嵐の前の静けさだったのをすぐに知ることになる。

「あの人は…マギウスのアリナ・グレイ。マギウスの翼を束ねる幹部のうちの一人です…！」

「わざわざ説明ドウモ、だけどまさかうワサを倒してくるなんて、アリナ的にはノーセンキューなワケ。」

特徴的な話し方をする彼女、アリナ・グレイはウワサを倒した私達を快く思っていないみたいだ。

マギウスの翼の幹部をしているならば、彼女も魔法少女の救済を目的として活動しているのかもしれない。

でもまだちゃんとほむらちゃんが探している巴マミの事を作品の一部にした、と語

る彼女はとてもそうとは思えない。

本来魔法少女の敵であるはずの魔女を飼っているというアリナは、まるで昏倒事件の時の帆奈を彷彿とさせる。

全員が全員優しい子達っていうわけじゃないのは、私だって十分に承知していた。

だけど流石にこれは耐えられないような、純粹に気味が悪い狂気だ。

「気分はナーバスだったケド、一つ取り引きすれば許してあげなくもないワケ。」

「それって……どういう……。」

「……理解してるヨネ、弓有詩織？」

アリナに呼び掛けられた詩織に思わず目を向ける。

前だったらしいいなかったバイザーに阻まれて、その詳しい表情をしつかりとは確認できなかった。

かろうじて出た知り合いだったのかという質問に対して、彼女が小さく頷いた事から恐らく取引の事を理解しているのだろう。

いつから知り合いだったの!?!とか詩織に聞きたい事は色々と頭に浮かんでいたけど、大切な仲間をこんなヤツに渡すなんて絶対にしたくない。

「みんな危ない!」

「……待って、詩織さんが……！」

急に放たれた緑色の光線が私達に向かってくる。回避するために咄嗟に後ろに下がったのが悪かった。

結果的にその行動によって私達と詩織は分断させられてしまったんだ。

「行かせない！」

すぐに合流しようとする私達を遮ったのは、どこからともなくやって来たマジウスの翼、それにさつき塔脚で逃げていったはずの天音姉妹。

いろはちゃんからあの結界でのアリナの様子を聞くに、いくら詩織って言っても一人だとジリ貧になると思う。

誰か一人でもあっち側に行かないと、この状況はとてもマズい！

「今度こそはやってやるでございませう！」

「私達のドツペルで、ねー！」

だけどそれを妨げたのはまたしても天音姉妹だった。

それは過去にいろはちゃんが出していた、穢れを再利用する技だと思っていたもの。

普通の攻撃よりも火力があつて、終わったら終わったでソウルジエムの穢れが無くなって、追い詰めていたはずの相手の方が全快になってしまう。

口寄せ神社ではあんなに頼もしかったのに、いざ目の前で対峙すると果てしなく、厄

介極まりない代物だ。

：よく見れば天音姉妹の攻撃範囲が広いから、周りの翼達は巻き込まれないように離れた場所にいる。

たくさんいるのは間違いない：けど、確かに今、この瞬間だけは人が1人通つていけ
そうな隙があった！

「フェリシアー！」

「おう！任せろ！」

目くらまし代わりの炎扇斬舞。

そんなに多くの魔力は込めてない大技もどきだけど、マギウスの翼達の隙を突くには
十分な炎の量だった。

そうして生まれた間を縫って、詩織とアリナが居る方に。フェリシアがハンマーで進
行方向の敵を薙ぎ払いながら。

でもそれは悪手だった。

私達はマギウスの翼の幹部というアリナ・グレイの事を、いささか甘く見過ぎていた
んだらう。

「……………」

「うおわー!」

フェリシアが来たタイミングで油断した詩織は、アリナの攻撃で左腕を撃ち抜かれてしまった。

私のやった事が裏目に出た?でもあのままだともっと大変な事になっていたのかも
しれないし……。

一旦落ち着いて推測しよう。多分アリナは結界なんかを自由に操作できる固有魔法?を持っているみたい。

それでフェリシアを魔女の結界の中に飛ばしたんだ。どのみち倒す必要はあったけど、力をつけた魔女を無事に倒せるかどうか。

向こうから怪物のような咆哮が響く。

カラスに似た怪物は見たこと無いけれど、それに繋がっている人が見えてその正体に
思い至る。

アリナの気味の悪いドツペルと戦っているのは詩織のドツペルだ。アレが使えるほどソウルジェムが濁ってしまっていた。

つまりそれだけ詩織が追い詰められているという事。

早く、急がないと!

あと他に向こうに行けそんな道は：まどかちゃんとはむらちゃんの所。

多分ししょーと私がこの中だと比較的強いから、翼達もそれを分かつてやちよと私をマークしているんだ。

それに翼の連携は側から見ても駄目だと思えるくらい、稚拙でバラバラで息の揃ってない攻撃ばかり。

初めて会った魔法少女同士と一緒に魔女を倒そうとするのよりも酷い。

一番の障害は天音姉妹だ。

前はすぐに笛を取り上げちゃって、何もさせずに終わらせたって詩織から聞いた。

攻撃手段が笛を媒介にした音って事は、詩織が前に話してたように、双子の笛を取って仕舞えばいいんだ。

あの時はかりんちゃんの固有魔法によって成り立つ方法だった。

でもこの場に物を取れるような魔法を持っている子はいない。詳しくは知らないけれど、それが出来るような魔法少女はいない。

せめて一瞬だけでも天音姉妹に隙を作れたら……。

いや、出来る。

一瞬だけ天音姉妹の隙を作る方法があつた。『偶然』にも2人が手を滑らせて笛を落としてしまい、ダメージを与える音を止ませる状況。

私、由比鶴乃の『幸運』なら。

「わっ、手が滑つちやつた!」

「あ…私もでございます…。」

「今よ! 鹿目さん、暁美さん!」

やちよの指示によつて2人は駆け出す。止めようとする翼達は追いかけるけど、もちろんそんな事は私達がさせない。

これで多少は良くなった…! 互いに消耗しきつているけど、ここさえ凌げば!

「ここは一旦手を引いて下さい、アリナ。」

辺りに響く、聞き覚えのある声。

いつのまにかみかづき荘から姿を消して、マギウスの翼に入っていたみふゆ。この前会つた時同様に意見は譲らない気だ。

アリナ・グレイも天音姉妹も黒羽根も引き連れて、以前とは変わってしまった彼女は

電波塔から去っていく。

今回のウワサの騒動はこれで幕を閉じた。

みふゆもそうだけど一年前と比べると、やっぱり色々と変わった事が多い。

まだ私に隠してる事はあるみたいだけど、やちよはいろはちゃん達と会ってから多少前向きになったし、ももこもアツチでやっていけるし。

逆に詩織は最近なんだか元気がない。多分ウワサにも首を突っ込んでいるから、働き過ぎかなんかで疲れ切っているんだと思う。

……とにかく事は済んだから、まずはみかづき荘歓迎パーティーだね！

閉口のドツペル

その姿は、怪鳥

この感情の主は人々を助け続け、いつか来たるべき成就の時を待つ。

このドツペルは絶えず周囲に疑問を投げかけているが、鳴き声は騒々しい獣の咆哮にしか聞こえず、今までに意味を理解した者は存在しない。また、唯一ドツペルの意図を知る主は、複雑な心持ちながらも未だ答えを出せずにいる。

問いの答えが得られるその時まで、ドツペルは解の追求を諦めることを許さない。やがて腐敗した身体は暗雲となりて崩れ去り、後に残された異形の骨ごと頑なに口を閉ざしてしまうだろう。

Part 31 気になる聖夜の見所さん!?

12月に入ってだんだんとクリスマスが近づいてきた。

といつてもその日まであと数日とちよつとしか残されてなくて、水徳商店街もクリスマスに浮かれてイルミネーションがそこかしこに飾り付けられている。

かくいうこの相談所も例外ではなく、この前、楽しい先生と一緒にクリスマスの飾り付けを行なった。

そして恋人同士で過ごしたいという人が多いから、ここが相談所というのもあって、悩める乙女の恋の相談が最近は特に多い。

先生は恋愛の話が好きだからか、そういう話にはすぐく乗り気だ。ボクも一応好きだけど、ここまで来ると流石に胃もたれしそうなくらい。

ただでさえ重症の恋煩い患者が身近に存在するんだし……遠慮してもバチは当たらないと思う。

もはやこの常連客と化しているボク達のリーダー、常盤ななかはやっぱり言うまでもなく。

今日も今日とて、相談をしに来ていた。

見るからに気分が落ち込んでいるななかは……あー、多分だけど件の相手を誘って断られてしまったんじゃないかな？

「この前の作戦はどうだった?!?しおりの反応は!?!」

「いえ、その……アルバイトが忙しいと……。」

「あちゃー、タイミングが悪かったかあ。」

案の定、予想通りの中しちやったよ。

イベント時はバイト先のシフトが詰め込みになるから、誰かと一緒に過ごせるような時間がほとんど無いらしい。

でも詩織さんに断られたという事よりも、とても申し訳なさそうな表情をさせてしまった事の方が、なかなか的には心に来たそうだ。

「とりあえず、もうすぐピザ届くから食べてかない？」

「失礼ながら……お言葉に甘えて……。」

うん……流石にバイトとか仕方がないとはいえ、こんなにしょぼくれているのを見ると、なんだかボクまで悲しくなってきた。

でもこの問題は解決策と呼べるような策が有るわけじゃないから、ボくら相談所としても何か出来る事は無いなあ……。

「……またななが来たのか……。」

「あ、美雨。今日は相談所に何か用事？」

「大した事じゃないヨ、少し意見を聞きに来ただけネ。」

そんな中、相談所に美雨が訪れた。

この時期に来るなんてまさか恋の相談とか？って思ったボクの考えは、詳しい用件を聞く前にすぐさま否定される。

美雨の呆れたため息と共に、目の前に出されたのはいくつかの空き物件のページを印刷した紙とか。

それを相談所であるここに持ってきたって事は……え、美雨もしかして引越すの!?

と少し大きさに勘違いしたけれど、どうやらそういう訳じゃないみたいだ。

前に美雨が電話していた相手、いろはちゃんのために宝崎市に派遣した人が神浜に引越して来るからだそう。

事件以降の経過観察も十分だろうし、いろはちゃんも神浜市に移住して、もうあつちに滞在する理由が無いって話してた。

それで今、引越し先について意見を貰おうと思つて来たそうなんだ。

大した用じゃないつてのは本当にそうらしくて、あくまで住居の印象とかを聞きに来ただけって言つてた。

「先に美雨の話を済ませちゃおうか。あつちは先生がなんとかしてくれるかもだし。」

「そういえばななかは……まあ予想は付いてるヨ。」

「多分だけど当たってるかな…詩織さんがバイトで忙しくてクリスマス行けないらしくて……。」

話題のななかは完全に意気消沈している。

あの様子だとしばらくの間は動きそうにないだろう。

でも誘い自体は失敗してても、詩織さんを普通に誘えるくらいにまで成長したのは、

初期と比べればかなり良い進捗だ。

ななかにとつても『常盤ななかの恋を見守る会』にとつても、この事は新たなる第一歩に違いない。多分。

最初こそはダメダメだったけど、やっと恋愛面においていつものななかが出せるようになってきたのかもしれない。

「…すみ、ません…ピザの、宅配……。」

「……………」

「あ、詩織さんだ。宅配のバイトですか？」

「…うん…えと、大丈夫……？」

ごめんななか、そういう気がするだけだったかも……。

▶?

聖夜のひと時を過ごしていくRTAはーじまーるよー

前回は電波塔で神浜のヤベーやつに必死に抗いました。

そしてみかづき荘に座敷わらしが住み着きました。これは縁起が良くなること間違いないです。

今回はその続きからやっついていきます。

ところで視聴者兄貴姉貴！ゲーム内時間12月ですよ12月！12月だけの期間限

定イベントといえれば何か分かりますよねえ！

ええ、皆さんお察しのクリスマスです！

ゲームのバージョンによりけりなのですが、大抵のプレイヤーは第5章〜第6章の間にとにかく多くのイベントが入ります。

ただし何らかの原因によって本編の開始を早めたプレイヤーは例外です。主に更紗帆奈関連の事件がね……。

まあソシャゲ版でもそうですが、理由を説明すると、チームみかづき荘（完全版）が揃っていて、やちよさんの「環さん」呼び（6章から「いろは」呼びに変化がまだ）だからです。

そのため、8月の『みかづき荘のSummer Vacation』から、2月の『アラカルトバレンタイン』までの半年間はメインストーリーが進みません。

でも不思議な力によって皆の学年は上がりませんし、詩織ちゃんを含むギリギリ未成年の人達も成人しません。なんでやろなあ……（すつとぼけ）

さなちゃんのみかづき荘に慣れるのと、チームみかづき荘の絆が深くなるには仕方ない期間の長さ。ソシャゲだし多少はね？

このゲーム（架空）でその間にプレイヤーが退屈しないよう、期間限定イベントがモリモリだが、これはRTAなので却下だ。

走者は引き当てませんでしたでしたが、かりんちゃんのマジカルハロウィンシアターのように、一部の期間限定イベントは確率で発生します。

なぜ発生が確定ではなく乱数なのかは、おそらくイベントのマルチエンディングの都合上ですね。難易度ハードで下手したら神浜崩壊を迎えてしまいます。

といってもシアターは開催されてたそうです。まあハロウィンの日にバイトが入って参加できませんでしたけど。

ミナギーランドで中の人スタツフしてたからね、仕方ないね。

ちなみに着ぐるみなのでやり過ぎせましたけど、普通の格好でバイトしてたら信頼度イベに捕まります。

それで今回のクリスマススイベントですが、二つあるうちの一つが発生いたします。

具体的に言えば、↑ホーリーマミ↑かクリスマスデスカリブーのどつちかが出るイベントです。

光る、鳴る、やって来る！選べる二択！DXホーリーマミ、DXホーリーアリナ！さあ、君はどっちを選ぶ？

ちなみにどっちに当たってもクリスマス期間限定で敵対しません。これに関しては普段ヤベエアリナも同様に良い子になります。

神浜のヤベーやつのおモチヤにならなくて済むよ！やったね、詩織ちゃん！

そして実はこのクリスマスイベント、どちらが発生するか事前に判断する方法がございました……。

「おっ、詩織じゃん！」

「あ…詩織さん、こんにちは。」

「それ美味そーだな！一ついくらなんだ？」

「えっと、ご飯の前だから控えた方が……。」

それはたった今やってきたフェリシアときなちゃんです。正確にはクリスマスムードにあてられたフェリシアです。

イベント分岐の条件はたった一つ、たった一つのシンプルな答えなんですよ。ズバリ、フェリシアがクリスマスを楽しむか楽しまないかです。

彼女が楽しむならホリナルト、楽しまないならホーリーマミナルトです。

ぶっちゃけRTA的にはホリナの方が良いんですが、ソツチが発生しても会えるかどうか分からないので、(どっちも大差は)ないです。

「なー詩織、クリスマスって何が楽しいんだ?」

今回はどうやら……神浜聖女さんの方みたいです。

まあ詩織ちゃんもバイト戦士ですから、クリスマスの予定は全部アルバイトに突っ込むんですけども。

「じゃあなー!」

「さようなら……!」

はーいサヨナラ!神浜のヤベーやつに会わないように気をつけて帰るんだぞ!

そういえばこの前、ななかさんにクリスマスはどうですか?と誘われましたが、クリスマスにバイト入ってたので泣く泣く断ったんですね。

生憎クリスマスというか12月はピザとかチキンとかケーキとかの配達でいっぱいはいっぱいでして……。

せっかくなら相談事を打ち明けてくれない組長と一緒にクリスマス過ごしても良かったですね。好感度まだ足りてなさそうですし。

それではいつも通りなんか有るまで倍速しましょう。

ちわーす、神浜ピザ宅配サービスです。

ここが水徳商店街、エミリー先生の相談所で間違いないませんか？

「合ってるよー！まさか知り合いのしおりんが来るって、これめっちゃ奇跡じゃない!?」
ええ、本当にそうですよ。

という訳でピザ配達の間中ではありませんが、たまたま相談所を訪れる事になりました。はえーすっごい偶然。

まだバイトは続いているので直ぐに業務へ戻りますけど、ざっと相談所を見渡してみましようか。

何故か固まったままの組長に、エミリー先生の助手のあきらさんに、色々と紙を手を持っていく美雨さん。

うん、いつもと変わらないな！

というか前からずっと思っていましたけど、なかなか組がここに來ること割と多くないですか？走者の気のせいですかね？

まあ気にしてもしょうがないですね。今回の記録では相談所を集まる場所にしていくだけでも知れません。

じゃあ詩織ちゃんはバイトの続きに行くのでサヨナラ!

いやはや倍速してたら、あつという間にクリスマスですよ!

めちやくちやシフト入れてたので、今月だけでも給料がガツポガツポです。これから大量の出費があつても平気ですねクオレハ……。

さて次のバイトに行きますか……つてうん? 誰かから電話つすね、いやこれバイトの店長だー!?

……もしもし? 何ですか? え? 今日のバイトのシフト無くなつたんですか? 自由にクリスマス満喫しなさい?

なんだよ……意外とアツトホームじゃねえか……。

いやでもそれは急過ぎて困りますね……今日の夜勤はそだけでバイトやる予定でしたから、いかんせんクリスマスに空白が出来てしまいましたよ。

なんかする事ありますかねえ……? 誰か他の人の予定とかまだ空いてるでしょうか?

「突然失礼。」

誰だお前は!?

…つて神浜聖女の†ホーリーマミ†さん!†ホーリーマミ†さんじゃないですか!?
何故ここに?まさか自力で脱出を……?

いや本当に何故ここにいますかねえ……?詩織ちゃんはバイトのシフトが急に
無くなつたくらいなので、イベントの助ける人の勘定には入らないと思うんですけど
(名推理)

「あなたにもクリスマススの奇跡を!」

えっ!ちよ、ちよつと†ホーリーマミ†さん!?いくら詩織ちゃんが不健康な生活を
送つてて軽いとはいえ、流石に19歳を小脇に抱えて運ぶなんて……。

あつあつあつあつ!待て待て!一体どこ行くねーん!おーい!

ここ何処だよ……。

一体どこに連れてきて…つてもう既に居なくなってますね、どうやったらあんなに早
く姿を消せるんでしょうか。

もう辺りは夜なんですが詩織ちゃんが別のバイト終わった後で良かったですよ。寒

すぎてしんどくなっちゃう可能性があります。

それにしてもあの神浜聖女さんは何だったんでしょうか？選択肢は出ていませんでしたから、詩織ちゃんの違いを叶えてたという事ではありませんよね。

誰かの奇跡に詩織ちゃんが関係していたとか……いやでもここに連れてこられて別に何かしろって言われてはいませんし。

そもそもそんな事を願うくらい的好感度の子居ませんからね、詩織ちゃん。RTAの宿命でかなり信頼度パラメータはぼちぼちなんですよ。

まあそこら辺を適当にぶらぶら歩いておきますか。する事無さ過ぎて正直暇やねんな……。

「おや？お久しぶりですね、詩織さん。今日はバイトでお忙しかったのでは……？」

おっと組長じゃあないですか！丁度いい所に来ましたね。

どうです？今から一緒にクリスマス夜の夜を過ごしません？実はバイト先のシフトが急に変更してしまいました……。

あら、なかなかさんもクリスマスぼっち仲間なんですか？気が合いますね。

……もしや組長はこの前詩織ちゃんが断ってしまったからクリぼっちに……？まさか、まさかね。

あ、という事はここで組長の好感度不足を解消できるかも知れませんね。やったぜ。お前天才かよオ！

神浜聖女さんはサンタかなにかだった…？

ななかさんって本当に最初からずっとお悩みを明かしてくれないんですよね…相談所の常連客になつてゐるっていうのは知ってるんですけど。

というか今思いましたが、いろはちゃんも組長も葉月さんもマミさんも一応全員同年なんです…中学3年生とは……？

とりあえずここで、組長の信頼度と好感度を上げて聞き出せば良いんですよ。そうすれば走者の憂いもきつとなくなる事でしょう。

じゃあ早速、稼ぎの旅へいざ行かん！

詩織ちゃんはこれから組長とクリスマスを過ごすので、今回のパートはここまでにしておきます。

ご視聴ありがとうございました。

▶ ?

クリスマス。

それは人々が憩う特別なイベントの日。

街中ではツリーやイルミネーションが見渡す限り、辺り一面に煌びやかに飾り付けられていた事だろう。

いつもよりも眩しく輝く風景を堪能しつつ、通りを行く人々は誰もが幸せそうな表情

を浮かべている。

もう既に太陽は沈み、空は暗さを増して、月は神浜の街並みを静かに照らす。そう：人々にとつてクリスマス夜の夜というのは、まだまだこれからなのである。

そんな神浜のとある通りを一人の少女が歩いていた。

彼女、常盤ななかは最近になつてようやく恋患いに耐性がついてきた、いわゆる一端の悩める乙女というやつだ。

決して内に秘める情熱が冷めたという訳では無い。

むしろ今もお病は進行中だが、回りに回つた恋慕はかなり遠回りな一周を回つて、ようやく彼女を冷静にさせる事に成功したのだ。

しかし耐性が付いてきていても、聖夜を一人で過ごすのは寂しいだろう。

普段の魔法少女活動を行う常盤ななかは、誰から見ても冷静沈着な策略家という印象を受けると思われる。

よくよく考えてみてほしい。

いくら魔法少女になる際の願いで復讐を望んだり、行いがヤの付く自由稼業風に見えたりしたとしても、彼女が中学3年生の15歳なのは確固たる事実。

常盤ななかはまだ年端も行かぬいたいけな少女なのだ。恋愛面に対する免疫の無さも、つまりはそういう事である。

彼女が今、通りを歩いているのに特にこれと言える理由はない。

このまま家で大人しく過ごすよりはただ、何となく無性に外を出歩きたかった…といった気持ちで勝つただけだ。

何だかんだでこんな聖夜をしつかりと歩く機会はなかなか無いように思える。

もちろん自分の年齢も考慮しての事でもあるのだが、魔法少女の活動としても夜中に神浜をしつかりと見て回るのは無いだろう。

普通だったらあまり考えられない行動であった。

だが唐突にやってきた1人の乱入者によって、彼女の静寂は打ち破られることになる。

「突然失礼。」

「……、あなたは!？」

一般の人が着るには全体的にとても派手で、魔法少女が着るにはやたら珍妙な白い服装の少女。

いや、常盤ななかは彼女の事を知っていた。

以前志伸あきらも含めてお茶会を共にした、見滝原から来たといういつぞやの魔法少女、バمامミその人だ。

けれども果たしてあのバمامミがここまではっちゃけるものなのだろうか？

しかもこんなクリスマス夜の夜を見滝原ではなく、神浜の土地で過ごすのはいささか疑問に思うところである。

「あなた、バمامミさんでは?」

「いえ、私は困っている人々に救いの手を差し伸ばすしがない聖女。あなたも奇跡を祈りましょう!」

聞いてみたところどうやら違うと答えられてしまったので、もしかしたらバمامミに瓜二つの容姿を持った方なのかも知れない。

しかし、そこまで色々と考えていながら、常盤ななかが出した答えは多少なりともズレたものだった。

これは俗に言う『コスプレ』なるものをしていなのだ、彼女はそのやや偏った知識から結論付けた。

たしかコスプレイヤーという人物はなりきるために変装をして、役を演じきるのだと僅かながら耳にしたことがある。

現状から考えてみるに、バママミはクリスマスの聖女という役を演じているのだろう。なればこそ、水を差すような無粋な真似をするわけにはいかない。

ある意味当たらずとも遠からずといった解釈ではあるのだが、ともかくとして常盤ななかはそのように考えたのである。

「ええ、実は一つ悩みがありました…その…意中の方が良きクリスマスを過ごせるかどうか気がかりなのです。」

「それならばその方の事を想い、聖夜に祈りを込めて！」

たとえばバママミのノリに乗ったものだったとしても、たつた今言った悩みと願った祈りは本当のこと。

多少自分の欲は出てしまっていたが、良い夜を過ごしてほしいという気持ちは嘘偽り

のない常盤ななかの想いだ。

言われた通りにその事を祈って僅かな間。

ふと目を開けてみると、いつの間にかバママが何処かへと消え去っていた。

ほんの数秒の出来事は疲れから来る幻覚だった可能性が浮上したが、コスプレとは魔法すらも使って本気で取り組むものなのだという、ややズレている学びを得られたに違いない。

しかしながら、クリスマスの不思議体験はまだ続いていた。

「…ななか、ちゃん……一人……？」

件の意中の相手、恋患いの原因、本来ならバイトをしていたはずの弓有詩織は、急なシフト変更によって暇を持て余していた。

そのためたまたま街に出て、何かないかと散策をしていた訳である。常盤ななかを見つけたのもその一環であった。

こちらからすれば突如として目の前に現れた弓有詩織に、いつもの常盤なかななら即座に固まって動かなくなるだろう。

けれども彼女はもう、以前のように止まってしまおう少女では無い。

心拍数は上がり上がりになっているだろうが、なんとか平静を保ちつつ、かろうじて思考を停止させないように成長できたのだから。

「…断っちゃった、けど…もし、良かったら…今から、どう?…かな?…」

「………そんな、喜ばしい限りです。」

「…良かった…誰かに、誘われるの……久しぶりで、嬉し、かった…から……。」

これがクリスマスの聖女の力なのか…と、あらぬ方向に迷走しそうになる現実逃避気味な脳内を引つ張り、こちら側へと無理矢理にでも戻す。

先ほどまで憂いを帯びた気持ちは何処へやら、これぞまさしく聖夜に似つかわしいような幸福感なのである。

商店街の通りを連れ立って歩く2人は、だいぶ前に水名区で茶会をしてから随分と経つ。

当時同じくらいだった身長は、育ち盛りの中学生というのもあってか、いつのまにか

常盤ななかの方が追い抜かしていった。

今までは脳の処理が追いつかなかったため、このようにまじまじと見つめられる余裕は無かったのだが、改めて弓有詩織の事を直視してみる。

あの時とは違って自分の目線より下にいる彼女は、その不健康さに磨きが掛かっているような気がしないでもない。

「…サンタ、クロース…知ってる……？」

「ええ、存じております。クリスマスに子供達へとプレゼントを配るといふ方ですね。」

「……サンタ…来たこと、なくて…良い子に、してれば、来る…らしい、けど……。」
「それはサンタクロースが間違っているのでしょうか。むしろ詩織さんはもう少し欲を張っても良いと思いませんか？」

率直に出た常盤ななかの意見に、弓有詩織は小さく首を横に振る。

謙虚さは大事だと昔から揶揄されるが、彼女の自己肯定感の無さには多くの魔法少女が呆れるところだった。

「…でも、きつと…まだ…足りてない、から。」

「そうですか…無理、しないでくださいね？」

「……うん……。」

並んで歩きながら他愛ない世間話をする。何気ない動作の暖かさを改めて実感していた。

商店街の通りは終わり、道路に面する通りでは彩られた家々や店が建ち並ぶ。静かではあるが、人々の笑い声がそこから中から聞こえる。

けれども、ここは神浜。

そんな平和な風景をぶち壊しにかかるのは、もはや日常茶飯事と言っても過言ではない治安の悪さだった。

「だれかーたすけて……」

聖夜と言えども、いやクリスマスだからか、夜に出歩く家族からはぐれた子供を誘拐する犯罪が起きていた。現在進行形で。

ただ犯人にとって運が悪かったのは、たった今犯行現場を目撃してしまった人物が弓有詩織だという点である。

「……電話、してて……すぐ終わる……」

「一体何をする気ですか？」

「……………」

その光景を見た弓有詩織は突然、いつも持っているシオルダーバッグの中に手を突っ込み、その中から一本のペンを取り出す。

何の変哲のない一般販売の日用品。書きやすいからと日々愛用しているただの普通のボールペンだ。

「おい！ガキを入れろ！車を出せ！」

例の誘拐犯がグループ犯行のようであり、無理矢理車に子供を入れて連れ去ろうとする。

主犯格と思しき人物の呼びかけでエンジンを始動した車は、動き始めてすぐに衝撃によって徐行し最終的に止まることになる。

「……………」

たった今、投げた弓有詩織のボールペンによって。

まあ当然と言えば当然なのだが、魔法少女になつた者は並みの一般人よりも身体能力が強化される。

加えてそこに彼女の固有魔法も足されたら、ただの筆記用具も一本の矢に等しくなるものなのだ。多分きつとおそらく、推測に過ぎないけれども。

タイヤを撃ち抜かれクラッシュした車に、すぐさま警察が駆けつける。事態は確実に収束へ向かっていった。

「……現場から逃げてきてしまいましたがお見事です。よく当てましたね、詩織さん。」

「……いつもの、で……慣れてる……から……。」

「そして……すみません。せっかくのクリスマスで、こんな事に遭ってしまつて……。」

「……違う……救えて、よかつた……良い事を、した……だから、良いクリスマス、良い聖夜。」

そう言つて弓有詩織は安心させるような笑みを浮かべる。そこには少しだけ自嘲気味な呆れた困り笑いも含まれてはいた。

そんなこんなで今年の聖夜は終わりを告げた。

常盤ななかにとつては以降も思い出す事になる、印象的なクリスマスの思い出となるだろう。

先に言つておくが、デートではない。

デートと仮定してしまつた場合、誰かの頭がショートして動かなくなつてしまつたため、それを考慮してこのように表現しておく。

2人とも急に決まった予定だったため、終始グダグダと散歩しているだけではあつたが、これも一種の聖夜の楽しみなのかもしれない。

「……メリークリスマス、良い夜を。マイヒーロー。」

今も　　は彼女を見守っている。

Part 3 2 真実を語る記録

『一年前の誓いを思い出してください』

みふゆが去り際に放ったその言葉に、私は思わず押し黙ってしまった。

最初の頃、環さんは助手として扱い、彼女とはあくまで協力関係の範疇でしかなかったはずだ。

だけれど鶴乃が増えて、フェリシアと二葉さんが増えて、それによつてどこことなく気を許していた私があった。

二度ある事は三度あるというのか、またしても同じことを繰り返して、更なる轍を踏んでしまう所だったのだ。

『リーダーとして生き残りたい』という願いを叶えたが故に、『他の仲間が自分の代わりに犠牲になる』固有魔法がある限り、嫌が応にも私は生き残ってしまう。

固有魔法が彼女達の命を奪ってしまうかもしれないという可能性は、今もまだ大いに存在している。

……かつてみかづき荘の一員だったかなえやメルのように。

最終的に遺体すらも見つからずに行方不明とされている2人は、互いに面識があつた訳でも無いのに、決まって最後は満足そうに笑っていた。

もし願いが仲間と呼べる存在を引き寄せ、私をリーダーと思わせるようにさせているのだとしたら……そう考えるところでも後ろめたい気持ちになる。

たとえソレが不確かな根拠のない机上の空論であつても、願いを叶えたいと望んだのは紛れもなく自分だから、魔法少女の契約というのは本当にままならない。

「いつまでも隠し通すのは……ほら、無理だからさ。アタシは覚悟決めたよ。どうせ魔法少女ならいつかは知らなくちゃいけない事なんだ。」

みふゆが誘ってきた講義とやらに行く環さん達を、私は声もかけずに引き止めすらしなかつた。

そんな私に、珍しく久しぶりにみかづき荘を訪れたももこが話す。

どうやら彼女はチームを組んでいるあの2人に魔法少女の真実を伝えるつもりらし

く、決意したももこの瞳には静かに炎が宿っていた。

「……確かにアタシはやちよさんみたいに沢山の経験があるわけじゃない。でも、自分で言うのもアレだけど、バッドタイミングに遭った経験だけはピカイチだ。」

少し言葉を逡巡して、ためらいがちに口を開く。

やや照れ臭そうな困り顔で語る彼女の話を、果たして私はどのような気持ちで聞いていたのだろうか。

きつとその時の自分にも、後から思い返した自分にも、おそらくは分からないのだろう。

「一生に一度の願い事も『好きな人に告白する勇気が欲しい』なんて言ってる間に、結局別の子が告白してる場面に出くわしちゃったし……まあ、とにかくだ。」

一方的の話していた言葉に一区切りつけて、ももこは私の目を真正面から見据えて対峙する。

今までの経験と直感が告げる、嘘など一つもない心からの言葉。

彼女の表情はまさしく真剣そのものだった。

「後悔、するなよ。」

みかづき荘からももこが去った後でも、私はそのたった一步を踏み出せないままだった。

それからしばらく経って、みかづき荘のチャイムが押される。

外はまばらに小雨が降り始めた頃、ももこの他にもまた一人、新たに私の元を訪れた人物がいた。

「……いかない、の……？」

ろくに傘も差さず、ただ着ているパーカーのフードを被っただけの、稚拙な雨の対策をしている彼女。

「怪訝そうな顔をした弓有さん。」

玄関の扉を開けた私に向かい、開口一番に放った言葉がそれである。環さん達が講義に参加するという事をどこから知ったらしい。

首を横にも縦にも振らないまま、ただただ沈黙し続ける私を見る目が、時が経つにつれて次第に細くなっていく。

私に対する眼の色が変わるのを感じた。

無言のまままで交差すらしい平行線上の視線と意見は、彼女が小さく息を吐いたところで終わる。

そのうち諦めた、もしくは呆れたようなため息をして、懐のバックから取り出した手帳にペンを滑らせる。

スラスラと書き連ねる文字は、いつも通りの彼女が話すよりも速いスピードで、文章を形作り意味を成していく。

「…何しても、知らない…けど…覚えて、ほしい、こと…が、ある。」

「………何かしら。」

「…もし………良い子、じゃなくなる…なら………止めるよ。絶対に。君の為にもね。………うん…それだけ………」

そして、いつも通りの眠そうな緑色の目に戻る。

やがて全てを書き終えてそのページを適当に千切り、私の目の前に突き出して渡すと、その言葉を言い残したままこの場から立ち去っていった。

彼女がいつも別れ際に渡す飴は、今日に限っては一つもない。こんな私には当然のことだ。

彼女から渡されたメモ。

今すぐに環さん達を迎えに行った方が良いという催促の内容だった。ご丁寧に例の記憶ミュージアムの場所まで記載されている。

仲間というのを否定していても、彼女達が私と協力関係だというのに変わりはない。そもそも最初から協力関係だと強調していたのは、環さんでも弓有さんでも他の誰でもない私自身だ。

彼女達とは親密なわけではないが、せめて自分の家に泊めている知り合いくらい助けてやれ…という事なのだろう。おそらくは。

まったくもって…本当に……………

▶ ?

記憶ミュージアムへ主人公達（定員2名）を助けに行くRTAはーじまーるよー

今回は我らが組長、常盤ななかと一緒に楽しいクリスマスを過ごしました。

詩織ちゃんは相談所にピザを届けたり、誘拐を未遂にしたりと、色んなところで大活躍です。

途中で某神浜聖女にも会いましたが、タイムとは何ら関係が無いので誤差だよ誤差！

今回はその続きからです。

倍速の間にどっかの店でバイトをしていた際、マグカップを買いに来ていたみかづき荘がいたので、そろそろアレが来ます。

もちろん第6章です。第1部が全10章+ α なので、ここから後半戦ですね！

時期的にも近頃始まる第6章『真実を語る記憶』は、件のみかづき荘にみふゆさんが突撃してからが本題です。

猶予期間は長いけど、実行期間は短いつてそれ一番言われてるから！

実は今回の章で詩織ちゃんが介入するのは後半なんですよ。

具体的にはいろはちゃんとやちよさんだけが、件の『記憶ミュージアム』に取り残されてからです。

鶴乃ちゃんとフェリシアとさなちゃん、マギウスに洗脳されてからが本番だぜ！

ちなみにコ→コ←は乱数要素で洗脳されない場合もあるので、RTAにおいては要リセポイントです（8敗）

本来通りに進まなきやチャートの意味が無くなっちゃうダルルオン!?

そして今回の中ボスである『記憶キュレーター』のウワサ』はいろはちゃんの覚醒強化素材になります。

ここにいるはちゃんがチームみかづき荘のリーダーになる事で、やちよさんの固有魔法（実は解釈違い）が発動しなくなるって寸法よオ！

そういえばやちよさんって魔法の効果？経験？によって、『嘘を見抜く』という副次効果バフがあるんですよね……。

実際に対策を怠り過ぎると、まじで大抵の悪役チャートでは彼女が天敵になります。それに加えて年齢由来のステータス弱体化がほぼ入らないですし…みふゆさんはしつかり弱体化入ってるんですが。

……ん？あれ、そういうえば詩織ちゃんも弱体化補正全然入ってないんですね？なんで？（なんで？）

まあそれは置いておきましょう。

肝心のいろはちゃん達の講義は正午から行われます。お昼ご飯が欲しい子は先に早弁しといて下さい。

学生が正午から行けるといふ所と、鶴乃ちゃんが第7章まで皆勤賞を崩した事が無い事から、この講義が始まるのはゲーム的な都合でも休日です。

午前授業の可能性もありますが、その場合、神浜大附属と水名女学園と中央学園の三つが必要なので…確率としてそうそう無いでしょうね。

それですが、視聴者兄貴姉貴達は第2章の時に起こったガバを覚えていますでしょうか？

ええ、詩織ちゃんマジウス勧誘講義事件、及び詩織ちゃん謎暴走事件の時のことを思い出してください。

あの時に記憶ミュージアムに行つて場所を先に知つてゐるため、今のうちに義手くんと神浜カラスネットワークで監視しておく事ができます。

いろはちゃん達の目撃情報が来れば、詩織ちゃんがすぐに向かえますからね。魔法少女相手の商人の力は伊達じゃないつてことでここは一つ。

つまりアレはガバではなく時短という訳なのですよ。これはまさしくQED、証明完了です。

というわけでやちよさんを除くチームみかづき荘の情報が出たら、近くまで行つて待機していきましょう。

そしたらやちよさんが迎えに来るのを待つて、ちよつと経つた後に入れば完璧です。すね！いや、惚れ惚れしちゃうチャートだなあ。

それじゃあ何かあるまで倍速しましょう。

あれれ、おつかしいぞ？どうして記憶ミュージアムにやちよさんが来ないんですか？（現場猫並感）

本来ならもうとつくに來てもいいくらいに時間帯なんですけど……はて？難易度ハード特有のクソ乱数でも引きましたかね？

仕方ありません。走者が動くより他に方法はないでしょう。

ここは詩織ちゃん自らみかづき荘に出向いて、やちよさんがお迎えに來るように説得してみます。

へい、やつちゃくんさあん？ちよつとお迎え（クイツ）行かない？

え…無言ですか？なるほどココが正念場とかいうヤツですね？詩織ちゃんも負けじと見つめ返しましょう。

いや、場面に変化がなさ過ぎるツピ！

このままじや2人とも到着が遅れて、いろはちゃんまでやられてジ・エンドって事態になりかねないので、やちよさんにメモだけ残して先に行きますか。

でも注意点としてやちよさんより先には入りません。走者としては詩織ちゃんの過去バレとか経歴ガバだけでお腹いっぱいなんでね……。

一応ハードと言えどもタイムリミットの区切りはちゃんとあるので、ギリギリまでそこを粘ります。

いざとなつたら『使役』を掛けて、それとなく迎えに行きたくなるように、やちよさ

んの意識を誘導します。

情報提供者らしく記憶ミュージアムまでの道のりと周辺情報の手書きマップも追加しときますね。

オラ！サツサといろはちゃん相手に過去バレをかましてくるんだよ！そしてちゃんと名前で呼ぶような関係になれ！

チームみかづき荘を再興してもらえないと、また走者が終わりにき試走の旅に出かけなければいけないんですよ！オナシヤス！

それじゃあ詩織ちゃんに行く前に甘いものを摂取して、十分に糖分補給してから向かうんで…今度は戦場で会おうな！

いやあティータイムは心安らぐなあ……ん？何ですかね義手くん？

あ、やっとやちよさんが記憶ミュージアムに向かったんですか？こうしちや居られねえ！飲んだる場合かぁー……！

気を取り直しまして、ようやくここから第6章『真実を語る記憶』の本番に入っていきます。アツチの記憶の追体験はもうとづくに終わってるっしょ。

まあ詩織ちゃんはマギウス達と遭遇したくないので、もう少し遅れてから入場しますけどね……どつかのヤベエイ某芸術家のオモチヤにされたくないですし。

「へ？うわ！ビックリしたあ！……あなたもここに何か用事があって来たんですか？」
具体的な目安としては今章で満を持して登場する彼女、美樹さやかが現場に現れてからです。

本来なら近くに来たのを確認したら、先に入って待つていた方が良かったんですけど……困りごとレーダーのせいでも話しかけちゃいましたね。

多少は怪しまれてしまいますが、ちょうどいいので事前に交友関係を広げておきましよう。

RTAにおいては連携大事！信頼度大事！好感度大事！運大事！これならまったく問題ないな！ヨシ！

「皆さん気をつけてください！」

そしてさやかちゃんと一緒に乱入して、少しの会話イベントを挟んだら『マギウスの翼 巴マミ』戦が始まります。

ぶつちやけココは負けイベみたいなもんです。既に戦って消費が多いいろやちを連れて、記憶ミュージアムから脱出しなければなりません。

頼みの綱はさやかちゃんがほむほむからこつそり借りてきたお手製爆弾です。

しかし使えるのにも制限がありまして、一個しか持っていないので単発しか使えませんが、一発勝負になりますね。

一応リカバリーとして館内には取り残された消火器もありますが、完全に配置がランダムなため、探しながらママさんの対処をするのはなかなか……つらいねん……。

何も言わなくてもさやかちゃんは、ある程度戦って相手が油断してきたなってタイミングで投げてくれます。

言ったら言ったで「何で知ってるの？」やら「切り札バレた！」やら、といった事態になりかねないため、初心者兄貴姉貴は十分に注意して下さい。

ただ……難易度ハードでは乱数が自由気ままに、そこら辺をガバとして我が物顔で闊歩し回っている……。

「暁美さんの作った爆弾ね？ 対処法なら既に分かっているわ。」

「さすがにママさん相手じゃ無理だったかあ……！」

アアアアアアアアアアアアアアアア!!!

消火器！消火器を持ってこーい!!今すぐ！今すぐにだ！ありったけの煙幕でいい！

建物を倒壊させてもよろしい!

義手くん編隊フル稼働開始! 使役槍も全部持つてけーっ!

とこんな風に難易度ハードの修羅の国では、すぐガバが発生する事もあるって訳ですよクソガツ! 走者のガバ運、お前そういうところやぞ。

この状況で↑ホーリーマミ↑さん相手の撤退戦はいやくキツイっす。

さやかちゃんは回復持ちの近接なので、あまり護衛優先度は低いんですが、今回はいろやちが最重要護衛対象なんですよ。

そのためいつもの試走の時よりも、走者の心持ちで優先度が割り低めになっています。すまんさやかちゃん! そのまま前衛でタンク張っててくれ!

それもこれも建物から脱出できれば全部チャラなんで! 流石の↑ホーリーマミ↑さんも今の段階では外で追撃してきませんからね。

このまま逃げ切れればいいんですが、いかんせんギリギリな状況に変わりありません。ああ〜魔力の消費が半端ないんじやあ〜。

「な〜!」

……つて後方から何か吹っ飛んできてますね!?

えっ、他に来た誰かの助太刀とかですか?でも詩織ちゃんは援護を頼んでいませんし、さやかちゃんは1人つて言っていました……。

それにしてもなんか飛んで来てる物に見覚えがあるような無いような……いや詩織ちゃんは見た事ないですが、走者としては何処かで見たことが……

………ん?は?え?アイエエエエツ!?

あの孤独な silhouette (2人分) は……まさか……おいおい、冗談だろ?いやほんとに……冗談であつてほしいんですが?

こ、今回は尺の都合でここまでになります……。

ご視聴ありがとうございます……。

▶ ?

今までのことを知られて、起きた全てのことを話し、結局のところ固有魔法もなにもかも受け入れられてしまった。

驚くべき器の広さだった。むしろ私の心が小さかったのだろうか。

リーダーになることで発動するのなら、自分がリーダーを務めると言つて、彼女はウワサに立ち向かい勝利を収める。

ここまで言われてしまつては私の完敗だ。

環さ…いろはに説得され、記憶ミュージアムから脱出しようとしたその時、私達の前に立ち塞がる者がいた。

「…バマミ…」

見滝原の魔法少女、バマミ。

後輩たちである鹿目さんや曉美さんの所に行かないで此処にいるという事は…間違はなく彼女は敵として立ちはだかる。

ウワサとの戦闘によつて少なからず消耗している私達にとつて、彼女との交戦は避けたいところだった。

「ちよーっつと待ったーっ！」

そしてそこに青い魔法少女と弓有さんが新しく現れる。

青い魔法少女の名前は美樹さやかというらしく、見滝原にいるバマミの後輩の内の一
人であるとのことだ。

やはりバマミはあれから一度も自分の家にすら帰つておらず、マジウスの翼に何かされてしまったのだろう。

もしくは魔法少女の真実を知つて彼女達の配下に加わつたか。

「ママさんその格好は…それよりも！今まで一体どこに行ってたんですか!?みんな心配して…!」

「美樹さん…話ならその子を消した後で聞いてあげるわ。だからそこを退いてちょうだい。」

「退くわけないじゃないですか!やっぱりおかしいですよ、ママさん!」

以前見た魔法少女衣装とは全く別の衣装を着た彼女が、マギウスの翼の軍門に下つたのは間違いなく事実だろう。

大切にしていたはずの後輩までもないがしろにするなど、彼女達から伝え聞いていたバママミとは結びつかない。

2人の意見が決裂したのでろう…:会話すらも途中で区切つて、バママミはいろはに向けてマスケット銃の引き金を引く。

当然のこと、させるわけにはいかない。

美樹さんが彼女の剣でもって弾丸を弾き飛ばし、開戦の勢いそのままにバママミへと突撃していく。

だがそれで簡単に打ち破れるような相手ではないのは明らかだ。

彼女が咄嗟に手元から放り投げた何かは、それを察知したバママミによつてすぐさま撃

ち抜かれる。

前に眺美さんが使っていた爆弾にそっくりなものだった。もつとも相手にたどり着く前に対策されて空中で爆発してしまったが。

「美樹さん…もう一度忠告してあげる。今すぐ退きなさい、あなたまで巻き添えになつてしまおうわ。」

「マミさんらしくないです！一体どうしたんですか…神浜に来てから何があつたんですか？」

知り合いの彼女にも銃口を突きつける様はどう考えても尋常ではない。水名神社で初めて会った時でも考えられない様子だ。

博物館の屋内を埋め尽くすほどに浮かべられたマスケット銃は、まさしく数の暴力、銃弾の嵐と言つても過言ではない。

「…注意して、来るわよ！」

一斉に放たれた弾丸は老朽化した建物の柱を諸共に撃ち貫く。こちらには彼女が大切にしている後輩もいるというのに。

安全そうな障害物の影に隠れ、攻撃の合間を縫って反撃に出ようとする。

しかしながら、それもまた彼女の銃弾によって防がれてしまう。

初対面の時から強さの片鱗を感じさせていたバマミに、マギウスが更に何かしらの強化を重ねたのだろう。

これだけの威力と数を兼ね備えた攻撃を絶えず撃ち続けていても、彼女の魔力は尽きる気配を感じさせない。

このまま互いに撃ちあい：いや、一方的な攻撃をしのぎ続けるのは、リソースの限られていて今の状況ではとても不味い。

珍しく弓有さんが短槍とカラスを総動員させて、バマミの魔弾の雨と対抗しようとしているが：それでも多勢に無勢と言ったところだろう。

そんな中、館内に飛んで来るモノがあった。

「……………、なにか…。」

「えっ！新手ですか!?!」

「……………あれって…!」

上を見上げた彼女達が声をあげる。

交戦中、全員の動きが不意に止まってしまったのは、突如としてこの場に降ってきたとある物体が原因だ。

それは先が折れ曲がり、端が尖った鉄パイプ。

空いた中の空洞から黒煙を迸らせ、私達の後ろから回転しながら放物線を描く飛来物は、博物館の戦場の真ん中へと突き刺さる。

そして一人一人が反応する暇もなく、煙は瞬く間に辺りを包みこんで、その黒で敵味方の区別も覆い隠した。

もはや目の前の視界すら見えない程の密度。

目の前に立ち込める煙から視界を確保するために、それぞれの魔法少女が持ち前の武器を振るう。

うつすらと見える私達以外の誰か、2人分の人影が存在を強く感じさせていた。どこかで見た事のあるようなシルエツト。

やがて黒煙が晴れた先に現れたのは……

「……今日の占いは…運命の輪、正位置です！だからボクは、ここに来ましたですよ！」

現れたのは………

「……本当に、遅れてごめん…だけど今度はちゃんと助けに来た…やちよ…！」

記憶に残る最後の姿よりも、いくらか成長したような大人びた雰囲気がある、見間違えることのないその2人組だった。

……それは…安名メルと、雪野かなえ。

爆弾投下したので失踪します

余談

5話目で行方不明になってから、二十数話ぶりの生還を果たす。

別に亡くなったと断言していない（屁理屈）

伏線は前から一応ありはした。果たして機能していたのかは不明なまま。

もしかしたら走者がこれは伏線なのだと思っ込んでいるだけかもしれない。

先駆者などのマギレコRTA学会で述べられている通り、みかづき荘故人勢が生存していた場合、なんやかんやの桶屋理論でマギウスの翼が弱体化する事になる。

と
い
う
か
、
し
た
。

Part 33 耳を撫でて b i i m の声

巴さんの圧倒的な火力の前に悪戦苦闘していた私達を助け出したのは、亡くなった、もしくは行方不明だと言われていたメルちゃんとかなえさんの2人だった。

正直に言ってしまうと、私としては記憶の追体験学習で、知り合いが出てきたことの方がビックリしていたと思う。

だってメルちゃんは宝崎市の学校に転校してきたクラスメイトだったし、かなえさんも魔法少女の活動で知り合った人だったから。

もちろん、私にとってはという注意書きは入るけれど、でも元々2人がやちよさんの仲間で、しかも行方不明者だなんて想像もつかなかった。

「2人増えたところで、私のフローレンスに敵う相手じゃないわ。」

「ええ、まったくその通りです！なので、せめて最後にボクの大好きな占いをしますよ

！」

「ちよつと！そんな事してる状況じゃないって！」

「…ム！ムムム…これは……！」

もしかして、対策とか具体的な作戦とか、何も考えないで助けに来ちやつたのかな…？少し心配になってくる。

そんな風に疑問に思ったその時、メルちゃんが自前のタロットカードの山から、占いと称して一枚引いて絵柄を見る。

でも、あれ？私の記憶が正しければ、メルちゃんの固有魔法は確かアレだったような……。

「そういうえばそのアナタ！ボクの好きな言葉を知っていますか？…『何事も必要な時に起こるべくして起こる』と言うんですけど。」

「それがどうかしたのかしら？あなた達が劣勢ということに変わりはないわよ。」

「…つまりですね…今日の運勢はともラッキーって事です！カードのみんな！」

その言葉と共にメルちゃんの手にあるカードがひとりで動き出し、次々と宙に浮かんで私達の周りを囲む。

その異様な光景から異常を察知したんだろう。

巴さんが数多の銃を一齐に掃射した……けど、次の瞬間に起こったのは原因不明の不発と少しの暴発。

不思議なことに私達に当たるような弾は一つもなく、たまたま暴発された弾丸は館内の壁や柱を抉り貫いていった。

途端にそこら中から聞こえるゴゴゴ……と唸る低く鈍い音。

地響きが続いて建物全体が揺れて、天井や壁、館内のいたるところから建材の欠片が降りかかってくる。

まさかとは思うけど……これって……!

「……ん、崩れる前兆。」

「……とりあえず事情は後で聞いわ、早く外に退避しましょう!」

多分巴さんも建物倒壊の危険を感じて、私達が見ていない隙にさっさと撤退したみただった。いつのまにか姿が見当たらない。

そんな事を言っている間にも土煙が漂いはじめ、博物館を支える柱達がだんだんと崩れていくのが見えた。

上から降り注ぐガレキをメルちゃんのカードが防いでくれる中、私達は一刻も早く外に向かって必死に走り抜けた。

全員が無事に外へと飛び出したところで、記憶ミュージアム…もとい記録博物館は完全に建物の形を失って崩れてしまった。

ホッと胸を撫で下ろす。あんなに命の危機を感じながら一心不乱に走る機会なんてないだろう。

「……私への連絡も無しで、来て早々に何してるネ…かなえ。」

だけれど、博物館の前には私達以外のある魔法少女が、かなえさんのバイクの近くで佇んでいた。

私がつっかり神浜に来てしまって、命を狙われた時に助けてくれた1人…純美雨さんだ。

口ぶりからしてかなえさんと知り合いみたいだけれど、どうしてここに？という疑問が湧き上がってくる。

「…いやその、やちよ達が緊急事態だったから、居ても立つてもらいられずに……。」

「待つて、あなた一体かなえとどう関係なの？」

「……まさかまだ言つてなかつたの力？仕方ないネ、私から説明するヨ。」

私の思いを代弁してくれたやちよさんに対して、美雨さんは質問の答えについて語り出す。

それはみふゆさんの記憶の追体験で見た、かなえさんの話の続きから始まった。

ソウルジエムは魔法少女の魂そのもの。

それは灯花ちゃんの講義で教えられた通り、魔法少女の契約に際する紛れも無い事実。

だからソウルジエムが割れてしまえば、その魔法少女も命を落としてしまう。それに加えて互いの距離が離れすぎても、接続？が途切れちゃってまるで死体のようなになる。

離れすぎた場合には、ソウルジエムを本人の身体に触れさせると、その人は再び息を吹き返すみたいだ。

それでこの話を前提にして、かなえさんが生きていた理由が話される。

種明かしをまとめてみれば、要するに魂が離れていたかなえさんを美雨さんが拾い、不思議な事に近くにあつたソウルジエムのおかげで生き返つたんだ。

それからというもの、かなえさんは美雨さんの助力あつて、蒼海幫の外部協力者とし

て生きてきたのだそう。

……美雨さんは淡々と簡単そうに話しているけど、実際はなんだか大変な事を言っているような気がする。

何故正体を偽ってまで、外部協力者の立ち位置になったのか。

死んでしまった人が生き返ったのだとなれば、騒動が巻き起こってしまうのは想像に難くない。

そうした身の安全や治安に対する危惧と、更にそれに加えた理由があった。

美雨さんやかなえさんが魔法少女になるキツカケとなった因縁の相手、それが共通の人物で共に倒すために協力関係を結んだらしい。

そのために一時は外国に行つてまで、因縁の相手とその組織を追いかけたのだという。

メルちゃんはその最中でかなえさんに助けられたらしい。

魔女と相打ちになったと思われていたメルちゃんは、死に体でやちよさんの所から離れようとしていた。

せめて亡くなるのならば遺体を見られないように、と。

そんな時に近くを通りかかったのが、蒼海幫の外部協力者として動いていたかなえさ

んだった。

持っていたグリーフシードで穢れを浄化した後、仮拠点にしていた場所で治るまで匿っていたと話す。なんだかやちよさんみたいだった。

それでメルちゃんとかなえさんが生きていたという事を、やちよさん達が知らなかったのにも理由があった。

それはひとえに私もお世話になった美雨さんの固有魔法、『偽装』の能力の影響もあるけれど、もう一つ大切な事が。

「……でも、どうして生きている事を知らせてくれなかったの？ 私もみふゆだって受け入れていたはずよ。」

「そ、それは色々と！ 色んなことがありましてですね？」

「……………いや、正直に話す。そう言ってもらえるのは嬉しい……けれど、これ以上やちよ達に迷惑を掛けたくなかったから。」

亡くなった人が、生き返ること。

今は私が魔法少女という非日常的な存在で、しかもその真実を知ったからこそ信じられるお話。

でも、魔法少女じゃない普通の人はどうだろう。当然のごとく、到底信じられないこ

とだった。

さっきの美雨さんの話で言っていた通り、その事が世間にバレてしまえば、どのような事が起きてしまうのかは分かりきっていたことだった。

自分が関わった事で、やちよさん達に悪い影響が及んでしまうかもしれない。きっとかなえさんはそう考えたんだろう。

だからみかづき荘のある神浜市から離れ、個人の情報に精密に偽ってまで、事実を悟られないようにしていた。

全部、大切な人達を心配した結果の、不器用な行動だったんだ。

「迷惑なわけ、ないじゃない……メルも、かなえも……本当に、生きててよかった……。」

「……ごめん、やちよ……ありがとう。」

「七海先輩……すみませんでした……。」

「さてこうして感動の再会を果たした訳だが…無論、今はまだその余韻を味わっている場合では無い。」

「ええ、やられっぱなしじゃられないもの。それ相応の仕返しはさせてもらおうかしら。」

以前に詩織さんから話だけは聞いていた、東の魔法少女のトップ。和泉十七夜さん。

その他にもこの場には多くの魔法少女達が集まっていた。私が以前お世話になったななかさん達もこの中に入っている。

みかづき荘での一時的な作戦会議の末に決定された『神浜ローラー作戦』。

内容はいたってシンプルで単純明快なもの。神浜市内のウワサを片端から順に倒していく、いわば総当たり総攻撃の作戦だ。

上手くいけば向こうの被害は甚大になって、そこから慌てて飛び出た尻尾を掴んで表に出させる事ができるかもしれない。

何よりマジウスの翼の問題はみかづき荘だけじゃなくて、市内に住む魔法少女全員にとっても問題なんだ。

まだういの情報は見えてきていないままだけど、アイさんから『ウワサなら環ういを知っている』という有益な情報はある。

でも記憶ミュージアムの時、灯花ちゃんは覚えていないみたいだった。ねむちゃんはここにいるのかも分かっていないし……まだまだ調査は足りていない。

このままマジウスの翼に迫っていけば分かっていくのかな。

「例外は存在しますが、今までのウワサとやらは各区に一つあつたのですよね？ならば残りにも他のものが存在するかもしれません。」

「そう考えれば……残りは工匠区、大東区、南風区、北養区かしら。今までの区ももう一度調べ直した方がいいわね。」

「自分は弓有と画伯と共に大東を中心として捜査しよう。必要があれば弓有のクラスを貸し出すらしい、有効に使ってくれ。」

まだ踏み切れていない区域の探索。その他にも場所に由来しないようなウワサ探し。

鶴乃ちゃんやフェリシアちゃん、さなちゃんを助けるために、マジウスとマジウスの翼達を倒すために、私達は行動を開始した。

▶ ?

何故かみかづき荘故人勢が生存しているRTAはーじまーるよー

前回はやちよさんを少し小突いて、記憶ミュージアムで†ホーリーマミ†さんと鬼ごっこをしていました。

さやかちゃん投げた爆弾がマミさんに対策取られてたのが致命的なガバになるはずでした。

でもまさかこんな大ガバがあるなんて思わないダルルオン!?

おや？義手くん慰めてくれるんですか？ありがとう…存分にもふらせて状態回復に努めさせていただきます。

…はい、とりあえず落ち着きました。

既存のチャートはボロツボロに碎け散っておりませんが、よくよく考えたら旧みかづき荘メンバーが魔法少女の真実を知る事には成功しています。

なーのーでー、これはまだオリチャーの範囲内でしょう。範囲内です（自己暗示）…つまりは続行だ！

それで、メルちゃんの占いによつて、全員が†ホーリーマミ†さんから逃げ切ることができました。お前なかなか、やるやん……。

マスケット銃は不発になるし、暴発した弾丸は記憶ミュージアムを崩す決定打になったし、向こうからしたら散々な目に遭ってました。

結果的にみんな無事に戻ってこれたので、もう第6章のMVPあげたいくらいの働きぶりですね。

なんであんな事になったのかと言うと、メルちゃんの固有魔法『未来誘導』の影響によるものです。

未来を占いの結果通りにしてしまう能力で、日によって当たり外れの落差が酷いため、やちよさんから占い禁止令を出されるほど。

ぶつちやけRTA的にはランダム性があり過ぎて活用できないどころか、さらなるガバを招くような魔法です。

そのため、チャート構築にあたっては『幸運』の下位互換と位置づけてありますが、その真価は別に存在します。

細かいリカバリーや応用は効きませんが、いわゆる『ラッキー』を引いた場合、『幸運』よりも効果が強いんですね。

しかも魔力消費は占う時のごく僅かな量のみ。

先程ご覧になったように、マミさんの銃のほぼ全てを不発or暴発にさせて、結果的に建物を倒壊させるという事をもたらせます。

条件さえ揃えば、『現実改変』などのチート魔法と肩を並べますよ！なんとって相手の

事を勝手に占つてめちやくちや強いデバフを掛けたりできますからねえ！

ただまあいかせん運要素が強すぎるので、運が極めて重要となるRTAでは使えませんが。

話を戻して、何故か記憶ミュージアム跡地の前に立っていた美雨さんから色々と言っています。

はえ〜すつごい：蒼海幫の外部協力者つてかなえさんの事だったんすねえ〜。

なるほど：前に相談所で電話していた相手とか、宝崎市に噂を流すために派遣していた人とか、それら全てかなえさんだったようです。

なんか他にもネットに曲を投稿してたり、サイドカー取り外し可能バイクを所持していたり、割と充実？した生活を送ってはいたみたいですね。

でも生活のほとんどがマフィアや組の闇の抗争に身を投じたものらしいですけど：かなえさんだけやってるゲーム違くなあ？

……ていうかメルちゃんからかなえさんが趣味で作った曲の名前聞きましたけど、この曲かりんちゃんが前に紹介してくれたやつじゃないですか？

……『No thought』、直訳で『考えない』……それでいて、かなえさんの
マジア名は『無思考』…なるほどね。

ぶつちやけアルファベット表記にするなら『Limiter Cut』とかぼいです
が、まあ、まさか動画サイトにそんなガバが埋まってるとは思わなくて……。

そういえば美雨さんの隠しボイスにも似たようなモノがあつたような…確か某映画
の名台詞でしたよね。龍が燃えてる感じの。

もしかしてこの故人勢生存ガバは美雨さんと難易度ハードの乱数要素のせいなので
は…？（走者は訝しんだ）

特大ガバの発覚はともかく、戦力が増えるのは素直に喜ばしい事です。

故人勢生存の代わりにやちよさんが強化されていませんが、その分メルちゃんとか
えさんの2人分の人材が増えています。

しかもかなえさんに至っては『防御無視』とかいう一部のチャートには組み込まれる
有能な固有魔法があります。勝つたなガハハ。

ただ一応かなえさんも生存して19歳になっているそうなので、もれなくステータス
弱体化の対象に入ってる事を忘れないようにしましょう。

あれから数日後……くらいですかね？

ええ、話をするのにだいぶ遅れてしまいましたが、第6章の次の第7章『楽園行き覚醒前夜』が始まる頃です。

第7章は……マギウスの翼との全面抗争が開始されますね。

もちろん既出のマギウス2人とのバトルもあるので、詩織ちゃんは某芸術家のオモチャにならないように気をつけなければなりません。

特にガバも後半のくせに乱数ゲーですから発生しやすいと思いますしね……第7章……鶴乃ちゃん……キレーションランド……うっ頭が。

今章のウワサは大東区の観覧車草原に存在する遊園地の廃墟に位置しています。場所依存のウワサですね。

今回は前半部分を生存ガバの話で使ってしまったため、残りは即刻調査の時間に費やしましょう。

とりあえず詩織ちゃんは今まで連絡先を交換した人達にお願いして、みかづき荘の神

浜ローラー作戦に参加してもらいます。

なんか呼びかけた人達よりもめちゃくちゃ人居ないですか？モブ魔法少女が多い気がします。多分気のせいかもしれません。

で、そこからメンバーを選定して大東区の調査に乗り出します。

情報提供者のチャートの利点として、この神浜ローラー作戦の調査パートをほぼ潰す事が出来ます。

神浜カラスネットワークにあらかじめ調査させて、いくつかウワサの場所は既にマップピングさせてあります。

ここでの注意点として、工匠区だけウワサの場所が出てきませんがこの場所は地雷です。マジウスの翼の偽装拠点である旧車両基地が存在し、中に踏み込めば天音姉妹戦が始まってしまいます。

そのため先に義手くんを数体ほど派遣しておいて、中には何もなかったという情報を手に入れ、それを共有してこのイベントを起こさないようにします。

困ったら信頼度でゴリ押ししましょう。

ここは先駆者のチャートに倣ってなきたんこと、和泉十七夜さんを連れて行くのが多

分1番早いです。

いや…なきたんの有能さがマジでヤバいですよね。読心持ちで東の代表者だからお咎めも無い。

コツチの『使役』を使って聞き出せばいいじゃないかって？バレてマジウスに利用されたらヤバいのと、『博愛』という性格上の制約がね……。

あと詩織ちゃんの出身地が新西区だから、満足に東を歩き回る事が出来ないデメリツトを打ち消してくれませう。

『バイバイ、また明日』の時は夜に、団地へと忍び込んでいたので見つからなかっただけです。

東西間のしがらみ関係のシステムは酷すぎると、いじめなどの問題でソウルジエムが濁りやすくなっちゃうんでね……。

「む？いや弓有はそもそも大東の出身だろう。自分を選んでくれるのは有難いが、何をそんなに東を躊躇う必要がある。」

「いや詩織ちゃんはキャラ作成で新西区って設定しましたけど……？」

「?????????」
 せしかして以前話に出ていた過去疑惑の有鷺詩織と、今の弓有詩織は別データとしてカウントされてるんですかね？

名前変えたからコイツはもう別人だー！こっちのデータはいらねえや、あそればーい！……みたいな感じで？それはそれで屁理屈なような気が……。

プレイヤーキャラの分からない事が多過ぎるツピ！

どうせ十七夜さんを連れて行くので大差無いですね。あとはついでにかりんちゃんを連れて行きますか。

支援特化の詩織ちゃんと魔法が攻撃向けじゃないなぎたんだと、いささかばかり戦闘面で不安が残りますから。実力と実績はあるんですが。

ついでに周りに援護必要だったら義手くんを貸し出すように言っときます。

伝書鳩ならぬ伝書鴉、そうまるでうわさファイルに載っている『郵便鴉』のように……ん？義手くんが郵便鴉？気のせいかな。

じゃあウワサがありそうな場所として観覧車草原を挙げて、そこら辺をうろついてそうなるマジウスの翼とか捕まえて尋問します。

そもそも義手くんですらで罠んで誘導したり、かりんちゃんの魔法で距離を盗んだりすれば、あつという間よ。

そういえば今まで言ってますでしたが、こういう時の帆奈ちゃんはななかさんやこのはさん達に預けています。

いやまあ本当に帆奈ちゃんが変身しても大丈夫な状況にするには、本人との信頼関係と周囲からの信頼度が足りないんですよ。

ですので現状の帆奈ちゃんは今走においては、走者の気力を癒やしてくれる猫的な存在でも思いましょう。

なかなか靡いてくれない性格といい、構われすぎたら離れていくところといい、帆奈ちゃんは可愛いですねぇ……。

おっと、前方にマギウスの黒羽根グループがいますね。早速仕掛けて尋問しよう……あれ？なんか様子がおかしいような？

「なっ?!いきなり何を……うっ。」

「対象鎮圧!そちらはどうですか?」

「こちら黒羽根の気絶及び拘束完了しました。部隊長に指示を仰ぎます。」

「了解、対象を人目のつかない所へ。」

ええ……。

いきなり仲間割れが始まったと思ったら、奇襲を仕掛けた人達が圧勝しましたね。

見た感じこちらに敵意は無さそうですが……よくよく見れば全員が全員モブの魔法少女のようです。もしかして第三勢力とかですか？

「止まれ。一体何者だ？」

「……信用ならないとは思いますが、我々は怪しい者ではありません。あなたのことはよく存じておりますよ、東のボス。」

「素性は明かさないまま……か。だが先程の行いから見て、マジウスの翼ではないのは明らかだな。」

本当に謎ですよねえ。

なぎたんが話してる間にかりんちゃんとも議論しましたけど、やっぱり「スパイとか内部抗争とかだと思うの！ スゴイの！ 生で見るの初めてなの！」って仰いますし。

ガバが多すぎて走者の心労がヤバイです。

ここまで来たらもういつそのこと、没にしていた漫画家チャートを引つ張りだして黒幕になってやりたいほどですよ。

走者は良いことよりも悪いことやってる時の方が、色々とワクワクしやすい性なんですよね。やっぱり好き勝手やってる時が一番楽しいねんな。

「マジウスの翼の中に潜入しているとある組織です。『自警団』とでもお呼び下さい。我々はあなた方に用がありません。」

「ふむ…自警団か、一先ずはいいだろう。こちらとしても交戦する気はない。用とはなんだ?」

「七海やちよの仲間とマグウスの本拠地についてです。」

この自警団とやらはマグウスの翼に潜入しているモブ魔法少女達の集まりらしいっすね。

それで鶴乃ちゃんがウワサで利用されそうな事も、洗脳解けたさなフェリを護送してた事も伝えてくれました。

…もしかしてコイツら詩織ちゃんより情報提供者してるのでは…?

「自警団…なんだかとってもカッコいいの!」

かりんちゃんはまだもう少しシリラスして下さい。

ともかく、この自警団さん達によって求めていた情報が全て揃ってしまいました…モブなのに有能すぎひん?

これなら次回から第7章後半に踏み切れますね。キレーションランドで相對するのは、まさに目と鼻の先だぜ!

と言ったところで今回はここまで。

ご視聴ありがとうございました。

Part 34 楽園行き再走前夜

その繋いだ手の暖かさが、立ち止まりそうな心に勇気をくれる。

『ねえ、まひろー！この場所はなに？その格好はなんなの？ねえ…なんか、喋ってよ……。』

何も言葉を発さずに彼女の手を引く。

まさか、まさかだ。よりにもよってこの屋敷に魔女が来るなんて思ってたなかった。

しかもダメ押しに私の誕生日と来たものだ。しおりちゃんもこんなにも優しいのにな、どうして世界は私に優しくないのかな。

よくよく考えてみれば、自分の家系が負の象徴みたいなもんだし、魔女だつて集まりやすいのかもしれない。

確かに初代はさぞ素晴らしい事を成したんだろうが、そこから何である人達はあそこまで狂ったのか。

やっぱり性格は改善しても、血筋自体がダメなんだろうか。つくづく哀れな人達だ、

可哀想に。

そう走りながら呑気なことを考えて、ここからどう抜け出そうかを頭の中で試行錯誤を繰り返していた。

『まひろ!!!』

しおりちゃんの声で現実を引き戻される。会ってからこんなに焦った表情は初めて見るんだ。

そりやそうだ、だってしおりちゃんは普通の人。本来ならこんなヤツなんか巻き込まれない生活を送るはずの人。

この非常識空間での対抗手段なんて持っている訳ない。ここには私しかあの魔女に對抗できる魔法少女はいない。

あの白いヤツ？出来れば顔すら見たくないんだよね。いやなんか私の直感からして危なさそうだし。

もしアイツがしおりちゃんを契約させたら許されることじゃない。こんな危ないものに巻き込ませたくないかったのに！

でも…どうしよう。

矢は届かない、そもそも効かない。いやはやもしかして、ココで2人とも短い人生を終わらせてしまうのかな？

良いことはそれなりにしたはずなんだよね。でも鴉弓家というスタートがまずマイナスだったかも。

私のとかは別にいいけど、こんなヤツにしおりちゃんの命までは絶対にあげたくないなあ……。

…あれ？それでいいじゃん。

なるほどなるほど？ここで魔女を確実に殺せるくらいの必殺技を放てば、アイツは死ぬ！私は人を救うという良いことが出来る！

そしてしおりちゃんも生きてココから出れる！

じゃあ魔力が入ったお守りも渡せば、しおりちゃんがこれ以降襲われる事もないのでは？しかもそれで私が今までにした良いことの功績を引き継げば、しおりちゃんの人生は救われるも同然なんじゃないかな！天才的な発想……いや昔から知ってるけど。

……うん、ごめん。ふぎけて言ってみただけだよ。でもこんな状況じゃあそれ以外に取れる選択肢もないみたいだった。

『嘘だ……まひろ……ねえ、どこに行くの？まひろ……置いてかないで……。』

だからさ、そんな顔しないでよ。

大丈夫！眠って起きた時には全部終わってるよ！これは悪い夢なんだから。

そう言つて無理やり気絶させたしおりちゃんを静かに寝かせて、憎々しい魔女に向きな
おる。

自分には出来る、自分なら出来る、私はアイツを絶対に倒すことが出来る。失敗なん
てしないんだ、間違えるはずがないんだ。

持てるものを使つて、一つの矢に魔力を全部注ぎ込む。これでもかつて言うぐらい魔
法少女1人分の貯蔵全て。

でも、まあ：欲を言うのであれば。

もう少し君の近くに居たかったなあって。

『まだ、まだ生きてる。まひろは生きてるんだ。だから……』

▶ ?

キレーションランドのウワサを倒しに行く作戦の日。

遊園地の廃墟へ行かせまいと出てきたのは、やっぱりマグウスの翼達だった。

私達も鶴乃ちゃんを取り返そうと必死だけど、向こうも向こうで切羽詰まった状況な

のかもしれない。

それだけココが正念場だという事なんだ。

自警団の方々が黒羽根の前に出て迎え撃つ。

「どうやらマジウスの翼とは因縁浅からぬ仲？だそうで、私達がウワサやマジウスに専念できるように、という計らいでもあるらしい。」

「黒羽根どもの対処は我々にお任せください。各員、特別なサプライズ用意！」

「こちら幻術実行班、用意できてます。」

「こちら遠距離攻撃班、準備完了。」

「こちらサポートチーム、設置おーけー！」

「作戦実行！前列は撤退！現場指示を第2部隊に引き継ぐ。」

「第2部隊、現場指示を引き継ぎます。」

隊長みたいな子が号令を掛けると、辺りの至る所から魔法少女の影が見えてくる。黒羽根じゃなくて、それぞれ全員が自警団の人達。

実行の合図と共に辺りは一斉に煙幕が張られて、二つの勢力がぶつかり合う戦場は一時的に視界が見えなくなる。

班員の子に教えられた抜け道を進んでいた私達には、ギリギリのところまで煙が届いていなかった。

煙の外からなら少しだけ見える…けど、何かが真ん中で暴れている。え？あのでつかいのってドラゴン!?

理屈を説明されても、思わずビククリしてしまった。どうやらアレはああいう幻を見せて、羽根達を錯乱させているんだって。

「あの子達、一体どこにこんな強大な魔法を隠し持っていたのかしら……?」

「…多分、一人一人はそこまででも…複数人が同じ系統で揃えてるから、魔法が倍増してる…と思う。」

「なんだかデカゴンボールみたいだな!」

つまり自警団の皆さんの息が合っているからこそその大技って事なんだ。

あんなにすごい技を出してまで足止めのために応戦してくれている。私達だって、マジウスに負けていられないんだ。

そうしてクロスボウがある左手を強く握った。

夜の暗がりをはけた先に、ウワサの楽園というのがあった。

「意外と着くのが早かったね、一体どんな魔法を使ったのかな？」

「おや、アレが話に聞いていたおガキ様とやらか？自分達はすんなり通れたぞ、もう少し部下の躰をした方が良いな。」

もちろんのこと、待ち受けていたのはマジウスとその翼達。向こうは見ずとも分かる徹底抗戦の構えで、何が何でも私達の妨害を阻止する気なんだろう。

「でもここで皆幸せになってもらうのー、そして定員オーバーになったら強制退場してもらうんだから！」

「それは人を殺すってことだよね…そんなの、人を幸せには出来ない！マジウスが間違ってるのは確かだよ！」

いつまでたっても話は並行線。

痺れを切らしたマジウス達は、真っ先に私達に攻撃を仕掛けてくる。みふゆさんとかなえさん、メルちゃんの再会も喜ぶ暇なんてなかった。

「……っ！仲、直り……先に……！」

「詩織さん！分かりました…すみません、お願いします！」

レーザーかなにかを放とうとしていた灯花ちゃんを、詩織さんが短い槍とカラスに

よって妨害する。

前から色々とお世話になったままだった。この騒動が終わったら今までのお返しをしたいな……だけどその前に。

『……鶴乃、ちゃん……疲れて、そう、だから……うん……』

『……えと……頼られ、すぎ……？……みたい……？……これは、経験……というか、直感……とか……』

『……少し、だけでも……負担……減らせ、たら……な、って……優しい……は、大事……』

それらはあくまで詩織さんが今までに感じた所感だった。人一倍疲れてるように見えたのに、誰かのために頑張っってしまう姿。

作戦の開始前に教えてくれた気持ちの分も含めて、私達は鶴乃ちゃんと向き合わないやいけない。

いや、鶴乃ちゃんと正面から向き合いたいんだ。

「あれ？まだ開園前だった筈だけど……まあいつか、ほらみんなもココでゆつくりしているように。」

ウワサと融合した結果なんだろうか、鶴乃ちゃんは髪も衣装も毒々しいような緑に染

まりきっていた。

いつも私達が見ていた活発な鶴乃ちゃんはここに居ない。もしかしたらこの姿こそが本当に鶴乃ちゃんが求めていた姿なのかも、ということが私の胸を締め上げた。

「……相野さん、お願いしてもいいかしら？」

「うん！準備はいい？いくよ！」

みとちゃんの固有魔法『心を繋げる力』によつて、私達はそれぞれの意識の奥深くに潜っていく。

鶴乃ちゃんの大好きなおじいちゃんが亡くなったこと。

願いの結果として手に入れた大金が勝手に使われたこと。

メルちゃんが魔女退治で行方不明になったこと。

やちよさんが唐突にチームの解散を宣言したこと。

みふゆさんが連絡もなく音信不通のまま失踪したこと。

ももこさんがみかづき荘から出て行ったこと。

詩織さんが何かを抱え込んでいるのに気付いてしまったこと。

フェリシアちゃんが孤独に生きてきたのを心配したこと。

さなちゃんが安心して居場所を作ろうとしたこと。

私が居なくなっただういを探していることに協力したこと。

全部、全部笑顔で背負いこんで、気を張りながらも健気に振る舞う鶴乃ちゃんがそこに確かに存在していた。

私だって、鶴乃ちゃんのためになりたい。

もう気を張らなくていいような場所を作るから、互いに助け合っていけるようなチームを作るんだ。

……だから！

「一緒に帰ろう！鶴乃ちゃん！」

その手を繋いだ。

奇妙な色合いの観覧車、遠くから聞こえる戦いの音。目を開ければまた元の遊園地へと戻ってきていた。

それでもこの手は繋いだままで、鶴乃ちゃんはウワサと融合した状態から元の姿になっっている。

「えへへ…心配、かけちゃったね。」

「…！鶴乃おおおお!!!」

「鶴乃…よかった…。」

「おかえり、鶴乃ちゃん！」

「おかえりなさい、鶴乃さん…！」

それぞれの思いを伝えて、心を通わせることが出来たんだ。だからもうこの繋いだ手を離さない。

みんなで円陣を組んで、号令をかける。

これが私のいるみかづき荘なんだ…！

▶?

多くのプレイヤーが難易度ハードで苦しめられてきた遊園地に行くRTAはーじまーるよー

前回は故人勢が生存していた理由が明かされ、かなえさんが蒼海幫の外部協力者という位置付けになっていました。

そしてマギウスの翼と対抗する謎の自警団が登場し、ほのかに香るモブレコのがバの匂いが鼻につきます。

ここだけ聞いたらガバポイントが多すぎイ！

今回はその続きからです。

ここからが正念場と言えるでしょう。今まで走者が鶴乃ちゃんと築いた信頼度の成果をいろはちゃん達に伝える時です。

まあぶつちやけ愚痴しか聞いていませんし、愚痴と言ってもほとんどがやちよさんに対するモノなんですがね。

なんか：こう：鶴乃ちゃんはいつも頑張ってたし、たまにはお休みの機会与えた方が良いんじゃない？的な事を言つとききます。

意味深な事を言つてもいいですが、その場合あまりメリツトはないです。素直が一番！

正直に言うのであれば、キレーションランドでの詩織ちゃんの出番はありません。

じゃあ遊園地のタイムを短縮する手段はどうするのかつて？ええ、決まつておりませんとも！

「みかづき荘の人達を連れてつて、心を繋げれば良いんだよね？任せて！」

それが彼女、相野みとちゃんさん様で御座います。崇めよ！奉れ！かの者こそが真の魔法少女だ！祝え！新たななる王の誕生を！

みとちゃん様は団地イベでも活躍した通り、『心を繋げる力』によつて鶴乃ちゃん

の本心とチームみかづき荘を繋げてくれます。

そういえば今回の編集時点で聞いた話なのですが、対策次第では固有魔法によって心を覗かれるのを強制失敗させる事ができるようです。まあ詩織ちゃんには関係ないと思いますけど。

それで部隊編成の指定は（特に）ないです。

大混戦してる最中、それぞれに的確な指示が出せるわけないだろ！いい加減にしろ！義手くんは詩織ちゃんのためになる行動が基本なので、自分の半身みたいなものですから、指示を出さずともガバ関係がいくらかマシなんです。

というか今更思いましたが、詩織ちゃんって複数の『使役』でも早々にキャパオーバーしませんし、魔力面とかも普通に高いのでRTA的に優良物件では？

その気になれば義手くんの視点共有で優秀な軍師になれそうですけど……まあ、これに関しては性格の『寡黙』のせいで無理そうですね。

さて今回のRTAでキレーションランドに攻め込むイかれたメンバー紹介するぜ！

何故か生存していた故人勢を加え、更に戦隊モノ追加戦士枠のなぎたんも加えたチームみかづき荘！

「ウワサから鶴乃ちゃんを取り返してみせます！そしていつかは絶対にういを見つけてします！」

「気合十分のご様子で！さすが我らが主人公！まさかの戦力アップの面でも一番君達
が頼りだぜ！」

「なんだかいつもの試走よりも好感度不足気味の組長率いるなな組と、逆に何故か高い
気がする葉月さんがいるアザレア組！」

「帆奈さんはみたまさんの食事を食べてしまい気絶いたしましたので、調整屋にて一部
の魔法少女に看病されています。」

「すまん帆奈ちゃん……これもRTAの為なんだ……絵の具は入ってないから！まだ大丈夫！
セーフ！」

「今回のキーパーソン！ウワサの融合の弱点をピンポイントで突くことができ、それぞ
れが便利な固有の魔法を持つ団地組！」

「特訓した結果を出す時だね！……ごめんね、これから少し忙しくなるから……終わっ
たらでも大丈夫かな……？」

「まだ義手くんはしばらくもふってても大丈夫ですが、そのまま持ち帰ったりしないで
下さいね！」

「そして最後に相談所メンバーと南風の苦労人と神浜屈指の芸人育成所の皆さんとそ

の他諸々の魔法少女達だー！

「あー、そういえばかりんが『帆奈ちゃんが起きたら、前に貸したきりんちゃんの続きを読んでもらうの！だから心配しないでいいの！』と言ってたそうだ。」

みやーこ先輩、伝言ありがとうございます！かりんちゃんがいるなら調整屋方面は安心だな！

以上のメンバーでお送りするぜ！

みんな！グリーンフシードは持ったな!?武器や魔法の準備はOK?それじゃあKBF
ヘイクゾー！（デッデッデデデデデ カーン デデデデデ

「うお!?なんだアレ！」

「ド、ドラゴン!?ちよつとあんなのゲームでしか見た事ないわよ！」

【速報】自警団とかいうモブ魔法少女達が強すぎる件について

いやなんか自警団vsマジウスの翼してる場所でデカイドラゴンが暴れてるんです
けど?何アレ……。

なにに？ 幻見せる系統の固有魔法を集めに集めて、テレパシー系の固有魔法で同じイメージを等しく共有してるの？ だからアレでも形が崩れないんだって？

それに追加して煙幕の中で遠距離攻撃やらを班ごとに分けてそれぞれ交代で回して、医療やサポートなどの体制もしっかり完備してる…と。

モブの子達の方が走者より賢くなあいい？

てか完全に魔法少女の集団戦法を理解してますね…この自警団とかいうモブ魔法少女グループ。

君達さあ…もしかしてえ…モブレコ、やってたりするう？ まさかここまでモブがガチガチに作戦固めて強くなつてくるとか思わんやろがい！

ともかくあの自警団達のおかげで黒羽根に戦力を削がなくて良くなりました。 お前なかなか…やるやん？

キレーションランドに突撃だぁー！

「まさかこんなに早くに来るなんて思わなかったワケ。」

「なんで…かなえさんと、メルさんが…！」

そりゃあ驚きでしょうとも、どっちの方も二重の意味で。

走者も出来ることなら通常プレイ時にゆつくりと、故人勢とみふゆさんの感動の再会

を見たかったんですが……どうしてこうもガバは唐突なんですか？

まあいいでしょう。いろはちゃんと灯花ちゃんの対話が終わって、いよいよ第7章の本格的な戦闘が始まります。

まず最初にすべきなのは、みとちゃん様とチームみかづき荘を鶴乃ちゃんの所へ送り出すことです。

「もー！邪魔しないでってばー！」

そのため、真つ先にレーザー攻撃をしようとしていた里見灯花を妨害します。

ぶつちやけこの実質無限魔力ファンネルちゃんはマトモにやりあっても、（走者に勝ち目は）ないです。

ワンチャン不意を突ければ、前の暴走詩織ちゃん事件の時みたいにいけるんですが、いまいちアレの発動条件分からないままですし。

なんか過去関連だとダメなんですかね？オーダーメイド万年筆とか有鷲詩織とか鴉弓真広とか。

いやそもそも暴走して『使役』を使ったとしても、結局は経歴ガバになるじゃないか……たまげたなあ……。

「アナタの相手はアリナなワケ！」

人にビームを撃っちゃダメって習わなかったかア!? みんな!!マジカル交友関係で集まったみんな!一緒に頑張って応戦しような!

とりあえずおガキ様相手に先手の攻撃を撃つたので、後は他の方々にお任せしましょう。ていうか、するに決まってるじゃないですか!

だって詩織ちゃんは神浜のヤベーやつ相手に精一杯なんですからねえ!

おっと危な…!

他の人達も加勢に入ってはくれているんですけど、詩織ちゃんが完全にアリナア!にタゲられています。

ひとりぼっちの最果ての時と違うのは、こちらに仲間の魔法少女がいることです。ただの回避ゲーではなくなりました。

やっぱ…魔法少女の輪を…最高やな!

とはいえソレで慢心していたらあつという間にポックリ逝ってしまいます。なんたってココは難易度ハードの修羅の国なんですよ?

ガバを引く乱数なんぞ当たり前、こんなの試走やチャートに載ってねえ!という、走者にとっての地獄めぐりが開始されます。

それにしても思いましたけど、何故か生きていた故人勢と感動の再会かと思いきや、マジウスの方針で戦うしかなくなるって…みふゆさんに辛すぎない？

ここが神浜で良かったですね…なんだかんだでドツペルシステムは魔女化を阻止しているんですから、いやはおガキ様恐るべし。

「なんでそんな固有魔法を持つてるの〜!？」

「あら、こんな時に余所見していいのかしら？」

「由比鶴乃！ただ今ここに参上！みんな、待たせちやつてごめんなさい！ありがとう！」

お！来た来た来た来たア！さすがチームみかづき荘の結束力！みとちゃんさん様の心を繋げる力！

つまりはキレーションランドの難所の突破ですよ!!!

これは最早勝ったも同然では…？ヨシ！（現場猫並感）マジウス達は早く本当の目的明かして。どうぞ。

そして少女達が謎の聲に驚いて観覧車の方を見上げれば、それは紛れもなく、ヤツさ。「まったく様子を見に来てみれば…ボクの命もタダじゃないんだよ？」

柊ねむじやねーか！

チームみかづき荘が鶴乃ちゃんを取り返して再結成されると、戦場に彼女がやって来

てマギウスの語りが始まります。

神浜中の感情エネルギーを集めて、自分達の願いを叶えるついでに魔法少女の救済するんだってよ（要約）スゴイ壮大だね。

魔法少女が救済される以前に、一般人の被害がヤベエイ！ことになる上に、そもそも彼女達の目的が達成されて地球がボロボロになるんじゃないっすかね……。

「そんなの……ふざけてるわ……！」

まあ自分の保身に走るか一般人の平和を守るかの違いしかないんで……え？走者？走者はタイムにしか興味ないです。

詩織ちゃんも面倒くさそうな呆れた顔で話を聞いていますよ。悪い子達は叱らなきゃダメなんでね……マギウスは悔い改めてください。

第7章の難所が無事に突破出来たので、今回はここまでにします。

ご視聴ありがとうございました……ってウオワアアア!!!

▶?

最後の3人目、ウワサの創造主である柊ねむが現れて、マギウス達は私達にその目的を告げる。

彼女達が掲げている魔法少女の救済について。

魔法少女のドツペルやウワサに巻き込まれた人々から感情のエネルギーを集め、やがてそれが満タンになったらどうなるのか。

里見灯花は何十年経とうと人類が知り得ない宇宙の全てを解明できる。

柊ねむは地球そのものを原稿にして新たな物語を創作できる。

アリナ・グレイは自らの芸術を永遠の生の象徴にし、活動に心を委ねる事ができる。

そうすれば……全ての魔法少女は救われ、全員が幸せになるのだという。

正直、耳を疑うような気分だった。

魔法少女の救済を謳っていたマジウスの本当の目的は、自分達の望みを叶える為だったのだから。

そんなことの為に、多くの一般人や魔法少女を犠牲にして？……冗談じゃない。私はマジウスを認めることができない。

「まるで欲望のままに生きる獣だな。」

「……………はあ……そういうタイプか……………」

十七夜と弓有さんがそれぞれ反応を示す。2人とも所感は大体同じ、驚愕と呆れを半々ずつ感じていた。

むしろ、それ以外に浮かぶ言葉が出てこない。ただ彼女達のやっている事は許されざる行為というのは確かなことだろう。

「そうそう弓有詩織、流石にもうタイムリミット。元からリターンを貰おうと思つていたケド……忘れてたわけじゃないヨネエ？」

「……………」

「まあ、アリナはスペシヤルな画材を無駄使いなんてしたくないワケ。心配しなくても、リターンは……」

そこまで言つてアリナは嗜虐的な笑みを浮かべながら、黙つたままの顔が見えない弓有さんのことを見やる。

「……アナタ自身を頂くカラ！」

「……………っ！」

弓有さんの懐からアリナの結界が飛び出て、彼女の体を包み込んで元のキューブ状の形に戻る。

魔法少女昏倒事件の時にも、ひとりぼっちの最果ての時にも、今まで何度も見かけたことのある結界だ。

弓有さんがとある魔法少女から借りていると前に言つていた、私にとつても見慣れたモノだった。

そしてそのキューブは今、アリナの手元に。

「それじゃあボク達はもう戻るよ。」

「ちよつと待つて！ねむちゃん！灯花ちゃん！」

「それじゃあ環いろは、じゃあね〜！」

そのままマジウス達は姿を消す。

散々彼女達が使っている移動系の固有魔法だろう。黒羽根の中にそういう魔法の持ち主がいるのかもしれない。

もはやこの遊園地の廃墟に彼女達の姿は跡形もなく消え去る。

しばらくの間、私達はその場に立ち尽くすのみだった。

Part 35 人はそれをガバと呼ぶ

何故かマジウスに捕まってしまったRTAはーじまーるよー

前回はキレーションランドでちゃんとみかづき荘が鶴乃ちゃんを助け出し、第7章が無事に終わった…はずでした。

いやあまさかパイセンが取り上げなかったキューブがこんな風を利用されるとはなあ…不意打ちって怖いですね。やっぱり神浜ってこわいなあ、とづまりしとこ。

でもだからって神浜のヤベエイ！アーティストさんは開幕から詩織ちゃんをオモチャにしようとしなくてくれ!!!

人のソウルジエムを取ってはいけないって習いませんでしたか!? 誰か！警察呼んで！ポリス、へいポリス!!! おまわりさんコイツです!!!!

「アリナの的に試したかったコトがあったカラ、丁度いいのがいてタイムリーなワケ。」
まさか？まさかだぞ？待って♡あばばばばばばばばばば

アリナア!!!魔法少女の魂はデリケートなんだぞ!!!そこに魔力を流し込むな!!!話聞
てるかア?オイ!!!（語録無視）

体力は減つてない：物理的なHPは減つてないけど、これだと詩織ちゃんの精神的な
HPがすり減つてしまうんだが??

視聴者の皆さんご存知の通り、ソウルジェムは魔力の貯蔵庫であり、魔法少女の魂そ
のものです。

よくみかづき荘が魔力を一つに揃えてチーム攻撃をする事がありますが、大抵は他の
魔法少女の魔力なんて異物です。

やちよさんが水出したり、鶴乃ちゃんが炎出したりするように、人によってその性質
も異なります。

一応毒にも薬にもなりはしますが、それを無理やり身体の中に入れてられたら：ねえ?
ありとあらゆる激痛が走りますよ。原作アニメでも水色の子が白タヌキにやられてま
すし……。

だから何回も流し込むんじゃないアリナア!!!詩織ちゃんが苦しんでるダルルオ!!!
いやほんと容赦ないな神浜アーティスト……そろそろ詩織ちゃんの疲労が溜まりす

ぎてバツタリ気絶しそうですけど。

あつあつ待つて待て待て待てあばばばばばばばば

心臓を鷲掴みされているくらいの激痛と、右腕を電流流した金属で押し潰されるような痛みがやばいんですが、そのうち詩織ちゃん心臓発作で過労死したりしないですよね？
？おいおい大丈夫か？

あつオイ待てい！そんなに力強く魔力込めたりしたら……あつ

……おはようございまーす（ゲツソリ）

遅れましたが、今回は前回の続きからになります。

でも続きからとか言ってますが、今現在の詩織ちゃんの状態だと何一つ進めることが出来ません。

なんてつたつて両手両足を椅子に縛られてますからねえ！

いくら操作をガチャガチャやってようが、ガツチガチにロープで括り付けられて動けねえぜ！むしろコツチが痛いくらいですよ。

ソウルジエムも取り上げられていて変身する事もできません。走者知ってます、こういう状況を絶対絶命って言うんですよね。

いやだつて聞いてくださいよ奥さん。

ただでさえさつき某芸術家にオモチャにされたし、挙げ句の果てにまた撮影していったんですよ。

詩織ちゃんは痛みで気絶するわ、起きて気がついた時には椅子に縛られて拘束されるわ：もう散々な一日ですね。ええ（白目）

まあ？ マギウスの本拠地であるホテルに入ることが出来たので問題は無いです。誰かに現状を伝える方法もありませんけど。

「こんにちは、商人さん。いや、こんばんはって言った方が正しいかな？」

そしてこういう時に出てくるのが大抵このおガキ様でございます。

話を聞くに多分もう一度勧誘しようとしているんでしょね。前に会った時の出来事は暴走詩織ちゃんが記憶消したので。

ここで断つたところでどう考えても、洗脳なりなんなりで強制的に参加させられますよクオレハ……。

「まあ面倒くさい挨拶は放っておいて、有鷺詩織？ もう一度聞くけど私達の組織に入るつもりはない？」

無いに決まっています!! って…今有鷺ちゃんの方で名前呼びませんか？

あーあ、詩織ちゃんのお操作権がまた無くなっちゃいました。迂闊に経歴ガバを確かめなかった走者のせいです。

操作権ガバガバじゃねーかお前んちイ！でもこれで詩織ちゃんが暴走状態になるのは、過去関係の名前もダメだって普通に分かりますね。いやまあ今検証されても困るんですけど。

そろそろNGワード登録してくれませんか？いや詩織ちゃん的には十分に禁止ワードなんでしようけど、ほら出ないようにとか…ダメ？そう……。

「ソウルジエムは預からせてもらったよ？だって、商人さんが変身しちゃったら色々面倒だし。」

そら（ソロでも戦えて情報支援も出来るベテランとか）そう（ソウルジエムを奪って変身出来ないようにする）よ。

ですが詩織ちゃんの話ぶりからして、なんか別のことを聞いてるみたいですね。別のことつてなに???

ああ、もしや例の万年筆を探してるんですか？ほらオーダーメイドとかだと値段的にもお高いですから…おや、違うみたいです。

ん？あれこれ詩織ちゃん、暴走状態っていうか錯乱状態と言った方が正しいような感じですけど……大丈夫ですかね？

いえーい、走者のタイム息してるう〜？

ええ……まだ何もされてないのにめちやくちや精神ゴリゴリ減っていきますよ……やだ……走者の本走、ガバすぎ……？こんなんじやRTAになんないよ〜。

「はあ？何言つて……！、ソウルジエムは!？」

「あちらの方で……な、なに!？」

「ドツペル！ドツペルだ!」

わあ、これって何でしょうかね？走者には詩織ちゃんのドツペルくんに見えるんですが……随分と大暴れでいらっしやいますねえ。

わざと自分の精神を追い詰めてソウルジエムを濁らせるとかそういう……？錯乱状態はそのためでもあつた……？

ソウルジエムは離れた場所にあつたので濁り具合は分かりませんが、錯乱状態で無理矢理一体型のドツペルを起動したっぽいですね。

ほら見てください、おガキ様と羽根達がバチバチにやり合ってますよ。ドツペルくんのクソでか図体のおかげでまだダメージ来てないですけど。

あ、ドツペルくんが大勢とやり合ってる間に、義手くんがソウルジエム持って来てく

れましたね。いい子や……。

じゃあそのままドツベルくんも詩織ちゃんの拘束を取ってください！義手くんもオナシヤス！

(HPが減る音)

ドツベルくん!?

ロープ切るのに足まで切れなんて言っていないダルルオ!?せつかく脱出するのに主人の身体ボロボロにしてどうすんねん！

まま、ええわ。

とりあえずドツベルが発動した時に操作権が無事に戻ってきたので、右腕のビツクリでドツキリなマジカルアームを使って他の拘束も解きます。

そのあとはガキ様や羽根達の攻撃を避けながらソウルジェムを回収してスタコラサツサします。

……：そういう壁を壊すって不味くない？と思った視聴者兄貴姉貴もいるでしょう。

実際、とてもヤバいです。

なんて言ったってマギウス本拠地のホテル自体がウワサの一部だからですね。

少しでもホテルを傷つけてしまうと、『兵隊グマのウワサ』と『働きグマのウワサ』が駆けつけてきます。

つまりドツペルくんが大暴れしていたら、それを退治しにウワサがやってくるという訳です。

基本的に大元の『女王グマのウワサ』を倒さない限り、この手下のクマ達は無限湧きするのでスルー安定です。

にしても足に受けた傷のせいで移動速度が本当に遅いですね……。

詩織ちゃん結構素早さに定評はあったはずなんですが、抜け出せたから結果オーライなのか……？

でもこの羽根とウワサとおガキ様の大勢を相手に、弱体化の状態でトンズラするのは(難易度的に)マズイですよ！

「や〜つと追い詰めた！もう、逃げ出されたらわたくしとしても困っちゃうんだよね。」

そう！このホテル自体がダンジョンみたいなもんなのである!!

そこまで構造は複雑ではないんですが、いかにせん室内なので通路を塞がれてしまう

と別の方向に逃げるしかなく……そりや流石の詩織ちゃんも壁際に追い込まれるよね、と。

まあ走者が一か八かで賭けてみても、こんな状態じゃあそもそも逃げられる確率が低いので、当然運が悪ければこのような状況になります。

そもそもあの時にサツサとアリナパイセンに、不意打ちトラップキューブ返しておけば、こんな事にはならなかったんですけどねえ！

でもガチで有能アイテムだから返すのが惜しくなっただけで、いついつい持っただけでいい。くっ……まさかパイセンはこれを見越して？

「まったく……また逃げるつもりなら、わたくし達にも考えがあるよ？」

げえっ、関羽（受信ペンダント）!?

時期的にそうでももんね！第7章終わったら、2日後に第8章『偽りに彩られ神浜』が開始されるんですもんね！

そりやあおガキ様も強行手段で詩織ちゃんを勧誘できるし、そのために受信ペンダントのウワサも持ち出してくるわ……。

えー説明いたしますと、元々ソシヤゲ版で実はこの第8章からマジで文量が跳ね上がりますよね。

いろはちゃんを軸に進んでいた話が、各地の状況を伝える群像劇に早変わりするから

です。多分おそらく。

そこで主に前半と後半に分けられる訳ですが、その前半戦のボスを務めるのが『フラワースピーカーのウワサ』。

つまりこの『受信ペンダントのウワサ』の本体でございます。

コイツは身につけている限り、マジウスの言うことをなんでも聞いてしまう悪魔のアイテムです。

対象者に付けさせるだけで簡単に洗脳出来るというメリットがありますが、一方でペンダントを体から外したり打ち壊したりすると、すぐさま洗脳が解けてしまうというデメリットも存在します。

いつもなら『使役』とかで「フン雑魚が！」と言えるんですけどねえ…見てくださいよこのプレイ画面！絶対絶命ですよ！

「大丈夫大丈夫！すぐに商人さんもわたくし達の目的に賛同してくれるはずだよ！」

うおおおおおやめろおおおお!!ソイツを持つてくるんじゃあない!!!オレのそばに近寄るなああああ!!!

アッ……………

いつけな—い！大ガバ大ガバ！ 私、走者。年齢不詳！どつかのネット在住！どこにでもいる至って普通のマジレコRTA走者！

でもある時プレイヤーキャラがマジウスに連れ去られちゃつてもう大変！しかも受信ペンダントで洗脳までされちゃつて!?

一体詩織ちゃん、これからどうなっちゃうの〜?!?!?!?

………本当にこの記録どうなるんですかね…？

というわけで今回はここまでにしようと思います。

それではご視聴ありがとうございました。

▶ ?

羽根達に命令して拘束した弓有詩織がいる部屋へと入る。

環いろはやベテランさん達といい、わたくし達の妨害をする者達がそろそろ邪魔になつてきた頃だった。

そんな中、いつの間にトラップを仕込んでいたのか、アリナがその固有魔法でもつてとある魔法少女を捕まえた。

弓有詩織。神浜の魔法少女の中でも、グリーンフィードを売買する商人と噂されるベテランの魔法少女。

いつの間にアリナの知り合いになつていたのかは知らないが、刃向かつてくる戦力が減るのであれば都合が良い。

聞く話によれば、あのアリナに画材やらオモチャ扱いされているらしい。

色々と弓有詩織で遊んで満足したのか、わたくしに貸してもいいとだけ言って、その

ままた外に出て行った。

「……い……あ………？………は………」

「ようやく目が覚めたかにはや？ずいぶん遊ばれてたみたいだね。」

それからしばらくして、鈍い身体をゆっくりと持ち上げて弓有詩織は眼を覚ます。

アリナが一体どのようなようにして遊んだのかは知らないけれど、鈍痛で顔をしかめる商人さんの姿からして、どうせロクでもないものに違いない。

まあわたくしには関係無いよね！

とりあえずまだ意識がぼんやりしている商人さんに状況を投げやり説明して、早速こちらの勧誘についての話に持っていく。

ちなみにこれは強制参加！だつて断られてから逃がしてしまつたら、ますますわたくし達の目的は妨害される事になっちゃう。

特にこの弓有詩織はまさに一騎当千の戦力だ。それは戦闘面ではなく、サポート面の意味合いが強い。

「………名、まえ………」

『有鷲詩織』と呼び掛けられた弓有詩織はビクツと体を小さく跳ねて、こちらの方を恨めしそうな目で睨んでくる。

なんだかその様子にどことなく見覚えがある気がするけれど……とにかく凶星つて感

じかな？

わたくし達はちゃんと交渉材料を揃えて話してる。商人さん相手にはこんな情報まで知っていると言った方がきつと早い。

「……………それ……………」

「どこで知ったか知りたい？でもざあんねん！教えるつもりは無いよー。」

「……………ソウル、ジェム……………？」

当然、近くには置いていない。

これでも商人さんの噂とか話はちやくんと集めてるんだよ？人望もあつてソロのベテランでもあるつて事も。

ただ、弓有詩織は違つと首を小さく横に振つて、自嘲気味に笑いながら何事かを話し出す。

「……………違つ、違つ……………違つんだ……………」

「何が違つのかな、商人さん。出来ればわたくし達にもわかるように言つて欲しいな……………」

「……………探して、……………のは……………それじゃない。」

そう言つて弓有詩織はその深緑が混ざつた瞳をこちらに向ける。

じわじわと下から滲んでいく暗い黄色、それは睨むような視線から一転、獲物を見つ

けてギラギラとした狩人のような目へと変わっていく。

そして僅かながらに感じる嫌な予感が、脳裏で警鐘を鳴らし始める。

理由はただただ単純に、一瞬、この弓有詩織からした同族（天才）の匂いがわたくしの鼻をかすめたからだだった。

「……そうだ……私は、探さなきゃ……探さないと、いけないんだ……」

そう声を張り上げた弓有詩織の様子から、わたくしの頭はある一つの可能性に思い当たると。

羽根に奪ったソウルジェムの場所を聞いて、その直後には予感が的中していた。

「ドツペル……」

まるで巨大な鳥の怪物に見えるドツペルは弓有詩織が出したモノだ。

ナイフと見間違えうほどの切れ味を持つ羽を広げ、猛々しく室内から夜空に向けて雷鳴の鳴き声を吼える。

目測だけでも十分な大きさがあると分かる翼長や、手を模した怪物の部位と地に着けた足の鉤爪は、剣のように鋭くホテルの床を抉っていた。

それで商人さんは外に逃げ出そうとしたみたいだけれど、わたくしはソレが逆効果と知っていたから少し微笑んだ。

このホテルフェントホープは『女王グマのウワサ』の管轄内。ホテルを傷つけるとい

うことは、必然的にこのウワサを敵に回すことになる。

いくら優位な状況に持ち込んだところで、体力的にも精神的にも消耗した弓有詩織が逃げ切れるとは思えない。

「……壁……王手か……。」

「分かったようだなによりだよ、弓有詩織？」

拘束を足ごと無理やり外した弓有詩織は当然逃げられるはずもなく、しばらくの鬼ごつこの後に壁際へと追いやられた。

まだこんな事する気は無かったけれど、意外と抵抗するのが早かったし、再発防止のためにもうアレを使ってしまおう。

羽根達に持つて来させたペンダントを弓有詩織に付けさせて、そのまま今度はもつと強力に拘束させて部屋の中に監禁する。

受信ペンダントはすぐに使える便利なウワサ、でもその分解も簡単に出来てしまうからそこまで実用性があるわけじゃない。

まああんなに有り余ってる翼達の量なら、かなり使える部類だよー。歩ならいっばいあるし、更には強力な持ち駒も一つ増えた！

それよりもやっぱり商人さんは噂で聞く通りの強さだった。単純な火力が無い分、魔法を駆使しての立ち回りを理解している。

あれだけの大勢を相手にして、手負いで数分も逃げ回れたのは素直に賞賛できるところ。

わたくしも意外と手こずっちゃったのは事実だし、ほんとに支援特化の魔法少女って感じ。

対処に追われてたらいつのまにか休憩時間のティータイムになってた。

いつものわたくし達の席に向かうと、既に1人居るのが見えた。終ねむだ。アリナは外に行つたまま、まだ帰ってきていないらしい。

「はあく、商人さんって敵だと面倒な性能してるよね。」

「お疲れ様、灯花。ああそうだ、さつき羽根が鳥籠を持っていったけど、件のウワサは弓有詩織に使うのかい？」

「……ウワサ？」

その分厚い本から不意に顔を上げたねむが、思い出したかのように疑問を問いかけてくる。

でもわたくしには弓有詩織にウワサを使うだなんて、そんなコトを一言も話した覚えが無い。ましてやホテルに居る羽根ですらにも話した事なんてなかった。

そうして疑問符を浮かべながら辺りを見渡して、とあるウワサを入れて中庭に置いていた鳥籠が、何処にも見当たらないことに気づく。

そこまで使い道があるようなウワサでもなく、誰かに融合させたとして結界内に引きこもるような能力しか持っていなかった。

だからわたくし達は特に気に留めてはいなかったのだ。使おうと思っっている間に看過できない状況になってきていたから、使うタイミングを逃してしまっただけとも言える。

「……………どうやらあと一歩のところまで、鴉に逃げられたみたいだよ。」

そう言つて再び本に目線を落としたねむと、後ろから駆け込んだできた羽根の報告で、商人さんを監禁した部屋がもぬけの殻になった事を知った。

将棋の名を冠した現実には王手ではなく詰みにまで行かなければ、いくらでも番狂わせによつて挽回のチャンスはあることを失念していた。

つまりは駆け引きの面において、ほんの少しだけ、わたくしはあの弓有詩織に出し抜かれたのかもしれない。

ムカムカした気持ちのまま席に着き、ねむに「首元に糸くずが付いているよ」と指摘されて。

そこでようやく自分の首に、魔力で出来た細い糸が巻かれていることに気付いたのだ。

▶
?

その日、調整屋に魔法少女が集まっていた。

集合した面々は、昨日の夜に由比鶴乃奪還のため、キレーションランドで共に戦った神浜の魔法少女達の一部。

あの夜から未だ一晩ほどしか経っていない中、今日の午後調整屋へ集まれないかと、八雲みたまから急遽呼び出された面々だった。

「それで今日の用件は何でしょうか？」

「ななか、その笑みはやめた方が良いネ。葉月は笑つても目が笑つてないヨ。」

「あはは…気のせいだと思いますよ。」

一騒動が収まったばかりとはいえ、マジウスが行った弓有詩織の誘拐により気が立っている魔法少女中にはいた。

それ以外にマジウスの目的ややり方に反発する者もいる。

少なくとも昨晚の勝利を喜んだままではいられない状況だったのは、誰の目から見ても確かな事実だろう。

せつかくだからと開けられたお菓子の数々はテーブルに広げられていた。口には出していないが、緊張をほぐすように、だとかそんな意味もあるのかもしれない。

静かな空気の中で調整屋の主人、八雲みたまはおもむろに口を開く。

「そうね…今回話したいことは他でもない、『弓有詩織』に関する話よ。」

「弓有さんについて……?」

「でも、私が話すよりも適任な人がいるわ。」

マギウスの翼などの話題かと思っていたところ、予想外の地点からやってきたその言葉を思わず反復してしまう。

真剣な声のトーンで、しかし心底困ったような顔つきで、八雲みたまはティーカップに注がれた紅茶を一口飲んで息をつく。

それから奥の部屋の方に一言、説明のために出てくるように呼びかけると、1人の少女が姿を現した。

銀髪と内にある黒髪を一つに結んだ小さな少女。弓有さんと似ている瞳の緑は、僅かながらに宝石のような青色が混じっている。

小さな金庫を抱えて出てきた彼女に、隣にいたいろはが思わず声をあげた。

「え…マヒロちゃん!」

「フッフッフ、そう! 話がしたいと呼び出したのは、何を隠そう私のことだ!」

胸を張って自慢気に主張したマヒロさんは、金庫を慎重にテーブルの上に置き、先ほどと同じように胸を張って告げる。

肝心のみたまは特に何も反応を返さずに、また一口紅茶を飲んで、マヒロさんの方を

呆れた目で見やる。

その視線に気づいたのか彼女はこほんと咳払いをすると、陽気な笑顔をすぐさま真剣な表情に変えた。

ゆつくりと深呼吸をする。

そうして瞳の緑を更に深く青い空に沈ませて、改めて彼女は自分の名前を告げた。

「…… 私の名前は、有鷺詩織

まひろの、鴉弓真広の親友の……有鷺詩織とは私の事だよ。」

モンブランが美味しいので失踪します

?? ハハ笑い?? フフ笑い

?? 名前+ちゃん?? 名前呼び捨て

?? 甘いもの好き?? 苦いもの好き

?? 優しさが大事?? 親友が大事

第二話 真向かいの空、未だ広く（前）

意味もなく夜中に目を覚ます。

気怠げな身体とぼやけた頭を抱えて、その場で上半身を起こして何も考えずに呆けていた。

変な夢を見ていた気がする。真広がどっか遠くに行ってしまうような、とても酷い夢だったのだと思う。

静かな屋敷の中じゃあもう皆寝てしまっているだろうなあって、隙間から覗く曇り空のように気分が沈む。

「……………え……………」

あの時真広に離された手を見て、そこにある琥珀色の宝石が嵌った指輪に、あれは夢じゃないと現実を突きつけられたんだ。

「せめて……鴉弓真広の本心を理解して、私をちゃんと認めてくれるような……そんな、そんな支えてくれる存在が……私は欲しい。」

『そう……ココが今日から住む家だよ！広さだけは有り余ってるんだ！』

住まわせてもらってた屋敷の中。

真広に手を引かれてやって来た場所は彼女が住んでいる立派な木製のお屋敷だった。

長い年月が経って厳かな雰囲気醸し出す表の門を彼女は開いて、私の肩を掴みながら中に入れようとする。

困惑して真広の顔を見たけど、彼女は笑顔のまま変わらず「入らないの？」と言うように、キョトンとして首を傾げた。

『…………もう誰も居ないの？…………そっか…………。』

ゴミだらけで放置された元実家の空き家。

自分の荷物を取りに来るためだけに久しぶりに帰ってきたけれど、その惨憺たる光景は仮に我が家と言えども嘆かわしいほど。

家には誰も帰って来ていない様子で、少なくとも1ヶ月は住人を見かけていないのだという。

とうとう本格的に夜逃げしたのでろう。どうせ、毎夜街を出歩き家に帰らぬ男と、知らない人を招き入れる女しか居ない家だ。

…………ちよつとだけ、清々する。

『新しい事がいっぱい知れたんだ！友達だつて出来たんだよ！』

あの子が通っていた神戸市立大附属の学校。

いつも自慢げに喋る彼女は本当に楽しそうで、見てるこつちまで明るい気持ちになつてくるんだ。

最初の頃は入院しがちな真広に友達が出来るのかなんて心配をしていたけれど、持ち前の明るさとかであつという間に友達が出来たらしい。

やっぱりさ、真広の笑ってる顔が好きだよ。そして2人でお話しする時間が何よりも、私にとつてかけがえのない思い出なんだ。

『詩織ちゃんはこの通ってるんだ、制服似合ってるね！』

私に通っている大東学院の校舎。

真広は西側の人だったから、もし東に来て何かあつたら嫌だった。

だからどこの学校か聞かれても、内緒だと言つて今まで口に出さなかつたのに、ある日の放課後に貴女は校門前まで迎えに来た。

後日、十七夜から彼女は誰なのかを聞かれたんだよね。

真広も私の交友関係に興味があつたみたいで紹介したけど、いつかは他の子にも教えてあげたいな。

『オーダーメイド？え、世界に一つ！すごい！至上！最高！まさに一番の宝物だよ！』

プレゼントをお願いした工匠区の工房。

貯めに貯め続けたなけなしの財産を使って、誕生日プレゼントであるオーダーメイドの万年筆を注文した。

真広は手紙を書いたりするのが好きだから、手紙に書かれた文字を鑑定してもらつ

て、彼女の手に馴染むような使い心地の物。

プレゼントを受け取った真広は私の手をがっしりと掴んで上下に振り、そのあと跳ねまわりながら喜んでいた。

人生で初めて誰かにプレゼントを贈ったかもしれないこの日、布団の中で密かに嬉しさで寝れなかったのは内緒の話だ。

『……あれ、詩織ちゃん!?来てたなら一声かけてくれれば……つ……つ……め……た……い……!!!』

身体の調子が良い時にときどき訪れる屋敷の一角にある弓道場。

学校に迎えに行ってもいつもの屋上に探しに行ってもいない時は、大概ここに真広は居ると思っっている。

そのうち飽きてきた真広は射ってペットボトルの蓋を開けたり、矢を矢で貫いたりとか……流石に射程距離に障害物があるのを、目隠しして真ん中に当てた時はビックリしたよ。

集中してる時の真広の横顔を見る時間も私は地味に好きなんだよね。

『………ん?おお?!はははは!今日もお見舞いに来てくれたの?ありがとう!』

入院先だった里見メデイカルセンター。

勉強も出来て運動も出来て、大抵の事がなんでも簡単に出来ちゃう真広は、その代わりに身体が弱かったりする。

原因はあんまり分かっていないらしい。ただ前に彼女が咳き込んで吐血した時は、心臓が止まってしまうのかと思うほど背筋が凍った。

風邪とかがすぐに重くなってしまっただって、病衣に身を包んだ真広から聞いたんだ。その時の困ったような笑いが目に焼き付いて離れない。

新西区も、大東区も、神浜市にある全部の区を隅々まで回って探し続けて、だけど何処にも真広は居ないんだ。

まだ、まだ探していないところだってあるかもしれない。神浜市だけじゃなくて、市外に行ってしまったのかもしれない。

だって真広が私の前から居なくなってしまうなんて、絶対に有り得ないと信じたくなかったから。だから……！

「……ツ有鷺！」

不意に一つしかない手首を掴まれて、思わず掴んだ人物を確認するために後ろを振り

返る。いつもの落ち着いた表情を崩して、どことなく焦ったような和泉十七夜の姿がそこにあった。

廃墟の屋上、いつのまにか青空を目指して身を乗り出していたみたいだった。

あのさ、知ってる？真広は私の目のような快晴の青が好きなんだって。でも生憎、ここ数日は晴れた空を見た記憶は無いのだけれど。

あれから何日経った？真広は見つかったか？結局何も進捗は無いまま、ただただ日々を浪費してただけじゃないか。

「ねえ、十七夜。真広はまだ生きてると思う？」

「すまないが……今はそう信じて待つしかないだろう。」

「……………そ、つか……………そうだね。」

申し訳なさそうに目を逸らす十七夜を見て、一番悪いのは私なんだという言葉は喉奥につつかえたままだった。

本当に：真広がいなくてこんなにも私はちっぽけで、どうしようもないほど情けなかつたんだね……………。

いつもよりも重く感じる身体を引きずって、とにかく遠くへと歩いていく。

時間帯が夜だったのが幸いしたのか、人と会うことなんて全然なかった。街中から少し離れた場所というのが幸いしたのだろう。

せめてドラッグストアとか薬局が近くにあれば良かったんだけどな。この前買った包帯は使い切っちゃったし、また今度買いに行かなきゃいけない。

でも今は少し疲れたからと自分の事を労って、近くのベンチにしばらくの間横になることにした。

『え、…!? 詩織ちゃん!?!』

知っている声に驚いて、目元を覆っていた腕をどかす。

月明かりに照らされてキラキラと輝く銀の髪は、見間違えるはずなんてなく一番の親友のモノだ。

ちよつと待っててと駆け出す真広を止めようとしたけど、痛みで軋む身体は予想以上に疲れていて起き上がる事も出来なかった。

少しの間そこでじっとしていると、しばらくして真広がどこから戻ってきて、怪我した場所の手当てを始めたんだ。

手慣れてるって訳じゃないけど、一生懸命に頑張ってくれている。真広には関係のない事なのに。

『どうして真広はここまでしてくれるの……？』

『……詩織ちゃんの方が好きで、大切だから……かな。私の、親友だもん。』

照れながらはにかむ真広が眩しすぎて、彼女の顔を直視出来なかった。

私だって大切だよ、真広。行き場のない私を拾ってくれたとか、そういうのも関係なしに貴女に出会えて良かった。

ねえ、置いていかないで。

真広の背中だけがずっと遠くにあるんだ。

お気に入りの屋上に真広を探しに来た時、どこから頭に響くような声が聞こえたのがキツカケになった。

まだ壊れそうにない廃墟の手すりを伝ってこちらに歩いてきたのは、白いタヌキのようないタチのような奇妙な生き物。

自らをキュウベえと名乗ったその白タヌキは、魔法少女の契約とやらを私に持ちかけてきたんだ。

何でも願いを叶える契約、胡散臭くないわけがない。

そもそも契約はちゃんと条件を確認しろと、昔から親を反面教師にして学んでいた。いやそれに関しては子供のまま成長できなかったアイツらが全面的に悪い。

根掘り葉掘り思いつく限りの全てを質問した私に対し、キュウベえ改めインキュベーターとかいう異星人？の白タヌキは言う。

やはり美味しい話には裏があるとは良く言うもので、コイツは聞かれない限り魔法少女の真実を話すつもりが無かったらしい。

なんだかんだで今まで上手く生き残ってきた経験が活きた瞬間だろう。

もちろん、本当に願いが叶えられるかどうかなんて怪しい所で、それよりも私は早く真広を探したいという心境だった。

珍しい生き物を見たなんてその程度で終わらせて、ここにも真広は居なかったと廃墟の屋上を後にする。

だけれど、次の瞬間に私の足は動きを止めていたのだ。

「君が探している鴉弓真広は生きてるよ。というよりも、最初からずっと近くに居るじゃないか。」

「……………は……………」

あいつも変わらなず愛想のない無表情の赤い目が私の事を見つめていた。

この白いヤツは何て言った？真広が生きてる？最初からずっと近くにいた？どこに、いつから、何で真広は私の前に出てきてくれないの。

頭が追いつかないまま、白タヌキに理由を問い詰める。混乱した喉から出てきた声は思っていたよりも小さく、そしてだいぶ弱ったような声だった。

「違うかな？君が大事そうに持っている、その宝石がついた指輪。それこそが魔法少女のソウルジエムなんだよ。」

弾かれたように手にある指輪を凝視する。居なくなった時に真広が私に置いていたお守りだった。

ソウルジエムは魔法少女の魂そのものだ。砕かれたり穢れきつたりしたら、即座に本人は外傷もなく死亡する。

逆に言えば、宝石が壊れたりししないと魔法少女は死なない。
たとえ肉体が消滅したとしても。

……それじゃあ真広は生きてるの？こんな喋る事もなく、笑う事もない琥珀色の宝石が真広自身だって言うの？

あり得ないだなんて言葉はとつくに意味を成していなかった。

だって彼女の魔法少女姿を、あのおぞましい魔女という化け物も、私はあの時に見てしまっているのだから。

今も魂だけの存在になってまで、彼女は意思が無い状態で生き続けている。私が彼女を縛り続けているんだ。

ふとあの夜の事を思い出した。

快晴の空に浮かぶ星々を見ようとして、2人連れ添って抜け出してきた廃墟の屋上。

本当に覚えてもいないほど昔から使ってきたショルダーバッグに、温かいミルクティーの入った水筒と飴とチョコをたくさん持って空を見上げる。

真広は先に階段を駆け上って、手を広げながら楽しそうに笑って、動くたびに二つだけ飛び出た髪の毛が大きく揺れる。

屋上から見下ろせる神浜の街は、まるで月と星々の光を鏡合わせにしたかのように、幻想的で煌びやかな輝きを放っていた。

『ねえ、まひろはさ。どんな事をお願いするの？』

『んーそうだなあ。しおりちゃんとずっと一緒にいられますように！とかかな。』

キョトンとした金の瞳を優しく細めながら、少し気恥ずかしくなったのか顔を背けて手に持ったミルクティーを流し込む。

表情は見れないのに耳だけ真つ赤にした姿がなんだか愛おしくて、思わず笑みがこぼれてしまった事を許してほしい。

『一緒にいられるといいね。』

『いられるよ！だって私はしおりちゃんの事が好きだもん！』

『ふふっそうだね、私とまひろだもん。きつと大人になつても一緒にいるよ。』

一緒にいればいつだって楽しかったよ。困ってる子達を助ける時だって、家から抜け出して遊んだ時だって。

まさかこんなに突然お別れが来ちゃうだなんて、その時の私も真広もきつと想像した事なかったんだ。

真広は私が一体どんな気持ちで、ずっと背中を見てきたと思う？一人で勝手に何処かに行つちやうと、本当に少しかだけ苦手だよ。

何も言わずに自分の判断基準で消えてしまうのなら、私だって真広を好きに扱つてもいいとは思わない？

『じゃあ約束しようよ！』

『約束?』

『ずっと一緒にいようって約束!』

ねえ真広は覚えているかな?あの時ちやんと約束したんだよ。

だからこそ今、堂々と胸を張って言う。

はじめて出会ったこの場所で。

「私はね、鴉弓真広が背負うモノを含めて、その全てを分け合いたい。あの子の事を助
きたい、救いたいんだ。」

……契約しよう、私の願いの為に。」

▶ ?

小さな金庫から取り出されたのは、青いソウルジェムが入った箱と一枚のDVD。

そのDVDの映像に映っていたのは、黒髪青目の有鷺詩織、弓有詩織の元の身体の持ち主である。

今現在マヒロの姿になっている彼女は、少女たちの後方にて映像に補足説明を少しずつ挟んで話を進めていく。

真相を全て明かす気はないようだが、それでも親友を想う気持ちに嘘偽りは無い様子だった。

『……まあ、この録画を見てるってことは想定外が起きたんだろうね。』

実際に今の状態は有鷺詩織にとって、予想外の出来事の連発という有り様なのに間違いはない。

なんとか本拠地内の翼に変装して、ウワサと融合させるといふ多少強引な手を使い、弓有詩織を逃したのはあの状況で最善だっただろう。

洗脳されたまま敵対されていたら、と思うとゾツとするところだ。

味方ならあんなにも頼もしいのに、敵になつた途端に脅威と化す強さ。普段の彼女の有難さがどれほどのものだったかを改めて思い知る。

敵から持ち出した郵便鳥のウワサ。

かつては自分があの黒い紙飛行機に名付け、そして自分達2人の手紙がそう呼ばれ、のちに神浜の空を飛び回つた使い魔の話。

まさかウワサとして出てきていたなどとは考えたこともなかった。

いくら詳細を知らないであろうマジウスとしても、宝物の思い出を貶すような所業をするようなら報復していたのは容易に想像できる。

だが今回ばかりは彼女達に感謝するしかなかった。

なにせ件のウワサにはうわさの制約に縛られた攻撃的な本能が無かつた為である。

手下に手紙を運ばせて結界の中に引きこもり、自分から外に出てこようとはして来な

い。

おそらくは活動初期のマジウスが脅威となりうる魔法少女を閉じ込めるためだけに作られたウワサなのだろう。

結界内に入り込めるのは一人だけという致命的な欠点があったが、捕まったら最後外に出るのは簡単ではない。

さしずめアリナの固有魔法のウワサバージョンといったところか。それにウワサの要素を追加したようなものだった。

「なるほど、結界の中に入れるのは一人のみ……とならば奪還は難しいかもしれないな。」
「あ？何でそうなんだ？みとを連れてけばいいじゃん。」

和泉十七夜の発言を聞いて、思わず深月フェリシアは疑問を投げかける。

確かに話はちゃんと聞いていたのだが、ウワサと融合したのならば鶴乃の時と同じように魔法を使えばいいのではないか？と思っていたからだ。

十七夜は前に自分が体感した事も含めて、作戦を実行できない理由を話す。

実は弓有詩織には心の中に入るような魔法が効かない。いや正確には、表面上しか読めず強制的に弾かれる。

今までは意識して拒んでいるのか、無意識に封じ込めているのか、甚だ疑問が湧き出

るところであった。

しかし現在に至ってようやく答えにたどり着く。

「……これが有鷺の言う安全策とやらの一つだな？」

その言葉に有鷺は首を縦に振る。

もともと有鷺詩織は鴉弓真広と平和な生活を送りたいだけの普通の少女だ。それは最初からズレることのない想いである。

だが彼女の因果の量が少ないのが原因なのか、願いが言葉通りに解釈されて叶えられたのか、文字通り2人の存在全てを分けられてしまった。

つまりは弓有詩織もこの場にいる彼女も、鴉弓真広であり有鷺詩織なのである。

コーヒーを混ぜた牛乳を二つのコップに分けたところで、結局のところ液体がコーヒーや牛乳に戻るわけではない。

表面に残っていた有鷺詩織が様々な策を講じた結果、鴉弓真広の持っていた記憶を消してこの身体ごと『弓有詩織』という架空の存在を作り出すことにした。

その時に出来たのが弓有詩織のストッパ、有鷺詩織の言う安全策だ。

記憶が戻らないように念入りに分けられた『使役』の固有魔法を使い、身の回りの至るところにある鴉弓真広の記録を抹消した。

そうして完全に封印することで、弓有詩織が平和に生きていける環境を整えていく。記憶や心を覗かれたとしても対象者を『使役』で無理矢理気絶させ、弓有詩織の設定を覆らせないために対策を立てた。

和泉十七夜の『読心』や相野みとの『心を繋げる力』が途中で弾かれてしまうのは、この妨害が原因だった。

「……本当だったら……有鷺詩織と鴉弓真広の名前を聞いたって、弓有詩織という一人を保っていたはずだったんだけど……。」

「なんらかの要因でソレが外れてしまったという訳ね。」

しかしある時、その計画に小さな綻びが生じた。

やがてそれは亀裂となり、穴となり、ついには封じられた弓有詩織の記憶を決壊させるまでに至る。

そして記憶が混濁したまま錯乱した鴉弓真広の人格と、記憶を保ちながらも手を出せない有鷺詩織の人格に分かれた。

噛み合わなくなつた歯車を無理やり動かし続けたがために、二つの魂はややくしく深刻な状態になってしまったのである。

「……すまないが、今日のところは解散にしてもらえないだろうか。」

あれこれと話を続けていた彼女達を遮ったのは和泉十七夜だ。

弓有詩織相手に戦力を割いて、肝心の勝負で不利になってしまつては不味いだろうという懸念が彼女にあつた。

ましてや今はマジウスとの抗争がまだ終わつていない状況下。

故にマジウスへの対策を考えなければならぬ現状で、これ以上話し合つて時間だけが過ぎ去るのを危惧していた。

「大丈夫だよ、私が一方的に真相を話しただけなんだ。……ただ、あの子のことは覚えておいて。」

和泉十七夜の言うことはもつともだ。

確かに判断を渋く思う魔法少女はいらぬだろうが、神浜全体が関わってくる以上、この件に関して目を瞑るしかないと七海やちよはそう感じている。

悩みに悩んだ末にこの場を解散することに決意する。

そんな中、1人の少女が俯きながら考えていた。

その翌日、志伸あきらは言いようのない不安とともに、自らの通う参京院教育学園へと向かっていった。

特に夢を見たわけではなかったが、どことなく憂いの表情を浮かべながら自分の席に着く。

色々な事が気にかかつて授業にいまいち集中できていなかった彼女は、ふとペンを止めた時に今日感じていた違和感に気がついた。

「そういうえば、今日は一度もななかの姿を見かけていない」と。

育ちの良さからいち早く学校に着くことはあっても、遅刻するなんてことは余程のこ

とがない限り無いだろう。

もしかして体調を崩して寝込んでいるのでは？そう考えたあきらが同学年の生徒達に声を掛けた。

校内でも常盤ななかは有名人であつたためにすぐに返事は返ってきたのだが、欠席だとしか聞いていないらしい。

同じ魔法少女である参京院の生徒達に聞いても、今日は姿を見かけておらず、何があつたのか知る人はいなかった。

放課後になつた途端、奇妙な胸騒ぎと直感、頭によぎる一つの可能性を持つて校舎を飛び出していく。

行き先は新西区の廃墟に存在する調整屋。

全力で走つてその場所についた時には、ちょうど八雲みたまが開業のために中へ入ろうとする場面だつた。

「あら、そんなに急いでどうかしたかしら〜？」

「いえ、その………ななかを朝から見かけていなくて………！」

息を整えながら話すあきらの話に、みたまは同じ可能性に思い至つて息を呑む。

急いで2人が入った調整屋の中は、昨日集まった時の様子とあまり変わりが無いように感じられる。

調整のためにスペースを区切るカーテンがそよ風に揺れるばかりで、そこに誰かしら人がいる気配はない。

ただこの調整屋を営んでいる八雲みたまは疑問に思うことがあった。

いくら廃墟とはいえ彼女は普段からここを管理している店の主人だ。当然昨日も全ての戸締まりを確認してから帰ったはずである。

「……風……？」

だからこそ、そよ風が吹き込んでいるなんて本来ならば有り得ない事なのだ。

風が吹く方向から考えてみれば、その原因となる場所は奥の部屋にある窓。おそらくはそこが開いているのだろう。

あきらも風の違和感に気が付き、2人はアイコンタクトを取って、意を決して奥の部屋の中へと足を踏み入れた。

机の上に何かが乗っている。

空の箱、少しだけ高級そうな便箋、その上に置かれた黒い万年筆。隙間の空いた窓辺に残されたカラスの羽が一枚。

そして何よりも志伸あきらの目を引いたのは、『行って参ります』と一言、達筆な文字

で残された書き置き。

それは常盤ななか弓有詩織の元へ向かったという証拠だった。

第二話 真向かいの空、未だ広く（後）

内側が黒く染まった銀髪を揺らして、前方の彼女は後ろを振り返らずに前へ前へと足を進めていた。

ひたすらに文字が横に流れていく空間は以前にも見たことがある。キリサキさんのウワサの件でもあつた、ウワサ特有の結界なのでしょう。

やがてたどり着いた先にあつたのは足元に散らばる紙の山、壮大に建ち並ぶレターボックスの書庫。

そしておそらく結界の中央と思われる開けた空間で、歩き続けた私たちはようやく足を止めた。

理由は言うまでもなく中央にいたその人物。

地面に座り込んだまま万年筆を手にとって文字を書き続けるその人物は、わずかに響いた一人分の足音に気がつき顔を上げた。

ただ表情を浮かべないまま、何も言わないでこちらを見上げただけ。そんな彼女の様子を見て隣にいた有鷺さんは話し出す。

「じゃあ打ち合わせ通りにやろうか。」

「では……有鷺さんはウワサの足止めをお願いできますか？」

「任せて。その代わり……あの子の方は貴女に託すからね、ななか。」

有鷺さんから頼まれた言葉に頷いて、また中央に向かって一步を踏み出す。しばらく、両者は無言のまま。

彼女が言っていたようにこちらを見る目に映っていたのは、着物のような衣装を身にとって刀の鞘を携えた魔法少女。私一人のみが視界に存在していた。

「もしその方。急に声を掛ける無礼、どうぞお許してください。」

「……………」

「改めましてお初にお目にかかります。私、常盤なかと申します。」

「ここは敵の領地。いつ来るのかわからない攻撃に備え、辺りに気を配って警戒するのを忘れないようにして挑む。」

いつものように平然と、しかし頭の中では様々な案を練り上げながら、彼女へと自らの名を告げた。

遠巻きから名乗った声に対し、中央にいる彼女は特に反応を返さず手元の紙をそのまま書き進める。

結界に入る前から分かりきったことではありましたが……。

「……つれませんね、詩織さん。いえ今は真広さんと呼ぶべきでしたか。」

その言葉を聞いて真広さんはまた少しこちらの方を見上げると、左手を上げて周りの使い魔達に指示を出す。

周囲を取り囲むように現れた鳥の形の使い魔は、いつもの鴉の使い魔ではなくウワサが出した手下らしい。

直接手を下さずとも対処できるというのか、それとも最初から眼中にないのか。どちらにしろ彼女は私たちをここで始末するつもりなのでしょう。

「私、あなたに手合わせ願ひ、はるばるここまでやって来たんです。」

一度目を伏せ深呼吸をして、辺りを囲むウワサの手下を横目で見やったあと、視線を元に戻して私は彼女の事を見据える。

そして手に構えた刀の鯉口を切つて、周辺に風が吹きすさぶなか、平常心を保つて戦闘態勢を取つた。

なんだか初めて出会つた時を思い出しますね？あの時も私は噂を聞きつけてあなたに声を掛け、そして手合わせをして頂きました。

残念ながらあと一步のところまで力及ばず、一瞬の隙を突かれ崩されてしまい、結果として負けてしまいました……。……。

今回ばかりは、負けるわけにはいきません。

「ですから、ええ、是非とももう一度。了承はして頂けたみたいですので……」

一拍おいて有鷲さんに目配せをすると、心配はいらぬという自信満々の様子で、彼女は大きく頷く。

それを確認してから刀の柄に握り、足を一步。

「いざ尋常に！」

戦いの火蓋を切った。

一気に真広さんとの距離を詰めて最初の一太刀を鞘を持った手元から放つ。

こんなもので彼女が倒れるとは微塵も思っていませんでしたが、それでも当てる気で行ったはずで。

しかしこちらを見ないままに、こういとも容易く避けられてしまうと少しばかり悲しくなってしまうですね。

向こうでは変身した有鷲さんが、ウワサの手下や使い魔達を引きつけて暴れまわってくれています。

私が気兼ねなく真広さんの相手を出来るようにと、彼女が作戦の段階で申し出てくださったことでした。

まったくもって感謝しかありませんね……有鷲さんのためにも、と改めて刀を強く握りなおす。

「……で立ち止まるわけにはいきませんわ。大人しく……ッ！ やられては頂けませんか……！」

鞘の反対に収まっていた小刀の柄を掴み、それを抜く動作と一緒に思い切り鞘を投げ飛ばす。

回転しながらも真つ直ぐに飛んでいった鞘は、槍の合間をすり抜けて真広さんの眼前まで迫った。

「ああもう！ あれもこれも全部邪魔だ！ 止まれ！ 動くな！ それ以上前に進むな！」

ガチリと固まる両手足、動かそうとする意思とは正反対に止まる身体。

私の動きを制したのは何処からともなく縛りつけられていた糸。

光の反射によってようやく視認できる細さのそれは、しかし何重にも絡みついて力を封じていた。

これこそが真広さんの隠し通してきた『使役』の固有魔法なのでしょう。

「……いいや、止まらない。私たちは動く、前へと進み続ける！」

けれども次に来たのは槍ではない。

結界内に有鷺さんの声が響く。『使役』が込められた真広さんとは、似て僅かに非なる魔力が迸る。

動きを禁じる声と相反する言葉は、腕を塞ぎ足を地に縛り付けていた銀糸を解し、光の粒子へと変えて宙に返した。

身動きが、取れる。

「必ずや一太刀、恩義に報いましょう。」

糸を振り払って一転、身を翻し刀に宿した魔力を放って周囲の槍を一掃する。

攻撃をかき消された真広さんはいつもの眠そうな目を見開いて、意思とは裏腹に動き出した私に驚いたのだろう。

今まで頼り切っていた『使役』の攻撃が使えないとなれば、彼女は次にどうするのでしょうか？

この戦いが再戦という時点で、私は答えを既に知っているようなものです。

そのまま一気に彼女の元へと駆け出した。

動作を止めずに勢いを乗せ、下から斜めに向け刀を切り上げて一振り目。鉄同士が擦れる音と共に上に弾かれる。

真広さんの持つ短槍に軌道を逸らされた後、刀を返して腕ごと力を入れて二振り目。斜め下にしやがみ避けた彼女の軸足がズレた。

動作の続きから一回転して槍を小刀で弾き、身体を屈めて懐に入れる三振り目。咄嗟に出された短槍に攻撃の中断を余儀なくされる。

槍の突きを利用して足場にし、背後に回って振り向きざまにお見舞いする四振り目。宙に浮く槍が地に落ちる代わりに衝撃を逸らされた。

僅かに身体能力の差で私の方が優位に立っている。だが一向に勝敗は決まらない。

思考を巡らせ続ける向こうもそれを察知していたのだろう。不意に彼女は今までの攻防のパターンを変えて、おもむろに右手を前へと突き出した。

思い返してもここで何かを出してくるのは明白だ。

長時間に渡る戦いで次第に体力を消耗していった私は、ふと気がついた時には掌から突き出てくる彼女の槍が眼前まで迫っていた。

「…同じ手に、引つかかるとでも！」

そこで決着は付かせなかった。

構えていた二刀流をすかさず手放し、突き出された左腕を両手でしっかりと掴んで、足払いとともに彼女に背を向けて肩に乗せ投げる。

不健康そうな生活を送っている彼女の身体は想定以上に軽く浮き、私の一本背負い擬きですら地に留まることが出来なかった。

「……いゝった……っ！」

「おっと、すみません。力を入れすぎたやも……ですが安心してください。」

浮かぶ槍に邪魔をされ無理矢理距離を取らされると、彼女は打ち付けられた振動によるけながら立ち上がる。

刀を再生成して始めの居合の形を取った。

足を前に踏み出して、大きく一步を詰める。

ここが勝負どころだと思っても直感も、告げていた。

「この一閃で落とします……」

空を飛ぶ鳥をも地に落とすかのような閃光で。今日という日までの想いを込めたこの一太刀で。

仕舞いとしましょうか、詩織さん。

「散りなさい！白椿！」

▷

澄み渡る青が灰色の天蓋を染め上げる。

別に特別だと言われる所ではなかったが、そのとある名もなき廃墟の屋上こそが2人にとつての思い出の場所だった。

あの日、郵便鴉と噂されるようになった黒い紙飛行機を風に乗せて飛ばした。

あの日、世界で一番だと思える自慢の親友に初めて出会った。

あの日、夜空に輝く星の下で互いに指切りして約束をした。

描いても書いても紙が足りなくなるほどに、彼女達の思い出はまるで溢れんばかりの幸せで輝く宝箱のようだった。

「ねえ真広、憎くなるほどの快晴だよ。貴女が褒めてくれた私の瞳と一緒に青空、一番好きだつて言ってくれた色と同じくらい。」

「……………」

「空、見なくていいの？ そんなに俯いてちゃ宝石みたいに綺麗な満月の目が隠れたままになっちゃうよ。」

黒髪の少女が晴れ渡る空を見上げながら、隣でうずくまったまま動かない銀髪の少女に語りかける。

「あのさ……実は私、まだ真広のこと許してないんだ。」

「……………」

目を伏せて告げた黒髪の少女の言葉に、銀髪の少女の小さな肩が震えた。

隠し事がバレて凶星を突かれたかのような、いけない事を咎められた子供のような、見た目相応の様子で静かに。

彼女は腕の中にうずめていた顔を上げて、泣きそうな目で地面を見つめ、一言ポツリと疑問を投げかけた。

「……じゃあ……どうすれば、よかった……のかな……？」

その言葉に黒髪の少女は青い目をわずかに見開いたあと、心底愛おしそうな表情を浮かべて目を閉じる。

自然と思い出されるのは今までにやってきた文字上に存在するヒーロー活動のことだった。

今ではすっかりお気に入りになってしまっていた、こだわりの少し高級そうな便箋に、色とりどりに輝く丸い飴玉をつけて。

彼女達を書いた手紙は困っているどこかの子供の元へと届く。他の人に打ち明けられないような悩みを持つ子を救うために。

「……何をすべきとか、そういうの無かったと思うんだ。」

「……………え……。」

「本当に助けを求めべきだったのは、私たちだったのかなって。」

弾かれたように手すりを離れると、黒髪の少女はしゃがんでいた銀髪の少女を立たせ

て、誰もいない屋上で立たせて向き合う。

「私さ、今でもあの時真広に出会えて良かったって思うよ。母親も父親も最初から欠陥品の私は必要なかった。学校でだって忌み嫌われてた。」

「……………」

「でもそんな時に真広と出会ったんだ…私がどれだけ救われたか、きつと言葉にしたって伝えられないほどだよ。」

「……………本当に…?」

「本当だよ真広。そんなに信じられない?もしかして、私が誰だか忘れてしまったかな?」

そうして涙が残る少女の目元を拭って、彼女を安心させるように微笑んだ。

「……………詩織ちゃん。私の、一番の親友。」

眩しく照りつける日射しを見るように目を細めて、思わず涙が溢れてしまいそうになるのをぐっと堪える。

「願いが、誰かの思いを……捻じ曲げて、いないかって、ずっと……ずっと不安だった。……支えて、くれるように……強制させて、いるんじゃないかって。」

「……うん。」

言葉を絞り出すように話す銀髪の少女に、黒髪の少女は相槌を打つ。

「……………でも、そっか……そっかあ……私は……愛されていたんだね。」

「ふふっ、大体真広は自分に自信がなさすぎなんだよ。この私が一体いつ、親友のことを嫌いだなんて言ったの？」

「……………そうだね、そうだった……気づいてみれば……こんなに、単純だったんだね。」

ぼやけてブレた視界をやつとの事で戻した頃にはもう、そこに居たのは弓有詩織という少女とマヒロという少女。

有鷺詩織と鴉弓真広とは、ここでお別れだった。

「……………あのね、詩織ちゃん。」

「なあに？真広。」

「声が聞こえるんだ。私の事を、求めてくれる人の声が。」

「……うん。」

「私は助けなきや……いや、助けに行きたいんだ。義務感とか、そういうのなんて一切無しに、自分の意思で助けたいと思うんだ。」

不意に花びらが眼に映る。

植物も何もない、ただ鉄とコンクリートの残骸が残る廃墟の屋上で、淡く白い花びらがひらひらと舞っていた。

手のひらでそつと包み込んで胸の前に抱えると、何故だか不思議と心が温かくなるよ
うな気がした。

「……どうやらお迎えが来たみたいだよ。」

マヒロの姿が薄らいで、言葉とともに消えたのと同時に、錆びついた屋上の扉が開かれる。

ブワツと春を感じる陽気な風が身体をすり抜けて、白い椿の花を引き連れて大空へと

駆けていく。

やや古びていて音を鳴らす扉の前に立っていたのは、同じ魔法少女である常盤ななかだった。

「見つけましたよ、今日こそはちゃんと伝えますから。」

「……………！ななか、ちゃん…………。」

一息吸って、言葉を吐く。

「好きです、詩織さん。」

昔の事がどうなどは関係なく、私は今のあなたを、弓有詩織という方を慕っております。」

真つ直ぐに見つめてくるその目が何故だか眩しく感じて、思わず目を背けたくなるくらいには照れ臭かった。

シンプルに好意を伝えられたことが無かったため、弓有詩織には何をどうしてどのようにならなければならないのか分からなくて彼女の顔を見上げた。

「……まだ、結論は……出せない……でも、本当に……いいの……？」

「おや心外ですね、一世一代の大告白ですわ。先に言っておきますが、もし断られたとしても諦めませんよ。」

「……え……。」

「なにせ私、こう見えて随分と欲張りな女ですので。」

そう言つて彼女は口元に手を添えて心底嬉しそうにはにかむ。

彼女の差し出された手を両手で握つて、弓有詩織もまた、安心した様子で嬉しそうに頬が緩んだ。

青空に花びらを舞わせる暖かな春風を感じながら、静かに目を閉じて、二人の少女は屋上から姿を消した。

▶?

長い眠りから目を覚ましたかのように思えた。

意識はこんなにもハッキリして、それでいて今までにない程に心には勇気がみなぎっていた。

おもむろに掴んだそれは不思議と手に馴染む。

目を覚ました弓有詩織が左手に持っていたのは、機械的な装飾が各所に施された無骨な黒い槍。

彼女にとっては初めて触ったモノであり、真広にとっては6年ぶりに触れたモノは、

考えずともその使い方を知っていた。

「戻つてきましたか……詩織さん。」

「うん……ごめん、迷惑……かけたね。……それと……ありがとう。」

「あなたが無事でなによりです。それよりもまだ喜ぶには早いようですね……。」

常盤ななかにつられて上に目を向ける。

引き離された鳥型のウワサ本体が結界内の上空を飛び回り、一部となっていた弓有詩織を戻そうとしきりに威嚇していた。

ここから帰らなければ奪還作戦が成功したとは言えない。それにななかにとっては学校を抜け出してまで行ったことだった。

時間がかかりすぎて元の神浜に戻らないと、自分の勝手な行動に気づかれてしまうだろう。

対して弓有詩織はこの状況が続けば、かつての自分たちの二の舞いになると考えていた。

だがそんな事をさせるわけにはいかない。

「私は……やるよ……！」

一たび槍に魔力を込めれば、たちまち姿を変えて機械仕掛けの弓に変形する。

弓手に構えて両端を繋ぐ弦に、右手に持った矢を番えた。上空のウワサに狙いを定めて弓を引き絞る。

ウワサは自分の眼にも見えるし、何よりこの矢の届く所にいるのだから、何があっても射損じることはない。それは自分の腕に対する絶対的な自信だった。

「……………この…一矢は、外さない。」

羽ばたきによって舞い上がった便箋の嵐の中にウワサが隠れる。

両者の間に沈黙が流れて、周囲の風景が遅く感じた。

やがて見えないウワサは静寂を突き破り、弓有詩織はその鳴き声目掛けて矢を放った。

一条の光が宙を貫く。

願いによつて繫いだ縁とは、銀糸であり弦である。

前へと突き進む想いとは、短槍であり矢である。

支えてくれる存在とは、すなわち弓である。

故に弓矢を成す3つが揃つた今、弓有詩織が矢を外すなどということとは……

……到底有り得ないのだった。

心臓にあたる核の部分を寸分違わずに射抜かれたウワサは、声にもならぬ叫びをあげて息絶える。

あ、と声も上げる隙など微塵もなかった。そこからほどなくして主を失つた結界は崩壊を始める。

透けた内部からは神浜の街を写す外部が薄く見えて、ななかの先導に従つて来た道を急いで引き返した。

「……わっ、と……!」

「……ん? え、ええ!! ななか!? 詩織さん!」

唐突にした物音と誰かの声に志伸あきは顔を上げ、そこに現れた人物に驚きが隠せなかつた。

ウワサに融合されていたはずの弓有詩織と朝から見かけなかつた常盤ななかは、何処からともなく忽然とその姿を現したのだから。

急いであきは驚きから平静を取り戻すも、衝撃的な出来事過ぎて思ったように言葉が出てこない。

無茶をしないでほしいとか何で言ってくれなかつたのかとか、問い詰めたことは色々あつたが、ボロボロで帰ってきた姿を見たら少しのため息しか口から出なかつた。

「とりあえず……おかえり、二人とも！」

「はい、ただ今戻りました。」

「ただいま……！」

調整の仕事の休憩時間に戻ってきた八雲みたまが、お茶会を始めていた3人に驚くのはまた別の話。

鴉と鷺が語ったは二人の少女の昔話。

今なお進む魔法少女達の記憶より、ずっと前にあつた少しの前日譚。

彼女は運命を掬い巢食われ、そして自分を支えてくれる存在に救われた。

彼女は一人では結末を変える事が出来なかつた。けれども、いつか来る幸せな日々を望む想いはついに届いたのだ。

二重になつた引き出しの底には思い出の手紙が形を失つたりしないよう、丁重に整えられて仕舞われていた。

□弓有詩織（鴉弓真広）

この度、第2話『真向かいの空、未だ広く』を発生させた人。

人格が融合したり解離したりと色々散々な事があつたが、無事に親友と思いの丈が通じ合つたので、心身ともに二人で一つの弓有詩織になる。

元の真つ黒鎧の衣装に白と和風要素が加わり、普段の姿はいい意味で初期の頃に進化

した。武器が大の可変槍と小の短槍で二槍流になったので、組長との共通点が増えた。

□マヒロ（有鷺詩織）

経歴ガバ及びややこしきの元凶。13歳時の鴉弓真広の姿を借りて行動していた。

ちなみに13歳と限定されているのは、有鷺ちゃんが14歳から先の真広ちゃんを見たことがないからである。

実は2人の想いのすれ違いを解決するだけで、魔法少女ストーリーはクリアできたりする。中身そのままバージョンの没ルートが存在した。

□常盤ななか

今回のMVP。走者の勘違いによって現時点での好感度第1位。

恋愛耐性クソザコから恋愛メンタルつよつよに進化した。ついでに強さがグリーンと上がった。

初回の手合わせではマジカルアームパイルバンカーの不意打ちで負けたので、今回は一本背負い投げもどきでカウンターを返す。

□弓有詩織（真広ちゃん）戦

有鷺ちゃんがデバフを全て打ち消して、サポートで周りの雑魚を引き受けてくれる。

弓有詩織は初見殺しがあるから強く見えるが、今回はそのことごとくが潰されたのでお前は泣いて良い。

ウワサ戦よりもこっちの方がメイン。

□元ネタの一つ

『弓有真広』がアナグラム。

多分某STGの曲で知っている人が多いと思われる。太平記巻十二に載っているの
で皆見ろホイ！

怪鳥退治のお約束と言えば弓の名手に射らせる事でしょ。

□『博愛』

「自分がされて嫌なことはしない」の反対。

テレビのヒーローと街行く親子の見よう見まね。

愛情が分からなくて不器用なだけな話。

リアルクリスマスが近づいて来るので失踪します

Part 36 預かり知らない所さん!?!?

もう神浜に腐るほどある放棄された廃墟群。

普通の人は一切寄り付かないようなそれらの物件は、中身がすっかりして行くせに使われていないことから、神浜市内に居を構える魔法少女達にとって都合のいい拠点だった。

他の街と比べるとこの街の魔女は強く、魔法少女達は普段からチームを組んで活動している。

その中でも現在の神浜はおおよそ三つの勢力に分けられていた。

魔法少女の解放を願う匿名集団マジウスの翼。その幹部、マジウス。

魔法少女による魔法少女のための魔法少女互助組合。その傘下、自警団。

どの勢力にも属さず平等に強化を施し中立を保つ調整屋。その店主、八雲みたま。

先日のクレーションランドでの決戦の後で、弓有詩織の話聞きつけた我らが自警団はそれなりにピリピリしていた。

いやピリピリどころかビリビリぐらいなのだが、いかんせん擬音で説明したところで伝わらない。とにかく過激派が戦争を起こそうとしていたとも言っておこう。

「常盤さんが無事に商人さんを奪還してくれたらしい…感謝しても仕切れない…：：：そこで第五班の予算の余りを使って贈り物をしようと考えたのだが。」

「隊長！突然そんな高級肉を送りつけられたら、誰だつて怖い思いすると思えますよ隊長！」

そしてつい先日、我らの恩人であり商人さんを常盤ななかさんが連れ戻してきてくれたのだ。

感激した。一同は涙した。聞いた話では恋愛の執念で彼女は商人さんを一人で奪還したらしい。

しかも返事はまだ貰っていないそうだが、彼女は既に告白済みらしい。常盤ななかという魔法少女は恋関連の話題に対してだけ、様子からでも見て分かるくらいめっちゃくちゃバレバレなのである。

当然のごとく推しに幸せになってもらいたいタイプのおたく、その魔法少女の集まりであるファンクラブはざわついた。以前まで論争中だった派閥が顔を見合わせて固まった。

とりあえず労いと感謝の意を込めて、我らが自警団第五班の隊長は高級霜降りを2人に匿名プレゼントしようとお画策していた。

頭の中身は常に筋肉やらパワーやらで詰まっているが、彼女は水名女学園に通うれっきとしたお嬢様だった。バリバリの金持ちの名家生まれだった。

「たいちよく、健康になつてほしいのは分かりますけどお……でもいきなりお肉はアレじゃないですか、たいちよく？」

「くっ……やはりそうか……ここは仕方ない、遊佐さんに高級和菓子を届けてくれるように伝えよう……！」

班制なのに班長ではなく隊長と呼ばれるのを好む彼女は、ようやく肉から離れて和菓子を贈ることに決める。

とりあえずパワーで解決しようとするから、第五班は別名脳筋隊と呼ばれていた。

隊長は別名の方を気に入っているから、コッチの呼び名で呼ばせようとするのだろう。ほかの班員も満更ではない様子。

あれこれ燃える隊長を横目に、私はそつと、温かくなる快眠アイマスクを贈ることに

した。

魔法少女互助組合とは、弱い魔法少女達が身を寄せ合って助け合うために作られた組織……と言われている。

実際は、必需品のグリーンシードを売買してくれる商人さんの追っかけファンクラブだ。

商人さんの名前は、弓有詩織。

神浜市を分割する東、西、中央の勢力。それぞれ顔役と並ぶくらいに有名なベテランの魔法少女である。

市内の魔法少女達のチームやテリトリーから溢れた、一人で戦う勇氣も能力も無い弱い少女達に稼いだグリーンシードを分けてくれるのだ。

言うまでもなくグリーンシードは私たちの生命線だ。大抵の魔法少女は自分が生き延びるために貯蓄する。誰かにあげるだなんてもつてのほかだった。

それなのに、彼女は安すぎるくらいの良い良心的な価格で取引をする。時には何も受け取らずに無料でそれを配る時だってある。

そんな風に神浜市を駆け回る商人さんに影響されたのだろう。

いつしか彼女に影響されて、自分たちの力でも生きるために立ち上がった人達がい
た。

1人がダメなら2人で、2人がダメなら3人で、3人がダメなら4人で！そうして互
いに身を寄せ合った先輩達は組織を結成する。

それが魔法少女互助組合。

又の名を商人さんのファンクラブだった。

「あ〜！起きたのお？もうちよつと仮眠でも取つたら〜？」

「いえ……私は大丈夫です。ほかの方々はどこへ？」

「たいちよ〜ふくちよ〜は、巡回中〜！今日は珍しくみんな早起きなんだねえ。」

その中でも私が居る自警団という内部組織は、商人さんのファンクラブの中でも古参
メンバーが集まって出来ていた。

最近ではマジウスの翼だとかの問題が出ているが、こちとらその黒羽根とかよりも心
身が弱つてる子達が多い。そもそも戦う気力自体を失った少女達でいっぱいだった。

その子達のために！と出来上がったのが自警団。昔からいた初期メンバーの方々。

紆余曲折を得て見事にメンタルを豆腐から鉄鋼に錬成させた彼女達は、グリーンフィードやその他の物を取引するシステムを確立させた。

もちろん全員分のグリーンフィードが手に入るわけじゃない。一人一人の力が弱い分、一体あたりに割く人員だって決して少なくない。

それでも自警団が諦めないのには、庇護下にいる魔法少女達に憧憬と哀愁を抱いているからだった。

自分の選択を誤らなければ今も存在していたはずの日常。

契約の有無に関わらず訪れていたかもしれない運命によって、少女達は家族も住む家も失っていたけれど、心が弱かったために人を憎む激情ですら抱くことが出来なかった。

「先輩、先輩って今の生活どう思いますか?」

「ん〜? 先輩ちゃんから変な質問だあ! んふふ、私は楽しいよ〜! 前じゃ友達とかと遊べなかったし〜。」

「急に闇をぶち込むような先輩は…いつも楽しそうですよね。正直私には羨ましいくらいのお気楽さですよまったく。」

「ありがとお、先輩ちゃん褒め上手〜! お礼にホットミルクを贈呈しましょう〜!」

だからこそ同じ轍を踏まぬように、と自警団は今日も人知れず魔女を狩るのだ。

それはそれとして商人さんに貢ぐのをやめるつもりは一切合切、一同合わせて絶対に無いのである。

先輩から貰ったホットミルクをひとくち飲むと、ハチミツの仄かな甘みが口の中に広がった。

ホットミルクにはハチミツ。うん、分かってるじゃないか、先輩。流石は空気が読める検定1級の過去を持つ女。過去の反動から解放されたは良いけど、ここまで自由奔放になれとは言っていない。

隊長は空気を読む能力を少し見習ってほしいけど、そのままの隊長でもいてもらいたい……うーん、この気持ちは一体……？

「隊長！緊急事態なので大声で招集かけてください隊長！」

「うむ！皆の者ーッ！総員緊急会議だ!!」

勢いそのまま開け放たれた扉の爆音に驚いて、思わずミルクを吹き出してしまった私は悪くない。

ただ……その後の隊長の発言に、緊張が迸ったのは確かだった。

「マジウスの翼の連中が暴れ始めた！」

見回りに出ていたはずの隊長と副長から伝えられた緊急事態。

それは現状我々と敵対関係にあるマギウスの翼が、ついに人目を気にせずして暴れ出したという事だった。

「……………一体なにが起こっている？」

急遽集められた自警団のメンバーはそう疑問に思うしかなかった。

元来マギウスの翼は匿名の少女達が集まっている組織である。それこそ潜入していたメンバーからも伝えられていた通りの情報だ。

ウワサを使ったりはするものの、表立って活動したことなど聞いたことがない。魔法少女という存在がバレた時のリスクだって、向こうも承知しているのだろう。

しかし隊長の話聞く限り、自警団よりもコソコソすることに長けているマギウスの翼は、人目に触れてもおかしくないような場所で襲撃を仕掛けてきたという。

言動も正気とは思えないようなモノ。まるで誰かに操られていると感じたそうだ。

「……………というより、それでは？」

「……………どういふことだ？」

「いやその、『ようだ』じゃなくて本当に操られているんじゃないでしょうか？前例だつてあることですし。」

ハッと面食らった表情をする隊長と隊員達。

いや先輩はニコニコしたままですけど、その他の人はそんな鳩が豆鉄砲食らった顔しないでくださいよ。

遭遇時に撮っていたという写真を急いで確認した副長は、とある一点に赤で丸をつけて共通点に印をつける。

「隊長！写真確認したらアイツら全員首元になんか付けてましたよ隊長！」

「でかした！終わったら肉を焼いてやろう！もちろん私の奢りに決まっているぞー」
無駄に金だけは余っているからな！そう言つて隊長は私の頭を無遠慮に撫でる。

他の班員なら肩を叩いていただろうが、第五班の中でもとりわけ年齢の低い私は、みんなからなにかと年下扱いされる事が多かった。

一緒に戦う仲間たち。誇りに思えるところはいつぱいあるけれど、少しでもその扱いが同じ目線になれたらいいな、と。

「総員！自警団および互助組合に連絡を回せ！その後の連絡は情報専門の班が対応を行う！代わつて第五班は翼との交戦、更にそれに付随する様々な事案の対策に移る！」

隊長は私たちの顔を順に見ていったあと、高らかに声を張り上げ右腕を突き上げて、
こう宣言した。

▶
?

「自警団第五班！これより作戦行動を開始する！」

な、なんか走者の知らない所さん!? で色々起こっていたRTAはーじまーるよー

今回はマグウスに監禁されもうだめムリぽと思ったたら、超平和（当社比）なウワサと融合させられるし、詩織ちゃん魔法少女ストーリー2話を踏みました。

そしたらとんでもない経歴ガバがわんさか出てきましたが、全て組長がなんとかしてくれましたので問題ありません。

しかも詩織ちゃんが覚醒強化バージョン最終フォームに進化しました。走者的にもこれ以上経歴ガバの心配が無いから良い……良いのかこれ？

今回はその続きからです。

プレイヤーが連絡を忘れないように、ちゃんと詩織ちゃんがMSS内で復活速報回したみたいなので安心安心！

そして今回はようやく第8章ですよ第8章！いやほんとキレーシヨランダからここまでの間ってちよつとしかなかったはずなのに、どうしてこんなに長く感じたんですかねえ……？（すつとぼけ）

それでやっていく第8章『偽りに彩られ神浜』の開始時期は明確です。

さつき言っていました。第7章終了から2日後ですね。

マギウスの拠点で拉致監禁拷問大脱走が一日、組長単騎ウワサ詩織ちゃん戦が一日で……まほスト2話でちょうど1日が終わるので………

つまりは昨日です。

！
…もう始まつとるやんけ！何してくれとんの？これじゃ（タイム短縮）出来ないやん

と、思いますでしょ？

実はコレ、マギウス側の都合で変動する事があります。

具体的に言えば例のおガキ様の機嫌だったり、あっち側で騒動があったりすると日付が変更されます。

— というか詩織ちゃん2話の終わりで普通にお茶したんで、時期的に開始が1日分ズレたっぽいですよ。

な〜の〜で〜……あれっ？今日じゃね？

「アアアアアアアア!!!」

恐怖! 早朝に突然襲いかかってくる謎のローブを着た集団!

見てくださいよ〜コレ! バツチエ首元に『受信ペンダントのウワサ』を付けてますよ!
!じゃけん洗脳解除しましょうね〜。

そして最初からペンダントを狙う事が出来るようになっていますが、これは事前に詩織ちゃんが……

というよりも前々から動き回っていたらしい片割れのマヒロちゃんが、『使役』やら義手くんやらを使って受信ペンダント云々の話も聞いていたようで、その情報が詩織ちゃんにも回ってきているみたいです。

もうお前が情報提供者でいいよ。

「商人さん! 自警団第五班、ただ今加勢いたします!」

「総員! 魔力の壁を展開しろ! そして壁ごと殴って峰打ちだ!」

おっと増援ですね。どうやら例の自警団の魔法少女達のようにです。

もしかしてモブ魔法少女達の信頼度あるから、彼女達の信頼度もだいぶ稼いでいるんですかね?

……ってあれ? うん? なんか操作感が……アツ (察し)

そういうえば詩織ちゃん覚醒フォームで二槍流になったので、それに伴って今まで使ってた短槍の持ち手が右に変わったんですよね。

それでいて武器切り替えが入ったから以前よりも複雑になったんですねえ。

「隊長! 障壁で殴るってどうすれば良いんですか隊長!」

「こうなんか……こう……とにかく殴れば全部解決する! 殴れ!」

「たいちよ〜! それが第五班脳筋説って〜言われる原因ですよ、たいちよ〜!」

何やってんだこいつら……。漫才は良いからそのまま障壁を展開して肉盾になって下さいね!

話は戻りますが、でも経歴ガバの心配をしなくていいっていうのは大きな進歩ですよ。

何故かなって変身時のオッドアイにならなくなったし! 二槍流と遠距離弓の戦闘スタイル切り替えが出来るようになったし! 組長との好感度がめちやくちやあつた事が分かったし!

なんだこれは……選り取り見取りじゃまいか。

いやまあ、その分走者がスタイルに慣れなくなったり、近接が前よりももつと弱くなったりしてますけど。

ただ、この強化詩織ちゃんの弓の精度がクソほどえげつなく高いんですよ。

おそらくゲーム的には得意武器に設定されているんですけど、ホントにガチで高すぎて吃驚しますよクオレハ……。

なんだよ目に見えるなら射れます！とかいう謎の自信は。これで実際に目隠ししながらでも、音だけを頼りに射抜く事ができるそうですよ。

なんなんだお前……（畏敬）

「……あれ……私はいったい……。」

「隊長！本当にどうにかなっちゃいましたよ隊長！」

「やはりパワーこそ正義！殴りこそが全てを解決する！」

おつ、今詩織ちゃんが、黒羽根の首にぶら下がってた受信ペンダントの紐？を射って切り落としましたね。

え……つよ……遠距離になったら急に強くなあい……???

「……弓有詩織……そうか、助けられたんですね……。」

「……ありがとう、ごさいます……！」

良いつてことよ！

後で調べましたが多分、詩織ちゃんに何かしらの才能バフが入ってるそうで……その中

でも『天才』系のレアリティを引いたんじゃないかっていうのが有識者の意見でした。

もう第1部も終わりに差し掛かっていますが今分かることなの…?

もしかして射撃にスキルポイント全振りでもした? 何で弓だけ異様に上手いんだよ
おかしいダルルオ!?

ほら見てくださいよ! 弓矢形態の時だけ限定で、某災厄の勇者みたいに周囲をスロー
モーションに出来ますよ!

それどころか射った矢に物凄くエイム補正が掛かります! これはもう一騎当千です
ね間違いない。勝ったなガハハ!

「敵対していたあなたに頼むことになるとは……………」

「でもそう言ってる場合じゃないよ…最近の方針はどうも過激な気がしたし……………」

「…判断はお任せします。けれど…どうか、助けて下さい…!」

頼まれたからには仕方ねえなあ!? やってやろうじゃねえかよこの野郎!

まあとりあえず見かけた羽根達はパパパッと受信ペンダントを射落としちやいま
しよう。

義手くん編隊出撃! 神浜カラスネットワークフル稼働! 神浜各地の魔法少女達を助
けて暴走羽根達を止めて下さい!

使い魔大量放出で詩織ちゃんの魔力消費が半端ないですが、ここで渋ってたらネーム

ドが即おさらばしちゃうので出し惜しみしないようにします。

せつかくここまで来てるのにガバってしまったら、もうタイムがロスするなんてレベルじゃないですからね。

「たいちよ〜！他から増援要請来てますよ〜たいちよ〜！」

「総員！すぐに現地向かうぞ！商人さんもありがとうございました！」

自警団モブ達も気をつけてくださいね。

ええ、このチームの子達は随分と個性的なようでしたけど……でも魔力障壁でシールドバツシユとか、モブのくせに何気にすごいことしてるんですよ。

気を取り直してこのあとは、知り合いの魔法少女達に連絡して作戦会議にショーター
イ！します。

集場所はいつもの調整屋。というかそれ以外に大量の魔法少女を匿える場所が……ねえ？

今思ってたんですが、本日は休日です。

詩織ちゃん第8章のために早起きするようにしたんですが……はえ〜羽根達は休日出勤なんて苦労してるんですよえ〜。

というわけで倍速で集めました。

これがマグウス対抗メンバーだぜ！早速話し合いを始めますが、ここで忘れてはならないのが見滝原勢の人たちです。

第8章は前半の『フラワースピーカーのウワサ』戦と後半の†ホーリーマミ†戦があらまして、彼女たちはその後半戦の鍵となります。

まあ作戦自体はマミさんと戦う↓みとちゃんさんが心を繋ぐ↓ピユエラマギホーリークインテット！って感じですけど。

やっぱ最後に勝つのは絆の力なんやなって。

それで緊急会議では色々話し合いますが、このチャートは情報提供者をやる（確固たる意志）ので情報をばら撒きません。

受信ペンダントを外せば洗脳解除されることや、パイセンのトラップキューブで拉致された際に得たマグウス達のホテルの場所も出します。

もつともこれについては例の自警団が持つてそうなもんですけど、流石にそこまで行けなかつたんでしょうか。モブにはクリアランスが足りなかつたか……。

「……万年桜のウワサ…どうしても、そこに行くつもりなのね。」

「はい、私は行きます！ういの手がかりがそこに有るかも知れないから…」

ここで出したホテルの位置なんですが、実はいろはちゃんが行くこうとする『万年桜のウワサ』と被ります。というか本拠地の入り口がそこです。

しかしながら詩織ちゃんはキューブに入れられて輸送されたので、入り口がどこにあるかは知らないですよ。

そのため敵の拠点と場所がめっちゃ近いから気をつけてとしか言えず、いろはちゃんを強く引き止める事が出来ません。

「そう…なら私は止めないわ。ただそこは詩織さんの言う本拠地の場所に近いわよ。……気をつけて。」

やちよさんの様子を見ての通り、そもそもいろはちゃんは『頑固』持ちなので…まあ多少はね？

一応義手くんを飛ばして逃げる隙を作ることには出来ますけど、それをして走者にうまあじがあるかと言ったら微妙なラインです。

というのもフラグ的に万年桜に彼女を行かせなきやイベントが成り立たないし、助けでもないろはちゃんがマジウスの翼から逃げ切れる保証はありません。

「まだバママミとの対決も残っている。ここは対抗できる人材を残してくればありがたい。」

「それにマギウス達に見つからないためには、なるべく少数精鋭で向かった方が何かと都合が良いでしょう。」

「それなら…私が…！いろはさんについて行きます…！」

それにいろはちゃん拉致よりも↑ホーリーマミ↑戦で考えられるロスの可能性の方が大きいです。

特に今回は本来氏んでいたはずの故人組が居るので、やちよさんが若干や弱体化している状況です。

メルちゃんとかなえさんも（特にかなえさんが）強化されていますが、かのホミさん相手には複数人で挑まざるを得ません。

二人の固有魔法に関しては正直言って微妙半分、有能半分です。

『未来誘導』は以前説明した運要素に左右される魔法ですが、『装甲無視』は名の通り脳筋うってつけ固有値こそ正義とも言うべき有能魔法ですからね。走者のチャートにもよく採用されます。

ホミさんは銃主体の攻撃を取るため、近くに行くまでが一苦労なんですけど。そこはそこという事で。

「ボクの占い結果はそこそこ好調！しかし皆さん、油断大敵です！十分に気をつけて下さい！」

そしてメルちゃんから今朝の占いの結果をお聞きしまして：今章はエリア制圧系の攻略となっています。

ぶつちやけて言えば相手は羽根達で、しかもペンダントを落とすだけで済むので、戦は無双系に似た感じにはなりません。

敵の数は基本的に団地が一番居ます。多分東出身の羽根が多いからだと思うんですけど：（凡推理）

まだ集合出来ていない魔法少女もたくさんいるんでね：サツサと増援に向かいます。東の物量が多過ぎるツピ！

あとは行動する各班ごとに義手くんを一匹ずつ配っておきます。もちろん想定外のガバが起きないように万年桜のウワサに向かう人たちにも渡しますよ。

もしもの時の対策を忘れてしまうと、難易度ハードの毒牙にかかってしまいますから気をつけて下さい。さすが神浜：修羅の国。

じゃあ話し合いは終わったので早速行動開始と行きましょう。

「と言ったところで今回はここまでです。
ご視聴ありがとうございました。」

Part 37 ガバやらに彩られ神浜

いつも通りの日常を過ごす人々が行き交う神浜の街。

その路地裏で今もなお、一般人の目につかない薄暗がりの中では、平穩を打ち壊すような緊急事態が発生していたんだ。

「この……こんなに沢山、どこから湧いて出てくるのよ!？」

「一旦退いた方が良い……かも……!？」

「さやかちゃん! 早く詩織さんの言った合流場所に向かおう!？」

まるで理性を失ったかのように、こちらを襲ってくるフードを被った魔法少女達。

それがマジウスの翼っていう組織というのは分かっていた。でも前に会った時とは明らかに様子が違いすぎたんだ。

『本当なら巻き込みたくないけど、ごめんね。今回はほむらちゃん達も関係ある話なん

だ。』

続く文でそれはマギウスという幹部が原因なのだと、以前に連絡先を交換していた詩織さんが今朝のメールで教えてくれた。

私達が神浜に行かない間に、市内の戦いはどんどん熾烈を極めていたのだという。

相手の幹部による洗脳で翼達は暴走して、人目も気にせずに手当たり次第魔法少女を襲っているみたい。

そして中にはきつと、巴さんも居るのだろう。

巴マミ：私の、私達の先輩である魔法少女。

忘れもしないあの日、魔法の結界に巻き込まれた私を鹿目さんと一緒に助け出してくれた人だった。

いつも前に見える背中では私や鹿目さん、美樹さんも、佐倉さんだってなんだかんだで頼りにしている。

彼女はいつも優しく強くて、誰よりも一生懸命に魔法少女として生きているんだ。だけど、巴さんだって一人の少女なのに違いはない。

魔法少女の真実を知ってしまったから取り乱してしまった：それは普通の魔法少女にとつては至極当然の反応なんだ。

……もし、私が最初から魔法少女の真実をみんなに伝えていたら、一体どうなっていたんだろう？

結局そんなことは考えても仕方のない事だし、何よりその真実を急に私の口から語られたって信じてもらえないと思う。

魔法少女として生きる以上はどうしたって付いて回ってくる問題を解決しようとしてるマジウスの翼。

魔法少女を倒し終えた後に突然現れた謎の少女。

魔法少女が集まる街、神浜市。

ともかく私が今まで経験してきた中で、特に今回の時間軸ではイレギュラーなことばかり起こっていた。

何もかもが予測不可能な事態ばかりのこの時間軸で鹿目さんが助かる方法が見つかるかもしれない。

現に神浜市内でのみ使うことができるドツペルというものが、魔法少女救済の糸口なのだという。

(それでもやっぱり、終わったわけじゃないのかな……。)

腕についたバックラーを横目で見て、すぐに目の前に視線を戻す。

この時間軸はなんだかうまく行きそうな気がする反面、不穏な空気が漂っているのは間違いない。

その証拠に見滝原の学校に転入してからもう一ヶ月が過ぎているのに、砂時計は落ち切らないままだった。

私の願い……それは鹿目さんとの出会いをやり直すこと。

鹿目さんを守るために、今まで出会ってからの一ヶ月をずっと繰り返し続けてきた。

そして一ヶ月後に見滝原へとやって来るワルプルギスの夜によって、どの時間軸も失敗に終わっていた。

それが今回は一度も現れていない。ワルプルギスに関する話も聞いたことがないままだった。

少なくとも魔女が通る進行ルートに見滝原は入っているはず……もしかしたら途中で何かしらの妨害があったり、それこそ誰かに倒されたりしているのかもしれない。

ただ、きつとまだ生きている。

なんとなくだけどそんな気がするんだ。

だってこの時間軸は全てがイレギュラー。とにかく色々と考えたって最善を取り続けて前に進むしかないだろう。

ひとまずは……っ！

「ほむらちゃん！ありがとう……おかげで助かったよ……！」

「ううん、気にしないで。それより先を急ごう！」

目の前の鹿目さんを守り抜く。

それが私にとって一番大切な事なのだから。

「あーこつちだよこつちー！こんな大変な時期に来てもらってごめんね……！」

「いえ大丈夫です……巴さんはどこに？」

「……まだ、分からない……でも……必ず、出てくる。」

集合場所に居たのは神浜の魔法少女の人達。

今回の非常事態の緊急会議のために集められたのだという。その事態というのは、言わずもがなマジウスの翼のこと。

人目をはばからず襲いかかってくる羽根達は、おそらく何かしらのウワサによって操られているというのが場の総意だった。

それは巴さんもウワサによって操られている可能性が高いということ。だって、そうとしか思えない。

いくら彼女が年頃の少女相応の精神を持っていたって、あの巴さんが同じ魔法少女相手に殺そうとするなんて。

そもそもこの時間軸が私にとって未知の領域で、普通なら考えられないことがたくさん起こっている。

「……それで……みと、ちゃん……の、魔法で、ウワサから……引き離して、欲しい。」

「マミさんと心を通わせる……そうすれば、元通りのマミさんが帰ってくるんですか？」
「実際に鶴乃という前例がある以上、おそらくコレが一番の有効打だと思うわ。」

『心を繋ぐ力』、それが相野さんの固有魔法だという。ウワサ融合の弱点を見事に突いたかのような魔法。

つまり彼女達の言う作戦は、私達が巴さんと心を通わせること、ただ全てその一点に限るんだ。

「私、やります。だってマミさんは大事な先輩で、大切な仲間なんです！」

「あたしもやります！ 普段から色々とお世話になりっぱなしで……少しでもマミさんには恩返しをしたい。」

鹿目さんと美樹さんが力強く、覚悟を決めてそう宣言する。

少しの間、俯いていた私は一拍遅れてから、2人と同じように巴さんを助ける作戦に参加したい旨を口にした。

「私も……やらせてください……！」

巴さんを想う気持ちに嘘偽りは一つもない。それを私自身にも証明するんだ。

ここにいる魔法少女達にとって、すっかり暗くなった曇天の空がいわゆる反撃開始の合図だった。

近くのビルの広い屋上。そののへりポートから聞こえる銃撃の音、衝撃の音、金属同士が擦れたり弾けたりする音がここまで届いてくる。

やちよさん達が巴さん達と戦い始めたんだ。事前に打ち合わせていた作戦の第1段階、それは出来る限り相手の力を削るもの。

今の巴さんは強いなんてレベルじゃない、それこそ神浜にいるベテランの魔法少女達が束にならなければ敵わないほどには。

鹿目さんも、美樹さんも、そして私も。こんな風に覚悟を決めて巴さんと向き合う機

会なんてそうそうにない。

仲間として活動するのが当たり前の日常で、対立することなど今まで一度も無かったからだ。味方の時はあんなに頼もしかった巴さんは、今この戦場では遥かに聳え立つ壁のように感じる。

それでも彼女を見据えて一歩進んだ鹿目さんを見て、私も構えた拳銃のグリップを自然と強く握り込んだ。

(……なんだかあの日の練習が、凄く昔の事のように思える。)

自然と脳裏に浮かんだのは、まだ巴さんが行方不明になつていなかったとき。私が神浜に足を踏み入れてから少ししか経っていないくらいのも出来事。

その時期、魔法少女としての特徴的な武器を持たない私は、ゴルフクラブや自作の爆弾、ちよつと危ない所から拝借してきた銃を使って魔女退治をしていた。

でも普通の人はそんなモノに触ったことはない。

それはもれなく私も同様で、扱い慣れない銃の練習はこつそりと一人で行っていた。

戦法や戦術の本からも勉強していたけれど、やっぱり実戦ともなれば話は多少なりとも変わってくる。

あの日だって人気がない廃墟で練習をしていたが、はつきり言ってまだまだ未熟で頼りなく感じていた。

ひたすら銃を構えて撃つてを繰り返していたら、そこに一人の魔法少女が現れたんだ。

私のことを応援してくれた神浜の魔法少女、空穂夏希さん。

チアリーダーをやっているという彼女の応援は、初めこそやりづらかったけど助言に助けられたりしながら、次第に気分が乗ってきて見る見るうちに腕は上達していった。

『……魔法少女の仲間とかと一緒に練習しないの?』

ふとした時に問われた素朴な彼女の疑問に対し、私は思わず返答に行き詰まってしまった。

別に：居ないという訳じゃない。銃を扱う人なら、巴さんが一番すごい。私とは段違いの実力を持っている。

でも誘ったら迷惑を掛けてしまうんじゃないかとか、実力を見て呆れさせてしまうんじゃないかって、いまいち踏み切れずに躊躇していた。

『その人は……仲間が頑張っている姿を見て、呆れるような人なの?』
軽く目を見開いた。

そんなことは無い。絶対に無い！むしろ誰よりも背中を押してくれるような自慢の先輩なんだ。

そのまま勢いで射撃練習のコーチを頼んだら、すぐに向かうって巴さんは返事をしてくれた。

「頼もしいお仲間さんだね！」と空穂さんに褒められて、少しばかり照れくさくなったのを今でも覚えている。

『そんなに謙遜しなくても、あなたはもう十分強いわ。』

『本当ですか……？』

『ええ！曉美さんはもつと自分に自信を持った方が良いわよ。』

練習に付き合ってくれた巴さんはやっぱり強かった。

なんとか食らいつきながら続けていたけど、最終的には巴さんに負けてしまった。

ひそかに練習を続けてきた私の腕を彼女は微笑みながら褒めてくれた。認められたというのは素直に嬉しく思う。

多数の魔法少女の総攻撃によって形勢が逆転し、それぞれが想いを込めた魔法の一撃によって、ついに巴さんはその片膝を地面についた。

「くっ……！」

「今だ！みんな、手を繋いで！」

これこそまさに絶好のチャンス。巴さんをウワサから連れ戻すための決定的な瞬間……！

皆とアイコンタクトを交わして、互いの手を繋いで、意識の奥へと潜り込んでいった。

巴さんは……地面に座り込んで何も言わずに俯いていた。

魔法少女の宿命に私達を巻き込んだ責任感から洗脳されて、マギウスの翼に入っていた罪悪感からかもしれない。

なんとなくだけれど、予感がしていた。今までの時間軸でも彼女は先輩として張り切る事が多かったからだった。

ただ巴さんを責めることなんてできなかった。

もし私が巴さんのような先輩の立場であったとしたら、魔法少女の救済という悲願に賛同していただろう。

『暁美さん』

いつものように花が咲くように微笑んで、私達の名前を呼ぶ巴さんを頭によぎった。

あの時に、前よりも自信を付けて、また改めて決意する。

鹿目さんを守る魔法少女になる、と。

そのためにも私は少しだって立ち止まってちゃいけない。前へと進み続けようと足を動かすんだ。

けれども、私は……

……… 巴さんの手だって、離したくない！

「一緒に帰りましょう、巴さん！みんなで一緒に……見滝原へ！」

▶ ?

神浜聖女と殴り合うRTAはーじまーるよー

前回は絶賛暴走中の黒羽根を自警団のモブ達とともに蹴散らしました。

そのまま魔法少女緊急集会を始めて、東の増援に向かったところで前回のパートを切りました。

今回はその続きからです。

とりあえず東の増援のついでで見つけた『フラワースピーカーのウワサ』戦を背景に映像をお送りしています。

他の先駆者様も知つての通り、第8章『偽りに彩られ神浜』は時間経過および特定の条件を満たすことで進行するタイプです。

大体は暴走開始した日の夕方以降になると、いつそう羽根達の量が増えてどこもかしこもマギウスの翼だらけになります。

詩織ちゃんも矢を番えては射って、矢を番えては射って……と羽根の受信ペンダントを射抜き落としていく淡々とした作業中です。

時間による後半イベント発生の目安ですが、ウワサを倒して前半戦を終わらせた上で、時間帯が夜になるように調整しましょう。

昼はちよつと人目に付きやすくして危険なんですよね。屋上で撃ち合いなんてしたら何アレ?と思われちゃうんですよ。ええ。

だいたいこれくらいが良いかなあ?という時間帯になったら、神浜カラスネットワーク

クを使ってホミさんの居場所を特定します。

大概外に出て羽根が居る方に進んでいれば出てきますが、最初の頃は屋上にいることが多いので迎えに行つた方が早いです。

ただその前に準備は忘れないようにしよう！主に作戦の見直しとか打ち合わせとか入念に確認した方が良いでしょう。

注意点としてある程度イベントが進行した場合、電波障害が発生してスマホが圏外になつてしまいます。

だから、義手くんを渡しておく必要があつたんですね（例の構文）

全員！グリーンフールドは持ったな？じゃあイクゾー！（デッデッデデデデ カーン

ここが決戦のバトルフィールドですね……まるでテーマパークに来たみたいだあ……
テンション上がるなあ〜！

「そう……賛同してもらえないなら、理解してもらおうまでよ！」

「全力で行くでございませよ！」

「ウチらの力を見せつけるから！」

というわけで始まりました。

『天音姉妹』および『ホーリーマミ』戦です。

ソシャゲ版での戦闘は都合上ボスラッシュ形式でしたが、ここではそんな生ぬるい贅沢な事言つてられません。

全員その場で一齐に相手しなければならぬのが、今章での辛いところですね。

「カードのみんな！今こそ出番です！」

「……ん、全力で潰す……！」

「弓有さん！援護を頼むわ！」

あいよ任された！

というわけで配属された今回の主なメインアタッカーはやちよさんと故人勢です。

実は故人生存時のチャートは考えていなかったもので、とりあえずホミさん用パーティーにぶち込みました。

まあ今回はやちよさんの強化分が無くなってるようなもんですからね。心配せずとも普通に彼女、素でめっちゃ強いですが。

「何度掛かってきても返り討ちにしてやるのだ！見よ、これが魔法少女かりんの力なのだ！」

そしてこつちにいるかりんちゃん是对天音姉妹戦の人材でございます。笛落とせばいいだけなんで……第4章の悪夢、再び——！

他の方々には自警団と一緒に各地の翼と対峙しています。神浜は魔法少女の闇の生産

率に対して土地が広すぎるんじゃないやボケエ！

もちろんのこと今回のキーパーソンズ、見滝原勢 with みとちゃんさん様もすぐそばまで来ています……が、しかし！杏子ちゃんが敵に阻まれて到着が遅れるそうなんですよ。

やろうと思えば杏子ちゃん抜きでも出来ますが、さすがに原作勢が揃う中彼女だけハブっていうのも可哀想なので……。

じゃけんそれまで＋ホーリーマミの体幹削り取りましようねえ。

では先程やちよさんから援護を頼まれていたので、後方支援型（の筈だった）ビルドの底力を見せてやりましょう！

使役槍は撃ちますし、義手くんは大量発生させますし、矢を射りまくって詩織ちゃんの右腕を酷使させます。

なお右腕は魔法少女特製マジカルアームなので、詩織ちゃんの疲労なんて度外視しても問題ありません。撃ちまくるぜ！

「四方八方から鎌も槍も来るでございます！」

「わ、戻ってくるとか反則だよ〜！」

うつつつわ……ええ……（困惑）かりんちゃん強すぎてこんな草生えますよ。

でも実際、ブーメランみたいに手元に戻ってくる鎌とか縦横無尽に飛び回る短槍とか、そんなもん飛んできたら普通苦戦しますよね。

よくよく考えて見れば、後ろからの攻撃なんてどうやって避けるねん！って話ですし…あれ？平然と避けていた組長は一体……？

とりあえず今回のボス戦を説明していきましよう。

まず天音姉妹は今まで第4章、第5章、第7章、そしてこの第8章と戦闘がありました。彼女達は後半になるにつれて段階的に強くなっていきます。

展開次第ではあれですけど、大抵はこの第8章が一番強いでしょうね……なにせ同じ戦場に黄色くて白い戦車がいらっしやいますので。

しかしながら前述した通り、天音姉妹は笛を取り上げるだけで無力化出来ます。

そのためにこの超強化御園かりんを連れてきました。固有魔法をめちやくちや特訓してきたので正直クソ強いです。

修正パッチ加えてもろて。いややっぱ（走者が大変になるから）加えないで。

「我が魔鎌の錆となるがいい！」

そういうばかりりんちゃんは「魔鎌ジャックデスサイズ」と名前を付けた普段持ってい

る大鎌の他にも、割と特徴的な攻撃方法があります。

知ってる人向けに簡単に言っちゃえば、ソシヤゲ版の彼女のマジア『キャンディーデススコール』ですわね。

そこら辺の物を一気に巻き上げ、それらに魔力を込めて相手に流星群のごとく降り注ぐとかいう、これこそTHE☆物量と言わんばかりの大技です。

こつちのゲームだとあまり見たことないって方が多いんじゃないかと思えます。

事実、大抵の周回の彼女って固有魔法が強化され過ぎて、マジアは発動せずとも勝ちちゃうので……。

なんてたつてガバはタイムロスに繋がることが多いですが、多少のオリチャーによってタイム短縮にも繋げることができまますからねえ！

ただし経歴ガバ……てめーは駄目だ。

「……一飯の恩もあるしな、アタシも加勢するよ！」

そしてここで待望の赤色魔法少女、杏子ちゃんのエントリーだ！

なんか知りませんが初対面で出会った時に、走者がゴリ押しでご飯を奢ったのが作用してるのか、若干ヤセリフが変わっていますがまあいいでしょう。

……これ詩織ちゃんの第一印象が奢ってくれた人って認識をされているのでは？（走者は訝しんだ）

それはそれとして、これで無事に原作勢パーティーが完成したので、ホミさん相手に総攻撃を仕掛けます。

詩織ちゃんとかりんちゃんや天音姉妹と周りの羽根達の相手をしている間に、やちよさん+故人組の削りもいい感じになってきたっぽいです。

やちよさんは純粹に強いし、メルちゃんは占いで相手にデバフを盛れるし、かなえさんは装甲無視で火力が出せるし：普通に2人とも強いんですよね。

見た感じでも削りは十分そうなので、あとはホミさんの隙を作ってみとちゃんさまに神頼みしましょう。

羽根達は義手くん編隊と使役槍で牽制しつつ、こつちの方も一気に攻撃に参加していきます。

じゃあかりんちゃんは『窃盗』でマスキット銃をよろしくウ！詩織ちゃんは可変槍を思いつき『使役』付きで投げて、遠隔操作して糸を引っ掛けたりして銃を妨害します。

いやでもココ廃墟とかの入り組んだ場所じゃないから、糸を繋げるアンカー(短槍)が打てないんだが？

オラア！喰らえエー！これが支援型のくせに協調性をMSSによって教え込まれた詩

織ちゃんの實力じゃア!

初期の方で言つてたことなんですけど、まほストの強化も相まって詩織ちゃん割と敵無し状態になつてて草生えちやうんですよね。

うん……まあ……実際、ボスにはなりましたし……有鷺ちゃんサポート付き単騎組長に倒されましたが。

「……体勢が崩れたのだ!」

「今ですよ! 皆さん!」

ヨツツツツツツツツシヤア!!!!

ミタキハラーズとみとちやんさん様!よろしくオナシヤス!君達の説得やら絆の力やらになんかこう(語彙力消失)色々と掛かっているんだ!

さて彼女達がマミさんと心を通わせるのにはそう時間はかかりません。

こうしているうちにも噂のウワサ本体がお見えになつてきました。

取り憑いていたウワサが出てきたということは、そろそろ原作勢による説得パートが終わりに近いということです。

ほら奥さん見てくださいよアレ!アレがマミさんを+ホーリーマミ+たらしめていた元凶でございます。

そして戦場はこのままで最後の仕上げ、『神浜聖女のウワサ』戦が始まります。

が、しかし。

実はここ、ある一定の条件を満たすとあるイベントが発生するんです。

「本当に情けない先輩ね……でも、お願い。ここは私にやらせてちょうだい！」

その特徴的なイベントは原作勢を引き連れてホミさん状態のマミさんと心を通わせることよって発生します。

マグレコRTA学会でもたまたま湧き出る共通点のあるイベントは、数々の走者の中でこう呼ばれてきました。

「ティロ・ファイナーレ！」

『マミさんのムービー銃』と。

え、この実力で中学3年生ってマ???頼りになりすぎて忘れがちですが、レナちゃんと

かいろはちゃんと同い年なんですよね……彼女。なんかこう威厳とか信頼度とかその他諸々デカすぎだろ……。

「……………ひとまずの脅威は去ったようね……。弓有さん、他の人達に調整屋に集合するよう連絡してもらえるかしら？」

おっと、余韻に浸る間も無く次のお仕事ですね。

それじゃあ早速やちよさんに言われた通り、義手くんを使って皆に召集を掛けておきましよう。

こつちも集合する前に怪我人やらがいたら調整屋に運び込み、ソウルジエムの穢れが溜まっている人にはグリーンフシードを分け与えます。こんな形でも一応詩織ちゃんって商人なので……。

それでは後は第8章の片付けをして、今回はこれで終わろうと思います。

ご視聴ありがとうございました。

イベント周回するので失踪します

Part 38 ガバと走者と再走もの

その地上数階建てビルはボロかった。

「団長ちゃん、とある魔法少女から会合を設けたいって申し出が来てるわよ。」

窓が外れていて隙間風通り放題だったのを修理して、勝手に私物化した空間で一人の少女が扉の前に立っている。

視線の先にはちよつと高そうで座り心地が良さそうなイスと一人の少女。

イスは無論自腹で新品を買ったというわけではなく、捨てられていた物の中で比較的良さそうなを見繕って修理しただけのボロっちいい物だ。

けれども報告真つ最中の彼女は、少しでもいいから座つてみたいとは思っている。実際、誰もいないときに座つて団長気分を少しだけ味わう。それが最近のひそかな楽しみだということは、他に誰も知り得ない彼女だけの秘密である。

「こんな非常事態なのにですか？まあ、すぐに返事を出してください。」

「……相手とか、聞いたりしないのかしら？団長ちゃん、すぐに即断即決するでしょう。」
「どっかの誰かさんが、団長ちゃん呼びを止めたら考えるよ？でも、今の私は団長モードですから。」

ペンを回して遊ぶ音が鳴っている。

頬杖を突きながらドヤ顔でペンを回すその人物こそが、今『団長ちゃん』と呼ばれている少女だった。

「団長だったら尚更聞くと思うのだけれど？」というか聞いておきなさい。せつかく前振りしたのに、団長ちゃんは乗ってくれないなんて……。」

「うぐつ……仕方ないですね、聞きますよ聞きます！なんてつたつて私は団長ですかね！上に立つものの役目です！」

団長ちゃんが回すペンを止めて、会話する少女は口に手を添えクスクスと笑う。

「それでね、来るのは弓有詩織さんという魔法少女なのだけれど……。」

「エツ………うそお!？」

内職担当の部隊に所属する魔法少女によれば、その時、団長の驚いた声が階下にまで響いたらしい。

思わず更紗帆奈は疑問を口にした。

「で?…そのソイツは何やってんの?」

「あわわわわわわわ、あわわわわわわわ…!」

「団長ちゃん、ちよつと取り乱しているのよ。まさか商人さん達が直接来るなんて思っ
てなかったらしくてねえ?」

団長の秘書を務める副長の陰に隠れて、こちらを見る小動物感漂う視線。

最近耳にする『魔法少女互助組合』と『自警団』。

一体どんなヤツがトップなのか、と半ば好奇心で付いて行ったら、自分達を出迎えたのは小動物である。相対する副長の裾を掴み、小刻みに振動する様はいかにも弱者の魔法少女のようだ。

一方で、視線を一身に浴びている弓有詩織としては割と気が気でない。

果たしてこのように怯えられるようなこと、自分はこの子に何かしてしまったのだろうか？

確かに一時期、人を探している時はちよつと乱暴してしまつたかもしれないが、でもそれは帆奈ちゃんやみふゆちゃんとか灯花ちゃんとかにしかやつてないはずだし……。ともかくとして、弓有詩織には身に覚えも心当たりも何も無かつたのだ。

「……………えと、ゆつくりで……………いい、よ……………」

「ひえ……………やさし……………ん……………ん……………ん……………いえ大丈夫です。ご迷惑をお掛けして申し訳ありません。」

自分に言い聞かせるかのように咳払いをしたのち、荒ぶる内心を抑えながら、なんとか平静を装う。

彼女こそが『魔法少女互助組合』、そしてその傘下組織である『自警団』を代表する「団

長」と呼ばれる少女である。

なんでも名前呼びはあまりお気に召さないらしい。彼女が言うに、出来れば団長呼びでお願したいとのことだった。

「さて今回は、私に用件があるとお聞き致しました。一体どのようなご用でしょうか？」

「……君達、が……本当に……信頼、できるか。」

「あら、今までも尽くしてきたけれど……それだけじゃあ信用に足らないかしら？」

「それで漁夫の利なんてされたら、コッチとしては堪ったもんじゃないっての。だからここまで遥々来たわけ。」

現在、神浜の魔法少女達はマジウスおよびマジウスの翼と戦争をしている真つ最中だ。

ウワサのついての情報収集や先ほどの羽根達が暴走した件についても、自警団は出動して積極的に支援してくれていた。

しかし、だからこそ、弓有詩織が気にかける問題があった。

確かに今までずっと助けられてきたし、彼女達の恩を仇で返すつもりは無いが、不安な要素は出来る限り排除しておきたい。

そのためにも詳細不明だった第三勢力『魔法少女互助組合』が頼れる組織かどうか、それを確認しに来たのである。

「ならば…私達の命を預けましょう。団長と副長。トップ2人のソウルジェムを渡しませう。」

「……それは……。」

「そもそも私達は特に力を持たない子達の寄せ集めよ。こんなぼつと出の弱小組織をすぐに信頼しろ、だなんて言えないもの。」

客人用のテーブルの上に2人分のソウルジェムが差し出される。

今も爛々と輝きを放つ宝石は、紛れもなく彼女達の魂そのものだった。

「ですから、現状で私達が差し出せるのは…死ぬ気の覚悟だけです。信頼できると判断するまで、どうか命を握っててください。」

魔法少女互助組合には信頼できるだけの要素が存在しない。

西の七海やちよ、東の和泉十七夜と言った有名なリーダー格。マジウスが作り出したドツペルと言った明らかな実績。

地道に努力してきたものはある。情報のリーク、マジウスの翼の実態調査、戦えない魔法少女の保護。

しかしながら、目立たないものは真つ先には目に付かない。

故に「魔法少女互助組合は信頼性に欠く」という事実を、団長と副長は十分に理解していた。

ここで信頼されなければ、自分達の組織に未来はないだろう。2人は深々と頭を下げ、頼み込んだ。

「……分かった。…でも、ソウルジエムは…返す。」

静かになった部屋の中で、静かに聞こえた弓有詩織の声。思いがけず商人さんの顔を見上げてしまう。

それは団長の勘違いでなければ、きつと……………

「はあ?…何しでかす気。」

「……信頼できるって、言い張る。……………この背後に、私が付くよ……………後ろ盾…あれば、安心…でしょ?」

団長は驚きで目を見開いたままだった。

「……あの時…の、五千円分……………サービス…ご利用、感謝…するよ。」

そう言つて弓有詩織は懐のバックから取り出した手紙をペラペラと揺らす。

折られた手紙の中に何が書かれているかどうかは分からない。けれど、隊長だけはそ

の手紙の正体に心当たりがあった。

その日はたまたま強い魔女に当たってしまった日だった。

『ごめんなさい、私ったら足を引つ張つてばかりね……。』

『ううん、違う！ さっきのが強過ぎただけなんだ…待つてて！ 今すぐ弱い魔女探してくるから！』

『あなただつてそんなに濁つてるじゃない…ねえやつぱり私達…これ以上は、無理なだよ。』

『無理じゃないよ！ 無理じゃ、ないんだよ……。』

命からがら逃げ出せても、とつくにグリーンフシードは尽きて、使い魔とも戦えないほどに魔力は空。

今すぐにグリーンフシードを取りに行かなければ、逃げ出す時に守つてくれたこの子は死んでしまうかもしれない。

(……どうしたら、いいんだろう。)

だが思考は堂々巡りするだけで、明確な解決法なんて見つからなかった。

そうこうしている内に身体の傷を治すために魔力が減っていく、地面に寝かせた少女のソウルジェムを見つめる。

さっきの戦いで穢れが溜まり過ぎていた。もう限界に近いほどに。

(……………ここで、2人揃って死んじゃうのかな。)

無い無い尽くしの負のループはあつという間に脳を埋め尽くす。

自分1人だけじゃ何も出来ない歯がゆさに、手を握りしめて続けて手のひらから血が零れ落ちた。

そんな時、一羽の鴉の鳴き声が聞こえたんだ。

ハツと後ろを振り向けば、そこには普通よりも少し大きいぐらいのカラスが一羽。少女をジツと見つめていた。

(……………噂の、郵便鴉……………)

少女は弱い魔法少女達にグリーンフィードを売ってくれる商人の存在を聞いたことがあった。

噂になっている郵便鴉を使って注文を承るとかなんだとか……………当時の彼女にとって随分とまゆつば物な話だったが。

(……………商人の魔法少女……………噂が本当なら……………)

まさしく藁にも縋る思いで彼女は手紙を出した。

折ったそれになけなしの五千円札を挟み込んで、自分のことを全然警戒しないカラスの口に啜えさせる。

『……………商人さん。お願いします…!』

そして、空に羽ばたく後ろ姿を見送った時のこと。

今でもはつきりと思い出せる。

弓有詩織は絶体絶命だった彼女達2人の命を救ってくれたばかりか、あの時のことまで覚えてくれているのだ。

こんな弱小の、吹けば消える風前の灯のような魔法少女達を。

それがどんなに感動してしまうものだったかは団長にしか分からない。ただ、目から湧き出る涙だけが止まらなかった。

「……………な、泣かないで…ほしい…………。」

自分の優しさがどれだけ甘美な飴なのかを彼女は未だに知らないのだ。

「あー、やっと終わった。団長とか言ってるからどんなヤツかと思ったら、まさか詩織の客だったなんてさ。」

最初から分かっていたのなら、ここまで苦勞はしなかっただろうな。そんな感じの意味は言うまでもなく態度に出ていた。

なんてったって組織のトップが弓有詩織のファンみたいなものだったからである。

生憎のところ、顎で使えるような立場だったのにも関わらず、彼女は自分へ向けられる好意やらに気がつかない故に利用しなかったらしい。

態度でバレバレのヤツでも直接言葉にしなければ、天然記念物には届いてるのかどうかさえ怪しいものだった。

その点で言えば、素直に好意を伝えられたという常盤ななかは大正解の道を引き当てるたのかもしれない。

更紗帆奈にとっては煩わしい保護者枠が一人、新たに増える事態になってしまっただろうが。

「…………でも…………良かった、よ…………生きてて…………くれたんだ…………。」

そうやって弓有詩織は手元に目を落として、また前に視線を戻し足を動かした。そして、組合がある建物からマギウスが根城としている本拠地へと急ぐ。

まだ神浜の夜は終わらない。

▶
?

敵の本拠地にカチコミに行くRTAはーじまーるよー

今回は↑ホーリーマミ↑との最終決戦を見滝原勢のゆるうじようパワーで勝利することができました。

その後、転がった羽根達やマミさんを連れて、魔法少女各位に調整屋召集をかけて終わりましたね。

今回はその続きからです。

さて前回の最後でピユエラマギホーリークインテット（仮）が結成され、第8章『偽りに彩られ神浜』が終了いたしました。

そのため今回は第9章『サラウンドフェントホープ』に入っていきます。

プレイ済み視聴者兄貴姉貴などの知ってる方はご存知の通り、ちよつとこら辺の第9章あたりでメインストーリーの振幅が大きくなります。

本編1年前開始から今までの成果が顕著に表れますからね……第1部RTAの成果が表れる場所と言っても過言ではないでしょう。

下手に勢力を増やしすぎると、いつのまにか第2部状態になっちゃうので……やめよう

ね!

通常であればいくつかのチャートを事前に書き込んで、状況に適した進行方法を取るのが一番です。

たいていの場合には魔法少女の絆(通称)ルートに入っていくのですが、あいにく詩織ちゃんってそこまで多くの人と交流が少ないんですよ。

モブ魔法少女達なら割としょっちゅう出会っているんですがねえ?

それでこの第9章ですが、詩織ちゃん……というか走者はある一つのことをしに行かなければなりません。

『魔法少女互助組合』および『自警団』をまとめるトップとのO☆H A☆N A☆S H Iです。

ええ、今まで再三言ってきましたが、このゲームの難易度ハードはランダム要素が多すぎます。

それこそ運によっては神浜が修羅の国と化したり、第1部のくせに既に第2部状態になっていたります。

普通であれば神浜の魔法少女 v s マギウス & a m p ; マギウスの翼という構図になり

ますが、ここら辺の状況に手を加えられたら……そもそも大惨事になるに決まっているでしょう。

そこで今回のRTAでの謎多きモブ集団『魔法少女互助組合』と『自警団』に、詩織ちゃんの捜査のメスを入れなければいけない……というわけです。

今まで情報や戦力の提供でなんやかんや協力してきましたが、最後の最後で漁夫の利！つてされたら堪りませんからね。

ここはお互いに腹を割って話し合うことが先決ということですよ。

……ていうか今までネームドやらの神浜在住魔法少女達に組織の存在を知られてなかったの、普通に考えてマギウスの翼よりこっちのモブ魔法少女達の方がやべーのでは？（走者は訝しんだ）

こわ……そんなやつらの本拠地に行くんか……帆奈ちゃん！一緒に来てくれー！死なば諸共じゃーい！

へい！その自警団代行モブちゃん達！とりあえず組合と自警団のトップにアポイントメント取ってくれなあい？

「既に手配は済んでます。副長が許可オツケーだつてー、茶菓子も用意してまーす。どーぞー！」

「商人さんがよければ、我らの拠点まで道中ご案内するでござる。心配ご無用でござる！いやなに拙者ら情報担当であるからして、さき！こちらに。」

……これまた濃い感じのモブ魔法少女が来ましたね。

というか情報担当って、君達が自警団の情報一強になった原因か！詩織ちゃんのお株である情報提供者チャートが取られちゃう！！

ま、まあ良いか。

ともかくこのモブ達が拠点まで護衛してくれるそうなので、着くまで倍速でお送りしましょうか。

はえくでつかい。

ここが第三勢力の拠点なんですわ………やつぱり廃墟リサイクル拠点つか？

神戸市廃墟多すぎ問題ですよクオレハ……。建設放棄とかその他諸々、ちよつと何やってんの役所さーん？

「正式に決まっているわけではないでござるが、仮の執務室は数階ほど上に進んだところにあるでござる。」

「他の部屋の扉と違ってー、なんかちよつと高級っぽーい感じのやつです。分かりや

すいでしょー。」

おーあざつす！感謝の代わりに恒例の飴ちゃんあげますね？なんと今回はキャラメル味です！……普通にキャラメルで良くないか？

それじゃ言われた通り奥の階段を上がっていきましよう。

にしてもこの魔法少女互助組合はよくこんな丁度いい廃墟を見つけましたね……修理して上手く活用してるし、本当にモブの集まりなのか確認したいところです。

「……ねえ詩織、この扉じゃない？」

おや、思わず行きすぎてしまうところでした。サンキュー帆奈ちゃん！この飴ちゃんを贈呈するぜ！後でよく味わって舐めな！

おっ開いてんじやーん！

失礼しまーす！

「あわわわわわわわ、あわわわわわわわ……！」

「あら、こんばんは。ようこそ魔法少女互助組合へ、今お茶を持ってくるわね。」

「あつ待つて待つてー人にしないで下さい！お願い！今度水名区の限定プリン一緒に食べに行くから！待つてー！私もお茶汲みます！」

ええ……………（困惑）

漫才を見に来とるんちゃうぞ！相変わらず自警団関連のモブ魔法少女はいささか個性が強すぎやあしないですかね？しない？そう……。

にしても、なんか……この団長だと思わしきモブ魔法少女ちゃんに、案内役が言つてた副長だと思われるモブ魔法少女ちゃん……

どつかで見たことあるような、無いような……見たとしても、いつたいどこで見たんでしようかねえ……

倒れている1人をもう1人の子が抱えています。姿からしてモブ魔法少女達ですね。多分強い魔女からギリギリ逃げてきたんでしよう。

「お願いです！○○ちゃんを助けて！」

「あの……なんてお礼を申し上げたらいいか……。本当にありがとうございます……！」

「それならあっちの方に……。」

実はこれ、モブ魔法少女関係の信頼度イベントみたいなモノだそうです。詩織ちゃんがグリーンフシード商人だからか、イベントの導入が不思議なことになっていました……。

あつ……………（察した音）

あー！！！！お前！あの時（パート2）で発生した信頼度イベントのモブ魔法少女かお前エ！この組合とかいう未知数の第三勢力のトップつてお前達かい！！

ということはこの『魔法少女互助組合』と『自警団』つて、詩織ちゃんがクリアしたモブ魔法少女関連の信頼度イベントの結果だということじゃないですかヤダー！！！！

まさかあの時のイベント報酬がこんなことになるなんて誰も思わんやろがい！！

こういう事をなんて言うか知ってるかアお前エ：「骨折れ損のくたびれ儲け」つて言うんだよオ！！！！

お、落ち着きました。

まあプレイヤード的には十分に信頼できるものだと分かったので：結果的にはプラスです。おそらくは。知る前と比べると安心感は段違いでしょうね。

しかし走者の言い出しっぺで、詩織ちゃん達がこの組織の信頼性を確かめに来たのは間違いなく事実です。

この際ですから徹底的に協力関係を結ばせてやりましょう。行くぞ帆奈ちゃん！いざとなったらレスバの準備をしておけよ！

「ならば……私達の命を預けましょう。」

ふあっ!?

ちよつと団長ちゃん覚悟決めすぎでは???確かに魔法少女相手ならソウルジエム預けるって、文字通り命握ってるようなもんですけど……。

……あなた…覚悟、決めてるんですよね？（例のBGM）

「組合には十分な信頼性が無いわ。いわゆるネームバリューってヤツが足りてないのよ。」

「今だけでもいいんです。信じてくれませんか？」

走者視点ではもう既に信じました（断言）

というか詩織ちゃんがいくら帆奈ちゃんの監視ついでにソウルジエム預かってるからって、そう何個もホイホイ預かれないです。

だってそれ魔法少女の魂ぞ？たかが1人に命任せ過ぎ問題。

でも解決法はさつき副長ちゃんがさり気なく言ってくれました。

魔法少女互助組合にはネームバリユー……つまり後ろ盾が居ないということです。弱いモブが力を合わせているだけなので、強いモブとかには大きく出張れないわけですね。

でしたら話は簡単です。

詩織ちゃんが魔法少女互助組合を監督しましょう。

後ろ盾……欲しいんですよね？

「……え……。」

今ならフリーランス魔法少女がバックに貰えるキャンペーン実施中！ベテランで人望有りな情報提供者（仮）やぞ。

ただ後ろに付くというよりも、組織には所属しないけど相談事には乗ってあげるね？
くらいの感覚です。

というか詩織ちゃんがこの組合に加入しちやったら、あつという間に団長ちゃんの座を譲られてしまいそうですし……。

この走者の提案を受け入れるとたくさん良いことばかりですよ！

まず魔法少女互助組合と自警団はいざとなった時に使える、ベテランビッグネームを手に入れることが出来ます。

そして対する詩織ちゃんはグリーンフシード商売で、組合という固定の取引客を手に入れることが出来ます。

どうです？ win-winな関係じゃあないですか？

「……で、でも……なんで……う？」

なんで？と言われましてもですなぁ……まあ詩織ちゃんの性格的な理由もありますが、やっぱり信頼度イベって借りがデカイので……。

団長ちゃんは覚えてますか？走者はさつきようやく思い出しましたよ。

詩織ちゃんも多分覚えてるんじゃないんですかね？こつちの場合、忘れてたとしても必要があれば義手くんが教えてくれそうですけど。

あ、ほらちようどバッグの中に入っていましたよ！これですよね？

「……………う……………」

え、ちよつ、泣く要素ありました!?このままじゃあ走者が悪者になってしまいうので泣き止んで下さい！オナシヤス！

「……………よ……………ろ……………し……………く……………お……………ね……………が……………い……………し……………ま……………す……………!!!」

うわ…圧つよい……。

でも濁点付きっぱなしの団長ちゃんと無言のままの副長ちゃんが了承してくれたみたいなので良かったです。

これで詩織ちゃんは魔法少女互助組合公認のグリーンフィード商人だぜ！

まああと残りわずかのRTA本編で商人活動が果たして活躍するのかと言ったら……そりゃ無いですけども。

さて、思ったよりもそこまで会談の時間は掛からなかったですね。

やっぱりモブの信頼度イベントのおかげってのもあります。あれ…走者って割とあの団長ちゃんに恩があるのでは……？

ともかくこれでこっちの用事は済んだので、走者のメインストーリーにおける最大の心配事は失せましたね！

これでもうガバは無いことでしょう。勝ったな、ガハハ。じゃけんホテル行きましょうね。

今回のパートはここまでです。

ご視聴ありがとうございます。